
異なる世界で見つけた !

珈琲に砂糖は二杯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異なる世界で見つけた ！

【Nコード】

N5147Q

【作者名】

珈琲に砂糖は二杯

【あらすじ】

とある実験が原因で異世界へと飛ばされてしまった一人の青年がいた。

そんな彼《加藤祐》がやってきた世界は、地球と同じくヒトの住む世界だった。

それ故に安心し、楽しもうとする彼だったが、同じ故に大きな問題もあるのだった。

これは、普通の青年が異世界でまったりと生きながら、時々焦りつつも、何かを見つけていく物語である。

処女作なので色々と勉強中です。よろしくお願いします。

第1話 『切欠』

唐突だけど、異世界ってどういう事なんだろう？

そもそも異世界という言葉の定義から気になるとは思わないか？

「異なる」、「世界」と書いて『異世界』なんだ、一つ一つ考えよう。

(1) <私達が住む「地球」という太陽系に属する惑星で主に「人間」が暮らす……。>

この現状を世界と言うのだろうか？

(2) <いや、それは違うだろう、政治、経済、軍事、娯楽、恋愛という現状にして未来、そして歴史という過去。>

これらをそれなりの人間が、それなりに認識し共有している事が世界だろうか？

(3) <いやいや、「自分」という自我を認識できるトコロの事なのかもしれない。>

これが「世界」の定義とすれば『異世界』という言葉が認識しやすいと思う。

(2) <なるほど、意味なく範囲を広げて限定する事もないか。>

(1) <確かに、それに自分を認識できて、今までとは違う自分を認識できる場所>

これを異世界と言えば間違いとは言えないだろう。

(3) <そうそう、TVとかでもよく言ってるだろう？>

何処何処の神秘的な絶景を見てる人が「まるで異世界のようです…
…」とかさっ。

(2) <言っていないだろ？

(3) <はあ？言ってるから！最近のそういうリポーターの語録の
少なさを舐めるなよ！

(1) <アホな言い合いは止めておけ、そもそも論点がズレている。

(アアア、だーめだなあ、全然分からないな)

いきなり脳内で俺の分身達が争っている様子を見せてすまないと思
っている。

だけど脳内俺(3)は良い事を言ってくれたと自画自賛しようと思
っているのが加藤^{かとう} 祐^{ひろ}。

つまり俺だ。

なんでそんな頭も良くないと自他共に認めている俺が哲学っちゃっ
たかと言つと、今の現状にその原因があるんだ。

あれはそう……、今から1億年前……ってわけではなく本当ちよっ
と前の事。

キキーンって音と共にトラックが自分に向かって突っ込んでくる…
…。
それが俺の地球で見た最期の光景。

そして目の前には白い服を着た老人が『ごめんw 間違っちゃったw』と悪びれた様子も無く『転生させてやっから、安心しろw 上げー力もあげるってw マジマジw』とか言ってる気がついたら此処に居た。

こっ、これが俗に言う異世界転生っ!？

とかいう事ではない、そもそも俺そのままだし。

朝に玄関を開けたらいきなりピカーンって何か光ったなら知らない場所に居た!こっ、これはまさかっ!とかでもない……。

前者なら哲学ってなんかいないで無双ってどうやりゃいいんだろwとかアホな事を考えている事だろう。

何せ自称神様からの御力だ、きつと凄い、うん。

後者ならそもそも哲学する余裕は無い、ビビりまくっている事だろう。俺チキンだし? 恐ろしいパニックになっていると思う、どれくらいかっていうと友人が他人のフリしたいのに何か犯罪を起こしそうだから殴ってくれるレベル?

いや、前者と後者、どっちか? と言われれば後者なのかな? いや前者なのかもしれない……。

あれ？ どっちもなのかな？

いやまあ、どちらにせよ俺が適度にパニックっているのには訳がある、それを言おうとしていたんだっただな。

時計が無いから、というか起きた時に壊れたのか止まっちゃってるもんだから正確な時間は分からないけど。

あれは30分ほど前の事だと思うんだけど、まずは最初からだよね……。

「えー、皆さんはTVでニュース等を頻繁に見ているかと思えます。なので現在の我々の状況はなんとなく察している事でしょう、まず……」

目の前、という程近くもないが遠くも無い所で、眼鏡をかけた白人の40歳くらいの男性が英語で話している。

「そもそも何故、このような現状になってしまったのか？ これは簡単でしょう。人口の増加、これが一番ですね？ そこへ来て北極、南極の氷が……」

そう、人口の増加だ。

これは今から300年ほど前から懸念されていた問題だったと思う。

「そしてそれを解決するために宇宙ステーションを拡大拡張したコロニー。つまり大規模な居住空間を作りそこへ移住するという……」

「コロニー……」。

この言葉は多くの人、いや世界中の人が忘れてくても忘れられない言葉だろう、何故なら……」。

「ですが、その計画は失敗しました。何故か？ これは説明すると長くなるので簡潔に言えば不幸な事故……、これが相応しいでしょう」

確かにそうだろう、技術構想からなら60年という普通に考えれば長い年月を賭けて、しかし完成したものを鑑みるにありえないスピードで完成した。

世界各国の強国と言われる国々が手を取り合うどころか合体するかの如く協力して出来たモノだった。

食糧問題はどこどこが、治安維持はどこどこが重要な技術開発、そして施行はどこどこがと問題が問題だけに、60年という短期間とは言えども正に理想と言える世界に成っていたと思う。

おかげでその国々の人達は母国語に英語は確実、更に幼い頃からその環境だった俺を含めた子供達は何ヶ国語もという環境だった。

「そう……不幸な事故でした。何重にも及ぶテストも済み、更にラダムで選ばれた人達。そしてその家族を含む数百名が、実際に3ヶ月住むという最終テストも3回行いました」

そうだった、父親が勤めている会社の同僚、というかお隣さんの家族が2回目のテストでソコに上がり、戻ってきてその様子を嬉しそうに話していたものだ。

ただ飯には困ったと言っていたな、なにせ包丁の類でさえ持ち込めないのだ、食料は創生時よりはマシになったとは言え宇宙食だけ。それを開封してからの加熱、そこに別のものを混ぜてという料理なんだそうだが、まあ包丁とかそういうのは危ないしな、犯罪でそれが使われないとも言えないし。

「そして移住が始まりました。何事もなく、これで少なくとも解決のための更なる技術、方法を見つけるための時間が……」

俺は解決したと思っていた、なにせ自分達が行くのはいつになるのかと胸を躍らせていたくらいだ。

「そして問題が起こってしまう。簡単な事です、地球よりもコロニーの方が環境は良いのですから。そこへ行きたい、そう思う人々が出てくるのは当然と言えるでしょう、かく言う私でさえ……」

そう、現在の地球環境はお世辞にも良いとは言えない。

昔から懸念されていた地球温暖化の影響で人が快適に住める大地は減ったし、空気汚染、これは医療等技術の向上で解決に至らないまでも対策は十分。

とは言え設備の整った施設内で無ければスポーツ始め、激しい運動は行えなかった。

「コロニーへの移住は完全なランダムです、これは皆さんご存知でしょう。これは地位も名誉も関係ない、世界各国で決められたものであり、有名な話では某国の大統領でさえ上がっていません。事でしょうかね。そう公平なランダムだったのです……、ですが先にも言ったように人口が増えて……」

確かにそうだった、そしてコロニーは合計で300機、一つにつき凡そ5000人が居住できるものだった、父親は『大好きな古典アニメの世界が現実になった!』とほしゃいでいたものだ。俺としては父親は預言者か何かなのかと疑いたいし、それってフラグか!?!と突っ込んでおけば良かったと後悔するくらいだ。

「そう、一部の国……というよりは地域と言ったほうが正しいかもしれませんが。その人々が言い出した事により、コロニーへ行ける人とそうでない者の格差意識が人々に生まれました。その差自体は差別的でも、また直後に生死に繋がる問題ではありませんし、未だ根強い問題である宗教も関係していませんでした。ですが、そういう事が起これば……」

簡単に言えよ……そう、テロが起こった。

今の時代は宇宙旅行自体が一般的なのだ、宇宙に行くだけなら10万円ほどあればいける。

つまりそういう考えを持つ人間でもコロニーのある宇宙に行くことも十分に可能なのだ。

そして世界中でそのコロニーに未だ居住できないとは言え、それを一目見たいという人は大勢いた、そしてそのための旅行プランが大流行中だった。

宇宙へ行く手段を確保するのは可能、そしてその目的へ辿り着く道もある、そして管制は地球上のものとは違い、見る人が見れば未だスキだらけと事件後に専門家らしいのが言っていた。

「一部の国の出身者達がそういった主張のために一つのコロニーを武力制圧した。そしてそれを奪回しようと世界各国が特殊部隊を用いた作戦を立て、実行、そして悲劇が起りました」

確かに悲劇だ、コロニーの動力が核だったのだ。

いやこれ自体は何の問題も無いんだがテロを行った人間達が愚か過ぎたのが、或いは優秀過ぎたのが問題だった。核での動力機構自体は何があっても人体に有害な放射能を漏らさないように出来ているらしい、昔のソレと違って……、そう何があってもだ、が。

「特殊部隊及び地上や他コロニーで見守っていた我々の認識では動力機構部は……」

そう、テロリスト達は不可能を可能とした、間接的とは言え、だ。

その方法は本来メンテナンス時に使われているコマンドで動力部の一番分厚い防壁を開けるというものだったらしい。

これ自体そう簡単に、それこそスイッチ一つで開くものじゃない、何重ものプロテクト、パワード、そしてキーが必要らしいなのだ。テロリストはコロニー、この場合第98コロニーの動力部のキーを持つコロニーのお偉いさんを殺しそれを奪っていた、が。

このプロテクトはそんじょそらの専門家程度では解けないもの、当然部隊の人間も、そして当のテロリスト達も解けるとは思っていないかっただろう。

「しかし、何故だか第一防壁が開いていた。そしてそこで特殊部隊とテロリストが交戦し、何かしら……、そう何かしらとしか言い様がない事が……」

特殊部隊、そしてテロリスト達ですら予想していなかった第一防壁が開いてしまった事。

そして不運は開き始めていた時、つまり視認では確認しづらい状況で交戦が始まった事だろう。

だが、40代の男性が言うように、第一防壁が開いていたとしても

防壁は第三までであり、その数字が増えるほどに強固さは増すのだ、通常であればたとえ第一が開いていても問題はないはずなのに。その交戦が始まり少しして……。

「結論から言えば第98コロニーは爆散しました。ここまでであれば言い方は最低ですが、第98コロニーの犠牲だけで済んだ」そう言えました。しかし、そうはならなかった……」

そう、男性が言う『何かしら』はその爆散だけに留まらない。なぜかコロニー群がある宙域で爆散が相次いだのだ、連鎖爆発装置でも仕込んでいたんじゃないのかと疑ってしまうくらいに。これは世界を震撼させた、しかし『何かしら』はそれだけでは済ませてはくれなかった。

「その絶望だけでも十二分に過ぎると言うのに、その宙域では人が活動できない所と化してしまいました、残念ながら現状では……」

コロニー自体、かなり巨大なものだ、言ってしまうえば人工的な地球なわけだから当然と言えば当然だ。そしてそれらを安定して設置と言って良いのか分からないが、出来る所というのは限られているのだ。

少なくとも現在の技術では……、そしてその出来る場所、宙域には274基あった、そして消えた問題はそれだけのコロニーを安定して置ける場所は他には無いという事だった。

「その宙域はまだまだコロニーが設置できる場所でした、なのに使えなくなってしまった、つまりは……」

人間が移住できる、しなくてはならないコロニー。

残りの小型コロニーがあるのは地球と月の間にあるだけだ、新しく

置けたとしてもその数は置けないだろう。
つまり……。

「我々にはもう移住という選択肢を選べないのです。故にこのよう
な未だ発展途上の技術の研究……いえ、実験を……」

俺のような被験者が出てしまう訳だ。

第2話 『夢の扉』

っていう感じで色々と実験してたんだよね、んで此処にいるんだよ俺？

改めて彼、加藤 祐は目の前の光景に目を細めた。

先ほどまでよりは幾分と落ち着いた感じで、そう、改めてソレを見た。

「やっぱり、地球じゃないよな」

彼がそう言うのには理由がある、それは彼がいる場所に関係していた。

「だってこんな草原？ なんて地球には無いし……。あつたとしても俺が何も着けないでこうして生きていられるわけがない」

そう、環境が悪化していた地球では街などでは各所に機械が設置されてそれなりに汚染を中和し何とか人が過ごせる環境を維持していた。

その街中でさえ今の彼の格好、つまりは簡易な上下の洋服のみ。これでは浄化装置があったとしても、かなりの息苦しさを感じるはずなのだ。

その機械のない外部、つまりこのような場所では即座に呼吸困難に陥るはずなのだから、彼の感じている事は間違いでは無い。

「いやまあ、此処が何処かつてのは一先ず置いて……。なんで此処に来たんだ？ 俺は……。えーっと確か……」

「この実験は簡単に言えば『異世界』『並行世界』『パラレルワールド』への道を探す、というものです」

何を言うかと思えば昔からあるSFの代名詞じゃないか。なんでファンタジーな事を研究なんてしているんだろう。

それよりもコロニー設置のための何かを考える方が、余程意味がありそうなものだけど……。

「皆さん、顔を見れば分かりますよ？ 何を馬鹿な事を言っているんだ、という顔ですからね。そして現実としてそれは間違いではありません。かなりの昔から可能性自体は有るとされてきて、そしてその仮説も10年、20年そして100年単位で進化し現実味を帯びてきてはいます。しかし、それは現実『味』です」

いや、出来ないならそう言えよ、何を勿体ぶってるんだ。

「しかし、我々のその仮説の一つ、そう太古の昔より異世界、異なる世界と繋がっていると信じられていたモノがあるのです。皆さん、きつとご存知ですし、その異世界とも言えるトコロに行かれた方も大勢いることでしょう。私も行った事がありますしね？ それが何だか分かりますか？」

ないから、異世界行った事ないから。

あ……、もしかしてアレか？妄想か？R18な妄想は学生時代には大変お世話になったなあ、何せモテなかったからさ……。

「そう！ 皆さん、もしかして？ という顔をなさっていますね、その通りですよ！ それこそが異世界への現実『味』ではない……」

マジかよっ！？ 妄想だとっ！？

なんてこった、研究者、偉そうに言ってるわりには唯の変態かよっ！？

そういう妄想はマジで人前で言っちゃダメだって！ 何周りの人達もしきりに頷いてるんだ？

おいおいおいおい、変態の集まりかよっ新興宗教だったのか！？ いやまあ男として何かしら惹かれるものが……。

「っと、質問がありましたね、そうですね。……正解を言うべきですね、そのモノとは『夢』です」

いやまて、妄想つてもR18なアレでソレな妄想って言われた訳じゃないだろっ！

……いや妄想だとしたらソレも当然！あるだろうし、そっち専門でならアリかも？

ハッ！！目を覚ませ俺！ ……そうさっ、モテないからってそっちに逃げてちゃダメだ！

逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃって、え？

「夢、これは何故見るのか？ いろいろな説がありますよね？ そしてこの夢とは何か？ これ自体は比較的安定した社会構造の時代から活発に研究されてきました。いろいろな理由からです、占いのために、安眠するために、学習するために、健康のために、医療の

ために、そして未知のモノを知るために、と様々です」

んだよっ！ 夢かよっ！ それこそ俺の一時の夢を返せ！

くっそっ！ あんなことやこんなことか妄想してた俺が馬鹿みたいじゃんか！

……ってか変態とか思ってたすいませんでした！ 変態は俺だけでした！

「さて、異世界への道に夢という可能性を示しましたが、まず夢ではなく異世界についてです。っと、ここでまた話を変えてくださいね、皆さんタイムマシン、この言葉を聞いた事はありませんか？ 過去や未来に行ける装置の事ですね」

おいおい、ガ ダムな事が起こった次はドラ もんですか？

どんだけ古典アニメ勢揃いなんだよ、ってことは俺はの 太くん？

いや俺宇宙一のガンマンじゃねーし。

ってか び太くんって実際にたらかなりの好青年、いや好少年だよ
ね？

醜い欲は人並みに持っているし、頭は基本悪いし、基本的な運動は
ダメときている。

なのに映画版のあのヒーローっぷりはどういう事なんだろう。

そうでなくともここぞという場面では漢になりやがる、そりゃーし
ず ちゃんも惚れるってもんだよ。

「タイムマシンと言いましたが、本題はそこではありません。つまるところ過去、未来、これらの内未来では、つまり私達は今実験のためにその事を話しているわけですが、途中から私が趣味の話しかしていい未来があるかもしれませんよ？ しませんけどね、そして過去の場合……、そもそもコロニーが……、テロが……起らなかった。安全に移住しこの問題が解決に向けて大きく前進してい

た過去があつたかもしれない」

急にシリアスな顔はやめて欲しい。

折角無理に硬い事を考えないでアホになつて気楽に実験とやらに向き合おうとしてたつてのに台無しだろうが……。

「つまりはそういった可能性、そう……。それらが分かりやすい異世界であり、平行世界、パラレルワールドと呼称されるものの一つなのです」

それはいいとして、何故に夢が出てくるんだろう？

「それら、これ以降は異世界で統一しますが、その異世界の可能性として宇宙の誕生というものは外せないのです。皆さんの腰掛けている椅子、それらに使われている物質はなんでしょう？ 金属？ それで結構です、ではその金属はどういった用途、効果、作用があるのでしょうか？ ……、硬い？ そうですね、肩凝りに効く？ この椅子のものは残念ながらそういったものではありませんが……、確かにそういったものもありますね」

金属ねえ、やっぱり刀、銃とか武器系？ あとは飛行機とか、そしてコロニー……とかだ、な。

「私達は長い時間をかけてそういったものを発見、そして把握して来ました。ですが未だ見たこともない物質が、或いは発見しててもどういったモノなのか分からないモノが多くあるのです。分類が違いますが、先ほどの夢もまたどういふものなのか？ それは未だ多くが謎なのです」

なんだっけ？ 暗黒物質？ これを支配したものが宇宙の覇者

となるのだっ！的な？

お、いいね俺がなば俺、アホになってきたじゃないか。

「つまり、それらの物質がその異世界の道へ何かしらの作用を持っているかもしれない。また未だ見つけられていないモノ、それこそが異世界への扉なのかもしれない……。夢物語だと……。あ、上手いこといいましたかね？ ってすいません。あー、つまり有り得ない事を妄想していると思っっている方も大勢いるでしょう。自分で言っていてそう感じる私がいるのも事実ですからね」

妄想だっ！？ って違うか、扉ねえ……。

まあそーいうのもいいよな、空を飛びたいって言う妄想、夢から飛行機が生まれた訳だ？

異世界に行きたいってのから扉とやらが見つかるかもしれないしな。

「話がズレましたね、何故宇宙誕生とそれら物質が関係あるのか？ 簡単な話です、宇宙誕生の際、失われた、そして限りなく無になった物質があるとされているためです。これらの中で極僅かですが、研究及び実験でそれらを再発見、再取得に成功しています。そして色々な分野でそれらは有効利用されているんです、そうコロニーにも使われていたのです」

すげーな、また創った？ いやまあ元々そういうものに成りえたのを発見したのか？

ともかくすげーわ、見直したよ研究者さん！ってあんたが見つけたわけじゃなかったか……。って、コロニー……。にも？

「そして夢というものはこれらに大きく関係しているのではないかな？ そう考え研究しているのが我々なのです」

なんでそれと夢が関係あるんだろうな、普通無いだろ？

だって夢って必要な情報とそうでない情報の取捨選択のためのものって、ずっと昔から言われてるだろ？

「夢というもの、これについては皆さんそれぞれに常識からの知識があるでしょう。そしてそれらの多くは正しいと私達も考えています、しかし同時にそれらが主目的ではないと考えているんです」

副次的なものっていう事かね？ なら本来のソレはなんなんだろうな。

「勘違いしないで頂きたいのは夢、というよりも睡眠時の脳の働き、それ自体は恐らくその常識の通りでしょう。そして一般的な夢もまたその通りでそれらが主目的でしょう」

訳が分からない、どっちも主目的？

んじやなんで主目的じゃないなんて言ってるんだ？

「では私達が言う夢とは異世界への扉、そのものだと思っていませんか？ 残念ながら違います、夢を見てよさそうな異世界を見つけ、そこにいけたら楽なんですがね？ 我々の見解ではそうは、成りえないのですよ」

前々から思ってたけど、勿体振るのやめてくれないかな……。
簡単に言ってくれよ。

「そう、我々の言う夢というのは異世界からの情報を受信したもので、そしてほぼ消え去った、あるいは有っても見つけられない物質、それこそが異世界の情報を発信、あるいはこちらの世界の情報を異世界へと送信しているものだと考えているのです！ これであれば

夢というものが人間だけではなく他の恒温動物でも……」

発信だの、送信だの、アレだ、まさしく……電波だ!？
って違うか、最初の方でも言ってたしな、妄想だって。

「……すみません、つい熱くなつてしまいました。事実、最近になつて、具体的に言いますとコロナー事件の暫く後からそれらを顕著に発見できるようになったのです。そうは言ってもそれら物質、あるいは現象それ自体が扉への情報だという意味ではなく現状、人体に害はありませんがなにかしら作用している可能性がある……、と」

コロナー事件の後に、ねえ？

まあそういう物質を使つてたつていったし、あんだだけデカイんだ、それなりの量を使つてただろうし、なんかあつても不思議はない……のか？

「さて、長い話に付き合わせて申し訳ありませんでしたね。つまりもうお分かりかと思いますが、皆さんに願ひする実験、それは夢を見てもらう。そしてその夢の内容、つまり異世界の、この世界には無いなにかの情報を得てもらう。そういう実験です」

あれ？扉とかいうもんだから、異世界に行けるようにして、そつちに移住しようぜ！

つて話じゃなかったのか？てか意外と楽？なのかね、夢を見るつて要は寝るだけだろ？

「色々と疑問に思っている方もいるようですが、この実験の最終目的は恐らく皆さんが思われている事です……。が、それは夢物語でも未だハッキリと描けていないのです、仮にも各国を挙げての計画ですからね？ それなりに見通しが無ければ立案自体が不可能なん

ですよ、まあこの計画を推し進める私達がそれを言うのも皮肉というかアレなんですけど……。要は現状、可能性が見えるのはその異世界の情報を得て、この状況を打開できるのでは？ というものですよ。お分かり頂けましたでしょうか？」

えっと……。

「最後に大事な事をはっきりと申し上げましょう、安全の保障は御座いません。これは皆さん、事前の通知でご存知かと思いますが、その上に言いますように、命の保障はありません」

……っ！くそっハッキリ言うなよ……。

家族にも大丈夫だからって励まされて、ここに来てアホになっても耐えようとして、寝るだけだっただけで安堵したところにソレか……。寝るだけでそれって、余計に怖くなってくるじゃないか……。

「コロニーのランダムと同じく完璧にランダムに、そう × 国の元首のお子さんもいる……。まだ幼いのに……。自分が嫌になりますね、そう思うのに我々の研究が更に進むという点で興奮しているのも事実なのです。罵ってくれて構いません、呪ってくれて結構です……。」

ですがコロニー計画が頓挫した今、なんでもいい、現状を打開するための方法を探しているんです。だから私達は言いません、ごめんなさい等と、大人の責任を子供にまで押し付けて情けない等と、許してくれだなんて言いません！」

。

「しかし同時に誓いましょう、全力を賭すと、いえ見つけてみせると……。決して無駄にはしないと！ 貴方は本来であれば『死ん

でくれ』という命令にも等しいこの実験を受諾して下さっている……。地球のため？ 国家のため？ いえ違うでしょう……家族、或いは親しい隣人、友人のためかもしれない、そんな人達を無意味に……、いえ……」

。

「折角の出発の門出……と言って良いのか……、なのに暗い話を失礼しました。ですが！ その上で更に言いましょう！ 保障はありませんが、現状では我々がテストを行った限りでは即座に死に至る事は無いようです。……なにせ私、生きていますからね？」

は？テスト？なんでだ？てか、え？豹変しすぎじゃね？

一気におっさんから、ダンディズムなおじさまだったのに、また一気におっさんに戻りやがった……。

「テスト？ という顔を為さってる方が大勢いますね。それはそうでしょう？ 万が一それを行って大爆発でも起きたら大変じゃないですか？ 故のテストですよ、我々研究者一同、一ヶ月の間テストを受けています」

つまり、一ヶ月は大丈夫ってこと？

「ちなみにその実験の内容はその未知の物質が多くある場所。つまり……、コロニー跡地のほど近くで人体に害の無い宙域が実験を行う舞台となります」

。

「嬉しい、いや悲しい事に我々がテストを行った時には、今までに

無い反応を観測出来ました、が。それらはスグに消えてしまいました、そして同時にそれらを見、解析する我々研究者がテストしていたので十分にそれをできなかつた」

なるほど、そのための1000人の老若男女、それも人種も幅広くつてことなんだ……。

「さて、お話はお仕舞いです。これより実験のために移動しましょうか……、それでは」

「それで移動して……、んーっと？」

第3話 『扉は開けるもの』

「そうそう、そして宇宙に上がったんだっただな。いや昔のスペースシャトルだっけか？ あれから見たら当たり前だけど進歩してるよなあ宇宙船って」

進歩していると言っているが彼のいた時代であってもあのタイプで宙へ昇るものはある。

それどころか最新型はそれを改めて研究しているものが多いという。

「ジェット機みたいに普通に空を飛んで、んで成層圏だっけか？ 外気圏だっけ？ 良く分からんけどもそこらまで行って、んでゴゴゴゴッって感じだもんなあ。結局あの感じは慣れないままだったけども……」

彼はその時の事を、無駄に、長く、そう言っている。

何かを忘れようと、何かを認めたくないとはかりにそれらを語る。

「……って現実逃避もいい加減にしないと。なにせ此処は何処だか分からないし、多分ここは地球じゃないだろうし？ 地球だったとしても少なくとも俺の知らない場所だろうしな」

彼は忘れている、彼が此処へ来る前に居た場所はそもそも地球上ではないという事を。

「いやまあ、それは置いて措こう、ってか此処に来る前の事を整理しないとどうもモヤモヤして気分が悪いや。んー、小型のコロニーというよりも大きめな宇宙船ってところへ行つて……」

「さあ、着きましたよ、ここで皆さん、移住第三計画09班のこれから生活していただく場所です！」

そう自信満々に言う40代くらいの白人男性、これも前々から思っていたが40代でその口調ってどうなんだろう？
なんというか……うん、まあいいや個性は大事さ！
というか疲れたなあ、何せ本当に小型宇宙船だったし、3日かかったからなあ。

「ここでは第09班、つまり移住第三計画に参加している1000人を十に分けた内の一つが実験に協力して頂く訳ですね」

今更そんな事になってたとか言われてもなあ。
いやまあ、なんで1000人だつて乗れるような大型宇宙船もあるのに100人単位の小型なのかなあ？
とか、あーやつぱりこの計画は重要視されてないんだなーとか、予算ないとか……。
だからきつと飯まずいんだろーなーとか思ってたけど、そういう事だったんだな！

「まあ、大型の宇宙船なんですけどね、実際の所は……。本当は小型コロニーを用いてやりたいところだったのですが、数が少ない上にこの計画はあまり……。その何て言いますか……。ね？」

……ね？じゃねーし、アホめバカめ！

くっそなんてこつたい、つまり……飯が不味い可能性が高いっ！
いやもう、実験で一ヶ月以上生きられるか分らないのは吹っ切った。

いや、吹っ切つてないけどなんとか一ヶ月経つまでは無視できる！

……と思いたい！

けど今日にも食べる飯は出来ない！ 隣のおじさん！ 嘘でも美味しかったって言っとけや！

何が『一回とか二回ならいいんだけど、それ以上はねえ、味がどうしても単調になるんだよね、加工できる宇宙食って限られてるからね？』だっ！

「しかし安心して欲しい！ この設備は完璧です！ まあ、そのために換装した船なわけだから当然なんです、皆さん私が地球を出る前に言ったジョークを覚えていますか？」

ジョークなんて言ったか？ ああ正に夢物語！ だっけ？

「そう！ 私の趣味ですよ！ つまり料理なんですね！ 研究者だからなんですかね？ こう凝り始めたら歯止めが利かないといえますか？ とにかく料理には期待して下さいね！」

っ！ なんだってっ！？ 料理が上手いのかっ？

ふふっ、正直10個に班が分かれたのに、どうしてまたこのおっさんなのかと鬱になりそうだったが、神は俺を見放さなかった！

「っといけませんね、どうしてもそういった事になると熱くなつてしまいます。さて……それは置いておいて、いつまでもこの小型宇宙船にいるわけにはいきませんので、あちらの……これからの我々の家に行きましようか。もう接舷して繋がっていますので、ああ、

走らずゆっくりお願いしますね？ 無用な怪我は御免ですしねっ」

ほーっ、船に着いたけど凄いな……。

換装とか言ってたけど、要はリニューアル？ なんていうか綺麗だ、ピッカピカだよ。

「さて、まずは皆さん、小なりと言えども個人の荷物がありますよね？」

ある。カバン一つ分程度だが、確かにある。

「この船は大きい方ですが、小型コロニーとは比較になりませんか？ 運動などはあまり出来ないですよ。出来ても精々が機器を使った軽いもの、スポーツは不可能です。なので個室だけは確保しました、皆さんそれぞれに鍵をお渡ししますので受け取り次第その部屋へ行き、荷物を置いてきて下さい。ああ、行き方は鍵と一緒に渡す用紙に書いてあります。それでも……」

なるほど、個室が貰えるのかー、なんたる？

こんな状況だけど新築？ な家で自分だけの部屋ってというのは、こう……ね？ ワクワクしちゃうな！

「それでは皆さん、荷物を置いた後は用紙に書いてある多目的室へ来て下さいね。そこで現状の健康状態のチェック、そして行き成りで着いて早々申し訳ありませんが問題の無い方から順次、実験に移行します。1時間ほどでしたら個室の方で暫く考えて下さって構いません。ですが、最終的には必ず受けていただきます、キツイ言い方ですがこれは絶対です」

っそうか……実験かあ、おっさんは1ヶ月は大丈夫だったって

言うけど。

要は訳の分からない物質だかなんだかを作用させるわけだし、やっぱり怖いよな……。

10分経過。

30分経過。

さて、行くかね？こういうのはある程度悩んで、ある程度解決して、ある程度やっぱり悩んでいくものだよな？

大学試験もそうだった……、少なくとも俺は……。

勉強しまくって、ある程度いける！って思って……。

けど3ヶ月前、そして1ヶ月、前日つてなる度に不安になってどうしようどうしようって言ってたからなあ。

友人は『余裕でしょ？』とか言ってる、勇気を貰うどころか余計に不安になったのもいい思い出だ。

「あ、来ましたね、加藤さん……でよろしいですね？ ……はい、それでは健康チェックを……」

なんとというかこれは昔から思うんだけど、このバーコードを読み取る機械みたいなのを軽く要所要所に当ててるだけとかでも大丈夫なのかね？

昔は色々やっただら？てか本格的なのは今でもそうだよな？ねえ？本当に大丈夫？

「ん？ ああ、これは健康チェックと言っても一般的なモノとは違うんですよ。コレは宇宙へ上がってから急激に体調が変化するといふ、なんていうんですかね？ 高山病のようなものがありました、

それが起きていないか？ 或いはその前兆はないか？ それを調べただけのものです」

へえ、つても前に宇宙旅行『さあっ！月を歩こうぜ！』ツアーに行った時でさえそれは受けてなかったと思うんだけどなあ。

……簡易の訓練なら一応受けたけどもさ？

「ははっこれは本当にそういうための機械ですよ？ チェックと言いましたよね？そしてここへ移る時に無用な怪我はゴメンだ、ともね？ 本来それは発症したらスグに分かるものなんです、自覚症状もそうですし、目に見えて具合が悪そうになるのですね？ ですが稀に、本当に極稀に遅効性とでもいいますように、遅れてそれが出る人がいるんです。なので念には念をですね」

まあ、いいや、目の前のお医者さん？も問題ないって言うてくれているし。

実験とやらに……、まあ寝るだけらしいけども、行きますかね。

「……現在の所第09班100名の内37名が実験を施行中です。そして何ら人体に異常も、機器に問題も発生していません。研究者としては何ら反応がない事を残念がるべきですが、子がいる親としては、そして一人の人間としてはこの状況は嬉しいと感じてしまえますねえ……。つと、健康チェックは大丈夫のようですのでその扉をくぐって、扉の上のランプが点いていない部屋へ入って、ゆっくりと長旅の疲れを癒して下さい。……っていうのもアレですかね？」

やっぱり、この人のジョークはジョークに聴こえないって……。

ふう、ここか。 47号室……。

なんとなくだけど、人がいる部屋の近くっていやなんだよねえ、知

り合いなら別なんだけどほぼ全員話した事ない人ばかりだし……。

明かりは……暗照っていうのかね？

うっすらーと全体が見える程度だ、ベッドはぐっとおお！凄いな！
寝るのが実験の手段だけあってか。

……これはっ良いものだっ！

ん……、やっぱり疲れていたのかなあ、眠くなって……。

「ふむ、1時間は少し過ぎましたが……。予定の範囲内で100名、
全ての皆さんが実験室という名の高級仮眠室で睡眠につきそうです
ね」

……。

「いや、実際そうでしょう？ 確かにあそこは意図的に未知の物質
が崩壊しないようにと特別な素材を用いて作られています。ですが、
それ以外は普通なんですから、まあ観測機器等は付いていますが……

……」

……？

「まあ、分かっています、仮眠室などとはもう言いませんよ……。
さて、それよりも未だ反応はありませんね。既に熟睡している人も

大勢いるのに……、何故でしょう？」

……。

「まあ、そろそろ早く成果は出ませんよね。明晰夢を見せる可能性を高める装置を改良した夢を起きた時でも覚えていられるそれがある事ですし、もし異世界の情報を受信したらそれなりに覚えているでしょう。ですから、それを期待しましょうかね？ まあ、現状その反応は無いわけですから、やはり気長にいきましょう」

……？

「ん？今……微弱ですが、反応がありませんでしたか！？ この部屋は……」

第4話 『そして彼は扉の向こうへ』

「うーん、やっぱりあの時だよなあ？ ……けど命の保障は無いって言われてたけど、これってどうなんだろう？」

そう、誰でも、少なくとも人間と呼ばれ、そう自覚する生命体であれば。

こういった例え見知らぬ土地であっても、有り得ない環境であつても呼吸が出来、身体も自由に動き、己の目からは情報が脳へと送られる。

そして何より自分という個を認識できる事は死とは思わない、思えない、だからこそ彼の疑問は正しいと言えるものだろう。

「でもなあ、んー、夢？ は見てないんだよ……。いや、暗いつていうのかな？ それと段々と明るくなっていく感じか？ 違うか、それはここに居た時に目を覚ましたからかな……？」

事実、彼はここで目を覚ました。

何も無い、少なくとも目に見える範囲では何も見えない、この草原で。

「まあうん、そうだなあのおっさんも言ってたしなあ……。きっと……」

「なんだっ!? このデータは!? 今まで我々がテストで得られたものとは比較に……。いやそもそも何かが違う? どういうことなんだ!?」

……!

「どこだっ!? ……良しっ! 第47号室!! 被験者は加藤祐かとう ひろだっ! 至急、その部屋へ急行するんだ! 映像が乱れている、彼に何が起こっているか分からない! 今すぐにでも彼を起こしてっ

……」

……!?

「当然だっ! 実験のデータは大事だっ! ああ大事さ、今この時も得られているデータが何かに、いや必ず我々の未来に役立つという事も! だが、私は彼等に言ったんだ! 言ってしまったんだ! 一ヶ月は大丈夫だからと! その間は安全だと!」

……っ、……!!!

「分かっている! それが方便という事は私が一番! なにより、未知のモノに対するものなんだ! テストだの言った所でそれが何なのか分からなければ何の意味も無いと!」

………!

「っっ! 分かった、最低限の装備を装着次第、急行しよう!」

……っ!

「良しっ！　ここだっ……第47号室っ！　いいか？　『扉』を開けるぞー！」

………？

「ああ……分かってる。この件は暫くの間、そうだな1週間程度は皆には、いや上には黙っておくべきだと言いたいんだろう？　分かってる……私も、いや私は研究者なんだ……。分かってるさ」

………。

「うん、私もそう思う、訳が分からない……とね」

………？

「そうだ、確かに最初の微弱なあの反応は我々のテスト時に出たソレと酷似している。だが微妙に、違う……。そして何よりその後のあの急激な変化……。それに……彼の……」

遺体、としか言いようのないモノが光の粒子と成って消えたという
不可思議」

……………。

「そうなんだ、アレほど大きな反応が出たんだ。彼以外の部屋、そしてそこにいた被験者達にもそれなりの影響及び反応が出て可笑しくは無い。そして第47号室の有るこの船自体にも、つまり我々にだって何らかの影響が……………。
しかしほぼ出ていない……………、出たのは実験室のみでその部屋でもそれはテスト時のものと同じ。そしてやはり第47号室の最初の反応とは微妙に違う」

……………。

「前兆は大きな反応が現れる前に出たテスト時のような微弱な反応のみ。そしてその時に船外、つまり宇宙空間で何かしら動きがあったとは現状報告は無いと来ている、やはり夢なんだろうか？ ああは言ったものの、夢を見るとき、つまり睡眠時は人間は身体の色を抜く、そう言われているのを知っているかい？

ははっ当然か、そしてそれは意識を持つ、脳の活動にも当て嵌まる事でもある……………。我々の目指しているその異世界からの情報の発信源、それは非常に不安定なものだ。だから覚醒状態、目を覚まして自意識を持ち、活動に必要な情報を処理したりと大忙しなわけだ。そこに微弱な、弱すぎる『何かしら』を受信できたとしてもそれは活動に必要な、明瞭で強い情報を優先する脳に拒絶されると考えた

……………」

……………。

「うん、そしてそれは居住空間を私達自身で確認したい、という我俣を通すという形での先行して船をこの宙域に置いたテストによって実証された訳だ。しかし、まさか初日でこんな事が起こるなんて……」

……！

「そうだな、私は彼等にああ言った、言ってしまった。だが同時にこうも言った……言われずとも覚えているとも、忘れるわけが無い。決して無駄にはしないと、見つけてみせると……、確かに……ああ、確かに言った」

……、……。

「ふう……、私は最低な人間かもしれないな？ こんな事が起きて、まだ1日と経っていないのに君の言葉が嬉しいと感じてしまっている。だがそれでいい、私は最低な人間だろう、だからこそ成し遂げられる、だからこそ今回の事で学べるんだ」

……！

「済まないね、しかし今は熱くなりすぎるのを、許して欲しい……。そして決心したよ、私は犠牲を出す可能性があるかと分かったこの実験はもう終わりにしようと思う……。彼が遺したこの情報、これが全てさ！……ん？ 全てなのか？ だって？ ははっ！ 当然じゃないか、このデータがあれば全て、私達が解明してみせる。そう言っているんだよ？ 我々は人間なんだ、ちよつとした切欠さえあれば、世界は纏まるし、同時にそんな世界であってもたつた一人の発言で大切な何かが崩れるものだ。そしてこのデータさえ有れば……我々人類は『何かしら』を解き明かせるんだ、

違うかい？」

……。

「うーん、賛成してくれるのは嬉しいけど、なんだろうね？ ところがなにかが足り無いなあ、変に気を遣わなくて結構、思ったことを言いなさい」

……！……？

「ああ……、ははっ！ そうだね……君は実に面白い事を、いや違うな。そう……、君が言っている事はきつと事実だろう、天才だよ」

……！

「馬鹿にしているわけではないよ？まあ天才とソレは紙一重とも言うらしいがね？ 先ほどの発言は別としてだが今回のその言葉に限っては君はその上に行ったと言っていていいと思う。

私もそう思うよ、ああ……そうさっ、必ず実証してみせよう！ そうだっ そうなんだっ！ 彼は……！」

「……、『異世界』かあ……」

かくして舞台は地球という世界から、未知の扉の向こう側
界へ。 異世

第1話 『 実感! 』

何も無い、ただただ広大な草原で1人の青年が、あちらこちらを見渡しながらしばらくしてため息を吐いた。

(此処が異世界ってのは、この美味しすぎる空気で分かったとして……)

「あれだなあ、やっぱり難しい事は考えるものじゃないや……」

(色々と最初から思い出して整理してみたつもりだけど、やっぱりごちゃごちゃしすぎてる感じだし、やっぱりあれだな……)

「実験があつて、それを受けて、そしてなぜか此処に……」

(くっ! ? 声に出して言ってみると、神様やらピカーツとかのがマジじゃなかったか! ? てか神様が良かった! 貰った力で無双して『 当たらなければどうということはない! 』 だっけ? そんな事言ってみたかった!)

例え300年という歴史を刻もうとも、そういったものは廃れな
いものである。

正直なところ、世界が纏まったのはそういうのを卒業できなかつた漢達がそれなりの地位と発言力を持っていたからかもしれない。

(いや待てよ……そもそもだ。おっさんの話では来ること自体が奇跡的なわけで、つまり……神様! ?)

そんな彼をまるで小馬鹿にするような風が一筋吹き抜けていく。

「……………、ッ！」

(あーもうっ、馬鹿っそんな阿呆な事考えてる場合じゃないだろ？
まず此処は何処なんだ！？ って違うそれはもういい。ピーケー
ル、冷静になれ俺……………隣のおじさんも言ってただろ？ 『ニンジン
は目にいいんだ』 ってさ！ ってどうでもいいわ！？)

「……………いや、これだ！」

(んー、っと、やっぱり見渡す限り草原ってものらしいな。天気は
良いからかなり遠くまで見えるけど、建物っぽいのは見えない…………)

「となると…だ、『食べ物を入れて下さい』とかも言えないわけだ。
どうする？ 食べ物なんて持ってないし…………でも幸い腹は減ってい
ない、喉も渴いていない。あんな環境だったとは言え、いやだから
こそ運動場では思いつきり遊ぶための友人に引かれるくらい本
気^ジでやってたから…………。それなりに体力諸々には自信がある…………、
隣のおじさんには負けるがなっ！」

(つまりだ、それなりの距離なら移動は出来るんだ、するべきか？
でも確か遭難したらその場所を動いてはいけないうってドキユメン
トムービーで言ってた気がするけど…………。あれ？ これは救助の見
込みがある場合だっけか？)

独り言を耳を澄まさない聴こえない程度でブツブツと言うのであ
ればまだしも彼は時々大声で叫んだりしているのだ。街角で見かけ
たら目を合わせず、直ぐさまそこから距離を取りたくなる人物間違
い無しだろう。

幸か不幸か、この場に誰もいなくて良かったと彼が気付くのはもう少し後の事。

「よし、当面……、というか持って三日つてところか、それまでにまず水……これを探さないと。出来れば食べられる何かもあると嬉しいなあ。あつ、水場があるってことは……、生き物がいる！ ふふつ、ようやく母さんオススメドキュメントムービー大集全365巻（1巻で約24時間）の真価が発揮される時が着たみたいだな……！ 待ってるよー、俺の飯っ！ ……ははっ！ 世界つてのにはまだ分らないけど、この状況には慣れたなあ、俺」

彼の予想は強^{あなが}ち間違いとは言えない。彼の時代の地球環境ならまだしも、普通であれば食べられるモノがあるという、その可能性は限りなく高いと言えるからだ。

しかし彼は、その生き物は自分が狩れる獲物だと思い込んでしまっていた。

自分を獲物とする強大な狩人の可能性をこの時の彼は想像すら出来なかったのだ。

「ふーっ、なんだろ？ ……歩くのってこんなに楽しいものだったっけ？ 景色はほとんど変わってないのに……、結構歩いて疲れてるはずなのに。あー、なんか気持ちいいなっ！」

（それはいいとしても……本当に何もいないな。130分くらい歩いたから大体6〜8kmくらいは移動してると思うんだけど……、山や川も見えないし）

「まあ、まだ距離的にはまだまだだし、日も高い……。せめて暗くなる前に屋根代わりになりそうなのがある所に行きたいところだけ」

彼の格好は実験の時に寝た格好そのままだ。幸い被験服の類ではないが、厚着でもないし、雨風を防げる類のものでも無かった。

それは普通のグレー色のパーカーにジーンズというなんとも言えないものだ。

こういつた最先端の技術を駆使していない、昔ながらの生地を用いた服装は彼らの時代での中々廃れない流行だった。

「はあはあ……っふう、あれからどれくらいかな？ 時計も壊れるから分らないんだよなあ。さっきまでは頭で数えるっていう、無駄な労力を使ったけども……。んー、この筋肉の疲れ具合から診て……。分かるわけが無いっ！」

（正確な時間は分からないけど3時間くらいは歩き詰めたはず……時々小休止はしていたのも合わせると、うん。その甲斐あってか風景が変わらないってのに慣れたけどな！ ……慣れちゃだめじゃねーか、変われよ風景、山来い川来いつてか人里来い！）

彼の願いが届いたのか日が傾き始めた頃、それがようやく視界に入り込む。

「あれは……、森！？ ……いや林？ どっちでもいいか……、とにかく見つけた！」

（良かった……、かなり疲れた……。フルマラソンを1kmトラックでやった事があるけど比較にならないくらい疲れた。ゴールがあるのと無いとじゃこんなにも違うのか？）

彼は発見から1時間ほどで、といっても少々飛ばし気味に駆け抜けたわけだが、森に辿りついた、そして手頃な場所を探していた。

「ふうー、よしっ！ ここを俺の住居にしよう！ ふふっ、やつぱり昔の人は偉大だっ！！ 見ろっ、この素晴らしい造形美！ 感じろっ、この圧倒的なまでの機能美！ そして味わうがいいっ、この完成された安心をっ！」

（ふう、ツイツイ熱いパトスを飛ばしすぎちゃったなあ、てか俺一人になるとこんなにハツチャけちゃうのか？ 普通思っても口には出さないだろうに、新たな自分を発見してしまったよ、恐るべし異世界……）

陽がもう落ちそうになる頃に彼が完成させたのは、太い木の枝を組合わせて骨組みを作り細く長い枝を適当にそれに被せその上に葉っぱを、そしてまた重石として枝を乗せて出来たモノ。

それは、どう見ても不恰好で今にも壊れそうな、しかしそれはテントだった。

「ふふっ、いけないいけない、つついっ笑みが……。だけど、嬉しいものだなあ、テントっ！ ははっ！ 俺が作ったテントかあ、今日はここで寝るわけだ……。やつべワクワクして眠れないかも！」

（よし、今は丁度歩き続けた上に俺の一生の記念な作業しちゃった

から……。疲れまくってるし、きつと良く寝れる……。流石に寝ないはずだから……。よし、寝る！)

彼は忘れていた。そう、テントよりも水や食料を探す事が、本来の目的だということ。

しかし、これは怪我の功名と言えたのかもしれない。疲れに疲れのために、すぐに眠る事が出来たのだ。これは彼にとって僥倖であろう。もし、ここまで疲れていなければ不安で寝るに寝れなかったかもしれないのだから。

そんな事は当然知るはずもない加藤は、静かな寝息を立てながら翌日まで気持ちよく眠るのだった。

第2話 『遭遇!』

(ん……、明るい?)

全てを照らす明かりが昇り始めた静かな森に、なにかが動く音がある。それを発した何かが声を出した。

「って朝か、んーつと……ふう、良く寝たな!」

(さて、改めて……ふふっ、いいなあ、テント!)

テントとは言えないが、雨風はそこそこ凌げそうな物体を起きぬけに眺めているのは加藤^{かとう} 祐^{ひろ}。ボサボサの黒髪を乱暴に掻きながら身体を起こす。

「さて、これをどうやって更に見事なモノにするのか……、それが問題だ」

そう言うと、加藤は目を瞑り、ゆっくりとかみ締めるように呟く。

「友人も認めてくれた俺の魅力の一つ……」

(そう、『お前は急に変な事に夢中になるな? 別にそれはいいけど飯は食えよ! いきなり隣で死なれたら困るだろ? お前が死ぬはどつでもいいけど、変な疑い掛けられたら堪ったものじゃない……』(つてお))

「まったく俺はいい友人を得ていたんだなあ、もう会えないだろう

けど……。失ってこそ分かるものもあるんだなあ……。ってあれ？」

（って俺の馬鹿っ何勘違いしてるんだ！……。確かにこのテントは素晴らしいが、大事なモノを忘れていたっ！。ってか、気付いたら急に……。くそっ、鳴り止めっ！！）

彼の居る森は静かなところだった。

風が木々の葉を揺らす音が微かに奏でられていたところへ、腹部から主へと何かを求める低音が不協和音として大きな音を上げて乱入した。

「はあ、らへった……。なんかミスったなあ。こうテントってか家？。憧れの一戸建て？。で、俺の体力をかなり消費してしまった……。残りの体力は……。くそっ！。回避行動は連発できずに一回のみ……。走りが使えないだと？。ちいっ、どうやってレウス亜種Mk？の攻撃をっ！？」

体力をただでさえ温存しなくてはいけないと気がついていいる加藤。しかしそれでも尚、大きな声を、無駄に大きな声を出すのだ、誰かに伝えるために、まだまだ大丈夫だと。

「……。よしっ！。大丈夫だ、馬鹿を出来る程度はまだ余裕がありそうだ。さーて、どうするかな？」

彼が悩んでいるのには理由がある。

テント周辺には、つまり森の入り口付近には一見して食べられそうな物がなかったからだ。その上水場もないと来ていた、だが。

「奥に行けば、何かしらありそうだし、湧き水が出る所もあるかもしれない。実際この森、見え始めた頃から終わりが見えなかった

「からなあ。草原といい森といい、なんでこんなにでかいんだ？」

そう言いながら、彼は何かを求めるように、森の奥を、今いる場所に比べて若干薄暗い空間を凝視する。そこには見る限り何も見て取れない。いや、正確には森が続いている事しか分からない。

「それになんでちょっと奥に來ただけでこんなに暗くなる？ 俺がお化け苦手なの知っててこういう事してくれてるんだらうか？」

当然ながら、たとえ異世界とは言えどもそんな事があるはずはないだろう。しかし彼がお化けという非科学的なものを怖がっているのは事実だ。

「いや違うから、それは大事だけどそうじゃないだろ俺？ 行つてなんか見つけれたとして、戻れるのか？」

これは難しいものだ。この場所では生命活動を維持するのは困難ではある。だが、一夜限りとは言えども安全に過ごせた場所なのだ。それから離れ、そこに戻れないというのは一種の恐怖を抱かせる。

この場所はこの世界で唯一、彼にとっての居場所となっているのだから。自分から迷子となるような事を嫌うのも頷けるものがあるだろう。

「どうしよう……。俺の今までの失敗という名の経験で考えれば、戻るのとは不可能だ」

（冷静に考えればテントを捨てても奥に進むのも道の一つだ……。なにせあそこには水もないし食い物もない……）

「でもなあー、アレは捨てたくないっ」

(いや、でも隣のおじさんも言ってたじゃないか！ 『確かにニンジンの皮を剥いてしまうのは勿体無い… ああっ！ 勿体無い！ だが剥いたニンジンだからこそその甘みがっ！』 って！)

加藤は何事か呟くと、今まで考え事のためか下に向けていた顔を勢いよく上げる。そして軽く、しかし長く息を吸うと同じく勢いを付けて、唾を飛ばす勢いで言葉を発した。

「…………… 良し、行くぞっ！ ありがとうテント！ 俺はお前を捨てる！ 恨んでくれて構わない…………… ブってくれて構わない！ その上でも俺は許してくれたなんて言わない！ 言えないんだっ！ だが、決して無駄にはしない！ お前との出会いをっ！」

(おっさんの名言をお借りします、こんなだったよな？ ……しかしアレだ、言ってみるとかなり厳しい。俺の中の何かがガリガリ削れる。研究者ってのはすげーよ、いやあの時はすっくと受け入れられたが、臭い言葉ってのは使い時が大事なんだな。いや、使う人間によってもかもしれない……………。少なくとも俺にはまだ、こいつを使いこなせないな)

「っつと、早く行かないと決心が鈍る……………、さよならだっ！」

そして、時折テントを振り返りながら、惜しみながらもそれを振り切るように徐々に歩みを速めながら、その場から姿を消して行った。

あの場所を離れて、それなりに時間が経っていた。既に今からあの場所に戻るのには難しい程度には距離が離れているのは間違いないだろう。

「はあはあ……、草原での大陸横断もかなりのものだったが……。まったく、今度も中々へビーな相手だ……。油断できんよ、こいつは！」

そういう彼のジーンズの膝辺りには転んだのかドロや草の汁が染み付いていた。

しかし気にした風もなく、どンドン前に進んでいく。

「ふう……、俺は一つの真理に辿りついた。あれだな、ゆっくり確実にいけばいいんだよ、なんで逃げるように突っ切ろうとしてるんだ俺？」

こんな経験をした事はないだろうか。

暗い道で不意に恐怖を感じてしまい、家までの帰路を小走りで走っていった事が。小走りと同様に何かを楽しい事を考えながらであったりでもいい。

事実、彼自身はまだ気が付いていないが独り言が多いのも、暗さには関係しないがやはりこれも恐怖に類するものをごまかし、精神を安定させようとする本能だ。

「ま、まあ、なんだかんだでそれなりの距離は稼いだっばいしな。ちよつとだけと小さな植物の花が咲いているし、虫がきつというる！」

つまり……」

(それを捕食している小動物がいるはず……ウサギとか？ つかウサギって虫食べるのかな？ いやドキュメントムービーを思い出せ……。草<虫<蛙<蛇<鷹……あれ？ ウサギってか小動物いなくね？)

「いや待って待って……、それは有り得ないだろ……！ くっ、考える！」

(そうだよ！蛇らへんにウサギとかいそうだよな！ あれ？ でもウサギって蛙とか食べないよなあ？ 草だった気が……っておいおい！ 蛙に食われるのかよウサギ！)

「……ふう、216通りのバトルを想定したが、そうそうウサギが食われるのは無いな。つまり草<兎<<鷹になるわけだっ！ つまり兎がいる可能s」

加藤がそう呟いた時、小さな音が響いた。

葉が擦れる音だ。しかし普通ではない、それに彼は一瞬身体を硬くする。

「っ！？」

突然、彼の立っている10mほど前方の長い丈の草が揺れ、静かな森には似合わない音が鳴る、この音は風によるものではない。

何故なら風は吹いていないからだ。そして、この音を出していたのは先ほどまで森を歩いていた彼だけだった。だが今、彼は止まっていた。当然この音は彼が出したものでは無かったのだ。つまりは

「……………っ」

（はあはあっ、くっ落ち着け落ち着け、何ビビってるんだよ？ ただ、草が揺れただけさっ、そうだろ？）

彼は未だ自分を、人間を凌駕する生物の可能性を考えていない。

当然だ、彼の時代ではそういった大型の猛獣類は絶滅、なくとも目にする機会も人と会う事も有り得ない環境だったのだから。彼はそういうモノが、存在したという歴史は教わっても、それがどれだけの脅威かを教わらなかった、必要ないからだ。

だが、彼の身体は身体を緊張させ、息を潜ませる事を彼に強いた、恐るべきは本能だ。

（何か……何かないか！？ 武器！ そうだっ、武器！ レーザーガンなんて贅沢は言わない！ せめて包丁でいい、いや棒！ 棒でいい！）

彼が武器で棒を思い浮かべたのには理由がある、別に棒術を会得しているとかいう訳ではない。彼は娯楽の一つであるゲームを思い浮かべてしまっただけ、ただそれだけだ。

「……よしっ、ど、どうせ草が揺れているだけだ……、何もいやしないさ！」

（そうだっ、実際今まで何もいなかったじゃないかっ、いるわけがないさ！）

彼はまるで伝説の剣でも得たかのように、棒と言えなくも無い木の枝を拾い上げて握り締めると声を上げた。

本当にそれでソレらに立ち向かえると思っっているのか、それとも恐怖を拭い去るためかは分からない。しかしそれを軽く振るって何

かを確かめていた。

「……………つふう。反応は何も出てこない、やっぱり何もいなかったんじゃないか！」

音が鳴った草が群生している所へ手近にあつた木の枝で突いて確認をしたが、反応は返ってこなかった。その事に安堵したのか、今まで無意識に少なくなっていた呼吸を再開させるために大きく息を吐いた。

（はあはあっ、良かった…全く！ 驚かせないで欲しいよ……………。けど棒？ ってかこういうのいいな、なんたる安心感がある、やっぱり冒険には最低でもこういうものがひつゝ）

「……………キユイ！」

「って、うわぁー！」

突然先ほどの草むらから一匹の、奇しくも彼のイメージしていたウサギのように白く、しかしモモンガのような姿をした小動物がヒョコヒョコと出てきたのだ。

「……………」

「キユキユツ？」

（なんだコレ？ コレに俺は怯えてた訳？ てかコイツ、なにちよつと頭傾げた感じなわけ？ キユっての二回鳴いたし『何ビビってんの？ ヘタレ？』ってか？）

「否定できません……」

「キコ………?」

「いやマジで、もうそんな言わないで下さい、ほんとじめん」

「キュッ、キュイー」

「許して下さい……」

こうして彼は、この異世界へ来て初めての異世界に住むモノと出会ったのだ。

この時に感じた恐怖、その結果の出会い、これが何を意味するのはまだ分からない。

第3話 『本音!』

「キユ〜?」

(暫くアホな妄想に取り付かれて鬱になっていたけど、冷静になつてみると何やってたんだ……、俺は)

先ほどの遭遇から10分ばかり、彼はモモンガのような小動物に頭を下げて懺悔の言葉を口にしていた。

(しっかしコイツ、なんでずーっと近くにいるんだ? 普通こついうのって人とか見たりしたら逃げるものなんじゃないの? 八つ、まさか俺に惚れた!?)

「……ってアホなことを俺はまたっ! そうだよっ、飯か水を探していたんだっ! そんなでもって……こいつ、食えるんじゃない?」

加藤はようやくその考えに至り、そしてそれを言葉として口にす
る。

それは何気なしに口に出た言葉だ。しかし何かが籠められていたの
だろう、モモンガのような小動物は勢い良く加藤に顔を向けた。

「キユツ!?!?」

「そうかそうか、『私は美味しいよ!』って言うてくれるか……。そ
うだよな、こついう野生の世界ではお前が先輩、だから弱肉強食の
理の覚悟こころづつてのが出来てるんだな……。尊敬するよ!」

「キユキユ!？」

いよいよもって、モモンガのような小動物の動きに焦りのような驚きのようなものが生まれた。加藤と出会った時にすら出さなかったものだろう。

だが、それは恐怖ではなく、思ったものと違うような、何か別のものに対する驚きであり、逃げるような素振りはまだ見せていない。

「そんな照れるなよ、安心しろって、お前の事は忘れない！ さあ、いくぞっ！」

そんな様子のモモンガのような小動物に向けるように手に持った棒を振り上げてから、そのまま止まる。

「……………」

一向にそれは振り下ろされる事は無い。絶対に、絶対に。そこだけは変わらない、変えたくない。

「……………」

「…………キユウ？」

実際に自分が人が居ない場所で、そして救助は絶対に来ないという状況において目の前に己の血肉になるだろう獲物がいたとして、普通の人間はどうするだろうか。

果実など植物ならそのまま齧ってみればいい、魚介類ならば一先ず焼けば食べられると思うかもしれない。実に人間らしい考えだが、これらであれば心を痛ませる事はそうは無いはずだろう。

では動物は、どうやって絞めるのか、どうやって血抜きをするか、

どうやって毛皮を剥ぐのだろうか。

仮に方法を知っていたとして、それに耐える事が出来るのか。

（っ、こいつ……、なんで逃げないんだよ!? 食うぞって言うてるんだぞ!）

彼は殺気と呼べる立派なものは出せていないかもしれない。

だが先ほどと違い、言葉だけではなく小動物にとっては致命傷を与えるだろう武器を加藤は振り下ろそうとしているのだ。普通であれば逃げてても可笑しくはないし、寧ろ当然。

しかし、この小動物は逃げなかった。ただじっと、彼の言葉の続きを待つかのように彼の瞳を見つめ続けている。

「お……俺はっ！ お前を殺すって、言っているんだっ！」

言葉にして自分が小動物をどうするのかというのを再認識したからだろうか。

急速に彼に何かが襲い掛かる。それは小動物が現れる前に味わったソレとはまた違うモノ、しかし確かに恐怖と呼べるものだった。

（逃げないのか……？ いや、俺はチャンスあげたはずだ……。さっきまでビビってた俺が言える事じゃないかもしれないけど、逃げるチャンスあげたはずだ。だったらっ!）

「っ!」

「キユ？」

先ほどまで、何があるうとも動きそうになかった、空高く掲げられていた棒が振り下ろされた。そして、何かを硬いモノで殴ったよ

うな音が静かな森に響いた。

「つゝゝゝ……っはあ」

「……………」

「……………」

「キユキユっ？」

彼は殺さなかった。

可哀相だからという理由で。

しかし本当は違う。先ほどまでであった恐怖のためでも勿論無い、なぜなら彼は人間だからである。空腹、それが過ぎれば地に倒れ苦しみの中で生涯を終える恐怖が襲うことだろう。それが分からぬ加藤ではない、事実迷った。殺してでも腹を満たす、という本能に従うように棒を振り上げていたのだから。しかし、それよりも今、恐ろしいものがあるのだ。

そう、彼はただ。

「いてて……、木の棒を地面に思いつきり突いただけなのに手が痛い。………そういえばこっちの世界に来てから、こうして痛いって真面目に感じるのは初めてかな？」

「キユウ？」

「ん？ ああ、大丈夫だよ。血は出ていないから」

「キユ」

「不思議だよなあ、お前みたいなの……、動物って言っていていいよな？
……うん、動物はさ。ただの鳴き声なのに、何か言葉を掛けてく
れてるみたいに感じるんだ……。それが、嬉しいんだ、どうしよう
もなく」

彼のいた時代に、一般的にペットという身近な存在はいないし、
当然動物園も有り得ない、死んでしまうからだ。それゆえに生きて
いるのはニユースを通してか、母からのプレゼントの膨大なムービ
ーコレクションを通してだけだった。

だから彼等が与えてくれるモノの大きさを知らなかった。しかし
彼はこれを機に知っていくこととなる、人間の歴史には度々出てく
る存在、人間ではない動物の偉大さを。

「キユキユツ」

「俺もさ？ 分かってたんだよ、ずーっと独り言。っていうか思っ
た事とかを意味なく喋ってたのは……。最初に気付いた時はテ
ンションのせいとか思ってたんだけど、違うよな」

（そっだよな……。なんであんなにテントに愛着を持ってたんだろ
う？ 友人に言われた通り熱中しやすい性質たちとは言え、同時に飽き
やすかったはずだろ……。？ 長続したのは運動くらいだ、それ以
外は大抵やり遂げる前に投げ出してた中途半端野郎じゃないか。：
…、なのになんでアレを大事にしてた？）

「ただ、寂しかったんだと思う……。いや、寂しかったんだよ……。、
怖かったんだ……」

それを理解したわけでは無いだろう。しかし逃げずにそこにいる小動物が目の前にいたために、加藤はポツポツと内心を吐露し始める。

それを始めたからだろうか、様々なものを、そして忘れていたものを、気付かなかったもの思い出す。

(そうだ、アレは、テントは……。小さい頃に一回だけ行った屋内キャンプ場っていう、料金が馬鹿高いアミューズメントパークで家族と泊まった思い出の……)

「あの実験の時もある意味一人だったけど、家族のためとか親しい人のためとか色々理由を他人に押し付けて……。自分は偉いんだ！強いんだ！優しいんだ！格好良いんだ！……って思うので無理してたから。でも最低な形で迷惑を、余計な心配を掛けてたって思う……。だってあの時」

(実際、今だってそうだった……。こいつを殺さなかったのはこいつのためって理由を押し付けてた)

「あそこに行く時、父さん達は言ってくれた。『少しの……辛抱だ、父さんに任せておけ』って、『待っててね、きつとなんとかするか！』って。あの時の父さんの瞳はどうだった？ 母さんの声は！あれが強さだ！あれが大人だ！だって父さんの声は震えてた！でも瞳に涙は無かった！母さんの瞳には涙があった！けど声は力強かった！そんな事言った所でどうにかなる訳が無いの！それは父さん達も分かった！言った所です！それでも言ってくれたんだ！言えたんだ！それなのに今の今まで俺は……っ」

息継ぐ間も惜しむように、矢継ぎ早に語る加藤。しかしそれは大切なものを再び掴む代わりに、自身を傷つける行為に等しいものでこの状況でそれは正しく命取りになりかねないもの。

「ツキキュー！」

だからだろうか、顔は悲しさが浮かび、それは苦痛へと変わろうとしていた。それを何も言わずに見ていた小動物は、怒るように、いや叱るように鋭い鳴き声を発し、それを止めさせる事に成功する。

(っ！……くっはは！まーた考え過ぎか……、ドツボに嵌りかけて変な方向にいったな。しかし良いタイミングで鳴いてくれるもんだ。本当は俺の言葉分かってるんじゃないか？最初から止めてくれたお陰で、大事な事を思い出せたし……)

それを止められた加藤は、しかし嬉しそうに声を上げる。それは先ほどと同じようで、少しばかり違うもの。

思い出したものに惜しむのではなく、悔やむのではなく、それを大事に胸に抱く言葉だ。

「いや……、だから俺は強くなりたい！けどまだ俺はやっぱりまだ強くなれそうにない！なにせ親に泣き付いてないし、もう出来ないからな！だから俺は我俣を言うぞ！思いつきり情けない！格好悪い！そんな我俣をお前に……、お願いするっ！」

(悪いな…親に言えなかった事をお前に言わせてもらおうぞ？冷静に考えなくてもかなり格好悪いって俺は思うけど、今の俺にはソレは必要な事だつて分かるから……)

「俺は今なんだかとても怖いんだ！とても寂しいんだ！……だ

から俺と来てくれ！ 俺の友達になってくれ！ 動物さん！」

加藤が言ったものは彼の情けなくも、口に出す事はかなりの勇気を必要とする本心だろう。それを受けた小動物は何も鳴かず、微動だにしない。

「……………」

「……………」

沈黙は続く、それでも小動物はやはり彼の瞳をじっと見つめたまま動かない、そして何も鳴^{いわない}かない。

「……………」

「何か言ってくれ……………」

「……………」

「えっと…………、聞いてます？ 先輩」

とうとう加藤は、小動物と同じ目線になるくらいまでしゃがみ込みながら声を掛ける。それは実に滑稽な姿であったが、彼にしてみれば必死なのだろう。

「……………」

「……………」

「キュウ！」

「悩んでた！？ 呼ばれ方で悩んでた！？ おい！ 俺の真面目を返せっ！」

加藤が言うものが事実なのかは分からない。しかしこれでいいの
だろう。彼も、小動物せんぱいも同様に楽しそうであるのだから。

「キュツキュー！..！」

「くっ！ 俺はこいつの後輩か！？ 仕方無い…先輩っ！ アンパ
ンと茶あ買ってきます！」

（それにしてもどうなるもんか分からないんだなあ、食料めしを探して
たら友達を見つけるなんて…）

「……父さん、……母さん。確かに少し時間が掛かったけど、ちょ
っと辛かったけど。きつと、なんとかなりそうだよ……。だから…
…ありがとう！」

彼は異世界に来てしまったために色々なモノを失ったのかもしれ
ない。

しかし異世界へ来たからこそ、本来であれば、もっと成長してか
らでないと伝わらない想いが伝わる事も、得られなかった友人も、
有ったという事もまた一つの事実。

第4話 『期限!』

何か動物がうなり声を上げているような、しかしそうではない低音が再び森に響いた。その音を聞いた青年は、苛立ちを隠さずに声を出す。

「くそがつ！ 何が大丈夫だつ！ 全然大丈夫じゃねーよ！ 腹減つたし、喉が渴いたってんだ！」

「キユ〜！」

「うるさいぞ先輩！ そもそもアンパンとかあれば俺が食ってるわ!?!」

当たり前だが、小動物は加藤の言葉を理解してはいないだろう。しかし、彼の言葉に籠められた感情は理解しているのかもしれない。時に叱るように鋭く、しかし時に慰めるように穏やかに、この動物は鳴くのだ。

「キユ？ キユツキユ〜……」

「……だよな。無駄な言い争いは止めよう、余計に喉が渴くし……」

（ふむ、なんかアレだな……、寂しい人かもしれないが、寂しくない！ 流石は先輩だ！）

「キユ？」

「いや、なんか違うかもしれないけど、こづじやなきやなあって思
ってたんだよ。ってか本当いい感じで鳴く……いや話してくれるな
！ サンクス！」

やはり、言葉の意味は通じずとも意思は通じているのだろう。小
動物は嬉しそつに、鳴き声を返す。

「キュ〜キュツ！」

「うんうん、ところで先輩……後輩は腹が減ってるんですよ、喉が
渴いたんですよ。その所、どうにかして貰えませんか？」

「……？」

「いや、こつおなか……こつね？ がへったー。んでのど……こつ
ね？ がかわいた〜って……」

彼は腹や喉を押さえたり指したり、悲しそうな表情や苦しそうな
動きを小動物に見せている。

「……………」

「……………」

少しばかりの沈黙の後、小動物は思い出したように、頬を動かす
と何かを咀嚼し始めた。

「……………」

「……おい！なに口モゴモゴさせてんだ！ってか何か食ってる！？

おいこら先輩！ 俺にもよこせ！って……」

「ンキユ〜……」

（こやつめ……なんか満足した顔になってる、気がする。俺はこんな、そしてこいつはあんなの。なんとこの事だ……。ここまで彼我の差は大きいのかつ、いや！ 俺も食い物を見つければいいだけの話！）

「ふう、まあ先輩が何食つてたのかは分からないけど……。何かしら食い物はあるんだろ、そもそも先輩がいた時点であるって分かってるしな！」

「キユキユ！」

「あれ、怒った？ 悪い悪い。あれだジョークだよ、少々ブラックだけでも」

「キユク？」

「ジョークってのはだなあ、ってそれはどうでもいいんだよ！ いつまでこれやってるつもりだ俺は……」

（いや凄く楽しいし、有り難いんだけど現実問題としてこの状況を何とかしないと……。そもそも食い物たつて食えるのか食えないのかは分からないんだよなあ。先輩が食つてたモノは俺でも食えるかもしれないけど、多分量が足り無い……。つまり先輩が食つものじゃ俺には合わない、かもしれない……。焦るなっ！ なら沸騰させれば大抵大丈夫らしい水をまずは先に探すべき）

彼は後で気づく事となる、どうやって沸騰させるのかと。

「キユ?」

「うん、水を探そう!」

「キユキユ?」

「どーすっかなあ? やっぱり動かないとダメだよ……。このままココで止まってても、水が湧き出てくるわけでもないし。よし……、行くぞ!」

そう言うと、彼は足を踏み出す。

しかし、すぐにその足を止める事になる、大した理由ではないが、大した訳ではあったのだ。

「キユク〜!」

「つと、あれだな? 一緒に歩くつてのも魅力的だけど正直、踏みそうだ……。つてか危なかったな。そだ、先輩こっちこっち」

「キユ?」

彼は少しだけ前方にいた小動物せんばいを手招きして呼び、小動物せんばいも、それに呼ばれて彼の足元までトコトコと近寄る。

「よつと、うん! いいな。これなら踏みつける心配は無いだろ?」

「キユキユ〜」

彼は小動物せんとばいを肩に乗せ、ゆっくりと肩から落ちないかどうかを確かめながら歩き出したが、暫くするとその心配は杞憂と分かりペースを上げた。

「ふう、結構歩いたなあ。しかしそろそろ本当にやばい……陽も暮れてきたし。かれこれ大体2日も飲まず食わずな訳か……？ そりゃきつい、冗談抜きで……、このままいたら俺もしかして」

彼は、こういった表情は時折見せ始めている。

不安で、怖いというものを決して隠さないのだ、そしてソレの意味は通じる。

「キュー」

「ははっ、ありがとう。そうだよな、ドキュメントムービーの漂流した人達の話でも言ってたじゃないか……。極限状態での生死は肉体系よりも精神面で決まるってさ。分かってるよ、諦めちゃダメなんだよな！」

「キュツキュ！」

意味は分からない、しかし言葉に返ってくるものがあるという事。

ただそれだけで、なんと恵まれている事だろうか。

「確かにここは異世界かもしれないけど、ある意味漂流というか遭難と言うか……。ともかくそれに近い事は確かなんだ。つまり助かるために必要なのは努力、諦めない事……。なによりも運だよな！」

（そして運は良い……。最初の努力って言うのはなんとか出来ていた。けど、あのまま先輩に会わないでいたら、きつとそう時間が掛からない内に諦めてた……。うん、俺は運がいいっ！）

彼の考えはこういった事態に対しての知識の曖昧さ、そして疲労によってお世辞にも纏まりがあるとは言えない。

しかし曖昧だからこそ、肉体、精神状態の差異があるからこそ、出鱈目な根拠で希望を強く持てる事もあるし、精神面での安定を得られるものもある。

「ふう……。はあ……。つ。なんだか、さつきから思ってたんだけど、なんでまだ日が落ちてないんだ？ さつき落ちそうだったから夕方辺り、つまり18時くらいと思ってたんだけど、んで休みながらとは言えかなり歩いたろ？ そろそろ21時かそこら、落ちても全然不思議じゃないんだけど……」

彼の疑問は当たっていた。この世界での時間表記は分からないが、地球でいうならば夜に相当する時間帯なのだ。

だというのに陽の光が途切れてはいないように辺りは明るい。

「ふむ……。もしかしてここ、南極？ 北極？ みたいな位置にあるのかな？ だとしたら日が落ちない事がある事も頷ける……。けど、寒くないし、そもそもこんなに緑があるものなのか？ 地球のそこも、昔はほとんど氷だけじゃなくて……。緑があつたのかな？」

彼は知らないが、白夜という現象が見られる場所は彼のイメージする場所でもなくとも見れる事がある。

それ故にこれらの森があるところでも不思議とは言えない。しかしそれであるうとも加藤にとっては不思議であると言えるよう。

「いやま、ここは地球じゃないんだっただな……。研究者のおっさんも言っていたじゃないか、どんなのか分からないモノがいっぱいあるんだってさ？俺があれこれ考えたところでわかるものでもないし……」

（そうだよ、それは今どうだっただっていいんだよ。日が落ちないのは不思議だ。けどそれは俺にとって有り難い事だろ？今考える問題は、そこじゃなくて、水とかを探す事だ……）

「けど、考える……か。さっきまでは、ちょっと方向がおかしくなりそうだったから考える前に行動！って感じだったけど、ちょっとまた整理してみよう……」

（大丈夫、先輩がいるから脱線はしないさっ、しても止めてくれるって何故か信じられる）

「キユキユ？」

「うん、ちょっと考えようかなってね？水を探してる……。これがまず第一。理由は水と食料では、水分補給の方が優先順位が高いから、って感じだったと思う」

（確か水さえあって、じっとしてれば一週間だっけ？って俺動いてないか？）

「……そして水の確保できるだろう環境。こういう場所なら湖？池？ とかな？ それと雨つてのを忘れてたな……」

雨、その可能性に気がついた加藤は、無意識に上を見上げる。そこに見えるのは木々の葉に隠れているものの、チラチラと見えるもの。夜だというのに明るい夜空だった。そこには雲を目にする事は出来なかった。

（雨が降れば、少なくとも多少はマシになりそう……。だけど、服がビシヨ濡れになるってのは頂けないな？ 今は疲れている、腹が減ってる、これだけでもキツイのに風邪でもひこうものなら確実にアウトだ）

「キユ〜？」

「うん、幸か不幸か……、雨が降りそうじゃない」

今まで上を向いていた加藤。小動物の鳴き声のためかは知らないが、次は下を向いて更に思考の海に沈む。

（これで体を壊す可能性が一つ減った。だけど水の可能性の中で一番確実なモノも消えた）

「このままいければ俺の限界は後1か2日あれば上出来ってところか？ 少なくともこうやって動き回るのはきつくなりそうだけど……うーん」

加藤の前向きなはずの言葉には、しかし弱気のようなものが浮かんでいた。意識せずともそれが出てきてしまうのだろう。それを言

葉ではなく雰囲気で感じ取ったのか、小動物せんぱいがやはり強く鳴き声を上げた。

「キユキユ〜！」

「別にスグ死ぬってわけじゃないんだぞ？ ただどんな事でもそういう事を考えておかないと最後の最後でダメになるんだよ。俺は例え過ちだったとは言え、あの時それを実感しているんだ」

（そうだ、何も悪い方向に行くだけがそういう考えじゃない。逆にそれだけの間なら何かを出来るって事でもある）

「それに……その2日で俺は先輩に会えたら？ つまりまた水とも会えるって事……になるといいな？ いや！ するんだ！」

前向きな考え、それを願いではなく目標とする。それに必要なものは様々あるのだろう。しかし加藤が出来る事は限られてくる、それは諦めぬ事。そして行動する事だ。

「キユツキユ〜！」

「そうと決まれば俺のすべき事は唯1つ！ ……寝る！」

その出来る事、行動するために必要なものもまたあるのだ。そのために加藤は地面を足で蹴るような行動に出た。落ちている小石や枝などを除けているのだろう。

「キユ？」

「多分昨日もこのくらいに俺は寝てたんだよ、だからそろそろ寝る

べきだと思う。日がまだあるとは言え、やっぱり暗くはなってるしな？ 安全第一なんだよ、足でも挫いたら大変だからなあ……」

(そう考えると、先輩に会う前まで駆けてたのは失敗だったな。あぶないあぶない)

「よし、んじや寝るかね？ 先輩……、朝になったら起こしてな！」

「キユウ？」

「ははっ、いやまあ。寝るよ……、おやすみなさい」

「キユツキユ」

そう言うと、彼は小動物を肩から下ろし、地面に横になった。そして小動物は横になっている彼の腹部あたりに登り、そこで丸くなった。

(んー……、あったかい……)

運が良い事に風も無い、テントのように多少なりとも保温機能があつた昨日とは違うが、今日は様々な意味で暖かさを与えてくれる友人がいた。

第5話 『 発見! 』

「…………ユツ!」

(…………ん? なんだ?)

「キュツキュー!」

「っ痛て! ふぁー、うん…………おはよう? 起こしてくれ〜なんて言っただけど本当に起こしてくれてありがとう。ただね? 俺の腹はトランポリンじゃないんだ、そんなに飛び跳ねるなよ…………。腹の中が空っぽなのを再認識してしまいましたよ? そもそもだね? 俺は色々と極限なわけで…………」

朝である。先日、就寝する時も明るいと感じられるものではあったが、やはり朝の明るさには敵わないのだろう。昨日の夜とは比べ物にならないほどに、とても暖かく、眩しい。

その眩しさに目を細めつつも、加藤は小動物せんばいに向かって挨拶のような、愚痴のようなものをつらつらと述べて行く。いつまでも続きそうだったそれに、小動物せんばいが1度軽く鳴いた事で終わりが訪れる。

「…………キュク?」

「…………いいよもう。ありがとうございました!」

「キュツキュー」

(まったく、しかし本当に起こしてくれるとは…………。これは、いよ

いよ古典小説で見かけた『超生物』の可能性がっ)

「ねーよ。だって羽ないし、火も吹かないし、ただの先輩だし?」

(ただの先輩ってなんだ? いやしかし……くうく、小さな女の子みたいな妖精? とかだったら後輩どころか俺が下僕でもっ)

「って俺にそんな趣味は無いだろ!??」

加藤は首を傾げながら、何かを考えるような素振りをしていた。だがしばらく無言になったかと思えば、いきなり大きな声を出すというもの。流石に小動物せんぱいも驚き、一瞬身体を動かすことで表現するものの、やはり逃げる事はせずに軽く鳴き声を上げた。

「キユウ?」

「悪い悪い、よっと……、さって行きますか?」

「キユク〜!」

朝と呼べる時間帯になり、彼は小動物せんぱいを肩に乗せて、再び森の中を歩き出した。

「ふう……、やっぱり厳しい。昨日までは腹減ったー! やばいー

！ っ て感じだったけど、益々だな。足もなんか重いし、これはっ、今日が気合の入れ所だと見たっ！」

「キュッキュ」

（よしよし、良い感じ良い感じ。『足り無い食材は他の食材で補うべし！』隣のおじさんの教えは流石すぎるなっ！ っ て、あの料理思い出したらまた腹が減った……）

「いや！ まだまだ俺の闘志は消えない！ 腹の中身が消えようとも、これだけは消えないぞ！」

加藤が何かを言えば、小動物せんぶつもまた鳴き声を返す。出会ってまだそれほど時間も経っていないというのに最早お決まりの如くそれは行われている。

「キュツキュ」

「しかし腹が減ってるというかやばいのは事実！ っ て事で探してるわけだが……」

（無いっ！ ちい、この世界め……どこまでも俺に勝負を仕掛けてきやがる！ だが残念ながらこっちの方が一歩リードしているんだぞ！ なにせ非常食せんぱうしょくがいるんだk）

「キュツクー！！」

「あいてっ！ 引つ搔くなよ……っ てか何故に分かった？ 顔に出たかな？ いやすいません、これもジョークって奴ですよ。ね？ 許して先輩」

「キョク」

意味は通じていないはずだ。しかし頭を軽く下げて謝る加藤、対して加藤から視線を逸らすように首を横に向ける小動物。

どこからどう見てもそれは通じていた。いや、やはり通じているのだろう。何故なら彼らは友人なのだから。

「ははっ、拗ねちゃったのか？ 先輩もそういう所があるのな？」

彼と小動物はこんな状況であろうともこういう事をずっと繰り返していた。これは時間の無駄とも言えるし、何より何かを見逃してしまう危険性もあった。だが、同時に彼を支える大きな柱ともなっていたのだ。

「まあそれは措いておいて……、やっぱりだ。さっきから変な感じだったんだよ、木に囲まれてる、森の中って感じは同じなのに、なんか違う。色が微妙に違うし……、分からないけど木の種類が変わってるのか？」

森の中を歩けば同じような風景が続く。それでも当たり前だが移動しているのだ、なにかしらは変わっているのだろう。

加藤はそれを強く感じたようで、ゆっくりと歩きながら思考に耽る。

「それに……おかしいな、風が強い？ さっきまでは全然無かったのに……雨も、うん、降りそうって訳じゃない」

（いや……そもそも強いわけじゃない。これは、そよ風？ いや、それに吹いているって感じじゃない。そう、なんだろ漏れてくる？

流れてくる感じだ……)

「キュツキュ！」

考え事をしながら歩いてきたために、進行方向に気を向けていなかった。目の前には木々が立ち塞がるように並んでおり、少しの道すら塞ぐように背の高い葉が生い茂っていたのだ。小動物せんばいの鳴き声によってそれに気付いたため、そこよりも通りやすい、違う道を探すように辺りを見渡す。

「ん？ ああ危ない危ない、こっちはちと通るのはきつそうだ……。んーっと、こっちに行ってみようか」

先ほどの進行方向と大して変わらないように見えるが、それでも少しばかり歩きやすそうな細い道を見つけた加藤はそちらに足を向けた。己の声を聞き届けてくれた事が嬉しいのか、小動物せんばいは加藤の肩で小さく喜びの声を上げる。

「キュク〜」

「それにしても…先輩には助けてもらえばなしだな。食料になりそうなものを見つけたら、隣のおじさん直伝のニンジンスペシャルをご馳走してあげるよ！」

(ニンジンは無いだらうがなっ！)

「キュツク〜」

「ははっ、でもその前に最低限水をどうにかしないと？ なにせ、作る側の俺がやばいもんで！」

「キユウキユウ！」

「ん？ ははっ、また弱気になったと思ってくれたのか？ 違う違う、これもジョークさっ！ 極限の自虐の中に笑いを入れる……俺は自分の才能が怖いね！」

「キユツキユ……」

（何故だっ！？ 友人にも褒められた事があるんだぞ！？ 『お前のソレは凄いよ。ある意味でな』ってよ！）

「しっかし、あいつ……ああ、前のとこの友人な？ 自分で言うのもアレけどなんで俺なんかとずっと一緒にいてくれたんだろ？ 確かに、俺のジョークというか笑いのセンスが素晴らしいものがあるかもだが……」

「キユウ」

彼は自分の長所という考え方を間違えていた。

そも彼がダメだと思った先の実験に立ち向かう意思の在り方でさえ、見方を変えれば確かに人を魅せるの1つであったとも言える。事実として、どんな形であろうともその場所へと来た、来れた彼に、彼等に研究者は確かに魅せられていた。

大きな切欠があつたとは言え、己の夢でもある研究の歩みを遅める事になるかもしれない。それを中止する程度には。

それとは直接関係はないだろう、しかしソレが出来る人間はそれ以外でも何かを持っているのかもしれない。

「んー……、風がさっきより強いつていうか、なんていうんだろ？

幅が広がった？ そんな感じがする……」

「キユウ」

（やばいな……ここでも風が強いつて事は上空も、雲も大きく動くはず。つてことは雨が降るかもしれない？ でも、いや）

「仕方ないか……、探すのは一端やめて、テントを作つて多少なりともそれに耐えられるようにするか」

「キユツキユ！」

小動物せんばいは足を止めて、テントを作ろうと腰を低くした加藤かとうに鋭く声を上げる。それに面倒臭そうにしながらも返事をする加藤。

「嫌なのか？ 肩に乗ったままとはいえ、歩くのが好きなのかね。でも仕方無いだろ？ 雨が降るかもしれないんだからさ」

「キユウツキユ！」

そんな加藤かとうに、小動物せんばいは尚も鋭い鳴き声を上げる。いや、更に強くなったと言えるだろう。

なまじ肩の上に乗っているために、今の声量では小動物の鳴き声とはいえ、少しばかり煩い。それを注意しようとしたその時に、今までテントの材料を探すために下に向いていた顔を上に向けたのだ。そして見えたものは。

（そんなに言われても雨が降るし……つて、どんだけ飛躍させてんだ俺は。雲はないし、あつても雨雲には見えない。どうも考えにも余裕が無くなつて来てるな、最悪の事態をこうして行動に移して回

避けようつてのは良いことだけど……。自分で更にそれを進める事はダメだよなあ、だって……）」

「悪い、雨は降りそうにないな。危ない危ない、テントを作ろうつてなつたら今の体力じゃ多分作つたらもう本当にギリギリになつてたなあ。アレ作るのつて意外と体力いるし、何より集中しないとダメだから……」

そう、この場にそれを作つたとしても最初と同じく一夜限りのものとなる。なぜなら移動し続けたこの場でも食料などは目に見えないのだから。

いや、あるのかもしれない。彼は先ほどから食料など探していないのだから。いつのまにか食べられそうなものを探すのではなく水場だけを探している。喉の渇きが酷い、それを癒したい、それが今の彼にとって第一なのだろう。

「キュツキュー」

「はいはい、歩きますよつと。けど風が強いつてのは忘れないようにしないとな?」

「キュウ?」

「寝るときに体が冷えちまうだろ? だから時間ギリギリまでじゃなくて、ある程度余裕を取るんだ。そして風だけでも遮れるようなのを作らないと、寝てる……」

加藤は、考え事をしながら、ゆっくりと森を進む。そして、一瞬だけ強い風を感じたと思った時、それは広がった。

「……………」

「キュウ〜」

「っ！ はあっ……………はあっ……………！！！！」

彼のいた所からはキラキラと光を反射する何かが見えていたのだ。そして暫く走るとそこには大きな、湖と言えるだけの広さを誇る湖沼ようがあったのだった。

しかもその対岸、湖の向こう側にはうっすらと、だが確かに山々が見えていた。

「はっははは！ やった！ これって湖っていうのか？ 池っていうのか？ いや、きっと大きいから湖だ！」

彼は、そう言う。言葉に出した事で明確に把握したのだろう。

そこでするべき事、できるだろう事を想像した事で思わず呼吸が荒くなっていく。

「湖か……………、ってそうじゃない！ 遂に飲み水を見つけた！ それに、それにっ！ きつと魚がいるぞ！」

「キュツキュウー！」

「ははっ、やっぱりな！俺は運が良いっ！ なんとかなるもんだよ
「！」

（みつずうみーみつずうみ〜、いいな！ これが湖……………やべ、水を
思いっきり飲みたい！）

先ほどまで歩みと違い、今のそれは疲れを感じさせるものではない。疲れを吹き飛ばすというものを正に体言していると言えよう。そんな彼は楽しげに、軽く跳躍すらしかねないほどに軽やかな足取りで、水面へと近づく。

「良しっ！ 水を飲むぞお！ って生水はダメなんだっけ？ あれ？ どういうのが生水って言うんだ？ いや沸騰させれば問題ないはず！ 良し、沸騰させりゃーいいんだ！ させよう！」

「キユウ？」

（……………！ そうだった！？ どうやって水を汲んだ？ 入れ物になるような容器は無いし、そもそも火って……………、どうやって熾おこすんだ？）

「んー、どうしよう。そこまで考えていなかった……………。ここに落ちてるもので容器を作れても、火を熾おこせたとしても。火に耐えられる容器って作れるのか？ ここににあるもので？」

（容器は大きめの木を石とかで削れば結構スグに作れない事もないし、火も確か木と木の葉でゴリゴリすれば熾おこるのがあったはず……………。けど、やっぱりそれを沸騰おこつてのは厳しいか？）

「どうして俺は金属のコップとかを肌身離さず持っていないかったんだっ…！」

（まあ普通は持ってないよなあ……………。あっちの世界からこっちに持ってこれたのは服と靴だけ。あとは思い出とかか？ 何か臭いな？ 思い出って……………やっぱなんか恥はずかしいっ）

「キユー？ キュキュ〜」

「って先輩！ ちょっといきなり何処行くんだよ！」

小動物は、突然彼の肩から飛び降りると俊敏な動きで楽しげに飛び跳ねながら、水辺にまで走っていった。

「はあはあっ…ったく、いきなり走るなよ。俺まじで今きつついんだってば…、聞いてる？ って」

「キュク〜」

「飲んでる！？ 先輩、水そのまま飲んじゃったの！？ おいおい、腹壊すぞ！？」

「キュツキュ！」

「……………、つく」

(やべえ、まさしく『ゴクリ…』って感じた。先輩が飲めるなら俺も大丈夫だよな？ ……きつとそうだよな？)

「ええい、飲んでやる！」

そう言うと、小動物と同じように水を飲むために水辺に寄る。そしてゆっくりと、恐る恐る手を水に差し入れてそれをすくい、口に運ぶのだ。

1度それをしてからだろうか。彼はその動きを早めた。何度も何度もそれを繰り返す。

「……………」

「キユウ〜」

「ぷはっ…冷たいっ！ うん！ 水だな！」

彼は本当に運が良かった。この湖は河から注がれた水が貯まった物ではないし、またここから河へと水が流れてもいなかった。そのため水源は雨、或いは雪解け水などがほとんどなのだろう、本当に澄み切った水だ。

「ははっ！ ありがとう、先輩。わざわざ飲めるんだってのを行動で教えてくれるなんてな！」

今回はたまたまそうだったが、人間は飲めなくとも、動物は飲める場合もある。そして彼は飲めなくとも、他の人間なら飲める水というものもある。それを含めても彼は運が良かったと言えるだろう。

「いやー、なら火はひとまずいいよな！ んじゃテントを作るしかないだろ！」

（ふふっ、俺の新たな趣味！ テント作り……いつかは世界遺産的なテントを作ってみせる！）

「キユキユ？」

「ふむ、そこまでいくとそもそもテントじゃない気がするな……。家造りって事にしようかな！ よっし、そうと決まれば造るのによさ気な場所は〜っと……は？」

「……………家がある？」

それは家というよりは小屋らしきもの、それもかなり廃れている。だが変な建物でもあった。全体的に古いものではあるのだが、それぞれ使われている材木が異なるような感じである。おそらくは修復の跡なのだろう。それゆえに人の営みの痕跡が感じられるものだった。

「え、えーっと……………、誰かいますかー？」

加藤は、小屋の入り口に立ちながら声を上げる。少しばかり声が震えているのは仕方の無いものかもしれない。しかし小屋の中からは声が返ってくる事はない。それどころか全体が見渡せるほど小屋はやはり小さなものであり、見る事でもそれが確認できた。

「……………キュウ？」

「いないな…そりゃまあ、こんな廃墟？　みたいな感じだし？」

（ここまで良い事が続いていいのか？　……………ダメだっ！　ここは使わない方がいい気がする）

「それに何より俺はテントを作りたいんだっ！　俺のっ、いろんな人が認めるような、世界遺産登録作品を作るまでの道のりは何者にも邪魔はさせないっ！　今に見てるよ廃墟っばい家！　俺はお前を必ず超えたテント」

無駄に壮大な夢を語ったときだ。彼はようやく廃墟がある意味を、そしてその事から生まれるものを感じた。

「つて!? これって人がいるって事じゃないかっ!？」

(そうだよ! さすがに先輩がコレを造ったって事は無いだろうし……やべえ。最初は人がいる所を探すのかも考えてたけど、実際会ったらどうするんだ? そもそも言葉って通じるのか? 言葉は人間が生み出した最大の功績の一つで何よりソレがあるから人間なんだって誰かが言ってたような?)

「いや……、この問題は確かに大事だ。けどまずは今のことを考えよう」

(こんな廃墟でも他人が作ったものだ、ますます勝手には使えない。申し訳ないとかじゃなくて、もし人が来たら使ってた訳も言えないだろうし、何より怒らせるかもしれない理由を自分から作るのはヤバイだろ? 怖いし。まずはテント……まだ陽は高いけど、テントを作ってたら多分もう暮れる頃合になっっちゃうからな)

「よし、今日はテントを作っ……、それで明日は食い物だ! 魚を釣ってみ……どうやって釣るんだ? くそがつ! 次から次へと……」

「キュウ〜!」

「そつだな先輩! 諦めない事こそが俺の信条! そつさつ魚を釣る? そんなのはっ……」

力強い言葉と共に握った拳。それを何故か開いたり握ったりを繰り返す加藤。次第に目が泳ぎだし、そして打って変わって弱弱しく声を発した。

「……そんなのは別に植物で代用したっていいのさ……。うん、なにせ腹が膨れれば何の問題もないんだからっ！」

「キユウ……」

「止める！ そんな眼で俺を見ないでっ！？ 臨機応変になるべきなんだ、これは諦めだけど諦めじゃない！ 戦略的撤退なんだっ、何故ならだっ……」

「キユツキユ」

小動物は自分が食べられる木の実でも探しているのか、彼の傍から離れた。慣れた様子で歩き回りながら地面にある葉を除けたり、軽く地面を掘ったりしているようだ。

「いや、待って！ 俺の高度な考えという名の言い訳を最後まで聞いてー！」

運が良いのか、小動物の導きか。

彼は飲料水を確保できた。そして何よりも異世界人がいる可能性をみたのだった。

第6話 『 認識! 』

「ふう、今日の所はこんな所でいいかな？」

この湖を発見し、早1週間ほど経過していた。現在、彼はテントの改修らしきものを行っている。

「しかし、水草っていうのか？ こう葉っぱが大きくて、水に浮いてるっていうか……。ともかく、これはいいっ！ 新たな屋根の素材だよ！」

水草と言っているのは、スイレンの葉のようなものだ。

それは手のひらよりも一回り程度広いという丁度いい大きさで、葉からは細く長い茎が伸びており、骨組みに括り易いという利点もある。

「けどまだアレに勝つには程遠いか……。やっぱり木材を使わないとだめかな？ いや石造りとかも昔はあったみたいだしソレでもいいか？」

彼の言うテントにも一応木材は使われている。

だが彼が言っているのは現在使っている太めの枝では無く、板など樹木の幹を加工したものだろう。

「キユク〜」

「お、先輩。飯食ってきたのか？ なんか良さ気なドングリとか木の実とかあった？」

そう、余裕を持って探してみれば食料になり得るものはそこから中に落ちていた。そもそもが雑草でも食べようと思えば食べられる類のものはあるのだから。水という大切なものを手に入れた加藤はそれらに目を向ける余裕が生まれたのだろう。

「キュツキュウ〜」

「ふむ、流石に分からんな……。まあ、けど先輩が食ったのが俺が食べても大丈夫つてのが分かって良かったよ、ちよいと俺には渋いけどな」

彼はそういつた食材問題をやはり小動物を頼りに解決した。

その判断は間違いいではないだろう。少なくともこの森を、異世界をより知っている存在の行動の方が、彼の曖昧な知識を元に食材を選定するよりかは余程信頼が置けるだろう。

「そう言えばさ、この前先輩の友達だか知らないけど動物が齧ってた葉っぱ。ってというか俺が食ってるのはその球根？ ソレだけでも……食べてみたら、ちよつと辛かったなあ、まあ、食べたけど」

球根のようなモノは地球で言うならばノビルを想像すると分かりやすいだろうか。彼は、これを生で食べても腹を下す事は無かった。そして大根のような根菜の一種であるために、歯ごたえがあり、少量とは言えども腹を満たす役割を担っていた。

「それはそうと……先輩！ 今日の晩飯は豪華だぞ！ 今朝の食材探して新たな食材を発見しました！！ なんと〜キノコです！」

「キュウ？」

「ほら、コレだよ！ んでさ……確かキノコって生食出来たと思うんだよ！ ただ毒キノコって言う言葉があるくらいに、害のあるモノも多かつたらしいんだけど俺の発見した『先輩方式』によって一応の安全は確認できてるっ！」

彼の言う『先輩方式』は、つまるところ他の生き物が食べた形跡の有無、そしてその近くにその死骸などが無いのか、というものだ。蛇足だが後者はキノコを発見した時に追加された項目である。

「キュツ！ キュ〜！！！」

「うんうん、きつと美味しいぞ！ なんてったって、ようやく辛くなくて、歯応えのありそうな、腹に溜まりそうなものだからなあ」

彼の採ってきたキノコは色合いは地味である。彼の持つ一般的な毒キノコのイメージとは離れてはいる、だが。

「キューー！」

「なんだよ？ そんなに何度も……。安心しろって摘み食いはしてないよ。晩飯だけは一緒に食うって感じになってるしな」

「キュ〜、キュツキュウ！」

「どうしたんだよ先輩？ もしかしてこれってダメなの？」

「キュクウ！」

まるで、己を狙う獰猛な敵を前にしたかのように小動物は、彼と

始めて会った時ですら見せなかった毛を逆立てての威嚇を繰り返していた。

「わ、分かったよ。これは食わない。……これでいいんだろ？」

彼は小動物の威嚇行動に従うように、手に持っていたキノコを捨てた。しかし目は地面に落とした、捨てたソレを見ている。そう簡単には諦めたくはないのだろう。

「何か勿体無いな、もしかしたら先輩が嫌いなモノってだけかもしれないし。今日も木の実と丸い根っこだけかあ……」

「キユウ」

「ん？ ああ、別に責めてるわけじゃないよ。確かにキノコ……、というか食べなれた物を食べたい気持ちはあったけど、うん」

加藤は、ひとつ頷くとブツブツと小声で今までを振り返るように呟いた。自分にはそんな事を言っていられる余裕はないはずだと。確かにその通りだろう、つい先日まで彼は今にも倒れそうなほどだったのだから。水と少しばかりとは言え食料を手に行っている。なにがなんでも食料を求めなければならぬわけではないのだから。

「そうだな……俺はこう言っちゃアレだけど命を捨てても種のために進化が必要な動物じゃない。……闇雲に食べてるのはするべきじゃないな？ うん、俺がすべきなのは……、進歩だ」

人は調子に乗る、水を得て、食料を得て、彼はそうなっていたのだろう。だが廃墟を見た時は実に慎重であった、それは恐れがあったためだろう。小動物の声のおかげで、食料に対してもそれが芽生

えた。

「……今は一応とは言え、大丈夫って言える範囲だ。キノコが食べたい？ この状況で贅沢とか馬鹿か、まったく」

（何事もポジティブすぎるのもアレなんだな。大丈夫大丈夫つても考え物だ。その考えのお陰でここまで来れたんだ、なら今また少し悩む時期に来たって事）

「んー、どうすべきかなあ……。さつきはああ言ったけど、多分今の食い物だけじゃいずれ色々問題がありそうだし、何か別の食料を見つける必要があるよな」

（森で食べられそうなもの……毒を持たないだろう木の実は先輩のお陰で粗方把握してるし、実際食べて大丈夫だった。けど、キノコは今回の事で分かったけどまだ危険すぎる。……となるとどうするか、だ。キノコとか小さな植物みたいなモノには毒を持つのが多かった気がする。逆に大きなモノにはそれが少ないって事か？木の実は大きな木のモノだしそれに合ってる気もするし……）

彼はこの一週間で見つけた食料となりそうなモノ、そして以前の世界で身に着けた知識を掘り起こして今後の事を日が暮れて食事をしている最中でさえ考え込んでいた。

「うーん、まあそう簡単に解決する問題じゃないよな。何せ俺等、人類ですら俺には想像も出来ない時間を掛けてそれを一步步つ解決していったんだろっし」

（そう考えると俺ってたったの1週間程度であれだけ食えるモノを見つけてるのか……天才じゃね!?!）

その食べられるモノは全てに措いてほぼ小動物のおかげである。その事を咎めているような色の音では無かったが、しばし無言であった加藤へと小動物が鳴いた。しかし彼にはそう感じてしまったのだろう、謝罪の意を含む言葉を掛けた。

「キユウ」

「あー、うん悪い。ってかなんで先輩いつも俺の考えてる事を、読んでるみたいなタイミングなんだ？」

別に小動物が超能力とかを持っているわけでは無いだろう。ただ彼は顔に考えが出やすいのだ。

「キユウ……」

「って俺話してるよ？先輩スルーしすぎじゃないですか！？」

既に食事も済んでいた所でこの長話が始まりそうだったのだ。動物でもそれは嫌うらしい。

小動物は寝ることを選択したのだろう、一人先にテントへと歩いていった。

「行っちゃったよ……、けど食べ物、いや今後の事を考えないとない（となると……だ。やっぱり気になるのはあの廃墟。異世界人って言うていいのか分からないけど、少なくとも『家』を作れるくらいには人と似ているはず）」

「そういえば先輩も知能が高いよな？ ただの偶然かと思ったりもしたけど、今回の事や湖までの事、結果で考えれば確かに俺に教えてくれていたって思えるし」

（あつちの世界でもそういう知能の高い動物つてのはいたらしいし。危険なモノを教えてくれる、助けを呼びに行ってくれる……、先輩もそういう類の動物つて事か？）

「っと、また脱線しちゃった……いくら先輩の知能が高くてもアレは作れない。もっと大きい生き物で手先が発達してないと、それもあの廃墟の大きさから考えれば俺と同じくらい大きさ」

そう、あの廃墟は加藤が見た限り、いや一目見ただけで加藤と同じような体格の生物が生活できるようにと作られているのが分かった。

なによりも、加藤という人間と同じような思考を持っているのだろう。なぜなら加藤が見ただけで『家』だと感じてしまったのだから。

「だけどアレは廃墟……ってことはもう人はここにはいないのか？ いや、そうだとしても見た感じ何百年も経ってるって感じじゃなかった」

（そうだ石造りならまだしも、アレは木造でしかも造りは簡素。手入れなしにそう長い間保つモノじゃないハズ）

「んー、今度は人を探すためにまた動くべきなのか？ いや……でもなあ」

（キノコは直接関係無いけど、キノコでの事で分かった事がある。

人がいるかもしれないなら食べられる物、それにこの世界の事が分かるはず……。でも多分きつと……。いや、絶対に言葉が通じない)

「そもそも俺達みたいな猿から進化した人間じゃないかもしれない……。確か爬虫類も古代の地球環境が少し違えば有り得たってニユースで。そうなると容姿から違うだろうから、普通に敵に見做されて殺される可能性も……。いやいや、仮にそうだとしてもスグには無いだろ」

(そう思いたいけど……。殺される可能性か、考えてなかったな。怪我とかは有り得ると思ってたけど、思えばそうだな。これまで見つけた生き物は先輩とかみみたいな小動物や虫だけだったけど)

「動物ならライオンだっけ？ あと魚ならサメっていうデカイのもいたらしいし、それと似たようなのがこの世界にもいるかもしれないのか？」

彼はようやく己を容易く狩れるだろう存在に気が付いたのだった。それが彼に一つの大きな決断の選択の決定を早める要因になるのだった。

第6話 『 認識!』 (後書き)

途中に出てきたキノコはクリタケ、ニガクリダケに近いものを想定しています。

前者は多少の毒素はあるものの食用に耐えられるもの、後者は毒素が強く死亡もありえるものだそうで、見た目が良く似ていて同じ所に生える事もあるそうです。

彼が採ってきたのは後者のほうですね。

ちなみにニガクリダケを食べる虫というのが実際にいるそうですが、今回はクリタケは食べられていたので似たようなニガクリダケを持ってきてしまっていたとお考え下さい。

第7話 『 難敵! 』

(ふう……、なんか調子でないな)

昨夜考えていた事を燻くすぶらせているのだろう。

だが飯時にそういう鬱屈ふさふさとした雰囲気を出されるのは、人間では無い小動物せんぱいでも嫌うのだろう。

「キユウ……」

「あ、ごめん先輩、ずっと黙ってたか。ちよいと考え事しててさ、けどソレはどっちもどっちな気がするんだよな」

(考え過ぎ……それも悪い方向へって感じに思えるけど。今回に限ってはソレで間違っていない気もするんだよなあ)

「それにキノコの事で……。何事も樂觀視しすぎるのは危ないって、先輩が気付かせてくれた事だろ？」

「キユキユ」

(そう、今まで運が良すぎたんだよな？ だってここは森もあつて、何より広大な水場がある。大型の動物がいても不思議じゃないんだ)

「怖い生き物がいたとしてさ、それから身を護るにはどうしたらいいと思う？ 出来る事なんてハッキリ言って逃げることだけだと思っただ。けど俺はあの廃屋を見て、一つスグに思い浮かんだんだ……」

「キユウ」

「怖い生き物を倒せる強者に、それが出来る人間に護ってもらえばいい……って」

彼のこの考えは軟弱と言えるものだろうか、そうかもしれない。以前、彼は強くなりたいと言ったにも関わらず、彼は他人に頼ると言っただから。

「でもさ、人間……、うん。異世界の人に会ったとしたら？ それと同じくらいに怖くてさ……」

(あつちの世界は理想の世界だった。だからこそその問題も生まれてたけど、同時にそれ以上の問題が解決されていた。けどこっちは？ 仮に人間と同じ感じだったとしても、同じだからこそある問題っていうのがあるはずなんだ……)

「ハッキリ言っでどっちも怖い……。動物も人間もさ？ そう考えるとやっぱり先輩は先輩だよ……。よく俺と一緒に来れたよなあ、なあ……。怖くなかったのか？」

それは加藤の本心からの言葉であろう。しかし小動物こばいせはただ首を傾げるだけである。それは何の意味も無いのかもしれない、だが加藤はそれを意味あるものとして受け取った。

「キユク？」

「ははっ、そういうえば俺今までだって先輩に護られてたようなもんかっ。ありがとな？」

「キユキユ」

(そうだとしても先輩じゃライオンとかには勝てない……。逃げる事は出来るかもしれないけど、今までの事を考えると先輩は俺に懐いてる《やさしい》。きつと逃げないで一緒に戦おうとしてくれるたよっちやうって信頼たよっちやうできる……)

彼がそんな『強くなりたい』という考えとは逆方向の考えに至ったのには同じ時に痛感した事が関係していた。

彼は小動物せんばいに迷惑りゆうを掛けているのだ。自分が小動物まもつてくれるひとなみだに迷惑ながさせを掛けないために。

そう、以前の世界で彼は悲しくなるほどに虚勢を張っていた。それは一種の強さなのかもしれない。だが親はそれに涙を流した。それが加藤には普通の涙よりも重いものだ。と今では分かる。

だからだろうか、彼は思った事を素直に口にするようになっていた、そしてそれは小動物せんばいとの意思疎通に大いに役立っているのだらう。

(今の俺の考えってだっさいなあ、何が先輩のためだっけな？ 全部俺のため俺のため、けどいいんだ……。今はこれが俺の精一杯、誰かに寄り掛らないと強がりも言えない、それが今の俺なんだ)

「うん……人を探そう！　そしてお願いするんだっ！　助けてくれ、いや……。助けて下さいってな！」

「キユク……？」

「いやいや、違う違う。先輩が頼りないからとかじゃねーって。寧ろ逆だよ。頼りになりすぎるからなんだって！」

「キユー？」

「あーうん、正直に言いましょうかね……。俺がダメだからです……、ほんと弱くてすいません……」

(あつちじゃそれなりに身体鍛えてたから妄想で『俺最強！』とか思ってた俺って……、イタいつイタすぎる！ 実際になってみたら先輩みたいな小さなのにさえビビりまくり。戦い方の『た』の字も知りはないっていうな)

「キユー……」

小動物は残念そうに、しかし加藤の思いを肯定するように、軽く頷いた。

「……まあ、ほら？ けど俺も武器があれば？ やっぱ最強？ なんてったって俺はほら、あれだよあれ。ニンジンいっぱい食って育ったし？」

「キユー？」

「うっせ！ どうせ弱いですよ、すみませんね！ ヘタレで！ いいの、俺はこれから強くなっていくんだってっ！ 成長期……だっつて、信じてるの！」

「キユツキユ」

小動物はどんな言葉であろうとも、その根底にあるものを喜ぶかのような、それに向おうとする彼を励ますかのように、嬉しそうに

鳴いた。

「まったく、本当に先輩は頼りになりすぎてて……。俺は自分の小ささを痛感しすぎて嬉しさ通り越して空しくなってくるわ」

「キユ〜！」

「はいはい、さて人を探しに……」

「……は、まだ行きません！ まず、それなりに動かないと人なんて会えるわけもないしな？」

（そうそう、ちゃんと食い物も持っていないと、水は……。幸いこの湖は広いからな、まずはこの湖をグルグル回ってみよう）

「そうと決まれば食い物をいっぱい採ってこないとな！」

「キユ〜キユ」

「よし、根こそぎ採ってくる感じで行くと思いますか！」

彼と小動物せんとぼいは一緒になって森へと入っていき、何日かは保つだらう量の木の実などを採取した。

「冷静に考えたら俺、カバンとか持ってないんだっ……。危ない
危ない、持っていけない量を探ってくる所だったよ」

（草？ とかで編むカバンとかもあるらしいけど、どうやるのか分
からないんだよな。やってみただけど、千切れちゃうし……草の種類
なのかね？）

「……まあ、水と同じで多分食べ物も湖の周りの森にあるだろうし
な！ そう、これは最低限ってのだよ！」

「キュツキュ」

「テントは、無理だけど……んーまあ、いいか！ ちょっと森に
入って大きな木とかに寄り掛れば十分だろうしさ？」

「キュキュ……キュ？」

「明日になったら動くとして……どっち周りで湖を回ろうかな？
いや、やっぱり時計回りが王道か？ いやいや、その逆もまたアリ
かもしれない」

「……………？」

加藤が今後の事を、声に出して、まるで小動物せんばいと相談するかのよ
うに言う。

「あーでも、山にも行ってみたいなあ。流石に山は陰くらいしか見
えないし、もしかすると？」

しかし、その相手は彼の話を聞いていないような素振りだ。

「うん、まずは湖を時計回りに回って、あの廃墟みたいに人が遺したっぽいのを探して……。出来たらカバンとか鉄のなんかとか……。警沢を言っただけ武器とか？ 火を点けられるものとか？」

（家があったんだし、そういうのも案外あったりして？ 武器は、まあ……。無いよか合った方がいい、のかな。それでなくても、火を点けられるのは欲しいよなあ、やっぱり）

「って先輩……。さっきから見事にスルーしてない？ せめて相槌的な何かは欲しいです、と後輩はお願いしますよ？」

「キュ……」

（なんかすっげえ投げやりじゃね？）

「まあ、それはいいとしてさ？ 明日からまた冒険的な感じなんだから、ちょっと早いけど寝とこつよ」

「……ツキュ……」

その時、彼らの立っている位置からテント側。つまり森から彼より小さな影が、しかし小動物せんばいよりはるかに大きな影が1つ飛び出してきた。

「ルルルルッ」

「……キュウー……」

「……は？」

(え？ あれ？ これって犬っていう奴か？)

彼が混乱している間にも大きな影。

犬のような動物は低い唸りを上げ、小動物せんばいは彼の前に立つかのよう
うに移動して毛を逆立てていた。

「いやいや、先輩落ち着けて。これは犬っていうのだろ？ 確かに懐きやすい優しい動物だったと思うから安心していいって……。そんなに威嚇しちゃったら、ほら。あっちも威嚇してるだろ？」

「ルルルルッ」

「キューー！」

(あれ？ 俺蚊帳の外？)

彼は知らない。犬種は確かに人間の歴史に描いて素晴らしい友人パートナーだっただろう。

しかし同時に恐るべき敵としても登場していたことを。

「ルルル……ルアアアオー！」

唸り声が地に響くような低いものから、何かへとぶつけるようなモノへと変化していく。

そのぶつけられた何か、それは加藤を背後に背負う小動物せんばいへと向う。

いや、本来は加藤へと行くはずのもだったものだろう。それを小

さな身体で一身に受ける。

「キュ……キュウー！」

堪らず、小動物は逃げる前兆のように、身体を縮こませようとしたが、すぐにまた誰かを守るための威嚇を、小さな、しかし確かな咆哮を上げる。

「え？ あれ？ 犬だよな？」

彼の認識はまだまだ甘い。

動物は怖いモノという事を分かったつもりでいても、知っている動物が出てきた事でコレは安全なモノだと勘違いしていたのだ。

（だって犬ってアレだろ？ ワンコとかポチとか……え？）

「ルアアアアアッ！」

彼が徐々に感じ始めた恐怖も相まって混乱の極みに達する頃。犬のようなモノは遂に一步、足を前に進めた。

「ちょ……もしかして、こいつって犬なのに、まじか？ いやでも……って先輩！？」

「キュツ……キュー！」

小動物もまた、歩幅が違うとは言え、確かに一步進んだ。そして。

「ルアオアアッ！」

「キュ……キユウー!!!」

二匹がお互いに飛び掛ろうとしたその瞬間だった。
この世界では未だ見ていなかった、銀色の煌きが暗くなり始めた湖畔に駆けた。

「…………へ？」

「キユーー！ ……キユツ、 ……キユク？」

「× ? ×× ……」

ソレは大きな壁を切り裂いたかのような、灯り始めた月明かりを反射した銀色の煌きの一閃と共に現れた。

彼は遂に邂逅したのだ、求めていた存在と。

第7話 『 難敵! 』（後書き）

次回から異世界人の言語を『』で囲み、普通に言葉を入れますが、通じていないモノだとお考え下さい。

第8話 『異人!』

銀色の煌きが駆け抜けた後、何かが落ちる音がした。

『大丈夫か？ まったく野犬がお前を警戒していたからこそ良かったものの……』

何かが落ちた音の後、静寂の最中 銀色の主が何かを言う。
声色からして人間とすれば、それなりに歳を取った年代の男性と思われるヒトが加藤には分からない言語で最初に音を発した。

「えつと……、ありがとうございます？ その、貴方は人間……ですよね？」

『ん？ ……何と言ったんだ？ 悪いがもう一度言ってくれないか？』

「えつと？ 多分人間っぽいし、言葉っぽい話してるし……」

『ふむ、さっぱり分からんな？ むう、このような場所だ。もしか捨て子か？ 確かに普通じゃない言語を話すこともあるらしいが……いや、しかしアレは』

「そつ、その貴方は……っ！？ っっ!？」

彼は落ちたであろうそのモノを見てしまった。

そう野犬の首だ。あまりに綺麗に斬られたためか、その顔は襲いかかるうとした恐ろしい形相のまま固まっている。痛みすら感じさ

せなかつたのだろうか。
そんな首を見てしまった彼は、声にならない悲鳴を上げる。

『……合のはず。って!？ 落ち着け! 大丈夫だ! もうコイツは死んでいる!』

「キユツキユキユ〜!」

この男性をも警戒しているのだろうか、小動物は彼に近づこうとした男性を威嚇する。

『おお? 気が付かなかつたが、跳ねリスじゃないか……。お前がこいつの親代わりなのか? 安心してくれ、誓って危害は加えないと君に約束しよう』

「キユ〜……」

男性の言葉が通じたのかわからないが、少々不満そうに小動物は道を譲る。

『……どうもすまないな。しかしなんともまあ……。こいつは知能は高い、人の言う事は聞く生き物だが人を護るなんて聞いたことないんだがな。お前、随分とこいつと仲が良いようだな? っとほら水だ、ゆっくりと飲むんだぞ……。そうだ……。大丈夫か?』

「っはあっはあ……。んく、はあ……」

「キユウ〜」

先ほど、男性に道を譲り、男性が彼の傍にいる間はじっとしてい

た小動物。

彼が落ち着いたとみたのか、彼の傍へと駆け寄った。

「はあ……げほっげほっ、すみませんでした……ありがとうございます。」

水をゆっくり飲んだとは言え、やはり咽てしまったようだ。しかし確かに動揺は収まってきているようだ。

男性には通じないながらも、謝罪と感謝の言葉を述べる。

「キュツキュ！」

小動物が嬉しそうな鳴き声を漏らし、その本来の名の如く小さく跳ねて喜びを表現する。

それは、この世界でも見られる行動なのだろう。そして跳ねリスという動物のこの動作の意味もまた知られているのだろう。男性はそれを見て、加藤の言葉に籠められた意味を察したようだった。

『なんて言ってるのかは分からないが、跳ねリスの様子を見る限り感謝してところか。まあ、落ち着いたならいいんだがな？』

「えっと、詰まらないものですが……」

『ほお、こいつは木の実か？ 出してくれたたということは、食べて

くれって事でいいのか。……それでは、ありがたく頂くとしよう。』

彼等は加藤が一応の落ち着きを取り戻した後、テントへと向かってきていた。

正確にはテントの前の地面というべきなのだが。

『それにしても……気を悪くしないで欲しいんだが。捨て子だから頭は悪いのかと思えば……なんだコレは？ この穴倉、いや住処は簡易ながら雨風は凌げそうだな？』

「そつ、その！ 俺は加藤^{かとう} 祐^{ひさ}つて言います！」

『うお！？ いきなり大声を出すもんじゃないぞ……驚いたじゃないか。ふむ？ アトーヒル？ 悪いがそんな言葉は聞いた事が……』

「キユウ？」

そんな言葉は聞いた事は無いと言おうとした時、跳ねリスという総称名を持つ動物が軽く鳴いた。

『……ああ、そうか。名前だな？ アトーヒル……でいいのか？ オレの名前はルクーツア。ルクーツア・シイツと言う、よろしく頼むぞ？』

加藤の言った言葉、それを発音自体は異なっているが自分に向けて返した男性。その意味は色々と考えられるだろう。しかし加藤に取ってそれは自分の名を呼んでくれているとしか思えないものだった。

「通じた！？ ルウカさん？ ルウカさんでいいんですか！？」

『だから大声はよせ、と……、それとルウカじゃない。ルークツア……ル・ク・ー・ツア、だ』

男性、ルクーツアと名乗る者は、ゆつくりと、聞き取りやすいように話す。

それを聞き取った加藤は、ようやくこの世界でまともな単語を話したのだ。

「ルクウタ？ ルクウタ……ルクータさん？」

『若干、違うが……まあ十分だろう。そうだ、オレはルクーツアだ、アトーヒル？』

「ルクータさんか……。あ、あと俺は加藤ひ……。いや簡単な方がいいかもしれない。かとーです。か・とー」

ルクーツアと言う名は通じた、しかし以前として加藤の呼び方が違うのだ。それを正すために、男性と同じ手法を用いて加藤は伝えようとする。

『ん？ ははっ、これは悪い事をしたな。クア……トオ……。お前さんはカアトー……。カトーでいいのか？』

「っ！……そうです！ カトーです！ 俺はカトーです！」

同じ手法、ゆつくりと同じ言葉を繰り返していた加藤。それに気が付いたルクーツアは加藤の望んだ反応を返し、そして加藤はやはり大きな喜びを表す。

『まったく大声は……まあいいか。それでカトー？ さっきはなん
で逃げなかった？ それか応戦しなかった？ いくら野生児とは言
え、いやだからこそ。あいつの怖さは知っているはずだろう？』

先ほどまでの、何かを確かめるようなゆっくりとした話し方では
なく、矢継ぎ早に言われる。

そうになると当然だが、加藤には想像すら出来ないのだ。表情によ
って察する事も出来なければ、言葉の強弱を聞き分けるのも難しい。

「……………」

(やばいな、なにか質問してくれてるのは分かるけど。さっば
りだ……………)

『何も言わない……………か。って…はっはっはっ！ オレとした事が言
葉が通じないのをすっかり忘れていたな。名前が分かったために…
…つつい、すまんな！』

「うあ！ びっ、びっくりした……………」

「キューー！」

『おっと……………いかんいかん。跳びリスよ、悪かったからそんなに怒
らないでくれないか……………。カトーも、すまなかったな？ 驚かせて
しまったな』

「え、あ、いやしません。なんか俺悪い事でも言いましたか？

……………もしかして怒ってたりしてます？」

『ふむ、これは失敗だったか。そうだ……………オレはお前達を襲わない、

襲わないぞ？ そうだな……、どうだ。剣を外そう、分かるか？』

（っ！？ あれって……刀！？ いや、違う剣か？ ってなんで今そんなものを！？）

「キュツキュウ！！」

男性としては武器を地面に置いて危害を加えない事をアピールしたかったのだろう。

しかし加藤はそれがどういうモノかを知っていた、そして余裕が無かった。小動物せんばいは先ほどソレで己の天敵を倒したのを覚えていた、危ないモノだと。

『ああ！ 落ち着けっ！ これはそういう意味じゃないっ……ええい！ 仕方無いっ！ ……どうだ？ ほら、もう無いだろう。だから落ち着くんだ、な？』

男性は武器 剣を遠くに投げた。腰から抜いて地面に置くだけでは足り無いと思ったのだろう。

「あっ……、そっそのすいません！ 俺そのっ……」

『ん？ 落ち着いてくれた……とは言えないかもしれないが、意味は分かってくれたのか？』

「……キュウ？」

「すう……ふう、いえ、すいませんでした。そういう事をするような人なら、そもそも助けてなんてくれいていませんよね……」

(この世界の人間つてのを悪く考えすぎてたな……。少なくともこの人は俺達をあつての犬から助けてくれたんだ……。そこだけは信用していいはず)

『やはり何を言つてゐるのかは分からないが、落ち着いてくれたみたいだな』

「それで……。あの変な質問なんです、ルクータさんはどうして……。えつと、ここに……。いたんですか？」

(ボディランゲージつて言つのかな？ 確かこれはやったらダメな場合もあるらしいけど……。この際仕方無いだろ)

『お？ ふむ、頭を傾げ、地面を指して、そつそこを指すのか！？ つと……。それに歩く真似か、なるほどな』

男性は彼の言いたい事が分かつたのかしきりに頷いている。

ちなみに男性が驚いたのは彼が悩んだ時に手を腰に当てたからだ。

(おお！？ 流石世界共通なボディランゲージ！ すげえっ！？ 異世界でも使えるなんてっ！)

『……。ああ、その通りだ。オレはトイレに行きたいと思つていたところだ……。こんな雰囲気なものだからな、行くに行けなかつたんだが、な。流石野生児、我慢してたのがバレていたか……。悪いが森で少々、穴を掘つて用を足させてもらつよ』

「つてあれ？ どこ行くんですか？ ボディーランゲージで返してくれるんじゃない？」

『はっはっは、心配してくれてるのか？ 安心してくれ、漏らしはしない……まあ、違うだろうがな。まあ、オレは剣が無くともあの程度の野犬に遅れは取らん。それじゃあ、行って来る』

(いや、何良い笑顔で言ってるんだ？ 意味は分からないけど絶対に勘違いしてるだろ)

「キユウ？」

「……うん、まあ悪い人じゃないと思う。それどころか多分かなりのお人好しなんじゃないかな？」

(なんとかしてあの人に、何かしらを教えてもらわないと。多分こんなチャンスは二度と来ない……。この森にもあんなのがいるって分かったなら尚更だ、出来れば付いて行きたいところだけど。言葉が通じないのがこんなに辛い事だなんて、どうにかなるなんて楽観視はやっぱり過ぎるとダメだな……)

「着いていかせてもらうためにはまず意思疎通……。そのためには、やっぱりボディランゲージか？ けどなあ、分かっているのか？ 他になんかあったか？ この世界のイエスノーくらい分かればまた違うんだらうけど……」

加藤 祐かとう ひろが頭を捻っている考えは、こんな状況であれば誰もが悩む事だろう。

そしてこの時、もう一人のヒトがいたのだ。

第9話 『 会話! 』

場面は少し変わって、彼らのテントから然程離れてはいない、しかし話し声程度ならば届かないくらいには遠い場所。

『さて、上手い具合に出て来れたが、どうしたものか……。野犬が吼えているのが聴こえたので思わず駆けてしまったが。あの青年は本当に捨て子からの野生児なのか？ いや、有り得ない』

ルクーツアは加藤の前では見せていない険しい顔色で何かを考える。

野生児でそういった例が発見されているのは幼子や幼児の場合のみ……。自然の動物達はある程度年月が経てば仔を独り立ちさせる。それはヒトの子を仔として見てしまった場合も同じ。そしてヒトはそうなってしまうえば普通の仔とは違い、生きていけない……。だから幼子のみ。彼ほどでは無いが、10代くらいのも例はある……。死体として

『だが、それは発見例が無いだけ……。そうとも言える。しかしあんなモノを作れるようになるものか？ そもそもあの年齢まで親となる動物が付いていてくれたとして……。あの跳ねリスがか？ 有り得ない……。どうやっても跳ねリスではここらに生息している敵に、それどころか野犬にすら敵わない。逃げる事は出来るかもしれない

が、彼を護る事は不可能だ』

自分が知っている知識を思い出しながら、それと照らし合わせて見るものの、どうしても納得がいくものは出ない。

それを深く考え込もうとしようとした時。

だが現実、彼は生きていた。どれほどの幸運だ？捨てられてから護ってくれたのはあの跳びリス……？ どうやって？ そしてその幸運を持って今日まで生き残ったとしても、あの住処……

『あの住処の近くにあった小屋を参考にして作ったとでも？ いやだが……、っと結構経ったか』

そろそろ戻らなければ……。折角警戒を解いて貰えたと言っのにまた要らぬ警戒を抱かせてしまうかもしれない……

今はそれを深く考えるべきではないと今更ながら気が付いたのだろう。そうしてゆっくりとテントへと戻っていった。

「んー、どう表現すれば伝わるか？ それが問題なんだよ、先輩くん」

「キコ〜……」

加藤が小動物せんぱいに向けて、何かを言っていた時。ルクーツアは戻って来た。

『すまないな、なかなか途切れなくて……いや年は取りたくないものだな!』

ルクーツアは言った事が恥ずかしくなったのか、顔を少々赤らめた。しかし当然ながら加藤にはその言葉の意味が分からない。

そのために首を傾げるといふ、加藤のような青年には少しばかり似合わない所作を用いながらも疑問を投げ掛けた。

「あ、と? ……おかえりなさい? えっと、何処行ってたんですか?」

……んっ! しかしやはり分からんな……、だが、先ほどから聞いた限りでは何度か同じような言葉、いや単語か? それを口に出している……、やはりなにかしらの言語

『さて、カトー。君に質問がある。言葉は通じないだろうから……。先ほど君がやったような感じだね。……ん?』

先ほどカトーがやったのはどういう事だ!? 名前は分かる……動物でもソレに反応するし、それに対して声を上げることがあるらしいが……。……言葉が通じないと分かったら、アレで意思疎通を取ろうとした? ならば……

先ほどまで、目につくもの、それも形として残っているものを疑問を解消するための材料としていたルクーツア。

そして気が付いた、それよりも重大な事実。それを確認すべくルクーツアはぎこちなく体を動かし始める。

『カトー、きみは……、どこから……、来たんだ……？』

「え？ えっと俺を指差して？ 色んな所を指差して？ 歩く真似をして？ 首を傾げる……？ ああ！ ボディランゲージ！？ つてことは……」

これで通じればいいのだが、例え通じなくともオレからも意思疎通を試みてるってのは分かってくれるはず……

ルクーツアの動作によって、加藤は今までとは少しばかり違う声を出す。何処か必死ささえ垣間見えるほどに。

「……、……つそうなんです！ 俺はこれからヒトを探そうと思っ
ていたんですよ！ だからこうやって準備してたんです！」

反応したか……今の動きで言いたい事が通じたとは思えないが。
だが、これはもしかすると

「それで、その……、出来れば俺も一緒に連れて行って欲しいんです！ その、えっと……、だめですか！？」

『おいおい、そんなに興奮して言われても、何を言っているのか分からないんだ。まずは、落ち着いて……身体の動きで……教えて……
…くれないか？』

「あつ、すみません、分かりませんよね。つと？ 胸を指して……
どうどう？ んで……腕と足を動かしたのを指して……ルクータさん
を指す……耳を傾げる真似をして……頭を下げた？」

どうだ？ 出来る限り、動作を分けて試してみたが……

「どうどうってのは興奮した動物を落ち着ける動作のどうどうってのに似ているとかソレだ……。腕と足を動かして……。動作か？ んでルクータさん……。さっきは俺を指してたから自分にとって何か？ そして耳を……。聞く？ んで頭を下げるったらお願い？」

加藤はルクーツアが行った動作を、軽く腕を動かしながらその意味を想像していた。

それらの様子を見ながら、いやそれしか考えてはいないのだろう。ルクーツアは真剣に加藤を見つめる。

何かを言ってるな……。先ほどと同じ単語が聞こえた。なにやら考え込んでいるようだから……。オレの言いたい事を理解しようとしてくれているのか？

「えっと、俺は……。もう落ち着きました……。大丈夫です……。？」

自分を指指し……。お、これは俺がやったのと同じ、そして両手で円を頭の上に作った？

『あぁっ、カトーは……。落ち着いて、まる……。大丈夫ってことか！』

つつい、ルクーツアは大声を上げてしまう。その声に小動物せんばいが驚いたように首を左右に振っているが、気にする事もなく喜びに浸る。

「キュッ？」

すごいぞ！ まさか完璧に通じるなんて！

思わず握りこぶしを握りながら目を瞑ってしまっていたルクーツア。

しかし、そんな様子のルクーツアへと加藤がおずおずと声を掛けてくる。

「えっと……通じたんですかね？ まるってこっちでもオーケーとかそういう意味になってるのかな？」

それは常の彼らしくない感情表現方法だったのかもしれない。

ルクーツアは若干顔を赤くしながらも、声を掛けたというのに無視する形になっていた事で、不安そうな声を発した加藤へと謝罪する。

『あ……、んん。すまないな、どうもオレが興奮してしまっていたようだ』

やはりカトーは普通の野生児とは決定的に違う。野生児はそもそも庇護する動物によつて気性も行動、知能も変わるが……。いくら跳びリスが賢いとは言え、これは出来ないだろう。これは彼が何処かココじゃない場所で得た能力だ……。きっと彼は野生児だが野生児じゃないだろう……

『君は、カトーは人間か？ 姿が似たようなモノとはいえ違う場合があるからな……。本当に、なんでだろう……。だが、君は人間だとオレは思う、思いたい。だから言おう』

カトーは普通の人間だ。ならこのままココにいるのは危険だろう、野犬の件もそうだ

ルクーツアはいろいろな事を思い出す。それは先ほどの事か、それとも別の事か。

しかし共通しているのは守らねばならないという感情のみだ。

『カトーに、お願いがある……オレと……一緒に……来ない……か？』

「んと……俺で。頭を下げる。自分を。自分の両手で握手。そのまま歩く。首を傾げる……か」

出来るだけ今まで使われた動きでやってみたが……我ながら首を傾げるのは厳しいモノを感じるな

「つと？ 俺……いやカトー。お願い。ルクータさん……いや逆で自分か。握手。移動。疑問。か？」

『……………』

何かを考えている加藤、それを静かに待つルクーツア。しばらく経っただろうか。

いきなり加藤が何かに気が付いたように、大きな大きな声を上げた。

「っ！ 本当ですか！ 合ってるか分からないけど。カトーにお願い、自分と来ない？ でいいんですよね！？」

『うお！？ ……落ち着け。オレに……身体の動きで……教えて………くれないか？』

「あつ、えつと。俺は……ルクータさん……と、行きたい……お願い……」

これは、カトー。オレと。一緒にっ！ これもさっきと同じ！
……行く。お願い！

これは可能性ではなく、確実に会話が行える、つまりは人間であるという事をルクーツアに認めさせる事を決定付けたと言っているだろう。

少しの疑問すらも解消できたのか、ルクーツアは顔に似合わないほどの満面の笑みで大きく語る。

『そうか、来てくれるかつ！ 良し、そうと決まればこの身体の動きでの会話じゃ色々と不便だからな……ゆっくりとでいい。オレが旅の途中で言葉を教えていこうか！ そうだな、まずは単語からになるな！』

「うわっ！ ルクータさん、いきなり驚かせないで下さいよ……。それにボディランゲージじゃなくなったからさっぱり分からないし」

『ははっ、不思議なものだ。言葉はさっぱりだが、君は私が大声を出した事に怒ってるのが分かるよ』

野生児はヒトでは無く動物だと考えていたからか？ カトーがヒトと同じくらい頭が良い、いや普通の、ただ言葉を通じないだけの人間だという事を確認できた途端にまたコレか……。まったく俺は

……

『すまないな、許して……くれないか？』

ルクーツアはお願いの動作よりも深く頭を下げるのを2回、そしてそれよりも浅いのを1回行った。

「んと？ ああ……、大丈夫。これだけでいいですよね？」

『ははっ、そうか。私の最低な考え事そのものに対してでは無いだろうが、それでも有り難いものだ』

「ってもう真っ暗じゃないか……。一応の約束？ みたいな取れだし、何より今日はどっと疲れた。ルクータさん……俺は……もう……寝ますね？」

ふむ、カトーは、空を指して……暗い？ そして住居……目を瞑る？

『ああ、そうだな。そうしようか、オレはあちらに馬を止めているのでね？ あいつをこちらに連れてきてから寝かせてもらうとする』

加藤はルクーツアの言葉が分からなかったが、それとなく分かったのだろう。

軽く頭を下げると、小動物せんばいと共にテントへと向かっていった。

ふう、しかし……。出来るだけあの辺りを通らないために、こんな遠回りをしたが……。おかげでやり直せる……。いや、この考え方がダメだな。うむ……楽しくなりそうだ

ルクーツアは過去に思いを馳せながらも今後の事を想像し、今までの加藤を安心させるための演技とは違う、本当の笑みの形のそれを口元に軽く描いた。

いや、しかし行くとは言っても、スグに移動をするほどでも無い
か？ もう少し遣り取りを出来るように……。いや……。まあ、今夜
はもう寝るとしようか……

そして、この時からルクーツアの受難の日々が、幸せという名の
苦勞を背負う日々が始まるのだ。

『いいか？まずはマル……、これは「大丈夫」……とか「わかった」……だな。こつ発音する、……やってみる』

「えーつと……『たじよぶ』……どう？」

『ふむ、少々舌足らずな印象を受けるが……。まあ、通じないこともないか……。最悪マルをそれと同時にやればなんとかなるだろう……マル……、と言えるな？』

加藤は、ルクーツアと自分、お互いに共通した認識の行動。つまりはボディランゲージで表している異世界の単語を少しでも覚えようとしていた。

（大丈夫……そしてちよつと悩む、かあ。つまり微妙って事ね……）

「やっぱり、異世界語って難しいなんてもんじゃないな……」

（とは言え、ルクータさんは、なんでか楽しんでるっぽい。なら思う存分教えてもらうぞ！ 思いつきり俺の得意分野だっ！ 迷惑を掛けてやんよ！ ふっふっふ）

加藤の進歩具合に悩みながらも、ルクーツアはそれを苦には感じている表情ではなかった。

この世界に来てからの加藤は、迷惑を掛ける事に戸惑いを覚えにくくなっていった。それだけであれば褒められたものではない。しかし同時にその表情から窺い知れるのだ、その分だけ成長してみせると。

『よし次は「歩く」だな。つておいおい、聞いているか？』

以前の世界での事を思い出していたのかもしれない。少しばかり難しい顔をしていた加藤。それは言葉に悩んでいる色とは異なるものだった。

謝罪の言葉を慌てて返す加藤に対し、ルクーツアは何故か優しく笑みを浮かべて何事かを返した。

「あつ！」「ごめん」……」

『気にするな、丁度いい時間だからな。ふむ、これも次の教える事に追加すべきだな……。んんつ。ごはんを……。食べよう……。か？』

（えつと？ 木の実にアレはルクータさんの持っていた干し肉っぱいのに水の入った水筒。そしてそれを食べる振り……。疑問。か……。つてことは）

「あー、なるほど、そういえばもう昼時ですかね？ 分かりました

！ あーつと『たじよぶ』です！」

『ふむ、そういえばさつきは大丈夫……。としか。その一言しか繰り返して貰えてなかったな……。後で、もう一度だな』

ボディーランゲージ……肉体言語はただひとつの動作で様々な意味を生み出すのが利点であり、最大の欠点でもあった。似たような言葉でも微妙に意味が異なる、これを表現できることが言語の強みであろう。喜怒哀楽だけで済むような単純な世界ではないのだ、人間というものは。

「あれ？ マルって意味の感じなんじゃなかったっけ？ なんか悩んでるんだが……」

「キョ」

「おっと、すまない。「大丈夫」だ。さあ、飯を食おうか？」

（お？ やっぱり昼飯を食べる準備をしてるから、さっきので当たったのか。じゃあなんで悩んだんだろ？）

「っと貰ってばかりじゃなんか嫌だからな！ ルクータさん、この小さな玉葱っぽいのも美味しいですよ！ ってあー、……コレも……食べる……美味しい……よ？」

「ん？ おお、小玉葱じゃないか！ これはイイぞ、こいつは良い酒のツマミになるんだ……といかんいかん」

（喜んでるっぽいし、伝わったって事でまあいいのかな？）

彼等を通じてるか通じていないか分からないが、恐らくは通じているだろう。

そう思えるやり取りを続けながら昼食を摂った。

『食べた食べた……、やはり干し肉だけではなく、生野菜とかも食

べるとより一層美味しく感じられるな』

屈強な肉体を持つルクーツア。それに似合う顔立ちをしている彼も食事時だけは子供のようにな无邪気に笑う。

その笑顔は加藤と小動物せんばいが彼を信じられると思えるものとして大きな働きをしていた。そのおかげか、加藤の口調も通じないと分かっているとは言え、彼を目の前にしても徐々に砕けてきていた。

「いやー、やっぱり干し肉？ これ美味しいな。いつも同じ木の実とかばかりだったつてのもあるけど……美味しいかったなあ」

「キョ〜」

加藤と小動物せんばいが食べ終わった後、それを思い出して笑い合っていた時。ルクーツアが声を掛けてくる。当然ながら言葉の意味は分からない、しかし彼は体の動きでそれを伝えてきてくれていた。

『さて……カトー、腹も満たした事だし……そろそろ。出発の……準備は……できてるか？』

（俺を呼んで？ 満足そうな顔をして……お腹を摩る。んで驚く？ いや太陽を見て気づいた？ ……んで歩く真似……大きな袋に干し肉とかを入れ込む真似……そして疑問、いや、この場合は提案か）

「『たじよぶ』……分かりました。そろそろ行くんですね？ 手伝う……ことは……ありますか？」

『ふむ、いや。いららないな……オレが……後はする……から大丈夫だ。カトーが、渡したモノ以外にも持つて行きたいのがあれば別だな？』

(首を振っている……俺に特に何かして欲しいってわけじゃないのか。てことは心の準備的な何かかね?)

「『たじよぶ』……ここは思い出はあるけど、そこまでじゃないから。あーけど、テントとは二度目の別れか……、別れを言わなきゃいけないな、作り手としてっ」

加藤はボディーランゲージを介さずに言う。それはルクーツアには通じない。だが何かをしたいのだと、その程度を察せられる流れは出来上がっているのだ。

『そうか、多少はあるだろうが、そう時間は掛からない、か。……それではオレの準備が整い次第ゆっくりとだが、行くのでしょうか』

「さて、何か言ってるけど、俺に対して言ってるという感じじゃないからな……。先輩！ テントのどこ行こう？」

「キュツキュ」

加藤は小動物せんばいと一緒にテントに向かって歩いていき、ルクーツアは旅支度のために予備の水筒に水を汲みに行っている。

「ふう、なんだかんだで、コイツともそれなりの付き合いだったな……。ありがとうテント！ お前を作った経験は無駄にはしないさっ！」

(しかしなんだかな？ テントってか自分が作ったモノに対して変な愛着を持つようになった……)

「キユク〜」

「先輩もここは嫌いじゃなかったのかね？いつかまた作るのもよさそうだ……」

『……い！　おい！　……そろそろ行くぞっ』

旅準備は水の補充だけだったのか、案外早くに整ったようだ。少しばかり離れた場所に馬を引いているルクーツアが手を振っている姿が見えた。

「……っと、呼んでるな。先輩、行こうか！」

「キユツキユ！」

『よし、そろそろ行くぞ？　「大丈夫」か？』

「『たじよぶ』です。ルクータさんから貰った水筒2つにもちゃんと水は入ってるし、うん」

『そうか、うむ。ちゃんと水筒に水を入れてあるな？　渡した袋にも木の実や小玉葱、干し肉も入ってる……』と』

（確認してくれているのかな？）

『よし、これで万が一逸れてしまっても、オレが探す間くらいは保つだろうっ……』』

（と、急に頷いてる……合格なのかね？ってなんだ合格って）

『カトー、出発……しろうか？』

ルクーツアは首を動かして、前を向く。そして腕を回すようにして、少しばかり歩を進めた。

「あ、『たじよぶ』分かりました！」

「キユーー……！」

『ははっ、すまないすまない。跳ねリス君も準備はいいかな？』

加藤とルクーツアがいよいよ進もうとした時、小動物せんばいが鳴き声を上げる。それに気付いた加藤が手を差し伸べる。少しばかり気を害した風であったが、特等席かたのうえに乗った小動物はすぐに上機嫌なまに笑う。

「キユツキユ〜」

『はっはっは、それでは……、改めて行くとしろうか！』

（なんだろう、気のせいカルクータさんって、俺よりも先輩の方が意思疎通が出来てる感じがする……）

「ハッ！　これが嫉妬！？」

『どうかしたのか？　急に何か言ってるが、忘れ物でもあったのか？』

「あ……『たじよぶ』『ごめん』なんでもないです！」

『ふむ、それじゃあ……行こうか！　しかし話せる言葉が2つって

のもアレだな。道すがらにも教えてくとするか……」

(あ……今大きな声で言ったのって場面から考えて「出発」的な感じの掛け声かな? ……よし!)

「『行くー』!」

『おお!? 少しばかり違うが、やるじゃないかっ!』

「お? 喜んでるっぽい? 通じた? 当たった?」

『そんな感じでやっていけばいいだろう。何、旅は長いからな。ここから目的の街に行くための街道までは大体1週間ほどかかるし、そこからまたそれなりだ。ゆっくりと覚えていってくれればいい。さ、行くっ!』

「キュツキュツ!」

「よしっ『行く』!」

加藤達2人と一匹はゆっくりと、テントから離れていく。

これが異世界を巡る、加藤にしてみれば二回目の旅の始まりであり、加藤の新たなる道への一歩だった。

第0話 『勉強!』

「ここでは加藤がこの世界の言葉を会得していく様を見て行くよ」

「ルークタさん、『あれ』『なに?』」

『あれか?あれは……』『鳥』だ。』『とり』……いいかな?』

「加藤の言っているのは、なんと発音するのかという質問の意味で二人では通っているよ」

「『とり』『鳥』……、よし!』『たじよぶ』『!』」

『いい感じじゃないか。このままだと片言でも話せる日は遠くないかもな?』

(いい感じだ。どう言つのか教えてもらおう流れに持っていけるし、イエスノーくらいなら普通に分かるし言える。)

「ルークタさん、『鳥』……えつと飛ぶ……』『なに?』」

『ん……鳥が?両手でバタバタ?ははっ。飛んでいるって事かい?あの動きは「飛ぶ」……』『とぶ』って言うんだ』

「『とぶ』『飛ぶ』『!』『鳥』『飛ぶ』『!』」

『うんうん、そうだね?鳥が飛んでいるね』

「こうして彼等は加藤が質問をして、ルクーツアがそれに答えるという流れを会得していった」

「時は流れて、そんな事をしながらもようやく道と言えるだろう場所に着いた頃」

「ルクータさん、『ここ』の『道』は『どっち』に『行く』の？」

「うん、オレ達がこれから行く街には右へ行くんだ。こっち……」
「みぎ」……「右」だよ」

「『だじょぶ』……『じゃない』わかつた』。『みぎ』に『行く』んですね？」

「『そうなるね、いずれは方角とかも教えないといけないかもな』」

「キユツキユ」

「ふう、先輩どうよ、俺の成長率！」

「俺の秘められた才能が開花していくぞ？ 凄くね？」

「キユ」！

く別に秘められていた訳ではない、彼のいた時代では彼の年代の子ども達は皆さまざまな言語に触れて、尚且つそれを習得していた。その経験が新たな言語にも適応されているのだろう。

『ここからは馬に乗ってもオレが引いていける。「乗って」みるかい?』

「『乗る』って『だじよぶ』《いい》』んですか!? やった! 『乗る』ます! 先輩も来いよ! 乗馬だ乗馬!」

「キユク!」

く時は更に進む、彼等が街へと続く道を進み始めて5日ほど経った頃だ。

『さてカトー、「今日」は「この辺り」で「寝る」と「しよう」「か』

「『分かった』ました『この辺り』で『寝る』ん』ですね?」

うん、尖った石とかも無いし『ここ』なら『寝る』《ねて》』も『大丈夫』そう『ですね』?」

『そうだね……。それじゃ、準備が終わったらいつも通りに勉強だな?』

（くそっ！楽しそうな顔をして！ったくいきなり難易度上げすぎなんだよ！）

く彼がそう思ってしまったのには訳がある。

ルクーツアは加藤が覚えただろう単語を多く使った物語を自分で作り、それがどういったものだったかを聞いてくる、というのを始めたのだ。

そしてソレは加藤には難しく、ルクーツアには楽しいものだった。く

『今日はオレの自信作！その名も「鳥と鳥」！』

登場人物が鳥ってだけで、あとはただの会話なんだけどな！』

「ええい分からんわ！』早口』』止めて』ろっ！』」

『ははっ、単語自体は変わってないけど、言い方が……なんだろう？遠慮が無くなってきたな？いいぞいいぞ、その方が会話は覚えやすいだろうしな』

「くそお、』早く』』はなし』』を』話す』てくれよ……悩んでる間にルクータが寝てるなんてのはもう御免なんだよ」

『そう「急ぐ」な、それじゃあ「始めよう」か。あるところに……』

くそして街道を進み始めて4週間ほど経ったときのこと、街に着く

前日だ。く

『明日には街に着くと思う。かなり遠い道のりだったが、普通の人間にはこちらの方が今なら安全……。』
『というかオレが近い方を通りたくなかっただけなんだが、まあ……うん』

「『良く』『分からない』ってば。『何で』『そんな』『回り道』を『通った』んだ？」

『おいおい、その回り道のおかげでカトーは野犬にやられずに済んだんじゃないか。』
『むしろ感謝して欲しいね？』

「くそっ！言い返せない！」

「キユウ……？」

「って『違う』だろ！俺が『聞きたい』のは『それ』じゃ『違う』ない』って！」

『分かっている。だけどこれは説明が難しくくてな？』
『今の会話できるかできないか程度じゃ多分言っても分からないし、何より人名や地名とか言っても何がなんだか分からないだろ？』
『だが約束しよう、俺はカトーの味方だ。それは覚えていて欲しい』

（なんなんだ？このくらいの年齢の人って研究者のおっさんといひ、ルクータといひギャップが激しいのはお決まりなのか？）

『まあ、そんな事は今はいいんだよ！明日には街なんだ！凄いぞお、

カトーが見たら驚いて失神してしまうかもしれないな!』

「所々まだ分からないけど、まあ……、『それは』『楽しみ』だね。『楽しみ《きたい》』させて『する《もらう》』よ!」

(やっぱり行き成りコレだもんな?しかし……何かあるのか? それにルクータの言う人間ひとっていう単語……他の意味合いもありそうだった、これに係るのか?)

『 ああ、楽しみにしてくれ。さて、今日は街に行く際に気をつける事をおさらいしておこうか、まずは……』

くそして翌日、加藤かたは知ることになる。

曰く人間は人間、それは変わるものではない。良い事も悪い事も…

…)

第0話 『勉強!』（後書き）

次回第2章、第1話からは『』の異世界語粹を取り外して全て「」で表記します。

全てではないですが、大事な部分は通じている。

そういった感じで取っていただけると有り難いです。

第1話 『開門!』

「さあ、到着したぞ!ここが目的の街……、人間の街『サツクル』だ!」

「着いたって……いや、確かにそうだろうけど。どうやって街に入るんだ?」

「確かに街には着いただろう、彼等の前には石を積み上げて出来ているだろう防壁が街を囲むようにグルリと立っており、門には番をしているだろう人が立っていた」

「どうやってって、そんなの普通に門からだ。」

「いやさ?そうなんだろうけど、俺が行っても大丈夫なのかな?って事をだね?」

「ああ……、そういう事か?」

俺がなんのために遠回りをしてでも、ここへ来たのか……。

それはここ以外はそれぞれ厳しく管理されている。とでも言えば難しい言葉よりも今のお前でも分かるかな?」

「管理?んーっと、ああ……、法があるって事か?」

んでそれがあるから困るって事は……あれ?」

(まさか……まさかっ!?!いやでも……そうだよ、ルクータがそんな……)

「何を勘違いしてるのか分からないでもないが、俺は別にお尋ね者じゃないぞ？」

それと、法って言う言葉はそう言う意味だって教えたが、意味も分かるとは……さすがだな？カトー？」

「……へ？流石って、そんな照れるじゃないか……ってそうじゃないか！」

「ふう、昨日にも言っただろう？色々と面倒な事なのさ。」

これは言っても今まで一人、いや跳びリス君とだけで生きてた君には理解できないかもしれないからね？」

（あれ？そう言えば俺、話せるようになってから異世界から来たって言ったっけか？

ある意味この世界ではルクータの言う通りではあるんだが……）

「いや、ルクータっ！確かにそうかもしれないけどさ、実は……」

「っと、門の受付が空いたな。どうしたカトー、行くぞ？」

「……、いやまあいいけどさ。いつでも言える事だし、ここで言う事でもないだろうし？」

「キュツキュ？」

「何をいきなり不機嫌になってるんだ？理解できないってのが馬鹿にしてるように聞こえたなら謝るよ。」

そうだな、何か旨い物を食おう、そのためにまずは街へ入ろうじゃないか」

「はいはいつと、てか本当に大丈夫なんだろうね？いきなりあの門番してる人が持つてる槍？でブツスリとか嫌だぞ？」

「だから、そんな事はないから……、ここは無法の街とも言われているが、そういったモノが無いって言う意味なんかじゃないんだぞ？」

（なんだよソレ！？初耳なんですが！？無法って！？マジで怖いところなんじゃ！？）

「加藤かれが悶々と考えている内に、ルクーツアが門番と話を着け街に入れる流れになっていた」

「さて、行くぞ？つておいおい……初めての街だから緊張してるんだろうが、そこまで硬くなるな。」

「色々と不安もあるかもしれんが、オレがいるんだ、何も心配はないさ」

「ああ、いや。ごめん……、つてもう入れるの？もうちょっと身分は〜とか、武器は預かります〜とか、そういうのは？」

「ははっ、王城とかならまだしも、街に入るのでそこまではそうそうないぞ？」

「まあ、この街以外では無いこともないがな……」

「キユウ〜」

「はあ……、先輩までそんな目で……分かったよ。行きますよ、入ればいいんですよ！」

「まったく……、跳びリス君の方がよっぽど度胸があるな？
跳びリス君、教育を間違えたんじゃないか？」

「キユウ……」

「ぐあ！？俺の威厳がつ！」

「彼等は軽口を叩きながら、無法の街『サツクル』へと足を踏み入れて行った」

「お、お、お、お、お……うん、やはり聞いていた通り、
良い……」

「へえ……、これが街かあ」

「キユツキユ」

「お、先輩も驚いてるのか？だよな、意外と綺麗だし、無法とか
言われてビビったけど、そういう感じもしないし……」

「ははっ、無法ってのはそういう意味じゃないさ。

飯……の前に宿を取るとしようか。そうだな、そこか飯屋にでも行

ったときにならスグ分かるさ」

「なんでそこだと分かるんだ？」

「まあ、例えこの街とは言え、クセつてのはそうそう抜けないって事だよ。」

「ここは普通の人間が多い地域だから尚更だろうな」

「……？前々から言ってたその『普通の』ってなんなんだ？」

「……、それは後でゆっくり教えるさ。さっ、宿屋を探そう」

（なーんかな？まあ話してくれるって言う事だし、今はいいか……）

「この街、『サツクル』は防壁に囲まれた街だ。」

「中心へ行くほど街並みは古いモノになり、防壁に近いほど新しいモノになっていた。」

「恐らく幾度か街を拡張したのだろう、そして彼等が向かっているのは比較的防壁に近い位置にある場所だった」

「ここかな？聞いていた宿屋というのは……」

「へえ、結構綺麗なところばいな」

「キユク」

「さあ、入ろうか？……すみません、部屋を借りたいんだがっ！」

「はいはい、そんな大声で言わなくとも聞こえとるよ」

「ルクーツアが大声で呼ぶと、この宿の主だろう年配の女性が出てきた」

（あれ……？）

「ははっ、すまないな。それで部屋を取りたいんだが空いているか？」

「ああ、旅の方かい？部屋ならあるよ、個室部屋を1室でいいかい？金が無いってんなら、大部屋になるんだろうが……生憎ウチにはそれが無いんでね。」

もしそうなら他所の良いトコを紹介するけど、大丈夫かい？」

「ああ、個室を1つ頼む。金なら心配いらんよ、それくらいはあるからな？」

「はっは、すまんねえ。こういう街だから仕方無いかもしれんけど、文無しってのも少なくないもんでね？」

「いや……、それは仕方の無い事だろう。つと、それより部屋は何処かな？」

「はっは、そうさね。んーと？ああ、6号室だね。ベットが2つあるし、丁度いいだろうさ」

「それはいい、そこで頼むよ」

「はいはい、ちよいと待つとくれ。」

「おーい！ラルー！お客さんだよっ！案内してさしあげなっ！」

「女将……と言って良いだろう宿の主に呼ばれたのは、加藤よりも幾分か若く見える女の子だった」

「はい！つと、ようこそ！お客さん。アタシはここ『砂漠の水亭』の娘でラルって言います！」

「自己紹介しろなんて誰が言ったんだい！案内しなつ！案内！」

「うひい！ごめんなさい母さん！つて………すみませんお客さん。えっと、6号室ですね？こつちですよ」

「すまんね、お客さん。こいつはこういう奴でねえ」

「ははっ、いいさ、元気な娘さんじゃないか。それじゃあ娘さん、案内を頼むよ」

「むう、おじさん……アタシはラルっていう名前が……」

「ラルっ！そんなのはいいから、さっさと行きなっ！」

「ここが6号室ですね！この部屋はいいですよ！2階の部屋だから陽も良く当たりますし！それにですね！個室のベットはぶつかぶかなんです！ウチの自慢なんですよ！えっとですね、それに……」

「ああ、いい。もう分かったから。
つと案内ありがとうな？お譲ちゃん、これはお駄賃だ、女将さんに
は内緒だぞ？」

「だからアタシはラルって名前……いえいえ、当然の事ですから！
それじゃごゆっくり〜」

〜ラルという少女はお駄賃、チップを嬉しそうに受け取るとさっさと
と部屋から出て行った〜

「ふう、本当に元気が……うん、元気のある娘さんだ」

「キユウ」

「でだ、カトー。さっきから何を黙ってるんだ？もしかして女を見る
のは初めてだったか？」

「違っつて！……そうじゃなくてさ」

「ほお？冗談のつもりは無かったんだが、そうか女性も知っていた
か……」

「うん、ルクータには言っておくけど、俺はこの世界の人間じゃな
いからな」

「そうか、この世界の人間じゃなかったか。なるほどな」

「ああ、そうなんだよ」

「……………」

「……………どうした？」

「いやっ、驚けよ！そこ大事なところだろ！？
あっさり言った俺も俺だけど、普通驚くだろ？『ばっ、ばかな！？』
とかさっ！」

「そう言われてもな？……………そうだ、それを説明するためにも、それはひとまず置いておこう。

そして……………何故さっきから黙っていた？具体的には女将さんを見てからだ」

「いや措くなよ！ってあー……………、うん。

だってさ、あの女将さん？とあの子……………耳があつたぞ？」

「そりゃ耳はあるだろうさ、人間なんだから」

「おい、分かかって言ってるだろ……………」

「ははっ、そうだな。その通り、彼女達には獣の耳があつたな？俺やカトーとは違う耳が……………な？」

「そつだよ！何だあれ？」

どう見たって、この世界は俺らの時代で言えば中世、それよりも下かもしれないってのにコスプレなんてのがあるのか？」

「コスプレってのが何かは分からないが、そういうカトーも分かってて言っているんじゃないか？」

「……………分かってるって訳じゃないよ、ただもしかしてって」

「そのもしかして、それが正解だと言っておこうか。
彼女達は普通の人間じゃーない、そう……ここが無法の街と言われ
る理由でオレが驚かなかつた理由でもある」

「獣の耳を持った人がいる事が、無法の理由？ってそれと俺の異世
界って話とどう関係してるんだ？」

「焦るな焦るな……、そうだな。

飯時にはまだ時間があるし、話しておこうか……。

カトーの言うところのこの世界、異世界の事を簡単にね？」

「キユ？」

「この世界の事、ねえ……？」

「加藤を驚かせた一つの事実、人間と同じなのに少し違うヒト達。
それこそがこの世界の問題であつた」

第2話 『講釈!』

「さて、何から話したらいいかね？」

「知らんがな、俺はこの世界の事なんてさっぱりなんだからさ……」

「キユク〜」

「おや？飛びリス君から聞いていないのか？」

「それは冗談か？それともマジなのか？俺が動物と同じだと？」

「キユクー!」

「って、違う違う！先輩を馬鹿にしてるわけじゃないって！
いてえ！引つ搔かないで！」

「ははっ、飛びリス君も許してやってくれ。オレもカトーも冗談だ
よ。」

「だが……、すまないねカトー、事実としてオレはそう思っていたん
だ。」

「ちょっと前までね？」

「は？まじで？」

「ああ、そうだ。」

「その訳もこれから言う事に関係しているんだ、だからまず聞いてく
れないか？」

「いや、聞かないなんて言ってないし……まあ、うん。お願いします」

「うん、それにはまずこの世界の形から、だな」

「世界の形？なんていうか分からんが、それをこれから教えてくれるんじゃないのか？なのにならずって？」

「ああ、そうじゃなく……地図っていうか、場所というか……」

「地図？世界地図って事？ああ、大陸とかそういう？」

「あーうん、そういう感じだ。」

「この世界は主に5つの大陸から出来ているらしいんだよ、いや出来ていた……」

「へえ、随分分かりやすいんだね。」

「っていうか、出来ていた？今は5つじゃないの？」

「そうだ、今は1つの大陸しかない、まあ一応5つなんだが……ほぼ離れていないからね、1つみたいなものだ」

「なんで5つの大陸が1つの大陸に……そこまで変化したんだ？地殻変動？大陸移動？そうだとっても急激すぎるし、人間とか生き残れないんじゃない？」

「地殻…変動？大陸移動？なるほどな、カトーの言うもの。それが原因かもしれない……」

「は？どゆこと？」

「ああ、5つの大陸は恐らく元々今とほぼ変わらない位置にあったんだと、今分かったんだよ」

「はあ……でも今では1つなんでしょ？なのに変わらないの？」

「そうだ、それぞれの大陸の周りには大きな氷山が……まあ、壁があっただろうだ。」

「それもかなり高かったという。」

「氷山ねえ？それがあるからなんなの？別に5つが1つにくっつての
と関係なくね？」

「あるんだよ、それが……そう。丁度この街みたいなものなんだ、
そして街に住んでいる人々は決して街から出られない。」

「だからほんの少し行った所にある他の街にも気が付かない……」

「あー、なるほど。そういうことね。」

「でも高いつても山みたいなものなんでしょ？誰かしら越えそうなもの
だけだなあ……」

「……確かにな。だがソレは今ほ措置しておけ、話が進まないからな？
ともかく、その山があつて人々は自分達の住む大陸だけだと思つて
いたわけだ」

「うん、それが5つあつたつて事でしょ？」

「そう、そして300年前にその氷山が突然崩れたらしい。まあ、
それでも今の状態になるまでにはそれなりに掛かつたんだろうが……」

…。
とにかく、きっとその原因は大陸移動とか地殻変動とか言うやつな
んだろうな」

「なるほど、そして他にも大陸があつたつて気が付いたと……」

「そういう事だな、いやあ5つあつたのが1つになつたつてのだけ
が長くなつてしまつたな」

「まあ、いいんじゃない？飯つても晩飯だし、多少遅くなつてもさ
？」

「キユウ！」

「ははっ、跳びリス君も大丈夫そうだね？なら続けるとしようか…
…」

「うんうん、んで？5つが1つにってのは分かつたけど、それと俺
の異世界の話、俺が動物みたいだと思つていた訳、んであの女将さ
んや女の子の耳の理由にどう関係あるんだ？」

「まあ、焦るな。ゆっくり順番にいこうか。

まず君の異世界から来たという事をオレが信じた訳からだが、これ
は簡単だな」

「簡単なのか？」

「ああ、簡単さ。さつきも言つただろう？5つの世界、いや違うな
……1つの世界が5つの世界だつたとね？

それが理由だ。我々は昔のその事を代々語り継がれてきているんだ。

考えても見てくれ、いきなり越えられない壁が崩れたと思えば、自分達とは違う姿をしたヒトが分からない言葉を話して来るんだぞ？世界は同じだったとしても、当時の人々にしてみれば、まさしく異世界人じゃないかい？

……他のヒトは知らないが、オレはね？……だからかな？」

「んー、そういうもんなのかね？まあ別にソレは俺としてもいいや。信じてくれるってんなら何の問題もないからね」

「加藤^{かれ}はそう言いながらも、顔には隠し切れない喜びの色が現れていた」

「……そうかい？それじゃあ次、君が動物と変わらないモノだと思っていた訳だ。」

これも簡単。

嫌な事だが、そういうヒトがいるんだよ。ヒトだが動物というね？それは捨て子なんだ、とは言ってもほぼあの女将さん達のようなヒトの子の捨て子なんだが……」

「女将さん達のようなヒトの子に多い？俺みたいなの？」

「ああ、違う違う。オレがカトーに抱いていた印象のソレがって事だ。」

言っただろう？捨て子だと、捨てられた子が動物に拾われて育てられる事が極稀にだがあるのさ……。そしてその子は野生児とも言われている」

「それが俺だと思っていたと……」

「まあ、最初から疑問はあったがね？」

その理由としてカトー……君の年齢、そして跳びリス君だ」

「年齢と先輩が？」

「野生児はある程度の年齢までしか生きられないと言われている。親、つまり動物の庇護が無くなれば簡単には生きていけない、そしてこの世界の動物には非常に獰猛で恐ろしいのがいるから尚更な？」

「なるほど、だから俺みたいなのはいないと思ったって事か」

「その通り、そして同じ理由で跳びリス君だよ。この子では君を護れないと思った。

事実として野犬という危険な存在として知られている動物ではかなり可愛い部類のソレにすら負けそうだっただろう？」

「うっ……あれは……その、俺が戦わないといけなかったんだろうけども……」

「キユウ……」

「いや、そう落ち込むものじゃないさ。

可愛いとは言ったが、それはオレを含めた戦いに慣れている人にとって、だ。

普通のヒトにはアレでも十分脅威なんだからな、……それは措いて置く」

「ん、話を逸らしてごめん」

「ともかく、その野生児の特徴としてヒトの言葉が分からない。そして聞いたことも無いような言葉のようなモノを話すと云われて

いる。

まあ、ソレは厳密には動物の鳴き声に近いモノらしく、言語とは到底言えないんだがな？」

「俺はこつちの世界のじゃないとは言え、ちゃんとした流れがある言語だったから違うと思ったのか？」

「まあ、それでも微妙ではあつたけどね。

あのテントだったか、あんなモノを作れるという事実や、助けたとは言え、オレをあつさり住処、いや住居に招いた事……会話を試みようとしていた事。

数えればキリが無いが、そういった点で君が唯の野生児ではないと思つた。

そしてそれは当たり前だったよ」

「まあ、そういつた子がいるつても分かつた。

んであの女将さん達……、あの人たちは？」

「そう、それがさっきの5つの大陸の話に最も関係している事だ」

「5つの大陸の話に、ねえ」

「さっきも言つたが昔は5つの大陸、それぞれで独自の文化があつたんだ。

それこそ言語に食文化、身分やら戦い……色々だ」

「うん、まあそうだろうね？」

「だが、今、言いたいのはそのじゃない。それこそがあの女将さん達なんだ」

「女将さんが問題？いや、いい人っぽかったけど？」

「……そうじゃない。5つの大陸で一応の頂点として君臨していた動物。」

つまりヒトなわけだが、それぞれの祖先………というのかな？それが違ったのさ」

「……っていつと」

「なんとなく分かったようだね？そうだ、オレらは猿。」

女将さんは動物、まあ猿も入ってるかもしれないが、基本犬や猫など………見た目で判断するしか無いからね。まあそれ以外にもいるらしいが」

「なるほどね、女将さんやあの娘さんは見た目からして猫って感じかね？」

「事実、宿の主とその娘の耳は、地球で言うところの猫のソレに近いものだった。そこから、この世界と地球はどこか似ている事が伺える。」

「さあどうだろうね？それは分からないよ、オレにもきつと彼女達にもね？」

「……話を戻そうか、1つの大陸にはオレら猿が、2つ目には女将さん達のような動物が、3つ目にはへびとか爬虫類、4つ目には鳥と、5つ目はそれら全てであり全て違う、そんな感じにまったく違う」

「4つ目までは分かったけど、5つ目？」

「5つ目こそがさつき言った恐ろしい動物のソレなんだよ。4つ目までのヒトは、猿を祖先としているオレらは当然として、言い方は悪いかもれないが、そのヒトが動物や爬虫類、鳥らの何らかを身につけているモノだと思ってくれ」

「ええつと？」

「つまりだ、大部分はヒトなんだよ。

ただ動物からのヒト……獣人と言われるヒト、女将さん達だね？女達は見たら分かったと思うが耳が特徴的、そして尻尾もある。爬虫類からのヒト、彼等は目が特徴的、そして爪や牙が発達している。これは他のヒトにも言える事だがね。

そして最後に鳥からのヒト、彼等はそのまんま、翼があるんだ。

それ以外はほぼ人間と変わらない、勿論違う所もあるけど……そこは今はいいだろう」

「なるほど、そういう事か」

「そして5つ目。そこにいたのは俺たちヒトとは違った進化をしたんだろうね？

まず、とにかく獰猛だ。言葉は無いし、交渉の余地もない。

モンスターと言っていていいだろう。

それに、かなり大きい奴もいる。姿は様々だ。

それこそ人間のように立っているものから、獣のような四足歩行なもの、爬虫類のようなものに鳥のようなものとかね？

知恵を進化させた我々がヒト、暴力に特化した奴等がモンスターと言っていていいだろう」

「モンスターってのには驚いたよ……まるでゲーム、いや違うか。

俺達の世界にも猛獣ってのはいたらしいし……昔は確かにそれが

モンスターだったんだろっな」

「加藤^{かれ}は野犬との遭遇を思い出しているのか、若干顔色を暗くしていた」

「まあ、つまりそういう人々がいるって事だね。

どうして5つの種族があるのか、それは分からない。きっと昔色々あったんだろうさ。」

祖先がどうのだって、皆違っつてのを理由付けするために、似ていると言われるものを上げているだけだしな？」

「最後は思いっきり投げっ放したな、かえって気持ちいいくらいだよ」

「ははっ、まあそういう訳で彼女達は獣人だね、だから耳はああだし、尻尾もあるんだよ」

「うん、それは分かったよ」

「しかし、アレだな？」

やけにアツサリと受け入れる……いや、理解しているな？」

「だから言っただろう？俺はこの世界のヒトじゃないんだってさ。

俺のいた世界、ちきゅうって言うんだけど、そこはココよりも色々凄かったんだよ。」

まあ、耳が特徴的な人間とかには驚いたし、どうやってそうなったのかってのは俺にはサツパリなだけだよ？」

「ははっ、そうか。特徴のある人間か……、そうだな。確かに人間だろっな。」

凄いな、カトーの世界ってのは、オレが悩みぬいて出したモノを遥かに越えた答えだよ」

「は？いやだつてルクータが言ったんだろ？耳が特徴的で尻尾がっつてさ？」

「その通り、昨日……カトーはオレになぜ遠回りをしたのか？って聞いただろう」

「あー、そう言えばしたかな？」

「おいおい、大事な事だったんで驚いたんだがなあ……。まあいい、それが関係しているんだ。そっちは長くなるからな……」

「いやあ……こつちも十分長かったと思うんだけども」

「むっ、これでも短くした方なんだが、長かったか？」

「そうでしょ？もう晩飯時をかなり過ぎてるぞ？」

「話を始める前は窓から見える空の色はまだ青も見えていたが、今はほぼ黒色だった」

「……そうらしいな」

「飯食いに行かない？その話は飯の後でっつてことですか？」

「そうだな、それじゃあ何か軽く食べに行くとするか……」

「宿から何までお世話になってる身としては、大変言いつらくはあ

るのですが……。
言わせて頂きます！何か軽くってなんじゃ！門のトコで旨いモン食
おうって言ったろ！楽しみにしてたんです！どうか旨いの食わせて
下さい！」

「おお！？ああー……、そう言えば言ったな……。
分かった分かった、旨い店を女将さんにでも聞いてソコに行くとし
よう」

「やった！先輩、旨いモノ食べるってさ！どんなのなんだろうな？」

「キユ……？キユツキユ」

「加藤かれらの話は小動物せんぱいには長すぎたのか、若干眠ねそうな声を返した」

「ははっ、ほら、カトーに跳びリス君。着いて来ないと置いて行く
ぞ？」

第3話 『疑問!』

「すまない、女将さん。

少し遅いが、晩飯を食べに行こうと思うんだ。ここらでオススメの店は無いかい？」

「おや、今からかい？ そうだねえ、今の時間だと大抵酒のある店くらいしかやっていないから……その子は飲めるのかい？」

「え？ 俺ですか？ 酒は……」

「ああ、こいつは意外とイケる口でね？ そこも含めてお願いしたいね」

「はっはっ、そうかい。いや悪いね……そうだねえ、ここの通りを中心に歩いていくと大きな三角の看板が見えてくるんだよ。

お兄さんの方なら分かんと思うが幹旋所を兼ねている酒場だね？

こういう街だからなのか、普通の店よりか料理の種類が豊富なんだよ、そこでなら、お兄さん達の好みに合うのもあるかもね？」

「なるほど、そういう事が……、まあ初日だしそういう所でもいいかもな」

(てか、ルクータがお兄さんって……いやまあ女将さんからしたら子供なのか？

いやでもなあ……あれ?)

「えっと幹旋所って……?」

「おや？坊やは知らないのかい？お兄さんと一緒にそういうもんだ
と思っただけだろ」

「ははっ、こいつはまだまだ半人前。それにそういう事は今のこ
ろ教えようとは思ってないんだ」

「そうかい？つてことは学者様とか目指してるのかね？つとすまな
いね！あたしとした事がお客さんを詮索だなんてっ、いやー、気を
悪くしちゃったかい？」

「いやいや、その程度の事で気を悪くするほど小さくは無いさ、オ
レもこいつもな。」

「そう言えばこの宿では飯は出ないのかい？」

「それなりに長い期間いるつもりなんでね、ここで食べられたら楽な
時もあると思うんだが……」

「うちでかい？ああ、言ってくれば作れない事もないよ。」

「あたしらが食べるご飯をちよいと増やせばいいだけだからね？ただ
し、宿代に多少色を付けて貰うよ？」

「おや？そんなのでいいのかい？別に飯代としてもいいんだが」

「はっは、今回の事もあるしね？まあ気にせんでおくれ、大した手
間でもないからね」

「なんていうか俺ってアレだよな、先輩」

「キユウ？」

「いや、やっぱ俺ってまだまだガキだなあってさ？」

「キユツキユ」

「加藤と小動物せんはいは話し込みだした大人二人から少し距離を取って、小声でぶつぶつと言っている」

「てか酒はあんまり飲んでないんだよなあ。祝い事とかで少しくらいだし。」

「いっぱい飲んだら酔っ払うんだよな？やっべ……面白そう……」

「へー、お客さんお酒飲んだことないんだ？アタシはもう飲んだことあるんだよ！ぶどうのお酒がおいしいんだっ！」

「……………」

「なに急に黙ってるの？アタシだよ、ラル。ラルだよ？」

「決して小娘だとか、お譲ちゃんって名前じゃないからね？分かる？お客さん」

「あーうん、分かるよ、お譲ちゃん？」

「……………」

「あれ？どうしたんだ、急に黙ったりして？俺だよ俺、加藤だ。加藤だぞ？」

「決してお客さんだなんて名前じゃない、分かる？お譲ちゃん」

「キユツキユ……」

「お客さんの名前なんて聞いてないもん！でもアタシは言ったもんね！

だからちゃんとラルって呼んで！ここに来る大人の人ならまだしも、そんなに年離れてないでしょ！」

「いやいやいや、どう見ても離れてるだろ！」

俺は18歳、いいかい？18歳なんだよ？そして君、ラルはいいとこ10歳だろうがっ！」

「うそだあ！18歳なの？なんか話し方も舌足らずだし、アタシより年下かと思ってたのに……」

「どこをどう見たら、君より年下に見えるってんだよ……」

「こーら、ラルツ！またお客さんに迷惑掛けてっ！………すみませんねえ、この子はまだこの宿から出たりするのも少ないもんで」

（宿、まあ家から出てないからって俺が年下に見えるのか？いやまあ、舌足らずってのはそうなんだけどさ……）

「ははっ、いや女将さん。そのお嬢さんの言っている事も間違いないぞ。

こいつ、カトーはある意味でまだ生まれただけだからな」

「は？生まれただけ？どういふ事だい？それって……」

(ちょー！おい！ルクータ、何言ってるんだよ！)

安心しろ、別にそういう意味じゃないさ。これからも言葉に慣れるまで、この世界に慣れるまでそういった疑問は抱かれるかもしれないぞ？

これは練習と……ちょっとした保険だよ

く加藤とルクーツア《ふたり》は顔を近づけて小声で話しているく

「どうしたんだい？あんまり言えない事だったら、言わなくても…

…」

「いやなに、こいつ、緊張してるらしくてな？

この街ほど大きな所は初めてなんだ。だからある意味生まれたて、初めての都会って感じだな？

なんで言葉とかは大目に見てくれると助かる」

「あー、そうかい。こういうトコは初めてってかい？

坊やも色々大変だったんだね？だけど安心おし、ここは他の街とは違うからね？

他のヒトも変わらず見てくれるとこさね。

まあ慣れるのが一番だね、この娘もそれまでは話下手どころか無口でねえ、苦労したもんさ」

「ちょっと！母さん！アタシは無口じゃないよ！」

「よく言っよ、ちょこつと前まで怖い怖いってびーびー言ってたくせに。」

この生意気娘がっ！まったくもう」

「うう……、でもこの街じゃアタシの方が年先輩だもん！
ほら、カトー、アタシのが偉いんだからね！」

(どろろしてこうなった……)

「あー、うん。分かったよ、ラル？これで満足かい？」

「ふふん！そうだね、ちゃんと名前で呼んでくれるならそれで許してあげる！」

「ほらほら、ラルはそろそろ寝る時間だよ？部屋へ行ってなさい」

「はい、母さん。それじゃね。カトー、おじさん、それに動物さん？おやすみなさい」

「……………」

「いや、元気な娘さんですか？」

「はっは、悪いねお客さん。あの娘も小さい頃はあれで苦労してたらしくてね。

人間が多く住むところにいたもんだから、名前じゃなくて動物って言われててねえ……よっぽど名前で呼んで欲しいんだろつぞ。」

「動物って……てか、らしくて？」

「んんっ……………！……そうか、色々とあるからな。

まあこの街ならそういう心配も少なくなるだろうし、あの娘さんも明るくなってきているようじゃないか、喜ぶべきことだろうっ。」

「……………ああ、そうさね。
だから坊や、いやカトーかい？あの娘が失礼な事を言っただのは分かってる……………」
この宿に来るのは大人ばかりで、カトーみたいに若いのはあまりいなかったんだ。だからあんな事をね？
……………それでもあの娘と仲良くしてくれると、あたしとしても有難いんだが、どうだい？」

「へ？ああ、別に気にしていませんよ。
それに俺としても妹みたいな感じでいけば、うん。全然問題ないし、寧ろ俺からお願いさせて欲しいくらいです。
それに別に坊やでもいいですよ、実際女将さんから見たらそうでしょうしね？」

「はっは、いやあカトーの坊やは面白いね？
こういった事に疎そうだっただけで不思議なのに、人間のあんたがそれをアツサリと言いのけるとはね？この街でも珍しいよ。
いや、娘の事はよろしく頼むさね？つとすまないね。飯だろ？行っ
といで」

「ああ、こいつは面白い奴だろう？
と。そうだな、それなりに時間が経ってしまったか、店は閉まるこ
とが無いだろうが良い席が無くなるかもしれない。
カトー、行こうか？」

「へ？あ、うん。それじゃ女将さん、行ってきますね？」

「キュツキュ」

「ああ、行ってらっしゃい。気をつけて行くだよ？」

「しかし、ラルの事で動物ってどういう事？あの耳でかね？」

「ん、それは今は止めておこう。この街とは言え、軽く言っていることではないからね？」

「むう、そういうモノなんかね？まあ、それはいいや。

「幹旋所ってこつちだっけか？」

「女将さんが言うにはこの道を行ったら三角の目立つ看板があるらしいから……つとアレじゃないか？」

「んー？あそこに見える小っこい奴？てか目いいんだな？ルクータつて」

「彼らの前方をかなり行った所にある建物の横に、小さなものが微かに見える。それが恐らく看板なのだろう」

「仮にも冒険者だからな？その程度は出来るさ」

「へえ、気になってたんだけど冒険者って？」

「冒険者ってのは基本、なんでも屋の事だね。基本的に定住をしない、流れの職人って感じかな？」

「職人なの？なんかルクータは剣持ってるし、身体つきも良いし、傭兵って感じじゃね？」

「まあ、そういう面が無いとは言えないし、それ専門の奴もいる。オレは専門ではないがな。まあ、言ったら？何でも屋だったさ」

「うん、そーいうもんだって感じで覚えておくかな」

「ほら、話してる内に飯屋……斡旋所に着いたぞ？」

「おお、確かに良い匂いがする……ナイスなスルメだ……」

「何を言ってるんだ？まあいい、入るぞ」

「なんだろう、分かっているても、尚襲い来る、この寂しさは……」

「キユク？」

「やめてくれ先輩、心配されると尚更きつい……っと置いてかれてる！？待ってって！」

「キユツキユ！」

「いらっしやい！二人でいいのかい？っと跳びリスの小っこいのか？」

「ああ、ヒトは二人、この子もだね。

何分この街に来たのは今日が初めてでね、オススメを5つほど適当

に頼むよ」

「5つもか？へへっ、そりゃ有難い。ついでだ、この小っこいのはサービスしてやるよ」

「悪いね、有難く受けさせてもらっ」

「それじゃちいと待ってな、スグに持ってくるからよっ」

（注文を取りに着た店員らしき、獣人の大男は厨房へと足音煩く歩いていった）

「5つつて食べ切れるの？それに適当にっ……大丈夫なのか？」

「ははっ、こつう所で適当っつていうと色々と違う種類を持ってきてくれるものなんだ。

それに今日が初めてっつて言えば、料理に力を入れてくれるんだ、数を頼めば更にな？」

店としては、また俺たちに着てもらいたいからね」

「うへえ、だからサービスとか言ってくれたのか」

「それもそうだな、まあ、くれるっつていうんだ、遠慮する事でもあるまい？」

「そうだね、先輩も楽しみにしとけよ？なんか気合入れてくれるっぽいし」

「キュッ、キュウ」

く注文してから10分ほど経過した頃く

「お待ちどう！熱々の料理のお出ましたっ！たんと食ってくれや！」

く先ほどの男が両手のお盆のようなものに、大皿をギリギリいっぱい載せてやってきた、どうして落ちないのか不思議なほどだく

「おお、こいつは凄いな。全部旨そうだ。料金はどれくらいかね？」

「はははっ、そうだな。今日はサービスって事で銀貨3枚でいいぜ」

「おいおい、結構安いな？本当にいいんだな？遠慮はしないぞ？」

（銀貨？てか3枚ってのは安いのか？だめだ、さっぱり分からん。機会があつたら聞かないとダメだなあ……）

「そいつぁいい、遠慮なんてされたらこっちも困っちゃうからよ。ま、食ってくれや。俺が言うのもなんだが、うまいぞ？」

んじやま、ごゆっくり？なんてな、はっはっは！」

く獣人の大男は、先ほどと同じく足音煩く厨房へと歩いていったく

「いやはや、ここまでサービスしてくれるとはな？」

見てみる、カトー。大盛りで熱々だぞ？どれもつまそうじゃないか」

（確かに大盛りだ。てか食えんの？この量……）

「キユクキユク……」

「飛びリス君も旨そうに食ってる事だし……俺達もまずは、これからだな！」

（なんかテンション高めし、最初のコレは……）

「……サラダ？」

「んぐ？ん……んぐ、そうだ。これは野菜を使ったサラダだな。

ハムとかも使われてるし、特にチーズが振り掛けてあるのがオレとしては嬉しいね」

「ん……へえ、さっぱりとしてるんだな。

見た目はただ、レタスっぽいのとキウウリの千切りっぽい、トマトのスライスか。

……んでハムが乗ってて粉チーズが結構乗ってるから。それなりにクドイかと思えば……しょっぱい？」

「このチーズは風味のために振り掛けてあるんだよ、味は……塩だな。

ほらこのハム、軽く塩焼きにしてあるし、葉とか野菜は塩水が何かに軽く通しているんだな」

「……うん、美味しいや。

この店を紹介してもらって正解だったね、ルクータ」

「ああ、最初のコレでここまでなんだ。ほら冷めないうちに他のモノも食べようじゃないか」

「次は、なんたるコレ？パイ？」

「これはパン包み焼きだな。中身は肉や魚肉、野菜とかを入れてあるものだ、どれどれ……。」

お！中は肉だな！こいつは豪華だぞ、見る！肉汁が溢れてきてる！」

「いや本当にテンション高いな、ルクータ……けど、うん。確かに旨そうだ！」

へえ、なんたる。コロツケみたいな感じなのかな？

中身は挽肉をハンバーグみたいにしたもので、それを表面がパリパリに焼いてあるパンで包んでるし……。」

「コロツケってのが何かは知らんが、これは焼いていない肉とかをパン生地で包んで焼いたものだぞ？」

だからパンにも中身の味が染み込んでいてだな、それがまた旨いんだ！

まあ、この料理は難しいんだがな？

焼きが足りなければパンは中身の汁を吸ってベチャベチャ、中身も生焼け、焼き過ぎればパンは焦げ焦げ、中身はパサパサってな？

だが見てみる？これは完璧だぞ！ほら食え！」

「んがつ、ちよつ……んぐ……はあっ！いきなり口に突っ込むなよ！苦しかったわ！」

……まあ、旨かったから許す！」

「ははっ、だろう？次は……。」

く加藤^{かれ}に取っては予想外に美味しかった料理を全て残さず食べた後、
そのまま宿屋『砂漠の水亭』へと戻り、膨れた腹を摩りながら、そ
のまま眠りについた。

第4話 『 問題!』

「ん、んー!つと良く寝たな……そう言えば昨日は結局、酒を飲んでなかったなあ。」

飲んでみたかった……まあ今度飲めばいいか」

「お?おはようカトー、起きたみたいだな?」

「あ、おはよう。ルクータは早いな?」

「まあな?だけどオレだけじゃないぞ?ほら……」

「キユク」

「くうつ、なんなんだ。この敗北感はっ!」

「彼等は昨晚遅く、幹旋所兼食堂から宿屋へ戻り、満腹のためか少し談笑すると、そのまますぐに眠りに付いて、今起きたところだった」

「さて、カトーも起きた事だし朝飯に……と言いたい所だが、女将さんが言うにはもう少しかかるそうなんだ」

「あれ?朝飯はここで食べるんだ?」

「どうやら昨日の話は基本朝晩の2回作ってくれるそうだね? いられないと言わない限りは作ってくれるそうだから、まあ有難くお願いさせてもらったよ。」

カトーも後で会ったらお礼を言っておくといいだろっな」

「そうするよ、けどそれじゃ時間が結構あるなあ。

……もう一眠り……いけるかっ!？」

「残念だが、それはオレが阻ませてもらう!」

「ぐはっ!っって止めて止めて!布団を取らないで!分かったから!起きるから!」

「キユウ……」

く彼等は少しの間、他の部屋に迷惑が掛からぬ程度に騒いだ後、朝飯を食べ、部屋へと戻ってきていたく

「いや、驚いたな。

女将さんの料理はシンプルながら、昨日のアレに勝るとも劣らない……」

「うん、凄く美味しかった。

それ以上にご飯に味噌汁、種類は分からないけど、魚の塩焼きと……俺としてはなんていうか……堪らなかったよ!」

く加藤^{かれ}は朝食を思い浮かべているのか、何故か嬉しそうな顔だく

「ほお? 獣人の主食はああいったものなんだよ。

カトーはコメとかが好きなのか、オレは前まではあまり好きなモノじゃなかったんだが、今日のが本当のコメなんだと分かったからな、全然違ったよ」

「ああ、コメってのは炊き方でかなり違うからねえ、それでじゃないかな？

ここには炊飯器なんてものないんだし、全ては作り手次第ってのだね」

「なるほどな、確かに作り手次第というのは頷ける」

「それでさ、ルクータ。今日は何するんだ？」

「そうだな、ここは一つ、この街をぐるっと回ってみるのも面白そうだが……」

「お、いいねいいね！大賛成だよ、やっぱり異世界に来たからには色々と体験しないとない！」

「ははっ、確かにカトーにとっては全てが珍しく面白いかもしれないが、その前に大事な事を教えよう」

「大事？これをやらなきゃいけない！とかやっちゃダメ！的な？」

「そうだな、それもある。」

「……それがどういった事なのか、どうしてそうなのかを今日は教えるよ」と思っ。

「街巡りは明日のお楽しみということだよ」

「ええ……まじで？別に良いじゃん、この世界の大体の事はもう分かったってば」

「そうかもしれない、カトーは頭がいいからな？」

「そういう事もあるかもしれないとは思っているかもな？」

「だが思っていた。と、知っている。は似ているようで全く違うということだ」

（またシリアスモードのルクータか、大事な事だろうし、街巡りは何時でもいいっちゃいいし、うん）

「それで？その教えてくれる事ってというのは？」

「ああ、まずは昨日教えた事から順々に行こう。」

「昨日の話で一番大事なのは4つのヒトがいるという点なんだ」

「まあ、そうだろうね？確か普通のヒト、獣のヒトとかだろ？なんか言ってるでござやござやしてるな」

「そうだな、だからかは知らないが、オレ達みたいなヒトを人間と言う。」

「そして獣を祖先としているヒトは獣人、これは言ったな？」

「爬虫類のヒトは竜人と言い、鳥のヒトは見た目そのままだ、有翼人と言う。……分かったか？」

「うん、なんていうか、まんまだからな」

「そうか？まあいい……その大事な事というのは、4つのヒトに係している、大きな問題だ」

(問題ね、なんとなく分かるけども)

「分かっていそうな感じだな？その問題の原因となっているものがある。」

「一つ目は、世界が一つになった時に起こった大戦争での事。」

「二つ目は、これもまた世界が一つになった時の事だが、こちらは戦争が終わり、ヒトが共存出来るという時に起きた事だ」

「原因もいいけど、その問題って何さ？」

「ん、そうだな。その問題は……差別だ」

「差別……、まあ肌色どころの違いじゃないからな」

「肌色？まあ、その原因がさっき言った事。」

「そうだな、まずは一つ目から、大戦争の時の事を話すでしょうか？」

「彼は、こうして前の世界では既に過去のモノとなっていたモノの存在を知った」

第5話 『 軋轢! 』

「まずは大戦争と言われている事を話そう」

「ルクーツアはゆっくりと語りだす、何かを思い出して、それを噛み締めるかのように」

「まあ、戦争なんだし、昔は4つのヒトがドンパチしてたって感じなんでしょ？」

「それが差別に繋がる……まあ、分からなくはないね」

「残念ながら、この大戦争というものは、ヒト同士での戦争とは言えないものなんだよ」

「はあ？ いやいや、さっき差別の原因となったとか言ってたじゃないか。」

「というかヒト同士での戦争じゃない？」

「そう、この大戦争は始め、ヒト同士でソレを行おうとしていた。これは紛れもない事実だ。」

「が……、いざ戦争をしようと、それぞれのヒト達が戦いの場となる新たな大地へ足を踏み入れた時、ヒトは奴らに襲われた。そして奴らの脅威に気が付いた……」

（……新たな大地へ足を踏み入れた時？）

「そう、奴ら……モンスター達にな」

「あ、そういう事か。そうだよな、前に5つの大陸があつてそれぞれについて言う話してたんだっただ」

「ははっ、忘れていたのか？」

このモンスターという存在が良くも悪くもヒトが纏まっていられる理由なんだがな？」

「モンスターは恐ろしいって言ってたし、協力できるならその方がマシだよな」

「そうだ、今でこそヒト達が団結し立ち向かえば、モンスターに対抗するのは難しい事ではないと言えるだろうな」

「てか、最初の時に団結できてたなら何の問題もなくないか？」

「っと、そうだな。話を戻そう。」

結果は今言ったとおり、大戦争はヒト同士の戦いからモンスターとヒトの戦いに替わり、そして一応の勝利を収める事に成功した。ここまでではいいかな？」

「うん」

「だが、問題はどうかやって勝ったか？そして、その勝った後の状況にあるんだ。」

まず、勝てた理由。これはだな……」

「長くなりそうだし、要点纏めて言ってくれ！」

「むっ、仕方ない……良いだろう。」

1つ、人間の武器があつたため。2つ、他のヒト達の身体能力が優

れていたため。

大きく分けて言えば、この2つのおかげだ」

「つまり人間は弱いから武器を持ったとしてもモンスターには勝てない、けど他のヒトが武器を持てばモンスターには勝てた。つてことか？」

「そうだな、そして差が明確になった時でもある。

人間は弱い。……が、だからこそ知恵や技術を磨いてきた歴史があった。

対して他のヒトは知恵はともかく、技術などは人間に比べて酷く貧弱なものだった。

……が、己の肉体を極限まで鍛え、それらに頼らずとも生き抜いてきた歴史があった」

「なるほどね。つまり人間からしてみたら『こいつらはアホ』って思っただろうし、他のヒトは『あいつはモヤシ』って感じたわけか。ガリ勉とヤンキーの対立みたいなもんだな」

「その例えはイマイチ分からないが、まあそういう事だな。

この時生まれたものが大戦争で生まれた要因の一つ。

二つ目は終わった時の事だが、これは1つ目をより強くしているモノと言った方が正しいな」

「終わった後、つて言うത്？」

「別に『モンスターは一応倒したから、今度こそヒト同士で』となつた訳じゃない。

終わった後の問題、それは戦死者の数。つまり人口差なんだ」

「ああ、主に戦ったのが人間以外のヒトだったから……」

「ああ、別に人間も戦わなかったわけではない。

だが、人間の多くは武器を作る側だったのは事実で、その結果人間だけが他のヒトよりも多く生き残れた。

そう、戦士足り得る成人男性の多くがな？」

「そして、人間が他のヒトを支配してるのが今って事か……」

「言い方は悪いが、残念ながらそうはなっていない。

もしそうなら、まだマシだったのかもしれないな」

「してないのかよ？んじゃなんでなんだ？」

「大戦争終了同時の状況はさっき言ったとおり、人口に差が生まれ
ていた。

だから人間が他のヒトを武力を持って支配する事も可能だったろう
な？

だが、しなかった。

理由は見たからだ。他のヒトの戦士達がモンスターと力強く戦う姿
を、同時に人間の弱弱しく戦う姿の違いをな」

「ああ、つまり怖くなったわけか？こんな強いのに勝てるわけが無
いって？」

「そう思った人間は多かっただろうな、だが人間の指導者達の考え
は違った。

モンスターに対抗するには彼ら、他のヒトの力が必須だと。

人間も身体を鍛えていく事になるだろう、だがそれでもモンスター
と直接戦う戦士の質は平均して考えれば他のヒトが勝っている、と。

最大の脅威であるモンスターがいる限り、他のヒトと争うのは得策では無いとな？

そして他のヒト達の指導者もそうだった。モンスターに勝つためには人間の助けが必要だ、とな？

だから人間は著しく弱体化した他のヒト族を支配ではなく、援助する方向を採ったんだ」

「つまり、支配じゃなくて共存をしようとする？」

「そうらしい。当時のヒトの指導者達はな？」

だが、そうでない他のヒト達はそうは思えない、思えなかった。

当然だ、自分の家族が、想い人が死んだのに、人間はほとんど死んでいない……、だから嫌がらせを、時には暴力を以ってしていたという。

そして、人間達も快くは支援を出来ないし、思えなかった。

確かに自分達の多くは直接戦っていないかもしれない、だが武器を作ると簡単に言うが、これも中々に大変な事。

特にモンスターが蔓延る世界で材料を調達するのは正に命がけだった、それなのに嫌がらせを行ってくる他のヒト族を好きにはなれなかった」

「上手くはいかないもんなんだな……」

「まあな、だがモンスターが死に絶えた訳ではない。

300年という歴史の中で11回、大型モンスターの襲来があり、その度にその認識は徐々にだが薄れていつている。

とは言え、未だ根強い問題。これが差別というわけだ。

モンスターがいるせいでヒトは互いにいがみ合い、いるお陰でヒト

はお互いを認め合えるようになってきているのさ」

「なるほどねえ、でも300年も経てば流石にもう無くなりそうだもんだけど……」。

それとさ、11回？大型？つてなんだ？」

「逆だ、300年という年月の間、そういった一つは小さな嫌がらせでも、それが続いてるんだぞ？」

別のヒト族という理由だけで、そんな簡単なもんじゃないさ」

「あ……そうか、難しいもんだな」

「難しいな……、それと大型というのだが、ヒト達の脅威はモンスターだ。これはもう分かってるな？」

そのモンスターですら脅威としているモンスターの事だ。

モンスターは小型、中型、大型の3種ある。

小型は訓練を積んだ武人、まあ兵士が1人程度いれば対処可能レベル。

だがコイツらは群れを成すのが殆どだ、侮れる相手ではないし、場合によっては中型よりも恐ろしい存在といえるだろうな。

中型が一般的にモンスターと云われる存在だな。

これは一体を街単位で対処しなければいけないレベルの存在で、基本群れる事は無い。

大型は一つの街程度ではどうしようもなく、国も連携しなければ対処できない存在、天災だな」

「なるほどね、てかさ？質問ばかりでアレなんだけど……。
なんで街と国が同レベルで語られてるんだ？」

「ん？ああ、そう言えばカトーにはイマイチ分かりにくかったか？
…。
国というのは4つある。

4つという事で分かったと思うが、ヒト族それぞれで造られている
もので、元々の世界の大陸、その近辺のモンスター世界の大陸辺り
を指すものだ。」

「国は種族毎で出来てるもの、かな？」

「別に他のヒト族がいらないわけではないが、まあそうだ。

そして街はこの大陸で新たにヒト達が協力して造り上げたもので、
国に近いほど差別が酷く、遠くなるほどそれは弱まる。」

「良く分からないな、その街つてのは国に属していないのか？国の
街だろ、普通はさ」

「んー、属してるとも言えるし、していないとも言えるな。

属しているという理由は基本的に街造りは国の支援の下行われている
からなんだ。

この場合は支援してもらった国に、その街は属している事になる。
していないという理由は、国の指示というものは大型モンスターが
現れた時くらいのもので、基本的に街は独立して方針を決めていい
からだな」

「ふーん、まあなんとなく分かったよ」

「そうか？

それにしても良い時に良い具合の質問だったぞ。

この差別が酷いのはある意味で、この街にあると言っても良いくらい
なんだ」

「この街？ サックルにあるのか？」

「ああ、違う違う。街というものに、という意味でだ。さつきも言ったが街というものは領主の一存で大きく変わるものなんだよ。」

国は他の国との関係もあってそこまで差別は酷くない、少なくとも表立ってはな？」

「あれ？ でも国に近いほど酷いって……」

「それは国に近いほど、街という単位の中でのヒト同士の協力が無くても、どうにかなる事が多いからだ。」

近ければ、最悪、国の軍に援軍を頼めば、モンスターを倒してくれるからな」

「なんとというか……」

「そしてこの無法の街、サックルを代表とした国から離れた地域の街ではそう易々と国に援軍を頼めないし、頼めても来るまで時間が掛かる……。」

必然的に、そういった事は許さないし、行わないように注意するって寸法さ」

「なるほど、だからこの街は差別が無いわけか」

「そうだな、そして国は地位や生まれの良いヒト達の住む場所なんだ。」

そうでないヒトは生きるために、このモンスターの大地へと行くしかない。」

そして最初は国に近い街の弊害に合い、苦しむ。
自分の種族の街に行った後では逆にそれを行ってしまうという悪循環だな」

「うーん、なんとも言えないな。

そこを国がどうにかすべきなんだろうけど、さっき表面的には……
って言ってたし、難しい所だな」

「まあ、大戦争の時に起きた問題の発端はそんな所だな。

色々と蛇足が付いてしまったが、カトーには必要な知識だったみたいだし、それはいいんだがね」

「大型とか、国と街の違いとかはもつと最初に教えてもらいたかったけどなあ」

「ははっ、まあそう言うな。

オレは当然そうだと知っているから、大事な事では無いと思ってしまってたんだ。

さて、次は終わって共存していく過程で見つかった事だな？」

「……？人口差がどうのってのじゃないのか？」

「それは一つ目の感情をより強くするモノの面が強いと言っただろう？

まあ、次のものもそうなんだが、これはモンスターと戦う事で薄れていくモノじゃないんだよ。

だから分けて話してるんだ、まあ……聞けば分かる。

カトーにとっては、そう大した話では無いかも知れないかな？」

「俺にとっては大した事じゃない？」

「多分、な？」

今朝もそんな感じの事を言っていた事だし、そうなんだろう」

「今朝？なんだろう？」

「いいか？もう一つの事とは……」

「大きな違いとは何も命に関わる事だけではない。
だがヒトによっては大問題という事があることを彼は知ることにな
る」

第6話 『 分別!』

「次に話すのは、大戦争終了後の事で人口差などとはまた違った面でのヒト達の違いのことだ」

「うん、それはモンスターとの戦いで嫌々でも協力してきた中で解決してきた事じゃないんだろ？」

「そうだね、まあコレも300年という時の流れで、それなりに緩和してきてはいる。」

だが、それでも中々な？」

「まあ、それはいいから、結局のところ何なんだ？」

「ああ、それは食べ物……生きるための糧にしているモノだ」

「食い物？あー、だから今朝がどうのって言ったのか？コメとかパンとかだろ？」

「うん、そういう事だな。」

だが、コメやパン……小麦など穀物はそう大きな問題ではないんだ」

「っつというと、肉？」

「その通りだ！昨日、幹旋所で食べたパン包み焼きを覚えているか？あの時、オレは肉や野菜を入れて……と言ったな？」

その肉はヒト族によって大きく変わるんだよ、人間を除いてな？」

「へえ、つてか人間を除いて？」

「そうだ、人間は食べるものは何でも食う、言い方は悪いがな。獣人は、動物の多くを食べない。共に生きてきた友人という扱いだからだ。」

竜人は、水に生きるモノを崇める性質があつてな？それ故に魚を始めとした魚介類は食べない。

有翼人は、そのままかな？同じく空を翔るモノ、鳥だな。自分達よりも空を長く飛べる鳥を尊敬し、それを食べる事は無い」

「えっと、つまり？」

「つまり、人間は動物でも魚でも鳥だろうと食べるから論外として。獣人は動物を食べる他のヒトを嫌がるし、それ以外もそうだ。それもまた最初期の頃は酷かつたらしいんだよ」

「あー、食べられる物は食べないと生きていけない時代か……」

「そうだ、さつき人間が一定の期間、他のヒトの生活を助けていたと。」

「そう言ったな？この時もこれによる問題が起きているんだよ。そして起こったのが、食に関する問題さ」

「ふむ、人間は食べる物がそうないから、食べる物は何でも採って来た。」

「そしてソレを他のヒトにどうぞって渡したら、ふざけてんのか！って怒られたと？」

「そうだね、人間の認識では牛などを始めとした動物類の肉はご馳走だし、栄養価も高く喜ばれるモノという考えで、獣人に食べさせ

ようとした。

「ただ獣人に取っては、それは友人なんだ。どうしてそんな事を、そう糾弾したんだろうね」

「他のヒトでもそんなのがあったわけか……」

「そう、最初は人間がそれを行い、他のヒト達も回復していくと、それぞれ違うヒト族同士でそういった衝突が起きたわけだね」

「なるほどね、一種の掟……」。

竜人や有翼人なら、宗教で言うところの神様みたいなもんを食うって事だし、そりゃ怒るところの話じゃないか。

「あー、だから斡旋所を女将さんは進めてくれたのか？」

「時間帯の事もあっただろうが、それも多分にあるだろうな？」

「ここは最前線と言ってもいいほど、国から離れている街だ。」

「そついった事を気にしないヒトが多いから、獣人にも気にせず肉を出す可能性があるし、ここで生活していればある程度は許容する人が多いのも事実。」

「だが来たばかりでは、それに怒ってしまうヒトも少なくないのかも
しれない」

「今は獣人でも肉を食べたりするの？」

「ああ、あるぞ。一部の例外を除いてはだけどな？それは他のヒトにも共通している事だ」

「まあ、それでも好んで食べるってヒトは多くないって感じか……。朝食にも肉は無かったしさ」

「そうだね、まあ今は他のヒトが自分達に取っては大事な存在を食べていようが、殺害に至る事は無くなってる分マシと言えるだろうよ」

「殺害！？昔はソレでそこまで争いがあったの？」

「あつたぞ？寧ろ戦死者の時とは比べ物にならないくらいの騒動だったらしいからな？」

「食べ物への恨みは恐ろしいってか？……なんか違うな」

「まあ、そういう訳だ。」

「食い物が何も無い、っていう状況じゃない限りは他のヒト族が食べたく無いものを勧めるなどはよした方がいいだろうな。」

「ああ、別に自分が食べるには問題はない。特にこの街でならな？」

「なるほどなるほど、これは確かに大事な事だわ」

「ま、そういう大きく分けて2つの事があつたから、そしてソレが長い間解決に至っていないために、未だヒト族間ではギスギスとしたモノが流れている。」

「街によってはソレが強くなって、差別という形になっているという事だな」

「差別ね……ラルが名前を呼べ呼べ煩いのはソレに関係してるのか……」

「恐らくはそうなんだろうな？」

「街によって、獣人がひどく差別されたり、他のヒト族が差別されたりと様々なんだが、一番の問題は子供がソレを行っている点にある」

「子供が……差別というよりは、いじめって感じか。しかも大人がそれを静観してるから、止めるヒトがいない。

だから成長して大人になれば差別に繋がっていく……ってことかあ」

「そうだね、差別といかなくても、個人として嫌な奴ではなく、あいつは獣人だから嫌な奴という枠で決め付けてしまう癖、習慣が出来てしまっているんだ」

「色々あるんだなあ、大変だわ」

「まあ、カトーはそういった事をしないとオレは信じられるけどな？」

「そりゃね？つてか俺は別に差別食らって生きてきたわけじゃないし、その時点でちよつと違うからなあ。

差別とか下らない、なんてはいえないんだよな。そのヒトに取っては重要な事だったんだろうし……」

「そうだな、差別なんて下らない事はするな。

そう、言えればいいんだが、この世界に生きるヒトは多かれ少なかれそういった事を経験しているんだ。

だから、言えない、言いたくない。子どもの小さな諍い程度は見ても見ぬ振りをしたくなる。

これもまた悪循環、覚えておくといい」

「はいはい、まあ分かったよ。

つまり、差別つてのがあから、色々気をつけとけよ？でいいんだろ？」

「カトー……、その色々の部分が大事なんじゃないか？
まったく、お前はオレが丁寧に教えてやってるといふのに……」

くルクーツアはこめかみを指で押しながら、目を瞑るく

「ははっ、怒らないでよ。」

大事な事だつてのは十分に分かったし、ざっとだけどそうなった訳も分かったからさ」

「ふう、別に怒ってはいない、悩んでただけさ。」

どうやったらお前を立派なヒトに出来るんだろつとね」

「……………それはどういった意味で？」

「人の話を真面目に聞けたり……諸々だな」

「……………それを言うなら先輩に言ってくれ！見るよ！先輩は寝てるんだぞ！」

く彼の言う通り、小動物は説明が始まったかなり始めの方で寝息を立てていたく

「……………言いたい事はそれだけか？」

「……………ごめんなさい、ちょっとしたジョークなんです」

「まあ、いいがな？」

こういった問題を軽く扱うというのは止めておけ。

カトーに取っては下らない事でも当事者は本当に悩んでいる事なんだぞ？

それを目の前で、そんな事で悩んでるのか？とか聖人ぶって言うってみろ、力の弱いカトーはボコボコにされてしまっぞ？」

「言ワナイ、言イマセン。私ハソソナ事言イマセン」

「彼はいつにも増してカタコトの言葉を話す、まるで悪戯がバレタ時のように焦っているようにも見える」

「まったく、嘘は付くな。」

お前、さっきからソワソワしてたじゃないか、ラルの所へ行つて、気にするなどでも言うつもりだったか？」

「うつ……、それは、だってさ？いや……うん」

「止めておけ、少なくともそついう形ではな？
ただ、女将さんが言っていたらどう？友達となればいいんだ。
もし万が一、差別を行われそうになった時にお前がそれを防げばいい、守ってやればいいんだ」

「まあ、うん。」

「そう出来るように頑張るよ」

「ふふつ、そつだな。」

そのためには身体を鍛えなければならんし、この世界の事をより知らなければなるまいよ。

なに、オレがいるんだ。心配するな、段々と強い男になればいい。オレと一緒に強くなっていこうじゃないか？」

「……ああ！強くなろう！差別もそつだし、どんな時でも強く在れる大人に……俺はなりたいんだ！」

(そう、あの時、俺のために無駄だと分かっているけども必死に足掻くことを止めなかった父さん達みたいに、いや普通は出来ない事でも出来るくらいに強くっ)

「はっは、良い目をしているじゃないか……。」

どんな時でも強く在れる、か。難しいなんてもんじゃないが、だからこそ目標に相応しいと言えるだろう。

だが、その前にしなければならぬ事がある」

「……それは？」

「腹が減った。昼食を食べに行こうじゃないか！」

「……確かに、腹減ったな。」

もう結構経ってるもんな……でもなんだろう？この虚しさは」

「それが大人へ近づいたということさ！」

「絶対に違うね！つたく、ちやかすなよな！」

ルークタが言ったんだろ、ヒトの大事なもんはぐってさ？」

「はっは、そうだったな。だがそれでもオレは腹が減ってるんだ。だから言っ！」

「くう、悔しい！でも腹が減っちゃった！だから許しちゃっ！」

「さて、そろそろ行くとしようか？」

幹旋所でいいだろう、ほら、跳びリス君を起こしてくれ」

「はいはい、先輩、飯食いに行くぞー。起きろー」

「……キユウ？」

「さて、行くか。もたもたするな！オレは腹が減ってるんだ、……置いていくぞ？」

「その台詞何度言えば気が済むんだよ！待ってって！行くから！」

「彼はこの世界での差別というモノを知った。」

この問題は彼がこの世界で生きていく過程で無視できないもの、一体どのように彼はそれと接していくのか。

この時はまだ、何も見えてはいなかった。

第7話 『 価値!』

「人間の領主が治めている街『サツクル』、別名『無法の街』とも謂われる所以は最も国々から離れた地にあるために本来街にあるだろっ差別などが無い事から来ている」

「いやあ、昨日は色々聞いてて結局来れなかったからなあ、観光！」

「ははっ、そうだな。」

「今日はこの街をグルっと回ってみるとしようか。そうだな、まずは……」

「おい先輩！見るよアレ！武器だよ、武器！見にいこう！」

「キュツキュ」

「……やはり中央広場がいいだろうか？っておい！待て待てっ！」

「彼は武器かとうを売っているらしい露天へ向け走ろうとした所を、ルクツアに襟首を掴まれるという形で止められた」

「ぐふっ……、ちよっ、ルクータ！止めるにしてもやり方ってのがさあ」

「あのお、オレが色々と考えてるっのに無視して行くんじゃない。」

「……それで？あの武器を売ってる所へ行きかけたのか？」

「そうそう、だってさ武器だよ？やっぱり見てみたいじゃないか」

「ふむ、確かに武器の一つも持っておくべきか……」。

よし、今日は武具を見て回るとしようか。なに、この街はそういうものの品揃えはかなりのモノだからな、あそこから始めるとしても露天を含めると今日一日で回りきれるかどうか……」

「やった！武器とか見て回るのか……やっべ、楽しみだなあ。」

それに一日掛かる？全然構わないね！少なくとも一日中説明聞くよりは、ずっとマシだ！」

「色々と言ってくれるじゃないか、しかしそういうものかもしれないな？

さて、行こうか。だが走るなよ？広い道とは言え、ぶつかると危ないからな」

「確かにこの道は広い。この街はほぼ円形と言っていい防壁に囲まれた城塞都市と言える形だ。

というよりもこの世界で街とは即ちそれになるのだが。

そしてその四方、東西南北に大きな道が十字に走っており、そこがメインストリートと言えるもので、中心には大きな広場があるというものだった」

「つと、そうだな。別に武器屋は逃げないし、ゆっくり行こう」

「まあ、オレも最初に武器を手にした時はそんな感じだったからな。気持ちは分かってるつもりさ」

「へえ、そういえばルクータってさ何歳なんだ？

俺より年上なのは分かってたけども……」

「ん？ああ、オレの年か？今年で34になるよ」

「へえ、34歳なのか……。ん？ルクータ、この世界って一年は何日なんだ？」

「一年は730日だな、ちなみに一日は24時間。それがどうしたんだ？」

「え……。730日？マジデ？」

「？ そうだが……」

（ちよつ！？嘘だろ！？別に一年が730日っていう地球の2倍だとか、寿命もきつと2倍つぱいのも、成長遅くね？とか、俺もそうなるってのは今どうだっていいんだ！
くっそ……。なんてこった！？）

「おい……。どうした？なんか問題があるのか？」

く急足を止めて俯き、身体を僅かに震わせながらも無言の彼を心配してか、ルクータは彼に近寄ろうとした

「くそがつ！俺はラルより年下だったのか！？」

「うお！なんだなんだ？お前は18歳なんだろう？だったらラルより年上じゃないか、何を意味の分からない事を……」

「あ……。ふむ、そうだな。確かに俺は18歳だ。これは事実。」

そう！例えこの世界的に考えれば9歳で、ラルはあっちで考えれば

「20歳だとしてもっ！」

「……………跳びリス君、行こうか？」

「キコ……………」

「って待って！ごめん！ちょっと気が動転してただけだって！俺も武器見たいんだって！置いて行かないで！」

「へいらつしゃい！ウチにあんのはこころじゃ滅多にお目にかかれない武器！火の国の最新式のシロモノだ！
どーだい、見てくれこの槍をつ！長すぎず短すぎず、攻守一体！こいつあ買わないと損！大損ってもんさあ！
どうだい坊ちゃん！こいつを特別に金板3枚……………いや！2枚で売ろうじゃーないかっ！」

「はあ……………えっと」

「悪いね、こいつが欲しいのは槍じゃなくて剣なんだよ。
すまんが今回は止めさせて貰うよ」

「っと、待ちな！そういう客も居るかと思って……………」

「さ、行くぞカトー」

「え？あれ？あ、うん」

「二人は露天商が何やら探している間にその場を離れて、大通りを進み始めた」

「なんであんなハイテンションなんだ？あの人にはさ……。つて、そうだ！ルクータ、聞きたい事があるんだけどさ」

「ん？ああ、さっきの露天は止めておけ、あんなモノに金板を3つ、2つなどポツタクリにも程がある」

「そう！その金板つてのは通貨の単位なんだろうけど、それって？」

「お？はっはっは、すまん。これも大事な事だったか、いいか？まずは……」

10分経過

「……という事だな？覚えられたか？」

「つまり、銅貨が百円、銀貨が千円、金貨は一万円、金板が百万円つて感じかね？」

「……うん、分かったよ。つまり金板が3枚とかはあり得ない値段つてことだろ？」

「そういう事。火の国だのなんだのをいきなり言う輩はそういうのが多い、気をつけるといいな」

「うんうん、でさ？火の国ってなに？」

「火の国は人間の国を簡単に言ったものだな。その他にも土、水、風がある。」

「これらは順に獣人、竜人、有翼人の国の簡易な表し方だな」

「簡易つていうと正式な名称があるのか？」

「勿論あるとも、人間の国はストロベルン、獣人の国はブリアロン、竜人の国はライアズール、有翼人の国はクラッセンと言うんだ。」

それに人間の国が火と言われる理由は鍛冶職というか技術を開発するためのモノが多いので、大抵どこでもそうだったモノが見られるため。」

獣人の国は洞窟というか、山肌に穴を開けての家々が並び、城もそうだからだな。」

竜人の国はそのまま、国というか街というか、ともかく水運が発達している。」

有翼人の国はそれはもう大きな大木の上に暮らしていて、その国に行けば風をより強く感じられるからだな。」

まあ、この火とかで覚えておけば問題はあるまい」

「へえ、まあ確かに火とかなら覚えられるけど、その名前はイマイチ覚えられないな……」

「だが、どうでもいい訳では無いからな？その内ちゃんと覚えるんだぞ？」

「うん、まあそつちも追々覚えるよ。」

「それでさ、武器！武器をちゃんとしたところで見たいな！」

「そうだな、露天には掘り出し物がある事もあるんだが、まずはちやんとした所、店を構えている所がいいだろうな」

「いいねいいね、別に伝説の剣とかはいらんですよ、俺が欲しいのは剣なんだから」

「伝説の剣？ああ、英雄譚などに出てくるようなものか？

そういったのは流石に露天にもないだろうな。

精々が、英雄として称えられている人物が使っていたものが国にあるくらいだ。

それにそれは随分昔のだからな、今ではなまくらと言えるだろうし……」

「いや、だから別にそういうのはいらないんだって……」。

「と、あれじゃない？なんかそれっぽい看板があるんだけど？」

「彼が指差す方向、東大通りを中央広場側へ行く途中に剣の形の看板が掛かっている店舗があった」

「お？そうだな、あそこが武器屋らしい、行ってみようか」

「うんうん、やっべ無駄に緊張しちゃうな」

「すまんが、店主はいるか！」

「店に入るなり、ルクーツアは大声で店の者を呼んだ。

すると奥の扉から、人間で長身の男がゆっくりと歩いてきた」

「あんだ？そんな大きな声で呼ばずとも聞こえるってのに……」。

「それで、会計でも？」

「すまん、癖のようなもので、直そうにも直らなくてな……。あぁ、今日はこいつの武器を見に来たんだが、剣を見せて欲しいんだ」

（随分と無用心なんだなあ、盗まれはしないんだろうか？）

「へえ……新人冒険者ってわけかい？」

そいつあいけないな？この街が何処にあるのか知らないわけじゃあるまい？」

「まあ、確かに。冒険者としての仕事をしていくなら、このサックルから始めるといふのは自殺するようなものだろう。」

だが、色々と訳有りだな？まあ、頼むよ」

「ふんつ、まあいい。そうだな……坊主、おめえ人間だな？」

「はえ！？あ、はい！人間で18歳です！」

「そうか、人間なら……」

（やつべ、こつやって面と向かうと怖ええ……、人間なんだろうけど、なんだろ……威圧感？ひよろつちいのに、こりや盗みなんて俺みたいに来たばかりのヒトしか考えられないわな……）

（伊達にこの街で武器屋を営んではないという事だろう。店主の風格は彼が感じた通り、歴戦の戦士と言われても否定出来ないものだった）

「こいつなんかいいだろう。」

鉄の刃ではなく中型のモンスター、ロイオンの牙を加工した一品だ。鉄の武器に比べ何より軽いのが特徴で、切れ味も悪くない。だが、斬るという面ではかなり劣る、叩き切るとか突き刺すという使い方がいいだろう」

「えつと……ルクータ？」

「ふむ、ロイオンは頻繁に見かける中型のモンスターで大きな猫と言う感じのものなんだ、そして牙が長いんだが、そいつを加工したモノだな」

「いや、だからさ？」

「分かっている、これはカトーには合わないだろうな？」

……店主、あまり冗談には付き合えないぞ？」

「へえへえ、高いモンなら喜んで買っていくんだがね？でけえお守りが付いたヒヨッコさんだとね？」

「色々あるとはいったが、別にそういう事ではないさ。

……普通にこいつにオススメの武器を出してくれ」

「おいおい、睨んでくれるな、わあつた。

それじゃあ……」

「ルクータ、なんであの武器は駄目なんだ？説明聞く限り悪くなさ気じゃない？」

「そうだな、強ち間違いという訳ではないんだが、あれは壊れやすいんだよ。そして手入れは非常に難しい。」

カトーじゃスグにダメにするだろうな？」

「うぐ、まあ壊れやすいつてのはアレだよなあ」

「まあ、ある程度剣の扱いに慣れれば壊れるなんて事はないし、手入れも出来なくはないんだが……カトーというか、不慣れな者にはなあ」

「へへっ、坊主。それに加えてこの武器はたっけえのよ。」

いくら他のよか多く狩る中型つてもそこは中型、貴重なわけよ」

「げっ、高かったのかよ！おっさん、あんま高くなくて、それでいて最高に使い易くて超格好良い武器をくれ！」

「無茶言いなさんな……この御仁といい坊主といい、なんだかねえ。だけでも、ほら……これなんてどうだい？」

「店主が机に出したものはどちらかと言えば小振りの剣だった」

「これ？ルクータ、どうなの？」

「ふむ、悪くないな。鉄の剣だから重いんだが、小振りだからそこまでじゃないし、うん……刃も綺麗なものだ」

「へへっ、そうだろうよ？これは小剣の部類なんだがな？」

これは素人にはオススメだし、ちゃんとした武人さんにも需要はあるってもんなんだ」

「ああ、こいつは悪くない……予備に一つ、オレが欲しいくらいだ」

「普通のショートソードに見えるけども？」

「へへっ、そう見えるっただけで坊主が素人っるのが分からあ。いいか？普通のショートソードってえのは、ロングソードを短くしたもんでとこだが、こいつぁ違う。」

剣の幅が段違い、普通は5cm程度、だがこいつは倍はある、厚さはどちらかと言えば薄いモノが好まれるが、こいつは厚い……何よりも頑丈さを考慮した結果だ。

その分通常のショートよりも短いかな？ざっと60ってところかね」

「そしてこれだけ厚ければ、ショートといえどもそれなりに重い攻撃が出来るし、重さもショート故に解決できる。なのに、切れ味も悪くないと来ているんだぞ？」

下手にロングを持つよりもこちらの方が……うむ、店主いくらだ？」

「ちよっ、え？これに決定？」

「へへっ、毎度。そうだな、こいつぁ……よし、金貨10枚で手を打とうじゃないか」

「おいおい、いいのか？これは良い、普通その3倍はしても可笑しくはないんだがな？」

「なに、ちいと変な事しちゃったし……それとヒヨッコへの贈り物ってえやつさ。」

嫌なら30枚って言うてもいいんだぜ？」

「ははっ、いや有難く10枚で買わせてもらっ。こちらとしてもそう余裕はないんでな？」

……カトー、一軒目なんだが、これでいいだろう？」

「えっと、ちょっと持ってみてもいいですか？」

「こいつはいけねえ！試しもない内にこっちで決めちまうとはな！」

おう、ほら坊主。気を付けてなら軽く振ってもいいぞ？」

く店主からの許しもあり、カトーは軽く剣を振るう。

彼らの話していた通り、まだまだ不恰好ではあったがそこまで重さを感じさせない振り方だった、く

「うん、良いね。なんていうか、うん……」

「ははっ、そうか。カトーも気に入ったようだし、それじゃ10枚……と」

「へへっ、確かに……坊主、ついでだ。これも持ってきてきな」

くそう店主が言って渡したものは、20cm程の短い棒だったく

「棒？なんですか、これ？」

「そのままだよ、棒さ。だが馬鹿にしたもんじゃねえぞ？」

小型の場合、慣れた奴ならそいつだけでも対抗できるって代物さ」

（いや、無理だろ……だって棒、それもこんな短いもので？）

「ははっ、こいつは棒は棒でも武器の一種さ。」

ただ慣れた程度ではどうしようも無い、それを極めた位でないとな？」

「ええっと？それじゃあコレって……」

「カトー、これは恐らく店主が昔使っていた武器だ。

そして、自分を長い間守ってくれた武器の一部なりを渡すことはお守りって意味なんだ」

「え？お守りって……あ、そのありがとうございます！」

「いって事よ、こんな遠いところで新人ってえんだ。

意味はねえだろうが、気休めでもそういうもんを持っておくに越したこたあねえ」

「うむ、だが安心してくれ。オレがいるからな？

そう易々と怪我などはさせんさ、だがオレからも礼を言う。ありがとう」

「へっへ、さあ武器は買ったんだ。次は防具の一つも無けりや格好付くまい？

ほら、ここから中央広場へ向かう途中にソレがある。行って来な、坊主」

「ありがとうございます！それじゃあ！」

「それじゃあ店主、また来るよ……」

「毎度あり、怪我あさせんなよ！」

く始めて握り締めた武器という名の力の象徴は、思っていたよりも

重く、冷たい印象を抱かせるものだった。

そして、武器を持つという事はそれを振るう理由も必要になるとい
う事でもあった。

第7話 『 価値!』 (後書き)

以下、補足ですが、長文になります、スルーして下さい。でも物語を理解する上ではそこまで重要では無いかも知れません。

通貨や国の名称などは簡単に終わらせました。こちらについては特にありません。

年月が地球の2倍なのは、地球とは違うんです!って感じを明確に出したかったため。浅はかですかね?

また、どういった感じで恒星の周りを回っているとか、それはどのくらいなのか、そしてその距離で地球と同程度の環境を維持できるのか、そこはすいません。適当です。

この世界の住民も地球の人間と体の造りがほぼ同じなのに、何故2倍近くの寿命を持っているのか?

これは最初の方で語られていた未知の物質、ここへ来てしまったモノとはまた違う物質の効果だと思して下さい。

もう使わないと思っていましたが、都合の良い言い訳素材になっていますね……。

ちなみに、その未知の物質がある世界にいる主人公もまた、そうなります。

そこは今後に大なり小なり関係してきますが、物語としては、ほぼ蛇足ですかね。

2倍の月日があるのに、どうして10歳の子どもは地球の20歳前後の知識などを備えていないのか?

これについてはファンタジーのテンプレ存在であるエルフの設定を流用しています。

つまり、長生きなんだし、ゆっくり覚えていけば、それで良いので

はっつて感じます。

第8話 『 登録! 』

武器を購入した後、彼らは防具も購入し冒険者として一応の体裁を整えていた。

そんな事があつた翌日

「さてカトー、剣も買った、防具も簡易とは言え、ちゃんとある。そして歴戦の戦士からのお守りなんていう、この中にはある意味一番高価なものまでであると来ている……」

「うん、つてか歴戦？あの人そんな凄い人だったのか？」

「オレには分かる。それで十分じゃないか？」

それはそうとして、折角冒険者っぽくなったんだ、どうだ？

一回仕事を請け負ってみないか？」

「それで十分つて……いやまあいいけどさ？通じる者には通じる……うん、なんとというかアレだけど悪くない。

んで、仕事？……そうだな、てか今思ったら俺、金ないんじゃない……」

「そついう事だ。

俺が好きでしている事だからいいんだが、この世界で生きていくならば、

やはり生きる為の術を持つておかなくてはならないだろう？」

「そつだよなあ、それに……。うん、せめてこの剣の御代くらいは返したいしな」

「そうか……だが金貨10枚はなかなか大変だぞ？まずはゆっくりと慣れていけばいいんだ。
ほら、早速幹旋所に行きましょう」

「はいはい。それと、先輩は宿で待つてくれよな？

飯とかは女将さんとラルにお願いしてあるから安心してくれよ」

「キュツキュ」

↳彼ら2人は小動物せんばいを宿に残し、幹旋所へと向かった

「ようこそ、幹旋所へ。仕事を請けに来た冒険者の方……でよろしいですか？」

↳幹旋所に2人が入りカウンターに立つと、先日の大男ではなく、背中に翼を持つ女性のヒトが加藤の方を気にしながらも聞いてきた

「ああ、そうだ。何か簡単なのはあるかい？」

「簡単と言いますと……そうですね、貴方ならご存知かと思えますが防壁の修復工事があります。

こちらは如何でしょうか？」

「やはり、簡単と言えばそれになるか……」

「工事？ってこの剣いらなくね？」

「まあな、こういう仕事も大事なんだが……。
お嬢さん、小型が出たとかいいうのは無いのかい？」

「あるにはありますが、……その」

「別にこいつが一人でって訳じゃない。

オレがメインとを考えてくれていい、こいつにはモンスターがどんな奴なのか……。」

そしてそれに対抗するためには工事とは言え、身体を鍛える必要性を身に覚えさせたいだけなんだよ」

「え？ そうなの？」

「あのな、カトー。お前が単身でいきなりモンスターと遣り合って勝てるだけでも、生き残れるとも思っているのか？」

そもそも、ちゃんと鍛えた兵士一人でさえ勝てるのなんて小型でも弱い奴が精々。小型で強い奴ともなればオレでも厳しい場合もある一匹でな？」

しかもここは他の街とは比べ者にならないくらいモンスターが多い地域なんだ」

「うっ、そうだよな……。うん、どんなのだったのだけでも見ておくと違うだろうし……。」

「そういう訳だ。それで、どんなのがあるかな？」

「ええっと、街の周辺で小型のカルガンが見られたというのがありまして。」

その発見、及び討伐に冒険者を集めている段階です。依頼主はモンスター関係なのでお分かりかと思いますが、領主様になりますね」

「ふむ、それでいい。
それで、何人規模なんだい？それによつてどの位置に付くか決める
からな」

「そうですね、カルガンは小型のモンスターですが、あまり大きな
数の群れは作りません、多くても10体程度のものですから。

……なので20人規模を予定しています。
ちよつどお二人でそれに達しますので、開始は本日の昼12時にな
るかと思ひます」

「20人か……まあ普通だな、悪くない。
分かつた、昼12時だな？どこに集合なんだい？」

「はい、南側街門に集合となります。こちらの札をお持ちください。
依頼した方に渡しているもので、硬い金属のモノですから万が一の
時の本人確認を兼ねてあります」

「確かに受け取つた。それと気が付いているとは思つが、こいつの
登録をお願いしたい」

「本当は登録してからじゃないとダメなんですけどね……。

貴方くらいの冒険者が付いているなら、つていう条件付でなんです
よ？

えつと、君？登録手続きをしますので、こちらの席に来てください」

「あ、はい。えつと……」

「そのくらいは自分で出来るだろう？行って来い、オレは少々他の
仕事も見てみる」

「との事ですし、こちらへどうぞ？」
安心して下さい、別に狩りに行って来いだとか試験があるとかじゃありませんから」

「受付の女性は、カウンターの端にある個室への入り口の扉をくぐっていった、そこで登録手続きをするという事だろう」

「はい。まずはお名前を宜しいですか？」

「え、はい。加藤祐です、カトウ・ヒロ……」

「はい、カトーさんですね？お名前がカトーで家名がヒロっと」

「え！？あ、すみません。ヒロ・カトーです！」

「あ、そうなんですか？もう、ちゃんと言ってくださいね？」

「それでは、ヒロさん。」

「年齢は？住所は？これは現在滞在している宿屋で構いませんよ？
但し、登録した宿には定期的、最低でも1年に1度は連絡をこれからも取って頂きます。」

「これは後で変更も出来ますので、今は泊まっている所を教えていただければいいので」

「えっと、すみません。住所つてのが分からないんですが……」

「ああ、別にどこどこの、なんて国じゃないんですから詳しくはいりません。」

「どこの宿屋なのか、それで結構ですよ？」

「それが書けましたら、どの程度の期間狩りといえますか、それをしてきたのか。まあ登録し始めは大抵初心者なので、そこはこちらで

記入しますので」

「えっと、『砂漠の水亭』っと、これで合ってるはず……」

「ん……はい、大丈夫ですね。驚きました、まさか字を書けるなんて。

ちょっとした新人さんに対するおちゃめのもりだったのに……。この年齢で冒険者初心者というのは少々遅い感じですが、なるほど……納得です」

(あれ？字書けるのって凄いのか？ルクータから教わったら簡単だったけども……、そーいやルクータも驚いてたな？

言葉話せるようになる方がよっぽだと思っただけだなあ、てかこっちの言葉覚えるついでに文字についても聞いてただけなんだが？)

ルクータが驚くのも無理は無い、言葉は2ヶ月ほどでカタコトに感じるものとは言えば会話程度ならば可能に、文字は2週間ほどで自分で話せる事は、少々文法が可笑しい点もあるのだが文字でも書けるようになっていた。

前提条件が絶対的に違うが、赤ん坊が2ヶ月でペラペラと言葉を話し、それから2週間ほどで文字も書き始めるようなもの……異常と見ても不思議はあるまい)

「はい、これで記入事項は終わりです。

あとは似顔絵を描くので、10分ほどじっとして下さいね？」

(へ？これだけ？いいのか？……いいのか)

10分経過

「はい、描き終わりましたからもういいですよ？
お疲れ様でした。この似顔絵は基本3年更新になります。
こちらの似顔絵を加工して、本人証明の証のモノにします。
えっと、このような感じのモノですね？」

「受付の女性が見せたのは、恐らくは自分のものなんだろう。
見た限りはカードのようだ、そこに凹凸で顔が描かれている、見事
なものだ」

「え？はい、ありがとうございます？」

「これを持っていけば、他の街では既に冒険者として扱われます。
登録料などは掛かりません、氏名を言えば大丈夫です。」

「長い間その街で仕事を請けるのであったら宿泊施設の更新も、とい
う感じですね？」

「え？登録料金？俺そんなん払いましたっけ？」

「今回の仕事の支払いから差し引きますので、大丈夫ですよ？」

「あ、そういう事……」

「それでは終了です、お疲れ様でした」

「お疲れ、カトー。似顔絵はつらかったか？」

あのじつとするのはどうも苦手であ……」

「あ、うん。てか字書けるつてので驚かれたんだけど？」

「はっは、そうか。それはいい事じゃないか？
字が書けるつてのだけで仕事の幅が大きく変わるからな？」

「へえ……つて、もう12時まであんまり時間ないんじゃない？
大丈夫なのか？」

「ん？そう言えばそうだな。
ふむ、それじゃあ行くか。お嬢さん、世話になったな」

「いえ、お気をつけて。……特に、新人さん？貴方がね？」

「うっ、はい。気を付けて頑張ります！」

くこうして彼は初めての仕事をこなす事となった。
腰に挿した一本の剣、そして胸元にある小さな棒切れを頼りに、彼
はそれを振るうことになる。

第9話 『異性!』

「武器を持って嬉しさあまってな感じで、こつやって仕事ってか…」

「…。モンスターとやり合う事になったわけだけど、質問があるんだが？」

「いいぞ? どうした、怖くなったか？」

「ずばり言うね? まあ、その格好悪い…けども、うん。」

「いやさ! さっきも改めて言ってたじゃないか…、鍛えた兵士でもつてさ?」

「俺はそういった事はしていない。うん、多少鍛えてはいたけど、そういう目的じゃないしさ」

「はっは、いい事を教えてやろうか？」

「モンスターと戦う上で最も重要な事だ…、怖がれ。恐れる。逃げたいと言う感情を決して捨てるな。」

「これが絶対的に必要だ、いいか? 忘れるな、脳みそに刻み込んでおけ」

「ルクーツアは南門へと向かっていた歩みを遅くした、そして語りだす」

「いや、それは普通誰でも思っつて…」。

「そうじゃなくて、どうやってらモンスターと戦えるのかってことをね?」

「加藤はその言葉に納得できないのか、困ったような顔をして更に」

たずねる」

「今いった事はその答えだ。言ったはずだ。

ヒトは、弱い。モンスターとやり合えば負ける、これが普通なんだ。その普通を崩すために人間は武器をより良いモノにしようとし、他のヒトは己の得意とする戦う術を他のヒトへと伝えて、更に昇華させている。

こう言えば簡単だ、だがソレがどれだけ困難な事か分かるか？

そしてその困難をどうしてヒトは未だ乗り越えようと出来ていると思っ？」

「それは……」

「怖いからだ、恐れているからだ、より安全な場所を築きたいからだ。

そして、モンスターと戦う事をするヒト等が強くなれる理由、それもまた同じ。

いいか、そう感じる事を……思う事を恥じるな。

要はソレを忘れない事、そして怖いと、逃げたいと感じる自分を恥じず、恐れないことだ」

「……俺がモンスターを怖いって思う事を恥ずかしく思わないで、恐れない？」

「そつだ、確かに屁理屈かもしれない。

だが、そう思っている事を恐れなければ、ヒトは立てる。一步前へ足を進められる。

たとえ、大型モンスターの眼前であろうとな？

いいか、決して忘れるな！お前はそうなるな！恐れを恐れるな！恐れを捨てる事こそ恐れる！」

「わ、わかったよ……、うん。忘れない」

「……、そうか。」

「すまないな、ついつい熱くなってしまった……」

「ははっ、いいよ。大事な事だからね。」

「言っちゃ悪いけど、この前の話よかよっぽど大事な事だからね、こ
と命に関わる事だしさ？」

「そうだな、とは言え先の話だつて大切なんだからな？」

「……さて、そろそろ南門に着くな」

「そうらしいね。遠くに見えるしさ、つてかさっきの話だけど。」

「結局の所、怖がるな、恐れるな、逃げるなだよな？」

「彼らの言うとおり、少し離れた所に以前この街に来たときと同じ
ような門が見える。」

「恐らく、そこには同じく斡旋所からの仕事を負った者がいるのだろ
う？」

「はっは、そうとも言えるかもな。だが、それらを克服するための
理由、根拠が大事なのださ。」

「モンスターは自分よりも弱いから怖くない。」

「これはダメってことだな、そうは思わないよ？まあ、時と場合による
んだかな」

「そうだよな、特に逃げるなつてのは難しいって。」

「勝てない相手に逃げられるなら逃げたほうがいいに決まってる」

「いいぞ、逃げ癖は嫌われるが、逃げるという選択肢を持つ者は強い。ほら、もう到着だ。暫くすればいきなり実戦だな？だが、流石にモンスターを見た瞬間に逃げようとはしてくれるなよ？」

「ぬっ、失礼な！俺が逃げるとでも！？」

「……………」

「ふう、流石ルクータだ。その目には敵わないよ…………」。はい、逃げる事を考えていました、この話を切り出したのも止めにしない？って提案しようかと思つての事です、はい」

「うむ、だが残念。今回については逃げ道はない。

俺が後ろにいるからな？絶対に逃がしはしない…………絶対だ」

「ナニソレ、言葉とか教わつてる時にもうつすら思つたけどさ。

ルクータってスパルタ？百とか何千で何万に突っ込めとか言つちやう？」

「なんだそれは？だが、強ち間違いではないな…………」。

時には大型モンスターであろうと少数で足止めしなければならぬ時もある。

これは本来は間違いだな、決してやつてはいけない事だ…………リーダーがその決断を下すのであれば尚の事。

正に逃げなくてはいけない場面と言える。

だが、そうしなければ守りたいものを守れない時もあるって事さ」

「うっ、そう言われるとあの古典映画が伝えたい事を考えさせられる…………」。

って違うわ！はあ、いいやもう……ってあそこにいるヒト達がそれじゃないか？」

「それ？……ああ、仕事仲間だな。

ははっ、そうだな。さっきから怖がらせる事ばかり言っているが、オレがいるんだぞ？

安心しろ、カトーは基本見ていればいいんだ、お前の分もオレが働
くさ。

……すまない！遅れてしまったかな？」

（見てるだけって……）

「おお？おたくが最後かなあ？

ふうむ、確かに……これで全員揃ったようすなあ」

くルクータは全身を鎧で包まれた小柄な男に話しかけている。

身体的にこれと言った特徴が無い所を見るに、人間のようだ」

「それでは、お二人も着た事ですし、4人組を作って頂きますかなあ。

と言いたいのですがあ、既に4組完成してましてなあ？あそこの2人との組になりますう」

（話し方がイチイチうざいやつだ……）

「おい、カトー。何してる、いくぞ？挨拶は大事なんだからな？」

「あ、ごめん。はいはいっ」と

く二人は組を組むことになる2人と言われたヒト達の所へと歩いて

いく。

近づくにつれて、2人は何か話しているのか声が微かに聞こえてくる、声色で2人が女性というのが分かった。

(うわあ、綺麗なヒトと可愛い子だなあ、今気がついたけど、この世界で女性と話すのって女将さんやラル以外だと初めてじゃね？

……あ、受付のヒトがいたか)

「すまないな、遅れたようだ。

オレはルクーツァ・シィと言う、今日はよろしく頼む」

「あ、俺は……」

「そして、こいつはヒロ・カトーと言って新米だ。

何分今日が初めてなんでな、色々と迷惑を掛けるかもしれんが、そこはオレがカバーするから心配いらない」

「……そんな感じです。よろしく……」

「あははっ、新人さんなんだ？よろしくね！わたしはレイラ！レイラ……」すみません、この子も今日が初めてという程ではないんですが、新人なもので。

私は……」

「もうっ！エリってば酷い！わたしが自己紹介してる所だったんだよ！？」

「……」

「……そう言う訳で、エリアスール・ラインと言います。彼女が言うようにエリとでも呼んで下さい」

く男2人の挨拶に返事をしたヒトは、やはり女性だった。

エリアスールと名乗る女性は背が高く、加藤より少々背が低く175cmあるかないかだろう。髪は金髪で背中まで伸びる程度の長さだ。

小柄な女性、レイラは150cm程度の身長で、笑顔が眩しい少女だった。

髪は茶、長さは肩口までで揃えられており、軽いウェーブがかつている。

「分かった、オレの事はルクーツアと、こいつは……」

(させるかつ！今度こそ俺がつ)

「俺の事は力……」分かった！ヒロって呼ぶね！」

「あ、うん。好きに呼んでくれればいいよ」

「すみません、この子はこつという子なんです。気を悪くしないで下さいね？」

「いや、全然そんな事ないですよ。ただちょっと元気ある子なんだなあって」

「そうですね！わたしの長所なんだ！この前なんかね、アンリちゃんか雷が怖いーって泣いた時もワタシがお話したら泣き止んだんだよ！わたしと話していると怖くなくなるって！それでねっ」

「ははっ、その話はまた後で聞かせて貰おうかな？そろそろ行くようだからね？」

「えへへっ、ごめんなさい。それと、約束だからね！終わったらお話を聞いてね？それと、ルクのお話も聞きたいなあ」

「ルク……、ああ約束だな。」

さて、そこで俯いて肩を震わせている小僧。置いていくぞ？」

「ははっ、悪いって！機嫌直してくれよ！なんか可愛いなって思ってたぞ？」

どうしよ、俺も今度からそう呼んだ方がいい？ってか呼ぶ？」

「ほう、いい度胸だな？ヒロちゃん、今度から俺はそう呼ぶとしよつか？」

「……………」

「……すまん、流石に自分で言っただけで恥ずかしくなった」

「いいんだよ、ヒトなんだ。そういう事だつてあるぞ。」

男として言おう、今の事はお互いに忘れよう……………」

「ヒロ？ヒロちゃんって呼ばれたかったの？えっと、ごめんね？」

そう呼んだ方がいいなら……………」

「こおらあ、いつまでやってるんだあ？もう他の組は門外で待ってるんだぞあ？」

（鎧の男が言うように、他の組は既に門外で同じ組となった者達とそれぞれ装備などの確認を行っているようだった）

「すまん！スグに行く！」

（危ない所だった、まさかあの妙にいらつく声の持ち主に助けられるとはっ）

「ほら、レイラ。行きますよ」

「うん、ヒロも。追いつちやうよ？」

「っと、はい。行きますよ」

く4人は門の外へと向かう。
モンスターへと向かっていくのだった

「さあて、仕事の内容はあ、もうお分かりだと思う。」

それぞれの組、5つでもってまずはあ、モンスター『カルガン』の探索をお願いする。」

発見したならばあ、笛で他の組にい、知らせを発して下さい。

その後はあ、組がその笛を鳴らした組の近辺に3つ以上集まったならばあ、討伐へと移行して結構です。」

く南門から少し出た所、街の防壁の前で鎧を纏う小柄な、しかし恰幅のいい男が説明を行っている。どうやら彼は監督役のようだった。」

「なあ、なんで組全部でいかないんだ？その方が安全じゃないか？」

「その通りだが、今回は小型の探索だからだからな、こうするのが通例なんだ。」

だが、こういった組を小さく分けてやる場合、他の組との連携というか、極論、見捨てないという意味は暗黙の了解なんだ。

だから、そうやって危険を承知で分けられる、何かあっても大抵の事なら他が助けしてくれる。そう信じられるからだ。」

「暗黙の了解ねえ……………」

く加藤とルクーツアは小声で話をしていた、彼らの前方では鎧の小男が説明を終えようとしていた。」

「…………カルガン単体はそう強いモンスターではないのはご存知かと思うが、奴ら小型のはあ、集団で行動する。」

例え単独でいたとしてもお、必ず笛を使うようにい。
それではあ……御武運をつ！」

く小柄な男が最後は間延びしないどころか、とても力ある声を発した。

その声によつて他の組は移動を始めた

「へえ……話し方がアレだと思つてたけど、なんだよ。
最後のあの声……すごかつたな」

「ははつ、仮にも幹旋所の監督役だぞ？しかもこの街のな。
それなり以上の実力者さ、見た目などに騙されるんじゃない」

「ヒロ？あのヒトはねえ、この街を築く時には先頭になつてモンスターと戦つたつていう人間なんだ。

今はもう年齢もあつて、前線からは離れているけど、それでもすごく強いんだよ？」

「ほう、レイラ嬢はあのヒトの事に詳しいのだな？
なるほどな、最後の一言のみとはいえ、あれほどの覇気だ。
その話も納得出来るというものだが」

「でしょー？あのヒトはね！デイリーつて言う名前なんだよ？」

「名前まで知ってるんだ？レイラつて物知りなんだなあ」

「それは今措いておきましょう？私達も行かなければ、他の組は既に山の麓に向つていますよ」

く今回モンスターを探索するのは山の麓にある森の近辺だ。

加藤が湖で遠目に見た山がそれに当たる、その山の向こう側を進んだ先にこの街『サツクル』があったようだ。

「へえ、山に向うんだ？街道の端にある草むらとかだと思ったよ。結構、草の背が高いから隠れられそうだしさ？」

「カルガンというモンスターは基本的に草原に住む、その考えは間違っていないな。」

通常ならば、だがね？だが街の近辺に、森にいますと云う。

この事から分かる事は仔を抱えた集団という事だな？」

「そして、幼い仔がいる小型のモンスター達は森を好むんです。」

まあ、小型だけなんです。そういった習性が分かっているものは

……」

「へえ、ルクータはいいとして、エリさんも結構詳しいんですね？」

「でしょ！エリはね！すっ」……」

「レイラ……それにカトーさん？いい加減に行きましょうか」

「はい《うん》……」

「まあさて、装備の確認をしていこう。オレ達はしていないだろう？」

オレは見たら分かると思うが剣だ、場合によっては2本使う。」

「私も見れば分かりますよね？この槍です」

「わたしはこの袋の中身！ふふっ秘密だよっ！」

「秘密って……いやまあ、腰に剣もあるし別にいいのか？」

「彼らはそんな事をしながら徐々に街門を離れ、森へと歩いていく、近寄るにつれて全員の顔に緊張が僅かに見え始める」

（俺は別に不思議じゃないとしても、ルクータ達も緊張してるのか？ いや……、レイラはどうか知らないけど、ルクータは俺に危険が及ばないように気を配っているって所か？

そういえば、この街に向う途中も時々こんな顔してたっけか……）

「ふむ、どうやら確かにモンスター、小型のソレがここらにいるよ
うだな？」

「そのようですね、他の組はもう森の中に入っていると見ていいと
思います」

「んー？ ヒロ、緊張してる？ だいじょーぶ！ 会ってから時間は経っ
てないけどわたしとヒトはお友達だよ？
なにか在ってもわたしが守ってあげるよ！」

「彼が緊張してる面持ちな事に気がついたレイラが細い腕に力こぶ
を作る真似をして話しかけてくる、反面に彼はなんとも言えない顔
をしていた」

「はっは、カトー。守って貰えるそうだぞ？ よかったじゃないか」

「うっせー！ たく……けどまあ。ありがとう、レイラ」

「……………驚きましたね。」

レイラは大抵そういう事を言うのですが、断つたり、癩癩を起こすのが大半でした」

「……ヒロはちゃんと分かっているんだね、まだ自分は弱いって事」
「……………ほう」

「彼が感謝の返事を返した事に、エリは驚きを示し、レイラは子供染みていた今までの話方では無い、静かな言葉を紡ぎ、ルクーツアはその3人を見て目を細めた」

「いや？正直な所を言えば、自分が弱いなんて思いたくないさ。こう見えているいる鍛えてきたつもりだし、レイラみたいな女の子に守られるなんてのは正直恥ずかしいし嫌だ。だけど、モンスターってのが分からない、見た事がないからね。だけど怖いモノってのは聞いた、ヒトを殺せるって事を……………」

「3人は周囲に気を配りながらも、静かに彼の言葉に耳を傾ける」

「だったら、そういうのは捨てるべきだ、そう思う。あつちでもそうだった、そういう時に何も出来ない俺がすべき事は従う事だけ、格好悪いけどな。そしてそうして今ここに……………、今は。これでいい。これしか出来ないから。だけどレイラ……………いつか、いや少ししたら俺が守る、必ずな？だから今はお願いするよ、なにせ俺は素人だからな！」

「あはははっ！そっか、うん。いいよ、守ってあげる！安心してわたしはこう見えて結構強いんだからね？」

「ふふつ、素晴らしいです。自分は弱い……そう言えるヒトは、特に貴方の年齢の男性でそう言えるヒトは多くありません。」

非力の身ではありますが、今の貴方になら力になれると思いますよ」

「ふむ、悪くないな。」

それでこそ、オレや……跳びリス君が守りたいと思ったカトーだ。

その心を忘れるんじゃないぞ、自分は弱いつていうことをな？」

「ちえつ、ルクータくらいは、そこは弱くないとか言ってくれよな？」

「ははっ、事実としてカトーは弱いからな？」

それと今回は良いとしても、話している最中でも周囲に気を配る事を忘れるなよ？」

(いやそうだけど、こつ男の子的な点でフォローしてくれても良くねーか？

そりゃ弱いよ？先輩に守ってもらってたくらいだしさ？でもよお……)

「さて、カトーさんの話も聞きましたし、入りますか？」

「ああ、いつまでも此処でうるうるすべきでは無いな。」

モンスターがどうのではなく、仕事をする身としてだがね？」

「そうだねー、流石に何もしないでお金をもらうっていうのは良くないよね」

「んじゃまあ、行きます？あ、俺はどうすりゃいいの？剣は抜いた方がいい？」

てか纏まって？一列になつて？」

「剣はいつでも抜けるようにしていればいい、今はまだ抜くなよ？
危ないからな。」

それで行き方だが……纏まってだな、ひし形のように前方に一人、
ここは……」

「それでは、私が前方を担当しますね、後方はルクーツアさんにお
願います」

「それじゃ、わたしは左で、ヒロは右ね？」

「あ、うん。分かったよ」

「隊列と言うにはお粗末だが、彼らは纏まりを持って森へと入って
いた」

「カルガンは体長が1mほどの小柄なモンスターです。」

小型の中でも最小の部類と言ってもいいかもしれませぬね」

「だが、素早い……一般人にとっては中型よりも恐ろしい部類と言
える。」

そして腕というか、手が発達している上に腕部の皮膚が非常に硬く、
それを武器に殴打してくる奴だ」

「殴打……それと素早いのか、それってどの程度なんだ？」

「んー、素早いというか、ジャンプするんだよね。切りかかったら、上に跳ばれて後ろを取られちゃうってのは良くあることかなあ」

（殴打……パンチ、それにジャンプって……カンガル？

猫の大きなモンスターってのもいるっていったし、ライオンっぽいよな？

昔の地球では考えられない分布だな、さすが異世界）

「カトー、話はいいが、気を逸らすな。いつ襲ってくるか分からないんだぞ？」

「あ、ごめん。言われたばっかなのにな」

「仕方の無い事ですょ？慣れですし、初めてなら何かしら思うところもあるでしょう。」

……でもモンスターに怯えた風ではありませんね？珍しい事ですが、必要以上にソレを抱えない点は良いと思います」

「うんうん、さっきみたいな事をわたしに言われて癩癩起こしたのに、いざこうなったらビクビクしてたりするよりよっぽど良いよ？」

（ぐう……褒めてくれてるんだろうが、精神に絶大なダメージだ！仕方の無い事と割り切っても、ここまでの威力を秘めていたとはっ

「って別に怖くないわけじゃないよ。ただルクータとかがいるから安心できてるだけだっつて。」

ここに一人でつてなったら、普通にビクビクなってるって……モンスターってのがいるって知った今はね？」

(だよな、今思えばあの時の俺はなんとというか、うん、アレだった)

「お前たち、静かに……、それなりに奥へ来た。

そろそろ何かしらあっても可笑しくは無い、それにこの森はモンスター達の縄張り、カルガン以外の奴がいても不思議じゃないんだ」

「分かっています、ただここは開けていますから、万が一があっても十分にカバー出来ると思ひまして……つい」

「エリが言うように、ここは森の中でも開けた場所で木が少ない。というよりは木はなく、背の高い草が生い茂っていた」

「だからこそ、だ。

こちらが対処しやすいという事は、奴らも襲いやすい事に繋がっている」

「そんな危ない場所なのに、なんで普通に来ちゃってるわけ？
つてか、戻った方が良くない？危ないなら違う所にいった方が」

「わたし達はモンスターを探してるわけだから、襲われるにしても出てきてくれた方がありがたいからね」

(なに簡単に襲い掛かってくれた方が、とか言っちゃってるの！？
それを否定しない他の2人も！ちよつと可笑しくない!?)

「……ふむ、どうやら居ないようだ。

期待はずれだったか、折角力トーに体験させる良い機会かと思っただが」

「そうですね、態々大きな声で居場所を教えながら歩いてきたというのに、何も反応が無いところを見ると近辺には居ないようです」

「残念だなあ、ヒ口を守ってあげたかったのにね」

「やめて、お願いだから、ほんと、うん、まじでだよ？」

↳彼らがこの辺りに居ない事を認識して少しばかり気を抜いていた時、耳に甲高い音が届いた。

恐らくはコレが笛の音なのだろう、少なくともモンスターの鳴き声には聞こえない↳

「っ！どうやら他の組が発見したようだな！」

「そのようです、しかもそう遠くはありません！」

「急いだ方がいいかもね、さっきのから何度も連続で笛の音が止まない！」

↳加藤以外の3人は、その笛の音が伝えたい事を必死に読み取ろうとし、そして目で何か確認を取るような仕草をしていた↳

「えっと？笛が鳴ったって事はモンスターを見つけたって事だよな？それで何度も鳴らすってのは早く着てくれって言う意味で、つまり？」

「なにかしら予想外の事が起こったという事だろうなっ、カトー！飛ばすぞ！」

……先程とは逆にオレが先頭を行く！」

「そう言つと、ルクーツアが先頭となり、駆け出す」

「ちよつ、はええ！ルクータ、容赦ないなつ！？」

「あははつ、そう言いつつもついてきてるよ？凄いね、まるで森で生活してみたい！」

「彼は速いと言つが、平地であればそう大した速度ではない。」

問題はここが森であり、足場が不安定かつ行く手をさえぎる枝などの障害物があるということだった。

そこを上手く避け、時には切り裂き突き進む、ルクーツアの先導のおかげで随分と楽だとは言え、素人の冒険者では到底付いてはいけないものだった」

「確かに予想外ですね、最悪、私かレイラが付いて後からと思つていたのですが……ルクーツアさんが態々カトーさんに言つた意味が分かりましたっ」

「走るのだけは昔から得意でねっ！？とは言えきつつい！」

「彼らは走りながらという事もあり、少々声を荒げて話す」

「カトー！もう一段階速くするぞ！そろそろ街で鈍つた調子も戻つただろう？」

「お前の本気の走りの速さで行く！」

「げえ！？あれは野犬が追ってくるっていう嘘に騙されたから出せただよ！」

「普通出る訳ねーってのー！」

「残念ながら、ここに一人でいればそれより恐ろしい奴が来るかもな!?」

これだけ音を出しているんだっ、そうなくても不思議はないぞ!」

「ルクーツアはそう脅しを掛けると、言った通りに更にスピードを上げる。」

普通に走っていてもそれなりの速度となり、流れる風景の見え方が変わる。」

「っ!」

「んー、本当に凄い!まさかここまで速いなんて!」

「さすがに話す余裕は無いようですね。ですが呼吸には余裕がある、本当に初心者ですか!?!」

「嘘偽りなくカトーは新人冒険者だぞ!

だが、言っていただろう?こいつは脚力だけは相当なものという」とだっ!」

(だけ、ってのを強調するなっ!)

「そう言いながらも彼らは駆ける、そして段々と笛の音が大きく、つまりその場所へと近づいていった。」

「笛の音からして、そろそろだっ!

カトー、準備はいいか!?一気に行く、状況次第ではレイラ嬢達と3人で街へ戻って貰うが、まずは行くぞ!」

「状況次第って、どういう状況さっ!」

「奇襲を受けたのかもねっ！」

「先程、初めて笛の音が聞こえてから、今まで笛の音は絶えていません！」

「これは最悪があるかもしれないね！」

（おいおい、さっきから状況次第だの奇襲だの、最悪って！？カルガンってのはそう強い部類じゃなかったんだろ！？）

「っ！止まれ！！！」

「一番先頭を走るルクーツアが足を止め、他の3人に命令を下した」

「っ、と。とと。はあはあ、急に止まれとか言うなって！」

「っ！これは……」

「……………カルガンの死骸だね」

（これがカルガン？っていうか死骸、ナニかの死体を見てるってのに案外動揺しないもんなんだな。

不思議な気分だ、ランナーズハイってのか？……………違うか）

「……………カルガンがコレってのは分かったし、死体ってのも分かった。でもコレは他の組が倒したって事だろう？」

「違う……………これはヒトが殺したものじゃない。

他のモンスターに殺されたものだ……………」

「へ？モンスターに？」

「そのようです、鋭いものに貫かれた、いえ噛まれたのが致命傷のようです。」

「これは恐らく……」

「ロイオン……だね」

（ロイオンってライオンだけ？……あれ？）

「中型じゃね！？」

「そう、中型のモンスターにやられたと考えるのが普通だ。」

なるほど、仔がいるから森に来たと考えたが、中型に追われてここに来たという事だったか……」

（そうか、森で全力を出しても結構余裕に感じてたのは森の木々が倒れてたから、つまり何かが木を倒した、中型がそれってこと）

「って、それはいいんだけど……どうするんだ？ぶっちゃけ俺は逃げた方がいいと思うんだけどー！」

「そうね、逃げるべきかもしれないわ……」

「たしかに、ここは一先ず街に報告するほうが賢明だね」

（エリさんもレイラも何だか口調が変わってないか？余裕が無いって事か？）

くエリアスールは丁寧な口調が無くなり、レイラは明るい声が消え

た。二人とも声色が冷たい響きに変わる。

「だが、まだ笛は鳴っている……。見捨てるというのは……」

「そうかもしれないけど……」

「でも相手は恐らく中型のロイオンでしょ？……その上もしかしたらカルガンもいるかもしれないってなると」

（俺は逃げたいって更に言いたいけど、言えない雰囲気だ……）

「加藤以外の3人は逃げるといふ選択を選ぶのが最善だと分かっているのだから、しかしソレを選びたくないという感情が騒ぎ立てているのは表情から明らかだった」

「ここは、まず街に行くべきかもしれん。」

「中型がカルガンだけを狙っているならいいが、そんな楽観視は捨てるべきだろう」

「今街に向われれば、撃退は出来ても甚大な被害があるかもしれない。せんし……事前にそれを報せるのは悪くないですね」

「だけど、まだ鳴ってる……」

「……………」

「3人はまた何か悩むように、苦しむように、嘆くように黙考を続ける」

（やっぱり、他の組を助けに行くっていう考えが捨てきれないのか

……。
暗黙の了解、ただそれだけでなのか？それにどうして暗黙なんだ？
いや、今はどうでもいい事だ。

とにかく凄いな、俺は怖くて仕方が無い。モンスターを見たのはこの死骸だけ、だから直接怖さが分かるわけじゃないけど、ルクータですらこうも悩む存在……。

やっぱり怖い、逃げたい……逃げたい！死にたくない！

その時だった、笛の音が鳴り止まぬ中に微かに、本当に微かにだが、4人の耳にヒトの悲鳴が響く

「……………」

3人は一瞬、軋む音が聞こえるほどに歯をかみ締め、拳を強く握る、握る……。

そして加藤は、その光景に何かを重ねた、重ねてしまった

（悲鳴……俺は、やっぱり怖い。逃げたい。死にたくない。……でもこれはあの時もあった。

そして今の皆の顔……、やっぱりだ。あの時の顔だ……）

第10話 『

白雲!』(後書き)

題名の『白雲』とは四文字熟語からもじったもので、『白雲弧飛』
というものです。

親の事を思い出す、そして悲しむという意味らしいですが、今の彼は独りではありません。

なので親の思いをという部分と感じた白雲のみを題名にした次第です。多分、使い方が間違っているかと思いますが、そこはご勘弁を。

（俺がなりたいものは大人だ、父さん……母さんみたいな、そんな大人だ）

「……………」

「……………助けにいこうにも、いや……やはり」

（皆が言いたい事は分かってる。そして言えない理由も分かってる。俺だ。俺が弱いから、ただ、それだけが理由。

中型モンスターってのは街単位、つまり大勢の戦えるヒトで対抗すれば狩れる相手、狩れる……つまり優位に立って行えるって事だ。だけど優位じゃなくても劣勢だったとしても、対抗するのは少人数でやれない事はないはずだ。

事実、ルクータは悩んでる、中型をルクータならどうにか出来るんだ。

そして足止めじゃない、他の組を助けるためにはルクータだけでは厳しい、そうするにはレイラ達の協力が必要……。

俺を一人にしたくないから、ルクータは、皆は……、言えない）

「よし、カトーにエリアスール、レイラ嬢……てt t」

「……………いや、俺が街に応援を求めに行くよ。」

皆は他の組の救援に向ってくれ、それが最善だ」

（彼は、いつもと違う色の、燐とした声を出す。

もし元の世界で加藤の知り合いが聞いたのならば、誰かの声に似て

いると思ったことだろう、そんな声だった

「……………何を言っている？」

少しばかり森に慣れていいるからと言って、図に乗るんじゃないぞ？」

「ルクータこそ、少し黙ってる。

俺の保護者として言ってくれているなら、尚更だ、黙ってくれ」

（そうだ、俺は弱い。こんな状況でも、いやこんなだからこそ、守ろうと思われるほどに……………。

だけど、だからこそ言わないといけない、あの時は言えなかった。自分の意思を伝ええないといけない、こんな時にまで子供のままではいられない！）

（彼は、睨むでもなく、見つめるでもない。

ただ、瞳を向けた。これもまた、誰かのものに似ていた……………）

「っ、カトー、いい加減にっ!？」

（ルクーツアが手を伸ばし、加藤の肩に触れようとした時だった。その手を掴む二つの細い手があった）

「……………」

（彼女達は静かに首を振る、そして今は背を向けている加藤を見た）

「……………お前」

（そこにあっただのは、弱者で敗者の背……………、しかし同時に強い何かを宿し始めている背中だ）

「ルクータ……生意気言つてごめんな。偉そうなくち聞いてごめんな。

正直、俺は死にたくない、他の組がどうの、暗黙のがどうの、どうだつていい……最低だな。

だけど、死にたくないけど、なんでかな？

ルクータ達のそんな顔は嫌なんだ、いつまでもこのままの自分が嫌なんだ」

「だが、カトー……万が一、街へ向う途中でロイオンに追われたカルガンにでも遭遇してしまつたら！」

「そうだな、だけど、それ以上に、いやなんだ。

俺は弱い、だから俺が倒すつて言えない。ヒーローにはなれない……。

今の俺じゃ、命を賭けたところでスパルタにすらなれやしない、命を賭けても中型には届かない」

「あの例え話か……だがっ」

「だけど、俺さ……走るの得意なんだよ。

こんな役立たずな俺に役目をくれないか？ただ、守られて逃げるだけじゃない、応援を呼ぶつていう立派な役目をくれないか？」

「カトー、だがな？中型がいるとなつたら普段は安全な場でも、そこにいる動物達は敏感になるんだ、大人しいヤツも襲い掛かる事だつてあるんだ。

その上、さつきも言つただろう？カルガンが」

「俺は、走るのが得意だつて、言つただろ？出てきたら逃げるぞ。

頼む、任せてくれないか？」

「ルク、もう駄目だってば、見たらわかるでしょ？
今のヒ口、なんだか凄い格好良いよ？」

「は？なんだ唐突に……それに、格好悪いだろ？つてそうじゃなくてっ！」

「いいえ、とても良いですよ。

貴方にとって、今のこの森を駆ける事は命懸けでしょう？」

私達が中型に挑むのと同じくらい、いえ、心情も加えればそれ以上
かもしれない」

「事実、加藤が脅威がいるとハッキリと認識して一人で森を歩くの
は今回が初めてだった。

良く見れば、加藤の足は微かに震えていた、武者震いのソレではな
いだろう」

「いやいや、そんな良いモノじゃないって。

俺がいたら、助けにいくのも行けないって思ったから言ってるだけ
なんだって……」

「……だから生意気だと言っただ。

まったく、いいか？駆ける、今まで以上に早く、速く、疾く《はや
く》だ」

「え？い、いいのかっ！俺がやってもいいのか！任せてもらえるの
かっ！？」

「ああ、任せる……いや、頼む。

俺達は中型モンスター、ロイオンの足止めに向かう。

カトーは街へ向い、ロイオンがいるという報告と応援を求めてくれ」

「あ、ああ！分かった！」

「その声は先ほどの声とは少し違っていた。燐としたモノを残しつつも彼の声かとうが混じり始めた、彼の声だ」

「いいですか？万が一、カルガンに遭遇してしまったら、最初から背を向けて逃げるのではなく、一度足を止めてカルガンを睨んでから、再度走ってください。

本当なら、私達の誰かも一緒に行きたいのですが、ロイオンとなればそれも厳しい……」

「カルガンとかの小型は群れていればお構いなしに襲ってくるんだけど、単体の場合は、やるならやるぞーって見せてやれば襲ってこない事があるんだよ？」

「へえ……分かった！まあ、そうならない事を祈るよ」

「ふふっ、そうですね。」

もし、スグにでも遭遇してしまった場合は大声で知らせてください、私が向きましょう」

「いやいやいや、いらないうって！てか声って……悲鳴？」

「うんうん！きゃあああって！もしそんな声出したならわたしが絶対助ける！」

『大丈夫ですか、お姫さま』って言って助けてあげる！」

「……………」

「何を馬鹿な事を言っているんだ、お前達。カトー、もしカルガンが出た場合はエリアスールが言っていた通りに。」

「いいか、駆ける、お前なら出来る、絶対だ」

「っと、ああ！任せてくれ！」

「そう言うと、加藤は走り出す。」

段々と速くなる、先ほどの速度よりも速いかもしれない、それほどの速度だ」

「ひゃあ、やっぱりヒロって、足速いんだねえ……………」

「それにしても、他の組なんて、暗黙の了解なんてどうでもいい、でしたか」

「暗黙の了解……………大抵の場合は命を守り守られるための掟の一言で終わるもの。だが、このサツクルのような街の場合、ちょっとした種族間の争いの火種が、正に命取りになりかねない、な」

「そうだねえ、獣人だけの組だったから見捨てたんじゃないか？とかで街がぐちゃぐちゃになった所もあったみたいだしね」

「そうだな、それは今は置いておこうじゃないか。」

行くぞ……………オレが道をつくる、付いて来い……………」

「ルクーツア達は静かに頷き合つと、加藤とは違う方向へ足を向け

る。
しかし、ルクーツアは一瞬、加藤が走り去った方向を見て、苦く笑った。

「暗黙の了解など、か……」。

ふっ、だからカトーはまだまだなんだ。

しっかりと、やってみせたじゃないか……」

「何も、守るといふものは命だけでは無いのだ。

時にはそれ以上に重いものがある、意思だ、信念だ。

加藤はルクーツア達のそれを守るためにたった一人で森を駆けると言ったのだ。

正しく、ソレのために彼らは走る」

第12話 『 強者! 』

く足は大地を踏みしめて、助けを求める音の元へと駆ける。
そして強者たちは弱者かろうが未だ持たない強さを滲み出させた。

「武器は大丈夫か!？」

「もちろんです、槍は万全ですよ!」

「わたしの弓も問題ないよ!いつでも撃てる!」

くどうやら、秘密の背袋の中身は弓だったようだ。

シンプルでいて、力強さを感じさせる大きな弓、しかし彼女はそれを軽く持つ。伊達に冒険者ではないという事だろう。

「……いいか最終確認だ、ロイオンで気をつけるべきなのは速度だ、攻撃力云々は中型の一言で分かるだろうが、いいのを食らったら終わりだぞ!」

「わかってるってば、安全に倒すのは今の装備じゃ無理。比較的軽い装備しかしてきてないからねっ!」

「ですが、幸いロイオンです!最もヒトと戦ってきた中型ですから対処法も多岐に渡ります!」

「今回取る方法は一つ……牙を折る!そうすれば倒せなくとも退かせる事が出来る!」

ロイオンは牙を失えば逃げるからなっ!」

「それじゃ基本はルクとエリが、かく乱！わたしが重点的に足を狙う！少しでも動きが鈍ったら！」

「任せる！オレが決める！」

「私はその際のフォローに回ります！」

く3人が確認をしながらも森を駆けていた時だ。そう遠くない所から、金属音が聞こえてきた、そしてく

「キィアオオオオオオオオオ」

「っ！？」

「いたなっ！」

く彼らの目の前、というわけでは無いが目に見える距離にソレはい

た。体長は6mほどだろうか、以前言っていた通り、見た目は大きな猫という感じだ。

しかしその体は鎧でも纏っているのではと思えるほどの鱗で覆われており、大きな牙、そして鋭利な爪、猫に似合わぬ太く大きな尻尾を持っていたく

「他の組はやはり居ないか、恐らく森の外だろう。」

予想通りだな、お前達、さっき言った事を頼むぞ？」

「まだ彼らのいる場所からはモンスターしか目に移らないが、それに反撃する数が少ない、それによって他の組はこの近辺にはいないと確信したのだろうか」

「それでは、レイラ。頼みますよ?」

「……………任せて」

「……………おおッ!」

「……………っ!」

「静かな覚悟の言葉を受け取った2人は一気にロイオンが暴れた事で作られた広場へと躍り出て、今までロイオンに圧されていた他の組の男達の前へと駆ける」

「……………来てくれたかつ」

「……………はあ、はあ、すまない……………」

「悪いが、一人重症なんだ!こいつを下げる!お前達、頼んだ!」

「了解した!……………準備はいいか?急ぐぞ!」

「……………よし、背負った!!」

「森に入るとき、先導は必須だ。逃げるときは言つに及ばないだろう。」

「故にここで中型と争っていた、いや逃げていた組から3人抜ける。ここに残るのは組のリーダーと思われる竜人とルクーツア達の4人」

になつた

「それでは御武運をつ……………！」

「すまない！すぐ戻る……………っ！」

「重症を負つた者を背負つたヒトと先導役は言葉を残してその場から離れていく、それを見届けたルクーツアはロイオンだけに意識を向けた」

「お前は大丈夫なのか？もし無理ならば、お前も行け。」

正直、ロイオン相手ではそう余力はない」

「いや、大丈夫だ。」

それよりもすまねえな、まさかロイオンが出るなんてよ……………。
本来なら無視して逃げてくれと言いたい所なんだが、情けないわな……………。

それと、おれっちはギョッセつつんだ、お前じゃわかりにくい、
そう呼んでくれや」

「ギョッセと名乗つた男は、見た目はほぼ人間でルクータよりも若く、加藤よりは年齢が高そうだ。」

しかし眼が赤く、耳が尖っている。気のせいかな犬歯が人間のソレよりも二周りほど大きく見える。

そして手には大きな剣、両手剣を持っているが、所々刃こぼれしていた、どうやら今まで主にこの男がロイオンと遣り合っていたようだ

「そうか、ギョッセ……………だな。」

だがオレ達とする事は遺言を語る事じゃない。

気を逸らすな！来るぞ！」

く怪我人の撤退準備の間、ロイオンの相手はエアースールのみで行っていた、攻撃などしない、出来ない、全神経を使って回避し続けていたのだ。

そして、彼らが去つたと見るや、攻勢に移るために距離を取った時、ロイオンは素早く動き回っていたエアースールよりも倒し易いを見た、動きを止めているルクーツア達へと向つただけだ。

「…っ！」

「ギィエアオン！」

く猫のよう、それは正しくそうだった。走る速度自体はそう恐れるものではない、しかし加速が凄い次元なのだ。
一気に、ではない、最初から最高速度で飛び掛ってくる。これが恐ろしい。

「つつえい！」

くギョッセはすぐさま横に回避、しかしルクーツアは前に進む。

そして剣を両手に持ち、ロイオンに向けて駆けた。

そして両者は交差する、だがルクーツアは無傷、いや脚に土がこびり付いていた。

「なんて野郎だっ、ロイオンの足元を滑りやがった！」

く簡単に言っているが、これは難しい。いやその技術自体は誰にでも習得できるものだ、なにせただ前へ滑り込むだけなのだから。

ロイオンはその加速故に飛び掛ってくる場合のそのほとんどは直線

にしか進めない、だからその選択はある意味では安全と言えるかもしれない。

しかし、そこに飛び込める者はそうはいない、一步間違えば防御もなにも関係なく即死するためだ。

「ギイイイアオウウウン」

くロイオンは怒りの雄叫びをあげる。

その理由は僅かに流れる赤い液体にあった。そう、ルクーツアが下を滑り抜けた時に斬り付けたものだ。

「ふむ、運がいい。こいつはまだ成体ではないのか？鱗が本来のソレより脆い！」

レイラ嬢！精度は気にするな！射って射って射ちまくれ！」

「……分かった、わたしも出る！」

く森の中からは、その射線にロイオンが来なければ撃てないからだろう、レイラも広場へ躍り出た。

そして、ルクーツアや先のエリアスールの動きで力量が分かったのだろう、ギョッセはレイラの傍に駆け、守りの姿勢を取る。

「悪くない！だが、基本は動け！」

「つつええあい！」

くエリアスールが一気呵成に槍を構えて突進、いや風になる。

ルクーツアにつけられた傷の痛みによってだろうか、動きを止めていたロイオンの後方を槍を薙ぎながら駆け抜けた、勿論その風は敵とするモノに傷を負わせる。

「グウイイイイイオオオ！」

くロイオンは己の獲物に好き勝手に動かれて苛立ちを隠せないでいる。

しかし、今まで獲物を痛めつけるのに執心していたツケで、この場はヒトにとってそれなりの場になってしまっていた。

「おおっっ！」

「てあえいい！」

くそしてロイオンは認識を変える。この獲物は獲物ではないと。

先ほどまでの獲物と似ているが、これは敵だと認識する、そしてロイオンは中型の脅威を見せつけ始める。

「グアオオオツンンン！」

くそれは先ほどまでの雄叫びと似ているようで全然違う。それには殺意があった。

ヒトという脆弱な存在にどうしようもなく恐怖を抱かせるソレが内包されていた。

「ちい！お遊びは終わりだっ！あいつらはもう森を抜けたのか！？」

「分かりませんがまだだめです！そう時間が経っていません
「！」

「くっ、いくら弱い部類のロイオンとは言え、そう簡単に貫けない

「よー」

「彼らはもとよりこの場で勝てるとは思っていない、相手を疲労させ街の応援を待つ、或いは牙という最大の脅威であり弱点に逆転の望みを託しているのだ。」

「しかしそのどちらもこの場では難しい、狭いのだ。」

「こう狭くては、この勝負の鍵であるレイラがその力を発揮できずにいた。」

「ギイイアオオオン！」

「余所見をしている暇はない、先ほどと同じように、しかし明確な狙いを持って凶器を振るってくる脅威がいるのだから。」

「くつう！」

「ふつつえあ！」

「ルクーツアが狙われた、彼は全力で回避に移る、もはや先の小細工をしている余裕はない。」

「しかし反面、槍という間合いの長い得物の長所を生かしてエリアスールは、跳び下がりながらも風を薙ぐ。」

「キギイオアアオオオン！」

「つえい！」

「ルクーツアは先ほどの攻撃からあまり攻撃は行っていない、エリアスールの死角をカバーする形で動いていた。」

「エリアスールはそれを受けて更に攻撃の手を強める。」

「くっ、あまり良い流れではありませんねっ、このままではどちらも同じく疲弊していきますっ」

「ヒトとモンスター、両方が疲弊したとしたら、押されているヒトはモンスターに為すすべなく食らわれてしまうだろう」

「焦るな、今の流れでいいっ、最初言った事を忘れたのか！疲弊させれば勝機があるんだ」

「ですが、このままではっ」

「なに、万が一になったならばオレが出る……そうなたらお前達も退け、いいな？」

「……なにを？」

「そこっ！」

「エリアスールとツクーツァに気を取られていたロイオンに向けて、ギョッセに守られたレイラは矢を放つ、先の言葉通りにその勢いは凄まじく、精度を気にしていないはずのそれは脚の一部に集中して当たる」

「ギィアアオオオオン」

「ロイオンにしてみれば一番脅威なのはルクーツァ、次いでエリアスールだ。」

「しかし一番邪魔だと感じたのはレイラだったのだろう、殺意の方向をレイラに変える、今まで以上に強いものを」

「っ……!!」

「…っ!?!っっかりしろ!」

レイラは気を強く持ちソレに耐えようとしたが、動きが止まってしまった。

何よりも不味かったのは、それに気を取られてロイオンから目を離してしまったギョッセだ

「キイイアオオオン!」

「しまっ!?!」

ロイオンは己の武器を振るった、一瞬でレイラ達の前に現れて、その鋭い爪を振るったのだ。

本来ならば、ギョッセが防御に回って時間を稼ぎ、レイラが攻撃を以って注意を逸らし、ルクーツア達の援護で体勢を立て直すというはずなのだ。

しかしレイラは一瞬止まってしまった、ギョッセは目を逸らしてしまっていたのだ

「いかんっ!」

「レイラっ!下がちなさい!」

さしもの二人も急にレイラ達に向われては追いつけない、ただ声を上げる事しか出来なかった。

いや、ルクーツアは一瞬、更に動こうとしたが、それを止めていた

「おおおおおおおおおおおっ!」

「キィアオオオオン!?」

くその刹那、間一髪の所で放たれた一発の砲弾、それは小男だった。全身に鎧を纏った小柄な男が、ロイオンが振り上げた腕に突貫したのだ。

信じられない光景だ、そしてレイラの目の前に着地すると、小柄な男は槍、いやランスと盾を構えた。

「お嬢様、ご無事ですか?」

く小柄な男は、さきほどの間延びした話し方ではなく、戦士として話しかけたのだった。

「デ、デイリー!?」

「ほっほ、お嬢様。〴〵無事のようで何より」

〴〵小柄な男、いやデイリーはロイオンの目の前だと言つのに、暢気に語る。

しかし、常の間延びした声、油断は一切見られない〴〵

「デイリー様、助かりましたっ」

「っすまねえ、嬢ちゃん」

〴〵エリアスールがレイラ達の傍へ駆け寄つた、ルクーツアはその反対方向で機を伺っている。

ロイオンは今まで以上に痛手を食らい、そしてそれを自分に与えた
だろっヒトを警戒して、動かない。

お互いに緊張した、静かな、時間が流れる〴〵

「でも、どうしてデイリーが？」

「なに……一人の男に頼まれただけのこと……」

「一人の男?……ヒロ!?」

「ほっほ、彼はヒロと言う名でしたか……ええ、その青年でしょう」

『ワタシは、皆の帰りを門前で待っていました、ええええ、いつものように』

「うーむ、少々遅いなあ……カルガンの群れならばあ、あの人数がいればあ……」。

それにい、レイラ様にエリアスールもいるう、そしてあの男お、カルガンならば問題は万に一つもないはずなのだがあ……」

『まあ、いつものように色々と心配でしてな、門の外……遠い森を見ていたのです』

「んん？なあんだあ？……あれはあ、っ！！」

『遠い場所を見つめていた時、ワタシの眼に写ったのは一つの影でした。』

かなりの速度で森から出てきたのです、そしてカルガンに襲われていた……、ワタシは馬を駆ってそこへ急ぎましたとも』

「アレはいかんっ！誰かおるかっ！？ワシの馬を用意せい！」

「デイリー様？……どうかなされたのですか？」

「いいから、馬をつ。ええい！それを貸せい！」

「あっ！？デイリー様！？」

『馬を駆つて走るにつれて顔が分かりましたわ、驚いたのう。
なにせお嬢様と同じ組の青年でしたからの』

「あれは！？……なにがあつたのだ！？お嬢様やエアースールは何
をつ、いやあの男ほどの武人がいてどうして！？」

「はあつはあつ、くつ！？」

「どけい！小僧っ！……！」

くデイリーは加藤と交差するように駆けた時に、ランスを振るつた、
軽々と

「へあ！？つうあ！？」

「どうどう……！ふう、小僧。一体なにがあつた？お前さんの組には
お嬢様……いや、レイラにエアースールがあつただろう？

あれは中々に腕が立つ、カルガン程度になにかあると思えんが、現
にお前は一人でここに……」

「おっさん！助けてくれ！中型がつ、ロイオンが出たんだ！！」

『あの青年はボロボロになつておつた、恐らく、カルガンから逃げ
るためにがむしゃらに森を走つたのだろうの。』

カルガンから単機で逃げ切つた事も驚いたが、それ以上に彼の言つ
た言葉に驚きましたな』

「なんと！？ロイオンがつ！なんと……お前さんが一人
でここに来たという事は」

「ルクータ達は足止め、いや他の組を助けにいつてる！俺は応援を呼びに行こうとっ」

「だからと言って小僧のようなっ、いやそれはいい！ロイオンだな？それは何処に！？」

「森に入れば、笛の音が聞こえるはずだ……そこにいる！」

「笛か……分かったっ、小僧は傷ついた身でつらいだろうが、そのまま街に駆けよ！そしてワシの……これを持っていけ、そして伝えるのだ」

「これは……短剣？」

「そう、そして万が一に備えさせよ、いいな？」

「分かった……街に伝える！……御武運をっ！」

「ほっほっ、生意気に言うわ！つむ！任されたっ！」

「そうしてワシはここへ駆けた次第ですな、いや間に合っただけに
よりですわ」

「な！？カルガンに？どうして呼ばなかったの！？もし大怪我を負

っていたとしたらっ！」

「エリ、落ち着いて？……というか、わたしも結構危なかったんだけど？」

「貴女の場合は油断でしょう！まったく、今回はデイリー様が着て下さったから良かったものの！」

「ほっほ、それは今は置いておけ、よいな？」

さて、そろそろあやつも痺れを切らしたようです。

お話はここいらで仕舞いと致しましょう。

お嬢様はお下がりがりください、エリアスール、そしてその男……傍に仕えておれ」

くデイリーが言うように、ロイオンは後ろに立つルクーツァ、そして前に立つデイリーを警戒して僅かに足を動かしていた

「ですがっ、デイリー様でも単独では！？」

「ほっほ、若い時ならまだしも今の老いぼれたワタシでは流石に単機では遣り合えるとは思わんよ、だが、のう？」

その男、周りに気を使わずとも良い、本気で行くぞ？」

「流石だな、この街にはあの武器屋の店主といい、貴方といい、驚かさねばなしだな？」

「ルクー？本気でって？」

「やはり……どこか、私に気を使っているフシがありましたか？」

「すまないな、だが別に本気じゃなかった訳ではない。少々戦い方を変えていただけで、十分本気だったさ。」

それに、良い具合に奴も弱らせた……もういい頃合だろうな」

「うむ、一応小僧に応援を呼ばせてはいるが、どうせじゃ。」

ここで終わらせるとしよう、ほっほ、久々に血肉が踊るのう」

「あー、デイリーがお爺ちゃんっぽくなっちゃった……。」

いつも変な話し方とか出来るだけ若い感じを意識して話してたのに……」

「デイリー様も本気という事でしょう、さあ下がりますよ。」

今の私達ではお二人の邪魔になりかねません……今は、後ろで見ていきましょう」

「かあー、なっさけねえな。おれっちもそれなりに腕え磨いたつもりでいたが、まだまだってとこかい」

「むう……ヒロに格好良く言ってきたのに、これかあ……」

く女性2人にギョッセはそう言いつつも下がる。

そして、この広場には一匹の脅威と二人の狩人が立つ……」

「さて、ロイオン、仕切りなおしと行こう」

「グルウウアアアアアアアアアア！」

「このワシが久々に遣るのだから、それなり以上に楽しませとくれよっ。」

「ルクーツアは今までのエリアスールの補助的な構えから、体勢を低くした攻撃的なものに変化する。逆に、先ほどの突貫とは違い、盾を前面に押し出した防御的な構えをデイリーは取る」

「ルクーツア、と言ったか。先はお主に譲る。存分に振るうがいいわ、後ろは気にするな……ワシがいる」

「ありがたい……いかせてもらおうっ！」

「そう言つと、消えた。消えたように、ではなく本当に消えたと思えない。」

「それほど速い……そしてロイオンから赤い液体が流れた」

「キイグアアアア!？」

「ふむ……、やはりここではこんなものか……思うように走れないな？」

「ほっほ、よう言っ。」

「手数で攻めるか、中型にそれとは恐れ入るわい」

「いや、手数とかいう次元か？速すぎてさっぱり分からないんだよよ？」

「わたしは、ちょこつとだけ見えたよ？」

「でも凄いねえ、ルクってばデイリーやお父様みたいに強かったんだ」

「確かに、私もそれなりと自負していましたが……。上には上がるものです」

「冒険者、いや武人と言われるヒトの中には達人と言われるヒトがいる。」

「本来、ヒトとはモンスターに劣るものだ、どうしようもなく差があるのだ。」

「だが、彼らはその差をほぼ無くす、肉体的に優れているのは勿論だが、それ以上に心が強い、だからこそモンスターと対等なのだ。」

「っしいや!」

「声を奔らせ、ルクーツアは尚も切りつける、小さな傷が徐々に大きな傷へと変わる。」

「ロイオンも反撃をするが、それは当たらない。」

「ルクーツアの場を離れようにも、デイリーがそれを許さない。」

「ほっほ、どれ……いい具合だの、後は……」

「……デイリー殿!次で決めるぞ!」

「合い分かった!ふうん!」

「今までの盾を構えた形から微妙に変わる、ランスを後ろに引き絞った姿。」

「デイリーが纏う鎧が軋む音が森の広場に静かに響く。」

「……っえい!」

「そして最後に後ろからロイオンを斬りつけ、デイリーの後ろで動きを止めた。」

「そのルクーツアを追うようにロイオンが振り向いた時だった。」

「つかあああああ！」

「先ほど、レイラを助けた時のようにデイリーが跳んだ、いや飛んだ。」

そしてランスを一直線に叩き込んだ、そう牙に……」

「ギイイイオオオンアア！」

「ロイオンの牙は見事に折られた、それどころかロイオンの頭部に甚大なダメージが与えられたのだろう。」

「ロイオンは雄たけびを上げると、地響きをあげながら地に倒れ付した。」

「……なんだろうねえ？おれっち達って一体なんなのかと、考えさせられる光景だぜえ……」

「そういうものです、私達もまたそうなるように努力するだけです。」

「あははっ、やっぱりデイリーは凄いや！ルクも格好良かったよ！」

「ほっほ、お嬢様はまったく……いやしかし、久々に動いたモノだから明日は腰が怖いですなあ。」

「はっは、いや。実に動きやすかった、礼を言うよ、デイリー殿。さて……怪我を負ってる者達は無事だろうか？」

それに、カトーも……」

「そうルクーツアが零した時だ。」

先ほどの地響きとは違ったものが響く……大勢の何かがちちらへ向
つてきている音のようだ

「ほっほ、短剣はちと効果がありすぎだったかのう？」

く小柄な男がそう呟いた時、ヒトの声が聞こえてきたのだった。
一つの戦いの終わりだった

「はっはっはっはっは」

「飲め、飲め！」

「しかしさすがデイリー様だな！まさかロイオンをつ」

「あれから少し経った、街は常以上の賑わいをみせていた。そこかしこで、笑い声が響いている」

「へえ、鎧のおっさん。そんなに強かったんだ？」

「ルクーツアとデイリーが最終的には二人で中型を倒すという偉業を成した後、加藤が呼んだ応援の部隊、総勢500名の冒険者、兵士達が駆けつけたのだ。」

そして、地に倒れたロイオンを運んだり、怪我人を治療したりした後で、彼らは街に戻ってきていた」

「ああ、この年齢であれほどとは……街を造った時の立役者というのは本当だな？」

「まあデイリーは強いけど、ルクも凄かったんだよ？こっ、ズバッ！ってね？そしてヤア！って感じで！」

「レイラは身振り手振りですその時の事を伝えようとしているようだった」

「いや、分からないって……てか、骨付き肉を持ったまま振り回すなよ！」

肉汁が飛んでるっ！ってか、あつつ！？」

「ほら、カトーさん。こちらのパン包み焼きも美味しいですよ？」

「いや、それより……ああはい、いただきます、ってレイラ！それやめっ……」

「ほっほ、小僧、傷の具合はどうじゃ？」

痛む所はないかの？なかなかのヤラれ具合じゃったがの」

「あつついつての！……へ？」

ああ、別に大した事ないよ。俺よりもあのヒトの具合が心配だね」

く加藤が言っているのはロイオンに襲われた組の重傷者の事だろう、そしてそれに答える声があつた」

「安心してくれや、あいつは大丈夫だった。

まあ、暫く寝台の上だろうがな？命があつただけ儲けモノってもんだけぞ？」

それもこれもお前さんが応援を呼んでくれたおかげってもんよ」

くギョッセがそう言う。事実、加藤が呼んだ大勢の応援の中には救護班がいた。

その存在がいた事で、早急な治療が可能となり一命を取り留められたのだ」

「いや、あれは俺がつていうか、あの短剣を持って言ったら、大急ぎでああなつたんだよ……」。

俺は本当に街に走っただけでさ」

「はっは、カトー、暗い顔だな？」

どうした、お前に出来る事を精一杯行っただおかげで、こうしてレイラやあの重傷者が助かったんだ。

それは誇っていいんだぞ？」

（ただ走っただけを誇るつてもなあ、いや、うん。

ここは、乗っておくのが良いよな？）

「ヒロよお？お前さんは立派だぜ？」

森の中を走っただけだって？馬鹿いっちゃいけねえ、そいつあとんでも無い事だぜ？」

それどころか、カルガンにも襲われたそうじゃねえか、それでも逃げずに街まで一目散に向うたあ、大した野郎だ！」

「そうだよ！カルガンに襲われた時の事、ちゃんとやってたでしょ！？やったの！？」

「やったつての！んでそうなんだよ！てか二匹いたし！一匹じゃない時の対処法なんて聞いてない！」

「なんてこと、二匹もアレから逃げていたなんて……」

「それだぜ？普通、そうなら街に向うつてのよりも、カルガンから逃げる事を重視する、それが普通で常識だ。

だが、お前さんは街に向った、仲間のためにだ……。

森を抜けちまえば遮蔽物はねえ、追いつかれる可能性はグンと上がるつてのによ？」

「ああ、なんでか二匹のうち、一匹は急に消えたんだよ。なんか凄
い音がしてたなあ。」

だから行ける、って思えたからってのもあるね」

「そりゃあ、多分他の組の連中が作った簡易な罠だろうな。」

しかし、運が良いのか悪いのか……そいつらと合流できてりゃ、も
っと安全に街に迎えてたのによ？」

「ルクーツア達の組とギョッセ達の組以外の組は、逃げるにはいか
ず、かといつて立ち向うにも技量が追いつかない。」

なので、せめてもの足掻きとして罠を設置していたとは、後で分か
ったことだ。」

万が一、ルクーツア達が敗れ、街に向ったとしてもソレによって少
しばかりの時間が稼げた事だろう。」

そして加藤の呼ぶ応援が間に合うという訳だ、加藤がいなければ焼
け石に水になっていたのだが……」

「まあ、他の組も流石に動転していたらしいな？」

全ての組が合流していたというのに、街に報せるといふ考えが思い
浮かばなかったのだから……。」

罠を仕掛けても、それに対抗する術がなければ意味が薄くなるとい
うのにな？」

「まあ、仕方ねえさ。」

おれっち達も中型が来たなら、3人が足止めに、1人を伝令として
逃がせば良かったんだ。」

それを全員で交戦つていうのを選んじまったんだから、あいつらの
事は言えねえつてもあるんだけどよ？」

「まー、その罠のおかげで一匹からは逃げられたわけかー。」

良かったね？ヒロが罨に掛からなくて！」

「本来なら、ヒトが見ればスグに分かる類なのですが……。その状況で、そして罨を知らなかったカトーさんが気付けるはずもない、ですね。」

本当に良かったです」

「ははっ、そうだねえ……。」

まあ、それでも実際追いつかれそうだったけどね？

おっさんに助けてもらえたんだよ、いや、あの時は驚いた」

「ワシの方が驚いたわっ！まったく、お嬢様方に何かあったのかと冷や冷やしたものじゃ」

「あれ？俺が危ないってのに冷や冷やはしなかったの？」

「……さて、どうだかのう？」

別にお主を心配してなかったと思うが、まあ危ない所じゃったし、助けてやるうかと思っただけじゃ」

(しゃべり方はアレじゃなくなっただけど、なんだコレ？おっさん、いや爺さんのツンデレ？

ぐふう、なんて威力だ……こいつは殺人級だぞ！)

「そーいえば、デイリー？もうあの喋り方は止めたの？」

「ほっほ、やはりコレが一番落ち着きますからのう……。」

しかし、この前火の国に赴いた時に会った、あの女の口調……真似してみるか？」

「止めてよ？どんなヒトかは知らないけど女のヒトでしょ？
デイリーはお爺ちゃんだからね？本当に止めてよ？」

「……………大きくなられたのう」

(おっさん、なんていうか…………、いや言うまい)

「まあ、中型を狩ったのは久々だっというじゃねえか？

色々あったが、万事綺麗に終わったわけだ、見るよ、今の街をよ！
みんな嬉しそうじゃねえの、へへっこれが冒険者を辞められない理
由って奴だな！」

（デイリーの発言で何故か固まった場を解かすように、ギョッセが
明るくい口調で語る）

「お主は何もしておらぬだろうが、何をほざいておる？」

(うわあ……………ギョッセが沈んだ。こいつは酷い急所攻撃だ)

「うっせえ！いいんだよ！その場で一応頑張ったんだからよ！」

「はっはっは、そう言うな。デイリー殿。

ギョッセはオレ達が来るまで、遊ばれていたとしてもロイオンから
他の仲間達を守っていたんだ。

それは簡単な事ではないだろう？」

「それに、ギョッセさん……………貴方はあの時、かなり疲労してしま
したね？」

「うげっ、やっぱ分かるか？」

初っ端でカルガン達を見つけてよ、笛を鳴らした時までは良かったんだが、そこであいつが登場よ。

カルガンは逃げ道を塞いだ形でいたおれっち達に襲い掛かってくるから迎撃、その上でロイオンが、ってなるとな？

いくらロイオンが本気じゃないとは言え無理つてもんよ」「

「それで怪我人を重症でも一人に抑えたの？ギョッセって実は結構凄いの？」

「へへっ、おうとも！……って言いたいとこだけでも、そこまでじゃねえ。」

さすがにルクーツアの旦那やデイリーの爺様みたいには出来なかったからよ？」

(いやあ、ルクーツアから大体聞いたけど、この二人が人外なだけだろ？

てか、ギョッセも十分その域にいる気がしてならねえ……)

「ほっほ、生意気を言っ！お前さんがそこまでとは誰も思わんよ！」

「いや、デイリーのおっさ、いや爺ちゃん。そこまで言わなくて…

…」

「カトー、あれはデイリー殿なりの喜びの表現だ。

オレとしてもギョッセは大した奴だと思っている、だからこそ駄目な所を言い続けているんだろ？」

「だからこそ？普通、よく耐えた、とか言わない？」

「加藤とルクーツアは小声で話す」

「分かつちやいないな？まあ、お前もそんなもんか？」

「はあ？」

「もー、何こそ話してるの？ほら！ルク、見て見て！この料理！美味しいんだよ！食べようよ！」

「おお！こいつは……まさかロイオンの焼肉かつ！？こいつはいい、どれ貰うとするか」

「レイラが差し出す皿の上には、香ばしい匂いの肉があった。

「見ると、普通の牛肉などと変わらないように見えるが、脂が多いのだろう。」

「光を反射している程に脂を含んだ肉汁が溢れている。」

「……大事な事言ってるんじゃないのか？」

「いつも思っけど、やっぱりルクータって食いモノになるとコレだからなあ……」

「カトーさん、今はそれは置いて置きましょう？」

「ほら、これも美味しいですよ、あとお酒もありますし」

「酒！？まじでか！やっべ、飲む飲む！俺は酒を飲むぞ！」

（くくくっ、お酒……大人の飲み物だっ！）

「あ、はい。どうぞ、これはそう強くないお酒ですから、軽く飲めていいんですよ。」

「どれどれ……ぐふっ!？」

「カトーさん!？」

(に、苦い……てかなんかヤバイ。これが軽いお酒なのか？と、父さん、俺はやっぱりまだまだガキだったみたいだ……っ)

くエリアスールは弱い酒と言っているが、それは冒険者の認識では、だ。

通常で考えれば十分強い酒であり、ほぼ酒を飲んだことの無い加藤には強すぎたのだろうか

「ルクーツアさん!カトーさんがっ」

「んー?はっは、放っておけ!疲れもあつたんだろう、眠らせてやるのもまた優しさ、はっはっは」

「ルクつてば酔ってる?でもヒロも情けないねえ、こんなお酒で倒れちゃうなんて……」

「まったく、レイラだって初めて飲んだ時は大騒ぎしたというのに……」

「ほっほ、なにそういうものさ。直に飲めるようになる、そういうものじゃよ、……何事もな?

小僧が今回、ただ守られる事を良しとせず、一人で向かえたように
の」

「そうだな、カトーは選んだ。

選べた、そして言うてくれた、貫いてくれた……。

ちよつと前まではオレが傍を離れる時は色々と煩かつたのになあ……」

「ルクーツアは湖での出会いから、この街へくるまでの事を思い出しているのだろう？」

「なにそれ、年寄りの感傷？」

「……………オレは年寄りか？」

「認める、お前さんも十分こつち側じゃよ」

「いや！オレはまだ若い！少なくともデイリー殿には言われたくないなっ！」

「はあ、まったく……………静かにして下さい、カトーさんが起きてしまいますよ？」

「まあ、良く分からないけど、カトーは今回頑張ったよねえ」

「ふふっ、そうですね。これからどうやって強くなるのか……………楽しみです」

「ほっほ、こやつなど強くなった所でどうとも変わらんわっ！」

「あのなあ、爺様よ。

そついう言い方は……………」

「ギョッセ、あれはだな？……………」

く加藤は自分を弱いと本当の意味で認められた。言葉だけではなく、命が掛かっている場面で行動として、それを表せたのだから。

そして弱いという事は、いくらでも強くなれるのだ。例えば、それがモンスターに背を向けた答えだったとしても、それが強さに繋がる道だと信じられる限り。

彼はその選択を選んだ、本当の意味で強くなる事を彼は選んだのだ
った」

「まあ、今回の仕事は色々大変だったけど、楽しかったね！」

「レイラ……貴女はどうしてそう……」

「ほっほ、中型が現れた上にそれを討伐したんじゃ、それなり以上に報酬を上乗せせねばなるまいよっ」

「うっは、本当か爺様よお！こいつぁおれっちも喜びを抑えきれねえ！もつと料理を持ってきてくれ！おれっちは食うぞお！」

「さつきからお前は食っていただろうが、何を今更言っているんだ？」

「本当にねえ？ってソレはわたしのだよ！なに取ってるの！？」

「レイラもギョッセさんの事をいえませんか……」。

「っ！待ちなさい、レイラ！それはカトーさんのですよ！？何を取っているんですか！」

「ほっほっほ、いやはや若いのう？」

「……そうですね、いいものです。」

色々と思い出してしまいますよ、あの時もこういった……」

「ふむ、やはりお主はこっち側じゃったの」

「……………」

くなにはともあれ、こうして加藤の初めての仕事は幕を閉じたのだ
った

第15話 『 選択! 』

「加藤の初めての仕事から、既に1ヶ月ほどの時間が流れていた」

「だりい……、なあルクータ、そろそろ仕事でき、討伐系行っても良くない?」

「アホが、まだ無理に決まっているだろう?」

あの時はモンスターがどういふものかというのを見せるためだけに受けたんだぞ?」

「加藤達は、幹旋所で毎日のように防壁修復の仕事を請けていた。防壁の修復と言っているが、強化という面が強いためにサツクルのような周りを頼れない街に取っては至上問題なのだ。この依頼が途切れることはそうはない」

「けど、毎日毎日、岩を運び、木材を運び、穴を掘り、トンカチ持ってひたすらにい……さすがにさあ?」

「まったく、いいか? これをした事でお前は何を得られる?」

「ん? そりゃー、お金?」

「だからアホだと言っている。身体を鍛えられるだろうがっ!」

「いやさ、それは当然だけど……ぶっちゃけどのくらい鍛えればいいんだ?」

「加藤は鍛えたら鍛えた分だけ、それを自分のモノにしていた。ある種の才能だろう、普通ここまで早く目に見えた成果が現れるとは思えない。」

「しかし現実として腕はそこまで太くはなっていないが、確かな力を宿し、足腰は彼の長所を多いに助けていた。」

「どこまでもだな？ 終わりなどない。」

「うっへ、さすがルクータ、容赦ねえな？」

「加藤は困った笑いを浮かべながら、ボサボサに伸びてきた若干クセのある黒髪を掻く。」

「あ、そうだ。今日の仕事終わったら風呂いかね？」

「ん？ 風呂か？ お前は風呂が好きだな、水浴びで十分だろうに。」

「この世界にも風呂、身体を清潔にするために湯に入る文化はある。だが、それは少々お金が掛かるものなため、簡単に出来るものではなく、彼らのような冒険者にとって贅沢の一つだった。」

「いや、そうだけだよ……、サッパリしたいんだよね、わかる？」

「わからんな？ 女でもあるまいし……。」

「これだからっ！ てかなんでこの世界の男はそういう認識なんだっ！ 俺だって男だぞ！」

「そう言った軽口を叩きあいながら、彼らは仕事をこなす。」

「今ではすっかり、この仕事にも慣れた上、身体もそれなりになった。」

おかげか、余裕を持って今日も働く〜

「ふう、ただいま〜。ラル、いるか〜？」

「あつ、おかえりー！どうだった？」

「仕事を終えて、夕方と言える頃に加藤達は『砂漠の水亭』へと帰ってきた。

少し、髪が湿っているところや、石鹸の香りからどうやら風呂場へ行けたようだった〜

「はあ、ダメダメ……まだ無理だつてさあ」

「まあー、カトじゃ無理だよ、アタシは分かってたけど！」

（なんだかねえ……）

「この宿に泊まり始めて、加藤とラルという獣人の少女は友達という関係になっていた。

そのおかげかどうかは分からないが、度々ここに加藤達に会いに来るほかの面々とならば、それなりに会話出来るようになっていた。その時からか、加藤の事をカトという愛称で呼ぶようになった〜

「ラル嬢は良く分かっている……カトー、見習うことだ」

（ルクータめ……ラルが調子に乗るのを分かかって言ってるな？）

「へっへーん！ でしょ？ なんとってアタシはカトの先輩だもんね！」

「はいはい、そうですねー」

くそう三人で談笑していた時、ラルが出てきた扉を開いて、一人の年配の女性が姿を現すく

「おや？お帰り、坊や達。

どうだった？ 仕事は上手くできたかい？」

（女将さん……なんでいつもそれを聞くんだ？）

「はっは、ようやくこの手のなら一人でそれなりといった所ですかね？」

「そうかい！そいつぁいい事だね？カトーの坊や、今日は晩飯で食いたいのとかあるかい？
腕を振るっちゃうよ？」

（まあ、なんだろ？嬉しいからいいんだけどもな？）

「本当か！ それならば以前出た、あの魚料理を頂きたい！」

「っておいこら！ なんでルクーツアがお願い出してるんだよ！
俺！ 俺に聞いているの！」

「あっはっは、いいよいいよ。魚料理だね？ 塩焼きに煮付け、色々あるからね。」

楽しみにしときな？」

（いやまあ、いいんだけどね？ 魚好きだし？）

「いや、楽しみだな？ カトー」

（だけど、なんだかなあ？）

その後、女将が出す料理を4人と一匹で楽しく食べた加藤は自分の部の部屋へと戻った

「ふう、食った食った……先輩も美味かったか？」

「キュウ？ キュツキュ」

「流星は女将だ……また一段と腕を上げたか……」

「……………そうだねえ」

「ふっ、そう睨むな。」

いいじゃないか、この程度は、な？」

ルクーツアは片目を瞑りながら、片手を挙げて頼み込む動作をする

「ルクータ、分かったからその顔やめろ、頼むから」

そして、その効果は抜群だったようだ。

その問題よりも動作の方が加藤にとっては苦痛だったようだ、見事に許される

「ったくよ、まあいいよ。」

明日もまた同じ仕事をやるんだ、俺はもう寝るかな……っ！」

く加藤はそう言つと、腕を伸ばして、大きく口を開ける。声は無いがあくびのようだく

「ふむ、そつだな。」

それじゃあ、明かりを消すぞ？……おやすみ」

「ん、先輩も、つてもう寝てやがる、ったくよ。」

まあいいか、うし、おやすみ……」

く加藤はゆっくりと瞼を閉じて、眠りにつく。

小動物せんとはいの事は言えない程に寝付きが良く、すぐに寝息を付き始めたく

「ふつ、疲れていたか……もう眠ってしまつとはな」

く加藤が寝息を立て始めてから少しして、ルクーツアは体を起こしたく

「もうそろそろ、良い頃合かもしれんな……」。

なんだかんだと言いつつも、こうして毎日のように退屈な仕事、いや鍛錬を続けていられる。

一番大事なものは、あの時に確かに見せて貰つた……」。

こいつは確かに逃げずに戦う選択をした、面と向つては言えないが……本当に良くやつたよ、お前は」

くルクーツアは加藤が寝ている寝台の方に顔を向け、静かに見つめる。

その横顔を、窓から差し込む月明かりが照らし出し、笑みが浮かび上がる。

「やはり、討伐を請けさせてもいいかもしれないな。だが、その前にある程度は剣を慣らさねばならんか、いやまてやはりもう少し鍛えさせるべきか？」

…… 毘の作り方を教えてみるのも一興かもしれない。

ああ待て待て、馬にカトーは乗れたか？背に乗せた事はあるが、走らせた事は無かったはず、これが先か？

いや、もう少しこの世界の事を……」

ルクーツアは加藤のこれからについて頭を悩ませ、そして結局今まで通りというのを、ここ最近ずっと繰り返していた。

翌日、ルクーツアは目に隈を作つて、加藤やラルに驚かれるが、女将にだけは理由を見抜かれていたようだ。

「あんたは、変わったね？ いや、ヒトの事言えた義理じゃないが、親馬鹿だねえ」

女将は苦笑い気味に、ルクーツアだけに聞こえる声でそう言った。

「……まあ、そうなのかもしれないな」

ルクーツアは、デイリーと同じ側だというのを認める事を選んだようだった。そして認めたからだろう、これまで以上に厳しく加藤を導いていこうと決意を新たにし、そして加藤はその変化に困惑する事となる。

「いやさ、なにこれ？ 確かに強くなりたいてって言ったけどさ？
まずは酒からつてのが可笑しくないか？」

「なに、酒は1人で飲んでもつまらんからな。
カトーも飲めるようになれば、オレとしても嬉しい、さあ！飲むが
良い！」

「最前線の街、別名無法の街であるところの『サツクル』は今日も
平和だ」

第15話 『 選択!』 (後書き)

章の名前ですが、色々な事を選択するという意味でした。

差別をどう思う? 戦いの際の決断は?

それらを何も考えずに思ったまま声に出す、言われるままに従う、自分で考え抜いた上に決断するなど、題名を決めました。

第1話 『 再会! 』

加藤達は今日もいつも通り、防壁修復の仕事をしている。加藤はこういったモノが得意なのか、他のヒトに時折指示を出しているほどだ。

「ふう、あつついな……真夏! って感じだなあ……」

「ふむ、確かにそうだな……急に日差しが強くなってきたように感じる」

この世界は1年が730日、つまり地球の2倍だ。

だが、季節の移り変わりは非常に緩やかだ。その時期であっても本当に夏、冬と言えるものは比較的短く、ほとんど春、秋と言える気候が続く。

だが、そろそろ短い夏がやって来ているようだった。

「そつえば、先週あたりだったけど、一日中明るかったな? ……」

「あれ?なんか前にもそんなのがあったような?」

「ん? ああ、色移りという奴だな。簡単に言えば、季節の移り変わりで。まあ、夏と冬の場合は何度かあるために、一概にはそう言えない物でもあるんだが……。ともかく、その時は一日中明るい事が続くんだ、そして次の日は一日中薄暗くなる。まあ暗いと言っても普通の日と大して変わらないんだかな?」

(良く分からんなあ……、なんでそうなってんだ?)

「まあ、そんな事はどうでもいいだろう？」

「いや、あー、うん。とにかく夏が来るって事だろう？ 水分補給をこまめにしないとな」

この現象、良く空を見ていれば気付く事があるだろう。そう、明るいとは言え太陽は既に落ちていると、月が出ているという事に。この惑星の空気構成になんらかの要素があるのだろう……。

本来ならば夜となる時間帯であっても、それが季節が移り変わるまでに溜め込んでいた熱量を、色移りと呼ばれる時期に放出した発熱による発光のために夜であっても明るくなるのだ。加藤が以前、太陽と勘違いしたものは月だったのだろう。

「そうだな、まあ今は仕事をする事に集中しようじゃないか？」

「はいはい、っと……あつ、そのヒト！ まだそこに支柱を立てちゃダメだったのっ！」

そう言つと、加藤は他のヒトと共に今日も壁を育てるために走る。今の自分に出来る戦いの場所を、ようやく見つけられたかのように。自分自身では中型に敵わなくとも、この壁は耐える、耐え切つてくれる。そして自分がそれを支えている、そんなちっぽけな満足のため。しかし楽しそうに、時に真剣に、時に愚痴を零しながらも彼は汗を流す、その汗の分だけ壁が育つと信じているかのよう。

「ふう、いやーやっぱり風呂はいいよなっ！」

仕事を終え、風呂屋に行き、汗を流した加藤達はこの街での我が家と言える場所、『砂漠の水亭』へと戻ってきていた。

「おや？ おかえり、今日も風呂屋に行つて来たのかい？ まったく、カトーの坊やは本当に風呂が好きだねえ……」

いつものように、加藤達の帰りを迎えるのは、この宿屋の女将だ。娘のラルの一番の友人となってくれている加藤の事は彼女にとつても特別な存在となつてきているのだろう。ことある毎に彼女は加藤に優しい言葉を掛ける。

「まあねー、なんとというか習慣？まあそんな感じなわけですよ」

「あつはつは、風呂が習慣だつて？ 生意気言つて……、水浴びで十分だつてのに、まあまあ」

この世界では風呂、大量の水を張り、それを沸かすという事はそれなりに金が掛かるのだ。故に高価なもので、身体を清潔にするという面は勿論あるのだが、娯楽という面も強いものだった。

「ええ……、まあいいんだけどもさ。女将さん、今日の晩飯つてなんなの？ 俺、腹がもうやばいんだよね……」

「そいつはいけないね！ 待つてな？すぐに用意してあげるから、ちなみに今日はね……。ああつ！ あたしとした事がいけないね、エリアスールさんからあんだ達宛てに手紙だよっ」

そう言うと、女将は加藤に手紙を渡す。この世界にも紙というモ

ノはある。

だが風呂とは違い安価だ、理由は古くから獣人族がそれを作り上げて来たために、元の世界のモノには劣るもののそれなりに似た作りで以って量産を可能としているためだった。その紙で作られた手紙は、女性を送ってきたものだからだろうか。一見すると普通のものなのだが、どことなしに愛嬌を感じられる。

「……手紙？　いつもは伝言とかなのにな？　ハッ！？　まさか俺に惚れ……」

「安心しろ、それは無い」

「……………」

「そう睨むな。手紙でそういった事を伝える事など有り得ないと言いたかっただけだ」

「そうなの？　恋文とか、そういうのってありそうなもんだけど」

「恋文？　なんだそれは、こういったものは直接言葉で伝えるものだぞ？　そもそも、それは男から言うのが常識だろう？　例え女性がそう思っていて、男から言われるのを待つものなんだ」

（なんとという事だっ！　っていやまあそうなんだろうけど。男から言わないといけないのか……、もし好きなヒトが出来たとき言えるかな？）

「あつはつは、まったく坊やは面白いねえ？　その年頃はそういうもんに憧れるもんさ、あたしの若い頃なんてそりゃーもう……………」

「あー、女将さん？ 飯出来たら呼んでね？ 俺ら部屋に行ってるんで！」

そう言い残すと、加藤、そして後ろにルクーツアも一緒になって逃げていった。

「そう、あれは丁度……冬から春への色移りで、明るい夜の時、つてこら！ ヒトの話は最後まで……まったく！」

2人に逃げられた女将は愚痴を言いつつも、奥の扉の中に入っていく。夕飯の準備をするのだろう。

「ふう、危ない所だったな？ ルクーツア」

「ああ、あれは危険だった……。また長話に付きあわせられると思うと……」

「……キユウ？」

彼らは以前にも同じような話を聞かされた事があつた。延々と3時間、実に長いこと聞かされたのだ、逃げたくもなるだろう。

部屋に入るなり疲れた様子を見せる、そんな2人に小動物せんぼいは首を傾げている、がすぐに興味を無くして横になった。

「それで？ その手紙にはなんと書いてあるんだ？」

ルクーツアにそう言われ、加藤は手紙を開け、それを読む。それはそう長い文では無かった、書いてある紙も1枚だけだったためにすぐさま読み終える。

「んー、なんか明日の夜にレイラとエリアスールさんが、幹旋所で一緒に飯食おうってさ」

「それだけか？ わざわざ手紙を送ったというのに？ ……他にはあるか？」

「いや？ ああ、その時に話したい事があるって書いてるね」

「ふむ、そこか……ん？」

手紙の内容は本当に短いものだった。そしてその事に考えを巡らせようとした時、彼らの部屋に小鳥が木の幹を突くような軽い音が響き渡る。

「カト、ルクタ？ それに動物さーん、ご飯だつて〜」

そう扉と叩いて報せてきたのは、声からしてラルだろう。その言葉を受け取った2人と1匹は、そのまま扉を開けて、彼女と共に食事を取りにいった。

「いや、食った食った……肉料理ってのが嬉しかったな！」

「キュツキュ〜」

どうやら食事は肉料理だったようで、彼らは満足そうな顔を見せる。そのまま眠ろつという格好だったが、その前にルクーツアが加

藤に対して口を開く。

「それより明日はどうする？ レイラ嬢達に呼ばれていたんだっ
か？」

「ん、会うつてのは決定だろ？ んでも夜からだから、それまでに
工事の仕事請けれるし、どうするかね？」

「ここずっと請けていたからな、たまには一日中休むのもいいだろ
うと思っぞ？」

「そんじゃ、観光したいかな？ なんだかんだで街は回ってるけど、
観光って感じじゃなかっただろ？」

この街に滞在してもう2ヶ月を越した事になる、それなりに街は
見て回っていたのだ。

だが、それは仕事として、遊びとしてはなかったために見てい
ない場所も多々あるのだ。

「おお、そういえば観光を結局していなかったか。いや、すまん
……あの時からカトーを鍛えねばと思っってしまったて、すっかり忘れ
ていた」

「そんな事だろうと思っただよ……」

加藤は大げさに左右へと首を振り、飽きたと言わんばかりの態
度を取るが、その顔には不満の色は見て取れない。

「それでは、明日はいろいろ見て回るか……娯楽が飯と風呂だけと
いうのもいささか勿体無かったしな。何処に行くか……やはり、演

劇小屋辺りが定番か？」

「演劇かあ、いいね！ あ、そだ。本屋とかあるの？ こつち来て
そういうの読んでないからさ」

「本はある、だが本を売っている店というものは無いな。国に行け
ば図書館があるが、流石に遠いからな……」

「ふーん、そつか。まあ、それはいいよ。演劇つての見に行こうよ」

「ふむ、まずはそこでいいか。その後はその時にでも考えれば良い
しな……」

「うつし、そんじゃ寝るか。先輩、そろそろ……つて」

「ふつ、それではオレ達も眠るとしよう。明かりを消すぞ……」

小動物せんばいは既に夢の世界に旅立っているようだった。
その姿に笑みを浮かべつつ、加藤も眠りについた。

「いや、良く分からなかったけど面白かったかな？」

「そつか、そいつは良かった……。まあ、4つのヒトが協力して初
めて大型を倒したというものだったから、展開が読めてしまってい
ただろうかな？」

加藤達は、目を覚ますと女将が作ってくれた朝食を平らげ、街中へと繰り出していた。

昨日言っていた通り、演劇を鑑賞し終わったようだ。

「まあね？ だけどやっぱり台詞があると面白いよ。特に意地を張り続けていた竜人が獣人の危機に現れたシーンは格好良かったな！」

「はっは、そうだな。あれは4つのヒトにそれぞれ一人づついる最初期の英雄の一人なんだ。彼は誰よりも強く、誰よりも傲慢だった。だから人間の武器も他のヒトの技にも興味は無かった。だが、彼だけで竜人を守りきる事は出来なかった、そして守り切れない仲間を助けてくれたのが他のヒト達……。その助けられた竜人が、彼に願うんだ……。あのヒト達を助けてあげてください、とな？」

「そうそう。あそこは本当に良かった……。他の所も良い所あったし、うん。観て良かったよ」

「そうだな、オレも久々だったが、やはり良いモノだな。ヒトとヒトは違うものだ、だが通じるモノというものがある……。うん、やはりいい」

「んじゃ次だけどさ、俺武器屋いきてえな」。ああ、別に討伐に行く！ って駄々こねる訳じゃないぞ？ 見ただけだからな？」

「はっは、別にいいさ。それじゃあ次は武器を見て回るか……。最後はあの武器屋に行ってお守りの礼も言わねばな」

「そうだなあ、まっ、まずは行こうよ」

2人は、武器を見て周り、あの武器屋の店主に礼を言いにいったりした後、甘味処で、この世界にもあった団子を味わったりと適当に街をねり歩いていた。そして陽も傾き始めた頃、約束のために幹旋所に向ったのだ。

「ふう、間に合ったかな？ いや、今思うとなんだかアレな観光だった」

「アレとはなんだ？」

（言いたくねえ、これで最後に夜景を見に行こうとかなったら……。本当に嫌だ、人生で始めてのソレがルクータとか死にたくなっちゃう）

「……？ まあいい、何処かに座って待つと……」

ルクーツアが空いている席を探そうとした時、女性の明るい声が彼らに届けられた。

「おーい！ こっちこっち、ヒロにルクー、ここだよー」

「お、もう来ていたのか。カトー、行くぞ？」

「はえーな、まだそんな時間じゃないと思ってたけど……。あっ、置いてくたっての！」

加藤とルクーツアはレイラにエアースール、そして何故かいるデイリー達の元に歩いていった。

「まったく、遅いぞ？ これだから小僧は好かんのじゃ」

「うつせ爺い！ てかなんで爺さんがいんだよ？ そもそもそんな遅くねえって、レイラ達が早すぎるんだよ」

「すまん、デイリー殿。こいつが街をもっと見て回りたいなどと、ごねるものでね」

「おいこら、何普通に言っただよ、しかも、ごねてたのはルクータだろうが？ もっと他の料理を食べたいとか抜かしやがって」

「あははっ、ルクは相変わらず食べモノに目が無いんだね！」

「ふふっ、そうですね。それはそうとして、座ったらどうですか？ 料理も、既にいくつか適当に頼んでいますので、そろそろ来ると思えますよ？」

そう言われ、加藤達は席につく。

加藤はデイリーとエアースールに挟まれる形で、ルクーツアはレイラの隣でデイリーの前に来る形で座った。

「料理か、色々軽いもの食べてきてたけど、まだまだいけるなっ。それで、どんなの頼んだんだ？」

「適当に、頼んだんですよ？」

「ああ……、適当にね？ 分かったよ」

その適当に頼まれた料理は、すぐさまやって来た。
やはり、大盛りで熱々の料理が各々自己主張しながら、押し合うようにテーブルに並ぶ。

「ほっほ、うまさうじゃのお……、どれまははこの肉から……」

「やはり、料理と言えばこれだろうな……。むっ、昨日に続けてとは、いやしかしコレはコレで有りだな」

そう言ってデイリーが手に取ったのは、なんらかの肉を一口大に切り揃え、鉄串に通されているモノ、焼き鳥のような形だ。

対して、ルクーツアが食べているのは定番のパン包み焼き、どうやら中身は魚のようだ。

「んー、やっぱり美味しいね！ こうするのがわたしは好きなんだよっー」

「そうですね、作法を気にせず、思いのままに食べられる……。素晴らしいと思いますよ？」

レイラはコメ料理だ。コメに野菜、肉を混ぜて炒め、それを丸めて油でサッと揚げたものようだ。エリアスールはそう言いながらも焼き鳥のようなモノを丁寧に串から肉を外して食べている。

「ぐっ、まだだ……まだ負けないぞ」

「カトー……お前にソイツはまだ早いだろう？」

加藤は酒と戦っていた。ルクーツアとの特訓のおかげかそれなり

弱い酒ならば飲めるようにはなっていた。

だが残念ながらこの酒は強い、既に劣勢に追い込まれている。ルクーツアはその様子に苦笑いを浮かべつつ、レイラ達に問いかけた。

「……それで？ 会うだけなら『砂漠の水亭』にでも来ればいいものを、呼び出したんだ。……なにかあるのか？」

「んん？ ……うん、わたしがっついていうか…デイリーがある……らしいんだよね。ね？ そう……な…んでしょ？」

その問いかけに答えたのは、レイラだった。

だが食べながら話すので、少々行儀が悪い上に途切れ途切れなものだった。

「レイラ……作法はこの際構いませんが、流石にそれはいけません。ちゃんと食べ終わってから話しましょうね？」

「うむ……そう…なのじゃっ。実は……お主らに…頼みたい事…があつての？」

エリアスールはそう注意したが、彼女達の年長者が同じ事を行っているので、彼女はなんとも言えない顔をし、レイラもデイリーを見てから何やら言いたげな眼差しという方法で抗議をエリアスールへと送っていた。

「んんっ！ デイリー様？」

「ん？ はあ……エリ嬢は堅いのう？ まあいい。お主らと言ったが、正確にはルクーツア、お主になんじゃがの」

「なるほどな、内容によるが……まずは話を聞こうじゃないか」

「うむ、実は火の国からちよいと偉いヒトが来る事になっての？
このサツクルの前の街は、かなり遠い……なんでそこまで護衛を兼ねて迎えに行く事となったのじゃ」

「なんで爺さんがお偉いさんを迎えにいくんだ？ そりゃ、凄く強
いってのは知ってるけど、直接呼ばれるなんてよ？」

「小僧、気がついておらんんだか？ ワシ、というよりはレイラお嬢様の事でいいのだが、そこに気が付いておれば分かりそうなもの
じゃがの？」

「レイラが？ まあ、お嬢様つて爺さんが言うくらいだし。お偉い
さんの娘つてのはなんとなく分かるけどよ、それがどうかしたのか
よ」

「…………お嬢様？」

そう加藤から聞いたデイリーはレイラに問いかける、叱責してい
るような少々強い視線を投げる。

「えー、ちゃんとわたし名前言ったよ？ あっ！ そうだった、あ
の時エリが邪魔してきたから聞こえてなかったのかな？」

「え、あ。いえ、あまり言い触らすのもどうかと思ひまして。何よ
りこの前国に行った折の事もありましたし…………」

「まったく、ここは国ではないんじゃないぞ？ それにあの時、……
まあいいじゃろ。小僧、この方は、最前線、無法の街がサツクル領

主、ロレン・サツクル様が一人娘。レイラ・サツクル様じゃ、分かったかの？」

「へえ、領主の娘だったのか、知らなかったよ。まあ、だから領主の代わりにレイラか爺さんが国に行かなきゃいけなくなった、ってところか？」

加藤があっさりと認め、そして流した事にデイリーは驚きを表すが、それ以外の者はそこまで驚いてはいない。

「領主の娘なのじゃぞ？ 分かつてるのか？ ……なんだかアレじやのう、まあいいわい。そうじゃそれでワシら3人で行くのだが、一応の？」

「いいんじゃない？ あ、いくら友達だからって給料安くするとか無しだからな？」

「あほが、簡単に受けるなど言っんじゃない……」

「なんでだよ、別にいいだろ？ 知らない仲じゃないんだしさ」

「そう急くな。……その迎えに行く人物とは何者だ？ そして何名なんだ？」

「なに、そう構えるほどのものではない。迎えに行く人物は国々のちよつとした人物達の娘らよ、人数も3人に供が1人づつの6人じやよ。供の者も腕が立つそうじゃ、故に一応といった」

「……それで？」

デイリーの肝心の事をはぐらかして語る言葉に、やや眉間を寄せながらもルクーツアは先を促す。

そこに口を挟まない対応にデイリーは目尻を下げて、気持ちを表す。

「うむ、丁度1週間後に出立する予定じゃ。今は夏の色、飲料水などが少々多くなるが、それ以外は普段通りでいいじやろう。行き方も街道を下るだけじゃしの、行程も1週間ほどを予定してある。無論、馬でじゃがな？」

その言葉は加藤へと向けて言ったように見えた。万が一の事を考えて、外す理由にしたかったのかも知れない。

「ふーん、馬ねえ。俺持つてないけど、貸してくれるのか？」

だが、加藤はあっさりとソレを了承する。

可愛い孫のような少女から聞いていた限りでは、そういった事は出来なかつたはずなのに、彼は出来ると言ってるも同然の言葉を返してきたのだ。

「うん、貸すよー、ね？ デイリー」

「むっ、うむ……まったく、ルクーツアよ。今回は以前ののような戦いは選ばせてやれぬのだぞ？ それを分かっておろうな？」

「無論だ、しかしあまり馬鹿にするものではないぞ。確かに経験は無いが、地力は着実に育っている……ふっ、そうだな。これもまた1つの訓練……そう考えれば受ける価値はある、か」

先ほどまで、難しい顔をしていたというのに、加藤のために必要

な事という点に気付くとあっさりと認めた。

仕事として、ではなく訓練、鍛えるためという観点では好ましいと思っただろう。既に自分を認めたルクーツアはある種の馬鹿さ加減に磨きが掛かっていた。

「お主、変わったのう……。よもや自分からこちら側へ来るとは、驚いたわい」

「勘違いするな、オレは若い！……だが、これとそれは別という事さ。これは良い、実に良い。最早、進む事が、先に行く事が出来ないと思っていたオレ自身も同時に成長していけるのだからな？」

「ほっほ、そこまで見えたか！……ならば良からう、小僧！良いか、心して聞け……」

「え？……あ、うん」

大人2人の会話になっていたため、加藤はレイラ達と下らない事で盛り上がった。

そして唐突に大きな声で呼ばれたため、若干戸惑いの色を含みながら弱弱しく、しかし最後はしっかりと返事を返す。

「うむ、良いか？今回は逃げるという選択は出来ぬ、したとしても壁はないのだからな？これから1週間、出立までワシとルクーツアの2人でお主に簡易ながら剣を教える、せめて自分の身を守る術を見つげよ」

「えっと、剣？それは嬉し過ぎるけど、1週間？ちょっと短くない？それはなあ……」

「ほつほ、剣とはそういつた意味では無いわ。小僧にはまだ早い、だがワシは庇いし盾を……、ルクーツアは遮る剣を教える。ふむ、盾はワシが用意するのでしょうかの」

「その何処が違うのか分からないんだが、まあ……いいか」

「盾か、まあ持てない事もないだろうしな……。オレのやり方とは違うが、デイリー殿直々の伝授、うむ。いいな、オレからだけよりもより良い、ああ、楽しみだ……」

（おいおい、ルクーツアがスパルタちつくな笑みを浮かべてやがる。これは覚悟が必要かもしれねえな、酒といい馬の時といい、あんなのでさえ地獄だったんだ、そう……死ぬ覚悟をっ）

加藤がそう悲壮な決意をしているのには訳がある。

理由はルクーツアが行った特訓、訓練にあった。酒はもう少しで、何処かの川を渡りそうになったほど。馬は小動物せんばいの助けが無ければ、満足に歩けなくなっていたかもしれぬ。

中々に荒い気性の馬だったのだ、暴れ馬と言うに相應しいじやじや馬だった。動物同士で通じ合う何かがあったのか、小動物せんばいと共に騎乗した際には何故か大人しくしてくれる時があったため、なんとか馬に乗るといふ技術を覚えられたと言っただろう。

「ふっ、カトー。楽しみだな？」

「そうだな、ああ……実に楽しみだよ、俺がどうなるのかがな」

「はっは、そうか！ いいぞ、その意気だ！ なに、1週間とは言え、それなりに鍛えてやる。安心するがいい」

(違うわっ！ そっちじゃねえよ！ くっそ、爺いは笑っただけで何も言わないしっ！)

デイリーはルクーツアのその様子を見て楽しそうに笑みを浮かべ、レイラは何が楽しいのか分からないと言う表情だ。エリアスールは何故か感心した眼差しを送ってきている。

「んー、良く分からないけど……一緒に来るって事だよね？」

「貴女はそこで何を考えていたのですか？ 話の流れでソコは理解して下さい。そしてそのために鍛錬をするという話ですよ？」

「ええ！ 本当！？ 大変っ、わたしもお手伝いするよっ！」

「いや、流石にいいよ。だってレイラって俺よりマシとは言え初心者だって言ってた……。あれ？ 初心者なのに中型に立ち向かってたんだっけ？」

加藤は会った時の口上を思い出し、それを断ろうとしたが、同時に疑問を抱く。

その思いを解消するために周りのヒトを見渡す。

「あははっ、うん。そうだよ？ わたしは冒険者としては初心者って言っただけだと思っ」

「ですが、レイラは領主の娘なのです。女とは言え領主の子……。いざと言う時のために幼少の頃から鍛錬を積み重ねているのですよ」

「ワシとロレン様が鍛えたんじゃ、まあ弓を好まれたせいで我流のものとなっではおるが、なかなか捨てたものではないじゃろっ？」

そう、娘、いや孫自慢をルクーツァに向って放つ。

そして敗北したかのように悔しそうな顔をしつつも、ルクーツァは返す。

「むっ……、ああそうだな。レイラ嬢の弓は馬鹿に出来ん、かなり助けになったものだよ」

「ふふっ、私も少々お手伝いするとしましょうか。ああ、そうですね……どうせなら道中也鍛錬をしましょう、ええそれがいい」

「おおっ、それはいい！ そうだな、デイリー殿もよろしいか？」

「ほっほ、ワシが育てると決めたのじゃ。ならばトコトンやるまでよ、今回しっかりとやるのは1週間と言ったが、それで終わるつもりは毛ほどもないぞ？」

（なんだかな、嬉しいけど、悲しい、これが弱さって奴か……。父さん、俺、頑張れるかな？）

その後も大人と女性達は1人の青年の事で夜遅くまで盛り上がった。

そして翌日から、加藤にとっての地獄が、ルクーツァにとっての天国が始まったのだった。

第1話 『再会!』（後書き）

補足ですが、まずは季節から、春や秋が多いという点ですが。

春 春（!） 春 色移り 春（?） 夏（!） 秋（?） 色移り 秋 秋（!） 秋 色移り 秋（?） 冬（!） 春（?）

……という感じになります。

次に色移りの現象についてですが、第1章にて不用意に日が暮れない、白夜的な描写を入れてしまったためです。

異世界っぽいのを表現できるかなと当時は何も考えずに入れてしまいました……。

後付ですが、理由としては1年が2倍というこの世界がある惑星の軌道を適当に考えた結果です。

きっと恒星からの距離が遠くなったり、近くなったりと不安定というか歪な円を描いていそうだと考え、環境を維持するのが大変だろうな、と。

なので、熱量を留めておくものが、逆に吸収するものが空気の間層だけでは足りないだろうと思いました。

それを蓄えて維持するものがあればいいのでは?という素人考えです。

第2話 『 日常! 』

ここは、中央広場と呼ばれる街の中心地帯。その大きな広場の更に中心に、周りを壁で囲まれた大きな屋敷があった。

そう、ここ『サツクル』が領主の館である。その館からは、常は聞こえない硬いモノと堅いモノがぶつかり合うような甲高い音が響いていた。

「小僧！ そうではない！ なぜ脚を止めておるっ！」

「そんな事いったって！ 盾なんて使った事が無いんだよ、止まらずにどうやって受け止めるっっていうんだっ!？」

加藤は、幹旋所での食事の時にあった訓練というものを、翌日から今日まで、まだ2日だが連日受けていた。

最初、上達できる事に喜色を顔に浮かべていたが、事が進むにつれてその顔は青くなる。

「馬鹿ものがっ、持ち方は教えたろうがっ！ 誰が受け止めろと言った!？ ワシは身を守れと言ったんじゃぞっ」

(だから受け止めてるんだろうがっ！ そもそも、教えたって言うても本当に持ち方だけじゃねえかよっ)

「あははー、ヒ口頑張ってるね！」

「そうですね、ルクーツア様が言っていた事は確かのようにです。よく耐えています」

「ふっ、だがまだまだだ。まったく、あれほど鍛錬をしたというのに……」

館の広い庭を盾を持って逃げ回る加藤、ランスを持って突いて追いつくデイリー。そんな彼らを優雅に紅茶を飲みながら、2人の女性と1人の偉丈夫が眺めていた。

「鍛錬って？　ただ防壁の工事してただけでしょー」

「確かに、あの仕事では身体を鍛える事に重点を置いていた。だが、常にオレは傍で話しかけ、そしてその最中であっても仕事をこなせるようにしていたんだ」

「思考しながらでも、行動できるようにと？　さすがにソレでは、今回のような動作はなかなかに厳しいような気がします」

「オレはこれで出来たんだが……。そもそもだ、カトーは……」

そう、眺めつつも彼らは彼らで考察という名の談笑を始めた。

「分からぬか小僧！　流すのじゃっ、盾を真正面に構えるソレでは中型の攻撃を食らうてみい！　一発で吹き飛ばぞい！」

「流すって簡単に言うなっ！　逃げながらそんなん出来たら苦労しないんだよっ」

そう言いつつも、加藤は返事をしながら、会話をしながらも盾で身を守る。

デイリーは苦言を言いつつも、その事に笑みを浮かべて喜ぶかの

ように更に攻撃の手を早める。

「ふんっ！」

「つでえ！？」

それが暫くばかり続いた後、デイリーがそれなりに気迫ある、しかし今までの小突くようなモノとは段違いの一撃を繰り出した事によって加藤が面白いように吹き飛ぶ。

だがすぐさま立ち上がり、今までと色の違う攻撃を恐れるように見つめ、縮こまるように腰を引きながらも、しっかりと盾を構える。

「ほっほ、良くぞ起った。その気持ちを忘れるでないぞ、死ななかつたからと言って安心してはならぬ。もっと言えば、脚をすぐに動かして欲しかったが、まあいいじゃろう」

「いや、いきなりあんなのするなよ……。死ぬかと思ったじゃないか、目が違ったぞ？」

「それをモンスターどもに言えるのなら、そう思っておるがいいわ。中型あたりになると、獲物を弄ぶフシがあるものじゃ、時おり動きが変るなど日常茶飯事」

「いやさ、確かに何時かは中型の前に立てるようにはなりたいよ？ だけどいきなりソレを想定するのは違わない？」

「はっはっは、その程度の気概が無ければ小型の前にすら立てはしまいよ」

そう2人の間に入って来たのはルクーツアだ。

どうやら談笑を止めてこちらへ来たようだった。そして木製とは言え両手に剣を携えている。

「ふむ、もうそんな時間かの？」

「ああ、次はオレが楽しむ番だ」

「待てや、なんか言ったか？」

加藤は、この2日ずっとデイリーに教えを請うていたわけではない。

時に遊びのようにレイラの弓を見たり、時に机に座り講義のようなものをエリアスールから学んだ。

だが、訓練と呼べるものはもっぱらこの2人からだ。加藤は感じていた。

デイリーはいつも盾を持たせ構えさせるだけ、ルクーツアはいつも好きに攻撃させるというものを繰り返して行かせていた。

そして今日になってようやく、簡単すぎる実践における説明を受けたのだ。

「なに、今まで十分楽しんだらどう？ 剣を持てた気分は、攻撃を防いだ気分は、どうだった？」

「まあ……強くなった気分はしたけども」

「そうだろう、ああそうだろうとも。それでいい、そうでなくてはならない……だからこそ叩いて直す甲斐があるというもの」

その返答を受け、ルクーツアは意地の悪い笑みを浮かべる。

後ろではデイリーも同じく笑みを、いや声を上げて笑っていた。

「くっそ、どうせ持てただけだよっ！　んだよ、そんなの分かってるっつの……」

「いや、分かっている。今回のこれですら生ぬるすぎるものなんだぞ？　真面目な話だ……あの時、お前は己の無力を、その弱い力の使い方を認めた、そして今はそれを越えるために剣を持っている」

ルクーツアが言っているのは、初めての討伐の仕事で予想しないアクシデント。

中型モンスターであるロイオンが現れた時に、加藤が選んだ選択の事だ。

それは決して勇者のソレではないが、ヒトとしては誇るべき選択だったと言えるだろう。

「うん、そうだけど……。だから努力してるんだろう？」

「そうだ、だが分からないか？　オレはお前に剣を、デイリー殿は盾を与えた……。そして好きにしてみると言ったな？　何故お前はすぐにオレ達に教えを請いに来なかった？　玩具を手にした子供のようにはいでいなかったか？　今日、オレ達が教えると言っまてがむしゃらに振り回していたのはどうしてだ？」

「うっ……それは、……うん」

そう、防がせる、好きに攻撃させていた。

言葉で言えばそうなる事でも実際は異なる、ただ盾を持ち、好きに構えていただけ。防御ではない、遊びだ。

攻撃ではない、ただがむしゃらに振り回していただけだったのだ。すべて子供の遊びと同じと言って過言ではない、むしろ加藤がソ

レを行う時点ではソレ以下とも言えるだろう。

「それを見ていた。悪いとは言わない、お前にもソレは必要な事だったろう。それに……、こちらとしても、それを見たおかげで色々と見えてくるものもあつたからな。お前の最大の長所は体力の豊富さだ。がむしやらに、無駄には言ったがそれでもかなり体力を消耗するものだ。だが、お前はまさしく馬鹿の如く夜遅くまで続けていた、うむ。悪くない。その上での俊敏さ、つまり脚力は、長所のおかげもあつて持久力がある、新人としては桁違い、そう言っているレベルだ。だが、お前の好きな、得意な動作は安全なもの、良く言えば堅牢さを好んでいると分かった」

ルクーツアは加藤の成長を知っている。この場の誰よりも、いや。この世界の誰よりも、もしかすると加藤本人以上に知っているだろう。それらを息継ぐ間も無いほどに言っていく。

その言葉の本流に軽く驚きながらも、加藤はなんとか反論らしいものを口にした。

「……ただ、慣れていないだけなんじゃないか？ 慣れればもつと、こつ……なあ」

「そう言った動きも取れるようになるかもしれない。だが、咄嗟のとき、お前自身の本能はソレを選ぶだろう……。耐え忍ぶ、何事も貫きたいという思いがあるのかもしれない」

先ほどの言い方では、それが悪いような風に聞こえていたのだろうか。次にルクーツアが言った言葉に加藤は目を輝かせて嬉しそうに首を縦に振りながら叫ぶように言った。

「いいね！ そうそう、そういうのが憧れなんだよっ」

「はっはっは、己の信念を語るにはお前は未熟すぎる、それは今は閉まっておけ。話が逸れたな、つまりだ……カトーは調子に乗りやすいんだ。剣を持てば強くなった気になり、盾を構えれば誰かを守れる気になっている、大間違いだ、そもそも……」

ルクーツアは加藤の過信を指摘し続け、加藤はその言葉に気力を徐々に奪われていった。

そんな話をまだ続けようとしていたルクーツアを止めたのはデイリーだ。

「それくらいで良いじゃろう……小僧。お主は弱い、武器を……敵を倒す盾、己を守る剣を持ってもしそれは変らん。もう、分かったじゃろう?」

「ああ……これだけ長く言われ続けたらな……。でもさ、盾と剣って普通逆じゃないか?」

「いいや、これで良い。己を傷つけようとするモノを殺すのは盾じゃからの」

「剣とは敵に傷を負わせるためのモノだ、それは間違いではない。だが自分に敵対する相手の場合、それを持つという事は対抗するという意思を相手に示す。分かるか? 別に斬るまでも無く、振るわずとも剣は剣なんだ」

「よく分からないな、まあいいけどもさ。その内分かるだろうし……」

「ほっほっほ、良いか。盾は敵の殺意を殺す、だが持っているだけではただの板に過ぎぬ。同じく剣もじゃ、振るわずとも……そうは言ったが、それは剣に小僧の意思が流れていてこそ。わかるかの？」

「それじゃ、カトーは分からないかもしれんな。カトー、お前はこの上着をどう思う？ オレの上着だ」

そうルクーツァが言うのは、何かの皮で出来ているだろう黒色のジャケットのようなものだった。

別になんの変哲も無い、強いて言うならばこの暑い夏にそれを来ていて平気なのかという疑問だけだ。

「いや、どう思っつて上着だろ？ それがどうかしたのかよ……」

いきなり上着の話になったのが不思議なのだろう、そして真剣に話しているものと思っつていた時にそういった会話、加藤はふざけていると思っつているようだ。

表情は真面目なままで変わらないが、声に不満の色がありありと見えた。

「はっはっは、そうだろう？ だが、………ほらな？」

そう言うのと、一瞬、本当に一瞬の事だった。

上着の端を手に握ると軽い動作で何かしたと思った時には、加藤の盾はその手に無かった。

「……あれ？」

「今回は、盾に力を入れていなかったから吹き飛んでしまったが、普通であっても牽制程度にはなりうる。こんなものでも、オレが使えばこうなるんだ。つまり、お前の剣はただの上着であり、オレ達の剣はこれという事だ」

「あー、分かったような、余計分からなくなったような。というか、もっと簡単に言ってくれよ……てか驚かせるなつての!」

そう言っている男達の輪の中に、二輪の花が入ってきた。

その内のまだ蕾を開かない花が言葉を1人の男へと語りかけてきた。

「あははっ、ルク達はだめだめだねー。いい？ ヒロ、こういう事だよ、珈琲に砂糖が入っていないのがヒロの剣つて事だよ!」

「……いや、俺は珈琲に砂糖なんて入れないんだが?」

「うそだっ!? そんなの珈琲じゃないよっ!」

「レイラ……例えが可笑しいんですよ?」

「おお、エリアスールさん! エリアスールさんならきつと簡単に教えてくれますよね! 正直もう必要ないと思う事だけど、せっかくだしお願いします!」

レイラの例えは良く分からないものだった。なんとなく分かりかけたものが、逆に分かりにくくなるほどだ。

加藤はどうせならと、もう既に花開いている、しかしまだ満開ではない、そんな花に頼み込んだ。

そして加藤のその言葉を受けて、自信満々に彼女は言い放つ。

「いいですか、カトーさん。つまり、珈琲にミルクが入っていないものが貴方の剣なんです！」

「……………うん、もういいよ。エリアスールさんもこういうヒトだったんだな。なんとなくなら、もう分かったし、うん」

「え？ 珈琲にミルクは入れるものですよね？ 砂糖よりも優しい口当たりになりますし、何より栄養がっ」

「エリってば知らないの？ お砂糖は栄養満点なんだよ？ 摂らないと生きていけないんだよ」

「何を言っているんですかっ！ ミルクこそが大事なんです。そもそも貴女はミルクを飲まないからいつまで経っても背は低い、胸も小さいままなんですっ！」

「っ！？ それとこれとは関係ないでしょ！ 第一、ミルクを飲まなくてもお母様は大きいよっ！」

「あんたらは何の話をしてるんだ？ てか、ここでやるなよ。普通なら食いつきたい所だけでも、今は訓練中なの、分かる？ 俺は結構マジでやるうって今、まさに教えられて思ってるところなのよ、分かる？」

「え……………普通なら食いつくというのは、その……………つまり、あの」

「わあっ！ ヒロってばエッチだっ！ 胸の話に食いつくんだ！」

「お前らはそこに食いつくのかよっ、てかいいだろうが！俺だつて男の子なんです、女の子とか、そういうのに興味津津なんです！何が悪いって言うんだよっ！！」

「ほっほっほ、若いのう……。ワシも昔はあぁやって、うむうむ」

「ふっ、だからカトーはまだまだなんだ。女性の前でそれを言う時点で奴の負けは決まったようなもの……。オレも昔、あれをやつて散々言われ続けたからな、こついつたものは長引く……。憐れだな」

「そうじゃのう、婆さんもそうじゃつたわい。何かにつけて、愚痴愚痴と……。苦労したのう。……。いやあ、しかしあれで小僧がソツチで無いと確かに分かつて一安心じゃの？」

「うむ、夜の街でそういった所に連れて行ってやると言つた事もあつたんだ。なにせ、あいつもそれなりの年だからな……。だと言つてに行かないと言つて聞かなくてな？ 時には怒つてもいたんだぞ？ それもあつたからな……。いや、本当に安心したよ」

大人達は若い者達を眺めつつも、笑みを絶やさずに語り合う。

若者達の戦いは既に流れは出来ていた、2対1なのだ。

今はもう、泣きそうな顔をした1人の男と、面白そうに笑いながら揚げ足を取り続ける少女、困つたように頬を赤くしつつも叱責する女性がそこにいた。

時に楽しく笑い、時に汗を流し鍛え、時に面を上げて言葉で学ぶ。加藤は出発までの3日、ここ、領主の館にて鍛えに鍛え、学びに学び、笑いに笑い、最後には何故か今回のように涙目の日々を過ごしたのだった。

第3話 『準備!』

「えつと、剣だろ？ 爺さんから貰った盾に、あとは着替えに……」
「まだ終わらないのか？ 昨日はもう大丈夫だと言っていただろう？ なんで今になってまた確認なんてしているんだ」

加藤達はデイリー達、領主が迎えるヒトを隣街、というほど近くも無いが、ここ最前線の街『サツクル』の前の街に迎えに行くという仕事を彼らから受けていたのだ。

そのための準備を昨晩に終わらせたはずなのだが、加藤は行くという時になって確認していた。

「いや、悪い……。ちゃんと大丈夫かなあって急に不安になっちゃった」

「まったく、見せてみる。ふむ、……薬などもちゃんとあるな、予備の水筒もちゃんとある。うむ、袋の中身はそれで大丈夫だろう」

「っ、そっか！ んじゃ、行こうか！ 先輩、留守番頼むなっ！」

「キュツキュ〜」

「うむ、おいカトー……。外套を忘れているぞ？ それは寝袋代わりでもあるんだ。忘れるな……」

「……ふっ、何を言うのかと思えば」

「……よし、行くぞ」

「ちょっと待って！ ごめんって、ちょっと言ってみたくなっただけ！ すいません、忘れてました！ 忘れてませんよ？ みたいな感じを格好良く言ってみたくなっただけなんですっ、てか今思うとダセエー！」

下らないやり取りをしながら彼らは部屋を出る。

そして宿を出ようと受付のある、一階へ降りた時に老齢の女性が彼らに気がつき、声を掛けて来た。

「おや、もう行くのかい？ 最近は壁の仕事ばかりだったけど、今回ののは長い上に街の外に行くんだらう？」

「……大丈夫なんだろうね？」

この宿の女将が我が子を心配するかのようになり、ルクーツアに問いかけた。

それに苦笑いを浮かべながら保護者は返事をする。

「ああ、安心してくれ。オレに加えてデイリー殿がいるんだ、滅多な事が無ければ傷一つ負わせはせんよ。……それに、カトーも曲がりなりにも冒険者だ、その言葉は不要だろ？」

ルクーツアは説明を行ったが、それでも女将は心配なのだろう。目には納得の、了承の色が見えなかった、だから保護者は加藤へと言葉を投げ、女将の強い視線から逃れた。

その事に喜色を浮かべそうになった被保護者は、気がついたようにソレを消した後で言う。

「あ、うん。心配しないでくれて、一応逃げるのだけは合格貰え

たんだからな！……………うん、心配いらないよ」

1週間という短すぎる鍛錬では当然の如く、習熟には至らなかつた。

それ故に何かあれば、己の身を守り、下がるための動きを集中的にやったのだ、おかげで彼らの邪魔にならないという地位にまで登り詰めた、大成果だ。

だが、それとこれとは別なのだろう。

言ってから、萎むように口を開いて再度そう語りかけた。

「あつはつは、そうかい……。まあ、何かあつたら、すぐに逃げな。それは恥ずかしい事なんかじゃないんだからね？ 焦る事は無い、坊やは今ちゃんと頑張ってるんだからね？ まあ、ルクーツアさんも居る事だし……うん、ほんとに頼んだよ？」

話を逸らしたと思っていた所にまた来たのだ、少々慌てながらも保護者は腕を上げて了承の意を表した。

「んじゃま、行って来るわ。あ、そだ女将さん、先輩の事はラルにお願いしてんだけど、一応女将さんも……」

「はいはい、分かってるよ。ほらっ、あたしが言うのもなんだが、遅れちまうよっ！ 気をつけて行くんだよっ！？」

「はっは、それでは行って来る。確かに遅れそうだしな、カトー、急ぐとしようか？」

「そだな、んじゃ〜」

そう言っ彼らは宿を出て、集合場所である、南門へと急ぐ。

宿から彼らが出ていった後、女将は嬉しそうに、しかし心配そうに吐息を吐いた。

だがすぐさま、いつものように仕事を始める、女将はどんな時でも女将なのだ。

「あつ、来た来た！」

「ほっほ、丁度じゃの？ 小僧、準備は良いかのう？」

南門、これから行く街へと続く街道がある門だ。

いや、正確には全ての門が続いているのだが、一番近いのはここなのだ。

そこでデイリー達と加藤らは合流を果たした。

「いや、すまん？ カトーが行く寸前になってから、確認をまたし始めたものでな」

「あははっ、分かる分かるっ！ 不安になるんだよねえ、わたしも今日はどんな服着て行こうかって、出発ギリギリまで考えてたよー」

「服かよ……。俺はもうちょっと真剣な考えだったんだけどもねえ」

「いえ、レイラは一応領主の娘、つまり迎えに足る人物というわけです。まあ、本来はデイリー殿で十分なのですがね？」

「ほっほ、相手方がレイラお嬢様と同じ年齢の娘という事なのでな」

それは別としても……相手故によ、それなりの服装、それでいて実用も兼ねるとなれば選ぶのも一苦労と言う訳じゃの？ 分かるかの、小僧」

「なんだよ？ 俺の慌てたつてのと、レイラのそれは別物って言いたいわけ？」

「諦めろ、事実としてお前のアレは情けないものだからな？」

今朝の加藤を話の肴に、彼らは笑い合う。

そして、そんな事を繰り広げながらも、出発の最終準備に取り掛かっていた。

「うむ、それで良い。小僧、馬に付け忘れたものは無いかの？」

「うっせ！ そもそも取り付けてくれたの爺さんだろうが……。忘れたら、爺さんのせいだかな？」

「知らんのう、ワシはあるものを付けただけじゃしの？ それ以外では責任持てぬのお」

「ぬう、爺さん……。何か忘れてるものってあった？ あったら言っただけだ」

加藤は、デイリーに荷物を載せてもらいつつ、馬に跨る。

そしてその馬上からデイリーへと質問を投げかけた。

それを受け取ったデイリーは意地の悪い笑みを浮かべて言い放つ。

「うむ、剣と盾を忘れておるの？ 小僧、色々大丈夫か？ 流石にワシも心配になつてくるの？」

「え、あ……、うん。乗るのに必死だったもんで、つい……いや、ごめん」

そう言つとデイリーからソレらを受け取り剣を腰の帯に挿し、荷物に盾を括りつけた。

加藤とデイリーがそれらをしている時には他の面々は既に準備が出来上がっており、加藤を待っていた。

「ん、カトーさんも大丈夫のようですね。デイリー様、そろそろ……」

「ほっほ、そうじゃの。それでは先頭はワシ、最後尾はルクーツァに頼むとする」

「了解した、カトー達は気にせず適当でいいだろう。馬に乗れるとは言え、まだまだ素人に代わりはないからな？」

「そうだねえ、走らせる事は出来るけど、一緒に走れるって感じじゃないよねえ」

レイラがそう言つのも頷けるものだった。

確かに加藤は馬に乗れる。

だがそれは馬に乗せてもらっているというものであり、馬と駆けているとは言えないものだった。

「ふふつ、ですが馬もちゃんと言つ事を聞いてくれてますし、後はカトーさん自身が慣れるだけです。この子はちゃんとカトーさんを信頼してくれていますよ？」

「信頼というよりは、心配というべきだろうな。馬にすら、助けてやらねばと思われるとは、さすがだなカトー」

「はいはい、良いんですよ。こいつはそういうのだったてスグに分かったからな、なにせ先輩に何処と無く似てるモノを感じたからさ。今更、恥もなにもない、頼らせてもらっさ」

「ほっほっほ。良い良い、実に良いぞ。正しくエリ嬢の言う通り、あとは小僧の慣れのみよの？ 馬に信頼される事は腕の立つ者ならばそう難しいものではない。だが馬を乗り手が信頼する、これは中々難しい……。小僧の未熟さがそれを助けたとは言え、うむ……。悪くないの！ 馬だけは一人前と言えようっ」

「まじかつ、逃げに続いて馬も一人前だった！？ これは嬉しいなっ、よしっ馬！ いや、軍曹！ これから頼むぞ！」

加藤は、自分が低い場所にいるという点を言われる事に、その場では大げさに騒いだりするものの心底落ち込む事は少なくなった。その代わりに、些細な事であっても認められると大げさに、心底喜ぶ。

「なんだそれは……軍曹などと」

「なんか可愛いね！ それじゃあこの子は大佐とかに改名してみようかなあ」

「やめて下さいね？ その子は既にちゃんと名前があるでしょう？ しかも貴女が決めた、ローズという名前がちゃんと……」

レイラの乗っている馬、ローズは愛する乗り手の言葉を嫌がるか

のように嘶いなないた。

「あははっ、ごめんね？　ローズはローズだよ？　冗談冗談」

「まったく、貴女はもう……」

「ふう、まあカトーもちゃんと乗れているな。街中など安全な場所では大丈夫だったが、外で馬を制御できるかどうかは心配だったが……。馬に、いや軍曹とやらに助けられたか。まったく、カトーめ。まだまだというべきか、大した奴というべきか」

「ほっほっほ、これから先は長いんじゃ。これくらいでいいじゃろうよ、向う街へも、小僧のこれからのもの」

彼らは馬に乗りながら、ゆっくりと『サツクル』を離れていく。

加藤にとっては二度目の街外であり、自分から目的を持って、誰かのためにという事では初めて街の外へと歩きだしたのだった。

第4話 『野営!』

馬達は、街道の端に生えている草を食^はんでいる。そのほど近くには、枝を山状に立てて、煙を上手く上へ流す焚き火があつた。

そして、薄暗くなったその場で、剣を振るう、風を斬る音が響く。

「そうだ、無駄に力を込める。全身にずっと、無駄に、意味無く、力を込め続けるんだ」

「ふつつつつ、ぎやくじゃつ、ないっ、のか!？」

「そうだな、そうかもしれない。だが、モンスターが現れた時、それを完璧に行える者は少ない。そんな時、普段は使わぬものに助けられるものなんだ。だから、無駄だが、決して無駄にはならない…自分の身体に教え込め。剣を振るう時、お前も使うんだと言う事をな」

「うつ、きつついつ、全身ギブスっ的、なアレみたいっ、やった事ないけどっ」

「なんか熱っ 苦しい鍛錬だねえ、もうちょっとやり方ってないの？」

その様子を座り込みながら見ていたレイラが、同じく座って、焚き火で簡易な料理をしているデイリーが、火加減を見ながら答えた。

「ほっほ、なに……いいんじゃないよ。確かに、アレは普通はやらん鍛錬よ。だがいいのじゃ、生き残るために奴が見つけた奴だけの方法

その言葉通り、無駄だが、無駄にはならぬものなのじゃろつて」

「そーいうものなのかなあ……。あつ、デイリー、焦げそう焦げそうっー！」

「おおつ、いかんいかん！ 裏返さねばなっ！」

そう騒いでいる2人を尻目に、加藤達は鍛錬を続けている。

ここには、時折聞こえる話し声以外では、焚き火で枝が弾ける音と、風を斬る音が響くだけ。

夏だと言つのに涼しく、静かな夜だ。

ゆっくりと目を閉じればさぞ気持ちよく眠れた事だろう。

だがその快適な夜に、汗を流し続ける者がまた、静かな夜に1つの音を生む。

「ぐう、ルクーツアっ……、いつまでっ……、続ければっ」

「いつまでも、だ。 終わりなどない」

(鍛錬していると、いつつもソレだっ！ そついう事を聞いてるんじゃないのにつ、あーきついつ)

訓練なのか分からない、ものを行っていた加藤達の所へ馬達の世話をしていたエリアスールが歩いてきた。そしてデイリー達の方を見てから、彼らに笑みを浮かべて言う。

「ふふつ、頑張っていますね。ですが、そろそろ夕飯にしましょうか、ルクーツア様もそれでよろしいですか？」

「ふむ、いいだろう。カトー、それは毎日続けることで身体が覚え

ていく。明日からは普通の剣を主軸に教えていくが、それは別として欠かす事なく続けるんだぞ」

「はあ……疲れた。なんか全身ピクピクしてるわ……。筋肉痛になりそうだ、それも全身……いやだなあ」

そんな事を言いながら、加藤達3人は焚き火が照らしている場、今夜の宿へと数十mの距離を歩いていった。

「デイリー、そろそろいいんじゃない？ いい匂いしてきたよっ、もういいんじゃないかなっ！」

「そうじゃのう、うむ……。良い頃合じゃろう、あとは沸かしておいた水に。茶粉を混ぜれば……」

「おおっ、美味そう！ なにこれ、肉か？ 良くわからねーけど美味そうっ！」

簡易な料理が丁度出来上がり、食事の準備も整いそうになった時に加藤達がそこに来る。

加藤が言うように、肉のようだ。干し肉のようだが、少々違う。どちらかと言えば燻製と言ったところだろうか、それを火で炙った事で脂が染み出してきており、またそれが焦げた匂いが食欲を誘う。

「ふむ、悪くない。昨日の食事は干し肉をかじっただけだったからな、これは嬉しい」

「だよねっだよねっ！ やっぱり温かい料理はいいよねえ、お腹も空いてきたし早く食べたいなあ」

「ほっほ、もう暫く待ちなされ……。うむ、焼き具合も悪くないの、あとは……」

デイリーは焼きあがった肉を小さな刃物、ナイフで小分けに切り分ける。形状としてはフランスパンに近い表面は硬く、中は柔らかいパン。それに切れ目を入れ、そこに何かのタレを付けた肉を挟みこんでいる。サンドウィッチに似ているようだ。

「うむ、これで良い……。茶も出来た事だし、食べるとするかのう。小僧！ 茶を器に移しておけつ、ワシは切り分けたものを皆に配る」

「俺が？ まあいいけども。えっと、これが……。こぼさないように、こぼさないように」と

焚き火の周りに座っている他の面々にデイリーはサンドウィッチを配っていく。

配り終えて、加藤のいる場へ戻ってきた頃には、大きな器、鍋のようなものから小さな器、カップへと淹れ終えていた。

「うむ、後はそれを……。終えたようじゃの、それでは頂くとしよう」

デイリーのその言葉を受けて、皆がそれぞれに食に対する礼をした後。

大きく口を開けてかぶりつく者、小さく啄ばむように食べる者と別れているが、同時に夕食を楽しんだ。

「いや、これ美味いよっデイリー！ このタレ？ なんなのか分からないけど、うん！」

「ふむ、これは……胡椒が効いているな。そしてこの酸味、これはおそらく果物が……」

「酸味が、果物などいれておらなんだが……。少々悪くなっていたかの？」

「……………それは本当か？」

「だつせ！　なんか溘蓄語りだしたと思ったらの外れ！　ルクータ、あんまり言わない方がいいと思うぞ？」

「カトー……喜べ、明日は今まで以上に厳しく鍛えてやるからな。そつだな、まずは馬に乗らず、走って移動させるとしようか。己の長所を伸ばす事も大事なことだしな？」

「待てやつ！　なんのために軍曹がいるんだよっ！」

「何を言う、お前のために荷物を持ってくれるではないか。オレもまだまだ甘いな、重荷は背負わせないなど……ふっ」

予想をしたルクーツアをからかった加藤、そしてそれに仕返しを返して騒ぎ合っている彼らを尻目にエリアスールがデイリーに小声で話しかける。

「えっと、これは本当に腐ってきているのですか？　だとしたら食さない方が……」

「いんや、入っておるよ。安心せい、これは腐っておらぬからの。ただ果物の風味の油を使っておるに過ぎぬからの。ちよつとした意

地悪と言つ奴じゃの？」

「ふー。食べた食べたっ！ 美味しかったあ、ねえねえデイリー。明日はどんな料理にするの？」

「お嬢様、もう少し食べ方を丁寧にした方がいいのではないかの？
口元に食べかすが、……………ここについておるぞ？」

「そう、そこですよレイラ。うん、取れましたね……。次からはもう少し食べ方に気を使った方がいいでしょう」

デイリーは、食べ終わった次の瞬間には明日の料理を期待する目を向けてきた少女に、そう言う。

言われたレイラは口元を触って確かめているが、なかなか辿りつけない。見るに見かねたデイリーはついている場所を己の顔を指差して教えようとしていた。

「はっ、いいさ、やってやるうじやないかつ！ そこまで言うなら俺の華麗すぎる走りを見せてやるっ！ 軍曹に頼りっぱなしってのもアレだしな、ここは1つ、今までの成果つてのをだなっ！」

「ほう、やるか。いいだろう、もしもやり遂げた時には討伐系を一度受けさせてやってもいい。だが、出来るかな？ 出来なかつた場合はまた暫くの間はずっとこれまでのような仕事で身体を鍛えるものを受けてもらうっ」

そう少女達が笑い合っていた時、加藤とルクーツアの可愛い喧嘩は終盤に差し掛かっていたようだ。そんな事を完全に暗く、眠る時までやりながら、彼らは騒いでいた。

「はあっはあ……休憩はまだ？ そろそろ、きついんだけど……
っていうかゆっくりとは言え、馬に置いてかれないように……。
やっぱいな、舐めてた……、流星は軍曹だっ」

「はっはっは、まだまだ1時間経った程度だぞ？ 馬を休めるのは
まだまだ大丈夫だ。どうした、それでも冒険者かつ、昨日の自信は
どこへいった！」

「ぐう、言ってくれるじゃないかつ！ いや、ようやく体が温ま
ってきた所さつ、昨日の筋肉痛とかにも慣れてきたんだっ。これか
らってもんよっ！」

「だそうだ、デイリー殿。少々、速度を上げてても問題はないようだ、
行こうとしようか」

「ちよっ……マジで速度上げてるしっ！？ くっそ、負けんっ！
頑張れっ俺！ でもやっぱ筋肉痛はきついっ！ ……あっ、や
っぱもう少しゆっくり、って待って！置いて行かないでっ！！」

彼らは、そうして何事もなく、しかし何事かを為しながら、翌日
も、翌々日も次なる街を目指して駆けていった。

待ち人がある街までは、もう少しだった。

第5話 『秘密!』

「そろそろ街に着くのか？ たしか1週間くらいで着くっていったよな？」

「ほっほ、その通り。今日の夕刻あたりには街が見えてくるじゃろうて」

加藤達が『サックル』を出てから丁度1週間が経過しようとしていた。

毎日のように夜には鍛錬をし、昼には騒ぎながら、終始笑顔をやさずに歩んできたのだ。

勿論、何も考えずにいたわけではない、この世界にはモンスターという脅威が存在するのだから。

……だが加藤はそれを加えても楽しんでいたと言えるだろう。

「どんな街なんだろうなあ……。あ、そういえばさ、迎えに行くお偉いさん？ ……の娘さんか。まあ、その人に会う時って俺らも居ていいの？」

「ほっほ、当然じゃろう。お主らは現状ワシら……つまり領主であるロレン様が雇っている信頼のおける冒険者という立ち位置なんじゃ。隠すのではなく、寧ろ見せ付けるべきじゃの？ ……小僧は別じゃが」

デイリーは会う事を認める、どこるか奨励した。最後の小声を除いて。

「ぐつ、聞こえてるぞ！……まあ、確かにそうだよな。冷静に考えれば、これはある意味国寶みたいなもんだし……。確かに俺は場違いだな、ルクーツアは強いし……。うん、この世界でなら間違いないよな」

「ほつほつほ、その通りじゃよ。その点を考えられるあたり、お主も合格と言えようの」

加藤の段々と独り言になっていく言葉を、デイリーとルクーツアの2人だけが聞き取った。

デイリーはそれに笑いながら返事を返しつつも、視線はルクーツアを捉えて放さない。

「カトーはそういつた事は本当に理解が早いな。前に言ったかどうかは忘れたが、力とは何も剣だけではない。同じく戦いもな？ 今回、レイラ嬢も来ている……。理由は相手方に娘がいるからとの事だった。だが、街に近づくにつれお嬢さん方の表情は硬くなっているな？」

ルクーツアは視線を向けてきたデイリーに何かを返すように、疑問を投げかける。

それに反応したのはデイリーではなく、レイラだった。

「えっ……。そ、そうかな？ あれかも、他の街だと色々嫌な事があるかもしれないしっ！ だってこの街は獣人のだからさっ、それでね……」

「レイラ、落ち着きなさい。デイリー様も、先程言った言葉の通りにすべきでしょう。信頼のおける冒険者、いえヒトです……。これから長く頼る、いえ頼らせて貰う。それは私以上にデイリー様がお

分かりでしょう?」

エリアスールがレイラの馬、ローズへと自分の馬を寄せて優しく語りかえる。

と同時にデイリーへと少々棘を含んだ言葉を投げかけた。

「……ふむ。そうじゃの、あの一戦で冒険者としてなら合格以外の何者でも無いと分かってはいた。お主も……、小僧もな。そして、今のお主を見て、ヒトとしても認められたわ。隠していたワシが言うのもアレじゃが、叶うなら、ワシらもそれを共有させてもらいたいもんじゃの?」

「ふっ、なんのことかな? と言いたいところだが、カトー……どうする? どうやら、デイリー殿にはバレてしまったようだぞ?」

そんなやり取りを大人2人で進めている、女性達はこの流れで何故加藤へ話を振ったのかを理解できないのだろう、疑問を浮かべている。

そして受け取った加藤は、一瞬考えた、そして顔を上げて笑って言う。

「いいんじゃない? あっちの事は大切、うん。大事な俺の、俺だけの……思い出だ。レイラ達は友達だ、それなら思い出のひとつも教えるのはありじゃないか?」

「はっはっは、そうだな。確かに、あの話はオレだけが独占するのも勿体無い……。レイラ嬢達ならば、デイリー殿相手ならば問題はないだろう……」

「だって事で、爺さんは何となく分かっているというか疑問あるっば

いし。レイラ達は分からないけど、ちょっとした話をしようかと……」

加藤が、己の秘密と言えるものを語ろうとした。

それに他の3人が注目した時だった、体の何処から出しているのかわからないが、低い、暗い、重い音が響いてきたのだ。

「……ただし、貴様ら……不用意に言い触らしてみろ、殺すぞ」

「……おいおい、ルクーツア。なーに怖い顔して怖い事言ってるんだよ……。確かに言い触らされるのはあんまりいい気分じゃないけど、そういった冗談は嫌いだぞ？」

デイリーは動じなかった、しかし女性2人は動きが凍り、馬を止めてしまった。

いや、馬も止まったのだ。ただ、ローズだけは鼻息を荒くしている、主人を守ろうという気概が見て取れた。

「いや、冗談でこのような事を言うほど狂っては居ないさ。オレは本気でそう、言っているんだ。カトー、お前は分からないだろうが、お前の言う思い出話というのは宝の山だと言う事を知れ」

「え、え、え？　なんで、こんな事になってるの？　ね、ねえデイリー？」

「レイラ、落ち着いて……。大丈夫、ルクーツア様はああ言っていますが、そうではないはずですよ」

今まで固まっていたレイラが、デイリーに何かを求める。

エリアスールはそう言いつつも、ゆっくりと馬をレイラの前に動

かし、背の槍に視線を送った。

「ほっほっほ、なるほどの。やはりあの御伽噺は真の史実じゃったか……。お主の思い、確かに受け取った……。万が一そのような事が起きた場合には漏らした者は……。例えお嬢様であろうと、領主口レン様であろうとワシが斬る事を誓おう。それと、エリ嬢？ やめておけ、嬢では一刀の元に終わるだけじゃし、余計な事になりかねんからな」

「その言葉が聞きたかった。確かにその誓い、ルクーツァ・シィ……。聞いたぞ？」

「なんだなんだ、いきなりシリアス風味はやめろっていつも言ってるだろ？ ほら、レイラなんて顔を青くしちゃってるし、エリアスールさんなんて警戒しちゃってるぞ？」

そんな空気、急展開の中でも加藤は加藤のままだった。

鈍感なのか、大物なのか、恐らくそのどちらでもなく、ただ馬鹿なのだろう。

善い意味なのか、悪い意味なのかは措いて置くとして。

そのせいか、おかげか女性2人の目に常の色が戻っていく、その様子を大人2人は口元ではなく、目でもなく、気配で笑みを浮かべた。

緊張した空気が薄れていったのだ。

「ほっほ、すまんの、お嬢様方？ ちょっと以前から思っていた事がありましたの、先程それを確信に近づける事がありましたな。それで、という事じゃよ」

「すまんな。本来であれば街に着いた時にするべきだったんだが、

事が事。それに加えて街に入ればヒトが多く、まして国の重鎮に繋がるヒトがいるとなれば、今しか無いと思っただのだ」

先ほどの空気を微塵も感じさせない、いつものものに近い空気だ。しかし女性達の顔には、恐怖は無くなっているものの、色濃い疑問が残っている。

「まず、こちらからじゃの？ 此度の迎えというのは、火の国からとだけ言っておったの？ だが実際は水、風、土の3カ国からじゃ、火の国からはレイラ様じゃの」

「あれ？ サツクルって何処にも所属してないんじゃないのかなかったのか？ 無法のなんたら〜ってさ」

「そうとも言える、と言っただろう？ 人間が治めている時点で、どうしようも無く、火という立ち位置に立たされるものなんだ」

「言い方がちとややこしくなるがの、要は人間、竜人、獣人、有翼人の4つの種族でそれなりの地位のある者達なんじゃよ。今、小僧はそこだけ分かっておれば良い」

加藤の疑問に大人2人が答えた、その言葉を受け取っても加藤はいまいちな表情だったが、大人は構わず話を続けた。

「4つの種族、なるほどな。つまり、……前へ進むんだな？ そしてレイラ嬢を筆頭とする、そのためのオレとデイリー殿という訳か」

「いや、別段筆頭を望むわけではないがの。ただ、これから会う者達は別としてもその後ろが問題なのじゃよ。最低限、こちらの力を見せしておくべきじゃろう、事が事じゃし、慎重すぎて困る事はない

……。今回のような事があったから、そうとも言えんかもしれんがの？」

「まったくだな、しかしそれはこちらと同じ事。詳しい事はカトーから聞けばいいだろう、だが結論を言えばカトーはこの世界の人間、ヒトではない。思い出話には想像も出来ない世界があった……。理想がそこにあった。それゆえに、オレは気がかりなのさ、その宝の重さ、危険性をな」

「異なる世界、やはりあの話かの。4つヒトに古くからある昔話にも、時折そういったヒトらが現れた。人間には武器などの技術という力を、獣人には食や日常という文化を、竜人には武術という技を、有翼人には安心の場という建築を……。その他にも様々」

「恐らくはそうなのかもしれんな。だが、それは置いておけ、今はカトーがそういった価値を持つ思い出を持っているという事だ」

「こちらの世界で生きてきたレイラに取っては、その昔話のヒトというものは憧れの象徴だったのかもしれない。

今まで以上に、元気に、大きすぎるほどの声で加藤へと言葉を投げ掛ける。

「へえ、すつごい！ ヒロってばそんな凄いヒトだったの！？ すごいすごいっ！ ねえねえ、わたしも聞き……」

「レイラっ！ 貴女は少し黙りなさい、子供のように振舞うのも、もう必要ありません。それは貴女も分かっているでしょう？ だから、落ち着きなさい」

しかし、その声は常の少女のものではなかった。どこか無理をし

ているような、喉を痛めながらも言わなければ自分を保てないといったものだ。

その事を従者ではなく、姉としてエリアスールは厳しく、しかし優しく包む。

「……ごめん、ちょっとね。街に近づいてきて、あの話を思い出して、緊張してきた所だったものだから、つい……うん」

女性達はどうやら、未だ小声で話し合っているが、ずいぶんと落ち着けたようだった。

そして、以前少しの間とは言え見せていた、レイラの冷静な部分が露わになっていた。

恐らくはこれが、いや、こちらも彼女の地なのだろう。

「へえ、俺みたいなのが昔もいたのか……。まああのおっさんが言っていた通りだとしたら、有り得なくはないよな。そういう物質が地球に多かった時代つてもあつたかもしれない、あそこまで行かなくても起こり得たわけか」

加藤は、レイラの反応に一時驚いていたが、落ち着いた様子を見て同じくそれを消した。

そして、少女の言葉からこの世界にもそういったヒトがいた事を知る。

子供達がそれぞれに落ち着きを得たのを見届けた大人は、先ほどのソレを完璧に消すべく、にこやかに、明るい話題を以って常の空気を作ろうとしていた。

「まあ、お互いに秘密を打ち明けたわけだ。これからは本当の意味で背中を預けられるな、デイリー殿？」

「そのようじゃの、こちらが聊か情けない秘密だったのかもしれないが……。まあ、それはこれから小僧を見守る事で許して貰いたいの？」

デイリーがそう言い、ルクーツアはその言葉を喜んで受け取っていた。

話の焦点である1人、加藤はその話に上手く着いていけないながらも、己の疑問を打ち明ける。

「秘密つて、俺のはそうかもしれないけどさ？ レイラ達のは前もそう聞いてただろ、人間じゃなかったのはそうだろうけども」

「ああ、そうだったな。違う、そうではない……。以前から噂にはなっていた事があるのさ。曰く、新しい街を造るといふ、な？」

「街？ っていふと、サツクルより前に、危ない場所に？」

「その通りじゃ、そしてその代表としてサツクルが領主ロレン様がおるのじゃよ。ただ、新しい街の代表はロレン様がするわけにはいかん、サツクルは現状最前線、重要すぎる街じゃからの。つまり、ロレン様に一番近い存在であり、地位も実力もそれなりに有る者……。そうなると領主候補筆頭はレイラ様というわけじゃの？ 他の面々は新しき街を造るためには人間だけでは無理、そのための助力というわけじゃ」

「はあ……。街造り、ねえ？ なんで街造らないといけないんだ？ それにわざわざ危ないとこ行かなくてもさ？ 安全な、サツクルの近くにも作ればいいじゃないか」

加藤は更に言葉を重ねて、質問をする。

また、それには大人が答える、淡々と、あっさりど。

「そうできるのであれば、そうしているさ。だが、年月が経つ毎に人口は増加の一途を辿っている。新しい土地は必要不可欠、維持するためにも、より大きく広がらなければならないんだ」

「住むだけなら近くでいいけど、食べるためにはって事か？ なるほどねえ、けど、あぁいいや」

「ほっほっほ、まあ追々の？ ほれ、お嬢様にエリ嬢よ、何を2人でこそそしとる。あまり遅いと置いていつてしまっぞ、ほれ急がんなかっ」

先ほどの感じが収まった代わりに、女性2人は2人の話に夢中になっていたようだ。

気を逸らすためか、それともただ単に、そうなってしまっただけなのか。

とにもかくにも、一時のぎくしゃくとした空気はずいぶん薄くなり、いつもの彼らに戻りつつあった。

「ふう、うん。行くよっ！ ほら、エリも行く、置いていかれちゃっよ」

「ええ、そうですね。この前のカトーさんのようにはなりたくありませんし」

そう笑いながら来るのだ、いつの世も女性とは分からないものだ。先ほどまで少女は血が通っていないと思えるほど蒼白だったというのに、今の笑顔はまるで太陽に向って花開く、大きな花の如く明るい、温かいものなだから。

「あれは本調子じゃなかったんだよ、わかる？　そこ大事だからな、すぐく……ぶつちやけ俺の秘密とか比較にならないくらい俺としては大事な事だから、なあ、俺の話ちゃんと聞いてる？」

加藤からすればひよんな事から、緊張した空気が出来てしまった今回。

だが、こういった衝突を繰り返す事で他人から友人へ、信用から信頼へと変わっていくものなのかもしれない。

「ええー、あれはそんな大した事じゃないよ。だってただへばってただけじゃない、ねえエリ？」

「ふふつ、そうですね。声が聞こえなくなったと思ったら、道に寝転がってしまいましたから。胆力があると言うべきか、考えナシというべきか、出来ないと思ったならスグに言えばいいものなのに」

「あのね、そう簡単にごめんなさいとか、許してなんて男は言わないものなの。分からないかねえ、な！　ルクータ、そうだよなっ！」

加藤にとっては意味の薄くなった異世界から来たという事実が、この世界に何をもちたらすのかは、今はまだ分からない。

しかし、その知識が何かをもちたらす事がなくとも、この異なる世界を変える事は無いとしても、この仲間と出会った彼はその世界は確かに変えていくだろう。

「はっはっは、時には素直に謝る……これも1つの男の有様だ。覚えておけよ、いつかきつと役に立つからな？」

「ほっほ、その通り！　どんな戦いにおいても、勝てない時は多々

あるものよ。素直に負けを認めるのは男の、いや戦士の勇気の1つじゃの！」

「なんか、なんとなく話の内容が情けなく感じるのは、俺がガキだからか？」

そんな事をしていると、前方に大きな影が見えてきた。

「そうかもしれんな？　だが、それよりも前を見てみる……」

「お？　おお！　もしかして街か？　やっべ、すげーや……ちゃんとおそこ以外にも街があるっ！」

何に感動しているのかは分からないが、青年は喜色の声を上げる。それに釣られるように、女性達も同じく喜びを表す口元だった。

「うむ、ようやくといった所か、もうと言うべきか。とにかく着いたの、じゃが街が見えてきた辺りが一番危険でもある。小僧、浮かれるのは良いが、あまり気を抜きすぎるでないぞ？」

そう言うデイリーも、先ほどのアレによって関係が崩れていない事に安堵するように浮かれた調子で注意する。

「まったくだな、小型程度なら出ても可笑しくはないんだぞ？　お前のすべき事はなんだか覚えてるか？」

ルクーツアは先ほどの重さは既に胡散して、いつもの親馬鹿加減を徐々に出し始めていた。

「決まってるさ、俺に出来る事をするだけっ、つまり皆の邪魔にな

らないようにするっ！」

そう自信満々に情けない事を言い放つ。

だが、そんな事をしながらも加藤の大きな世界はこうして広がっていき、そしてヒトとヒトの繋がりという小さな世界もまた、広がっていくのかもしれない。

ともかく、次なる街はスグそこにあっただった。

第6話 『初恋!』

「へえ、この街の壁はそんなに高くないんだな? ってか、なんて名前の街なんだ?」

そう言うのは、街に入るためにデイリーが門の番人に手続きをしている時だった。そう、目指していた街は加藤の目の前にあるのだ。

「ふふつ、この街に名はありません。そしてこの街のすぐ後ろにも街があるんです。そのため、ここは農業を営む人が大勢いて、それ以外には常備軍の方達が駐留しているだけなんです」

「農業? だったら尚更守りを堅くするべきだと思っただけどなあ」

エリアスールの簡易の説明を受け、加藤はそこに疑問を感じたようだった。

「いや、農作物はモンスター達も食う。あいつらの多くは雑食だからな、わざわざ命のやり取りが必要なヒトを食うよりもそちらを選ぶんだ。そのためヒトの被害は少なくなる」

「だから、分厚い壁にしなくてもいいのか?」

「そういう分けじゃないよ? 重視しているのは人が出入り出来る門の方だね? 簡単に言えば、いつでもこの後ろにある街に逃げられるようにしてるんだよ。壁もそんなに高くないから、いざとなれば壁からも逃げられるって事だね!」

加藤の疑問にルクーツアが、そしてレイラが答える。
その言葉の証拠として、壁はわざと凹凸を作っているように見える。

簡易な階段、はしごという事だろうか。

「でもなあ……それなら、うーん」

「はっは、お前の言いたい事は分かる。だが、そう全ての街に労力を割けないと言う事だ。農業都市としてなら、ここは優秀すぎるくらいだぞ？」

そんな話をしている彼らの元にデイリーがゆっくりと戻ってきた。どうやら手続きは終わったようだ。

「ほっほ、何を騒いでおる。ほれ、入るぞ」

その言葉に従って、全員で街に入っていく。
農業のためというのは嘘偽り無かったようで、畑に草花が広がっており、一見して外と何も変わらないと錯覚してしまいそうだった。防壁は、やはりサックルに比べ低く、薄い。そして形状は正方形のようだった。

「へえ、確かに変わってるなー。室内キャンプ場みたいだよ、そういえばこっちでは普通にしてるな。勿体無い、もっと楽しめばよかった！ あ、いや帰りもあるんだったか、よしっ」

加藤達が来た門の方向には、門番が泊まるであろう小さな小屋があるのみだ。

遠く、反対の門の方にヒトらの家々が並んでいた、レイラの言うように、近い街の方へ寄っているようだ。

「残念じゃが、帰りは暫くお行儀良くせいよ、小僧？ 忘れておるかもしれんが、他に同行者がおるんじゃからな」

「それに、どちらにせよお前は鍛錬だ。お偉いさんだろうが、関係ない。変わらず鍛錬で訓練で特訓だ。キャンプとやらを楽しむ余裕は、このオレが与えない、それにアレはアレで楽しい……オレがな」

加藤の意気込みを大人達は常識を以って諭し、彼のためという免罪符の元の娯楽のために封じ込めた。

「……………軍曹、俺」

大人にそう言われ、話の矛先を女性達に変えようとした加藤。だが、彼女達は2人で楽しそうに笑って話し込んでいた。そのために、小動物せんばいに語りかけるのと同じように、愛馬くんそうに愚痴を垂れていた。

愛馬は、面倒臭くんそうそうに、鼻を鳴らして返事をした。

「ほれ、何をしておる。このまま待ち合わせ場所である宿まで行くぞ？」

そう落ち込んでいる加藤を急かすのはデイリーだ。気が付けば周りにいるのはデイリーのみ、他の面々は既にヒトの営みを感じる場へと馬を進めている。

「……………軍曹、俺色々くじけそう」

やはり愛馬くんそうは鼻を鳴らす。

しかし、今回は同情を感じられる柔らかい響きの嘶いななきだった。

「遅いぞ、何をしていた。……デイリー殿、この宿で間違いないのかな？」

加藤達が来るのを馬を宿の厩舎へと預けて、待っていたようだ。馬を下りた加藤も、デイリーの馬と一緒に愛馬くんそつを係りのヒトへ預けた。

「ほっほ、この宿というか、この街に宿屋はここにしかないんじゃないよ」

「それは知っているさ。ただ来た理由がアレなのでな？」

「ここかぁ、俺さ……黙ってたけど腹減ってるんだよね。ってことで早く入って飯食おうぜっ！」

ルクーツア達が真剣な話題を持つとしていた所に、邪魔者が乱入する。

しかし、それを嫌がるわけではなく、自分達の腹部に視線をやつて、納得するように頷いた。

「確かに、まずは腹ごしらえをするべきかもしれん。さて、農業都市の飯とやらは如何ほどかな……」

「そうじゃの、まあ慎重に……とは言ってるものの、そう心配する

事でもないしの。ワシは魚を食いたいのう」

「デイリー様、ここは農業都市ですよ？ 近くに川もありませんし、魚料理はあまり期待しない方がいいと思います」

「わたしは、そうだなあ。久しぶりにおコメ料理を食いたいかなあ……」

そう、口々に食べたいモノを思い浮かべ、口に出しながら宿へと入っていく。

加藤を置いて。

「なんだこれ、しかも軍曹もいねーし。なに、今日の俺の立ち位置はこつという感じなのか？」

愚痴を言いつつも加藤も宿へと入る。

加藤が宿へと消えた時、愛馬くんそうの嘶きが微かに響いていた。

「お、カトー！ こつちだこつち！」

宿へ入ると、そこは幹旋所の造りに似ていた。

一階部分は料理処となっているようだった、この街では個別の料理屋などは無いのだろう。

多くは自分の家で過ごしているのだから、ここを使うのはサックルへと向う者、逆にサックルから国の方向へと向う者が大半だ。

ルクーツアの呼び声に従い、加藤は奥にある席へと向う。

「つたく、置いていくなつての」

「置いていくもなにも、カトーが1人で考え事をしていたせいだろ

うっ？」

席に座るなり、加藤が愚痴を言い、即座に諭された。

いつも通りというか、料理の注文は済んでいたようだった、聞き終えた宿のヒトが加藤と入れ違いに席を離れていく。

「……まあ、いいけどさ。それで、待ち合わせのヒトってのは？
どこにいるんだ？」

「先程の方に聞きました。 どうやら上の部屋にいるようで、暫くしたら降りてくるそうですよ」

そう、ここで待ち合わせをしているのだ。

しかし肝心のヒトらが未だ居なかった、それを疑問に思った加藤はそれを聞く。

「なに、そう構える事ではない。先程までのワシが言えた義理ではないがのお……ほっほっほ」

その疑問にはエリアスールが丁寧に、デイリーは些細な事などは、どうでも良い事と雑に答えた。

「あのなあ、一応大切な事だったんだろ？ それを俺らに隠してたくらいなんだからさあ、それが……いやまあいいけど」

「はっはっは、正確に言えば少々毛色が違う。ここにいるのがオレ達以外であれば、それはもう憤慨していただろうさ。例え形だけであるうとな、だがこの程度は気にしない、共に理解し合える間柄。そう、デイリー殿がお前を認めてくれたという事だよ」

(いやあ……、ぶつちやけさっきのって、仲良くなれたの爺さんとルクーツアだけじゃね？ まあ、俺はルクータのコバンザメ的だし？ ルクーツアが信頼できる、つまり俺もってなったのかもしれんが、むう)

「そつだよそつだよつ！ 言い方は悪いかもしれないけど、お互いに大事な事を教えあつた仲だしねー」

「はあ……、レイラ？ ようやくいつも通りな貴女になったのは良い事ですが、何でもかんでも言うものではありませんっ」

(まったくだつ！ って、なにがだ？)

エリアスールの言葉に感じたものが顔に出ていたのだろう、ルクーツアも苦笑い気味だ。

それを口に出そうとして、それを止めた。何故なら……。

「すまない、少々待ち合わせより早かつたようで……。遅れてしまつたようだね」

そう言うのは見事な銀髪を柔らかく結つたものを上げた、セミアップが色気を醸し出している妙齢の女性だった。

エリアスールのソレと似通っているが、加藤は彼女を目にした途端、固まってしまっている。

その後ろには御付と思われる女性が、ゆっくりと付いてきていた。

「……ほう。 デイリー殿、こちらは？」

「ふむ……、アーダ・バツビ様で宜しいかな？」

アーダと呼ばれた女性は、軽く微笑む事で答えを返した。
その事にルクーツアらも納得したようだった、そして加藤は微笑みを見た時には頬を赤くし始めていた。

「そうです、このお方は竜人の国がライアズール、水の恩恵を受けた者。そのの財政を司る父、コンラード・バツビが娘である、アーダ様に御座います……」

言葉を持って返答したのは、後ろの御付の者だった。
そこに別の声が入り込む。

「あらあら、これはこれは……、貴女がいらっしやっていたんですの？」

そう高飛車に語りかけてくるのは背中に美しい白い翼を、そして同じく白く輝くウェーブがかった長髪を持つヒト、有翼人だった。
こちらと同じく、後ろに従者を従えている。

「ほう……、エイラ・ファルゲート、風の国が軍事大将の一人娘か。これはまた大物だな？」

その女性に気が付いたルクーツアは、彼女を知っていたようだった。
そしてその事にエイラという女性は気を良くした。

「あら？ 良くご存知ですね、その通りですわ。今回の任を一任されたのはわたくしですの、その貴方も、エイラと呼ぶ事を許しますわ」

「ああ……よろしく」

エイラに名を許された加藤は、気の入らない返事を返す。

目はアーダから離れない、今ではついに口も半開きという体たらくを晒していた。

「なんですか？ わたくしが話し掛けたというのに、その返事……貴方っ」

「まあまあ、落ち着きなよ。ボクとしては皆仲良くすべきだと思っよ？ そこで変な顔をしてる君も、もう少ししゃんとした方がいいと思っけど？」

エイラの言葉を遮って話に混ぜてきたのは、レイラと同じくらの、他の女性に比べると小柄な獣人の少女だ。

ラルが大きくなれば、このように美しくなっていくのかもしれない。

若干クセのある茶髪をミディアムスタイルで纏めている、綺麗といよりも可愛さが際立つ女性だった。

「ほっほ、これで全員が揃ったと……言っても良いのかな？」

「ああっ、待ってくださいよ！ ボクがまだ自己紹介していませんよ！ えっと、ボクはニーナ・エメットって言います、よろしくね？」

「ほっほ、これは失礼を……。ともかくこれで全員のようじゃの、それでは軽い料理もそろそろ来る頃合、食べながらになるが、構わないじゃろう。ほれ、皆座って、語ろうではないか、まずは……」

「おい、カトー、おいっ！ 何を固まっている？ これから話しを

するんだ、お前もちゃんと聞いておけっ」

加藤の左隣には、アーダが座っていた。右隣に座っていたルクーツアが固まっていた加藤へと小声で話しかける。

「あつ、ああ、うん。 わりい……」

この後、来た料理を食べながら、胸に何を抱えているのかは分からねど、それぞれに楽しんだ様子で初の顔合わせは終了した。加藤は、ずっとあの調子でいただけで、大して会話に入ることは出来なかったようだ。

そして、馬を休ませるために3日ほど滞在する事になった。そういう事情で宿に泊まる事となった夜、同室のデイリーとルクーツアへと、加藤は言葉を紡いだ。

「あー、さっきはボーっとしちゃって悪かったよ」

「ほっほ、なに気にするでない。1人くらいお主のようなのがおつた事で、他の面々の緊張が和らいだとも言えよう。うむ、故意か偶然かは別として、悪くない働きであったぞ？」

「いやさ……あの、竜人のヒト？ すっごく綺麗でさ……、うん。その、あれなんだ……」

「あー……、そういう事だったか。だが、お前分かっているのか、相手はだな……」

加藤の言葉を大人として常識を以って諭そうとするルクーツア。しかしソレを遮ったのは同じく見守る大人の1人、デイリーだった。

「良い良い、これもまた経験じゃろうて……。さすがのワシもこういったものは無かったが、小僧がそう言うのじゃ。思う通りにやらせてやるのも、また1つじゃよ」

「だがなあ、恋というのはいいかもしれん。だが、この場合はもしかすると……」

「こつ、恋……そつか、これが恋なのかつ!? やつべえ、この年になるまで、可愛いなあと思う事はあっても、こんな感情になつた事ねえよ。やつべえ、どうしよ……俺、明日、顔合わせられるかな?」

色々の違いすぎる相手に恋をしてしまった、1人の青年。

それとは別に、大きな物事を運ぶために3日後、彼らは新たな同行者を加えて来た道に戻る事となる。

新たな問題の火種となるか、今ある問題を解決するための力の1つとなるのかは、青年の恋の行方と同様に分からないものだった。

第7話 『橋渡!』

「そうじゃない……、いいか？ 剣を振るっているつもりかもしれないが、お前は剣に振られている」

「えっと、こっ、かな？」

この街に着いてから2日経っていた、加藤は他の面々を避けるように過ごしていた。正確には彼女達とずっと一緒にいるアーダに会うのが恥ずかしいだけなのだが。

とにかく、そんな状態の加藤相手であっても、鍛錬は欠かさず行われていた、そして鍛錬の時だけは常の彼であった。

「分からんかの、小僧？ 良いか、お主は別段、腕力が無いわけではない……寧ろあるほうじゃろう。そうなってしまっておる原因は腰じゃよ、引けておる」

「いやあ、なんか怖いつていうか？ 危ないもんだからさあ……。ついで、な？」

デイリーの言うように、少々腰が引けていた。とてもではないが、剣を振るう者の姿には見えたものではなかった。

「まったく、木剣ではそれなりに出来ていたというのに、真剣になった途端にこれか？ いいか、この鍛錬は剣を己の一部にするためでもある。これが何を意味するのか分かるか？」

「えーと、強くなるため、だろう？ というか木剣で、もっと戦い

方を練習、いや修行した方がいいと思うんだけども」

「違う、いやそうなんだが、今求めたのとは異なっている。正解は、共に戦う仲間を得るといふ事に繋がるんだ」

ルクーツアは、そう言う。だが加藤は以前の事を思い出して反論をした。

「は？ 俺はぶつちやけ剣使えないけど、ルクーツアがいるだろう？ それにさ……」

「ほっほっほ、小僧はなまじ考えが柔軟なだけあって気付かんのじやろ。良いか、基本戦いとはモンスターとのものじゃ、以前のお主のようなものは例外なんじゃよ。その際にがむしゃらに剣を振るう……今のお主に出来る剣もまた1つの在り方、それはそうじゃ。だが、それでは他の者を傷つけるかもしれないとは思えぬか？」

「ああ、そつか。剣を持つなら……ちゃんと振るえないと、確かに……」

「そのためには、敵を倒すための動きではなく、まず第一に剣を振るえる事が大事。そして振るえるという事は、それはつまりモンスターと戦える事に繋がる。焦る事はない、お前は着実に強くなっているさ。木剣を握らせたのは、握りを覚えさせるためだけなんだ、すまん」

「あー、うん。いや、いいよ。それに真剣にビビってた俺が情けないだけだしな？ でもやつぱり怖いんだよなあ、だってこの前ちょっとカスっただけで血が出たんだよ、いやー本物なんだよな」

そんな雑談を交えながら、剣を振るう。

とても剣を振るう者の姿には確かに見えないかもしれない、しかし戦おうとする意思は確かに、弱弱しくもあるが以前よりかは増している事が見て取れる姿だった。

「ふふつ、頑張っていますね。あ、デイリー様に何か言われたのか、足が地に着いてきましたね……。カトーさんの足腰の地力は侮れませんが、一気にモノにするかもしれないですね？」

「んー、でもなあ……。やっぱりデイリーやルクみたいには見えないね。やっぱりヒロもまだまだだよ」

そんな青年を遠めに眺めている女性たちが居た。

エリアスールは加藤の変化を見て取って喜び、レイラは雲の上の存在と比べてまだまだだと笑う。

「あの者は、私達の護衛なのだろう？ 正直のところ、それほど腕には、というかとてもでは無いが護衛と言える人物には見えないんだが」

「そうですね、カトウと言ったかしら？ あれではウチの新兵にも劣りますわ、見ていて腹が立つてくる立ち振る舞いですわね……」

「あははー、そうだねえ。ヒロじゃ、ボクの妹にも勝てなさそうだよ」

その言葉に答えるのは、それぞれ異なる種族の女性たちだ。

勿論、その中には加藤が会うのが恥ずかしがって避けていたアーダもいた。

「んっ……あまりカトーさんの事を見縊らない方が良いかと思えますよ。ああ見えて、デイリー様にルクーツア様といった本物の武人が見込んだ逸材なんですから」

「そうだねえ、わたし達は別にそういう意味で言ったわけじゃないよ？ ヒロは初めての討伐で中型のロイオンが出ても、自分に出来る事を冷静に考えて、わたし達に言えるくらい強いヒトなんだからね？」

先ほどまでは、情けない姿を微笑みを浮かべながらも笑っていた彼女達。

だが他の面々にそれを言われる事とそれは何かが違うのだろう、棘を含んだ言葉を投げつける。

「これは……いや、失礼した。別段、馬鹿にしているわけではないのだよ。ただ少々、な」

「馬鹿にも何も、アレを見る限りではそうとしか言えませんがね。しかし、あれほどの者が見込んだ、というのが確かであれば認識を改める必要を感じますわね？」

「うはー、ロイオンに会っちゃったの？ ボクも有るんだけど、怖いよねえ……最初の頃なんて後ろで縮こまるくらいしか出来なかったんだけど」

その言葉を聞いて、あるヒトは驚いたように謝罪をし、あるヒトはそれでも意見を変えなかった。

それでも、言いたい事をいった事で溜飲が下がったのか、それ以上言葉を重ねることはしなかった。

「しかし、面白いものですわね。見てみなさい、こんな数十分にも満たない時間で、既に剣を振るう事が出来始めていますわね」

「当然だよー、毎日のように木剣でやってたからねー。コツさえ掴めばアツと言う間じゃないかな？」

そう、加藤は遠く離れた彼女達ですら目に見えるほどに剣を自分のものにし始めていた。

レイラが言うように、正確にはそれなりの時間を掛けて身に付けていったものを真剣でも行えるようになっていただけなのだ。

そうだとしても、やはり異常な速度で習得していつている。

言語にしても、身体能力にしても、そして剣でも加藤は成長が著しく早かった。

強くなるため、大人という理想へ近づく事については、誰よりも貪欲なためかもしれない。

「ふっ、ふっ、ふっ……」

そして場面は加藤達に戻る。

加藤は剣を片手で横に薙いでいた。

少なくとも長い付き合いである、この短剣は恐れなくなったため、ルクーツアにイメージできる振るい方をするように言われていることだ。

そう、エリアスールが領主の館で教えてくれたモノをイメージしていたのだ。

「悪くない、だがダメだな。あれは振るうだけではなく、動きも同時に進む事で意味がある。それに加えてあれは槍の動き、その短剣といえる間合いの得物では、それ以上に難しいものだぞ。まあいい、いいか？　こうだ、っ！」

ルクーツアは実際に教えたエリアスール以上の動きを見せて、加藤に教える。

その動きを見逃さないように、先日アーダに見惚れてしまった時以上に釘付けになって見つめる。

鍛錬の時、教えてもらう際に加藤の目はいつもそれだった。

「えっと、まず得物を後ろに回して、その遠心力で体を後ろに流す。その瞬間に得物を振るって、同時にその反動でより遠くへ離れる、か……確かにこの剣だと難しそうだな」

「ほっほ、確かにの。じゃがお主には盾がある……違うかの？ そして盾を持つ事を許す筋力がお主にはある。どうじゃ、ここは1つ苦手な戦い方ではなく、お主の好むやり方を1つ教えてやるうかの」

先ほどまでは、戦い方ではなく振るい方だと言っていた大人達。

それが今では戦い方を教える事に夢中になっている、どちらが教えるかを目線を介して喧嘩しているのだから、喜ぶべきか、悲しむべきか。

「いや、得意な事は後からでいいだろう。まずは苦手としている事を身に着けるべきだ、最初にそちらをやれば、こちらが身に付かなくなるぞ」

「分からぬかの。例えそうだとしても、これを極めれば最早恐れるものなど無くなるというものじゃ。ほれ、何も問題はなかるう？」

「あのさ、どつちでもいいから……。早く次は何するか言ってくれない？ それとも俺、走り込みでも行って来ていいのか？」

「……いや、走り込みはいいだろう。盾を持った素早い動きというのを教える事にしたからな」

「うむ、お主の長所を存分に生かした戦い方じゃの？ いや、これはワシも楽しくなってきたわい」

楽しむ獲物に逃げられては堪らないと、すぐさま妥協を互いに認めてそう言い放つ。

それを受けると加藤は盾を構えて、次の教えを待っていた。

「良いか、盾とは以前言ったが、敵を殺すモノと心得よ。来るもの全てを防ぐものではない、避けられるものは避ける事も肝要。そのためには素早い移動も重要になる」

「だが、ただ素早く移動するのでは盾の意味が失われてしまう。だからオレ達が徹底的に……」

こうして、名の無い街での2日目が過ぎていった。

そして日が明けて、サツクルへと向けて旅立つ日がやってくる。

「皆、準備は良いかの？ 特に小僧、忘れたものなどないかの？」

全員がそれぞれ馬に跨り、サツクル方面の門へと集まっている所だ。

そこでデイリーは最終確認をし、最後には加藤に笑いを浮かべて質問した。

「今回は大丈夫だよ……、ほんとに」

「そうだな、昨日の夜は必死に確認をしていたからな。これであれば何も言えなくなってしまうところだろう」

加藤の肯定の言葉を受けて、デイリーは出発する事を全員に告げる。

先頭に行くのは、新たに加わった女性たちの付き人達だ。

その彼女達を守るように、後方にはデイリー、ルクーツァ、加藤の3人が続く。

「なあ、一番先頭にどっちが行かなくていいのか？ エリアスールさんが、一応それを纏めるって事になってはいるけども」

「ほっほ、確かにそうかもしれないの。じゃが、エリアスールはあれで中々のものなんじゃぞ？ まあ、ワシやルクーツァには劣るのは仕方の無い事とは言え、他のものよりは十分やれるじゃろうって」

加藤は、先頭と最後尾には力ある者が付くものという事を以前教わっていた。

だからこそ質問したのだろう。

それにデイリーはエリアスールの後姿を眺めながら、若干喜色を含んで答えた。

「あー、うん。そっぴやエリアスールさんもかなり強かったんだっ
たな……」

「何を落ち込んでいる。当然の事、というよりもお前はこの中で最弱だ。そんな事は承知の上だろう？ そしてそんな事はすぐにどう

でも良くなる事だ」

「ほっほ！ その通りよ、ワシらが鍛えるのじゃぞ？ レイラお嬢様や他のお嬢様方には失礼かもしれぬが、スグに追い抜かすじやろうて。サツクルへと戻ったら本格的に出来ると言つものじゃ、いや楽しみでならんのお」

「本格的？ 今までののはなんなんだ？ 昨日だって戦い方を教える！ って言つてたじゃないか、あれはなんだ？」

デイリーの言った言葉に疑問を持ったのだらう、加藤はそう尋ねる。

そしてやはり嬉しそうに彼らは答える。

「サツクルの屋敷での際に言っていなかったか？ 簡易なモノを教える、そう言った」

（そんなん言つてたか？ というか今までののは簡易な、簡単なものだったのか？）

「まあ、屋敷に着いたらすぐに分かる事じゃて。だが安心せい、今までの事は別に無駄ではありやせんからの？」

「無駄とか言われたら俺は普通に泣くぞ？」

「なぜ泣くのかな？ 私の見た限り貴方は着実に強くなっていたよ。昨日の短時間だけだが、それだけで無駄でない事は分かった」

そう、加藤の何気ない呟きに反応したのは、少しばかり前を他の女性達と進んでいたはずのアーダだった。

その事に気付いた加藤は、急に静かに、丁寧な言葉遣いをし始める。

と同時に、ルクーツアは哀れんだような笑みを浮かべ、デイリーは面白くて仕方が無いという満面の笑みを浮かべている。

「あ、その……ありがとうございます。いや、でも俺なんでまだまだですから、これからも頑張らないといけないと」

「そうだな、貴方を見ていると私ももつと頑張らねばという思わすにはいられない。ああ、別に武というだけではない。私の領分は本来そこではないのだね」

「そうなんですか？ 竜人のヒトは武術が凄いつて聞いた事がありますけど」

「嗜み程度さ、もちろん父上などはかなりのモノなんだがね。私はどうにも体力が無いようで、もっぱら頭を動かすのが得意だね。そうそう、武と言えば……」

加藤は、こうしてぎこちなく、しかし徐々に普通に、彼女と話し合いが出来るようになっていく。

そうして日を越していく。

「食べないなら、わたしが貰うね？ 焦げちゃうと勿体無いし！」

「あつ、それボクのだよ！ レイラ、なんでボクを取るの？ そ

れならボクにも考えがあるんだからね……あつ焼けてる！」

「待てやっ！ それは俺の肉だつ、さっきレイラに言ったのはどうしたんだ？ というかレイラにニーナ、良いか……良く聞けよ？
そもそもだ、お前ら肉を焼いていないだろうが、俺が空いているスペースに置いてあるんであつてだな……」

時にご飯時に戯れる事もあれば。

「何故、あのカトウは走っているのかしら？ 馬も別段なんとも無いでしょうに、それにデイリー様方は何故笑っているの？」

「ふふつ、まあこれもカトーさんなりの強くなるために必要な事だ
そうですよ。事実として、ここに来る道でも同じ事をしていましたが、今はその時より長く突いて来れていますし」

「うん、そうそうモンスターが現れないだろうとはいえ、街道で、
か。体力以上に精神力を鍛えられそうだ」

ルクーツァとのいつもの可愛い喧嘩の末の情景を見せたりと。
加藤が意識するまでもなく、彼女達には加藤という存在を知って

貰っていった。

そして名も無き街を出発して7日目の夜のこと。

「ほっほ、人数が増えたので多少遅くなるかと思えば。小僧のお遊びのせいで遅れたくらいじゃったの？」

そう、明日にはサツクルへと着くだろう距離を稼いでいたのだ。そして多少、前よりも時間が掛かってしまった理由は加藤にあった。

喧嘩の末の走りこみを一度だけではなく、ほぼ毎日やっていたためだ。

「いやあ、まあそれは悪かったよ。なんていうか、そう！ ルクターのせいなんだっ！」

「何を言う、オレは別に強要した覚えはないがな？ 勝手に走ると言い出すのはいつもカトー、お前だろう」

「そうだねー、ヒロってばいつにも増してやる気出してるっていうか。ねえ、エリ？」

「そうですね……」

加藤達がいつものやり取りを始めたのを横目で見つつ、レイラはエリアスールへと問いかける。

しかし、エリアスールは焚き火の火加減を見る事に集中しているのか、素っ気無い返事を返すだけだった。

「でも、ヒロは体力っていうか、うん。なんか凄いね？ 毎日結構

走ってたよねえ、ボクには出来そうにないよ」

「走りこみだけでそう言う評価を下すのは早合点では無くて？ それに、走り終わった後は馬の上で眠っていたんですのよ、まったく……仮にもわたくし達の護衛という事を分かっているのかしら」

そう、加藤はそれなりに長い距離を走っていた。

そして休憩時を境に、今度は愛馬くんとぞうに跨ったまま眠りこけるといって、なんとも言えない醜態を晒していた。

「確かに、護衛としては失格も良い所かもしれないな。だが、彼の役目は大きい……、そのおかげで私達はこうして会話を持って、お互いを知っていけるのだからな」

アーダが言う事は事実だった。

彼女達の会話のネタは、ほぼ常に加藤なのだ。別に彼が魅力的だからといった理由では断じて、ない。

そもそも彼女達は、それなり以上の理由を以ってこの場にいるのだ。

「確かに、それは否定できませんわね……」

それは当然不用意に話してはいけない事を胸の内に抱えている事に通じる。

つまり相手にも容易に話し掛けられないのだ、自分の事は最低限しか言えず、相手を探るような言葉は言えない。

そして来る時のレイラ同様、不安を大なり小なり感じてもいた、それを紛らわせる術を求めてもいた。

「そうだよね、ボクとしてもヒ口を見た時は疑問に感じたけども……」

…。うん、いってくれて本当に助かったよ」

そのために相手個人を、話せる相手を知りたい、だけどそれは出来ない。挨拶程度しか本来は出来なかったはずなのだ。

そこにいるのは本来、レイラなど同等の存在。そしてデイリー、ルクーツアと言った御付の武人だけのはずだったのだ。

「ん？ 何話してるの？ わたしも混ぜてよー」

しかし、そこに加藤がいた。さして今回の件については重要ではない、だが信頼はされているヒトがいたのだ。

格好の獲物だろう、最初は警戒しつつだったが、デイリー達も何も言わない。

女性達は、不安を薄めるであろう、気を逸らせるだろう会話のネタを逃しはしなかったのだ。

「いや、彼の事を少し……。いってくれて本当に助かった、と言うだけの話さ」

アードがそう言いつつ、加藤の方に視線を向けた事で、エリアスールを除いた女性陣が全てそちらを向いた。

鍛えたからなのか、なんとなくなのか、その時話題のヒトが振り向く。

「うお！？ 皆してこっち見てるからビビったよ……てか、なんかあった？ あつたならルクーツア達に報せて来ようか？」

的外れな事を言いつつ、若干心配そうな顔色の加藤。

加藤は決して魅力的な男でもなければ、何か特別な力を有しているわけでは無いかもしれない。

だが、その何も無いという事が時には誰かの、何かを守る事には必要な事なのかもしれない。

幸か不幸か、加藤はこうして特別何もせずに、彼女達に受け入れられていったのだ。

そして彼の存在のおかげで、彼女達は徐々にとは言え、本来手にする事の叶わない、友好を育んでいけているのだ。

「いいえ、何もありませんわ。というか、そのくらい察せませんか？ そんなだから貴方は一兵卒にも劣るのです」

そうエイラが先んじて言うと、女性陣は加藤に興味を失ったように目を逸らす。

その事に驚きながらも、加藤は律儀に返事を返すと、目を離していた隙に何事かしていたルクーツアを見つける。

「ええ……、いや、あーうん。何も無かったならいいんだ、ってルクータ！ 何俺の荷物に石入れてんだよっ！」

「はっはっは、とうとうバレてしまったか。いやなに、どうせ明日も走るだろうしな、重石を増やそうと思っただけ？」

加藤は、帰りの道では荷物を背負って走っていた。

そこヘルクーツアは徐々に重石を入れていっていたのだろう。

「うお！ 気がつかなかった、今までも入れてたのかよっ！」

そして加藤は翌日、重石が増えた荷物を背負って走ることになる。そしてやはり途中でバテて、愛馬くんとつの背に身を預けることとなるのだ。

加藤が目覚ます頃、そこには約2週間ぶりとなる『サックル』

の街が見えてきていた。

第8話 『 帰郷! 』

「ふう、やっと着いたなっ！ 懐かしの我が街につ！！」

先ほどまで寝こけていた加藤が、何故か仰々しくそう言った。

だが、その言葉通り、加藤の目の前にはサツクルの街の防壁が、名も無き街よりも高く、頑丈そうな壁が立ち塞がっている。不思議とヒトに対しては威圧感を与えない、安心感を与えるものだ。

「さて、手続きはデイリー殿が良いだろう、頼めるか？」

「ほっほ、そうじゃの。……おお、お前、ワシじゃワシ、ワシじゃよー！」

そして当然のように加藤の言葉は無視される。

ここ最近の流れだった、そしてその流れを変える事なく加藤は愛馬くんそつに愚痴を零し、愛馬はつまらなさそうに嘶いななく。

「さすがデイリー様、この街の功労者なだけありますわね。まさかあんな言葉で、門を開けてしまうだなんて……」

「……いえ、そのお恥ずかしい限りです。レイラもっ、何楽しそうに笑っているんですかっ！」

デイリーの言葉だけで門を開けたわけでは無いだろう。

しかし、普段のそれよりも迅速に事が運ばれたことは事実だった。門が開いたので、彼らは馬に跨ったまま、街に入っていく。

「よし、ここらで降りるぞ。どうどう、……ああ、良い子だ」

門を越えて少し行った所で、ルクーツアを始めにして、皆それぞれ馬から降りる。

馬に持って貰っていた、載せていた荷物を加藤達は自分で持ち、アーダ達は従者が持つ。

そして、馬を厩舎へと預けたところで、デイリーが全員目が届く位置で声を挙げる。

「ほっほ、なにはともあれ無事に着きましたの。……ようこそいらつしゃったつ！ 無法の街……我らがサックルへっ！ 領主ロレン様に代わり、このワシ……デイリーが責任をもって歓迎しましょうぞ！」

「ありがとうございます、わたくしとしても、この街を訪れられた事は……」

デイリーの歓迎の言葉にエイラが始めに、その後にと女性達が答えていつている。

その様子を見つつ、加藤はルクーツアに小声で話し掛けた。

「なあ、こういうのってさ？　せめて屋敷とかでやるもんじゃねーのか？　なんでこんなところで」

「ふっ、お前のせいであり、おかげとだけ言っておこうか」

そう問いかけられたルクーツアは、軽く笑って言う。

その言葉に加藤は疑問を抱いたようで、顔を顰めながら再度問う。

「いや、なんで俺のせいなんだよ？　てか俺なんかヤバイ事やつち

やっつたりするのかわ？」

「ああ……、場所が場所ならそれなりの罰が下っていたかもしれないぞ？ 良かったなカトー、お前は運が良いぞ」

「罰って……まじかよ。え、どうしよ、やべえって、教えてくれよ。謝らないといけないんじゃない？」

「もー、ルク？ あんまりイジメちゃだめだよ！ ヒロも、そんな事ないから無駄に悩まなくていいんだってばっ！」

真剣に悩み始めた加藤を見かねて、レイラが口を挟んできた。

その言葉を聞いた加藤は、安堵の表情を浮かべ、すぐにルクーツアに怒りの表情を向けた。

「はっはっは、いやなに、すまん。だがカトー、今言った事は、そう間違いと言うわけではない。彼女達はそうだったヒトなんだ、ここでこそ許される振る舞いだと言う事は覚えておけよ？」

その表情を向けられたルクーツアはおどけたように謝罪をした。しかし一転して真剣な表情で、再度それを告げる。

「んー、うん。そうだな、なんていうか浮かれすぎてたかもしれない。剣とか教えて貰えて、その……いやまあ、あのヒト達とも会えたし？」

何かを言おうとして、すぐに止めた。

そんな様子の加藤に反応したのはエリアスールとレイラだ。

「そうですか、私達との出会いでは浮かれる事はなかったと」

「悲しいなあ、わたしって結構美人だと思ってたんだけど……」

「自分で言うなよな、それとお前は美人ではない。そこだけは言わせて貰うぞ？」

「なんで！？ わたしは美人だってお父様も言ってるんだよ！ ……あつ、今の言葉はサツクルでの罪だよ！ 罪っ！ 今決めた！」

「はっ、そういう反応の時点で既に答えは出ているんだよ！ お父様なあ？ 馬鹿めっ！ 父親ってのは娘にやそういうもんなんだよっ！」

何処であろうとも、彼らは彼らのようだ。

そう、一通り騒いだところで、丁度デイリー達の話が終わったように彼らは纏まってこちらへ移動してきた。

「ほっほっほ、小僧？ あまりレイラお嬢様に失礼な事を言つと、罪を問う事になるかもしれんの？」

「やめるよ、爺さんが言つと本当っぽくて怖いんだっての！ つか、聞こえてたのかよ……」

「うんうん、聞こえてたよ？ 最初の方は何言ってるんだろーって感じだったけど、レイラと言い合いしてる辺りからは全部ばっちりきつちり聞こえてたよー」

デイリーは本当にやるうと思えば出来ると言わんばかりに、そう言う。

それに急に疲れた顔を向けて言う、その途中で聞こえていたという事に気付いたのだろう、それを尋ねる。

そして、いつの間にもここまで移動していたのかは分からないが、加藤の後ろから首を伸ばす形でニーナが問いに答えた。

「カトウ、女性に対する言葉がなっていないのではなくて？ そんなことですから……」

「エイラ、また長くなるのであれば今は止めてくれないか？ デイリー様の話を聞いていただろう、これから屋敷に行くんだからね」

エイラは、なにかと加藤に突っ掛かっている。彼のおかげで、同じ立場の女性と会話の機会を得られた。だが、そのせいで押さえていた不安は蓋から溢れてしまった。

安堵してしまったのだ。それは不安が消える事とは異なるのだ。

「そうでしたわね……。カトウ？ 何を笑っているんですの、言うてごらんなさい、何が面白いのかを！」

そして、彼女達と接してしまった事が災いする。

彼女は一応とは言え武官として此処にいるのだ、しかしデイリーが、ルクーツアがいる。アーダは頭が良いらしい、ニーナは特に無いが一番友好を育んでいる、エイラだけが浮いている。そう彼女は思ってしまった、差を付けられている、と。

新たな不安が生まれてしまっていた。そして、それを押さえられる筈の蓋はもう無い。

「いや、別にそんな顔してないだろ。つたく、なんだかなあ。……てか屋敷に行くのか、俺らも行くのかね？」

だからだろうか、彼女は新たに加わった女性陣の中で誰よりも加藤に固執している。ある意味で加藤と一番仲良くなっているとも言えるかもしれない。

「当たり前でしょう？ カトウ、貴方はわたくし達の護衛なんですよ？ 忘れてはいないかしら」

「……ああ、そうだった。ダメだな、どうしてもすぐ忘れちゃうわ。でもさ、もう街入ってるんだし、いらなくないか？」

「分からないのかしら、護衛というのは危ない場だからするのではないんですわよ？ どんな時でもそのヒトを守るのが護衛です、今ならば……」

そう言うと、エイラは自分やアーダといった女性達の荷物に視線を送った。

察したのだろう、加藤は頬を引きつらせる。

「いや、それって護衛の仕事じゃないだろ。俺でもそれくらいは分かるぞ？ ってか従者いただろがっ！ そもそも荷物なんて持ったら護衛できなくなるじゃないかっ」

「あらあら、本当の護衛はデイリー様とルクーツア様がいますよ？ そもそも、カトウ？ 貴方はわたくし達の誰よりも未だ弱いんですよ、お分かり？」

「はっはっは、お前の負けだなカトー。どうせだ、この程度持つてやればいいじゃないか。鍛錬と思ってやっておけ」

話が過熱し始めてきた時に、笑い声をあげながらルクーツアが問

に入る。そして加藤の肩に手を置いて、そう言った。

「はあ……なんだかね。まあ、いいけどさー、なんだかなー……」

「ん？ おお、小僧良い心掛けじゃの？ そうじゃ、先に屋敷へ行っておいてくれんか？ 屋敷の者とは既に顔見知りであろう？ 茶でも入れておくように伝えとくれ」

「……はあ。はいはいつと、んじゃまあ先行くわ」

そう言いながら、加藤は軽々と彼女達の荷物を持っていく。傍目に見ると、それなりの量なのだが鍛えたからだろう、表情に苦は見えなかった。

そして、加藤の背が徐々に遠ざかり、かなり遠くまで行ったあたりで、エイラに声を掛けた女性がいた。

「エイラ様、いくらなんでも言いすぎではないでしょうか？ カトーさんは貴方の世話係りではないんですよ、その点は分かっていますよね」

「まーまー、落ち着きなよー。この場合は、ボク達がどうのこうの言うのは筋違いだよ？ ヒロもヒロだ、ちゃんとガツツリ言い返せばいいのに……ねえ、エイラ？」

少々、怒気を孕んだ声色のエリアスールを宥めていたニーナはそう言う。

その言葉にエイラは一步、後退してしまった。

「ほう、エイラ……。可愛い所もあるのではないか？ カトー殿が好みだったのか？」

「いやアーダさん、違うと思うよ？ といっかなんですぐにそつちにいっっちゃうの？ アーダさんって乙女？」

何故かアーダはその様子で、エイラが加藤に好意を持っていると解釈したようだった。それにレイラは冷めた声で間違いを指摘する。

「さすがに好きとかじゃないでしょー。というか、それだったら面倒な女って奴じゃない？ あれ、エイラってそういうタイプだったり？」

最初の話の流れとは打って変り、何故か女性同士で下らない会話になっていった。

しかし、会話のネタが加藤に関わるという点だけは不動だった。

「皆さん揃って言いたい放題言ってくれますわね……。わたくしがカトウに好意？ そんなものはっ」

その事に気付いているのか、いないのかは分からない。

が、この話は否定しなければ気が済まないとばかりに常よりも大きな声を持って否定しようとした時。

「私はあるぞ？」

「ボクもあるね」

「私は当然ですが、あります」

「わたしもカーナーリ、あるよ?」

アーダを皮切りに、全ての女性がそれを肯定したのだ。

エイラは目を点にして、困惑気味に、少々照れながら、自分の答えの続きを話す。

「……………え? そ、そんなんですの? じゃ、じゃあ正直に言いますと、今までに無い感じの男性ですし、それなりに憎からず想ってはおりますが、そこまですは……………」

「え、好きって愛してるって方の意味で言ったの? あははー、ボクはそういう意味で言ったんじゃないのになー。さっすがエイラ、大人だねっ!」

「なんと、エイラ……………そこまで」

「きゃー、うっそ、ヒロにも春が来たのかな!?!」

「複雑な思いです……………今では家族のように感じているのですから……………。しかし、エイラさんも既に友人……………これは」

先ほどから、若干一名だけ毛色が異なっているが、共通しているのは驚きだった。とは言え、やはり一名以外は笑みを顔に貼り付けている。

いたずらが成功した時の子供のような種類のソレが、綺麗に描かれているのだ。

「あ、あなた達っ！ 言っておきますが、別段、だからといって、つまりそうという訳ではありませんのよ？ ……逆に聞きますが、あなた達はどうなんですか？」

いたずらに嵌められたと悟ったエイラは、顔を赤くしながら反論した。そして、恐らくは勢いからの一言、彼女は特に意識して放った言葉では無いそれが、他の女性陣には痛撃だったようだ。

全員が先ほどとは違う、本当に驚いた顔をし、そして悩んだ。

「そうくるの？ そうだなあ、んー……わたしは今の所無いねっ、だってヒロだもん」

「な、無いな……。ああ、私にそういうの感情は無い」

しかし刹那の間悩み、すぐに答えた女性がいた。レイラとアーダの2人だ。そしてアーダの言葉を聞いてしまった近くで色々と準備をしていた2人の大人は、なんとも言えない顔をしていた。

「うーん。ボクはどうだろう、これからかなー？」

「私はどうでしょう？ 好意はありますが、それがそうとは言えない気がしますね」

その後に応えた2人は、曖昧な、しかし現状としては否定と取れる言葉を返した。そして、全ての答えを聞いた大人は、先ほどの顔とは少々違い、肩を落としていた。

「そ、そうでしょう？ わたくしも、ニーナさんやエリさんと似た感じですよ？」

若干、元気が無くなった2人とは対照的に、その答えを聞いた工イラは安心した顔で言う。

「まあ、そこまで必死になることでもないと思うけど。それよりも、ボクは早く屋敷に行った方がいいと思うなー」

その言葉に、全員が、大人も含めたヒトらは顔を上げて思い出したように声を上げた。

「そ、そうだったな。私とした事が、忘れてしまっていた……」

「別に急がなくてもいいと思うけど、ヒロもまだ着いてるか分からないしさ」

二ーナの言葉に、反応をいち早く返すのはやはりこの2人。しかし返事の色は大きく異なっていた。

だが、大人が片方を肯定するものを発した事で、彼女達の行動は決定した。

「いや、そろそろ行くのか。デイリー殿、オレは後ろに着く、貴方は前を。そうだな、案内を兼ねながら進むのはどうだろうか？」

「ほっほっほ、そうじゃの。このままでは小僧が勘違いしそうじゃしろう……」

ルクーツアは肯定の意を大きな声で、後半を小さな声で話す。そしてデイリーも同じだった。

そう、彼女達は今回、色恋のような話をした、が。話のネタが無いからだ。

加藤の弱さという点はエリアスールが不機嫌になってしまったと

いう事で、暫くは使えなくなってしまった、なんでも良かったのだ、話題ならば。

そのため大人達は、レイラとエアースールがこの街についての話題を提供しやすい状況を作ろうとしての事だろう。

「ほつほ、それじゃ皆様、よろしいかの？ 屋敷へと向うが、簡単ながら案内を、説明をして行くとしましょう」

デイリー達の小声での会議は終わったのだろう、大きな声を出し、それからゆつくりと歩き出す。

女性達は、案内、説明という単語に反応して、嬉しそうな顔を見せた。

「へえ、いや今のままで気が付かなかったけど……。この街って綺麗なんだね？」

「ふふつ、そう思いますか？」

ニーナは、初めて加藤に関連していない事を話題にして言葉を紡ぐ。

反応したのはエアースールだ、いつもは反応が早いレイラ。彼女は言い出そうとして一瞬躊躇ってしまったのだ、迷ったのだろう。

「ああ、なんでなんだい？ ここまで道が綺麗なものには理由があるのだろうか？」

「うん！ あるんだよ、それはね……。あー、なんだっけ、エリ？」

レイラが迷いを吹っ切ったように、それに答えようとした。

が、言葉が続かない、別に教えたくないわけではない、ただ忘れ

てしまっているだけだろう。

「まったく、貴女は……。この街は最前線、国から最も遠い街なんです。当然ですが、この街だけで自立して生活を営める力は有しています。……が、それでもヒトは色々欲しいものというのが出てきてしまつんですよ」

そう、ここでは日常生活を送れるだけのものは作れているのだ。だが足りないものが、それを作る、栽培という事は出来ない類のものも当然ながらあるのだ。

「そうですね、わたくしの観点で言えば、モンスター……。大抵は小型相手ですので、ある程度の武器さえあれば十分、ですがより良い武器を欲してしまうのは当然」

「エイラは分かりやすいような、にくいような例えをするねえ。ボクだったら、ご飯もいいけど、お菓子も食べたいって言うよ」

「あー、わたしもソレすつごい分かる！」

エリアスールの言葉に、彼女達は反応を返す。

気のせいか、加藤を話題としていた時とは声の色が違う。

「んっ、それで？ その事が街が綺麗な事と関係が？」

「ええ、足りないものは危険を冒して商人が届けてくれるものなのです。疲れ果て、このサツクルに来たという時に汚かったら？ 安堵できないかもしれない、来て良かったなどと思えない、商売をしようなど思ってくれなくなるかもしれない。ですので、このサツクルでは街の清掃を冒険者の仕事として、防壁修復と同じく重要な

事柄の1つに割り振っているんです」

そう、以前に加藤が街をそれなりに知っている、しかし知らないと言った。

そして知っているはずの街の観光を喜び、楽しめた理由はそこにある。

清掃をするためだけに加藤とルクーツアも街を練り歩いたのだ。

「へー、確かに綺麗だと良いよねー。少なくとも、悪い事とは思えないよ」

「そうですね、あつ。あれはなんですか？ 見たことがあまり無いように思えますが」

そんな、他愛も無い会話を楽しみながら、彼女達は屋敷へと向った。

しかしデイリーは自分の仕事が無くなってしまった事に若干肩を落としていた。デイリーの案内など、彼女達は聞いていなかったのだ。

「あー、んん！ 皆様、そろそろ中央に着きますぞ？ ここから屋敷まではずぐじゃ、この街に滞在している間何かあればまずはこの広場を目指すのがよろしかろう。……うむ、それでは行くかの」

デイリーは、それだけは伝えたかったのだろう。

会話を楽しんでいた彼女達の気を引くために大きな声を出した。

そして伝えた事が確かに伝わった事を見て取って歩き出し、しばらくして屋敷へ入っていく。

「わー、本当に真ん中にあるんだね。ボクは道に迷いやすい性質だ

から、うん。これは分かりやすいや」

ニーナはデイリーの案内を無視しているような現状に気が付いたのだろう。

若干わざとらしささえ感じさせる声で明瞭に了解の返事を返しながら、デイリーの後を追って屋敷の敷地へ入る。

「ほう、これが領主様の館か……。街の真中にあるとはね、面白い……。国の場合は一番奥地、安全な場所だが」

「ここは山壁とかないしねー、ある意味ここが一番安全なんじゃない？ そもそも、この前の街みたいに逃げたらスグに他の街があるわけじゃないしねー」

「確かに、気のせいかな冒険者の方々もすれ違った方を見かけただけでも手だれだと思える人ばかりですし」

「そうですね、ここサツクルへ滞在している冒険者の方々はかなり腕を持つ方ばかりですよ。さすがにルクーツア様やデイリー様ほどはそういませんが……」

それ以外の女性達もそう呟きながら屋敷の敷地へと歩いていく。そして、屋敷へと辿りつく寸前、先ほど近くから消えていた1つの声が届いてきた。

「ん？ 遅かったじゃないか。デイリーも、なんで疲れた顔してんだ？ 分かるか？ ルクーツア？」

そう、加藤が屋敷の従者達と共に、屋敷の庭、敷地の中で屋敷のほど近くにテールブルやイスなどを用意、お茶会と言えるだけのモノを準備していた。

「ほっほ、なに大した事ではない。むしろ、喜ばしい事と言えるじやろつて、ほっほっほ」

「はっは、そうだな。……おお、軽いものだけかと思えば、パン包み焼きがあるじゃないか」

「わー、ボクも小腹が空いてきてたんだよねっ！ 何を食べようかなー」

「まったく、ニーナさんはだらしないですね。まずは領主様に挨拶をするのが筋でしょう?」

「そうだな、それが当然だろう。ニーナ、貴女も少しは自覚した方がいいんじゃないかい?」

ニーナはお茶会のお菓子や料理に目が輝かんばかりに喜んでいて、それ以外の2人に窘められて、少々落ち込んでいる。

「まあーお父様は、あんまりそういうの気にしないとは思っけどねー」

「レイラ、貴女は……まったくもう。ですが、そう構えなくとも大丈夫ですよ、領主様は度を過ぎなければ寛容なお方ですから」

レイラとエリアスールは、ニーナを慰める意味でも、緊張をまた強めだした彼女達のためにも、そう語った。

それに語気を強めていた女性達の顔から緊張が薄れていく、その言葉を信用できる程度には彼女達は仲を深めていたという事だろう。

「ほっほ、まあとにかく。ここで暫く過ごす事になるんじゃない、よろしくの？」

デイリーは、彼女達が落ち着いたのを見て取ってそう言った。どうやら、まずはお茶会を楽しませる事にしようだ。

領主が迎えた客人という形だと言うのに、会う前にこういった事は、本来間違いなのもかもしれない。だが、彼女達は、レイラと共に進むだろう若者なのだ、父親としても領主としても、そのくらいは許せるという事だろう。

そしてデイリーはそれを言われずとも分かる程度には通じていた。

とにかくこうして、新たな仲間を得て、この街での生活がまた始まる。加藤が青年という枠を抜け出さざるを得ない時期が、徐々に迫ってきていた。

だが、それもまだ先の事、今はただ新たな友との時間を楽しく過ごす事を喜んでいた。

第9話 『 面会! 』

「美味しかったね！ やっぱりお菓子とお茶が最高だよっ」

「確かに美味しかったですけど、これから領主様と会うんですよ？ もう少し落ち着いてはいかがですか？」

お茶会を終えた彼女達は、先ほどの緊張を消して、明るい笑顔を見せつつ歩く。

そう、ようやく領主との面会へと向っていた。そんな様子の彼女達を見つつ、加藤はデイリーへと小声で尋ねた。

「なあ、実際のところ俺も会うの初めてだけどさ？ こんなんでいいのかね、さっきのエイラじゃないけどさ」

「ほっほ、無駄に緊張させて建前だけを話し合うより、こつした状態での会話をする方が余程実りがあるとは思わんか？」

「今はそうかもしれないけど、会えばどうせ緊張すると思うけどね？ なにせ俺はそうなると自信を持って言えるからな」

「お前はどうせ緊張などしなくせに良く言う。それにな……良いんだ、これでな？ 実際の所は彼女達が持ってきている話など確認の意味が強い。本当の目的は、次代を担うだろうヒト達、彼女達の友好が目的だろうからな。……なあ、デイリー殿？」

「ほっほっほ、……うむ。その通りよ、以前言っておらんんだか？ ワシは火の国から来るといふ事を言ったな？ それはワシが直接

行って聞いて来た事よ。その時にある程度、話は纏められておるのじゃよ」

「なら、そう言えはいいいじゃねーか。無駄に重たい責任負わせたよ
うなもんだろ、なんだかね？」

今回、彼女達は街を造るための話し合いをするために訪れている、
という立場なのだ。

しかし既に終わっているという、これは何のためなのかと彼は問
う。

「その重責は、そう時が経たない間に彼女達が背負わずにはいられ
ないモノだ。どんな形であれ、それを責任を負わなくても良い今、
少しでも背負わせてやる。これもまた、親の愛というものだ。カト
ー、お前が常日頃言っている目標……、そういう事を言っているお
前なら分かるんじゃないのか？」

実際、彼女達こどもが何か失言しようとおや領主は何も問うまい。逆に良
い発言をしたのであれば、大いに褒めて採用する可能性もあるだろ
う。

規模が大きすぎる、おつかいというのが今回の実情だったようだ。

「親の愛、ねえ？　そこまでは今の俺には分からないけど、うん。
まあ、親にはそういう強さもあるって事で今は納得しておくよ」

「親の強さ、か。　そうとも言えるのかもしれんな？　そして、そ
の強さはこつした事の積み重ねで子へと受け継がれていくものだ。
彼女達はすぐにでも気が付くだろう、その時にどうするか、そこが
分かれ目だな」

「ほっほっほ、レイラお嬢様を始めとした彼女達は特殊だからのお。ちと普通とは異なるが、これもまた1つの愛には違いないの」

大人はそう言う。

しかし加藤は青年だった、更に言葉を重ねる。

「いや、そうだとしても、だ。今回のつて新しい街を造るためつてのなんだろ？ デイリーだって最初はあんなに慎重になってたじゃないか。それをこんなので済ましていいのかって聞いてるんだけど」

「ほっほっほ、お主はワシの言葉を聞いておらんだか。既に事は終わつておると言ったであろう？ そしてその事を進める、若い力の象徴が彼女達というわけなんじゃよ。どう運ぶのかは既に決まった、ならば後は進める彼女達のために全てを注ぐ。どうじゃ、なにかおかしな点があるかの？」

加藤の言葉はその通り、正論だった。

だが、デイリーの返したのものにも一理があるように聞こえてくるから不思議だ。

「いや、だからソコだよ。なんで新しい街を造るなんて大きな事を、言い方は悪いけどレイラ達みたいなのに任せるんだ？ 領主様とかは無理でも、もっといるだろうよ、そういうのに適した人つてのがさ」

その言葉こそが、加藤の言いたい事だったのだろう。どことなしに、言いたい事を言えた満足感のようなものを顔に浮かべていた。しかし、デイリーはそれにも迷わず返す。

「ふむ……、ここなら良いじゃろう。それはこことお主のところだ」

の違い、かもしれないの？　ここでは子を独り立ち、一人前とする、
そう称するためには大きな事を成さねばならぬのよ」

「ああ、勘違いするなよ。レイラ嬢達のようなヒトの場合は、だか
らな？」

デイリーは、レイラ達を含めた女性達、そして屋敷の者が周りに
居なく、気配も無い事を確認してから、匂わせる形で世界間の違い
を言った。

そしてルクーツアはそれに蛇足を加える。

「いやさ、別に違いってほどじゃないけど。それにしたって、なあ
？」

「ふつ、今はその疑問をじっくりと考える事だな。だが、今、早い
内にそうしなければならぬ理由を、お前は既に知っているはずだ
ぞ？」

そう言つとルクーツアは、既に通路の角を曲がったのか、姿が見
えない彼女達を追って歩いていく。

デイリーはそのままその場において、加藤に軽く肩を叩くというも
のをする。

「ほっほ、いやはや……。お主は本当に中途半端じゃのう？　頭が
良いかと思えば子供じゃし、子供かと思えばふとした点を鋭く問う。
ほほ、これは武だけではなく、色々と育てるのが楽しみになるの？
ほっほっほ……。ほれ、何をしておる、ワシらも行くぞ？」

「なんだかなあ……。はあ。はいはい、置いて行かないで下さいよ
ー？」

彼らも領主が待つ、屋敷の広間へと向かい、足を進めた。

そしてその広間の扉の前まで行くと、先に進んでいた女性達が待っていた。

「もう、遅いよデイリー？　一応デイリーが居ないと話が進まないんだからね？」

レイラは少々緊張しているようだった。

他の女性達も若干顔をこわばらせている、加藤が言っていた事は当たったようだ。

しかし、加藤は緊張していなかった、ルクーツアの言もまた然りのようだ。

「ほっほ、そうじゃったの。これはすまんことをした、それでは…
…入るとしようかの？」

デイリーは周りを、いや女性達を見渡した後、ゆっくりと扉を開いていった。

「いや、何か言わないのかよ。普通、入ります！　とか言うもんじやないのか？」

「お前というやつは、本当にカトーだな？」

そんな事を言いつつ、メインである女性達を置いて加藤達がデイリーに続いて扉をくぐる。

「あっ、待ってよ！」

「なんとも言えないな、色々想定していたが、無駄になったのか？」

「カトウは、本当に全てダメですわね。これは後でしっかりと叱らないといけませんわ」

「どっちもどっちだと思うのはボクだけかな？ いや、いいんだけどね」

「ふふっ、ですから構えずともいいと言っていたでしょう？ 今の皆さんが一番ですよ」

それに慌ててレイラを先頭に彼女達も扉をくぐっていく。従者達は最後に、エリアスールと共に入っていった。

「うん、これで全員かな？ デイリーご苦労だったね」

全員が領主のいる広間へと入った時、若々しい、しかし何処か重たい響きを持った声がする。

広間の奥に座っていた人物、この街一帯の領主であるロレン・サツクルの声だった。

「ほほ、なに大した事ではなかったですわ。のう、ルクーツアよ？」

「ほう、貴方がルクーツア・シイ殿か……。デイリーを始め、娘達からも話は伺っていたよ、今回は助かった。仕事を頼んだ領主としても、娘を託させてもらった親としても礼を言わせてもらいたい。今回は、ありがとう」

デイリーがまずはルクーツアに話を振る。

それに領主が反応した、やはり親なのだろう。道中が気がかりだったようで、彼の助けが受けられるというのは嬉しい事だったよ
うだ。

感謝の言葉には感情が籠りに籠っている。

「はっ、デイリー殿の言う通り、大した事ではありませんまい。ですが、その言葉はありがたく頂戴させて頂きます」

ルクーツアは慣れないのか、少々ぎこちなさを感じさせる、しかし堂々とした言葉を返した。

「うむ、……それでデイリー？ こっちの男が、例の者か？ とうかそうなのだろう？」

領主、ロレンは加藤を見て、しきりにそう言う。

「ほっほ、ええその通り。この小僧がヒロ・カトーじゃの」

「やはり……ヒロ・カトーと言ったな？ 君は、レイラやエリアス
ールと仲が良いようだな、そのの所を後で詳しく聞かせて貰う、否
とは言わせん。………いいな？」

ルクーツアの時とは違った感情を籠めに籠めた言葉が加藤へと送
られた。

加藤はその事に驚きながらも、やはりあっさりと、緊張を感じさ
せない声で返事をした。

「え？ あ、はい。わかりました」

その態度の意味をどう捉えたのか、領主は若干悔しさを滲ませな

がら言っ。

「……………いい返事だ。　楽しみでならないよ、まったくね」

「ほっほっほ……………、その小僧は置いておくとしましょうぞ？」

「おっと、済まないね。　肝心の挨拶をしていなかった……………いやいや私とした事が。さて、私が此処、サツクルが領主であるロレン・サツクルだ。今回は、長旅で疲れただろう？　ゆっくりとしていて欲しい」

「お父様、それじゃ話が終わっちゃうよ？　もうちょっと言い方つてのがあると思うんだけど……………」

レイラは最初の男達に対する父親の態度を見て、緊張を保てなくなったのだろう。

いつものレイラがそこにいた。

「はっはっは、言うようになったじゃないか、レイラ……………。父は嬉しいやら悲しいやら、いやだが、その通りだったな。そちらの美しいお嬢さん方の紹介をしてくれないか、娘よ」

その言葉を受けたレイラは嬉しそうに、彼女達の緊張を無視して、場を無視して友人を紹介するかの如く、楽しく言葉を放つ。

「えっと、このヒトは竜の国から来たアーダ・バツビさん！」

「お初にお目に掛かります。　ご紹介に預かりましたアーダにごぞ……………」

「ああ、そんなものは必要ない。もつと楽にしたまえ、これは命令でもなんでもなく、お願いだよ」

それでも緊張した面持ちで語ったアーダにロレンはそう言った。その言葉に誰よりも早く反応したのはアーダではなく、加藤だった。

「いや、領主がそう言うって事はアーダさんからしたら命令と同じじゃね？ 気楽にしてくれとか偉いヒトに言われると余計に緊張するってもんだろ？」

加藤としては隣に立つルクーツアに小声で言ったつもりだったのだろう。

だが、この広間は静かだった、その小さなはずの音は間違いなく全ての者の耳に届いた。

「……………」

領主は、ルクーツアが何処かでした事があるような顔をしていた。しかし、気にせず言葉が続ける。

「んん、まあともかく気楽に言ってくれたまえ。ここは領主の屋敷ではあるが、レイラの……君の友人の家でもあるのだからね」

「初めて来た友達の家で、家族と会えばさ……………」

「もういい、お前は黙っている」

やはり加藤は、その言葉に反応を返す。

今回は最後まで言わせないとばかりに、ルクーツアが止めた。

しかし遅かったようだ、領主は肩を落としていたからだ。

「もう、いい。私も無理に領主ぶろうとしたのがいけなかったのかもしれないな。そう思わないか、デイリー」

「ほっほっほ、ワシにはなんとも言えないのう。しかし、小僧は本当に色々と駄目にするの、今は良いが以後気を付けた方が良いじゃろって」

「……あれ？ 聞こえてたのか？ やつべ、失礼な事とかだったりしたかな、どう思うルクーツァ」

「お前は、そういう事がこの場では褒められる事では無いと分かっているがらどうして……。まあ、今回は上手い事いつているようだしな、責は問われまい」

そう、いつのまにか加藤と領主が会話を行っているに等しい状況になっていた。

領主の心遣いに加藤が無用の長物だと言い放ち、ならばと変えてみてもやはり却下された。

その会話のようなモノは、領主がエリアスールが言う通りの寛容な領主であり、心優しいレイラの父親という事を彼女達が知るには格好のものだったのだ。

その答えとして、扉をくぐってから再度浮き上がっていた緊張の表情は、やはりというか、消えていた。

「それでは、遅れましたが、自己紹介を……。私はアーダ・バツビです、よろしく願います」

言われた通り、簡素に、しかし礼節を失わない程度に挨拶を行う

アーダ。

「あっ、えっと次はね。エイラ・ファルゲートさん、見たら分かると思うけど有翼人だよ！」

「よろしくお願いしますわ、領主様。エイラ・ファルゲートと申します、これから此処で暫くお世話になります」

同じく、丁寧な言葉だが簡単に済ませるエイラ。

「それで最後はニーナちゃん！」

「ちよつと！ ボクだけ短いよっ！？ あ……、ニーナ・エメットって言います、獣人族です、えつと、あの。あ、父は……」

いつもの陽気さが滅入っているのはニーナだ。

そしてその原因となっているものを領主が言った、そして自分に對してはするなと言ったものをしつつ言葉を紡ぐ。

「ええ、分かっております。姫様、此度のご来訪、私としても大変嬉しく思ってます……」

「止めてくださいよっ！ ボクは庶子ですからね？ そういった扱いは必要ありません！ 本当にいららないんですっ」

その話し方をニーナは嫌がる。

態度だけではない、言葉にも感情が籠められていた。

「……………姫様？ なんだなんだ？ お姫様なの、ニーナが？ はっ、笑える冗談だなっ！ ニーナはニーナだろ？ 生意気なラル

にそっくりな、な。……そう思わないか、ルクーツア？」

その様子を見た加藤は、今度は聞こえる声量で笑い出した。どこも無く、わざとらしさを感じる色のあるものだった。

「……ふっ。まったくお前というヤツは、だからカトーだということだ」

「笑ってくれた方が嬉しいけど、ヒロに言われると無性に腹が立つね。まあ、さつきも言ったけど、庶子だからさ、気にしないでよ」

その笑い声、嘲笑とも取れるソレをニーナはしかし喜んだ。

加藤の笑いの意味を受け取ったのだろう、領主もまたそれに倣う。

「………そうですね。いや、そうだな。済まないね、私とした事がいやはや………ともかくニーナ、ちゃん。ようこそサツクルへ、皆も楽しんで、良い日々を過ごしてくれたまえ」

「………ほっほ、まあ面通しはこの辺りでよかるうよ。さて、女性方には部屋に案内せんとな、長旅で疲れも溜まっておるう。これ、ご案内してさしあげんかっ」

そうデイリーは早口に屋敷の者達に言う。

それに従い、彼女達は従者を連れて、領主へと頭を下げつつ、広間を出て行く。

残るのはレイラ、エリアスールと加藤達、そして領主のみになる。

「ニーナ様は王族に連なるお方でしたか………家名が違ったので分かりませんでした」

エリアスールが最初に口を開き、驚きを語る。

「ほっほっほ、なに、彼女が言うように庶子、直接の王位継続権は有しておらんよ。今の彼女は母親が再婚した男と営んでいる、小さな宿屋の娘に過ぎぬ」

「だけど、王族に連なってるから今回ここに来たって事でしょ？」

「その通りだ。　ブリアロンで次代を担える者は少ない。各分野で、この件で送れるものが居なかったんだ、故に彼女が注目された」

レイラの問いに領主、ロレンが理由も混ぜながら簡潔に答える。

そして今まで感じていた疑問が解決したのを喜ぶかのように、若干の喜色を滲ませてルクーツァは頷いた。

「ほう、体の良い人材と言う事だったか。なるほど、確かに獣人らしくそれなりに鍛えていたようだったが、それだけ。正直に言えば、そこらに居る少女となんら変わらんとは感じていたが、なるほどな」

「ほっほ、うむ。獣人族は一夫多妻を許される国じゃからの、こういった事もあるのじゃが。王族に限ってはソレが許されておらんのだ。　まったく……今代の王には困ったものじゃの」

この場にいるヒトラが、ニーナの事を語っている。

しかし1人だけ、王族などという普通な特別よりも、本当の特別と言える存在が。

だが、本当は決して特別ではない人が怒気を潜ませた声を静かに張り上げる。

「まあ、そんな昔話はどうでもいいさ。ニーナが嫌だって言うんだ、

それでいいじゃないか。ああ、そうそう、領主様……俺は異世界の人間、分かりにくいかもしれないけど、この世界の人間じゃない。まさに昔話に出てくるヒトと同じ感じだな？」

そして、勢いませに、最大級の秘密をあつさり、簡単に晒してしまったのだ。

加藤の言葉にロレンは驚愕する、俄かには信じられる事では無いからだ。

その事を信頼する爺デイリーに聞こうとしたとき、目の前で金属が煌いた。

「……なに？ デイリー、それは一体どういつ！？」

「……収めんかつ、まったく行き成りにも程があるぞ？」

ルクーツアの剣を、デイリーも腰に挿していた剣で遮っている。

「別に落とすつもりは無かったさ、信じられないでは話が進まない。カトーが久々に頑張っているんだ、これくらいの手伝いはな？」

そうは言うものの、あの剣は本物だった。真剣だの、切れ味が良いのではない。

デイリーが間に入らなければ、間違いなく領主は死んでいた、そう思える剣だったのだ。

「なるほど、どうやら本当のようだね。しかし、どうして私にそれを教えた？ 正直言って、なかなか難しいんだがね？」

そして領主はルクーツアの言葉の意味を知った。

そして、そういうヒトとして、加藤を見直し、言葉を掛ける。

「別に、自分にとってはどうでも良い事を、大層に扱われるってのは良いもんじゃないって事だよ。この前、デイリー達に教えた時は色々としリアスになってね、いや大変だったよ。あーいうのは止めにしたい、気分が悪くなるんでね」

加藤との対話、対等な話が始まった事を見たルクーツアは剣を引く。

デイリーも困った顔をしつつ鞘へと収める。

加藤の言葉に領主は、領主ではなく、親の顔で答えだす。

「特別と言えるモノを持つものだからこそ、かね？ はっはっは、安心したまえ……君には劣るものの私とて領主だ。その気持ちは少なからず分かっているよ」

「あつそ、だったら何でさつきはあんな言い方したんだ……ですか。ニーナが嫌がるって事は分かっていたんですよね？」

徐々にだが、頭に上っていた血が下がったのだろう。

言葉遣いに気が付き、直すが今更なのかもしれない。

「ほっほ、随分熱くなっていたようじゃのう。じゃがソレが難しいところよ……、ニーナの従者がいたから、そうせざるを得なかった、そついう事じゃ」

そして、そうした理由を、領主ではなくデイリーが答える。

その答えにはルクーツアが反応を示した。

「なるほどな、確かにそうだ。ニーナ嬢は建前上、正式な王族として送られてきたわけか。それは確かに従者がいる手前だ。無礼な態度は取れんな、本人の許しが無い限り、だが」

「どういう事だよ？ デイリー、今回の事は遊びみたいなものだって言ってるだろう。その従者にどうして注意しなくちゃいけない？」

「他の国のものはどうかは知らん。が、土は別よ。迎えに行く途中に言ったであろう、色々とある……とな？ 一番の対象があの従者、その後ろに居る者じゃよ」

「だが、今回の事でそれは消える事になるだろう。彼女自らソレを勢いでは言え、私の前はおるか、他の女性達の前で拒否したのだからな。……いやはや、嬉しい誤算という奴だね」

「なるほど、土の王が弱ってきたというのは事実だったか。それで彼女を推して来た人物とは、やはり……」

ルクーツアは何事かを悟ったようだった。

そして言葉を続けようとしたところ、デイリーが遮る形でそれを継いだ。

「うむ、じゃがソレはもう良いのじゃ。今回の事はお遊びと言ったの？ ニーナに関する事もまた、お遊びに過ぎぬという事じゃ」

「良く分からないんだけど……」

「お前が気にする事では無いという事。まあ、種族間での戦争というモノは無い、無いが同族での小さな争い程度はあるという事だ」

ルクーツアはそう言う。しかし説明としては足りないものだ。

加藤は釈然としないながらも、これ以上は話してくれない事を、そして話してくれたとしても理解が追いつかない事を感じ取り、結

論を聞く。

「余計に分からなくなるんだけど……。まあ、とにかくニーナはニーナって扱いでいいんだろ？」

「ああ、その通りだよ、カトー君。娘達から、ふとした時に驚かされるような……。と聞いていたが、本当だったね」

「ほっほっほ、いやはや全くもって。ルクーツアも、ああいったやり方は今後は控えてもらいたいものじゃの。肝が冷えたぞ？」

「良く言う。完璧に間に合っていたではないか。それに、言ったが首を落とすつもりなど毛頭無かったさ、精々耳が片方消える程度、可愛いものだろう？」

先ほどの剣劇の事を、笑い事として話す2人の達人。
そこに原因を作った本人が割り込む。

「ルクーツア、それ怖いって。いやまあ、前にああなったのに簡単に言った俺も俺だけだよ？ ……でも、せめて領主には、レイラの父親、デイリーの仕えてるヒト程度には言っておかないと、皆がつらいだろ？」

「どうせ今気付いた事じゃろう？ あの時の小僧がそこまで考えていたとは思えないのう？」

加藤の理由付けを、デイリーは見抜く。

凶星を突かれた加藤は、勢いでそれを凌ごうとしているようだ。

「……いいじゃん。結果的にはそんな感じになったんだし！ 結果

が全てだっ！ 過程も大事だけど、やっぱり結果！」

「ははっ、いやはや……ん？ レイラにエリ、何をポーっとしているんだい？」

彼らの話が一段落した頃、この場にいるというのに、先ほどから何も声を発していない、まさしく壁の花となっている2人にロレンは声を掛けた。

「ふえ、あっ、いや何か色々、うん」

「……すいません、話に入れなかったものですから」

その声に、彼女達は驚いたように、時が動き出すように反応を返した。

「確かにのう、いきなりじゃったから、それも仕方なしよ。これもそれも全て、小僧の責じゃからの、そうなった原因は奴じゃぞ？」

「待てや、王族がどうのなんてのを今の今にバラしたデイリーが悪いんじゃないの？ もっと早めに言っておけば、こっちはならな……」

「ほっほ、分かったかの？ それが出来るのは先程、あの場しか無かったという事がの？」

デイリーは再度、その事を教える。

そして違った観点から、更にルクーツアが補足した。

「だが、カトーの働きが無ければそうは為らなかった。お前が居た事で、ニーナ嬢はオレ達を信頼するための術を見つけた。そしてそ

れがあつたからこそ、あの場でああいった発言が出来たのだからな
?。」

しかし、また壁の花となりつつあつた女性を片目に見つつ、領主
ロレンは口を挟む。

そして本題を、最も言いたかつた事を加藤へと問うのだ。

「その通りだが、もうこの話題は仕舞いとしようでは無いか。それ
よりも私としては、カトー君……君に娘達の事で聞きたい事が山程
ある、分かるだろう?。」

そして、その問いに加藤は言葉遣いはある程度丁寧さを感じさせ
るものだが、その実、中身はまったく逆のものだった。

「いや、何言いだすのかと思えば、ただの親馬鹿ですか? なんだ
かなあ、口の聞き方がなっていないとは自覚してましたけど、なん
だか結果的には、この話し方で間違いじゃないヒトばかりな気が
するんですけど。」

そして、その籠められた意味を理解しつつも気にする素振りを見
せずに、更に言葉を追加するロレン。

「君は実にこどもだな? いいか、親、それも父親というもの娘
がどれだけ可愛いものか……。君もいつか分かる日が来るさ……は
っ!? だが、レイラは渡さないぞっ!。」

「誰がレイラを嫁にくれって言ったよ。なんで会うヒトはこういつ
たのばっかりなんだ?。」

加藤の言葉に、ほんの僅かだがレイラが反応していた。

その様子を見たエリアスールもまた肩を静かに揺らす。

「しらばっくれても私には分かっている。ああ、分かっていると、レイラは魅力的すぎる女性だろう？　そうだろう、何せ私と妻の愛娘、君が惚れてしまうのも無理ない事。いや、実に難しい事だよ、この問題に比べれば、君の秘密な塵に等しい問題と言えるほどのなっ」

「何このヒト……。もしかしてさっきまでの俺ってこういう風に見えるたのか？」

「聞いているかね？　ああ、君はレイラ達が話題として私に語った憎き同世代の男の第一号だからな。存分に語り合いたいんだ、そうとも、この話に終わりは無い。私か君、どちらかが死に絶えるまでっ！！」

こうして、サックルが領主の屋敷での一日は終わった。

アーダ達はあの会談と言えぬ会話の後は、与えられた自室内で過ごしていた。

レイラとエリアスールも似たようなものだったのだろう、寧ろ父親から逃れるために急いで自室に籠った感があった。

そのためだろうか、加藤はその後長々と、娘自慢へと話を変更したロレンに付き合わされたようで、疲れ果てていた。

「いやはや、何事も終わり良ければなんとやらとは、カトーも良い事を教えてくれたものじゃ」

「まっただくだな……。それと、あの娘達の件については大丈夫なんだな？」

大人2人は、静かにグラスを傾けながら、星を眺めて語る。

「大丈夫じゃよ、通路で言ったであろう？ この件は全て、最初から決まっておった、とな？」

「はっは、なるほどな……。従者の後ろにいる者。それはロレン殿を始めたとした……」

デイリーの言葉で全てを悟ったのだろう。ルクールアの声は明るい。

「ほっほっほ、さて、どうじゃろうかの」

「意地の悪い事だな、だが土の王が弱っているとの事はどうなんだ？ まさかソレも今回のための？」

その事を話だすと、止まらなくなったのだろう。

疑問を次々と問いただす、だがその声は答えはもう分かっているような色がある。

「いいや、ソレは事実よ。そして、それ故に今回の茶番が出来たとも言える……。自ら犯した過ち、そしてそのせいで涙してしまった、

愛を与えられなんだ我が娘。死期が近づいたからこそ、せめてという事じゃろつて」

「それを嫌がっているようだったがな？」

求めていた答えだったのか、軽い笑みを浮かべつつ相槌を打ちながら先を促す。

「ほつほ、そうじゃ、そこじゃよ。あの娘は、土の国における限りはその扱いのまま……国を出ようにも、どうしてもその肩書きは消えぬ。故に、今回の事で、国を抜け出させ、今回の件で実績を与えて、王族云々ではなく、二ーナ嬢として立たせてやる……。これもまたどんな形であれども親の愛……少々遅すぎたかもしれぬが、やらぬよりはマシというものじゃ」

「ふつ、どんな形で、あれか。確かに、終わり良ければ……うむ、カトーに聞いたものだが、良い言葉だな。カトーの世界には良い事が溢れていたようだな、デイリー殿」

その話題は仕舞いという事だろう。

ゆっくりと、目を上に、夜空へと戻してそう呟く。

「そうじゃの……。小僧のような者でも、己は何者でもなく、己だという事を分かっておった。そして、その為に必要な事を模索しようとして出来る、確かな勇氣。その在り方もまた、きつと代々、親が、大人がその背で語ってきた世界、か。……まこと、素晴らしき世界だったのだろうよ」

その返事を、言葉を言った時。

「はっはっは、なればこそ……。オレ達もまた、それに恥じないよ
うに一層の努力をせねばなるまいよ」

笑い声を、笑みを浮かべて彼らは今を楽しむ。

「ほっほっほ、まったく！ まったくもってその通り！ そのため
にも、今宵は飲もうぞ、こつ旨い酒はそう味わえるものではない」

「ああ、そうだな……」

大人達は、静かに、美味を味わって語り合う。

そうして、ゆっくりと、しかしあっさりとは夜は明けるものなのだ。
これから、いつもと同じように、しかし何処か違う毎日が送られ
るのだろう。

そしてやはり、加藤は疲れ果てる、そんな毎日のために夜が明け
る。

第10話 『道標!』

「はあ……、なんでこうなる?」

「諦める、こうなったのはお前の責任だ、誰のせいでもない、な」

加藤は、デイリーからの、いや領主からの依頼であった、護衛を終えた。そして給金を貰い、これで終わりだと思っていたのだろう。しかして、彼は今、領主であるロレンの目の前にいるのだ。

「ははっ、そう言わないでくれたまえ。君と私の仲ではないか、そうは思わないかい?」

「いやですよ、領主様。ただ俺は貴方の長い、長い話を聞いたに過ぎません。そのような間柄では決してありません、恐れ多くて俺は身体が震えてしまいます」

加藤は芝居がかった口調でそれを否定する。
しかし、デイリーはあっさりと無駄だと告げる。

「ほっほ、小僧、諦める。……ワシに言えるのはそれだけじゃよ」
「……どうしてこうなった」

加藤がここにいるのは、呼ばれたのは単に領主の一言によるものだ。

曰く、気に入った、その一言が全てであろう。

「はっはっは、済まないね。だが、冗談抜きで信頼に値する若い……ヒトというのは貴重なんだよ。感情面だけでは駄目なんだ、万が一の時の保険もまた必須……。そう、睨まないで貰えるかな？ 貴方とて分かっている、あの時抜いたのだろうか？」

領主ロレンが言う言葉に反応して、ルクーツァは少しばかり目に力が入る。

「保険ねえ、それってどういう？」

加藤は、いつもの事と流すように、先を促す。

ルクーツァ、ロレンは苦笑いをしつつ、前者は目を閉じ、後者は口を開くという形でそれに応えた。

「……ああ、語弊があったかもしれないな。そう、つまりは感情ではなく、理性、いや違うな。文章面でそれが書いてあるだけで、信頼が置ける要素とでも言うか……。こと、信頼というモノは一歩違えれば、暗い感情に結びつくものでもある、ということさ」

（あー、要は就職みたいなもんかね？ 感じは良いし、誠実そうだけど、学歴が無いから雇えない的な？ ……なんか違うか、いやそうかな？ いいや、もう）

何事かを考え込んだ素振りの加藤を暫く待った後、ロレンは続きを語る。

「まあ、君はその貴重な領主としても、父親としても……、私としても信頼が置けそうな若者という事さ。なに、大した事を頼むわけではない……ただ、娘達の、今回訪れた彼女達の傍に時々で良いんだ、訪れてやってはくれないかい？」

領主は真剣に、酷く重大な事を頼むような口振りでそう頭を下げる。

その行動に、デイリーは少しばかり目を見開く事で感情を表現する、対してルクーツアは何も動かない。

「ええつと……。それだけ？」

しかし、加藤はなんとも間抜けな面を晒している。

領主直々に頼まれる、本来であれば自分などには来る筈の無い依頼なのだ。

しかして実情は、ただ屋敷へ遊びに来い。　　というものだった。

「……それだけ、とはどういう意味かね？　　いいかい、これがどれだけ大きな役割を持っているかというのだね……」

「ほっほっほ、ロレン様……いやロレン。そこらで良からうて、言っただじやろう？　　そのような事を言わずとも問題は無いと」

伝えたい事が伝わっていないと感じたのか、若干焦りを感じさせる口調を早口で紡ごうとしていた領主、いや友人をデイリーは制止する。

「っていつか、俺これから防壁の仕事なんですよ……。そろそろ行かないと、受付のお姉さんにまた怒られる……。久々だったのに遅れたら……。おお、怖え」

まだ何か言いたそうな領主を見つつ、言いくそに加藤は言う。ルクーツアは思い出したようにそれに対して相槌を打っていた。

「そういえばそうだった。いや、忘れていた……、そう言う事なので、オレ達はそろそろ行かせてもらおうぞ?」

「むっ……、仕事とあれば致し方あるまい。まあ、うん。暇な時にでも顔を見せてくれたまえ、それだけだよ」

「ほっほっほ、ルクーツア? お楽しみは独り占めするものではないぞ? その時はワシにも一報をよこす事じゃ」

「ふっ、デイリー殿ならばこちらとしても断る理由は無い。そうだな、今日の夜にでも……」

「待てや、久々の仕事つたる! それにラルや女将さんがご馳走用意してくれるって言ってるんだぞっ! 今日ばかりは鍛錬を断る! 絶対になっ!」

そう、無事に戻ってきた事を、女将とラルは、そして小動物せんばいもとても喜び、笑みを浮かべてそう言ってくれていたのだ。

「なんとっ! それでは女将に挨拶を兼ねて伺わせてもらおうとするかの」

「それが良い、カトーを共に鍛えるんだ。女将に一言、言っておくのが筋だろうな……。まあ、それは後でな、仕事が終われば伝えよう、それではな?」

「いや、なんで女将さんに俺をボコる許し貰う感じなんだよ? ねえ、聞いてるか、おいつて……」

そう言いながら、加藤達は領主のいる部屋を出て行った。

「いやはや、実に元気だね？ 私に息子がいれば、ああいった感じになっていたのだろうか？」

「ほっほ、さて……どうじゃろうかの？ じゃが、どのような所であれ親は親じゃろうて、そこは変わるまい？」

「会ってみたいものだな、彼のご両親に……」

そう呟きながら、領主達は、従来の仕事へと戻っていった。そして日は暮れる、一日というものは早いものなのだ。

「ほっほっほ、美味しい！ 女将は実に料理上手じゃのっ！」

「あっはっは、そうかいそうかい！ デイリー様にそう言って貰えると嬉しいねっ！ ほらっ、こっちのも食べてくださいな」

「本当にいるし……」

夕食時、加藤は言っていた通り、『砂漠の水亭』にてご馳走を振舞われていた。

だが、一番はしゃいでいるのは老人だ、加藤ではない。

「ふえー、凄いねーカト。 本当にデイリー様と知り合いなんだね？」

「……キユ、キユ？」

「本当についてどういう意味だ？ てか、先輩も相変わらず小さいのに良く食うな？ どこに入ってるんだよ」

デイリーが訪れた事に驚き、一番喜んだのは獣人の少女、ラルだ。ここを訪れるのはギョッセ、レイラやエリアスールであり、デイリーは初めての訪問であった。

「てか、レイラとかも来てただろ？ ラルは知らなかったのか？」

「うん、領主様のとこのヒトだなんて、まさかお姫さまだったなんてねっ！」

レイラが令嬢という事をラルは知らなかったようだ。デイリーが訪れた際に、加藤からそう聞かされた時のラルの表情は実に見ものだった。

「いやー、姫じゃねえだろ？」

「はっはっは、いや……、領主の娘とは姫と言っても間違いはあるまいよ。少なくとも、我々に取ってはな？」

お姫さま、という単語に素早く否定を入れる加藤。そこへ今まで料理を食べる事に夢中だったルクーツアが食べながら、そう言う。

「ようやく話したな、ルクーツア。食うのも良いけど、もう少しなんとかならねーのか？」

「んむ、そつは言つがな。久々の女将の料理なんだ、止められんな？」

相も変わらず食となると目の色を変えるルクーツア。

加藤はそこを指摘するが、何処吹く風の体であつさりと流す。

「まったく、カトーの坊や。デイリー様にも鍛えて頂いているんだつてね？ いや、あたしは安心したよ。ルクーツアさん程のヒトでも不安だつたけど、デイリー様もとなれば……。うん、これからも頑張るんだよ？」

「あー……。うん。せめて女将さんやラルは守れるくらいには強くなつてみせないとな？」

「あはやだよつ！？ この子つたら一丁前につ！ そんな事よりも、まずはあんたさ……。自分の事を守るようになりなつ！」

「あははー、カト。格好悪いねー」

「ほつほつほ、うむうむ。実に女将の言う通りよ、小僧に誰かを守るなど百年早いわつ。……が、強くなるためにはその意思は必要不可欠、決して失うでないぞ？」

「ひでえ……。俺の精一杯の強がりか木っ端微塵だよ……。先輩、俺……」

「……キユ！」

加藤の宣言を、女将を始めとして、全員に断られたのだ。追い討ちを掛けるように、声を掛けられた小動物もまた、少々素

つ気無い鳴き声を上げた。

「……………」

「ははっ、そう落ち込むな。今はまだ、さ。いいんだ、それでいい……いや、それが良いんだ。守りたいもの、守れないもの、出来る事、出来ない事、それにぶつかるとは大切な、今の力トーだからこそ得られるもの。下手な武や智など路傍の石に見えてしまうほどの宝さ、今を大事にな？」

今でしか得られないものがある、そうルクーツアも教えてくる。しかし、理解できても納得できないものがあるのだろう。この場に彼らと加藤だけならば納得できていたかもしれない、しかしここには見栄を張りたい対象がいたのだ。

「でもさー、やっぱり守りたいじゃないか？　そういう、強いヒトつてのに、どんな事からでも守れる最強つてのに憧れちゃいけないのか？」

「ほほ、そうじゃな。言ったが、それに憧れる事、それは間違っている。じゃが、最初から今ある脅威から全てを守れる力を有している存在がいたとしようかの。そして、新たな脅威が現れた時、その者はどうする？」

その言葉に、デイリーは笑って言う。

「そりゃ、その力で守ろうとするだろうさ」

「ほほ、そうできたなら良いの？　じゃが、その考えはお主が少なからず、何かに衝突したからこそ出てくる思考よ」

加藤の返事は容易に想像できていたのだろう、また軽くいなされる。

更に、付け加えるようにルクーツァも言う。

「強すぎる存在になればなるほど、ぶつかるといふものも大きくなる。そして、その事に気付いた時、大きすぎるソレが齎すモノは取り返しが付かないものなのさ」

「えつと？」

話の流れが少しばかり変わった事で、理解が追いつかなくなったのだろう。

言葉ではなく、疑問を表す単語のみを口にする。

「お主の力が、それだと仮定しようかの？ お主は街のごろつき程度、そして上手くすれば小型までなら捌ける力量がある。それがお主の言う、最強だとして……」

「中型が、大型が現れた時、お前はこれまでのように女将やラルを守ろうとする意思を持てるのか、という事が1つ。そしてそうしたとしても、失うものは守りたいもの……。女将とラルと言う事だ。どうだ？ 大きすぎるだろう」

デイリー、そしてルクーツァは早口でどんどん言葉を重ねる。

それに対して加藤は徐々に顔に苦々しいものが浮かび上がる、が仮定の話で思う事があったのだろう、そこを嬉しそうに指摘する。

「うっ……って、それは普通に無理じゃねーかよ。中型はルクーツァ達くらいになればもしかしたら有るかもしれないけど、大型なん

て普通に不可能なんだろう？」

「ああ、オレ達はそういつた事にぶつかったからこそ、不可能という事を知っている。だから、ただ剣を振るう事ではないものを探せる、違う方法を模索できる。それは身を以って実感したからだな？
だが、最初から小型を、中型を倒せたら？ それを知れるだろうか、実感できただろうか」

「言葉で言われる事と、自分の身を以って感じる事は似ているようで全く異なるという事よ。そして、それを心の芯で感じられるのは、今のお主にしか出来ぬ事。強くなるには、まずは弱さを知り、味わう事こそが肝要」

しかし、やはりあっさりといなされる。彼らの言っている事は言葉としては伝わりにくい事だろう。

しかし即ち、それもまた実感せねば理解できない、言葉では表す事が難しい事と言えるのかもしれない。

「えっと……」

「ふっ、要は守るという事が、強くなればなるほど、その脅威を倒すという考えに固執してしまいかねないという事だ。守るという事が、どういうものなのか、決して忘れるな、そういう事さ」

ルクーツアは、今までの話を無にするかのように、適当に纏める。

「ほっほ、その点は心配ないが。小僧は勝てないものに対する術を既に持つておる。お主の逃げ足はワシをもってして、目を見張るものがあるからう！」

デイリーも同じく、それを笑いの種として、大きな声を上げて笑う。

「あっはっは、そいつは喜ばしいねっ！ デイリー様にもお墨付きを貰える逃げ足があるなら、あたしも安心さねっ！」

デイリーの言葉で安心できたのか、女将もまた笑う。とても、とても喜びに溢れた笑いだ、実に大きな声だ。

「あははー、やっぱり格好悪いねー、カトっ！」

少女は分かっているのかもしれないかもしれない、だが声に喜びがあるのは違う。

「キュツキュツキュ〜」

小動物せんぱいの鳴き声は何を伝えたいのかは分からない。

しかし、その名前の如く、何かを教えようとしている感が響きにあつた。

「もういいよ、これも鍛錬って事で耐えるんだ、俺。そうさ、これも弱さの1つ、今を味わうのが大事なんだろ、負けるなよ、俺」

それらの笑い声を嘲笑と取ったのか、喜びの唄と取ったのかは加藤にしか分からない。

だが、その言葉とは裏腹に、表情とは裏腹に、口元には弧が描かれている。

強くなる事を決意し、弱さを認めていた彼は、守りたいと願う者から守られている現実を知る。

その事で弱者は進むべき道を知っただけでなく、己が目で見ると

いう方法で再確認する。

その上に共に進む友、導く師、支える家族までがいるのだ。

「ほんと、これから大変だよ……」

こんなにも恵まれている、この現状こそがまた1つの最強なのだ
と彼は心の芯から感じられた。

ゆえに彼はこれから強くなる事に、なんの不安も持てなかった。

月日は流れる、暑い夏から涼しさを樂しめる秋へと移り変わっていく。

加藤はこれまで以上に強くなる事を、自分の弱さを知る事に貪欲になっていた。鍛錬を積み重ね、普段の仕事ですら、意識的に身体を動かすようにするという徹底ぶりからも加藤の本気が伺えた事だろう。

「そうじゃ、その動きを忘れるでない。どうしようも無いと感じたのであれば、後ろに引くのは愚策よ。前に行け、足を一歩で良い、進めるのじゃ」

いつものようにデイリーから優しい響きを持った声で諭される事も。

「いいか、そうじゃない。前にも言っただろう、剣に振るわれるようではダメだと。しかし振るうだけでは同じくダメだ、軍曹の時に言っていたな？ 信頼している、と。それだ、剣も同じく信頼し信頼されなければ話にならないぞ！」

ルクーツアに鍛えられる時には厳しく、叱咤される事もあった。

「いやはや、私としては武術にあまり自信が無いんだけどね……。いやしかし、基礎程度であれば喜んで教えようじゃないか。まずは足腰を鍛えるのが普通だが、君には必要ないだろう。いいかい、重要なのは周囲を見る、そしてそれを想像する力に加えて、足の裏に神経を……」

若干照れながらも、アードから無手の動きを学び、自分の強さである身体の動きを見つめなおす事も。

「まず、中型や大型が相手の場合はデイリー様などの達人でない限り撤退を選びますわ。理由は言わずともお分かりでしょう、無理だからです。しかし撤退と一言に申しまして……」

頼んでもいないのに、団体、纏まりをもった多の動きをエイラに教授された事もあった。

「さて、今回はモンスターの生態を話しましょう。いいですか、カトーさん。小型の場合は群れますが、群れの長というのが存在するのです。小型の場合、それをどれだけ早く発見し、痛打を与える事こそ……」

鍛錬に疲れた時、休憩の場を作ってくれたエリアスールが、なぜが講義を始める事など日常茶飯事。

「ねえねえ、ヒロ。ボクはね、ずっと疑問だったんだ……。このお菓子ってのは、なんでこんなに美味しいんだろうね？」

「そうだよー。お菓子は不思議だよ……。わたしも食べちゃダメって思ってもついつい……」

無駄話をする事もあった。

しかし、加藤が楽しめたかどうかはまた別の話だ。

そして、色移りがあった、暦としての秋へと代わっていった日の翌日。

加藤は領主の屋敷で以前の広間とは違う、あれよりも狭い部屋にいる。

その部屋の中央に置いてある机に両腕を組むように乗せている、ロレンの前にルクーツアと共に並んで立っていた。

「なんですか？ 今日の仕事ないからルクーツア達と鍛錬しに行こうって話なんですけども……」

「いや、済まないね。うん、頑張っているようだね？ 娘達やデイ

リーから聞いているよ。中々の腕前になったそうじゃないか、この前は小型を討伐したとか？」

若干、気乗りのしない声の加藤に対し、ロレンは苦笑いを浮かべつつも、会話を続けて本題へと繋げようとする。

「あー、あれは防壁の工事中に、カルガンの群れから逸れたのが一体迷いこんじゃったみたいで。討伐というか、追い払っただけですよ」

「ほっほ、謙遜するでないわ。お主、その時には得物は持っておらなんだと聞いておるぞ？ ……なにやら小さな木の棒で対峙したか」

加藤がそう応える、それに対してロレンの後ろに控えていたデイリーは反応をよこす。

そして、加藤の胸元を見つつ、そう言った。

「はっはっは、そうだったな。オレが行こうとしたんだが、こいつが駆けてしまつてな？ 様子を見ていたんだが、いやはや驚いたよ」

加藤の横に立っていたルクーツアは驚きを言いたいのか、楽しさを伝えたいのか分からない言葉をつなげた。

「まあ、お守りとして持っていたからね。っても倒すつてのはやっぱり無理だわ、これじゃなあ」

その時の事を思い出したのか、存外素早い動きでお守り《ぶき》を取り出した。

短い棒のようにはしか見えないが、これを用いて小型と対峙したの

だ。

「はははっ、倒すのは無理か。追い払えるだけで十二分というものさ、武器を持たない冒険者は為す術なく倒されるのが悲しい事に多いからね？ この街は少々特殊だが、防壁工事をメインとしている冒険者はやはりその域を出ない」

「まあ、鍛えられてるし……。ってか、一応コレも武器なんですけどね？」

そう、ロレンが褒めていると言える事を言い放ち、加藤がそれに言葉を返した時。

刹那かもしれないが、時が止まったかのように音が消えた。

そして、時が動きだしたのは、加藤が居心地悪そうに短い棒を胸元に仕舞う時の微かな音だった。

「うん……デイリー、私としては十分だと思う。以前にも言ったが、第一として必要なものを有しているのは彼以外には居ないと思うからね」

時が動き出したので、ロレンはゆっくりと、新たに動き出した世界を壊さないように、慎重に言葉を選んで喋る。

「そうじゃのう……ワシとしては最初なのであれば問題は無いと思うがの。どうじゃ、ルクーツァ」

「ああ、まあ最初であれば問題あるまいよ。その程度はこなせるようにしている、そうだろう？ デイリー殿」

ルクーツァとデイリーは、互いに頷き合う。

そして、加藤へと、ロレンも含めてこの場全ての大人が視線を送った。

「ヒロ・カトウ、君に領主として命令しよう。君に新たなる街建造の件についての参加を求める、いいかい。拒否はゆる……す」

「……おい！そこは許さないって言えよ！そんなジョークは時と場合を考えて言ってくれっ！頼むからっ！」

珍しく、彼らだけの場では領主らしからぬ姿だったロレンが見せた真面目な声。

しかし、やはり最後は締らない、彼はそんな領主だった。

「はっはっは、いやね……。街の造り方とかでも、君に意見を求めたかったのさ。が、色々と問題がある。具体的に言えば君の秘密というね」

「だが、この程度であれば問題あるまい。そういう結論を下した、お前の事だが、お前はその重要性を認識しづらいだろうからな、オレ達で話し合ったんだ」

問題、それは加藤が異世界から訪れた者であり、昔の英雄と同じ存在という事だ。

普段であればいいだろう、しかし街造りとはヒトら全てに影響を与えるものなのだ、悩むというのも不思議ではないのだろう。

「だからさ、俺の知識っていうのは教えただろう？ ナノマシンが無けりや大した事できないし、武器だってレーザー銃なんてどう作られてるかなんてサッパリなんだよ。コンピューターも無いし、情報だって自分で覚えるっていうか見るものだったしさあ」

以前に、それを聞いた時に加藤は英雄と同じような事をしたいという欲求に勝てず、色々と余計な事を話してしまっていた。

だが、その何れもこの世界では想像も出来ないものばかりだった。

「ああ、聞いた……。そしてソレは今のオレ達の世界では全て不可能だと言う事も分かっている。だが、空を飛ぶ箱などの構想、たった一回の攻撃で世界を壊しかねない兵器、そうでなくとも目に見えない生き物を兵器とするなどの恐ろしいまでの技術。……そして、宗教というモノもだ。確かにこの世界にもソレに似たものは在る、在るがお前の言っているソレとはやはり別物。どれもこれもやはり別格なのだよ」

その不可思議なモノの中でも、少なくとも思い浮かべられたものがあつたのだ。

そしてソレの可能性を示す事は世界の在り方を変えてしまう可能性を秘めていた。

「それらはお主には当然の事で、価値は無いものじやろう。しかし、この世界に措いて、それらは無二の存在、この世界でそうなるとしても何百、何千年という先の事柄ばかりのな」

「更に言えば、それを出来るだけ……。いや、もう二度と口に出さないで貰いたい、一生だ」

その事を、ロレンは重く言う。

だが加藤の考えは違ったようだ、正反対のものを言う。

「はあ、なんでだ？ そんなに大事な事だつて言うなら言った方が良くないか？ その方がきつとこの世界のためになると思うんだけ

ど」

「そうだな、その通り。だが、この世界はお前のいた世界ではない。この世界の進みを歪みかねない毒でもあるのさ、お前という存在はな」

だがルクーツアはそれを認めつつも、反論を言う。

その言葉には常の力強さは見えない、しかし別の何かが強く宿る。

「お主のようなヒトがいたと言ったろう？ その者達に共通しているのは大人という点じゃ、そして皆が同じく事を言ったと伝えられておる」

「有名な言葉はこうだね？ 『我はこれ以上を教えぬ、主らがこれから先、どのような道を辿るかが楽しみでならぬ』これ以外ではこうも言っている。『未知のヒト達よ、自らで切り開いて欲しい、それを伝える事こそ、私がここに来た理由であると信じています』ってね？」

先人の教えを彼らは語る。

自らで道を創るこそが、重要であると、そう言っているのだ。

「色々と教えたんだろ？ そいつらはさ、だったら俺もそういうもんじゃねーの？」

「色々と教えたのは英雄が、だな。そして異世界の英雄は1人ではない。モンスターどころか野犬に怯えていた人間には火という守護を与えた英雄がいる。だが、それ以外は与えなかった、同じ生活を過ごした。英雄からすれば、とても生活と呼べるものでは無かっただろうものをな」

ルクーツアは、火の灯っていないランプを見て言う。

「雨風に打たれ、翼が翼足りえなくなった事を悲しむ有翼人に屋根という優しさを与えた英雄もいた。彼もまた、それ以外は与えずに共に苦労したと言うよ?」

ロレンは机に置いていた腕を解き、屋敷の上、天井を指差してそう教えた。

「己が力に溺れ、種族同士で殺し合い、涙する竜人には、互いに殺し合うのではなく、競い合い高め合う手段として武を与えた英雄がおった。そしてまたそれ以外は、とそういう感じじゃ」

「必要なものだけって事か? それにしたってさ」

デイリーの言葉を最後に、加藤はここまで聞かされた事を纏めたのだらう。

それでも言いたい事があるようで、また問う。

「いや、そうじゃない……。本当はもつと教えたかっただ、救いたかっただはずだ。だが、その英雄の世界には問題もあつたんだらう、それがこの世界にも訪れるかもしれない、それを恐れたと言う事だらうな」

英雄の世界、それはつまり加藤の元いた世界と程度は違えど同じようなものなのだらう。

あの世界では科学が発展しすぎた、そして地球は壊れた。

便利なものを、快適なものを求めすぎた結果、本来無視してはならぬものを軽視してしまった結果だ。

「問題か……、そうだな。確かに俺達の世界にもソレはあった……確かに今すぐそうは絶対にならない、けど。……ああ、確かにソレは駄目だ。そうはなっちゃいけない」

その問題のせいで、加藤はここへ来てしまったのだ。

結果としては幸運なのかもしれない、だがそもそも問題が無ければ、あの時の恐怖は無かったと言えるだろう。

「まあ、この世界に無いような、逸脱した技術を披露するのは避けてくれというだけさ。別に、思った事を言うのを止めるという事ではない、その世界で育ったお前の考えはお前だけのものだからな」

「逸脱、ねえ？ 例えばだけどさ、飛行機…… ああ空を飛ぶ箱ね？ そこまで行かなくても、そう！ 先輩みたいな感じで空を飛ぶ方法ってのもあったらしいんだよ！ 高い所から降りるわけで、飛ぶってのは語弊があるかもしれないけど、滑空する道具……。そういうのはどうなんだ？ 逸脱してるか？」

「ほう、滑空か。つまり鳥や有翼人が上空から滑るように飛ぶ事だろう？ それをオレ達でも出来る、そういう事か？」

「そう、まあ……強度とかが問題だろうし、効率とかも分からないけど。そういう事は？ その程度なら良いのか？ 俺の世界では既に過去のモノだったしさ」

それを楽しみたい、そう思う人間は多かったかもしれない。

だが、それを許す環境は既に世界に無かった、ゆえに過去のモノなのだ。

「うーむ、その程度であれば……良いのかな？」

「まあ、さつきはああ強く言っただけだね。別になにが何でも言うな
って訳じゃないよ、ただそういう心構えだけは持っていて欲しい。
頭の隅にでも置いておいてくれたまえ、って事さ」

要は、過去の英雄達のように世界に生きる人々のためにそれを広
める事はしないで貰いたいと言いたかったのだろう。

そしてそれは加藤へと通じたようだ、なんとも言えない顔をして
いた。

「なんだよ、なんか制限されるのかと思ったよ……。最悪、なんか
不味い事言ったら殺される事さえ考えてたんだからなっ！」

「はっはっは！ それは無いさつ。万が一そんな事を言う輩が居た
とすれば、すぐにオレやデイリー殿が斬ってやるからな？ それは
有り得んよ、お前が自分から広めたりしない限りは、な？」

「おいおい、それってつまり俺が広めようとしたら斬られてたって
事か？ まじかよ、こえーじゃねえか」

「ああ、違う違う……。ルクーツア殿が言いたいのはそのじゃない。
君が自分から広めた場合、過去の英雄の教えのために君を殺さない
といけないと考える輩が出てきてしまうかもしれない。そうなって
はどうしようもない。だけど、そうじゃない場合にそう言うヒトが
出た場合は、私達がそいつを殺すから問題は無いんだって事だね？」

にこやかに、あっさりと、自然な口調で物騒な事を言っ
て見せた
口レシ。

やはり彼もまた領主足り得る人物なのだろう。

「領主も怖いことさらつと言うなよな、………つたくさ。………それにしても過去の英雄の教えのため、ねえ？ 俺も一応、そういう感じなのに殺そうって思うわけ？ 同じ英雄かもしれないのに？」

今までの英雄という単語に自らを重ね合わせるような固執した感ではなく、単に疑問として加藤は尋ねた。

それを笑いつつ、しかし真剣な色を滲ませてルクーツアは応える。

「はっは、言っただろう。御伽噺、昔話の存在だとな？ 謂わば空想の、伝説上の人物であり、お前の言う所の神様ってやつさ。どうだ、お前の世界でもそうだったのがあつたんだろう？ 仮にだ、仮にその神と同じ存在が現れたとして、お前はそれが神だと信じるか？ 信じられるか？ 難しいだろう、むしろ冒涇していると憤慨するんじゃないか？」

「あー、うん。まあ無宗教だったもんで、憤慨するかは分からないけども。確かに、信じはしないだろうなあ………」

「まあ、そういう事じゃよ。幸い、お主の見た目は人間そのもの、言葉も話せる、ある程度以上の実力も今では備えておる。そのような加護は、称号は最早、不要であろう？ お主自身が以前言っただけだよ」

そう、異世界へと送った神がいたとしたならば、加藤への慈悲として与えてくれた、異世界人という名の特別な存在という加護。

その加護のおかげか、加藤の努力のおかげかは分からない。

しかしそのおかげで小動物せんばんと出会え、ルクーツアに救われたのであれば。確かに、最早その助けはいらぬのかもしれない、そして肯定するかのように加藤も笑みを浮かべて言った。

「ははっ、確かになっ！ 悪いな、またやっちゃったよ。まったく俺は駄目だなあ……。 そうなのに、なんか固執しちゃった。……ってか、あれ？ そもそも、その流れにしたのはルクーツア達じゃ……」

しかし、この流れを作ったのは、そう感じさせたのは、言わせたのは加藤ではなく、彼ら大人だと言う事に気付いたのだろう。

何故、このように自分が謝る形になっているのが不思議なのかもしれない、そんな顔を大人へ向けた時。

大人はそそくさと行動を開始した。

「さて、そろそろレイラ達と会ったらどうだい？ 最近はデイリールクーツア殿達とばかり鍛錬していたそうじゃないか。偶には顔を見せてあげて欲しいね」

話題を愛する娘に変えて、そう言う。言いたい事はつまり、話は終わったのだから、早く出て行けという事なのだろう。

「ほっほ、いや確かに。なれば今日は皆も巻き込んで軽いものをするとしようかのう」

鍛錬の話が始めるのはデイリーだ、既にその足は扉へと向いていた。

「ああ、それは良い。基礎はそれなりに出来てきたが、それだけに変に凝り固まり始めてきた時期とも言える。ここらで、色々と取り入れさせるためにも、それは悪くないな」

加藤の眼差しを無視するように、ルクーツアはデイリーの提案を

奨励する。そして、共に部屋をあつさりと出て行った。

部屋に残されたのは何かを言いたい顔をした加藤と、机の上にある書類と睨み合う、加藤には目もくれない領主のみだった。

「……………」

「……………」

「……………まあ、俺のためって事で、うん」

そう言葉を残して加藤もルクーツア達の後を追うように、この話は終わりという事を示すように部屋を出て、扉を閉めた。

「いやはや、ついつい、許してくれたまえ？しかし、英雄はこうも言っているんだよ……」。『私のような者が、いつか現れるかもしれない。その時はどうか、お願いです。その者を英雄と言わないであげて欲しい。どうか、どうか親愛なる友と言ってあげて欲しい、望まぬ孤独を与えないで下さい。それが私の最後の願いです、我が友よ』とも、ね。今は昔とは違う、英雄達が私達のために苦を選ばざるを得ない時代じゃない、それは……英雄達のおかげでなれたのだから。だからこそ、今度は迷ってきた英雄のために我々が守る番なんだろう？」

そう、姿が見えないヒトに言う領主だった。

そして、すぐさま仕事へと向き合う、加藤がこれからどうなるのかを想像しつつも、手に握るペンは止まらない。色々かんがえごとと仕事は多いのだ、領主というものには。

過去の英雄達が、何を思って過ごしていたかは今となっては知る

術はない。

しかし、不安はあつたはずだ、泣きたいと思つたはずだ。だが、
そこで見たのはそれ以上に嘆き悲しむ弱いヒトだった、彼らは選ん
だのだらう、己の道を。

そして、その道は多くの英雄のものと交わり太くなり、弱きヒト
を強くした、その偉大なヒトのもの交わり、新たなる英雄を守る
ほどの大きなものになっている。

加藤は英雄では無い道を選んだ、だがその道は英雄の道といつか
交わる事だらう、そしてまた大きくなるのだ。

ヒトが生きてるとは、そういう事なのかもしれない。

「お、来たか……。はっは、すまないな？ さっきはああなつてしまつて」

「ん？ ああ、別にいいよ。あれはあれでさ、気にしてないし、それよか鍛錬しようよっ」

加藤は屋敷の庭へと来ていた。

そしてルクーツァ、デイリーがそこにはいる、それ以外にもレイラとアーダ以外の女性達も揃つていた。

「鍛錬、鍛錬つてヒロつては本当に鍛錬好きなんだねえ……。といつかボクが付き合う理由つてあるのかな？」

「今となつては、貴女が一番か弱いんですのよ？ 仮にも、ここからわたくし達と共に行くんですもの、最低限は出来なくては困りますわ」

「おいおい、エイラ。 そういう言い方はさ……」

ニーナがそう、軽口とはいえ言つてしまつた事に若干の苛立ちを募らせながらエイラはそう叱るような口調で言う。

それを加藤は咎めようとした時、もう1人の女性が遮つた。

「ふふつ、カトーさんもエイラ様の事は良くご存知でしょう？ 困る事になつてその時に悲しむのはエイラ様ではなく、ニーナ様になるから困ると言っているんですよ、ね？」

「……うっ。　そ、そうではありません！　わたくしはですね、ってカトウ！　何を笑っているんですのっ!？」

エイラは言葉を途中で止めて加藤とじゃれつくように喧嘩を始める。

その様子を呆然とした表情で見つめていたニーナは、しかし悲しそうな顔をした。いや、正確には、嬉しすぎるがゆえに、泣きそうな顔とすべきだろうか。彼女もまた、1つ大きくなるべき時が訪れているのかもしれない。

すぐさま、その顔を笑顔へと変えて、ニーナは叫ぶようにエイラへと自分の意思を伝える。

「あははっ！　それじゃアツという間にヒ口を追い抜いちやおうかなっ！　見ててよ、エイラ！　ボクはやれば出来る子なんだよっ！」

「……あら？　そ、そうですの？　ええ、ええ！　その意気ですわ、何よりカトウの偉そうな顔が気に食わなかったんですよ！　あの顔をポコポコに出来るようになりますよ！」

「うんうん、ポッコポコだよ！」

そう言うと、黄色い、甲高い声ではしゃぐ彼女達。その様子を見た加藤は苦笑いを浮かべ、エアースールはその加藤を見て苦笑いを浮かべる。その全てを見渡して、苦笑いを浮かべるのは2人の大人。そして大人が声を、ようやくになって掛けた、鍛錬の始まりだ。

「ほっほっほ、仲が良いのう？　じゃが、そろそろ真面目に始めるとするかのう。軽いモノとは言え、ワシらがやるのじゃ、甘くはな

いからのう？」

デイリーの言葉に、はしゃいでいた彼女達は静かに、いや真剣になる。

加藤だけは未だに苦笑いだったが。

「さて、鍛錬の内容だが……。鬼ごっこ。というものだ、これはオレとデイリー殿が鬼役を勤める。

お前たちは鬼から逃げればいいだけだ。詳しいルールは……」

この鍛錬は、初めてデイリーに鍛えられた時のことを思い出した加藤が比喻として挙げたものを、彼らが聞き出した上で鍛錬としたものだ。

ルールは地球の古典的な遊びとほぼ変わらない、基本的な部分では鬼が変わらないという事くらいだろうか。

だが、武具を着けている上に疲労した状態という仮定での上なため、重しを背負つての逃走なのだ。その重しを背負わされた彼女達は苦痛の表情であり、加藤はやはり苦笑いだ。加藤に合わせた重しの重量はそれなり以上のものだったのだ、彼女達には厳しい重さだ。

「ふむ、流石に女性にはこれは厳しかったか……。力より技だからなよし、カトー、お前だ……。余裕の表情のお前だよ、他の皆の重しもお前が背負え」

その突拍子も無い提案に、加藤は絶望の表情を。他の、いやエリアスール以外の、特にエイラは喜色を浮かべて賛成した。

「まあっ、それは素晴らしいですわ！ それでは、カトウ……はいっ……よろしくて？」

「……落ち着け、俺。これも鍛錬さ、そう……弱さを知るんだ」

「何を小声でブツブツ言ってるの？ はいっ、ボクのもよろしくね
」

「だ、いじょうぶだつ。多少重いが走れないほどじゃない……」

「その、これも宜しくお願いします……すみません」

「俺は大人になる……そうっだつ、このっ程度お」

流石に、何時もの4倍ともなれば加藤の表情にも苦がありありと
浮かんでいる。

とてもではないが、ルクーツア達の手を抜いているとはいえ追撃
から時間一杯逃れられるとは思えない動きだ。

「さて、先程お前達は力よりも技だと言ったな。少々ルールを変
更しようと思う、良く聞けよ？ お前達にはカトーを守ってもらつ。
簡単に状況を言えば、カトーは中型を足止めしている……。だが
その背後をオレ達、小型が襲いかかるうとしているわけだ」

「お主らは、ワシらを上手く捌かねばならぬ。小僧も、皆が守りや
すいように多少は動け、今でも多少であれば走れるじやろう？ し
かし、無理をすれば膝を付くじやろうな……。その時を以ってお主
は中型に敗北、死亡と見做しお主達、全員の死亡であり負けじゃ
？」

「オレ達を捌く方法は、背中に触れる事だ。触れたなら、一瞬止ま
る、小型に痛打なり、致命傷を与えたとする。そしてその後、触れ

たものを暫く追う、そういう感じだな。……オレ達はそう素早くは動かないし、反応もしない。その程度は出来るだろう？ 出来なくとも、協力すれば良い。オレ達は基本カトーを狙うが、それ以上に目の前に立ち塞がる者を狙うからな？」

説明を受けた加藤達は、驚いているもののすぐに理解し、小声で何事かを話し合っている。

加藤も話に加わっているものの、なんとも言えない顔を、やる気を失ってきていた、そこに声が飛ぶ。

「カトー！ お前の目指すものは中型を足止めする程度のものかっ！ オレ達が鍛える男だぞっ！ 最低でもオレ達は越えて貰う！ これは仮想だが、そうだと思って動けっ！ お前が耐えなければ皆を、大事なモノを失うということだと思えっ！」

その叱咤を受けて、加藤はしゃんと立つ。

大事なモノ、いやヒトという単語は加藤には無碍に出来ないものなのだろう。重しを感じさせない、常の起ち方だ。それからゆっくりと、腰を落としていく。

その変化を見て取って、デイリーが言った。

「ほっほっほ、それで良い。そうじゃの、時間は1時間……。いやはや、耐えられるかのう、それでは……開始っ！ ……………ほれっ、逃げんか！ ワシらもすぐに襲い掛かるぞ？」

そしてお遊びが、しかし耐え忍ぶ戦いが始まる。

ルクーツア達は確かに手を抜いていた。しかし時間が経つにつれて徐々に動きが鈍る加藤達に対して、彼らは疲れない、止まらない。

「おい、エイラ……。まだ1時間は経たないのか？ 結構辛いんだ

けど……」

加藤は、素早くとは言えないものの確かに走り続けた。

この遊びは加藤が膝を付けば強制的に終了だが、ルクーツァ達に確実に触れられた時点でも各自は死亡扱いなのだ。そうしなければ、彼女達が死んでしまうから、彼は重しを背負いながらも彼女達に劣らず走る。

「はあはあ、いえ……残り15分という所ですわねっ。ニーナさんっ！ 後ろっ」

やはりニーナが一番辛いのだろう、膝に手を着き、荒い呼吸だ。そして視線を下に向けてしまったために、後ろから迫る小型に、デイリーに気付いていない。

そこに1つの影が、風が吹いたように現れる、エリアスールだ。

「触れましたっ！ こちらですよっ！」

エリアスールは、常に足を動かす事はしていない。動くべき時に、全力で疾^{はし}るのだ、これが大きな助けとなっていた。

「あっ、あ、ありがとう！ はあ、ふう……うん、まだ大丈夫だよっ」

そのカバーを受けて、体制を建て直し、エイラと共にルクーツァへと向う。

加藤はそれらを見渡しながら、自分の安全を、そして彼女達の動きやすい形になるべくまた走る。

そして、1時間が経った。

「はあっはあ、もうダメ……ボクはもうダメだよ……」

ニーナは周りの目を気にせず庭に、大の字に寝転がっていた。そこまですはいかずとも、他の面々も似たようなものだ。

「ほっほ、良くぞ耐えた。どうじゃ、この遊びは？　なかなか面白かるう？」

しかし老人と言える年齢なはずのデイリーの息に乱れない。

「ニーナ嬢には厳しい言い方になるかもしれないが、荷物が増えながらも良く耐えたな、お前達。そしてニーナ嬢、良く忍んだ……。逃げずに立ち向かい続けたな？」

「これは遊びじゃ。しかし、鍛錬という真剣に望むべくものでもあった。そこであれじゃ、その時感じた羞恥は、屈辱は実際の時のと差程変わるまいよ」

「ははっ、そうだな……。それにルクーツア達はああ言ってるけど、俺は助かりまくりだったよ。ほら、俺が最後辺りに膝付きそうになつたろ？　その時にニーナが支えてくれたからな、だから1時間耐えれたんだ」

加藤は一番疲労を強いられたものの、一番視野を広げる余裕を持てる位置に居たとも言える。

だからこそ、彼女達の頑張りを知っていた、ゆえに肯定の言葉を、感謝の言葉を紡ぐ。

「そうだったな？　あれは見事としか言い様が無い行動力だった、

オレ達どころかカトーも見ていた。そこは素晴らしかったぞ、二一ナ嬢」

「あははっ……ボクが疲れちゃって後ろに下がってたから出来ただけで……。気を配っている余裕は無かったんだけどね……」

そう言いつつも、褒められた事が嬉しいのだろう、苦しそうな顔に笑顔が混ざる。

そして加藤達の動きを褒めては叱り、下げては上げてと評価していた彼らに近づいてくる影があった。

「あれ？ もう終わっちゃったの？ もー、ルクにデイリー？ わたしも混ざりたかったのに……」

そう不満げな顔と、それを示す言葉を言うのはレイラだ。
その後ろから現れるのは若干疲れ気味のアーダだった。

「いや、疲れたね……。まさか、レイラ様がここまで算術などが出来なかったとは……。これは私が来て正解でした、最低限は教え、後は私がするようにしたいと思います。よろしいですか、デイリー様？」

どうやら、色々と勉強をしていたようだった。

そして結果はアーダの顔が物語っている、頭は悪くないのだが、どうにもそうだった事は苦手なレイラだった。

「ほっほ、もとよりその積みりよ。ただ、その事実を知らねばお主が疑問に思うかと思つてのう？ どうじゃ、これはお主がやらねばと思えたじゃろっつ」

何故か自慢するかのように、声を張って言い張るデイリー。
しかしアーダはしきりに頷いて同意を示した。

「ええ、その通りです。っと、それよりも……何をなさっていたんですか？」

アーダは地面に寝転がるニーナや未だ息を荒げているエイラ、汗を拭いているエリアスールを見て言う。

加藤は何故かルクーツアと腕相撲をしていた、そして既に勝敗は着きそうだった。

「ほっほ、なにちよっとしたお遊びじゃよ。うむ、……どうじゃやってみるかね？」

その言葉に反応したのはニーナとエイラだ。
疲れていたとは思えないほど俊敏に身体を起こして、声を荒げる。

「まつ待ってよ！　ボクはもうちよっと遠慮したいんだけどっ！！」

「わたくしも、少しばかり休憩させて頂きたいですわっ！！」

「ほっほ、分かっておるわ。続行させるのは小僧とエリ嬢だけよ、お主らはレイラお嬢様方と交代じゃの」

その言葉に胸を撫で下ろす2人、そしてその様子を見て何を想像したのか顔を引き攣らせるアーダ。

「いや、また俺が皆の重しを持つのか？　さすがにまた1時間ってのは厳しいと思うんだけどさ」

正確にはルクーツアが遊びを入れたために長引いただけなのだが、勝負が着きそうになった時に、デイリーの言葉を聞いた加藤は腕を引いた。

そして苦笑いを浮かべつつもルクーツアへと視線を投げる。

「まったく、遊ばなければ良かったか……。ああ、いやそれだが、重しを背負うのはオレだ、カトー。そしてお前が小型になって、オレ達を攻める側に行つて貰うぞ?」

加藤の言葉にルクーツアはそう言つと、置いてあつた重しを身に着ける。

加藤の時よりも多い10個ほどを、身に着けられる上限一杯着けていたがそれでも達人の動きは変わらないように見えた。

「ルクが重し着けた所であんまり意味無いと思うんだけど、まあ……いっか」

そこをレイラが冷たく言うが、気にせず準備運動を始める。アードも、それに倣つて同じく身体を温め始めた。

「なるほど、俺が今度はこっち側か……。デイリー、ガンガン行くぞぜっ!」

「ほっほっほ。うむ、始めはお主の好きなように攻めてみせい」

そしてまた遊びのような、しかし過酷な鬼ごつこと言う名の鍛錬が始まる。

一番最初に動いたのは、やはり加藤だ。

速い、一気にルクーツアへと迫っていく、レイラやアードはこつも早く展開するとは思わず動けずにいる。

「悪いが、さっきの勝負はドローだっ！　そしてこの勝負は俺の勝ち、それも速攻っ……！」

そう言っつてルクーツアの胸元を掴もうとした時、風が吹く。

「……残念ですが、少しばかりお休みですよ？」

そして柔らかく背中を押された、小型扱いの加藤はそれだけで致命傷扱いとなるのだ。

悔しそうにしながらも、足を止める加藤にデイリーが手を振って呼ぶ。

「……なんだよ、デイリー。もう少しだったんだけどなあ……あれはいけたと思っただね、いやエリアスールさんめっ」

愚痴を言いながらデイリーの傍へと歩みよる加藤。

そこに小声でデイリーは教えを与える、何故今回はこちらへと回ったのかという事を知らせたのだ。

「ほっほっほ、小僧。先の鬼ごっこで重しを背負わせたのは何故か覚えておるか？　……疲労困憊、そうでなくとも全力を出し切れぬ状況を想定して、という事じゃったろう？」

デイリーは、最初から丁寧に教える。

加藤も何も言わずにただただ聞いている、こういった教えを受ける時は加藤は実に大人しいのだ。

「うん……んで、今回は逆って事だろっ？」

「そうではない……。違うのじゃ、全く同じじゃよ。今回もそれと同じよ、お主に取ってルクーツアに触れる事とは小型の群れを倒す事に値する。そしてそこに至るまでに先のように防がれ、触れられればお主は死ぬという事じゃの？まあ、エリ嬢は熟練の猛者、未だ敵しい相手じゃし、レイラお嬢様らは体力が十全じゃ。今回のようにある程度は仕方あるまいが、それでも食らって良いものではない、分かるな？」

「つまり、食らわないようにしつつ、ルクーツアをつて感じか？」

言葉では、いまいち分かったように感じられないが、その顔にはどうすべきか理解した色が浮かんでいる。

それを見たデイリーは、更に一言付け加えた。

「うむうむ、ああそうじゃ……。他の嬢達を倒しても構わんぞ？ただし、最初に……なんじゃったかの？」

ほれ、額を突くやつ、あれをした後でのみ許そう」

「デコピンな？ それをしてからじゃないと、触れちゃ、倒しちゃダメって事か。よし、分かった！ まずは……レイラだな」

そう言うと、加藤はゆっくりとルクーツア達の元へと進む。

だが、視線はレイラを捕らえて離さない、見られている事に気がついたのだろう。

レイラもまた腰を低くして、いつでも動ける体制を整えている。

「おつ、来るのかな？ さっきは驚いちゃったけど、もう無いよっ」

「いや、本当に速かったね？ 君が強くなっているのは分かっている」

だが、対峙してみると良く分かる。驚いたよ、だがレイラ様と言っている通り、次は油断しないからね？」

そう口々に加藤へと告げる彼女達を無視するかのように、ゆっくりと歩を進める。

そして動く、静かな歩みから無なる風へと。

「っ!？」

「くっ!」

加藤は言っていた通り、レイラに迫った。

仮にも達人に叩かれ、熱せられ、鍛えられた加藤なのだ、その速度は元々の素質と相まって瞬間的なものであればエリアスールに迫るものがある。

だが、その行く手を遮る形で更に疾い風が現れる、エリアスールだ。

「させませんよっ」

加藤はエリアスールの直前まで最高速度を維持しながら、突如として足を地面に突き刺す。止まった訳ではない、軸として、そのまま姿勢を低くしつつ踊るように回って回避したのだ。

普通であれば何処か痛めてしまいかねない行動、しかし日々の仕事という鍛錬は達人が傍にいて行われてきたものだ、様々なヒトに教えられたモノを積み上げてきたモノなのだ。そして加藤は自分の長所を、これだけは誰にも負けないと言える、言いたいと願えるモノがあるのだ、それを信頼し、そしてそれは応えた。

エリアスールの認識では鍛錬と言えども遊びの面が強いものだった、故に油断していた、あっさりと抜かれてしまう。いや、油断し

ていなくとも、初見では結果は変わらなかっただろう、それほどの速度ある体技だ。

「しまっ……」

エリアスールに言えたのは、その言葉だけ、そして加藤はレイラを捉える。

レイラは後ろへと下がって、しまっていた。その事に加藤は笑みを浮かべる、だが狩人は彼女達だけでは無いのだ。

アーダの鋭い突きが、加藤の目の前を突き抜けたのはその時だ。

しかし加藤は更に笑みを深めたのだ。

「アーダさんが教えてくれたんだぞ？ 周りを良く見て、そしてイメージしろってな……」

加藤はアーダが更に遮ってくる事を予知していたように、その腕を掴む。

そして指に力を溜めた時、軽い音が鳴った。

「……は？」

アーダはそうされた意味が分からないのだろう。

その場で立ち止まってしまっ、そしてそれは致命的だった。

加藤はいとも容易く懐に入り込み、止めの一撃となる身体に手を触れるという攻撃を行おうとしたその時、身体に衝撃が走る。

「……っえ！？」

レイラだ、彼女は慌ててしまったのか、かなりの力を籠めて攻撃

してしまっていた、そして加藤は狙っていた肩ではない、そうでは無い場所に触れた。

「……あ」

「……あれ？」

その瞬間、レイラとエリアスールは頬を引き攣らせる。

当の本人達は、呆然としながら、目を合わせていた、言葉は無い。

「カ、カトーさん！　いくら鍛錬と言えどもそれはいけませんよっ
！！」

その言葉で再び鼓動が始まったかのように、加藤は動きアードから離れた。面白い事に、先ほどよりも速い、もしかするとエリアスール以上の風となっていたかもしれない。

「……いやっ、あれはレイラがだっ！？」

「それでも、なんですぐに離れないのっ！　ヒロのエッチ！」

「ちっ違！？　その、なんかアレなんだよ！　そのなんていうかさっ！」

好意を持つ女性に触れた事が、そして少々拙い事をしてしまったからだろうか。

加藤の言葉は意味を紡げないでいた。その様子を見た大人達は、ため息をつきつつ、遊びを入れた鍛錬の終了を報せた。

「まったく、散々な目に会ったよ……」

あの後、ニーナとエイラが休んでいた場へと戻った時、エイラが怒気をこれでもかと言う程に滾らせながら甲高い声で叱ってきたのだ。

それを合図にひとまず落ち着いていたレイラとエリアスールも参戦する。ニーナは相槌を打ちながらも、時折鋭い指摘で加藤を痛めつけるのを楽しんでいたのだ。

そして、その言葉による戦争は加藤の圧倒的大敗を以って幕を閉じた。悲しい事に鍛錬としてやっていた鬼ごっこよりも長い時間拘束されたのである。

「はっはっは、そう言うな。それにそういう事をしたという事だろ
うよ」

そう言いながらルクーツアは慰めとは言えない言葉を掛ける。
そんな事を言いながら歩くのは、彼らは屋敷から我が家、『砂漠の水亭』へと帰宅している道中だ。

「まったくさー、いや、でも……うん」

「カトー、オレはどんな事があるうともお前の味方だとは言えるが、
犯罪をするなら手は貸さんぞ？」

ルクーツアは、何故か頬を染め始めた加藤を見てそう断言する。

「なんでだよっ！　まったく、そういうんじゃないっての」

「ふっ、お前は良くオレの顔をそのように言うではないか。そういう顔をお前もしていた、それだけのことさ」

「あーはいはい、もういいよ、この話題はさっ。……それより、風呂屋いかな？ 久しぶりに入りたいわ、俺」

あの事を振り払うかのように、手を大げさに振りつつも加藤は話を変えた。

ルクーツアはそれに頷きを以って答える。

「ふむ、確かに少々肌寒さも感じるからな……。よし、そうするとするか」

「帰りにラルになんか土産でも買っていくかね？ あー、そういう服が欲しいとか言ってたなあ、どうしよ何が良いのかな？ ってか、これは帰りには厳しいか」

ラルという獣人の少女は、加藤が領主の仕事で街を留守にして、戻ってきてからと言うもの、何かと加藤の傍に居ようとするようになっていたのだ。

「はっはっは、お前も随分、兄となっているじゃないか。いや、良い事だとは思うがな？ 経験則から言えば、ある程度で自制することだ……、特に相手はラル嬢だしな」

ルクーツアは、少しばかり前の事を思い出しているのか。

目を瞑りながら、ゆっくりと、かみ締めるように頷きを繰り返している。

「何を真剣な面して言ってるんだ？ あー、どうしよ、レイラ達に頼みたいけど、さっきのがなあ」

そう、男2人は語らいながら、日が落ち始めた事で、灯り始めた優しさによって姿を現した包み込むような暖色の絨毯を歩いていくのだった。

「へえ、最前線の街とはいえ、……いや、だからこそその充実なのかな？」

「そ、そうなのか？ てかアレだな、付き合っただけで貰って助かったよ。……あー、うん。昨日は悪かった」

その言葉を交わしているのは1組の男と女。

場所は最前線の街、サックルにある服飾店であり、どちらかと言えば子供向けの見本が飾られている区画だった。

「ん？……ああ、アレかい？ 鍛錬の最中での事だよ、それに良い機会だったと思うしね」

そう、気にした様子を見せずに、いや寧ろ嬉しそうに言う女はアーダ・バツビ、竜人であり、短く揃えられた銀髪が美しいヒトだ。

その言葉を受けて、若干焦った様子を見せた男は、なんの取り得も無かった、しかしヒトとして確かに成長しつつある加藤である。

その加藤は若干クセのある黒髪を乱雑に掻く事でその感情を紛らわせつつ、一言言っ。

「……良い機会、ねえ。ああ、ラルは可愛いのが良いって言ったんだよね。お……これなんか、どうかな？」

そう言って目に着けた見本は、実に簡素なものである、白い無地のワンピースタイプだった。

それを見たアーダは顎に手を当てて考え込む。

「うーん、今の季節それだと少々肌寒い気がするね。それに合わせて、これを羽織らせると……あぁ、うん良い、色合いも悪くないね」

そう言って、可憐な服に重なるように持ってきたもう一つの見本は敵ついいものだ。

何故か隣の大人用、それもどちらかと言えば男性風の革製の上着、ルクーツアの愛用しているものに似ているジャケットのようなものだった。

「……いや、そりゃ白と黒だから、色合いは悪くないとも思っよ？
うん、……シンプルだしな。でもさぁ……」

「ん、これはダメだったかい？ 私としては、この程度のだね……」

どちらも微妙にセンスが無かったようで、買い物は難航の一途を辿る。

結局、長い間悩みぬいた末に店員に聞くという結論に至り、その店員の選択は両者ともに納得できるものだった。

「いやー、良い買い物した気がする！ これならラルも喜んでくれるだろうなぁ……」

ルクーツアが言っていたように、加藤は既にラルを自分の妹同然に扱っていた。

最初の印象もあつたのだろうが、最近の少女は可愛くて仕方が無

いのだろう、実に浮かれていた。

仮にも好意を抱く女性と隣合わせに歩いているというのに、若干そこへ対する意識が足りない男である。

しかし、その隣の女性は気にした風も無く、それに同意を返す。

「ああ、確かに実に可愛らしい服だったね。丁度良い大きさのものがあつたのも運が良い。普通は予約を入れて1週間ほどは待たなくてはならないからね？」

この世界にも服や下着、その他雑貨などを多々を取り扱う店はある。

武具だけではなく、それらもあるのだ。

何故そのようなものがとえば、これもまた英雄の遺したものが発端である。

曰く、英雄達は寒さを凌ぐだけではなく、それさえも娯楽としていた。

教えられた事では無い、見て感じた事である。

英雄は憧れであるからして、それを真似たいと昔から思われてきた事が、現状の結果であつた。

とはいえ、やはり未だ量産とはいかない、今回の店のように見本を飾り、それを注文するという形だったのだ。

だが今回は見本が少々汚れてきたために、新しいものに変えようと新しく作られていたのだ。

それを売って貰えた、確かに加藤は実に運が良いと言えるだろう。

「だなあ、まあ良かった。まさかそんなに時間が掛かるなんて知らなかったしさ」

「……そうか。まあ、服飾を買うなどそうそう無いからね。まあ、今度からは気を付けると良い、何があるかは分からないからね？」

そう語り合いながら、街を歩く。

その途中、加藤がある店を見つけた、ルクーツアと以前訪れた甘味処である。

「丁度小腹も空いてきたし、なんか食って行く？ 付き合って貰ったんだし、俺が奢るぞっ！」

今回のラルへの贈り物である服は加藤が働いて得た賃金で払われていた。

今までのようにルクーツアからのお小遣いではないのだ、が。その所持金は全てルクーツアから必要な分だけ受け取ったような形だ、というのも全てルクーツアが管理しているためだった。

いまいち金銭感覚が未だ得られていないのが原因である。まだまだ子供からは抜け出す日は遠い加藤だ。

「そうかい？ それじゃあ、お言葉に甘えさせて貰うよ」

そうアードは笑いつつ喜んで申し出を受けて、加藤と2人、店の中へと入っていった。

そして暫くして、加藤達は注文した甘味を味わっていた。

「おー、来た来た！ やっぱこれは時々食べたくなるよなあ、餡蜜な感じが良いんだよな」

「焼き菓子はまだ好きではないのかい？ あれもなかなか味わい深いと思うんだけどね」

そう言いながらアードはパンケーキに似たものを食べていた。そこに色とりどりの果物が載せられており、見た目も華やかだ。

「あれも嫌いじゃないけど、やっぱりこういうのが好きかな？ なんていうか、うん。 甘すぎないのが良いよ」

加藤は、言っている通りのもの、餡子に似た仄かな甘みがあるものと、コメからだからだろうか、何処かおはぎに似た食感の餅などに蜜がかけられているだけのシンプルなものだ。

「ははっ、そうかい。 それにしても昨日の鍛錬での、あの動き……。 あれは凄かったね、次は大丈夫と思っていたのに、反応が遅れてしまった。 あれに対応できたエリアスール殿は流石だね」

「エリアスールさんに殿？ それって男のヒトに付けるもんじゃなの？」

アーダの話とはあまり関係の無い、素朴な疑問をぶつける。

あの動きに着いていけたエリアスールを尊敬した事の意味に気付いていない加藤に対して苦笑いを浮かべつつ、彼女は質問に答えを返す。

「いや、そうと言う訳ではないよ。 勿論、そういった響きがあるのは否定しないけどね？ 私の解釈では殿というのはだね……」

などと、下らない事を話のタネに会話を楽しんでいた。

そして会話と甘味を楽しんだ後、会計を済ませた彼らはまた街の道を歩きだした。

まだ明るいとは言え、日は徐々に傾きつつある、そんな時間だ。

「結構な時間、ここにいたみたいだね。 いや、楽しかったので時間が経つのが早く感じるよ」

「そ、そうか？ まあ、でも時間はあるよな。あー、でも買い物終わったし、アーダは何かしたい事とかあるのか？」

「……そうだね、ああ。もう我慢すべきでは無いのかもしれない……。いや、我慢と言うと少し語弊があるかな？」

そう、アーダには珍しく独り言を言い始める。
その様子に驚きながらも、加藤は声をもう一度、掛けた。

「えーっと、なんかあるのか？ あっ、でも高い買い物とかは流石に簡便なっ！ あんま持ってきて……」

やはり、少々情けない所がある男な加藤だが、アーダはその言葉を遮る形で言葉を発する。

中身に籠められた感情のためだろうか、静かな声なのに、どこか大きな声に聞こえる。

「いや、そういうものは必要ない。だけど、これは高い買い物だろうね、ああ……今の私に取っては何よりも高い買い物と言えるだろう」

アーダはそう言いつつも、空を仰ぐ。

ちらりと見えた顔には、悩んでいるようにも、晴れ晴れとしているようにも見えた。

「……あー、そうなのか。まあ、そういう事なら付き合っけどもさ、んで？ その買い物ってのはなんなんだ？ どの店に売ってるんだ？」

そんな姿を見せたというのに、いつもと変わらない加藤を見たアーダは笑い声を上げた。

彼女らしくない、豪快とすら言えるものを、大きく、上げたのだ。

「あつはっは、いや。何処の店にも売っていないよ、それこそ国にだって売ってやしないものさっ」

「はあ……？ んじゃ、何処で買うんだよ。探すのは良いけど、どんなのか教えてくれないと探しようつてのが……」

アーダの言葉の意味をそのまま受け取り、更に疑問を大きくする加藤。

そして、そんな彼へと、アーダは軽く、簡単に言う。

そんな風に言えた事に、一番驚いているのは、他ならぬアーダ自身だった。

「ああ……違う、君に売って貰うんだよ。いや、ある意味では君に買って貰うというべきかな？ ……うん、そうだね。そういう感じだよ」

「それって……あ」

その意味を詳しく聞こうとした時だ。

加藤はここが、メインストリートの真ん中である事に今更ながら気付く。

そんな加藤の様子を見て、アーダも気が付いたようだ、少し照れたように提案をする。

「んっ、そうだな……。どうせだ……。屋敷へ戻ろうじゃないか？」

「屋敷？　つてか俺の場合は戻るじゃなくて、行……つておい！」
アーダの提案に、いちいちと屁理屈を述べようとしている加藤の腕を彼女は引く。

一刻も早く、その買い物をしたいかのよう。
その品物が楽しみで、楽しみで仕方のない子供のように屋敷へ急ぐ。

そして、加藤とアーダは領主の屋敷へと辿り着き、アーダに与えられている部屋の中にいた。

（やべえええええつ、どうしよう！？　え、いやいや、馬鹿か俺はっ！　そうだ、慌てるな、これはだなっ）

「どうしたんだい？　赤くなったり青くなったり……。気分が悪いようなら、残念だが後日でも私は構わな……」

加藤は、アーダの部屋にある、椅子に腰掛けており、アーダは寝台の上だ。

そして声を掛けられた加藤は焦りながらも、意味ある言葉を紡いで否定した。

「ああ、いや！　うん、大丈夫だ。ちょっと急いで来たもんだから、それでだよ……うん、大丈夫だ」

「そうか……。それで、なんだが……、いや直前になると決意した

とは言え難しいものだな」

アーダはベッドの上に座り込んだまま、なにやら思案顔だ。そして加藤は逆に何も考えまいと必死になっていた。しばらく、なにも無い時間が過ぎる、1時間か、1秒か加藤には分からないが、それが過ぎ去った時、アーダが口を開く。

「先日、ああ鍛錬の時だよ。あの時、君がした事、見せた反応……あれで、私は決心したよ、せざるを得なかった。もつと言えば、君を見ていたある時から、常にそう思っていたんだが……」

「え、あ。 っと、何を、なんだ？」

アーダは思った事をそのまま口に出しているようだ、加藤の言葉を無視するわけでは無いのだろうが、そのまま言葉を続けた。

「何を、か。 君もあの時分かっていたんだろう？ 私の口から言わなくとも……いいようなものだと思うのだけどね」

（あの時？ アーダとはそれなりに過ごしてきたけど……。どの時だ、やっべマジで分からねえ、いやでも、俺から言うって事はだつ！）

「そ、そうか……。分かったよ、それじゃあ……」

加藤は、アーダの言葉の意味を自分なりに理解した。そして大きく、息を吸い込み、溜める。自分の中にある色々なものを籠めるかのようにな。

だが、その籠めた、溜めたものは無為に加藤の中から流れる事になる。

それを口に、言葉に乗せる事なく、ただの吐息となったため、アーダが言ってしまったためだ。

「だが、私から言うべきなのだろう。これはそういうものだ。ああ、そっだよ……、私は……男、さ」

「っはあ、言うぞ……って、へ？」

アーダの告白を、確かに加藤は受け取った。

しかし、思い描いていた告白と、アーダの告白は若干意味が違った。

「どうしたんだい？ あの時、胸部を触れた時に気付いていたんだろう？ 女性のソレでは無い事に、ね。」

あっはっはっは、いや……楽になったよ……」

アーダは、実に楽しそうに、喜ばしく声を上げる。

加藤は、実にたのしそうに、うれしそうな色を作る。

「あ、あー……ん、おおよ！ なんか違うなーって思ったんだよな！ けど、まさか聞くわけにもいかなくてさ、いや！ なんかスっとしたよー！」

加藤は声ではアーダ、いやアージェに合わせて楽しげだ。

しかしアージェが目を瞑って、上を仰ぐように語るのをいい事に実に死んだ魚のような目と、顔つきだ。

しかし、真実を知っている者であれば、誰も咎める事は出来ないだろう。

（女の子の胸なんて触った事ねえよ！ 分からねえっての！ って

か男!? 俺の初恋ってこれで終わったのか? ってか本当に何かスつとしちゃったよ、主に俺の大事な何かが終わった事にっ!」

「私はね、本当はここに来る者では無かったんだよ。本当の私の名前はアージエ、そしてアーダは私の姉の名だ……。分かったかと思っけど、本当は姉が来る予定だったのさ」

アージエは、告白を終えたからだろうか。

性別を偽っていた理由を順序だてて、話始めた。

そして、その説明にある1つの単語で、加藤という魚は息を吹き返す。

今、まさに水の中へと踊りながら入ろうとしていた。

(待てっ! 姉、だと!? アーダ、いやアージエと同じような感じで、本当の女性!? こ、これは新たな恋の予感がっ……。そう、これは本当の恋のための試練っ!)

「だが、姉は妊娠していたんだよ、その事で問題になってしまったね。勘当処分になった、まあ現実としては姉を守るための苦肉の策なのだがね? ああ、姉はその後は幸せに暮らしているよ、若干生活の質は落ちただろうが、姉は幸せだと言っていた、それでいいんだろうっ」

しかし、水へ飛び込んだはずが、地面へと叩きつけられる。

今度こそ致命傷だろう、そして徐々に先ほどのようになっていく、その最中では様々な変化が訪れようとしていた。

(終わった!? 俺の本当の恋の予定が一瞬で終わった!?)

「が、その時は既にこの話は姉が行くという事で話は終わっていた

んだ。そう簡単に伝えられる事ではない、ましてこちらの一方的な問題のためならば余計にね。だけど、運よく、と言うべきか悪くと言うべきか……。その姉とデイリー殿が会っていたらしくてね、少なくともサツクル側、一番この話で力がある勢力は了承してくれたんだよ。他の所へも話は送る、そこは心配いらないとね？ まああの本人達には通達されていなかったようだけど。……ただ、そのための条件がそれなり以上、姉と同程度の知識のある者、それも女性をとね？」

（おいしい！？ デイリー知ってたのかよ！？ くっそ、言えよ！ てか俺言ったよな？ 恋したって、その時に言えよ……マジで）

「が、それは居なかった。いや、いるんだが、国を離れない地位のヒトばかり。そして私に目が向いたって所さ、昔から姉に似ていると言われていてね？ ちょっと女性の格好をすれば、遠目には分からないほど、そして前にも言ったと思うけど、武はあまり得意ではないが、智には自信があったんだよ。そして、こう、その……女性のフリをして来たわけなんだ」

（……なるほど、デイリーはアージェが男つてのは知らなかったのか。というか……あー、やっぱり似てるんだ……。もうアージェでも良い気が、って俺の馬鹿っ！ 正気になれ、いいか、俺はそっちじゃねえ……絶対にだ！ 女の子！ 俺は女が良い！ そうだる俺！？ ……っく、世の中のソッチ系に逝ってしまった奴らは、俺と同じ境遇だったのか！？）

「……？ どうかしたのかい、さっきから頭を振ったりしているが……」

加藤の様子が今まで目を瞑りながら話していたアージェは、目を

見開いた今。

初めて目にしたのだ、流石に驚いている。

その心配そうに掛けられた声に、少しばかり遅れて加藤は返事をする。

「え？ ああ、いやなんでもない、ちよつとした敵が来てな？ いや、衰弱していた今の俺には強敵だったがなんとか勝てたよ……ふう、これも日々の弛まぬ鍛錬のおかげ、か。自分の弱さを知れば、どんな敵にも負けない……ああ、俺はまた1つ強くなったんだな」

唐突に語りだした加藤に、アージエは困惑気味だ。

しかし、話の続きだったため、気を逸らす意味でも続ける事を選んだようだ。

「えつ、つと……、どんな敵なのかは分からないけど、話を続けるよ。最初はね、こんなに他の女性達と仲良くなるとは思っていなかった……。多少の不安はあったけれど、私に取ってはバレル事の恐怖が勝っていたからね？ だが、レイラ様やエイラ様……それに二人様の不安そうな顔を見ていると、何も出来ない自分がなんだか情けなく思えてきてね。だけど、言う訳にもいかない、声を掛けられなかった。

そこに君だ、いや……本当に助かったよ。そして、思ってしまった……もしも偽りでなければ、君と同じく、私も本来の性、男性として振舞っていたら、とね」

その話は、加藤としても無視できない要素があった。

そのおかげか、どうやら常の彼に戻りつつあるようだ、加藤は言葉を話す。

「あー、そうか？ まあ、俺は別に何もしていないと思うけどな。

まあ……アーダが、アージエが男つてのは分かった……ああ、大丈夫だ。でも、俺にそれを教えて良かったのか？ いや、俺としては後一步遅かったら敵に負けていたかもしれない悪寒がするから、いいんだけどさ」

「敵に……負けそうだったのかい？ いや、まあそれはいいとしよう、そして答えだが。」

ああ、問題ないよ………というのもデイリー様やルクーツア様は確実では無いだろうけど、薄々と勘付いていたようだからね。最初に会った時から、どこかそういう感じだったから………」

(くっそ！ やっぱ知ってたんじゃねえかつ！！ ……はあ、もういい、これはもういいんだ、それがいいんだ)

「って事は、そうだってデイリー達は分かっているのに放置して事かなるほどなあ、だからバラしてもバラさなくてもアージエの自由って捉えたわけか」

「ああ、まあそういう感じだね。正直に言えば、そろそろ限界を感じていたんだよ」

それが切欠を与えたとアージエは言う。

そして更に加えた言葉に、ふざけた風に、しかし根底には真剣な響きを持たせて加藤が尋ねる。

「……女装してるって事にか？」

「いいや、ああ………それもあるにはあるが。それ以上に、他の女性達が、特にレイラ様がね………」。

水浴びなり、風呂なり、一緒に寝ようなり誘ってきてね？ いつ

までも、断り続けるのは難しくなってきたんだよ」

その答えを聞いた加藤は、これまでの感情を胡散させるかのように叫ぶ。

「てめえ！ 皆の裸を見れるかもしれない提案だつて！？ 羨ましいっ！ ……あ、レイラとニーナはいいや、どうでもいいや。どんなに頑張ってもラルと同じく妹にしか見えないからな」

が、すぐに収まった。顔に相手の顔色を伺う色が見える、冗談のつもりだったようだ。

言ってから恥ずかしくなったのか付け足しをするが、そのせいで冗談には聞こえなくなっているのが残念だ。

普段、男にしか、ルクーツアやデイリーなどにしか見せない所を見せたためだろう。

特にほんの少し前までは、少々特別な感情を抱いていたアージエがいつもいた女性達の前ではそこが鳴りを潜めていたため、余計にアージエは驚きをしめす。

「……君は、そんなヒトだったのかい？ どうも彼女達と触れ合っていて反応が薄かったもので、そこまで興味があるとは思って居なかったけど。だが、うん……男たるものそういうものであるべきか」

だが、偽っていた自分では無くなった為か、冗談と受け取ったかは定かでは無いが、その冗談はすぐに受け入れられた。

「まあ、俺にバラしたのは良い……。そうなったら俺がカバー出来るから、まあソレもなんとかなるかもしれない。だけどさ？ 皆にも、アージエの、お前の口から言った方が良いと思う」

完全に、常の加藤へと戻ったのだろう。

やけに真剣にそう語りかけた、その変化に気付いたのかアージエは軽く目を見開いて頷いた。

「……まあ、そうだな。ふう、姉の真似をずっとしていたからかな……どうも口調が堅くなりやすい。

そうだよな、私も……いや僕もそう思う。口調が安定しないな……。ああ……ただ、やはり同姓にバラすのとは勝手が違って、その……どうだろうか？ 一緒に行ってくれないかい？ 今ならば皆屋敷にいるだろうから……」

（ああ、なんだアージエはこんな奴だったのか。なんての？ ヘタレ？ いや、それは俺か……。姉は剛毅だけど、こいつは臆病って感じなのかな。まっ、女だろうが男だろうが、アーダだろうが、アージエだろうが俺の友達に変わりは無いよな……）

しばしの沈黙の後、加藤は軽い、気軽な声で了承を返す。

当然の事だと言うかのように、確かに色々な面で彼は強くなったのかもしれない。

「ふう……なんだ、アーダの時は凜々しい感じだったのに、アージエになった途端にそれか？ しゃーないなあ、俺がバシつと言って、ってそれじゃダメか。まあ、一緒に行く程度言われなくてもやるさ」

「そ、そうかい？ いや、ありがとう！ それと、竜人は基本的に女性の方が強いんだよ……別に僕だけがこうなわけじゃないんだよ？ 父上は武術の腕はかなりの物だ、母上にも勝てる、けど勝てないって感じだからね？」

アージエは何故か、今それを言う。しかし結局は弱い面がある事を肯定している言葉だという事に彼は気付かない。

そして加藤はあっさりとそれを否定し、アージエの肩は下がる。

「いや、夫婦ってそういうもんじゃないか？ 俺は人間だけど、父さんもそんな感じだったしな」

「……え、そうなのかい？ 父上はそう言っていたんだが……。あつ、それは今は置いて置こう、それじゃあ……行こう」

そして、扉の方へと歩いていく、加藤もそれに倣う。

「屋敷にいるっても、何処にいるかね？」

「……うん、それじゃあまずは広間にでも行ってみようか」

そんな事を言いながら、広間へと足を運ぶ。

運が良いのか悪いのか、広間には女性達が全員揃っていた。

そしてデイリー、ルクーツアに何故か領主であるロレンまでと勢揃いだ。

「ほっほっほ、どうしたんじゃ？ そのような思いつめた顔をして、のうルクーツア？」

「……ああ、どうしたんだ？」

広間へとやって来たアージエ、いやこの場では未だアーダと言っべきか。

彼女と加藤が入ってきた事にいち早く反応を寄越すのは案の定デイリーとルクーツアだ。

「ん？ ほんとだ、どうしたのアーダさん。あつ、分かった！ お腹空いたのかな？ お菓子あるよー」

「うんうん、やっぱりお菓子は良いよねえ……。でもボク、お菓子でお腹がいっぱいになってきたかも……」

そう、的外れな事を白々しく言うのはこの場で言えば少女達、レイラとニーナだ。

そして、チエスに似た、遊戯を楽しんでいたエリアスールとエイラも盤から目を上げて、アーダの方を見て、問う。

「あら？ アーダさんに……カトウ？ アーダさんは良いとしても、何故カトウが？ というかカトウ、昨日の今日で良くもまあ、アーダさんを誘えましたわね？」

「まあ、あれは鍛錬中の事です……。しかしアーダさん、すいません、私が行ければ良かったのですが、朝は少々用事がありました……」

「まだ言うかつ！ ってかエリアスールさんは俺を擁護してるつもりなの？ なんか地味に怒ってない？ なんか言葉の節々にそんなのを……」

「いいえ？ 怒ってないませんよ。ただ、あの時は、あまり良い感情を抱けなかったのは事実ですが、ね」

女性達はそう言う。　アードについてよりも加藤に対して反応しているようだ。

特にエイラはやはり加藤に食って掛かっていた。

「いや、今日は皆さんに聞いて欲しい事があってね……。……
……、聞いてくれるかい？」

女性達の反応を見てから、アードは、アージェとして言葉を発するため頼み込む。

そして、デイリーとルクーツア、最後にロレンに目線を送る。
彼らはゆっくりと頷いた、ルクーツアだけは少々鈍いものだったが。

「ん、どうしたの？　そんな改まったりしてー。あつ、ボク達になんかプレゼントだったり？　買い物に行ってたらしいし」

「あはは、いや残念ながら違うよ。まあ、今度買って来ないといけないかな、お詫びも兼ねて。それで聞いて欲しい事んだけど、あー……」

しかし、いつまで経ってもアードはその後を言わない、言えない。見かねた加藤が口を開いて、先を促す。

「……ほら、言うんだろう？　皆もちゃんと聞けよ？　それとエイラ、お前は今から暫く口を閉じとけ、な」

「なっ！？　なんでわたくしにだけっ……。っ、いいでしょう。カトウであればそうはしません、言うのはアードさんですしね」

エイラはそう言い、更に続けようとしたが、何かに気付いたかのように口を閉ざす事を了承する。

その様子を見たアーダは、ようやくという感じで伝えた。

「いや、すまないね。んっ、その……驚かないで、つてのは無理かな。うん、そのだね、私は、いや僕はその……アーダじゃないんだ！」

「ちげーよっ！ そうだけどそうじゃねーよ！なんでここに来てそうなるっ！ちゃんと見え、こらっ！」

拳をこれでもかと強く握るほど緊張して出した言葉。

だが微妙に本来のものとは異なっていた、加藤は我慢できずにアーダに突っ込みを入れる。

「うわっ、そ、そんなに頭を押さえないでくれよっ！？ いててっ、君の腕力は馬鹿にできないんだよ？ その所を考えてだね？ ……あっ。いや、その……」

その事に抵抗しようとしたアーダ。

だが、頭を上げるとデイリーと目が合ってしまった。一気に緊張を走らせる。

「ほれ、さっさと言わんか」

デイリーはあっさりと言放つ。

そして、アーダは流れのままに、あっさりとし、しかし重く口を開いた。

「あ、はい。その、僕はアーダじゃない、本当はアーシェって言う

んだ。それで名前で気付いたかもしれないけど、女性じゃない、本当は男なんだ…。今まで黙っていて済まなかった!」

そう、溜めに溜めて、アーダはアージエになる。

だが、驚いた事に女性の反応は薄かった、本当に薄い。

「ほっほっほ、そうかそうか。よーやっと言えたか、うむうむ」

「ふえー、本当に男のヒトだったんだー。女のヒトにしか見えなかったけど、うん。そう言われると男のヒトに見えるねえ」

「ボクとしてはまだ信じられないけどねえ……」

「ふふっ、そうですね」

「と、いうよりもアーダさん？ いえ、アージエさん。その、胸の詰め物は取った方がよろしいのではなくて？」

デイリーが頷いたのを皮切りに、女性達が口々に反応を示した。

しかし、加藤達が予想していた反応とは大きく異なっていた、不思議に思った加藤はルクーツァとロレンへと目を向けた。

「いやね、私達はなんとなく察せていたんだよ。そこで、カトー君と2人で出掛け、そして話し込んでいただろう？ そろそろかな、と思ってね？ 先に皆に教えたのさ。今、大事なのはレイラ達がいる事ではなく、それをアージエ君が自分から言う事だと思ったからね？」

そう苦笑いしつつ、ロレンは言う。

「……まあ、そういう訳だ。オレ達は、そうだろうとは思っていたが、確証が無かったんでな。言つに言えなかったが、一応な」

ルクーツアは加藤へと憐憫の眼差しを向けて、そう小さく言った。そんな様子の面々に、アージエは膝を付きそうなほど脱力して弱弱しく言う。

「あ、ははっ、は……。領主様方だけでなく、皆さんも知っていたんですか、こんなに緊張した僕って……」

そのアージエに、エリアスールが訂正するように言葉を掛けた。

「いえ、知ったと言つても本当について先程ですよ？ その時は私含め、皆かなり驚きました……。本当に男性だったんですね」

「まったく、一応わたくしもそれなりにこういった事について理解はありますが……。これがカトウであったら打ち首モノですわよ？ 以後気を付けて欲しいですわね」

「なんで比較が俺なんだよ、そして打ち首ってこえーよ。あと、一応言うけど、俺に女装趣味はねえ、ないからな？」

エイラは、仮にも上流階級の者だ。

流石に分からなかったようだが、ある程度の理解はあるようで、彼女には珍しく責めるような事は言わない。

が、加藤に対して、一言余計に付け加える。

「ええ、意外と似合うかもよ？ アーダさん、じゃなかったアージエさんの借りてみたら？ 美人さんになっちゃっかも！」

「あははっ、いいねいいね！ ボクも見てみたいかもっ、ヒロの女装！」

レイラとニーナは面白そうにそう笑い、加藤は声を上げて言う。

「誰がやるかっ！ そんな事を言うお前らには罰を下すっ！ ほら、その菓子を寄越せっ！」

一番驚かれるだろうと、或いは非難すら覚悟していた相手である女性達は、アージェの事を忘れたかのように、加藤を中心にして騒ぎ出した。

置いていかれた形のアージェに、デイリー達が言葉を掛けた。

「ほっほっほ、まあそんなものじゃよ。ニーナ嬢は驚いておったよ。うだが、他の者はすぐに落ち着いた。もしかすると、女性だから気付く些細な違いがあったのかもしれないのう」

「まあ、本来ならば咎めるべきなんだろうがね？ 私は知っての通り、こんな領主なのでね、その程度では顔を顰めたりはしないんだ。まあ、隠し続けているようであれば、話は変わったかもしれないがね？」

「オレとしては、なんとも言えないのだがな？ せめてあいつが…いや、これで良かったのかもしれない」

大人は口々にそう言う。

共通しているのは、隠していた事を強く咎める色が無いという事だろう。

若干、それとは違う色をルクーツアは持っていたが。

「ですが、その……。姉の事でご迷惑を掛けた上に、このような事までしてしまつて……。本当になんと言つていいのか……」

「ほっほっほ。確かにのう、じゃが例えお主以外に適役がおつたとしても、お主も着ていたのじゃぞ？　そう、お主の父上に頼まれておつたからのう」

そう、デイリーは笑いつつも、1つの真実を教える。

「え、そんなんですか？　そんな事、父上にも母上にも聞かされていなかったのですが……」

「聡い君であるならば、既に気が付いているだろう？　君達が任せられた、新たなる街についての意見を私達へと届け、そして君らの国の意見を通させる……。というのは偽りの事である、とね？」

大人達は、問う形を取っているが、確認の面が強いように感じる。

「ええ……。気が付いたのは面会させて頂いた時です。いくら緊張した、僕らのような者であろうと、普通はすぐに下げたりはしません。そうだとしても、あれから会話はあつても、それはありませんでしたので」

「ははっ、まあ私も少し威張りすぎていたからね。怯えた君らは見たくなかった、しかし……。今ならば心配あるまい。今度、君の意見も聞いてみたいね」

ロレンの言葉に、アージェは嬉しそうに、ここへ来て初めての彼自身の笑みを以って応えたのだ。

「ついでに言えば、今回のお主らを送ってきたのは全て訳ありよ……。まあ、お主だけは少々、段取りと異なってはあったかのう？」

そして、デイリーは更に言葉を重ねた。アージエは反応を寄越す。そして、いくつか思いつく事があるのだらう、それを返した。

「僕達が、ああニーナさんは確かにそうですね。ですが……。エイラさんも？ 何かあるのでしょうか？」

「いや、もう無いよ？ 彼女の問題はもう既に解決しているからね？ ほら、見てみなよ……。実に楽しそうな笑みじゃないか、そうは思わないかい？」

ロレンは、簡素に答えを言う。しかし足りなかったようだ、アージエはその疑問を解決するために重ねて問う。

「ええ……。そうですね。ですが、それが？」

「エイラ嬢だけは、本当にちょっとした事よ。気にする事ではない、ただ少々、天狗になっていただけというか……。それで色々と心配した親が、という訳じゃな」

「天狗？ ですが、彼女はそういう……」

「優れた者、それも地位の高い親を持つエイラ嬢が、少しでもそういった類の事を言えば……。まあ、エイラ嬢も頑固な所があるからな、そして事実として優れた娘だ。親がこの機会を知れば送りたいもなる、そんな程度の事だ」

ルクーツアは、少々硬い口調でアージエにそう教えた。

同じく優れた若者であるアージェにも少しばかり心当たりがあったのだらう、言葉ではなく、表情が理解した事を語っていた。

「ははっ、まあ……言い方は悪いかもしれないが。君の悩みもまたその程度の事さ……。少なくとも私達にとってはね？ だから気にする必要などない。むしろ、良く、言えたね？ 頑張ったよ、アージェ君」

「はい、やっと……僕も皆の中に入れると思うと嬉しいですよ！」

年上の、姉を真似ていた雰囲気は完全に消えた。

そこには、加藤より少しばかり歳が上の、普通の、しかし強い青年がいたのだ。

「ほっほっほ、うむうむ。これでようやくと、色々と進められるのう？」

「まあ、な。しかし、いや……うむ……後で酒でも飲み交わすとするか」

「ほっほ、うむ……。その時はワシも同席させて貰うとしようかの」
偽りの姿が消えて、真実の姿になれたヒトは、ようやく心の底から笑うことが出来た。

そして、驚いたものの、一時過去を思い出し羞恥を感じたものの、この事があったても尚、友情を感じられた女性達も、ようやく心の底から友人だと言えるようになった事を喜ぶようにはしゃぎ回る。

ただ1人、立ち直ったとは言え、時折複雑な顔をしている1人の男を除いては、子供とも大人とも言いにくい皆は、幸せそうに声を上げるのだった。

第13話 』

変化!』(後書き)

アーダ、アージエの登場させる事を決めた最初から決めていた事なのですが、やはりあまり好まれた展開では無かったかもしれませぬ。気分を害した方がいたとしたら、申し訳ありませんでした。

一応言っておきますと、現在の、そしてこれから出てくるかもしれない他の女性登場人物は本当に女性です。

ここは、『砂漠の水亭』である、そこで1人の獣人の少女が手に何かを持って踊るように喜んでいた。

「うわーっ！ 可愛いよっうんっ！ ありがとーっ！！ ……見て見てっ、お母さん！ カトが贈り物だっつー！！」

「あらまあ、良かったねえラル……。それと、ちゃんとお礼は言ったのかい？ ……そうかい、うんうん。 ……それにしてもカトーの坊や、いいのかい？」

先ほど、領主の屋敷で受けたダメージを急速に回復させる魔法の笑顔を眺めている加藤に女将はラルの返事を聞いた後、声を潜めて聞いてくる。

「んー？ ああ、良いも悪いも無いさ。ラルって前々から同じような服ばっかだろ？ これくらいはね」

ラルから目を離す事なく、楽しそうに答える加藤。

しかし女将はなおも尋ねるのだ、本当に良いのかと。

「でもねえ、服飾を店でなんて……結構な値段だろう？ 無理して買ったんじゃないのかい？」

そう、服飾は娯楽である。

モノがモノであれば加藤の防具など比べ物にならないくらいに高価なのだ。

そして、ラルに贈った服もまた、それなり以上に高い代物であった。

「いいんだって、高いっても金貨2枚程度……。それなりに貯金はしてるし、そういう管理はルクーツアに任せてるから無駄遣いもないしね。こういった事で使うのは無駄遣いじゃないと、俺は思うけど?」

女将の言葉の意味は若干違ったようだ。しかし加藤の言葉を受けた彼女は、やはり苦笑いを浮かべながらも、仕方ないという感じで首を軽く振った後、感謝を述べた。

「まったく、カトーの坊やはこれだからねえ。ラルを可愛がってくれるのはあたしとしても嬉しいけどね? あんまり甘やかす事はよしておくれよ?」

「……なるほど。ルクーツアの言っていた事はこういう事か! 分かってるよ、女将さん! ちゃんと節度は弁えるさっ!」

そう笑い合う女将と加藤に声を掛けるのはルクーツアだ。後ろにはデイリーもいる、なんとも言えない表情である。

「カトー、少々良いか? ああ、女将さん夕飯は今日は良い、食べてこようと思うのでな!」

「あれー、デイリー様もいる。てかカト行っちゃうの? じゃあ明日、街にお出掛けしようよっ! あたしが服着たところ見せたげる!」

ラルはデイリーがいる事に驚きと喜びを見せる、が加藤が居なくなる事は嬉しくないのか、どちらとも取れる表情である。

そして、加藤へと明日の約束を取り付けようとしたのだろう、彼女なりのお願いをしている。

「ん、どうしたんだ？ まあいいけどさ。……おう、明日はどっか連れて行ってやるからな！ うんうん、楽しみにしてるよ、きつと似合っと思っぞ？」

そう、ラルと一頻りひんじゃれた加藤は、ルクーツァ達と共だって『砂漠の水亭』を出ていき、1つの小さな店へと入っていった。

「へえ、なんだ此処？ ヒトも居ないし、なんの店なんだ？」

加藤がそう言うのは入った店、というか家だ。

中は若干薄暗く、ヒトの姿は見えない場所である。そこへ無遠慮に足を踏み入れて、奥にある大きな机に備えられている椅子に座り込むとルクーツァは手を振って招く。

「こっちだ、こっちに來てまずは座れ」

「ほっほ、此処はワシの家じゃよ。まあ、もうほとんど使っておらんぬがのう、手入れだけはしておるから気にせず入れ」

どうやら、デイリーの家だったようだ。

薄暗いのは陽の光を遮る布が窓に掛けられているため、カーテンのようなもののためだ。

あまり家に居られないという事で、陽の光で劣化するものがある

のか、常にそうなのだろう。

言われた加藤は、ゆっくりと椅子へと座る。

「デイリーの家ねえ……。てかカーテン？ 開かないのか、そろそろ暗くなるけども、まだ明るいだろ？」

「いいんじゃないよ、これくらいが丁度良い。酒を飲むには、のう？」

加藤の問いに、軽く歯を見せるような笑みを作ってデイリーは答える。

そして、酒が入っているだろう瓶と、グラスを用意し始める。

「なに、オレ達としてもお前には少々辛い思いをさせたと思っ
てな？ まあ、飲もうじゃないか」

「あー、あれな？ 確かに危うかった、けどまあ……。初恋は叶わな
いっていうしさ？」

「小僧の場合は特殊過ぎじゃがお……。まあ、良い機会じゃしワ
シらと酒を飲もうでは無いか」

そう言いつつ、グラスへと琥珀色の液体を注いでいくデイリー。

それを見つつ、加藤は軽く言う。

「心配してくれてるっつてのは分かったけど。ぶっちゃけあんたらが
酒飲みたいだけじゃねーのか？」

「ほっほ、別にふざけておる訳ではないぞ？ ラル嬢は実に可愛い
娘よの、見ているだけで己の小さな悩みなど吹き飛ばされるような
笑顔じゃったのう？ そう思わぬか、小僧？」

その時の様子を思い出したのか、嬉しそうな表情に変わった。
そして楽しげに加藤は語る。

「あー、確かにラルを見てたら、まあいつかって思ったのは事実だな。無かったらまだ地味に辛かったかもしれない」

「まあ、ニーナ嬢の時と同じく言うに言えない面もあったんだ。オレは言いたくて仕方が無かったがな……」

ルクーツアが一番堪えている顔だ、そしてデイリーはそれを無視するように、真剣な声で加藤へと言葉を掛ける。

「これから、小僧……お主らは一蓮托生、皆で事に挑まねばならぬ。あのような事で亀裂が入るようでは困るのよ。……ああ、小僧は気にしておらぬ。今回は特殊じゃったが、そうで無ければ女が実は男であろうと、お主は刹那悩もうとも、最後には変わらず接するとワシは信じられる。が、エイラ嬢とニーナ嬢よ、まあレイラお嬢様達も一応という感じじゃの」

話の流れを感じたのか、ルクーツアも顔を上げて話を繋げる。

「まあ、今回の事はお遊びと言ったが、全てが、そうではないそう
だ。若いヒト、そして優秀なヒトという条件。そして街を造るとい
う大仕事、これらは彼女達に託されていると言っても過言ではない」

「もうその話は何度も聞いているよ。んで俺もそれに参加してくれっ
てロレンさんから頼まれてるしな？そこは良い、ってかさ、俺の
失恋……かは微妙だけど、ソレを慰めるって事だったんじゃないの
？なんか話変わってないか、てかこの酒旨いな？」

「ほっほっほ、最初はそうじゃったよ。じゃが、お主は平気、というよりもワシらがソレをする前に無意識とは言えラル嬢に癒されておったからの？ ……うむ、そうじゃろう？ この酒は実に……」

最初の目論見から外れて、真剣な話を、それからも外れて、徐々に下らない話へと変わっていく。

酒の力もあってか、年齢を、師と弟子の上下を、親と子の関係を消し去ったかのように、遠慮無く、どうでも良い事を、なんの意味も無いような事をつらつらと話合っ。

「てかさ、ルクーツアに金貨10枚返した時に、俺なんて言われたと思うよ？ こいつ、利子分が足りないとか言いやがったんだぞっ！！」

「なにを言う、当然だろう？ カトーが自分で返すと言ってきたんだ、ならばだなっ」

「ルクーツアよ、お主はなんとも……。いや、……小僧。盾の代金を受け取っておらなんだな？ あれはそうじゃの。うむ、金貨10枚で良いじゃろうて、本当であれば50枚は下らぬのじゃぞ？」

「あんたもかっ！？ てか、くれるって言ってたじゃねーか、断固として断る！」

しかし、その話は実に下らないもの。

だが、顔には笑顔が張られている、ただただ思った事を口に出せ

る事のなんと心地よい事か。

「いやね、俺もさー……アージエには悪いけど、なんで女じゃねーんだよつてさあ？ 思っちゃったりしたわけよー、そこでさあ……」

「ほっほお、そいつは危ない所じゃったの！ いやはや、まさかそこまでだったとは、^げ実に恐ろしきは女顔かつ」

「ああ……声も女性のソレに聞こえるものだしな……。カトー、前は強いな？ オレがその立場だったら勝てたかどうか分からんぞっ！？」

「やめてくれよあ……照れるじゃねーかあ。勝てたのはルクーツア達に鍛えられたからってもんよー……」

ほんの少し前の事を、まるで随分昔の事のように。笑い話として、この場でなら話せている。どんな事であろうと受け入れてくれる存在の事を世の中ではなんと言うのであるうか。親というのか、親友というのか、とにかくその存在とは斯くも身近にあるものなのだ。

「小僧はのう……基礎が出来始めてはおるのじゃぞあ？ しかしの、小僧の動きは直線的すぎるのじゃ……以前見せたあの動きは悪くないがのう……。こらっ！ 聞いておるのかっ！」

「聞いてるつてのー……。そんなん言ってもさあ、速く動こうとしたらなっかなかさあ」

「その動きはそれでいいんだ……。他のモノも今のうちから取り入れる事が大事なんだと、さっきから……。言っているだろうっ！！」

「……っー！いきなり大声だすなよ……。あー、響く……。他の動き、ねえ？例えばどんなのよー、ほら、言ってみー」

戦いの術とは、完璧なものなど唯の1つもありはしない。

どのように素晴らしくとも欠点はある、どのように情けなくとも光るモノがあったりするものなのだ。

小さな、大きな事をただただぶつけ合う、こうした下らない言い合いから新たな術というものは出来ていく事もある。

それなりに時間が経った、外は既に陽が落ちて、優しい星の光が眠りを守る時間帯となっている。

加藤は、かなり酔ってきていたが、ルクーツアとの鍛錬のおかげか。未だ夢の世界には旅立っておらず、彼らとの話を楽しんでいた。そこへ、1人の乱入者が飛び入った、この中に入れるヒトである。それは領主である、ロレン・サツクルであった。

「なんとという事だっ！ デイリーから話を聞いていたのに、こんなに時間が掛かってしまっとはっ！？ くう、仕事めえ……。厄介な敵だよ、まったく！」

入って来るなり、酒を飲んでいないはずなのに酔っているように大声でそう言う。

そして加藤はそれに対して、遠慮も何もなく、ただ文句を言った。

「うるせーぞ！ ロレンっ！ 少しは考えて話せよっ！ ったく、あー……また響いてきた」

罵声を、しかも呼び捨てだと言うのにロレンは気にした風を見せずに嬉しそうに謝る。

そして手に持っていた袋から、年代モノに見える瓶をいくつか取り出して机へと置いた。

「おお……いい具合になっているようだね？ いや、済まなかった……しかし私だけ素面というのは頂けないな。ほら、新しい酒だっ！ 飲むぞ、私は飲むっ……待っている、カトー君。私もすぐにそこへ行くっ！」

そう言つと、高価そうな瓶をあっさりと開けて、遠慮なく、味わ事なく一気に喉へと流す。

身体を心配してしまう飲み方だが、この世界のヒトは酒に強いようだ。

ルクーツアやデイリーもまた、同じように新たな酒を楽しんでいる。

「だから、もうちょっとだな……。あーいいや、うん……待ってるから頑張つてなあ」

その新たな酒を一口味わい、その事で気を良くしたのか。それ以上は言わずに、ゆっくりとそれを楽しむ加藤。

「ほっほっほお、ロレンも来たか……。いつかはアージエも混ぜてやりたいものじゃの、そうは思わぬか？ 小僧」

酒を飲みつつ、そう問いかけるデイリー。

加藤は別段、考える事もせずにそれを肯定する。

「んー、ああ……。だなあ。まあ、いつかってか今度は呼ぼう、きつと楽しい……。人数多い方が盛り上がるだろお」

「それはそうと、カトー……。話の途中だぞ？ あの中で、アージエを抜いた中で、だ。誰が好みなんだ、ほら言ってみろ！」

ルクーツアは、少々勢いづけてそう話す。

その話題には加藤は怒ったように反応した、がすぐに考え込み、女性の名を挙げて言った。

「うっせ！ 今はそういうの無いんだよっ！ あーでも、エリアスールさんの笑顔は良いかも？ なんだかんだで付き合いも長いし……。それとエイラと遣り合うのも結構楽しいかな、意外と胸あるし……」

「なんとっ！ 我が娘のレイラが入っていないじゃないかっ！ 舐めてるのか！？ どうして入っていない、美しいだろう？ 可愛いだろう？」

「酔うのはえーな、おい。ってか酔ってなくてもいつもそうだったっけか？」

ロレンの言葉に反応を返した加藤へと、デイリーは言葉を放つ。

少々考え込んでから、とっておきを披露するかのように、楽しみに放つ。

「ほほ、それに胸の大きさに目を付けるとは……。うむ、じゃが良
い事を教えよう！ エリアスールも……。なかなかにでかいはずじゃ
ぞ？」

「なん……。だって！？ スラっとしているかと思ってたら、でかい、
だって？ なんてこった、これは順位が変動する……。って待てや！
なんでデイリーがそんな事知ってるんだよ、こらっおいっ！！」

その発言で何かを想像したのか、一瞬酔って火照っている頬を更
に赤くした加藤。

だが、何かに気が付いたのだろう、一転して鋭く問う。

「デイリーが知っているのは当然だろう？ それはそうとしてだ、
聞きたまえ。本当は教えたく無いが、私の妻もでかいぞ！」

胸の話題となつては黙つていらなかったのか、ロレンは己の愛
する女性の事を自慢気に語りだした。

「……。なんでお前の奥さんの事聞かされないといけないんだよ！
なんだ、羨ましいとでも言つて欲しいのか？ 言つてやるよ！
……。羨ましいぞこのやろっ！」

「違つっ！ つまり娘もきつとでかくなるっ！ 今が買い時だどだ
ねっ！ あ……。だがやらんぞっ！ 娘はやらんっ！」

いつものような、しかしだからこそ有り難味が強い話を夜が明け
るまで、彼らは楽しんだ。

しかし、その代償は飲めば飲むほどに大きくなる。

彼らは知っていたのか、忘れていたのかは分からないが、更に酒を飲むのだった。

そして、その代償で自身が、ではなく他の者までも困った事になる事を、加藤は未だ知らない。

「んーっ！　なんで寝てるのっ！！　もう、カトったらっ！　ねえ、約束したでしょー！　お出掛けっ お出掛けっ！！」

獣人の少女は、種族の証とも言える尻尾を真っ直ぐに伸ばして、感情を表す。

加藤を布団の上から軽く叩いて催促するが、加藤は寝返りを打ってそれを拒否することを伝える。

「あー、分かってる………だけどもめん……。もーちよい……。もーちよいだけ寝かせて……。…というか出来たら明日にしてくれ」

「ううー……。アタシと約束したのっ！　カトの馬鹿っ！　もう着た所見せられないからねっ！」

そう言つとラルは扉を勢い良く閉めた。その音ですら頭に響いたのか、それとも不味い事をしたと思つたのか加藤は顔を顰める。その加藤へと、言葉を掛ける存在が2つ。

「まったく……。情けない、オレはそんな風に育てた覚えはないかな？」

「キュウー」

「なんでルクータは平気なんだよ……。俺より飲んでただらっつ？　まったく、ずるいつての………」

布団の中へと顔を埋めたためだろうか、若干聞こえにくい、籠った声でそう言う。

「まあ、オレ達も少し飲ませすぎてしまった……。ついつい楽しくてな？　ラル嬢にはオレからも言うておく、今は休んでおけ」

そう告げると、ルクーツアも部屋から出て行く。

残っているのは、布団の中で丸まっている加藤と、それを見つめる小動物せんばいだけになった。

「あー、やっちゃったよなあ……。途中から完璧に忘れてたから飲みすぎて……。あの事が解決したと思ったら今度はこれか」

「キュツキュウ」

小動物せんばいの鳴き声をどう取ったのか、加藤はそれを認めるように言葉を紡ぐ。

「だよなあ、今回は俺が悪いよなあ……。つてか先輩はあの事知らねーだろ、ああ、どうでもいいか」

「……キュウ？」

「あー、あー……。無理してでも……。いや無理、無理だわ。ちょっとこれはきつい……。ラルには明日にでも……。きつと許してくれるだろ」

そう言い残すと、陽が高い内に、再度眠りの世界へと旅立つ事にした加藤。

起きたのは夕食時になってのことだ、そして腹も空いた事もあり、急いで女将達と夕食を食べている下の階へと降りていく。

「ちょっと寝すぎたな……頭痛はしなくなったけど、なんかモヤモヤする……。んー、まあ飯食べるとしよう、皆が食べ終わっていても、いつも通り残してくれてるだろうし」

そう呟いて、いつもの部屋へと続く扉を開いた。

そこにいたのは女将だけであり、ルクーツアとラルの姿は見えなかった。

「あつれ？ ルクーツアはいいとしても、ラルは？」

「まったく、カトーの坊やは……。ちょっと出掛けているよ、なんかお屋敷でお泊りなんだとかはしゃいでいたね？ 帰りは明日以降だと思っね、それよりも、食べるんだろう？」

加藤の様子を見た女将は頭を押さえながら、ため息を吐くように疑問に答える。

「どうやらルクーツアは彼女の機嫌を直すことを、自分ではなく、同じ歳若い女性達に任せようという魂胆なのだろう。」

それを悟った加藤は、なんともいえない顔をした。

「まじかよ……うわあ、しばらく屋敷には行きたくないな……。エイラは言わずもがな、エリアスールさんにニーナ、レイラはこういう事になると煩いのは以前に分かってるし……。アージエは、頼りないし……。うん、暫く行かない事にしようっ！」

「なに言ってるんだい、帰りは明日、以降って言ったろう？ あんたが迎えに行かないと戻らないって駄々こねてるんだよ、あの娘は、つたくもう、しゃんとしとくれよ、坊や？」

女将は加藤の様子を見つつも、重要な事を教えた。

それは加藤に取ってかなり厳しい事だったようで、決めた事を覆さざるを得ない情報だった。

「ええ……、迎えつて。まじか、明日にでも行くべきなんだろうけど、そうするとあの恐怖がっ！？」

……けど遅すぎると、あれ以上の地獄がありそうだし」

何かを思い出したのか、急速に枯れていく草花のように言葉が萎む。

「あつはつは、色々と大変なようだねえ坊や？ だけど、そう構えるものじゃないさ。あの娘もそんなに気にしちゃいない、ただ少しあんたに甘えただけさね」

加藤の言葉をどう解釈したのか、女将はラルの事を細かく伝える。その言葉には若干、何かに対する恐怖が混じっているようにも見えたと。

それが何かは加藤にも気付いていたが、そんなものは加藤とは縁が無いものだ。

女将も分かっているのだろう、それでも気になってしまつ、母親とはそういうものなのだ。

「いや、ラルはいいんだけどさ？ 他の面々がさ、色々とね？ っく、ルクーツアめ！ 行くしかなくなつたじゃねえかよっ……あー

もう、ラルも仕方の無い奴だなあ」

加藤はなんだかんだで、ラルに悪い事をしたと悔いているのだろ
う。

言葉を若干荒立てながらも、優先するのは獣人の少女のことだっ
た、その事を女将に伝えようと、ラルがいるために、と強調して女
将へと自分の意思を伝えた。

「そんなになのかい？ レイラちゃん達がねえ……。ああ……。ほら、
夕食は煮込みだよ？ 温め直したから、冷めない内に食べちゃいな」

そこまで屋敷に行く事を拒絶している感じの加藤に、若干驚きな
がらも、若干の笑みを浮かべながらも、女将は料理を机の上に置く。
寒くなりつつあるサツクルでは、最近こつこつた暖かい料理が領
主の屋敷でも、幹旋所などの飲食店でも食卓の上にあがる事が多く
なっていた。

「あ、ありがと、女将さん。おお、美味そう！ それじゃ、頂きま
す！」

余程空腹だったのか、加藤は勢い良く料理を食していく。

しばらくして、全てを食べ終わる、その時を見計らったように、
女将がまた声を掛けてきた。

「あっはっは、美味しかったかい？ そんな風に食べてくれると作
り甲斐があるってものさ。……。本当にありがとうねえ、あんたが傍
にいてくれるようになってから、あの娘も明るくなって……。以前、
気にしていた時があつたらう？」

「……。ん？ 気にしていた事？ そんな事あつたっけか、いつの事

だろう」

加藤はそれでは分からなかったようで、それを問う。
女将はその時の事を教えた、しかしやはり加藤は思い出せなかった。

「ここに来てすぐの頃さね……。あたしが口を滑らせたのに、気付いていっていただろう?」

「ん?..... あー、あれ? ちょっと待って。..... うん、思い出せないわ、なんか言ったっけか、俺」

加藤に取っては、さほど気にすべき事では無かったのだろう。
そんな様子の加藤を見た女将は嬉しいような、落胆したような声を出す。

「まったく..... こっちは真剣だっていうのに坊やと来たら.....。あたしがね、らしいって言っちゃったのさ、そこを聞いてきたんだよ、あんたはね?」

「ん? あー、そんな事もあった、か? うん、それがどうかしたのか? 別にどうでも良いように思うけど」

「本当に一丁前に言うようになったねえ.....。だが、そうなのかもね? でもあたしは知ってもらいたのさ、だから聞いてくれるかい?」

その声は、真剣であり、切実なモノを秘めていた。

加藤は満腹になった事で格好を崩していたが、それを直した上で、若干硬い、強い声で自分の意思を伝えた。

「……ああ、分かった。つても、聞いた所で何も変わらないぞ？可愛そうだとか優遇したりしないし、そんな事をしていたなんて！とかいって他のやつを嫌いになつたりはしないと思う。……それでも良いなら聞くよ」

話を聞いて貰える了承を貰った女将は、しかしその言葉を楽しそうに笑いつつも話しを続けた。

「あつはつは、そうかいそうかい。まあ聞いとくれ……あの娘はねえ、小さい頃に両親を亡くしていたんだよ。ああ、昔はあたしもこの街にはいなくてね？ ちよつと国に近いところを転々としていたのさ」

「へえ、そうなんだ？ 今度、他の街の事とかも聞かせて欲しいなあ……。あ、嫌ならいいんだけどね？」

「あたしは構わないさね、まあラルが居ない時になら構わないよ。さて続きだね？ 昔はあたしもそりゃー綺麗でねえ、色々大変だった、本当にね？ ヒトつてのは、いや男つてのは面白いもんでね……美人であれば気にしない節があった、暴言なんてのも同姓からの嫉妬程度で可愛いものさ。だからあたしは何処の街でも楽しんでいたもんさ」

しかし、その話の始めはいつもの、女将の話と何処か似ていた。加藤は頬を引き攣らせながら、それを問う、若干逃げ腰の声で。

「ええつと……真剣な話かと思っただけど、いつもの昔話だったり？ それなら遠慮しようかなあ、なんて」

「そうじゃないから安心おしつ！まったく、まあ美人だったのは本当だがね、街を転々としていたのは理由があるんだよ。あたしは医者を目指していてねえ、あの頃は怪我したヒトのためにって、いやあ若かったね。それを繰り返していく内に、色々と気付く事があったのが最初さね」

それを女将は強い口調で否定した。が、余計な一言も付ける。

そして、今まで加藤は知らなかった事を教えたのだ、それに加藤は若干の驚きを身体の揺れで表現した。

（医者？ 女将さんってそんなヒトだったのか。ただの宿の女将だと思っただけで、そう言えば時々いなくなったりしてたな。今でもちよくちよくそういうのしてるのかな？）

「それはね、モンスターどもに傷つけられたヒトじゃないヒトがいた事さ。見ればすぐに分かる、これはヒトにやられたものだってね。そこだよ、今まで自分には関係なかった、そういうものに触れたのは……。あたしは在るってのは知ってた、でも知らなかったんだねえ」

女将はそう言い切ると、目を閉じて、顔を上に向ける。

それを静かに見つめつつ、加藤はそれに言葉を重ねた。

「知ってたけど、知らなかった……。か。うん、それは俺もそうなのかもしれないなあ」

「いや、坊やはきつと知ってるさ。知識とか経験云々じゃなくてね？ きつと……。いや良いだろうさ、どうだろうが坊やは坊や、そうさね。……。まあ、話の続きだがね」

女将は、思い出すように、ゆっくりと語り始めた。

どのような傷を受けていたのか、そして医者として、それをどうしようも出来無い事に絶望してしまった事を。医者として立ち続ける限り、それをどうしても目の当たりにしてしまう事、それが続いた事で、逃げたいと思うようになった事を。

そして、ようやくという感じで、少女の事について触れた。

今までの自分を責めるような、助けを求めるような声色ではない。優しい、暖かい響きに変わる、それだけで女将のラルに対する想いは全て分かると言っても過言ではないほどだ。

「あたしはね、そんな風に逃げたいって思ってから結構な時間が経った時に、もうどうしようも無いって感じた時に出会ったのさ。あの娘、ラルにね……、そしてラルもそうした事で傷つけられていた……。後から知った事だけど、親が亡くなってからは街の偉いひとが助けようとしてくれていたそうなんだよ。だからあたしが会う前でも、そんな事に遭っていても、生きていたんだね。……だけどね、そのヒトは竜人だった。今まであの娘を傷つけてきた、その街の主要種族だったのさ。だからあの娘は拒絶し続けていた、その竜人は、困っていた。その現状に、それをどうにも出来ない自分にな」

「それって……？」

「そう、あたしに似ていた。そのヒトは竜人だ、差別されてるわけじゃあない、傷つけられているわけじゃない。だけど、傷つけられるヒトを見続けていた、それを知っているのに変えられずにいたのさ。」

まったくあたしに似ていた、ただ違ったのはその竜人は決して逃げなかった。ずっと、長い、長い間それに立ち向かい、向き合い続けて戦っていた」

その竜人は女将がラルに気付いてからというもの、毎日のようにラルの元を訪れていたと言う。

しかし、不幸というモノは重なるものなのかもしれない。

ようやくラルがその竜人だけは信頼出来る事に気がつき、時折ながら今の彼女のそのような笑顔を浮かべるようになっていた時の事だ。

「あたしは、希望を持ってきていた。こういうヒトもいるのか、ってね。 なのにあたしは……って思い始めていた。ラルもあの竜人の事だけは信じて、うん……だけどね、その竜人は死んでしまった。偉いヒトってのは、冒険者ってのはモンスターなどの大事があれば、その場へと赴く、それはそうだ。だけどね、死んじまうなんて、しかもあの娘がようやくって時に、ずっと見てきたあたしは、もしかするとラル以上に絶望していたかもしれないね」

その時の事を思い出してしまったのだろうか、実に苦しそうだ。しかし加藤は何も言わない、何の心配もしない。ただじっと話の続きを待つだけだった。

「それからだ、あの竜人の加護に気付いた街のモノはあの娘には手出ししないようになっていた。だけど、そのヒトはもう居ないと気付いたら、以前よりマシとは言えまた始めた……。別に命に関わるような事じゃない、ちよっと叩いたり、悪口を言ったりするものさね。だけど、あの娘には……、そしてあたしにはね。だけど、誰も見ていない場所で、静かに涙を流していたあの娘を見て、あたしは決めた。逃げようと、だけどあの娘のためになる事ならば、決して逃げる事のないようなヒトになろうってね」

「それで？ だからどうかしたのか？」

加藤は、何処か冷たい響きの声を出して言う。女将に対して初め

て、いやこの世界で初めて出した音色だ。

燃え滾る何かを、無理やり押さえ込んだ蓋から洩れてきた、熱すぎる、蒸気のような熱くも冷たく感じる声だ。女将に対してでは無いだろう、今となっては自分の可愛い、今回は失敗してしまったが、大切な、大事な妹なのだ。

その境遇に腹を立てているのかもしれない、一番最初に言った言葉は早くも崩れそうだ。その変化を女将が感じたのだろう、それを見た女将は今までの苦しそうな顔を消した。

苦笑いを、いつもの女将の顔を、そう。母親の顔を彼女は作り上げる、そして母親として言葉を続けはじめる。

「まあ、そんな事があってねえ。あたしはやっぱ我慢できずにあの娘をひつつかんで街を出た、色々と移動しながら最後には此処さ。あの娘はここにきてしばらく経つても、あたし以外には懐かなかった。

今でこそ、か……母さんって呼んでくれているがね？ 最初はあたしですら、本当によく動く子でねえ……特に水浴びが嫌いであつはつは、いやあ苦労したんだよ」

過去の女将は痩せていて、美人だと常に彼女は加藤達に笑い話として語っていた。

それを加藤は今の今まで信じてはいなかった、が。今の彼女はどうだろう、女性としては若干太っている、恰幅のいい女将。

しかし、ラルの事を嬉しそうに、時に恥ずかしがりながら思い出して笑う彼女の横顔のなんと美しい事か、加藤はそれと似たものを以前に、見た事があったのだ。それは、今はもう、二度と、会える事は無いだろう1人の女性の横顔。それはある意味で加藤の、理想の女性像でもあった、そしてその女性と同じ笑顔を女将はしているのだ。

美しいと感じてしまう事に、加藤はなんの疑問も恥も抱けない。

「はいはい、ってか女将さんの話ばっかでラルの事はほとんど聞けてないと思うんだけども？ まったく、結局女将の昔話じゃないか」

それを顔に出さず、声に出さずに、加藤は軽く言う。

だが、母親の笑顔というものは偉大だったようで、それまでの熱は冷めている。触れる者を無用に傷つけるようなモノでは無くなっていた。

「あつはつは、そうだったかい？ まあ、あの娘にとっては、あのヒトは颯爽と現れて、ラルを守ってくれた、ラルの街を守ってくれた英雄ヒーローなのさ。そしてね……覚えてるかい？ あの娘と初めて会話しした時の事を……」

「ん？ ああ、名前の言い合いっこか？ 覚えてるよ、初めてラルと話した時だからね」

「そうかい、それと同じ事をあのヒトも言っていたそうだよ。守ってくれた、英雄はね？ それと同じ事を言ったあんたを重ねてた、だけど違うって事はあの娘も知っているのさ。最近になってあんたが特に優しくなってるもんで、それをまたやっちまって恥ずかしいってのもあるんだろうねえ、まったく」

「へえ……ラルの、だけの英雄が……ねえ。ま、俺はそんな大層なやつじゃない、それは残念ながら違う、けども」

「ふふつ、けども。なんなんだい？ やけに照れているじゃないか、ほれ言ってみな、あたししか居ないんだ」

女将は楽しくなってきたのか、笑いを抑えずに声を挙げる。

加藤は、照れながらも、あつさりと言う。しかし籠められたものはとても、とても重たく、しかし暖かいもの。

「はいはい、けどラルだけの、兄ではあるって言えるよ。ああ、俺の妹だ、ラルは大切な妹さ。今はまだ弱い、その英雄みたいにはなれないけど、でも守るさ。一丁前にと言われても、格好付けるなと言われても、無駄だと言われても、守るさ。あの時、俺はそう決めたんだ」

その言葉は、その気持ちは、いつか何処かで加藤が見た誰かのものにほんの少しだけ、似ていた。

「あの時？　ああ、初めての時かい。それがどうしてそうなるのかね？」

「ははっ、ただのこじ付けさっ！　だけど、あの時確かに街を守るために必要な事は何かを、そのために自分が出来る事を考えた。だから、もし俺が剣を取らないと守れないような時が来たら、俺は剣を抜く」

加藤の言葉を、女将は優しい眼差しで待つ。

「今までは不安だった、抜けないかも思っていた。強く、鍛錬を積みれば積む程、自分の弱さ、モンスターの脅威つてのを知っていたから、余計にね。ああ、だけど今は言える。俺は妹を、女将さんを含めた家族を守るためにならいつだって剣を抜けるよ」

「そうかい……、それは、あの娘も喜ぶだろうね。そうだ、どうだいラルが妹だつて言うんだったら、あたしの事を母さんと呼んでもいいんだよ？」

女将は良い事を思い付いたという感じを装って、そう言った。しかし、顔はそうではない、いつも思っていた事をようやく口に出せた事の喜びに溢れている。

「へ？ あ、いやその……それとこれは別でさ？ さすがに恥ずかしいというか、ほら、あれだよ」

「なに言ってるんだい、あんたくらいの歳なら、まだまだ母親つてのは必要なんだ。言つたろう、あたしは逃げたけど、だけど今は、子供のためにだけは逃げないってね？ ほら、あたしは分かっているから、……だからお呼び？」

女将は随分前から口には出さずとも母親として接してきていたからだろうか、何かしらに気付いているようだ。

その事は恐らく加藤の本当の秘密では無いだろう、しかし当たらずも遠からずな事は確かだった。

「え……分かってるって。ああ、いや……うん、その、あー、か……母さん」

「……なんだい、坊や。そんなに照れるほどじゃないだろうに、あつはつは」

呼ばれた事に、加藤には見えないが、彼女の尻尾は激しく揺れた。髪に隠れてあまり見えない耳も、大きく動いた。

声に出して、大きすぎる喜びを表現しないのは、母親としての意地か何かか。

しかし、加藤はその言葉に激しく反論をした。

「つく！ やっぱ女将さんって呼ぶからなっ！ たく、でもまあ…俺もなんだか軽い奴だなあ……。その話を聞いただけで、思ってるだけじゃなくて言葉に出しちゃうなんてさ」

そう言われた事に若干の寂しさを浮かべながらも、彼女は母親としてそれを包む。

「良いのさ、それで良い。軽いだつて？ とんでもない、大事な事を、悩まなけりゃいけないような事を。」

あなたは簡単に言つてのけられる、それはね？ 軽くなつてないのさ、あなたがちゃんと強くなつてきたからこそ、軽く感じるだけ。本当の重さは何一つとして変わつちやいない、だから大丈夫だよ」

「そういうもんかねえ。あーでも、うん……。ラルの過去とかはどうでも、良くはないけど良いとして。ラルを妹だつて口に出したら楽になつたわ、明日はすぐに迎えに行くかなっ」

「あつはつは、レイラちゃん達が怖いんじゃないのかい？」

昔話を聞かせる前の憂鬱な気配は微塵も感じられない。

そんな加藤を、新しい息子を尻尾を下げながら、彼女は問う。

「ん？ ああ、別にいいさ。それより今はラルにお前の兄貴だぞつて言つてやりたくて堪らないんだよ。あー、今まで寝たのもあるけど、今夜は眠れないかもな！ どうしようかなあ、あーちよっくら鍛錬でも、いや疲れて寝坊したらコトだな。やっべ、どうしよう！」

最早、いつもの加藤だ。

いや、少し違う……。以前にデイリーが言っていたものを確かに

加藤は得たのだ。今まででのモノでも十分すぎたと言える、しかしそれを常に持っていられるくらいに、軽く感じるようになったのだ。それは、とてもとても重く、ヒトが一生掛かっても、そうは簡単に持てるようになるものではない、大事な宝物。

「まったく、仕方のない坊やだね。ほら、暖かいミルクでも作ってあげるから、ちょっと待ってな」

「マジで！？ やった、俺あれ好きなんだよね、いや待ってる！あれを飲めばなんか眠くなるんだ、俺」

「あつはつは、分かってるさ。いつも飲んだら眠たそうに目を擦っていたからねえ、つと」

以前と同じような会話を、しかし籠められたモノが若干だけ変わった会話を加藤達は楽しむ。

加藤は、暖かい牛の乳を飲むと、いつものように眠くなってしまい、その後すぐに眠りに着いた。その加藤が居なくなった部屋、居間で女将はため息を吐く。

嫌なものを吐き出す類のではない、幸せなものが溢れすぎて出てきてしまったものだ。実に勿体無いが、今の彼女にはそれが有り余るほど感じられているのだろう、気にした風はない。

「あの娘ラルの兄さん、か。ふふっ、あたしも嬉しくて堪らないね。あの時、頼んで正解だった、逃げずに言ってくれた……、ああ本当に」

だが、どんな夜であろうと、朝はやってくるのだ。

いつもと違うのは、朝に起こすヒトがルクーツアではなく、女将になっているだろう事くらいなものだろう。その時の事を楽しみに

しつつ、女将も眠りにつく。明日の夜は、娘と息子と一緒に寝てみるのもいいかもしれない、などという事を思い描きつつ、笑顔を浮かべて寝るのだ。きっと、今夜の女将の夢は、幸せなものになるだろう、それを確信できるくらいに、今日の彼女は幸せだったのだ。

我が娘のために話をしていたというのに、母親である彼女が幸せを感じていた。後日、母として少々落ち込む女将の姿が見られる事になる。

「おはようっ、女将さん！」

そう大きな、勢いのある挨拶を女将へ向けて行うのは加藤である。それに対して、いつもの彼女であれば同じように返すのだが、今日の彼女は少々違った。心なしか悲しそうな、いや絶望の表情を浮かべている。

「……ん？　どうかしたのか、女将さん」

「え、ああいや。あっはっは、なんでもないさ。おはよう、カトーの坊や」

「朝飯ってまだ出来てないかな？　早くラル迎えにいかないといけないしさ」

加藤は急くように早口で言い立てる。

女将は先までの顔の色を驚きへと変える、朝から忙しいことだ。

「迎えて、もうかい？　まだ陽が出たばかりだよ、あの娘だってまだ寝てるさ。もう少し、そうさね……、昼前に行きな？」

女将はゆっくりと、聞き分けの無い子供に言い聞かせるように、一語一語をはつきりと話す。加藤は若干不服そうではあったが、それに従う事にしたようだ。ゆっくりと椅子に座る。

「あー……、そうだよなあ。せっかく早起きなんてしたのに、昼前

「かあ……」

「本当だよ、いつもはもう少しゆっくりだったのに……」

その言葉を返す女将の表情は最初の色へと戻りかけている。

非常に残念そうで、無念が漂ってくるのだ、加藤はそれに気がついたように申し訳なさ気に声を掛けた。

「あ……悪い。そうだよな、こんなに早く起きてきても飯の準備とか色々あるもんな。飯はいつでもいいから、気にしないでくれよ」

そう言われた女将の顔はやはり変わる。その持ち主と同様で実際に働き者だ。

「カトーの坊やは、いやまあ……あたしゃ、うん。それでいいさ、だけど他の子だったら……ああ、何時か苦勞するだろうねえ……。あたしゃそれが心配だよ」

「え？ 心配って、なにがだよ。……ああ、鍛錬か？ そうだな、昼まで時間もあるし、軽く街を走ってくるかなあ。今なら人もいないから迷惑にもならないだろうし」

通行の邪魔になりはしないだろう、しかし時間が時間。それゆえの問題もあるという事に加藤は気がついていない、そして当然のように女将が一言放つ。

「まったく、そうじゃないよ。……それと、鍛えて強くなるうってのはあたしも嬉しいがね？ 今はお止し、坊やの走りはとつても速いだろう？ そんなのを石畳のこの街でこの時間にやってみな？ 煩くて溜まったものじゃないだろうさ」

事実、加藤が全力で街を、石畳の上を走った場合。馬が駆け抜けたのと同じような騒音が響き渡るだろう、実に迷惑である。

しかし、そう女将に言われた加藤は、釈然としない感情を抱いたのだろう。それと同じような声を出した。

「煩いって……、そんなにか？　ちよつと、軽く走るだけなんだけどなあ……、やっぱりダメ？」

「ダメさ。　ほらつ、あたしは朝飯の用意しておくから、勉強でもしてなっ」

女将の言う勉強とは、加藤が昔も言われていたソレと形は違うものだ。しかし、本質は何一つとして変わらない、今後の為になる事なのだから。

「……まじでかよ、俺は鍛錬だけで良いと思うんだけど。ルクータもデイリーもソレが第一つて言ってたのに、くそっ！　ロレンの奴めえ……」

その勉強とは、この街の領主であるロレンに与えられたものである。彼に気に入ったと言われて以来、時々ソレが与えられるのだ。まず本という、貴重な代物を貸し与えられ、それを読み、どう感じたのかをロレンへと伝える。

本の感想を言うという、加藤の世界では過去の産物、夏休みの宿題と言ったものだった。そして加藤はその宿題、いや勉強が嫌いだった。

「別に本を読むのはいいんだよつ。字の勉強にもなるしさつ、おかげで字も基本的な事以外も書けるようになったさつ！　だけど毎回

なんなんだよ、内容がっ内容が可笑しいっ!!」

女将は大声を出す加藤に驚いた様子を見せなかった。幾度か勉強を与えられた加藤がこうなる所を見たのだろう、気にせず朝食の準備を続けている。

「なんなんだ、この『我が娘の素晴らしき歴史・第3巻』ってのは！くっそ、貴重な本だっって言われて読んでみれば、ただの日記じやねえかっ！」

紙というモノ自体は安価なものだ。しかし印刷技術というものが無いために、本というモノは貴重なモノであった。

その事で喜んでいた加藤は、ソレを開いた時に絶望したのだろう。本ではなく、ただただロレンが無駄に難しい表現を用いて愛娘を愛^{レイラ}でる内容が何度も、それも幼少期ならば同じ事で表現を変えて書かれていたのだから。

「この前の1巻は産まれた、笑ったつてのだけでどんだけ書いてるんだつての！そして2巻、こいつぁ酷いもんだつた。パパつて呼ばれた！それだけで1巻の2倍の厚さのソレにびっしり書いてやがったつ」

面白い事に、その同じ事象、レイラがロレンの事を初めて呼んだ時の事を。

ロレンは物語にしていた、これが悔しい事に存外面白かったのだから、加藤は余計に苛立ちを募らせる。

「そして、こいつだ……、第3巻。チラっと見ただけでもう無理だ、なにせ立ったって事だけだから……」

独り言を呟き続ける加藤を見た女将は苦笑いを浮かべつつ、言葉を掛けた。

「親つてのはそういうものさ、あたしがラルと会った時。あの娘はもう5歳くらいだったけど、それはもう……、可愛くつてねえ。だけど、赤ん坊も見てみたいねえ……ねえ坊や？」

女将は意地の悪い、いたずらを思い付いた子供のような笑みを浮かべて加藤に問いかけた。加藤は先ほどまでの感情を失ったかのように、冷静な、冷たい声を以って返事をする。

「……なにが言いたいんだ？」

「なに、あたしは何時でもお婆ちゃんになっていいからね？ それだけだよ、あつはつは」

その様子の方藤を見た女将は若干硬い笑い声を上げながら言う。

「非常に残念なんだが、それは有ったとしてもかなり後だろうな……。……あつ、本当に残念で、無念だよ」

加藤はため息を吐きながら大げさに悲しむ素振りをする。机に肘を置き、額に手を当てて首を振るといふ芝居がかった動きである。

「まったく、ルクーツアさんが失恋したのだ、恋に絶望したのだ言つてたけど。どうやらもう立ち直つたみたいだねえ、ふざけた真似なんかしてつ。心配してただけど、これなら孫の顔を見る日はそう遠くないねえ」

女将はそう言つて、先ほどの笑い声よりも正しく笑いと言える声

を上げて言った。

「だから、遠いって言うてるだろうがっ！」

そして加藤は芝居を止めて、加藤の言葉でそれを否定したのだった。

その後、朝食の用意が出来たので、彼ら2人でそれを摂り、昼まで大した事では無い、しかし親子のソレと言える雑談を楽しんでいた。

「それじゃ、女将さん、行って来るわ。あー、帰りになんか買って来ようか？ ほら、色々大変だろ？」

加藤がそう感じるほど、女将は買出しに出掛けると多くのものを買ってくる。それを運ぶのは大変だろうと感じたのだろう。しかし女将は笑って首を振ることでそれを断る。

「あっはっは、生意気だねえ。あたしはまだまだあの程度なら余裕さっ、これでも昔は……」

「分かった！ んじゃ行ってくるわっ！」

女将が何事かを語ろうとした瞬間、加藤はそう言って急ぎ足で扉を抜けた。

女将はその様子を見つつ、軽く息を吐いて、すぐに自分の仕事をするために奥の部屋へと歩いていった。

「ふう、危ないところだった……。まあ、買出しに行くって時に一緒に行けばいいか」

そう言うと、加藤はサツクルの中心にある広場へと向って歩き出す。

この時間になると、街はかなり賑わいを見せて始めていた。

『砂漠の水亭』がある場所は西通りで門よりの所にある。しかし門とは言え南門以外は交通の面で多用されているわけではないのだ。

どちらかと言えば名も無き街の壁と同様に避難経路としての面が強く、東門ほど脅威が現れにくい4つある門の中では安全な門と言えるだろう。それゆえに、静かな住宅街、宿屋などが多く集まっている区と言える。

だからだろうか、賑わいを見せている店などは長くこの街に滞在、住み着いているヒト向けの日用雑貨や、食材が主な売り物であり、冒険者向けのモノは少ない。それらは東通りか中央、他の街々からでは南通りという具合だろう。

西通りを歩く加藤はそれらを見る事を楽しみながら、ゆっくりと中心広場へと、領主の屋敷へと向っていく。

「ふう、着いた着いたつと。えーっと、誰か知ってるヒトいるかな、居ない場合はどうしよう?」

中央広場、西通りよりも多くのヒトが集まる場所を少し過ぎた辺り。この辺りになるとヒトの姿はなくなっている、領主の屋敷の目の前だからだろうか。

加藤はその屋敷の門の前で、右往左往していた。

「やっべえな、いつもここに来る時はレイラとかデイリーが居たからなあ。そうじゃなくても、招待されてっつてのだったし……」

この世界にはインターホンというモノは当然ながら存在しない。来訪を告げるモノも見当たらない。

普通の家屋にはあるのだが、この屋敷は広すぎるためだろうか。そういった道具、ベルなども無かった。その代わりに本来は番人なりがいるのだろうが、何故かソレも見当たらない。

「んー、大声で呼んでみるか？ いやいや、女将さんが煩いのはダメだって言ってたし。でもあれは朝だからだよな？ 昼前の今なら別に……うん、広場も煩かったしな？」

門の、それも領主の屋敷の目の前で独り、小声で何事かを呟き続ける加藤。

非常に悪印象を与える姿であるが、幸か不幸か、門番含め辺りにはそれを目視出来るヒトの姿が無かった。

「でもなあ、早めに迎えに行かないと……。やっぱり最終手段の大声でっ……っつて、ん？」

門の目の前に立ち、いよいよと腹部に力を籠めて、何者にも遮る事の叶わない、音を用いた必殺の一撃を、騒音という名の暴力を振るおうとした時だ。今の今まで、門番などが居ない事で気にしてい

なかった。

門そのもの、その上の方から、何かがあった。

どうやら、木の板に紙を貼り付けているもの、その上両端に穴を開けている。その穴に通っている紐を門の頂点にある、小さな突起に掛けていることでそうなっているようだ。

「なんだ？ えーと……、おい、いいのか領主。そんなんでいいのかね？ たたく戸締りはちゃんとしないと……ああ、いいや」

その吊るされていた板、いや紙には門は開いていると書いてあったのだ。もしかしたら、加藤が来ないかもしれないのに。来たとしても遅くかもしれないのに、門番すら居ない。

実に無用心としか言い様が無い、が、デイリーは当然として、今はルクーツアまでいるとなればなんととも言えなくなる加藤だった。

「まあ、いいや……つてかもっと早く気付けよ俺。はい、お邪魔しますよーっ」と

加藤が門を潜った時だった、両脇から。門の端と端から何か飛び出してきたのだ、それは槍、いや木の棒だった。

「うおっ！ ……つぶないなあ、侵入者用の罠か？ にしてはお粗末だなあ、本当に大丈夫かね？ これでも領主の屋敷だろうに」

加藤はあっさりと避ける。少し屈んで前に進むという実に簡素で動きの少ない回避だった。しかしそう眩きつつも腰は落としたまま、いつでも彼の自慢の力は発揮できる状態だった。

「……前に来た時は無かったと思うんだけど。いやまあ、門番さんいたし……、居ない時用って奴か？」

ほんの少し、足を動かしながらそう言う加藤。足というよりは、足の裏で何かを探っているかのようだ、そして眼は周りも見渡している。

「ったく、そんなわけないか。そうだとしたら、こんなチャチなものじゃないだろうし……。ルクータかデイリーの意地悪ってどこかね、ほんと困るわ」

そう言うと、再び身体の緊張を解いて歩き出す。しかし、眼だけは時折辺りを鋭く見渡していた、訓練の時の、ソレに似ている。だが、以前の討伐の時に見せた眼よりも遥かに鋭いものだ。

「ふう、ここまで来れば……。流石にロレンっても仮にも領主様だし、屋敷内には無いだろ」

ようやく、屋敷へと辿り着き、門には見当たらなかつたベルを鳴らす。

そして、屋敷の玄関と言つべき扉がゆっくりと開いていった。

「……ほんと、あーいっつのは出来るだけっ!？」

加藤は、気を抜いていたとは言え既にかかなりの力量を持っている冒険者だ。足りないのは実経験のみであり、基礎は既に同年代は愚か、中堅のソレに勝るとも劣らない。なのに、いとも容易く懐に衝撃を受けた、それに加藤は目を見開いて驚きを表す。

「……とつと、ん？」

しかし、それは重くない。いや、寧ろ軽いと言えるものだった。

加藤がその衝撃の正体を見ようと視線を下に向けると、忙しなく動く、何かの耳が見えた。

「……あー、ここは楽しかったか？ それと、昨日は悪かったな……ラル」

それは飛び込んできた獣人の少女、加藤の大事な家族であり、妹のラルだった。

彼女の行動には当然だが殺意どころか、悪意の欠片も無かった。それゆえに避けられなかったのだろう、下手に鍛えた副作用というもので避ける事が叶わなかったのだ。

が、今回に限って言えば、避けずに正解であったと言えるよう。

「遅いよっ！ アタシ待つてたんだよ？ あっ、そだ！ 見て見て！ アイラ様から貰ったのっ！ 可愛いでしょー」

そう言いつつ、加藤から離れて嬉しそうに踊るように回って見せるのは、綺麗な服である。

玄関ホールとでも言うのだろうか。

かなり広い場所であり、奥には扉がいくつか見え、広間の両端からは上階へいく為の階段が見える。

左右対称であり、その中心に美しい衣装を纏った少女が踊るようにしているのだ。

一見して絵画のように錯覚してしまう。

「え……それって、え？ ちょ、服って俺があげた奴はどうしたんだ？」

しかし、加藤はそこを見ない、いや見れなかった。

なぜなら、一目見ただけで加藤の贈ったソレよりもコレは高価な

ものに見えるからだ。

生地がそもそも違うのだろう、実に柔らかい印象を受ける揺らめき方だ。

なにより悲しいのは加藤の選んだワンピースタイプと同じ、シンブルなものなのだ。

色も同じ白だが、同じ白とはとても思えない。

そして、気のせいではなく、贈った時の喜びよりも、大きく喜んでいるように見えるのだ、兄となったばかりの加藤にこの攻撃は致命傷であった。

「んー？ あるよっ！ でもね、これ着てみなさいってアイラ様がねっ！ なんかエリお姉ちゃんは、アイラ様に何か言ってたけど、でも見てよっ！ 可愛いでしょ？ ねーねー」

「……ああ、可愛いと、思うよ。うん、いいんじゃないかな………
…はあ」

加藤は贈り物の価値だけで少女がこうも喜んでいると、自分のものよりも喜んでいると感じてしまい、遂には肩を落とした。

しかし、このような少女でも女性は女性なのだ。そこに恋は無くとも、愛は確かにあった。

それゆえの差である事に、贈り物ではなく、お洒落をしたらどうしたいのか、という少女の心に、彼は気付けない。

「……ん？ アイラ？ レイラじゃなく？」

加藤が大事な何かに気付かずに、他の何かに気付いた時、レイラの声色に似た、しかしそれよりも透き通った優しい音色が彼の耳に届く。

「まあまあ、ラルちゃんも可愛いけれど、貴方も可愛いわねえ。

……あつ！ ごめんなさいね？ 顔立ちじゃなくて、反応がよ？」

「え？ ……つと、あれ？」

「あー、アイラ様だつ！ 見てくださいつ、カトがアタシの見て固まっちゃった！ きつと驚いてるんですよー」

加藤はその女性が誰だか分からず、ラルは嬉しげにその傍へと駆け寄っていく。その女性はレイラに良く似ていた。いや、レイラがこの女性に似ているのか。レイラと同じ茶色の髪を腰まで伸ばしている、ゆるいウェーブが掛かっており性格の柔らかさを一層引き立てているように見えた。

しかし加藤が見ている場所は違った、彼も男の子なのだ。

「カトー君、君の気持ちは痛い程分かるさ。なにせ、私も初めて出会った時はそうだったからね？ だが、ほどほどにしてくれたまえ？ 君でなければそういつた輩は真つ二つにすると決めているものでね」

そのある一点を凝視してしまっていた加藤に、知った声が掛けられた。この屋敷の主であるロレン・サツクル、つまり領主である。

女性は何処から現れたのか分からなかったが、どうやら奥の扉ではなく、左の通路から歩いてきたようだ。

「……っ！ いやー、あつはっは、はは。まあ、うん……、今のロレンの言葉でなんとなく分かったよ。しかし、ロレン……、羨ましいぞこのやろっ」

それによって、固まっていた加藤は再び動き出す。そして最後に

ロレンにのみ聞こえる声量で静かに言うのだった。

「ははっ！ そうだろう、そうだろう？ 紹介しようか、妻のアイラ・サツクルだ。……アイラ、もうラルお嬢ちゃんから聞いているかもしれないが、彼がヒロ・カトー君だよ」

ロレンに言われるまで、腰口を掴んで、喜びを伝えるのに必死な様子のラルと笑顔で話していた女性。彼女はその言葉で、ラルに何事を言った後、綺麗に立って言った。

「ええ、お話はこの子から聞いていますよ？ ……ごめんなさいね、自己紹介もなしに、驚いてしまったかしら？ わたしはアイラ、このヒトの奥さんで……レイラちゃんのお母さんね。よろしくお願ひしますね、ヒロ・カトーさん」

「あ、はい。 ヒロ・カトーです。えーっと、アイラ様とお呼びしているんでしょうか？ ……いいよな、ロレン？」

加藤は領主の奥方という事で丁寧な言葉遣いである。しかし当の領主に雑な言葉を投げ掛けている時点で全てが無に帰している事に気付かない。

「悪くないね、だが、そこまで気を使わなくていいよ。場を弁えてくれさえすればね、……アイラもいいだろう？」

「あらあら、ロレンったら仲が良いのね？ ええ、そんなに畏まらなくていいんですよ。レイラちゃんとも仲良くして下さっているようですし、ラルちゃんに聞く限り、そして……。うふふっ、これは別にいいわね」

そう言いつつ、寄り添いながら言い合う男と女はまさに夫婦だった。そして、それに見惚れつつも、加藤は了承を返した。

「……あ、それじゃあ、アイラさんで。ってかラル、いつまでひっついてるんだよ。こっち来い、さすがにうらやま、もとい失礼だぞ？」

加藤に手振りを交えて呼ばれたラルは、顔を上げて一層嬉しそうに加藤の元へと駆け寄ってきた。

しかし、口に出す言葉はそれと反対のもの。

「むー、カトはアタシよりアイラ様のがいいの？　こんなにお洒落してるのにつ！」

「なんでそうなる、ったくラルは可愛いですよーっと。……そうだ、ロレン？　ルクータ達を知らないか？　ちょっと言いたい事があるんだけどさ」

投げやりに言われたラルは一瞬不満そうな顔をした、が頭を撫でられた事で許したようだ。その様子を見つつも、加藤の言葉にロレンは答える。

「ああ、広間で皆と一緒にいるはずだよ。私もアイラも先程までそこにいたからね？　うん……自己紹介も済んだ事だし、行くところか」

そう言つと、ロレンは妻のアイラと連れ立って左側の通路を歩き出す。加藤とラルも一緒になってそれに続く。

しばらく歩いていくと、以前に来た広い部屋へと続く扉の前に来た。

「カトー君が来たよ、なにやら君達に言いたい事があるそうだがね？ んん？ 何をしているんだい、おおっ、これはまた……」

そう言いながら扉をロレンは通って広間へと進んでいった。笑みを浮かべながら、アイラもそれに続く。

「まったく、ルクーター！ デイリー！ 門でのあれは一体っ!？」

加藤が扉を抜けようとした時、ニーナとアージエが軽くも鋭い突きを繰り出してきた。

しかし加藤は先ほどとは違い回避しない。なぜならば、加藤の傍近くにはラルがいたためだ。

「ぐっ!？」

そう言う言葉を吐いたのは、攻撃を仕掛けた側の2人。ニーナの突きは容易く掴まれ、アージエに至っては軽く蹴り飛ばされていた。

「まったく……あんまりふざけすぎるなよ？ ルクーター、ラルに怪我でもあつたらどうするつもりだよ……」

「あのー、ボクとしてはそろそろ手を離して貰えたら嬉しかったり？」

加藤が掴んだまま歩き出したために、引き摺られる形になっているニーナはそう言う。

「僕としては、げほっ……一言なにか貰いたいね」

仮にも竜人という事だろうか、加藤の蹴りを容易に防いだようだ、

が。

彼の脚力は並では無かった、いくら軽くとは言え蹴りは蹴り、少々苦しそうにアージエは言う。

「ふむ、30点といったところだろうか。どう思う、デイリー殿？」

「ほっほ、そんなところじゃのう……。しかしニーナ嬢には打をいれなんだ、35点じゃな」

加藤の正面、奥にある椅子に腰掛けながら、ルクーツアとデイリーは暢気にそう語る。

それらを全て聞いた上で、加藤はため息を吐きながら、肩を落とした。

「わあ、カトっカトっ！　すごいすごいっ！　なにそれ、ぶーんって！　もっかいやって！」

しかし、そう笑いながら言う少女の声によって復活を果たす。実に容易い男だ、しかしこれが加藤であった。

「だろー？　結構やるようになったんじゃね？　……ってか、その30点だのはなんなんだ？」

「ほっほっほ、なにちよつとしたお遊びじゃよ。門からの動きをここから、見させて貰ったんじゃが、まあその点数じゃな？」

ラルに嬉しそうに言いながらも、軽く問うて来た加藤に、デイリーも背にある窓を指差しながらも軽く返す。

「最初は無機物、次は……。まあオレ達も予想していなかったがラル

嬢だな。最後がその2人だ。最初、そして最後ともに良く避けている。それはいいんだがな？」

難しい話を始めようとしたルクーツアを邪魔するように、他の声が間に入ってきた。

レイラとエリアスール、そしてエイラである。

「ルクー、今はそんなのどうでも良くない？」

レイラがルクーツアの長話を中断させようと言葉を掛けようとする。

「……何を言っている、これはだな？」

「しかし、カトーさん。やはり随分動けるようになりましたね。最初に会った時とは比べ物になりませんか？」

エリアスールは全てを無視して、レイラとルクーツアが話している最中であっても、加藤へと賞賛の声を掛ける。見守ってきた者の成長を喜ぶ音色で。

「おい、オレはだな。カトーのためを思って……」

「まあ、ようやく新兵と言った所でしょうか。ですが、まだまだですわね？ それにしてもアージェさんも情けないですわ」

認めたくはないのだろうが、事実として強くなっている。それでも彼女は彼女だった、加藤が上に行ったのではなく、アージェの鍛錬不足としたのだ。

「避けるのはいいがな、そもそも事前にだ……」

「いや、一応普通に受け止められたんだ。だけど、いやー、あははっ驚いちゃったね、まさか足が地面から離れるとは」

アージエは否定とも、肯定とも取れる言葉を返す。

そして、智はあると言う自負の元、蘊蓄を語りだす、それに対してエリアスールとエイラは同意を返したり、反論したりと話が逸れだしていた。

「諦めろ、まあ鍛錬の時にでも言ってやればいいじゃろっ?」

「……だがなあ、むっ」

その様子を見ていたデイリーは、軽くルクーツアの肩を叩きながら言う。ルクーツアは不満が消えないのか、なんとも言えない顔が一応黙ったようだ。

そして、他の面々の声も落ち着いていた頃、1人が声を上げている。

「いや、色々一斉に言われても分からないから。もうちよい、考えて話してくれよ、まじで」

それに他の面々がもう一度、一斉に、何を言っているのか分からないほどの言葉の奔流を加藤へとぶつける事になるのだ。そんな事を繰り返しながらも、時間は流れる。

加藤はここへ来るまでに、色々あったために、一番伝えたい事を言えずにいた。

しかし、そういうものは言わずとも伝わる事があるものなのだ。

事実、獣人の少女は嬉しげに兄の手を握り締めていた。

兄は妹の手を硬く、強く握り返す、しかし少女の表情に痛みは生まれぬ。同時にとても柔らかく、優しく包み込んでいるのだ。

その繋がりを示すかのように、大事で、大切に、重く、しかし苦には感じぬ軽いもの。家族とは言葉を介する事であるものではなく、そういった何かを介して出来るものもあるのだろう。

第17話 『 段階! 』

「あの後は大変だった、まったくラルがあそこなんかに行くから……」

そう、ため息交じりに椅子へと腰掛けながら言うのは加藤である。

「そうかいそうかい……、それで？ 何が大変だったんだい、大変って言われても分からないよ」

それに笑みを浮かべて聞いているのは女将だ。加藤とラル、そしてルクーツアの3人は、あれから暫しの雑談を楽しんだ後、『砂漠の水亭』へと戻ってきていた。

「なんか、カトが色々動いて、それで色々言われてたよ？ 良く分からなかったけど、うん。まあカトだし良いんじゃない？」

今はもう普段の服へと着替えたラルが、加藤から、そしてアイラから貰った服を嬉しそうに眺めながら言った。それに頷きながら、ルクーツアが少しばかり説明した。

「なに、少々鍛錬を交えていて。その批評ついでに、軽く揉んでやったに過ぎない」

「あれは鍛錬ってよりか、ただの憂さ晴らしじゃねーか……。その後はその後で、あいつらに絡まれるし、散々だったっての」

その様子を夕食の準備をしながら、女将は楽しそうに聞いていた。

そして、一通り終わったのだろう、振り向いて問ってくる。

「あっはっは、そうかい。結局レイラちゃん達にいじめられたかい、そりゃ結構な事さね。それと、ルクーツアさんよ。この子はどうなんだい？」

「ん、そうだな。まあ……ようやく、一番低い段階をクリアと言ったところか」

ルクーツアは一瞬悩んだ、しかし明瞭に成長している事を告げる。その事に女将は顔を綻ばさせる。そして言葉を紡ごうとした時、それを遮る形で歓声上がる。

「おおっ！マジでかよ！？ やっべ、嬉しすぎるな……、ようやくかあ」

「カト、一番低いって言うてるのに嬉しいの？ なんか変なの、馬鹿なの？」

「……ラルがまだ分からないなら、お前にはまだ早いつて事だろうさ。なに、いつか分かるさ……。最低ラインと言えども越えるのは楽なもんじゃないんだぞ？」

「偉そうに言つて……、だってカトだもん。駄目なのはそのままだよ、アタシには分かるもんね」

そうは言つが、その言葉に棘は無い。その理由はたった1つ、それは言葉にせざとも伝わるものを。

「お前は、兄ちゃんの事をいじめて楽しいのか？ ……ったく、将

来が心配だよ、俺はさあ」

帰り道に、恥ずかしげに、照れながらも、遠まわしに、ぼかしながらも。

「はいはい、カトは、お兄ちゃんなんだったらさ。……もうちよつと頑張つて貰わないとねえ、ね！ お母さんっ」

獣人の少女は、確かにソレを口にしていた。心なしか頬が紅潮しているように見える、実に健康的な色合いだ。

それを見て、同意を求められた女将は、笑みを苦笑いに、しかし決して苦くはないソレを浮かべた。

「そうさねえ……少しは安心出来るようになったらしいけども。うん、まだまだ頼りないからねえ？ ……ルクーツアさんも、しっかり鍛えておくれよ？」

女将はそう言いつつも、自分達の様子を恐らくは、己と同じ表情で眺めている男性へと言葉を掛ける。

「はっは、オレに回すか……。いや、ありがたく受け取らせてもらうよ。……そうだな、任せてもらおうか」

そう言つと、女将と目を合わせて、2人揃つてにこやかに喜びを浮かべた。

それをどう取ったのか、加藤は慌てる。

「うわぁ……あの感じはやばい、本気だよ。明日はきつつかもしれないなあ、先輩……どうするかね？」

「……キユー」

小動物は、床に寝そべっている。

一見して、毛皮が落ちていているようにすら見えるほどだ。

「……思っただけど、最近さ？ 先輩、太ってないか？ 運動不足ってか、食いすぎなんだよっ！ もしかしてルクータの真似してんのか？ よせよ？ まじで死ぬぞ？」

確かに、小動物は出会った頃と比べると格段に肉が付いていた。ほぼ室内での行動なためもあるだろうが、森とは比較にならない程、栄養価の高いものを食しているせいでもあるのだろう。

「ええ、このくらいぶよぶよしてた方が可愛いよ！」

そう言つと、ラルは小動物の前足の脇を抱えて持ち上げて軽く揺らす。

少々余分な肉がゆらりと同時に揺れている、ヒトであれば肥満の一步手前と言えるだろう。

「なんてこった！ あの先輩がこんなになっちまうなんて！？ くう……俺が不甲斐ないばかりに、こんな事になって……。よし、先輩！ 明日から俺とジョギングだっ！」

加藤がそう言つと、小動物よりも先に獣人の少女が声を上げた。

「あつ、アタシも一緒に行きたい！ ね、ね、いいでしょー？」

少女が感情を表すように、小動物を激しく揺らす。流石にきついのか、抗議するかのようになり、しかし無駄を悟っているかのようになり、

動物は、か細く鳴いた。

「…………キユク」

「ラルもか？ まあ、先輩も別に良いって言ってるし。でも、ある程度は走るから、きついかもしれないぞ？」

「ほら、アタシも女の子だし、太っちゃ駄目だと思うんだ。なんて言っただけ？ ダ、タ？…………タイアップしないとねっ！」

「そんな言葉、教えた覚えはないんだが…………。けどまあ、間違いではない、のか？ 詳しくは俺も分からないけども。うん、ラルと一緒にだと先輩もやる気出ささうしなあ、なにせ先輩だし？ よし、いいぞ。一緒に協力して先輩を先輩にしようじゃないかっ！」

少女はソレを気にする程では決してない、むしろ逆。もう少し肉を付けるべきとさえ言える体格と言えるだろう。そして、兄はそれは察している、だが同時に彼もまた、同じ思いを抱いているのだ。その笑い合う子供達の姿を、少しだけ武や智ではない、ヒトとして大きくなりつつある弟子の、息子の姿を大人は眺めて口元に喜びを描く。

なにもない、しかしだからこそ大切な時間は、あっさりと、淡々と流れていく。そして1週間という時が流れ過ぎた。

そんな日の昼過ぎに、時は進む。加藤は、街の外で汗を流してい

た、近くにはルクーツアとギョッセ。

「ふう、どうよ……。ギョッセさん、俺も結構やるもんだろ？」

加藤は防壁の外側だと言つのに、いつものように工事のための材木を運んではいなかった。

手に持つのは常の鉄の塊ではなく、意思が通い始めた己の力の化身。

「結構つて……。おれっち、なんか自信なくしちまいそう」

そう声を落として返すのは竜人であるギョッセ。

以前から、時折相手を務めてくれている加藤の兄貴分の冒険者である。

「はっはっは、どうだ。加藤と遣り合うのは久々だろう？ なにか思うところはあるか、お前の意見を聞きたい……。言ってみてくれないか」

そう言うのは、加藤の師であるルクーツア。

その問いかけに、ギョッセはしばし考えを纏めるように目を瞑る。それをゆっくりと開いたと同時に、ふざけた色の無い、冒険者としての声で言う。

「そつだなあ……。おれっちが感じるのは何より軽さだな。動きも軽い、というか一直線すぎる」

防壁の外での鍛錬、領主の屋敷で行うものとは色が異なるのだ。

防壁の修復は大人数で行うため、小型が襲い掛かる事は余程の事が無ければ、群れからはぐれ、混乱したようでもなければ、そうはな

い。
しかし、ルクーツアが万一の時のためにいるが、剣を帯びてはいなかった。加藤達を助けるためではなく、加藤達が万が一にも地に伏した場合はその遺された武器を彼が手に握り、街を守るという意味での保険だと彼は加藤達に言っていた。

そう、これは緊張状態での鍛錬、いや修行。この状態で剣を握るといふ、簡易ながらの経験を積んでいるのだ。

そのために冒険者としては、かなりの実力を備えているギョッセに頼み込んだのだ、ルクーツアとデイリーが頭を下げてまで。

「軽い？ ああ、でも一直線ってのは前にも言われた気がするなあ」

しかし加藤達は、そんな場所だと言うのに暢気に見えるほど落ちて着いていた。

別に慣れたわけでも、油断しているわけでもないだろう。

何故なら目だけは真剣そのものだから、力の化身にだけは意思が宿り続けているからだ。

「そうなのかよ、爺様あたりにも言われたのかね？ まあ、おめえの場合は特殊だからなあ、なんだよソノ軽さはよ」

ギョッセは、先ほどと同じ言葉を用いて言う。

しかし、内包された意味は大きく違う、それは加藤の長所ゆえの言葉。

「確かに軽いが、おめえは軽すぎる。普通の見え見えの動きで考えられるものより少し、ほんの少しだけ上に行く。そして体力が無駄にあっから、それを持続してやり続けていく内に段々とそれが大きく、重くなってきたやがる。いや、怖いねえ」

そう言いつつもギョッセは加藤に比べれば汗の量も、肩の揺れも少ない。体力は同程度かそれ以下、剣も我流であり無駄の多いもので力任せと言つて過言ではなかった。普通の者がソレと同じものをこなせば、見た限りの印象では、の話ではあるが。

「つまり、おれっちが言いたいのはそのままで悪くない。けどもう少し普通のやり方つてえのを覚えた方が良く。兄貴や爺様あたりはおめえを……、ああいいや」

最後の言葉は音にならずに消えた。

それを消すギョッセの顔は羨ましそうにも、嬉しそうにも見えた。

「ふつ、そうだな。今度から、討伐をギョッセと請けさせるのもありやもしれん。どうだ、こいつと組んでみるか？」

ギョッセの様子を注意深く見ていたルクーツアは、何が面白いのか笑みを絶やさずに、試すようにそう告げた。

「え！？ 討伐系を請けていいのかよつ、まじで！？」

その言葉にまず驚いてみせたのは加藤であつた。今の今まで、鍛錬に鍛錬、仕事と言つても防壁修復のみであり、これもまた鍛錬であつたのだから。

そして、ギョッセは先に何事か言われていたのだらう、それ自体には反応を示さない、が。しかし笑みの意味は分からない、悟ろうと目を細めていたが分からないよう、両手を軽く挙げてルクーツアに何かを求めた。

「ギョッセ、お前はカトーをどう思う？ 強いか、弱いか、でだ。」

そしてカトー、お前もギョッセをどう思う、何を感じた」

ルクーツアが、両者にそう問いかけた。

それに2人は刹那の間、考えた後に口を各々開いていった。

「ん？ そうだな、動きが遅いけど、速いって感じかな？ んで攻撃の数は少ないけど、重たそうだった。食らったらヤバイって思えたな」

「なるほどねえ……。おれっちから見たこいつは、動きが速いが、時折止まって動かなくなる。普通なら的なんだが、まあ言ったよな。剣についてだけだよ、軽いが数が多い。ある意味で典型的な剣だが、だからこそその強さがあると思うぜ？」

その意見を聞き終えたルクーツアは何度か頷いた後、静かに言い放つ。

「そうだ、お前達はよく似ている。方法は違うが、どちらも差が激しい……。カトーは速いが軽く、ギョッセは遅いが重い。お前達2人とも、どちらも出来るだけの下地があるというのに、だ」

その下地というのは、時折こういった場を設けている時。

ギョッセも加藤と共に体を温めるために手合わせの前には鍛錬をしているからだ。ギョッセは加藤ほどではないが脚力もあり、長年の冒険者生活で体力も充実している。冒険者としてそれなりにやっているのだから当然と言えば当然だが、決して加藤に劣るものではないのだ。むしろ、追いつくどころか抜かしている加藤に驚きである。

つまり、やろうと思えば加藤とともに風になる事もできるのだ。

同様に、加藤もまた非力なわけではなかった。

最大の長所である脚力というものは長じて腕力にも繋がるのは自然の理。

なにより、加藤には異常とも言える吸収力があつた。

努力した分だけ、それら全てを時を賭けずに己のモノとする誰にでもある、しかしだからこそ稀少な才能が。

やろうと思えば、たとえ短剣であろうとも敵を叩き潰すかの如く、重い斬撃も繰り出せるようになるはずなのだ。

「だが、お前達はそれでいい。今はまだ、まだそれが良い。だがな？ それは捨てるには惜しい、惜し過ぎる。なにより、何時でも何処でも、ソレを頼ってしまいがち、現に先程のでソレが見えた」

加藤はルクーツア、デイリーに剣と盾を与えられていた。

しかし、それを十分には扱えていない、それを己の武器で補っているのは良い。

だが、未熟ながら手に握るソレで出来る場面であっても、脚に頼る場面が多かつたのだ。

ギョッセはどんな場面であろうとも、たとえ一撃を受けようとも己の最大の一撃で潰すという動きであつた。

そして慣れないながら、可能とする脚を持ちながら、常に信頼する剣に頼りがちであつた。

「つまり、なんだ。おれっち達はお互いに学び合えて事かい？」

ギョッセは先の発言でも分かる通り、薄々気付いていたのだろう。己の欠点を、それを信頼できない弱さを。

「そつだ、そのためにカトーの基礎を鍛えに鍛えたと言ってもいい。

ただの一点でも、お前と同じ場所に立たせてやろうとな？ お前を知った時、オレはそう感じたんだ。こいつと共に歩めばカトーは更に大きくなれるとな」

ルクーツアとデイリーは以前、未熟だからこそ、心の芯で感じるからこそ身につくものが、先に進める道があると説いた。

それは、信念だけではなく、当然ながら武にも通じるものなのだ。

「へっへ、いや！ 何が一点だってんだよ、もう同じ……いやっ、おれっちの上つて言ってもやってもいいね？ しかしこいつぁ嬉しいぜっ！ おれっちとしても大歓迎さっ、おうっヒ口、一緒に頑張っつていこうぜ！」

ギョッセは大いに加藤を持ち上げて言う。

彼よりも全体的に見れば大きく劣る加藤の強さを認められる強さを、彼は有していた。

「へ？ お、おう！ なんか良く分からないけども、ギョッセさんなら、うん。俺としても文句なんかねえよ！」

実力的に言えば、遠いが近い、そして兄貴分とは言え他人であるギョッセ。

その彼にも認められるような言葉を受けた加藤は、照れながらも大きな声で宣言する。

「馬鹿やろう！ なにが、さん……だっ！ ギョッセでいい！ これからお互い命を預ける仲なんだぜ？」

そう言いあうと、加藤とギョッセは身振り手振りで感情を表現しながら、笑って話し込む。

ギョッセは既にかんりの力量を持つ冒険者である。自分とは異なる、しかし未完成ながらも己には無い、信頼された強さを持つ加藤と背を合わせれば直ぐに自分の強さに加えられるだろう。

加藤は未熟で、経験というものがほぼ皆無である。

しかしだからこそ、ギョッセという遠い、しかし近い存在と共に剣を振るう事で彼の道はより大きく、広がる事は間違いないかった。

「ふつ、これでいい……。ギョッセの強さはカトーの糧になる。カトーの強さはギョッセの武器に変わる。ようやくだ、ようやく始まりだ。あの話までそう時間はない、だが焦るなよ……。ここからが大事なからだから」

加藤はこれまでもギョッセ以外の武を持つヒトらと。

それも彼以上の実力者と手合わせを行ってきた事はある、しかしソレらはほぼ全て、近い力量の者は女性であったのだ。

だからだろうか、それを学ぶ事は出来ても、それを知る事は出来ても、心の芯で感じ取るには至らないのだ、ぶつかれないのである。

しかしギョッセは違う、己の上に行く実力を持ちながらもルクーツア達ほど桁違いではない身近な強者、そして同じ男性。

さらに幸運なのは、加藤よりも僅かに歳上という事だろう。

これが大いに加藤の心をも助けており、ギョッセもそういった事に頓着しない気の良い青年だった。

「そうだな、おれっちにゃ妹はいねえけど、昔は色々あってよ？ ああ分かるともさ、ラルちゃんが可愛くて仕方ねえんだろう？ うん、おれっちにもよおく分かる」

「だろー？ いやさ、なんか最近まで一緒に朝は走りこみだよ。と
か言ってたんだけど、走りこみというより散歩でさあ。あれだよ、
ずっと手を握ってるの！ ……握ってないと、すんげー睨むんだよ。
それが……。ああ、先輩はそこそこ痩せたからいいんだけど……」

他愛ない会話を楽しんでいる彼ら。その無邪気な笑顔には不釣合
いな無骨な鉄の塊。

しかし子供のそれではなく、かといって大人という程でもない。
一番崩れやすく、一番大きくなれる時、そんな時だからこそ得られ
るもの、失いかねないものがある。

それは大人が指摘しても、中々に難しい問題で。だからこそ、共
に歩める友はなによりも心強い、なによりも心落ち着く。

これを機に彼らは、いや加藤は遂に剣を握って駆けることになる。
今までの集積されたものを試される時が訪れようとしていた。

「よし、初めての討伐系だっ！！」

声を上げて加藤は喜ぶように言い放つ。

「へっへ、おうともよ！ 今回もカルガンだな。 ってもこの辺りじゃカルガンが殆どなんだけだよ？」

その声に笑って頷くのはギョッセ、加藤の相棒となる年上の冒険者である。

「まったく……はしやぎすぎですわ。 というか何故わたくしがカトウなどと一緒に……」

その声を煩そうに耳を塞ぎながら零すのはエイラ、有翼人の女性である。

「ほっほっほ、そう言うでない。 これは後のお嬢のためになる事でもあるのじゃぞ？ 気張っていかんか」

3人を笑って見守るのはデイリー、武人の中でも達人と謂われる強者である。

彼らは討伐系を請けて街道へときていた。

カルガンがサツクルへ向けて来ていた商隊を襲ったとの報があったためだ。

幸い、共に移動していた雇われている冒険者が追い払ったものの、優先順位として街へ行くことを重視したため討伐には至っていないか

った。

「そのために、彼らが赴く事になったのだ。」

「でもさ、10頭くらいいたんだろ？俺らだけで大丈夫なのか？」

先ほどの明るい声から、少しばかり不安を滲ませて加藤が問う。

その言葉に全員が笑って首を振った。

「情けない事っ、屋敷では偉そうにしていたというのに、これは笑えますわっ！ふふっ、まあ安心なさいな。わたくしがいますし

……」

「おれっちに加えて、爺様もいるんだぜ？まあ、そろそろ例の頃合つてもあるがよ？大丈夫つてもんよ、安心しなっ」

「いや、そうだけどさあ。ああ、もついいよ……」

そう言つと、辺りを見渡す加藤。

痕跡はあるものの、姿が見当たらない。

「ほっほっほ、それを大事にする事じゃ。なあに、すぐにそれ以上に恐ろしくなるうて！」

「ビビらすなつての！ああ、ここに居るのがルクーツアなら……、余計に悪くなりそうだ……」

加藤達は会話を交えながら、小型を探す。

そして時間が流れていく、陽が真上から少しずつ傾き始めていた

頃。

「静かに……、いましたわ。情報通りの10数体ですわね？ カトウ、準備はよろしくって？」

声を潜ませてエイラがそう呟く。
言われた加藤は少々声を荒げながら、しかし小さく返した。

「剣も持ってるし、盾もばっちりだったの！ 準備なんてとっくさ
その返答にエイラは呆れた顔を晒したが、すぐに前に視線を戻した。

「まあ、そういうものですわよね。わたくしも最初はそうでしたし、いえ……、そもそも4人などではこのような場へ来る事も出来ませんでしたから、マシかしら」

「へっへ、そうだよな？ おれっちでも、いや恥ずかしいんだがよ
お？ 初めて交戦した時に……」

「馬鹿ども、それくらいにしておけい。ほれ、そろそろ奴らも気が付くぞ？ 良いか、ワシはここで見ておる。3人でまずはやってみせー！」

デイリーの掛け声で、まずはギョッセが茂みから飛び出して小型モンスター、カルガンへと突き進む。

「っ、うおおおー！」

そして、飛び出す時の音に気が付いたカルガン達がギョッセへと視線を向けた時。

一番近くにいた一匹が絶命する、ギョッセの大剣の一太刀はそれほどに重い。

そこに続くように飛び出したのはエイラ。

エイラは両手に棒のような、剣のようなモノを携えてソレを振るう。

「ふっ！ ……ふう、わたくしも実戦は久しくありますが……うん、いけますわね？」

女性らしい動きと言つのは間違いかもしれない。

だが、柔らかい、決して速いとは言えないが正確に急所を攻撃して、遂にはカルガンを地に伏させた。

「はー……すっげえ。ギョッセはそうだろうとは思ってたけど、エイラもすげえなあ」

未だ茂みから飛び出していない加藤は、感嘆の吐息を漏らして、そう零した。

しかし、すぐに頭に軽い衝撃を受けて驚く加藤、デイリーが、軽く叩いたのだ。

「小僧、お主もはやく行け……、なにが凄いや。ほれ、さっさと行かんかっ！」

「うわっ、とつとつ……。うっ、そうは言っても……あぁもう！」

デイリーに押し出されるように、茂みから戦場へと出てきた加藤。

彼は暫く目を辺りに泳がせた後、諦めたように前へ進んだ、いや飛んだ。

「ちよっ、ヒロっ！ おめえ、ばかつ！」

一瞬にして風となり、群れから離れていた2匹を倒していたギョッセ達を通り過ぎる。

そして、残り10匹程度の塊へと、突っ込んでいったのだ。

「こつすりゃいいんだろっ！ のやろっがっ！！」

当然のように、集中的に反撃を受けるが、盾で巧みに流して致命的な負傷は受けていない。

逆に、己を殺そうとしてきたカルガン、だからこそ生まれる致命的な隙へと剣を振るい、瞬時に2匹を倒してしまう。

「……あれ？ やれんじゃね、俺？」

その最初の攻防が終わり、警戒したカルガン達が加藤から距離を取った時。

加藤の顔色が変わる、しかしそれは良くない兆候といえる色。

以前から見え隠れしていたものが遂に前面へと躍り出てきたのだ。

「この、あいつはっ、おいつ！ ……って」

顔色を上気させて、カルガンを見据えている加藤に声を掛けようとしたギョッセ。

しかし肩を強く掴まれてその言葉は途中で終わる。

「いや、良い。これで良いのじゃ、これで……、今の小僧に必要な

ものは力ではなく強さよ」

デイリーは、これを待っていたと言わんばかりの、加藤のそれとは色が異なるが、何かを堪えられないというもの。

しかし少々力の無い声とは違い、目だけは真剣であり、鋭いものだった。

「ははっははは！ やっぱり強くなってる、そうだよ……。あれだけ鍛えたんだ、あれだけ耐えたんだっ！ カルガン程度っ、怖くもなんともねえ！」

先ほどまで感じていた不安、恐怖を拭い去るように大きく叫ぶ。確かに加藤は強かった、カルガンであれば、苦もなく切り伏せられる剣も、カルガンであれば、容易く殺す盾もある。

その上で元々の長所である、脚力、体力がそれを大いに強化し、そして最大の武器を生み出しているのだから。

最初から全力、全速、加藤はそう時間が経たぬ間に更に5匹の力ルガンを討伐してしまう。

「ははっ、なんだ、こんなもんかよっ！ たく、ルクーツアが野犬が可愛いつて言ってた意味が分かるってもんだ。こんな奴らから俺は逃げ惑ったのか？ ったくあの時の俺は情けねえなっ」

尚も叫び続ける加藤。

しかし言葉遣いが、声の色はいつものソレではない。
むしろ震えている、必死に正気を保とうとしている音色。

「すげえ……、おれっちと同じくらいだから出来るたあ思うが、こ
うまでとはな」

ギョッセは、容易く小型を討伐せしめた加藤の技量に驚嘆する。

「……そうかしら。わたくしには惨め過ぎて見ていられせんわ。
まだ屋敷で見せるルクーツア様やデイリー様にコテンパンに伸され
ているカトウの方が魅力がありましてよ」

エイラは、容易く小型を切り伏せていく加藤の様子に嘆息した。

「己を驕らねば、保てぬものもあるのじゃよ……。それだけでここ
までやる小僧は大したものじゃ、同じく、やれてしまう小僧は……、
分かってはおったが見ておられぬなあ」

デイリーは、見守り続ける、その時が来るまで、何かを抑えるよ
うにその場に留まり続ける。

「弱いつ！弱い！！ 俺は強くなってるんだぞ！？ お前らみたい
なのに負けるわけがないだろうがっ！？」

そう叫び、更に一匹のカルガンを切り裂く加藤。

言葉の節々にカルガンを、いやモンスターを見下す色が見える。

動きは少し余裕を与えるかの如く、そして楽しむように徐々に傷
を与えてく剣。

油断しているわけではなく、自分は強い、それを証明するために、
過信を現実のものとするためにそうしていく。

「はあっ、はあっ、ははっ！ どうしたよ!? 掛かって来いよ！
いつまで経つても来ないなら、こっちからっ!？」

残りの6匹もすぐに倒そうと、脚に力を籠めようとした時だった。
今までの力強さが嘘のように膝が折れる。
偽りの強さは、あっさりと霧散してしまった。

「え……? なんだ、まだまだ余裕はあるのにつ、どうして動かないんだ!？」

確かに体力が、脚力が最大の長所である加藤。
疲労によって動かないわけではないだろう、正確には震えて動かないのだ。

今の今までなんとか保っていたものが、恐怖に負けたのだ。
いや、最初から負けていたのだろう、しかしソレを鍛えられた体は騙し続けていた。

「コッコウアアアアア！」

成すがままにされていたカルガン達、敵である加藤の動きが止まった事に気が付いたようだ。

一斉に襲い掛かる、今までは強靭な脚力が生み出した速度ある動きによって掠りもしない殴打が、一発、確かに加藤へと届いた。

「っが!?! ……うあ、……しまっ、くう……!?!」

脚が動かない事に動揺していた加藤は、それに気が付かなかった。
一撃を食らって、少しばかり吹き飛んだ時によく知る。

そして続いて跳びかかろうとしていたカルガン達を視界一杯に認

めた時、加藤は腕を十字に交差させて、身を縮まらせる事しか出来なかった。

「うむ……。先程の一打はそう酷くはないの、暫く痛む程度じゃろうて」

しかし次の痛みは襲ってこない。

目を開けるとそこにはギョッセ達が、残りを殲滅しているものが見えていた。

デイリーはしゃがみこみ、加藤の傷を診てから、安心するようにそう、零した。

加藤は、戦闘に思考を奪われており、ここに他の面々がいる事をすっかり頭から忘れていたのかもしれない。

なんとも間抜けな表情を浮かべた後、顔を歪ませていく。

「デイリー様が嫌いになりそうでしたわ、今の今まで出るなど言うのですから！ それにしても、カトウ？ まったく情けないですね！」

最後の一匹を殴るように斬ったエイラは、汗も拭わずに言い放つ。そして、慈しむような眼差しを向けながらも、反面、彼女は罵声を浴びせた。

「いやあ、おれっちとしては十分褒めていいと思うんだがよ？」

その後ろから、ギョッセは申し訳なさ気に小さく、しかし強く言う。

だがエイラはその言葉で余計に声を荒げてしまう、何度も何度も首を横に振りながら、必死に言う。

「いいえっ！ 仮にもわたくし達の守人となるのですから、この程度では困りますわ！ 本当に、情けない！ それでも貴方はカトウですかっ！？ この場にはいない他の方々もそう思いますわよっ！」

「はあっはあ、はあー……。いや、うん。怖かったあ……。恐ろしかったよ……。だから、倒せばいいって、そうしたら怖くなくなるって思ってた」

何かを耐えるように歪ませていた顔を、ゆっくりと苦い、苦い笑みへと変えて小さく零す。

その言葉を聞いたデイリーは本当に申し訳なさそうに、泣きそうな顔で言った。

「すまんのお……。本来であれば、ゆっくり、ゆっくり覚えていくものじやろう。じゃが、小僧はちいと変わっててのう。すまんのお、怖かったじやろう。すまんのう……」

「いや……。いいんだよ。そもそも俺が突っ走らなきゃ良かった。モンスターを前にしても大丈夫なんだって、勝てるってのを知れば大丈夫って思っただけ」

（ふう……。ルクータから教えて貰ったもの。すっかり忘れてた、そうだよな。強くなったから出来るもんじゃないんだよなあ）

「……。覚悟つてのは、敵を倒すとか、そんなもんじゃーないよなあ。あっさり俺は怖くないなんて、恐ろしくなんか無いって。思っちゃったんだなあ……」

怖いものは怖い、恐ろしいものは恐ろしい、これは普通であり、当然なのだ。

加藤が異なっているところ、それは順序が逆なのである。何よりも怖いと、恐ろしいと恐怖したからこそ、ヒトは強くなるうと決意をし、武器を作り上げ、武を磨いたのだ。

しかし加藤は、それらを知ったからこそ強かった、大きな背中を持った者らに憧れ、目標としたからこそ強くなるうと決意し、剣を握り、それを磨いた。

心の芯から感じる恐怖というものが欠如していたのだ。

野犬の時にそれに近いものを感じた事はあつただろう、しかし目の前にはその恐怖を一身に受けて加藤を守る小さき英雄がいた。

一番大事な物が無かったのだ、なにかから守るのかと、本当に戦うべき相手とはなんなのかという土台が。

「これで大丈夫とは言えぬかもしれん。しかし、お主であればきつと見つけたじやろう。ワシは信じられる、だからこそ」

加藤は恐怖を得たのだ。

怖い、恐ろしい、逃げたい　死にたくない。

それを心の芯で、まさに後少しでそうなっていたかもしれぬという経験を。

実に荒治療、横暴、女将が知ったのであればデイリーに手痛い言葉を投げつける事だろう。

しかし、それでも同時に彼女は加藤へと言うのだろう。

まだまだだと、心配でならぬと、優しく暖かい笑みとともに、抱きしめながら言うのだろう。

恐怖を恥じるように、そこから逃げるように力を振るうことではいけない。

武とは恐怖が下に、足元に、道としてあるからこそ振るえるものなのだから。

力とは恐怖と対峙できるからこそ、震えを奮えへと変えるものなのだから。

ようやく、加藤は恐怖を知った、感じた、覚えた、味わったのだ。今も消えはしない手の震え、脚の震え、言葉の震え。

それを決して忘れないように、決して恥じぬように、決して、決して愛する者へと味あわせないために。

今は消えている己が慢心、喉の痛み、なによりも。

ようやく、加藤は恐怖を知った、感じた、覚えた、味わったのだ。

第18話

『

撥条!』

(後書き)

題名はバネと読みます。

「ふう、やっぱりきついな？　でも、討伐系を請けたおかげかな……もう油断はしない」

汗を拭いながら、加藤はそう呟く。

「まあな？　初めて討伐系を請けた時にやビビったぜ……、あんなにすげえ動きをしてたつてのに、ビクビクして動きはしねえんだからよ？」

同じく呼吸を整えながらも、ギョッセは応えた。

彼らの足元には、既に息絶えた小型モンスターが3頭、カルガンの死骸が横たわっている。大きさは1mほどのものが、石畳の街道の上に転がっている。しかし死因はほぼ同じだろう、鋭い何かで斬り付けられたためのようだ。

一頭は細かく、浅い傷が体中にある、もう一頭は数が少ないものの、大きく抉られるように潰されるような切り傷が、そして加藤達に最も近い場所の一頭。それは無残な姿だ、胴体と脚部は別れている、そして頭部は何か押し潰されたような形であった。

「へへっ、しかし盾でトドメたあ、面白いじゃねえの。てっきり剣でだと思っただがね？」

この討伐系の前に、彼らは幾度も討伐系を請けていた。

その最初、一番最初の時に、小型と向き合った時、加藤は何も出来なかったのだ。本当の加藤は、何1つとして出来なかった、偽り

の自分を形作っただけだった。

ただ、ギョッセとデイリー、エイラに守られていただけ。しかし、それを経験した加藤はほんの少しだけ格好悪くなれたのだ、怖いと感じられた、恐ろしいと感じられた。

そして、それを当たり前だと、恥じる事ではないと思えたのだ。

「あ、まあっ、デイリーに言われていたからな！ 盾は防具じゃなくて武器なんだってさ。こんなに上手くいくとは思ってなかったけども」

そんな事があつたからか、彼は元よりあつた堅実さを更に強めていた。若干、慎重になりすぎる点はあるものの、これで良いのだ、加藤の武器は本当の武器となつたのだから。

しかし、冷静に勤めようとしている所で褒められた事に、若干声を上ずらせて加藤は照れを隠すように慌てて言う。汚れた盾を、布で拭いながらも、言葉を交わしながらも油断はしないように。

「だろうさ、おれっちも驚えたくらいだしよ。しかし、今回の討伐系はひでえもんだな……」

討伐の仕事、これは本来であれば1組4人が普通であるところ、今回は加藤とギョッセの2人しか居なかった。

最初の討伐系、あれ以降も何度か討伐系は請けて来ていた。それはルクーツアかデイリーの内1人、そしてもう1人にはレイラ達の誰か1人が加わっていたのだ。

今回、彼らは街を離れられない。しかし例え討伐系を請けられる、街を離れたとしても、1組2人には変わりがないのだが。

「でも、この時期はいつも忙しいんだろ？ こんなんじゃないのか？」

そう、時期である。

今は本格的に寒くなる季節、冬を目前に控えた肌寒い秋の中旬。この時期になり始めると、小型は蓄えるべく食糧が豊富にある場所へと行動範囲を移しやすい。豊富な場所とは水場が多い場所にも繋がりがやすく、長じて人里の近辺とも言えるのだ。

ゆえにこの時期には小型討伐系の仕事が多発し、冒険者にとっては稼げる時期であり、命を失いやすい危うい時とも言えるのだ。

「まあなあ、でも今回ほどじゃーねえのよ。2人でつてのは今までもあった、けどよ？ それでもすぐに駆けつけられる距離感を保つてのただぜ？」

今回は、以前の森は当然として、街道にまで出没しているのだ。非常に広範囲に、しかし群れとまでいかない少数で現れているのが今回の難しいところである。別に小型モンスターなのだから、ある程度であれば放置したとしても問題は無い。

この時期でなければ、の話である。

「でも、小型がばらばらに出ているって話だし……、仕方ないんじゃないのか？」

「まあな？ その上でこの広さ、そうなんだろうけどよお」

この時期、大型はその限りではないが、中型も同じく食料を蓄えようとするのだ。しかし最初から人里の近くというわけではない、エサとするのは小型モンスターである。大抵の場合は、人里に来る前にある程度確保するために、ヒトの目に触れるのは極々少数。通常通り、4人で一組だとしても、十分に対応が可能なのだ。

しかし今回は、そのエサとなる小型モンスターの多くが逃げ遂せ

たのか、まばらに、人里近くに現れている。つまり多くの中型が、それを辿って来る可能性が高いのだ。

「ルクータもデイリーも、万が一のために街で待機だもんなあ。レイラ達もロレンの手伝いがどうとか言ってたし……」

そのために、街では大型兵器をいつでも使用するための準備を急いでおり、武人の中でも達人と呼ばれる者達は、最優先で守るべきもの、つまりは街に留まっていた。中型を誘引しかねない小型を街から離れた場所で討伐する役目は、少人数であろうともこなせるだろう、中堅以上の実力を持った冒険者に任されている。

加藤は未だ冒険者としては新人に毛が生えた程度のものだが、鍛えられた身体能力、武などで言えばそれに達しているため、今回のようなものとなっていた。未熟な加藤を危険な区域で使わざるを得ないほどに、人材が足りない状況とも言えるだろう。

「それは措いて置こうぜ。ほら、さっさと埋めちまうぞ？　中型が臭いを辿って来たりしたら笑えねえからよっ！」

そう言うと、ギョッセは街道の脇に穴を掘り始める。スコップのような金属の道具を取り出すと、勢い良く地面に突き刺して。

それを見た加藤は、ギョッセの程近くで警戒態勢を強める、いつ他の小型が来ても良いように。

「あっ、ずりい！　俺もそっちが良いのにつ！！　次があったら俺が穴掘りな？　これ凄い疲れるんだからさあ」

「へっへっへ、これぞ経験の差つてえもんよ！　覚えとけよ、冒険者で知らねえ奴らと組んだ時、体力を温存できるのはそうだが、それ以上に精神を休める事を重視するんだぜ？」

そう笑いつつも、穴掘りをしつつもギョッセも気を配り続けているようだ。これでは休まりはしないだろうが、これでいいのだろう。

「それって要は自分だけは死なないようにって事か？ それはなあ、んー……」

「甘ったれた事言ってるじゃねえぞ？ 冒険者ってえのはそういうもんだ。死なないように努力する、まあこつこつのをやり過ぎるのはいけねえがよ」

早いもので、ギョッセは2つ目の穴を掘り始めている。

「笛の音がする場合はその限りじゃねえし、よっぽど強い敵でもそうだな？ 連携しなくちゃ全員お陀仏ってなりや、そうせざるを得ないとも言えるしなっ」

「んー……、そういうものなのか。まあ確かに、俺も知らない冒険者と、ギョッセだったら、ギョッセを助けに行くし……」

そう零した加藤に、ギョッセは大声を上げて笑った。

「へっへっへ、おめえは気持ちわりい例えを出すんじゃねーよ！ つたく、せめて可愛い可愛い女の子にしときな。背筋が凍るかと思っただぜ！ だがまあ、おれっちも同じよ、そういうこった。どうせ使うなら、大事な奴に使ってえわな、命ってえもんはよお」

言い終わると、ギョッセは加藤に近寄っていく。穴を掘り終えたようだった、今度は加藤がカルガンの死骸を引き摺らずに両手で持ち上げて穴へと運ぶ。

これが実に精神を消耗する作業なのだ。小型モンスターはヒトの敵だ、倒さねばならない存在と言えるだろう。

しかしこうして持つと、ヒトとして、特に加藤の場合は地球人として、罪悪感をどうしても禁じ得ないのだ。これを飲み込めるようにならねば、いざと言う時に剣が鈍り、その役目を己で全うする事となるだろう。

しかし、彼らと違いモンスター達はヒトを殺す事に、一片の罪悪感も覚えない。

「うっ、はぁ……。終わつたぞ、これで大丈夫か？」

ギョッセが掘った穴に死骸を入れ、その上に掘り返した土を戻すように被せて終わりだ。それを確認したギョッセは、その盛り上がっている場所の上を幾度が踏みつけるように固めてから、頷いた。

「おう、こんなもんでいいだろうぜ。本当なら色々やりてえところだが、ここは街からも離れているし、そう量もねえからな。……さてつと、そろそろ移動するか」

色々やる、とは死骸は埋めているが、戦いの痕は残っているのだ。そうでなくとも、穴から死臭が洩れる事もあるだろう、それらを消すための作業である。

匂いの強い木々の木っ端と共に埋めたり、街道の場合は大量の砂を覆い被せるなど、簡単なものでも様々だ。或いは、食料とする事も可能だろう、モンスターは種類によって異なるが平均して食べられるためである。

しかし、それをする余裕もなければ、材料もないために、簡易なものとなっていた。

「ん？ あぁ、そつだなぁ、もう昼過ぎだ……。街の近くに戻った

方が良さ気だね」

加藤達は街から多少離れた街道に立っていた。馬は無い、徒歩でここまで来ているために、帰るだけでも数時間を要すだろう。暗くなつては小型と言えども危険が増す、この時間帯で切り上げるのが正解と言える。

「まあ、今の3頭に……、昨日一昨日とで11頭だろ？　かなりの数狩つたもんだよなあ」

加藤は歩きながら、指折り数えて、そう語る。

「んぐ、ふう……。まあなつ、こんだけ狩つた奴らは他にいねえんじゃないの？　おめえも、うん段々良くなつてきてるしよ？　ほら、ちゃんと水飲めつ」

水分を補給しながら、ギョッセも同意を返す。水筒を受け取つた加藤が、水を軽く口に含み、ゆつくりと飲んでいく。

「ふうー、やつぱ旨いなっ！　小まめにしか飲めないのが苦痛だけでもさ」

「へっへ、そうガブ飲みできる程持つてきちやいねえし、それは無駄になるだけだぜ？　考えて飲まねえとな」

会話を交えて街道を進む彼ら、茂みの近くであつた先ほどと違い、ここではそこまで気を張ることは無い。

森などとは違い、見通しが利くためもあるが、加藤とギョッセの2人だからこそとも言える。両者ともに、脚力、体力共に並ではなく、いざとなれば小型相手だろうとも逃げ切れるという情けなくも

強い切り札があるためとも言える。

「さつてと、水も飲んだ事だし……、いっちょ軽く行くか？ 体も冷えてきちまったしな、温まるでしょうぜっ！」

その言葉を残して、ギョッセは加藤の隣から消える。ただ走っているだけ、しかし速いのだ。

加藤は慌てて水筒を仕舞いこみ、それを追っていく。

「っ、おいギョッセ！ いきなりはやめろつての、見失ったらどうするんだよ……。けど、まあ確かにこのくらいが俺らには丁度いいかもなあ」

「簡単に追いついて良く言うぜ……。まあ、そうだろ？ それに確か街道側にはおれっち達以外にも後4つグループがあったはずだ」

瞬時に追いついてきた加藤に苦笑いを浮かべながらも、ギョッセは少しばかり真剣味を帯びた声を出す。

「俺らより奥だと野宿が必要だから、確か熟練の冒険者の人達が10人規模で行ってるんだっけか？」

「ああ、そっちは心配いらねえだろうよ。心配なのは街に程近い場所で行動してる3つの組の奴らさ。こう言っちゃなんだがよ、ヒロと同じく新人の中でもやる奴が使われている区域なんだよ」

それは慣習のようなものである。この時期は街の近くでありながらも、街道に小型が現れる事がある。当然いつであろうともそうなのだが、何時にも増して、そう言える時期なのだ。

そのために新人から成長しようとしている者達のための修練の場

所という暗黙の地なのだ。しかし、それはいつもの場合であり、今回のような場合では本来そうしない。

命を無為に失わせてしまいかねないからだ、だが同様に今回のような場合だからこそ、加藤と同様に使わざるを得ないと言えた。

「それが心配って事か？　んー、今日まで3日、街からここまで往復してるけど近くでは見当たらなかったけどなあ」

「いや、そうじゃねえ……。気が付いてねえか？　段々と接敵する地点が街に近づいていつてることによ？」

「……そう言えば、そうかもしれないな？　それに昨日は奥で2頭、帰りの道で5頭がいた……。一昨日も？」

それを思い出していく内に、加藤とギョッセの顔色は深刻味を増して行く。走っていた速度が、歩みだったと思えるほどの疾さへと変わっていく。

「嫌な予感がしやがるっ！　急ぐぞ、ヒロ！」

暫く走ると、街道が先ほどよりも整備された感へと変わっていく。街に近づいてきている証拠だ、今までのところ、モンスターの痕跡は見当たらない、交戦の痕も見て取れなかった。

「ここまででは、大丈夫か。とっくに新人どもの区域なんだが、考えすぎだったか？」

「それは、街にまで着いてから考えようよ。ひとまず急ぐっ、嫌な予感ってのがしたんだろ？」

加藤はギョッセの話聞き、その表情を見たからこそ感じたのだ。ギョッセは今までの経験を元に想像した、してしまったのだろう、そして経験というものは決して軽く見ていいものではなかった。

「っ、こりゃあ……」

ギョッセは急に足を止める、いや加藤も止めていた。

「……………」

街道の先ばかり気をしていた彼らだが、不意に気になるものが見えたのだ。それは石畳に点々と置いていた赤い点。それが段々と増えていく、そして足を止めた場所の横に逸れた場所に、何かがあった。

それは這つても時間を稼ごうとしたのだろうか、致命傷を受けて尚、守ろうと足掻いたのだろうか、頭部は無残にも潰れている。

「お、おい……ギョッセ？ まさかとは思っけど、いや、そのっ」

「……悪いな、足を止めちまって。急ごう、今はそれどころじゃねえかもしれないんだからよ」

そう言つと先ほど見た、いや自らが行ったものと同じ非道を受けていたなにかを残してギョッセは走っていく。2つのなにか、それは手を伸ばしていた、その方向にはモンスターのモノらしき足跡が見える。

加藤は少しの間、なにかを見続けた後、歯軋りしつつ、それを追う。

「荷物を捨てろっ！ 必要最低限、思いつきり飛ばすぞっ！！」

そう言うとギョッセは大剣以外、万が一のために首から掛けている笛以外の物を投げ捨てる。

加藤もそれに倣い、全てを捨てた。重りは消えた、重量だけなく、重心を崩していたソレを捨てた彼らは更に速度を上げる。

なにかを置き去りにしてから、ほんの少し突き進んだ頃、絶望を報せるためか、希望を託すためかは知らないが甲高い音が途切れ聞こえてきた。

「笛だつ、生きている！ まだ間に合うっ！ ヒロっ！ 行けっ、行けっ行けっ！！」

そう叫ばれた加藤は、一段階速度を上げた。

ギョッセに合わせていたそれは、加藤にとつてはまだまだ風と言えぬものではない。姿勢は低くなる、少しでも抵抗を減らすためにともすれば地に倒れてしまうのではないかと思えるほど。既に剣は抜いている、冷たい鉄は、意志が通った事で力の象徴へと生まれ変わる。

盾を強く握り締める、己の信念で相手の殺意を殺すために。それは以前に小型へと向けたまがい物ではない、加藤のソレだった。

「なんでっ、こんなはずじゃあ！ あのヒト達が時間を稼いでくれたのにつ！」

「うう、怖いっ！ もう、もうっ！」

しかし、いくら風となろうとも、かなり遠い、笛の音の元まではまだ少し掛かってしまう。

そこにいたのは、以前の加藤。剣を握る事で強くなったと感じ、鍛えた事で過信を生んでしまっていた加藤だった。恐怖というものを、未だ知らず、それに直面した時になってようやく気付いた加藤の姿だ。

「はあはあ、なんでっ！ 小型ならもう大丈夫なはずなのにっ！前に着いて行った討伐なら倒せたのにつ！」

新人だろう冒険者は4名、道中で息絶えていた2名は彼らのために立ち向かったのだらう、例えまがい物の覚悟だとしても、それで守れるものが有ると信じて。

そして、それは決して無駄にはならなかった。それがまがい物だと決めるのは己では無いのだ、それを決めるのは。

「うううおおおおおっ！」

まだ遠い、しかし尋常では無い速度で近づいてくる誰かが声を上げる。

それに下を向いていたヒト達は顔を上げる、小型モンスター、カルガン達10匹程度もまたそちらを向いた。

たった一瞬、しかし今まさに死を与えられそうだった新人の冒険者は命の時間を延ばす。

たった一瞬、しかし今まさにトドメを刺そうとしていたカルガン

達の豪腕は止まる。

それで十分、風とはその一瞬で運ばれるものなのだから。その誰かは腕を振るった、風から何かが放たれたのだ。

「へ。　うわぁ!?!」

「コウアアアオ!?!」

それは新人冒険者とカルガン達の丁度中間に突き刺さる、それは剣だった。

その投擲で、また一瞬、命の時間が延びる、これで十全。

「コウアアアオウ!」

強敵が近づいてきていると思ったのだろう、せめて1つでもエサとなる者の命を絶とうとカルガンの一匹が豪腕を振り上げた。しかし、声がした、先ほどよりも近くから、そして。

「つえいいぁ!」

風の勢いそのままに、盾で殺意どころかその主を吹き飛ばす。脚を突き刺すように、大地を踏みしめると、それを軸にして身体を急速に勢いを殺しつつ、半回転した。その途中で突き刺さっていた己の剣を握りしめ、回転が終わると手には剣と盾、加藤の力の象徴が燐と輝いていた。

「間に合った……。大丈夫ですか?　いや、それは……」

加藤が現れた事に、4人は何も言わない、言えない。

ちらりと後ろに視線を飛ばす、新人との事だが、やけに幼く見える。ラルよりも少しばかり上という程度だった。

「ふう……いくぞ。 っえあっ！」

辺りは陽の明かりが薄くなってきた。

そろそろ暗闇が支配する時間帯となるだろう、それを意識して急ぎつつも、明るい声が聞こえて来る。

「いやー、無事でなによりってやつだぜっ！ ヒロも、良くやったなっ！」

ギョッセは地に伏していたカルガン達を引き摺りながら言う。同じく引き摺り、掘られた穴へと入れて戻ってきた加藤がため息交じりに言った。

「いやあ……危なかったけどね。 ギョッセが来てくれなかったら守りきれなかったしさあ」

あの後、加藤は12匹のカルガンと交戦した。

しかし加藤の最大の武器が使えなかったのだ、なぜなら背には守るべきヒトがいたから。その場を離れるわけにはいかなかった。ギョッセが来るのがもう少し遅ければ、加藤も無傷では済まなかっただろう。

「へっへっへ、良く言うぜ！ おれっちが来るまでに4匹もやっち

まいやがってよ？ いやいや、これはあの時の経験が役に立ったな
！」

「ははっ、そうかもなあ。 前までの俺だったら走っていけても、
守りは出来ないし、それどころか普通に俺が死んでたかも」

笑いを交えながら、加藤達は処理を行う。 助かった新人冒険者達
は、街道の端で纏まって震えていた。

「ふう、終わりつと。 おいおいガキども、なーにやってんだ？
ほら、街に帰るぜ？ おらっ、立て立てっ！」

「あっ、ご、ごめんなさっ！ その、あり、ありがと、うござー！」

生き残ったヒトらの代表格らしき女の子、ますますラルと同じよ
うな感じの冒険者は嗚咽を混ぜながらも感謝の言葉を述べる。 しか
しギョッセは頭を乱暴に撫でてから、一言だけ言った。

「別に大したこっちゃねえ。 おれっち達はおめえらを守ろうとした
奴に頼まれただけよ」

一瞬だけ顔を下に向けて悔しそうな、悲しそうな目をしたギョッ
セ。

しかし顔を上げた時には笑みを浮かべて更に言うのだ。

「ほらっ、さっさと街に戻んぞ！ おめえらも疲れただろーしな！
へへっ、頑張ったご褒美だっ、こいつが斡旋所でうめえ飯を奢っ
てくれるそうだぜっ！」

「……へ？ あ、お、俺？ ああいや、うん。 美味しい夕飯を一緒

に食べような！ あそこのおっちゃんは今中々腕が良いんだぞ？」

意味はないだろう、この程度では少年と、少女と言える新人達のソレは治まらない、加藤の時とは違うのだ。

加藤は既に力があつた、それに対抗はできたのだ。彼らはその力すらなかった、そして更に恐怖である、もう何も無いと思えた事だろう。

しかし、そんな加藤とギョッセの背中を見た彼らは、少しだけ暖まるのだ。加藤が以前、どこかで感じたものを胸に宿すように。

「はいっ！ あの、わたしの名前はっ」

代表格の少女が、一度大きく頷いた後に、大きな声で何かを言うとした時だった。

空気が大きく震えた。

大地が大きく揺れた。

薄暗くなっていたために、遠方まで視野が届かなかったためだろうか。

とにかく、加藤は、ギョッセであってもその存在に今の今まで気が付かなかつた。

「グウロウウアアアオオウッ！」

街から然程離れては居ない場所。

そこに強大すぎる脅威が姿を現したのだ、今の加藤ですら到底敵わないであろう、大敵が。

第20話 『 実名! 』

街までは近い、しかし目視できるほど近くはない遠い場所。

この時間帯になり急激に暗くなり始め、恐怖を強める黒が辺りを埋め尽くし始める。それを喜ぶかのように、ただ1つの音が響き渡る。大地を揺らし、空気を震わせる大きな、巨大な音、ともすればその音から黒が生み出されているのではないかと疑ってしまうほどに。

「グウウオオルウアオオウ！」

いや、他にも小さいが煩い音がそれぞれに聞こえていた。

鼓動だ、その音を聞いてからというもの、加藤も、ギョッセも、当然ながら新人達も、その音が煩くて堪らない。その音がまだ聞こえる事に安堵を感じ、同時にそれを鎮めるように、首を振る加藤とギョッセ。

「ふう………幸い、まだ距離があるな。ゆっくりと、街道の脇にある茂みを進む。いいかガキども………、ゆっくりだ」

ギョッセは本当に小さな声でそう述べる。

それに声を漏らさないように口を押さえた4人の新人は涙を浮かべて頷く。それを確認したギョッセ、加藤へと目を向けて先に茂みへと入っていった。それに新人達はゆっくりと、震える足で音が生まれないように硬い足取りで着いて行った。

「……………いったか。まだ見つかってはいないな。よし、俺も」

加藤は街道の中心に位置する場所から、ゆっくりと、背を向けて茂みへと向かっていったギョッセ達が脅威に見つかってしまった時に、時間を稼ぐ囷となるためにその場に残っていた。どうやら上手く茂みに身を隠せたようだったので、加藤もそれに続いて茂みへと歩を進めた。

「おう、助かったぞ。しかしこいつぁ、やべえな。まさか中型が出てきやがるとは……」

茂みに入ってきた加藤に、軽く手を上げて感謝を述べると、すぐに焦りを浮かべる。

「ああ、驚いた……。こんなに近くに来られるまで気が付かないなんて、運が良い事にあいつも俺らに気が付いていないって事か？ それよりギョッセ、あいつはロイオンじゃないよな？ なんなんだ？」

そう、あれは以前にルクーツアとデイリーが討伐し、街へと運ばれたロイオンの姿とは大きく異なるモンスターだった。共通しているのは大きさだろうか、すぐ近くで大地を揺らすソレはロイオンより少しばかり大きいだろう。高さは4mほどだが、体長は暗くても存在を主張する長い尻尾を含めると軽く10mを越えそうだった。

「あいつぁ、中型モンスター。呼称はネミラズツタ……本来は最弱と言える小型モンスターのネミラって奴さ。その群れの長が時たま、こうなる」

そのモンスターの名前ならば加藤は聞いた事があつたようで、顔を上げて頷きを返した。

「ネミラって……ロイオンが好んで食べるっていう小型モンスターじゃなかったか？」

「知ってたのかよ。いや、ああ……、だがネミラズツタになると逆転するのさ。ネミラズツタはロイオンを狙って食べる、中型の中でも強い部類のモンスターだ」

新人達は、茂みに隠れてからというものの、微かな震えが止まらなくなっていた。それを横目に見つつ、加藤は更に問う。

「今の俺とギョッセでどうにか出来る相手か？ 正直に教えてくれ……」

それを受けたギョッセは、目を伏せて、ただでさえ声を落としているというのに、それ以上に小さな声で途切れ途切れに答える。

「大丈夫って言いたいが、……無理だ。出来ても精々のところ……、時間稼ぎが関の山。それも確実にお陀仏っていう嬉しくない特典付きつてもんだ」

「このまま茂みを移動は……無理か」

加藤は最後の言葉だけをギョッセにしか聞こえない声量で言う。

新人達はともではないが、もう動けないだろう。加藤とギョッセだけであれば、ほんの少し、距離を稼げば後は自慢の脚力で気付かれる前にかかなりの距離を稼げる、街に逃げ切れるだろう。

だが、彼らを捨て置くわけにはいかなかったのだ、あの腕を伸ばしたヒトらに頼まれたようなものなのだから。

「いざとなりやあ……ヒ口。おめえが街まで走って応援を呼びに行くんだ。それが万が一になった時、全員で、全員で生き残る最後の手段だ」

「いいや、確かに足は俺の方が速い。だけどギョッセ、お前じゃ相性が悪い。あいつ相手、しかもこう暗い中じゃ大剣は不利すぎる。……俺が残る」

加藤達は緊張しているのだろう、緊迫した状況なのだから。しかしその最中でも、どちらが残るかで静かな戦いを繰り広げている彼らは大物と言えるだろう。それを続けていた時だ、その様子を見ていた新人達が呆然とした顔をしだす。静かな戦いは、ただの悪口の言い合いへと質が上がっていたためだ。

「お前じゃ無理つてのが分からねえのかよ？ この前までビビってたヒョッコが。生意気抜かしてんじゃねーぞ」

言葉だけならば、確かに緊張を解かせる意味もあるのだろう。しかし新人達に見えない目は鋭さを増し続ける。

「良く言うもんだな、聞いたぞ？ ギョッセは初めて小型と対峙した時、漏らしたそうじゃねえの。やばいな、大声で笑っちゃいそうだ……」

その雰囲気だけならば余裕を持っているように感じられるだろう。しかし新人達には未だ感じられないものを醸し出し始める。

2人は罵倒の最中で、お互いに今出来る事を確認しあっていたの

だ、恐怖に耐えられるか、飲み込めるのかと。

剣は、武は、動作は、経験は、その全てに措いてギョッセが勝っていたが、それでも足りないことを。

最後の方で無言になり、お互いに頷き合う。

中型モンスターは、先ほどまでの咆哮を上げはしないものの、徐々にこちらへと近づいてきている。新人達はまだしも、加藤とギョッセはカルガンの血で防具が汚れているのだ。

「いいかガキども……お前達に大事な役目を頼ませてもらう。こいつから聞いてくれや」

ギョッセは静かに大剣を握りながら、ゆっくりと茂みから離れて行く。

「ははっ、俺がこれを言うつても、なんだが恥ずかしいものがあるなあ……。ああお願いつてのは、街に行つて来て欲しい……。街の誰でも良いんだ、中型が現れた事を伝えてくれないか？ ああ、街の近くまで行つたら笛の音で報せた方が良いだろうね」

加藤は笑いながらそう言う。以前に、目の前の新人達よりも遥かに弱かつただろう己が発言し、そして武人が笑みを感じさせる言葉で言ってくれたように。

「そ、そんなあ……おれ達じゃあ……と、とつても」

新人達の中でも一番幼い男の子が嗚咽を交えてそう言おうとした途中。小さな、震えを隠せない、しかし確かに真っ直ぐと伸ばされた腕が遮った。

「わ、わかりま、ました。わたし達が街に行つて、中型がで出たっ

て言えばいいんですよね？ あ、の……誰でもって、やっぱり斡旋所とか、そ、そういうっ、いう？」

嗚咽を必死に抑えたのだろう、しかし時々溢れてしまい途切れ途切れだ。

「そうだなあ、やっぱり名前とか出された方がやりやすいよな。俺もそんな感じだったし。うん、デイリーってお爺さんは知ってるかな？……そうか、その人に伝えて欲しいって言うてみな？」

既にギョッセは、街から離れた方へとかなり移動していた。

大剣をいつでも振るえるような体勢のまま、中型から目を逸らしていない。それを横目で見つつ、目の前の己とは比較にならないほど強い少女を見つめる。

「わかりました……あ、あのっ。その、えっと、ご、ごぶうんを……」

少女は恥ずかしそうに、照れながらもそう述べる。その言葉を、その意味を思い出した新人達は、顔を勢い良く上げて、涙を流す。それは今までのものと同じようで少し違う。

同じように加藤に、離れた位置へと移動しているギョッセへと向けて小さく祈りを捧げると、ゆっくりと、震えながらも少女以外が移動をするために動き始める。

「いいかい、君達が全員立った時、ギョッセが……あっちにいる兄さんが声を上げて反対方向へと走って行く。中型がさつきみたいになるかもしれないけど我慢してくれ。そして、この場所の近くからある程度離れたら、走るんだ。……いいね？」

少女は何度も頷き、目尻に溜まっていた涙が無くなると、顔を上げる。

そして他の新人達の下へと、ゆっくりと移動を開始して、お互いに、全員で目を合わせた後、ゆっくりと立ち上がって行く。

その瞬間、ギョッセが大きく動いた、どんだん街から反対方向へと離れて行く。

そして。

「うわああああ、な、なんでこんなところにー。ちゅうがたがー、だれかーたすけてくれー。おれっちはどうしたらー」

実に不愉快極まりない叫び声を上げた。それは確実に中型にも聞こえたのだろう、そして近辺から漂っていた獲物となるモノの匂いはそこからもするのだ。

加藤達のすぐ傍まで迫ってきていたネミラズツタは首をゆっくりと、ギョッセの方向へと向ける。そして、咆哮を上げるのだ。

先ほどよりも近距離なため、恐ろしいまでの恐怖が駆け抜ける。それは加藤でも足が竦んでしまうほど、咄嗟に少女達の方を向けば、小声で何事かを呟いていた。

「大丈夫、大丈夫。だって助けてくれたもの、あんなに強かったものの、大丈夫、大丈夫」

それは恐怖を感じての言葉だろう、しかし加藤達の身を案ずる意味が強く感じられた。

街までは近いといっても、それなりに距離がある。小型が出るかもしれない、最悪同じように中型に出くわすかもしれない。それなのに己ではなく、加藤達を心配する響き、これは実に加藤の力になっっていく。

そして、その姿は以前言われた言葉を加藤に再度思い出させる、

中型だろうと、小型だろうと怖いものには変わらないと言う事を。

「よし、ギョッセに向って行ったな……。行けっ、走れ走れ走れ！
止まるなよ、何があっても止まらず走れ！」

そう言つと加藤はその場から消えた。少女達、新人を助けた時のように、一瞬で離れて行く。

その姿を頼もしく思い、同時に不甲斐なく感じながらも、少女達は駆ける。

今の自分に出来る事を全うするために。

「下がれっギョッセ！ つうお！？」

ギョッセへと突進するように前足で暴風を巻き起こしながら殴りかかるうとしていたネミラズツタ。それに思わず声を上げて注意を促した加藤へと、中型はその長い尻尾で攻撃をしてきたのだ。

「へっへ、ばっかやろうが。おれっちの心配をする前にてめえの心配をしとけてんだ」

ギョッセと加藤は基本的に逃げ回っているだけだ。時折、大剣で盾で防御をする事もあるが、ほぼ全て回避に力を注いでいた。

「うっせ！ っかしこのっ！ ネズミ野郎のくせして生意気な…

…」

そう、ネミラズツタは影だけ見れば特長的な長い尻尾も手伝って、

ネズミそのものに見える、少々大きいが。

だが明るければまた別の意見を加藤は出すことだろう。

羽の無いコウモリのような姿をしているのだ、ロイオンのような鎧に見える鱗などは有していない。黒く短い体毛、細長い手足、肉付きが薄く、骨が浮かんでいるように見える。そして、長すぎる尻尾という容貌という貧弱なもの。

それを確認せずとも、ロイオンを狩れる存在には思えなかった。しかし交戦状態に突入すれば、やはり中型という事を思い知る、圧倒的に速いのだ。

加藤とギョッセは、冒険者の中でも上位と言える脚力を有した者だ。

しかし、ネミラズツタは優々とそれに追いついてくる、そして何よりも尻尾。この一撃が恐ろしい、体には鎧を纏ってはいないが、尻尾はヤスリのようにざらついている。少し掠っただけで、傷を。否、そこに速度も加われば下手をすれば致命傷となる一撃と言えるだろう。

死角が無いのだ、尻尾が長いために、背後は勿論、左右どちらにも対応しており、振り回す速度もあるために、どちらかをとみかない。

「……っ！ ああくそっ、これじゃ時間切れの方が早いかもなっ！
？ っつか無茶すんなっ！ なに剣振ってるんだよっ！？」

必死に距離を保ちながら、逃げる事しか出来ないでいる加藤。ギョッセも少しばかり大剣でカウンターの如く斬り付けるなどしているが、それは防御のついでであり、攻撃と呼べるものではなかった。

「へへっ、これも経験っつー奴よ！ お前はぜってえやるんじゃねえぞ。どんな事があっても回避に集中し続けるっ！」

ギョッセが軽いとはいえ、剣を向けている事には意味があり、それを加藤も察している。

ネミラズツタにとって、鬱陶しい存在が加藤なのだろう。尻尾で執拗に加藤を追うように攻撃をしかけている、それを少しでも抑えようと、自分にも注意を向けさせようとギョッセは剣を振るっているのだ。

とは言え、ギョッセには細長くも鋭い腕で、時には噛み砕こうとするように攻撃を受けている事には変わらない。

その口元から垂れる涎は、出てきた月明かりを怪しく反射して光る。

「経験とかつ、言ってる場合じゃねーだろうがっ!? つぁ!」

そして大声で返した加藤へと、大声に反応してか、今までよりも正確な致死の一撃が迫る。しかし、盾を構えて防いだのだから、即死には至っていない。

だが、その盾で防いでも軽く触れてしまっていたようで、脚からは血が流れていた。盾で防いだというのに、傷を受け、そして殺しきれない衝撃によって、地面を滑るように押された後、軽く尻を着いてしまう。

「……っ! せいあ! こっちだデカブツっ!」

有効打を決めたと思ったのか、ネミラズツタが一瞬、ギョッセを無視したようにトドメを刺すべく、加藤を見ようとした時。

ギョッセが一気に近づいて、渾身の一撃を前足へと叩き込む。流石に大型と言えども、ギョッセの一撃は効いたようで、苦しむように咆哮を上げた。

「グギョアアオウアオツツ!!」

しかし、その代償は大きすぎた。

加藤が今の今まで避け続けた、加藤の脚力、反応速度を以ってしても寸前で避けられていた一撃がギョッセへと襲い掛かったのだ。

今までであれば、回避は出来ずとも防御は出来ただろう。しかしギョッセは振り抜いていた、それも全力で、致命的な隙が生まれていた。なんとか大剣で防ごうと動かすが、それでは足りない、掠るように、決るようにギョッセに直撃してしまう。

面白いように、ヒトが吹き飛んで行く。それを加藤は起き上がりながら、見ている事しか出来なかったのだ。

「……っのやろう!? ギョッセ、俺が引き付けっ……」

ようやく、立ち上がった加藤。

時間にすれば本当に一瞬、しかし立ち上がるまでが異様に長く感じられた。その焦りに任せて、先ほどとは逆にギョッセの方を向こうとしていたネミラズツタへと加藤が脚の痛みを気にせず飛びかかるうとした時、微かに、しかし強く声がした。

「……い、行けっ! もうガキどものための時間は十分だっ!」

小さく、うつ伏せの状態から腕を突っ張って起き上がろうとしていたギョッセが零れるように言葉を紡ぐ。

その言葉に突撃こそ止めたものの、その言葉の意味を知った加藤が必死に返す。

ネミラズツタはゆっくりと、加藤を無視してギョッセの元へと歩み寄る、どのようにトドメを刺すか、楽しもうとしているのかのよう。

「っ！？ 馬鹿はお前だろうが、ギョッセ！ お前だって言っただろ！？ どうせ命を賭けるなら、大切な奴のために使っつて！ 今がっ！？」

段々と近づくと、それを止めるために動きたい。

しかし一度止まってしまった足は動かない、ここに来て体力、気力ともに限界が近づいてきたのだろうか、それほど傷は深いのだろうか。いや、それ以上にこれまで中型と対峙できていた土台である加藤の内にある恐怖。

これがギョッセの有様を見てしまった事で未だ不完全な覚悟という蓋から溢れてきたのか、或いはどちらともか。

「この状況よう……、へっへへ。経験を積むための討伐系だったか……」

起き上がるうとしていたギョッセだが、再度地に倒れてしまう。

せめてと仰向けになり、黒だけだった世界に生まれた小さな輝きを目に焼き付ける。

「経験、おれっちにや足りなかったのかねえ……、焦らずにやりやー良かった。危うくおれっちのせいで、てめえまで殺しちゃおう所だったぜえ」

脚が動かない、急に震えだした足を、身体を、同じく震えた腕で叩きつける。

何度も、何度も、痛みが増す、熱を持つ、思い出せ、自分の夢とは何かを。

全身から鼓動を感じる、大きく、強く、自分はまだ生きている、動けるのだと。

そう、語りかけるように、乾いた音が響く。

「馬鹿言つなつ、あれは俺がっ！ それに経験だつて！？ それが無けりゃ、何も出来ないのかよっ！？ 俺らのはあの子達にっ！？」

(……あの子達は言ってくれたじゃないか。俺とギョッセは強いつて。強い奴つてのは、大人つてのは、こつという時……覚悟だの経験が必要だなんて言つのか?)

「へっへ、そうだなあ。あのガキどもは助けられたかもなあ……。へっへへ、おれっちもなかなかあ」

中型モンスター、ネミラズツタは遂にギョッセの程近くまで辿りつく。先ほどまで見えていた、小さな輝きは、横から差してきた大きな影で徐々に消えて行く。

(経験？ 覚悟？ それが無ければ動けないんなら、強者じゃないなら、俺はまた弱者に戻つてやる。ああ……そうだ、そうなのか。俺の目標は……)

これが学問であれば、正解というものが確固として存在するのかもしれない。しかし戦闘でなくとも、運動、競技であればどうであろうか。正解などありはしない、本来は正しい行動が間違い、致命的な失敗に繋がる事も少なくないだろう。どれが正しいのか、己の直感か、学んだ知識か、体に染み込んだ動きか。それはどれもが正しく、同時にどれもが間違いという矛盾。

なぜ、経験というものが重要視されるのか、それは単純明快。選ぶためだ、そのありとあらゆる選択肢の中から、たった1つを。いや、もつと言えば覚悟を後押しするほんの少しだけ、しかし大きな手であるといえるだろう。

自分の決断に全てを託す勇気の種火、それが経験なのだ。

だが、間違えてはならない。

経験がなければ種火は生まれず、勇気という炎を抱くことが出来ない。このような事はあり得ないのだから、なぜならヒトは最初から経験を持っていない。

簡単だ、種火など必要ないほどに、強く在ればいいだけ。

だが、間違えてはならない。

強さとは、力とはそう簡単に言い表せは出来ぬものなのだから。力が無いのであれば意思を宿し、意思が消えそうであれば、虚勢を張れば良い。

そう、単純なことである。

何があろうとも、決して諦めない。

これこそが全てに繋がる源流であり、原始の炎なのだ。それは加藤にとつての英雄達ヒーローが同じく背中で語り続けた言葉。

ある時、無力に嘆こうとも足掻く事を止めはしなと言い切った者達がいた。

ある時、どう見ても敵うはずのない大敵を目の前にして、小さな体に全てを宿して抗う者がいた。

ある時、弱者だった己に強者という存在の道を示した者らがいた。

ある時、自分は臆病者だと吐露しながらも、強く優しい眼差しを向けた者がいた。

ある時、未熟な己を誰よりも信じてくれる者が出来た。
そして、命を失いかねない現状でも、己に逃げると笑えつて言える者がそこにいる。

そう、以前思い知ったことだ、己は既に最強なのだとなればこそ。

「はっはっは、悪いな、ギョッセ！ 俺は勘違いしてたみたいだっ！ だからっ」

動く、脚には熱せられ、叩かれた事によって鍛えられた経験が舞い戻る。

握る、腕では苦悩し、叫んだ事によって恐怖に沈みかけた覚悟を取り戻す。

前を向く、そこには夢の、目標の姿は一切見えない。

あるのは唯、己が守らねばならない大事な友の姿だけ、彼は今。

「今だけは、俺が……今だけはならないといけないっ！」

遂に、ギョッセの傍まで辿りついたネミラズツタ。

時間にすれば僅か数十秒、しかしその間に徐々に顔に諦めが浮かんでいるギョッセの変化を楽しんでいた。

もう十分とトドメを刺そうとした時。

「っああああえええい！」

風が吹く、しかしいつもの速いだけの疾風ではない、力ある暴風だ。

盾を前面に構え、剣を中腰に構えたままの跳躍、そして中型のギョツセの命を奪おうとしていた細い腕へと激突した。

それが加藤の精一杯、諦めないで行った一撃。

「……うあつ！ つと……うあつ、くそ」

流星に無理があつたのか、脚は動かない。腕には力が籠らない。全てを出し尽くしてしまったのだ。

「どうよ、俺にも出来たぞっ！ ちゃんと進めたっ！ はははっ！ それに脚が痛くて堪らないんだ、どうせ逃げ切れはしなかったさ。だったらやりたい事をしてもらいたいだろう？」

「っの馬鹿がつ！ つたくよお……へっへへ！」

ギョツセと同じく、仰向けに倒れて、笑い合う2人。

そんな2人へと、激怒の咆哮を上げる存在、それは先ほどまでと姿が少し異なっていた。

前足の片腕が無いのだ、ギョツセに斬りつけられた重い斬撃に、加藤の全てを賭けた暴風が襲ったのだ。

いくら中型といえども、そうそう耐えられるものではない。

どれほどの怒りなのかは分からない、ただの獲物に、遊ぶ相手にここまでされたのだ。

最早遊びはせずに、すぐさま殺そうと動いた時だった。

「グツギヤオオオウンン！！？」

先ほど、ネミラズツタが現れた時と同じ、いやそれ以上に大地を震わせる衝撃が空を切って現れ、中型へと当たると爆発を起こした。それから遅れて空気が震える音が聞こえてきた。

「はあ？ なんだあ、今のあよ」

諦めではなく、全てをやり遂げた充足感にすら浸っていたギョッ
セは、痛む身体を気にせずゆっくりと、頭を上げた。

そこに見えたのは巨大ななにかだ。中型なぞ比べ物にならぬ程の
影の塊が押し寄せてきていた。その中からいくつかの影が突出して
くる。

「…………ぬううおおおうあああ！」

小柄な影は大きな、大きすぎるランスを一直線に構えて砲弾と化
している。

「…………つせえああえええいあ！」

その隣に見える影は銀色の煌く剣を両手に握りしめて地面を滑る。

「…………おおおおおおあああああ！」

その後ろからやや遅れて飛び出してきた影は立ち止まり大きな何
かを構えた。

「グルアアオオオオウア！！…………グギヤアオ！？」

そして最後に出てきた影から一矢が撃たれた、あつと言つ間に先
を走る影を追い抜かし、この暗い中で見事に中型の尻尾の付け根に
命中する。

それは致命傷足り得ない、しかし一時、恐ろしい凶器の動きは止

まる、恐ろしい脅威は驚き騒ぐ。

「……この隙っ、もろうたわっ！！！！」

そして砲弾が胴体へと突き刺さる。恐ろしい痛み、ネミラズツタは身体を逸らせるようにして悲鳴を上げる。

「……随分楽しんだなっ、十分だろう！！」

そして銀色の煌きは赤いドレスを纏うために首筋へと踊るように交差した。

痛みの声を上げるために上を向いていたために、無防備となっているそこへ、あっさりと、抵抗を感じさせない一閃が走った。

先ほどまでの暴力を、殺意を振り撒いていた咆哮は、力なく小さくなっていく。そして、その巨体に似合わぬ軽い音を立てて、大地へと伏したのだ。

「……………なんだかなあ」

「諦めろ、おれっちはもうとっくに思い知ってる」

その様子を、頭を軽く上げながら見ていた2人はなんとも言えない、笑顔を浮かべていた。

「ふう……………うむ、どうやら仕留めたようじゃのう」

大きなランスを担いだ小柄な影、デイリーは近寄って確認を取ると、ようやく何時もの爺らしい声を出す。そして倒れている加藤達の元へと銀色を携えた影、ルクーツアと共に歩み寄ってくる。

「どつやら、間に合ったか……ふっ、お前達にしては上出来すぎる。よく、よくやったな」

ルクーツアはより重症そうに見えるギョッセの下へ駆け寄り、抱きかかえながら、加藤へも聞こえる大きな声で言った。

「ほほっ、うむ……。あれを得てからまだそう経っておらぬというのに、よおやったのう」

デイリーが加藤の下へと近寄ると、そう零しながら、同じく抱きかかえる。

「へっへへ、いやあ命拾いしたなあ。おう、相棒よお？」

「はははっ、そうだなあ。こうなると怖くて堪らなくなってくるよ、誰かさんみたいに漏らしそうだし！」

大人の背に抱え直された加藤達は、その安心できる場所で下らない、だからこそ愛おしい喧嘩を始める。

「はっはっは、ギョッセ……。お前の事だ、カトーのために少しばかり無理をしたんだろう。良くやったな？」

「へっへっへ、おれっちはこいつの兄貴分だぜ？ 弟分のためになら、多少どころか無茶無謀、どんと来いってんだ」

「それは結構、だが良いか？ そういう事を言うのであればだな……」

ルクーツアはギョツセと加藤、2人揃おうとも今はまだ中型を倒せるとは思っていない。しかし、大怪我を、このような負傷を負うのは加藤なはずなのだ。

だがそれはギョツセだった、それを感謝し、そこを大いに褒めると同時に、そこを指摘し始めていた。そんな様子の2人を前に見つ、デイリーも口を開いた。

「……うむ。いやはや、あやつ足を落とすとはのう。小僧……、いや」

ルクーツアに倣ったわけでは無いだろう、しかし言わずにはいれない。

デイリーが何事かを言おうとしたが、それを止める。

「……ん。なんだ、デイリー？」

「ほっほっほ！ お主はまだまだじゃと言いたいただけじゃよっ！ なんにせよ、良くやったの……。のう、ヒロよ」

「ん……うん。ははっ、デイリー……夜空も悪くないなあ。今思うと、こうして眺めるのは初めてかも？」

完全に黒が支配する時間帯。しかし、そこには数々の小さくとも強い光が点々と輝いているのだ。いつも変わらずそこにある小さな輝き。

しかしどうして、こうも美しく見えるのだろうか。なんら変わっていないというのに、今夜の輝きはなによりも眩しく、頼もしい。

少なくとも、加藤はこの輝きを一生忘れないだろう。これから、彼の胸の中でその光景は、その時感じたソレは、その輝きを失わず、いつかどこかでそれが必要とされる時が訪れるのかもしれない。

い。

ただ、今はただただ、夜空を眺めながら、ゆっくりと街へと帰るのだ。

大切な家族に怒られるために、大事な友に叱られるために、なによりも。

第1話 『 快癒! 』

外へと出れば寒いと感じるが室内で暖房を焚けば暑いと感じる、そんな季節。

ヒトもモンスターも関係なく寒さに凍える冬は過ぎ去ろうとしており、春の日差しとの再会を喜ぶ頃となっていた。

肌寒さを感じるが、それが心地よい室内に勢いよく何かを叩く音が響いた。

「ってえ……、もうちょい優しくして欲しいんだけども」

完全に塞がった傷跡をさすりながら小言を漏らしたのは加藤である。そう言いつつも彼は立ち上がり何かを楽しむように身体を揺らしていた。

「あっはっは！ なあに、これくらいなんでもないだろうさっ。うん……とっくに治療は終わっていたけど、ようやく完治したね」

優しい眼差しの中に真剣な色を宿しつつも見つめていた女性、女将は笑いつつもそう言った。

女将はあの夜には酷く狼狽していたものだ、それが今では常の女将に戻っている。

そんな笑顔の女将の言葉は、加藤が待ちに待った言葉でもあったのだ。

「ははっ、よし！ それならようやく鍛錬とか諸々やっても良いってことかっ！」

今すぐにも『砂漠の水亭』を飛び出して行きそうだった彼に、制止の声を掛ける者がいた。その声の主は笑いを浮かべつつ、加藤に軽い口調で言うのだ。

「待て待て、直ったと言つてもいきなり鍛錬は出来んぞ？　まずは軽く走り込み、そして工事系、その後に鍛錬を行う。なに、今のお前ならばすぐに取り戻せるさ、焦ることはない」

声を掛けた男、ルクーツアはそう言う。加藤は不満気ながらも、しぶしぶとその言に従つてベッドに腰掛けた。

「そうかねえ……いやまあ、うん。それはいいけどさ、もう出歩いてもいいんだろ？　それならギヨッセのところにっこうかなあつて思つてるんだけども」

ギヨッセは加藤よりも深い傷を負っていた。そのために斡旋所に隣接している病院と呼べる施設に入院しているのだ。幸いにして命に別状は無いものの、一時は意識を失い体温が下がるなど、危険な状態にまで陥つた事もあつた。

加藤の怪我と言えるものは脚のみで、しかもそう深くはなかったために、全治1週間、完治で1ヶ月ほどと、中型との戦いで傷にしては軽すぎるものであつた。

「なんだ、ギヨッセの様子であればこの前にもオレが、それに……なんと言つたか……」

加藤の問いに、ルクーツアが答えるが途中でそれが止まる。しかしその後を女将が継いで口にする。

「まったく、ちゃんと覚えなさいな。マナちゃんだよっ！　カトー

の坊やの見舞いにも来てくれたじゃないかい」

そう、加藤とギョッセが助けた新人達の纏め役であり、彼らを救うために駆けた少女である。他の新人達は一度来て以来仕事が忙しいのか来ていないが、マナはあの夜から毎日のように加藤とギョッセの下へと感謝を述べに来ていたのだ。

「ん、そうだったか……いや、すまん。まあ、その娘から聞いていないのか？」

加藤の怪我がそう酷くなく、その上に女将が付きっ切りで看病している事を知った少女は、ギョッセの方へと集中して赴くようになっていた。

「いや？　なんか最近は全然来ないんだよな。だからギョッセの事はこの前にルクータに聞いたのが最後なんだけど……。俺なんかしたっけなあ」

それでも時折、この宿を訪れてはギョッセの様子を教えに来てくれていたのだ。

しかし、少女は加藤と会話をして以来、まるで避けるかのように訪れる事が無くなったのだ。

「あつはつは、なあに。大した事じゃないさっ！　なんなら今からでもギョッセ君の所にいっついで？　この時間帯ならあの娘もいるだろうしね」

女将は悩み始めた加藤を見ると笑い声を上げて、彼の背中をまた勢い良く叩くと扉を指してそう言った。

「ええ……、今にして思うとアレ、完璧に避けられてなかったか？
なんだか行きづらいなあ」

「小さい事でうじうじと……、どちらにせよギョッセは気になって
いるんだろっ？ ほら、オレも一緒について行ってやるから行くぞ」

ルクータは小声で何事かを言い出した加藤を引き摺るように宿を
去って行く、病院へ向うのだろう。その様子を苦笑いを浮かべなが
ら、首を軽く振って見送った女将は部屋の後片付けを開始した。

「へえ、幹旋所の隣の建物ってあんまり意識してなかったけど……。
これが病院なのかあ」

加藤の目の前には幹旋所が見えており、その建物よりも小さいが
清潔感が漂っている建物がある。小さな建物だと言うのに入り口が
幹旋所のソレよりも大きいのが特徴的だ。

中に入ると、驚いた事に床が木の板ではなく、石であった。

「うお、これって大理石！？ ……じゃないか。でも綺麗だなあ、
つるつるしてるや」

「木製の床では血液などが染み付いてしまうからな、こういった治
療を行う場は大抵の街であればこんなものだ」

「へえ……女将さんの宿もこんな風にしたら民宿って感じからホテ
ルって感じになりそうだなあ。今度言ってみようかなっ」

石材を敷いている床は、この世界の木製の床に比べれば格段に彼のいた世界に存在しているものと近いと言えた。それを身近で感じたいと思っただけか、そう零す。

しかしルクーツアが苦い笑みを浮かべて首を振った。

「それは無理だな……、この床などに使われているモノは高額過ぎる。一枚で結構な値段……、床一面ともなれば恐ろしい額になるんだぞ？」

この床に使われている石は街道に使われているものとは違い、丁寧に磨きを掛けられているものだ。研磨技術自体はあるものの、全てが手作業なために恐ろしく高価な代物であった。

「はあ？ この石がそんなに高いのかよ………だったら服とか剣とかのが高い気がするんだけどなあ」

「服飾はオレには良く分らんが、剣などの武具は必要としているヒトが大勢いるのさ。そうなると当然作り手も大勢いることになる、だから安くできるわけだな？ だが、こういった石材は………」

ルクーツアが小難しい話を始めようとした所で、女性の声が届く。

「あのですねえ、あまりここで長話は困るんですよ。というか、新人さんっ！ 久しぶりですね、中型とやり合ったと聞きましたよ？ 凄いいじゃないですかっ！」

そう言ったのは、有翼人の女性。加藤が冒険者として登録した時の受付であったヒトだった。

「え？ ああ、受付のお姉さんかつ、久しぶりです。まあ、やり合ったというか、逃げ回ったというか……、あれ？　なんで受付のお姉さんがここに？」

加藤は、褒める色合いが強くなる言葉を受け、照れながらもそう言った。その質問を受けた女性は、あまり無い胸を張って自慢気に言う。

「幹旋所の職員はこの職員でもあるんですよ！　最近なんて包帯を巻くのが上手になったと先輩に褒めて頂いて……って、それよりどうして新人君がここに？」

「いや、中型とやり合ったのを知ってるなら、俺が誰と一緒にやり合ったかっつても知ってるでしょ？　そいつの見舞いですよ」

加藤が説明とは言えないものを教えると、しかし女性には伝わったようだった。

手で招く動作をしてから、加藤達の前を歩き始める。

「ああ、そういうことでしたか。確か、ギョッセさんでしたよね？　案内させてもらいますよっ」

受付の、今は病院の職員らしいが医師には見えない女性が1つの扉の前で止まる。扉を軽く叩き、何事かを扉越しに伝えるとゆっくりと扉を開いた。

「……ん？　なんだ、ヒコと兄貴じゃねえの。来客とか言うから焦

「たぜ」

身体中に包帯のようなものを巻き付けている、一見して誰かは分からないほどに痛々しいというよりも笑いを誘う格好の男がそう言った。

しかし声からすぐにそれが誰かは分かったのだろう、加藤は笑いつつも部屋へと入って行く。

「ははっ、ギョッセ。もう大丈夫だとは聞いていたけど、酷い格好だな？」

そう言われたギョッセは、頭を掻きながら訳を話す。

本来はこんなものではない事を、親身に看護している少女の手によるものという事を。それをギョッセが言い終わると、ギョッセの後ろから顔を赤くした少女が声を荒げて姿を見せる。

「ちっ、違います！ ギョッセさんが歩けるかどうか確かめたいとか言うからっ！ だから動けないようにっ！！」

どうやら、加藤達の反対側にある椅子に座っていたために、見えにくかったようだ。勢い良く立ったために、その椅子が音を立てて倒れた。

そして彼女は動けないようにとそうしたと言っが、どう見てもギョッセは動けるだろう。

「ちょっとした冗談だったのによ？ おれっちも伊達に冒険者やってないんだ、こういう時は医者に言われた通りにするのが利口つてもんだからよお」

そう言っつと頬を膨らませている少女、マナへと色々と小言を言っ

ていく。しかしその言葉には責める色は無く、少女も辛さではなく、拗ねたような顔で短く淡々と返事を返していた。

「あー、まあ元気そうで良かったよ。……な？ ルクータ」

しばらくの間、ギョッセとマナのやり取りを黙って見ていた加藤。居心地の悪さを感じたためか、扉のすぐ近くの壁に寄りかかっていたルクーツアへと言葉を投げつけた。

「そうだな、隠れて身体を鍛えていたお前とは違い、静かに療養しているようだしな？ とは言え……、まだまだ復帰までは掛かりそうだな？」

その問いには、未だ扉の前にいた受付の女性が答えた。

そして何やら小難しい単語を交えた会話をし始めたので、幹旋所でという流れになり、ルクータと女性は加藤達を残して部屋を出て行ってしまふ。

「……………えーつと？」

「へっへ、まあおれっちが仕事を請けられるようになるまで結構掛かるんだよ。そうだな、大体退院まで夏の色移り、普通に動けるようになるのにまたちよいと、そっから体を鍛えなおしてってとこだからよ？」

恐らく、加藤と同様に軽いものを行っても良いのか否かを聞きにいったのだろうとギョッセは続けて言う。

「ああ、そうなのか。ギョッセが元気つてのを見れたし、一個だけ聞きたいのがあるんだけども、いいかな？」

その問いは、ギョッセを見てのものではなくマナを見てのもの。今までの会話には混ざる事が出来ずに、倒した椅子を戻して静かに座っていた少女は驚いたように顔を上げる。

「えっ!? わ、わたしですか? な、なんですか!?!」

少女、マナは酷く慌てた様子で、早口でまくし立てる。

「へえ、マナに何かあるのか? へっへへ、こいつぁ面白い! 遂にお前に春がやって来っ!?!」

それらを見てどういう訳か、ギョッセは面白い事にそのように解釈したようだった。しかし話の途中で少女に足を叩かれたために、少しばかり痛みを感じてそれを止められた。

「あー、いやそうじゃなくてな? それとマナちゃんもギョッセは重症なんだから、そういうのは控えめにな?」

苦く笑いつつも加藤は感じていた事を言っていく。それを受けた少女は驚いたように、次いで恥ずかしそうに俯いて、小さく零した。

「だって……ずるいです」

その小さな声は、狭く静かな部屋だったために加藤達の耳へと届く。

その意味を理解できずに加藤は首を傾げ、しかし口を開いた彼女を見たギョッセは更に笑みを深めた。

「カトウさん、わたしと話してた時に言いましたよね? まだ冒険

者を始めて1年も経ってないってっ!!」

その声を張り上げると、言葉の奔流を加藤へとぶつけた。

曰く、師匠という貴重すぎる存在がずるい、1年も経たずに中型を相手に出来るなんてずるい、小動物せんぱいに懐かれていてずるい。などと徐々に支離滅裂な内容へと変わっていく。

「えーっと？ 俺がずるいから嫌いって事なの？」

嫌い、その言葉を聞いたマナは慌てた素振りですら否定の言葉を投げつける。

そして先ほどとは異なり小さく、零すのだ。

「そうじゃないんです、羨ましいなって。だけどわたしよりも冒険者暦が浅いのを聞いた時、師匠さんがいるってのを聞いた時に。悔しいって、卑怯だって……。それで、顔を合わせるのが、その」

徐々に少女は顔を歪めていく、それを見た加藤は慌てて何かを言おうとする。

しかしそれを腕を伸ばして遮って、反対の手で少女の頭を撫でる男がいた。

「へっへっへ。なあに、そいつが普通って言ったろ？ いや、面と向かって言えただけおめえは偉いぜ？ …… ちょっとした嫉妬つてえ奴だよ、おれっち達が助けたもんだから変に美化してたみたいだよ？ きつと歴戦のだから……へっへ、おれっちはともかくヒロモとはっ、笑えるぜ！」

ギョッセは優しくマナへと語りかける、そして少女は泣きそうな顔から、恥ずかしがっているような、照れたものへと変わっていつ

た。

それを見たギョッセは、今度は加藤へと言葉を紡いだ。

加藤はまだまだ弱い、それは加藤自身は当然としてルクーツァ、デイリー、女将なども口を揃えて弱いと言う。

しかしそれは加藤の目標を考えれば、である。普通の冒険者としては既にギョッセと同様、中堅以上の実力を有している強者であると言える。マナは新人では期待されている人材だった、だからこそ危険な時期にあの区域を任されていたのだから。

しかし、今まで傍にいた熟練の冒険者が傍に居ないというだけで、小型相手に苦戦を強いられ、そして数が増えたために何も出来なくなってしまう。

そこへ現れた加藤達、どれだけ眩しく見えた事だろう、どれだけ憧れた事だろう。

そして事実を知った時、どれだけ愕然とした事だろう、どれだけ己との差を嘆いた事だろう。

(ギョッセの言葉には言いたい事があるにはあるけども……。そっか、確かに俺は恵まれてる、恵まれすぎてるよな)

「えっと、そのごめんなさい。それで会いにくくなっちゃって。ギョッセさんの所にずっと、それで、あの」

頭を撫でられながらも、マナはゆっくりと語る。その姿はどこかで見た、いや感じた事のあるものだ。

加藤の目標としている者達との差はあまりにも遠すぎたために、嫉妬を感じる事は無かったが、それに近いものは感じていたのだから。そうなりたいと、そうありたいと、もしもその者達が加藤と同年代で、それを目指していたのが己よりも遅いというのに、己を追い越していたら、だとしたら。

「そっか、うん。……俺は色々とずるいかもしれないけど、かなり努力してるからな？　ははっ、そりゃマナちゃんよりも、強くなるのは当然だな」

乱暴な、残酷な、軽薄な、侮辱とも言えることを、加藤はしかし真剣な眼差しで語る。続けて更に言葉を重ねるのだ、マナは弱いと未熟だと、努力が足りないと。彼女の事など然して知らないというのに、しかし現実として冒険者としては悲しいほどに無力なのだからと。

だからこそ、今だけは慢心してでも、今だけは己に驕ってでもと淡々と告げていく。

「……………まあ、そういう感じだね。　だから、そのさ」

言い終わると恐る恐る、彼女を見る、しかし想像とは異なり彼女は拗ねた顔を見せていた。

それを不思議に思い、尋ねてみるが彼女ではなく、ギョッセが笑いながら答えたのだ。

「へっへっへ！　おれっちと同じ事言われて悔しいんだろっさっ！　実はよ、おれっちも言われたのよ、ヒロは卑怯だ！　ってなあ」

その時、命を預け合える、ようやく見つけた最高の相棒を侮辱されたと感じてしまったギョッセは、恐ろしい形相で今の加藤と似た事を言ったそうだ。

お前が言うなど、何も出来ないと感じたのはあの時が最初ではなはずだと、どうして更に努力をしなかったのだと。まだまだ小さな女の子であるマナに、しかし同時に冒険者である彼女だからこそ、ギョッセは年齢を無視して厳しくそれを何度も、何度も言い続けたのだ。

流石にその時ばかりは大声を上げて、泣きに泣いたそうだ。しかし不思議なもので、それ以来というもの少女はギョッセを慕いに慕っている。

「えつと？　こう、負けるもんかつ！　的になればなあと思ってたんだけど？　変に氣遣われるのは余計にムカつく。……というか辛いだろうなあつてさ？」

加藤は意を決して言ったのだらう、だというのにこの状況。彼は非常に気まずそうに、居た堪れない面持ちで語る。それを見たギョッセとマナは顔を見合わせて、笑い声を上げた。

「へへっ、気にしてませんよ？　言わないといけない事だって、言われないといけない事だつて言われてましたから。　ね、師匠！」

「へっへへ、生意氣言うなつての！　それに、師匠なんてやらねえつて言つたらろうがっ！」

呆然としている加藤を残して、2人は笑い合う。
ギョッセに激怒された時、マナは落ち着いたギョッセに言われたのだ。

それは自分も感じた事だと、だからこそ負けないためにも、背中を合わせ続けるためにも努力に努力を重ねているのだと。そして、それは確かに果たせたと感じたのだと、冒険者として立つのであれば、他のヒトとの差を嘆くだけではいけないのだと。

それからと言うもの、加藤に伝えたいと思いつつも行けない日々を過ごしていた少女。ようやく言えたのだ、そしてようやく進める、他のヒトの差を嘆いていた自分から一歩進めるのだ。

それを2人は大いに喜ぶ、よく言えたと、ようやく言えたと、笑いに笑うのだ。

「なんだかなあ、俺だけが損した気分だよ。今思い出すだけでもダセエしさあ、あっ！ ギョッセ、他の奴らには絶対に言っなよ？俺が偉そうに……」

「偉そうに、なんですか？ ほら、言ってごらんさい。わたくし達はちゃんと聞いてあげましてよ？」

加藤は思い出したように、慌ててギョッセへと何かを言おうとした時、後ろから聞き慣れた女性の声が響く。ゆっくりと、恐れるように、祈るように後ろを振り向く。

しかし加藤の表情は絶望に染まり、それを見た女性は歓喜に染まるのだ。

「ふふふつ、当然だ！ですって？ いいものを見れましたわ、ねえ？」

喜びを顔、いや身体全体で表している女性、エイラは後ろを振り向いてそう言う。問われた女性は困りながらも首を縦に、振ってしまった。

「えっ！？ え、ええ。こういつたカトーさんを見るのは久しぶりでしたから、新鮮では、その、ありましたね？」

「まじか……エリアスールさんまで。ってか、なんでこんなところにいるんだよっ！」

こんな場所という言葉に、なにやら感じるものがあつたのか。ギョッセがそれに対して何やら言おうとするが、傍にいた少女に再度

脚を叩かれて沈黙する。それを見つつも、エイラはエリアスールへと目を配り、それを受けたエリアスールが口を開いた。

「ええ……。女将さんに聞いたところ、こちらに来ていいるという事でしたので。それにギョッセさんのお見舞いも思っつて足を運びました。それでなんですが、夕食のお誘いに来ました、ラルちゃんも待っていますよ？」

獣人の少女であり、加藤の妹同然のラル。彼女はレイラやニーナと特に仲が良く、時折泊まりに行くようになっていた。

そして加藤を呼ぶ時とはラルがそろそろ帰りたくなってきたための、迎えとしてである。それを察した加藤は、ため息を吐きながらも了承の返事を返した。

「あー、そろそろか。つたくラルの奴もタイミングが悪い奴だ。あつ、まあ……。そのなんだ？ うん、ちょっとアレな言い方だったけど」

エイラ達に連れられて扉へと向かっていた加藤が、振り向いてそう言う。

しかし最後までは言えなかった、それを向けた相手が遮ったためだ。

「いいえ！ わたしが弱いのは事実です。ちょっと褒められて良い気になってたんですよ、だから嫉妬しちゃいました。でもっ！ でも、カトウさんも、当然ギョッセさんも、私の憧れには変わりありません！ だからっ」

少女は語る、己の夢を、己の憧れに向けて。

いつか憧れの存在である彼らと共に歩めるようになってみせると。

いつか、いつか、きっと、そんな曖昧な言葉だけなのに、その瞳が真実味を持たせる、実に美しい言葉だった。

ギョッセが微笑みを浮かべつつ、乱暴に頭を撫でるという方法でまだまだ続きそうだった彼女の告白を途中で止める。少女は不満そうだったが、しかし笑みを浮かべる。

「あらあら、これは困ったものですわね。カトウなどがこんな可愛い女性の憧れだなんて、ねえ？　これからは大変ですわね？」

それを聞いて、言われて。笑みを返せる程度には、加藤は自身の憧れの存在に近づいているのかもしれない。

その笑みは今までの笑みと同じようで、ほんの少しだけ違う。良く知る者でなければ分からない、些細な変化。成長というものは、自分で実感する事で理解するのではなく、他のヒトが見た時に感じるものなのだ。

そして、それは女性達の、そして少女、なによりも相棒が返す同じ笑みによって認められていた。

第2話 『 享受! 』

「あー、やっと来たっ！ カトっカトっ！ 見て見て、凄いでしょ！」

加藤はエリアスールとエイラに連れられて、ギョッセの入院している病院から、そのまま領主の屋敷へと足を運んでいた。

来る途中、幹旋所へと立ち寄りルクーツアへと女将への伝言を頼んでからではあるが。

そして到着するなり、いつもの広間へと入ると何事かをしていたラルが彼に気付いたようで、手に紙を持って自慢気に言い出した。

「つと、なんだ？ えーつと、算術か？」

その用紙には、なんとか解読できるまだまだ幼い字体で書かれた数式のようなものがあつた。どうやらレイラとニーナが行っているものを彼女もやりたいと言ったらしく、簡単なものをアージエが与えたという事らしい。

アージエはレイラとニーナに疲れた眼差しを向ける一方で、ラルには褒める言葉を惜しげもなく捧げていた。

「いや、本当に驚いたよ。ラルちゃんは算術をあつという間に理解してね？ 見てみなよ、これをつ！ いやあ、僕としては教え甲斐のある生徒をようやく見つけた気分だねっ！」

興奮気味に尚もアージエはラルを褒め称える。

事実、その紙に書かれているものは、加藤の知識からいけば難度が低いと言えるが、この世界でいけばかなりの難易度である乗法を

用いたものだった。それを褒められているラルは照れたように、しかし加藤にだけはそれ以上の何かを求めるように見つめ続けている。

「ははっ、凄いじゃないか！ こんなのが出来るなんて、俺も知らなかったぞ？ これは今度お祝いしないといけないな？」

その言葉が聞きたかったのだろう。

その笑顔が見たかったのだろう。

少女は遂に大声を上げて、広間を駆け回って喜びを全身で表現する。一通り喜びを感じ終わったのか、最後には加藤の下へと戻りそして笑顔を見せた。

「えへへー、カトに簡単だけど教えて貰ってたからねっ！ でもでも、アージェさんにもっと難しい問題を貰ったら面白くって、それでねっ！」

どうやら終わったのではなく、これが始まりだったようだ。しかし加藤は苦に感じないようで、全ての言葉に相槌を打ちながら嬉しそうに笑い合う。

仲の良い兄妹を見ていたレイラとニーナが不満そうに、しかし同じく笑みを加えて話に混ざる。

「ねー、アージェの説明は分かりにくいんだよ。ボクらにも分かり易く教えて貰えない？」

本気なのかは分からないが、しかしラルもそれを喜んで欲しいするという事になったために、加藤としても断れない事になる。ラルに引き摺られるように今まで彼女達が向っていた机に行き、そこに備えられた椅子へと座り、用紙に簡単なものから書いていく。

「いいかー、加法……まあ足し算つてのは分かるか？ うん、そうだな。りんごが1個、それが2つあるわけだから……」

加藤はどうせやるならばとばかりに本腰をいれたようだ。

用紙にりんごの絵を2つ書く、そんな例えを交えながら加藤もまた楽しんで教えることとなった。レイラとニーナは流石にその程度は分かるらしく、早く次をと求める。しかしラルは理解しているはずの加法、しかし例えを交える手法に感嘆の息を漏らして、更に違う例を催促する。

ここがある種に分かれ目とも言えるだろう。

「いいか、レイラ達。この足し算、それと減法……引き算が基本なんだ。そもそもこういうのは色々と大切なんだぞ？ ここは特にちゃんと抑えないとダメなんだからな？」

この世界には単位というモノがある。

最初の興りは日数である、色移りという分かり易い目安があったために、この概念は全てのヒト族に共通していた。そのおかげで今日の技術諸々があるとさえ言えるほどである。共通する知識を持つていたために、会話もある程度通じる部分、共感できる類があったために意思疎通の大きな助けにもなった。

それらを自らもルキューツアに教えられていたために、やけに自慢気に言ってみせる加藤。

しかし、それらも交えて重要さを語ろうとしたが、今は関係ないと気が付いたのだろう、それを止めて問題を続ける。

「まあ、それでだ。りんごが3個入った袋。これが6つあるわけだな？ さて、全部で何個だと思う？」

加藤はやはり例えを用いて教える。ラルは遊びのように、しかし

だからこそ真剣に取り組む。そんなラルの様子を見ているレイラ達も生来の負けず嫌いが疼いたのか、同じく真剣だ。

「……わかったっ！ ふふんっ、ボクが一番早いねっ！ 答えは18個っ！」

「おおその通り、正解だっ！ だけど一番早いニーナでも結構かかったな？ ニーナ、どうやって計算をしたんだ？」

今までアージェ、そして加藤から褒めに褒められていたラルに勝てた、年下と言えどもこうとなれば関係ないのだろう。

喜びを隠さずにニーナは大きな声で解答を述べる。そして、加藤は大いにそれを褒めるが、続けて問うのだ。

それにニーナは自信あり気に加法を使った事を言う、当然だ。なぜなら今は加法の話なのだから、それをを用いて取り組むべきであるう。

「そうだな？ だけど、俺は今回わざわざ袋に入った、こう言ったよな？ つまり3個入ってる袋が6つ、つまりパつと見では6つの袋しかない。……分からないかな？ うん、簡単に言えばね。基本的な乗法つてのは足し算でしか無いんだ。もつと言えば、3個入った袋、これが6つの場合、合計は決まってるんだ。だから……」

その後も簡単な、しかし今後の彼女達の大きな力になり得る事を遊びとして教えて行く加藤。ラルは大いに楽しみ、レイラとニーナは今まで理解できなかった事がおぼろげでも分かった事に思わず黄色い声を上げてしまう。

「まったく、そんなに喜ぶことかね？ レイラにしたって弓を撃つ時はこんなの比べ物にならないくらいに計算してるだろうにさ」

「計算とかしてないよ？　なんとなく、このくらいの強さの風ならとか？　そんな感じの慣れだよ、お父様だってそう言ってたくらいだよ？」

「そういうものなのか……、まあ技って言うくらいだしなあ。そういうのを超越してるからこそ、技って言うのかね？」

武の事になれば、強さは定かではないが、経験であればレイラに分があるのだろう。今度はレイラが嬉しそうに加藤へと講釈を垂れようとした時であった。

「ふふっ、それはいずれでいいでしょう？　それよりも、夕食の用意が出来ました。こちらではなく、別室ですからね？」

そんな加藤達へとエアースールが声を掛けてきた。

加藤達が遊びを楽しんでいた頃、エアースールとエイラ、アージエはそれぞれに時間を潰していたのだ。

エアースールは調理場へと赴いて、エイラ達は卓上遊戯で知恵を競う事に熱を上げていた。

しかし、どうやら料理が出来たようなので、そちらの部屋へと移動しようとの事だった。

それを告げた彼女は先導するように広間を後にし、加藤を含めた全員が移動を開始する。

「そういえば、俺って食堂？　なんていうのか分からないけど……、ちゃんと飯食べるのって初めてじゃないか？　っていうかなんでわざわざ移動してんだ？」

移動しつつも、加藤は思った事を絶え間なく言い続ける。別段質

問という気は無かったのだろう、ただ本当に思った事を口に出してしまっただけ。しかし、それに答えを返す声が、レイラである。

「別に広間で食べれない訳じゃないんだよー？　ただ面倒っただけで」

広間で食べられない訳ではない、むしろ屋敷にヒトを招く場合は大勢なためと祝い事などある種の祭典のような形が多いために広間での食事が基本である。

しかし家族で、親しい友人と、日常での生活上の食事の場合はそれに当たらない事もあり、少なくともサツクル家ではそうだった。そうこうしている間に、移動としては短いが、家の中でと考えれば長いと言えるものが終わる。

扉の前でエリアスールが待っていたためだ。

「さ、ロレン様と奥方様、デイリー様が既にお待ちですよ？」

そう言うつと扉を開ける、最初にレイラ、次いでエイラ、ニーナ、アージエと入っていき、加藤を見上げた後にラルも入っていった。

「なんかエリアスールさんがそうやると無駄に緊張するな。いやアイラさんだけなんだけどさ？　緊張する相手ってのは」

何故かエリアスールに、入るのを躊躇した言い訳をしつつ、ゆっくりと加藤も部屋へと足を踏み入れた。

後ろから扉を閉めつつも、彼女は笑って加藤の後に続く。

「ははっ、皆揃ったようだね？　それじゃあ食べるとしようかつ！」

「へえ、今日は豪華ですわね？　これなんて……」

屋敷の主たるロレンの声に各々が返事を返すと、食事が始まる。

エイラは早速メインの肉料理に目を着けて声を漏らす。

肉料理、別段不思議ではないが、この肉は半生、ミディアムレアであり、つまりは新鮮でなければいけないものだ。干物や塩漬け以外にも、この時期では氷などで冷やして保存する技術はあるものの、その場合はこうは肉汁溢れ食欲を誘いはしまい。

つまり、わざわざ狩りにいつてきたものだと分かるものだった。

そうして彼女は領主ロレンへと目を向ける、気付いたロレンはにこやかに笑みを返した。

「まったく……、これだから過保護が過ぎるというのです。皆さんカトウを甘やかし過ぎだと思えますわ」

そう言いつつも、美味しそうに肉料理を食べて行く。

それを当然のようにニーナが指摘して、2人で何事かを言い争う。ロレンが、エイラがいるというのに、だ。

初めて屋敷に来た時には考えられない所作であろう、しかしそれを嫌う素振りを見せる者はこの場には居なかった。その様子を微笑みながら眺めつつも、ロレンは加藤へと告げる。

「味のほうはどうだい？ 気に入ってくれたかな、君の快気祝いという事で少々力を入れたんだがね？」

領主という身分上、来客に味を聞くというのは少々褒められた行いではないかもしれない。

しかし今の彼は加藤の友人である、それゆえに自慢するかのようには聞かない。加藤もそれに気付いてか否か、当然のように肯定の、感謝の言葉を返す。

「いや、美味しいよ！ 闘病生活？ 怪我の場合なんていうのかわからないけど、女将さんがうるさくってさ、あんまり美味しいのは食べれなかったから……。いやあ、美味しすぎるなっ！！！」

そう言うと、ロレンを、周りを気にせず豪快に食べ始める加藤。その隣で丁寧に食べようと悪戦苦闘していたラルは、兄の食べ方を見て少しばかり悩んだ後でそれに倣った。

しかしアイラがそれに待ったをかけて、丁寧に切り分けながらそれを教える。驚き照れながらも、嬉しそうに切り分けられた料理を小さな口で食べて喜ぶ。

「こうですよ。あら……。うふふっ、美味しい？ そう、それじゃあ次はこっちのはね……」

食事が済むと、ゆっくりとした時間を過ごし腹を休ませていた。それぞれ下らなくも大切な話を交わして楽しんでいた。

「ははっ、そうか。やはり女将は医師を志していたというだけあって、うむ。正しい判断だと私は思うよ」

「あれ？ 女将さんって医者じゃねーの？ 色々とやってたって聞いたんだけどさ」

加藤とロレン、そしてデイリーは療養中の事で言葉を交わしていた。

「ほっほっほ、いやいや。そうではない、女将の言う医師と、お主

の言う医師は少々異なるのじゃよ」

デイリーはそれを教えていく。

女将が目指していた医師とは国に認められた、ある種の地位なのだ。

それを有している場合ならば国は当然、街などでも領主などから歓迎を受けられるほどの上流階級の仲間入りを果たせる冒険者以外での一般民の夢の1つであった。その他にも治療のための諸々を国、街に援助してもらえるとというもの。

そして女将のような医師とは、それを有してはいないが、治療の心得を持つ者という事である。

だが、その地位を求める医師の殆どは国のお偉方に持て囃されるための地位などは眼中に無い。本当に欲しいのは副次的なものとされている援助である、そのために医師の誰もが欲するのだ。

「まあ、医師というか、治療をするための環境作りというのは恐ろしく金が掛かるんだ。そしてその地位は治療所の質が悪いと言われるれば従わざるを得ないほどに強い。例え私であっても、だ。だが、当事はそれでも……」

本当の医師がその地位を有してしまった場合、そういった事が多発してしまう。

それを嫌った者らが厳しい基準に上げに上げ続けた結果、誰も合格させないというものに成り果てている。

だが、所謂どの国、どの街であってもソレが許されるというものはそのようになっていて、現状は国で、街で、それぞれ個別にある程度の権限を与え始めている。

「なるほど、つまり大型がやってきて医師っていうよりも怪我人とかが多すぎるから医師を増やしたいがための嘘って事か」

大型モンスター、それはほんの少し前というには少々遠いが記憶に新しい約20数年前に現れていた事をこの時、初めて加藤は知った。

その当時に滅びた、壊された街々、下がったヒトの生活圏を前に進めるために出来たのがこの街であり、活躍したのが彼らだった。

しかし当然ながら大型の被害は壮絶なもので、特に負傷する者が大勢いたのだ。主力たる熟練者の多くがそうだった上に、戦死者の多くもそれだった。

つまり、新しい街を造るために、壊れた街を守るために戦うのは当然ながら主力が新人ばかりなのだ、どうしても怪我人が増える。そのために治療できる者の数が絶対的に足りない、しかし医師というものは想像以上に困難な上、この世界ではそう稼ぎが良い職業でもないのだ。

そのための制度、地位であったが今はもう形骸となっているのが現状であり、本物の医師達の多くもそれに興味は無いのだと、領主は苦く言う。

「情けない事に、金や地位で医師を増やそうとしたんだがね。切欠はそうだったかもしれない、だが医師となった者達はすぐにその地位に興味を無くした、まったく。そんなものよりも、設備が酷いと怒られたものさ」

この時になり、医療施設の全てにおいて、石造りの床や、清潔な衣服、道具、床などが完備される風潮が広まった。

それ以前は医師の立場は低いものであり、それに耳を貸すという事が少なかったためだ。この世界での脅威とは病や怪我ではなくモンスターであり、そのために必要なものは医療ではなく冒険者という常識のためだった。

それ以前は基本的に冒険者のための医師であり、そのための医療

のため、戦えるようになれば良いという大雑把なもの。

だが、この変化は大いに冒険者達に衝撃を与えた。怪我の治りが早い、今までであれば命を失っていたであろう傷を負った友が助かる、そういったモノが起きたためだ。

今まで全てに置いて発言力を有していた冒険者達が声を揃えて医師の重要性を訴えたのも、医師が国が言う地位などに興味を失った理由の1つであろう。医師もまた、冒険者と同じく脅威に立ち向かう戦士だと言われたからである。

事実、当時の医師の多くは危険な場所であろうとも治療するために赴いて、その多くが冒険者と共に命を落としていた。

「……とまあ、そういう感じでね？ 女将はその戦士の中でも存命では古参中の古参で、当時は多くの街を飛ぶように回って治療していた方さ。この街の専属とはなっていないが、この街の治療所の面々にも顔が効くおヒトなんだよ？ そのヒトが言うんだ、多少の苦は耐えるべきさ、現になんら後遺症を残さずに復帰できたんだらう？」

話の中で、先ほどの事で不満を述べていた加藤に、そう笑って口レンは言った。

女将が医者だった事にも驚きを覚えていたが、それほどのものだった事を知った加藤の心情はどれほどだったか。それは間抜けに口を開いたままに、顔を返す表情から全て分かる。

医師という存在で何よりも安心できるのは、そのヒトの心であり、思いやりで。

もう駄目かもしれない、そう思った時に手を強く握り締め言ってくる、たった一言。その言葉でどれだけ心強いことだろう、その言葉を聞いたからこそ諦めずに意思を保てた結果生き残れたことだろう。

そして、そういった本物の医師がいるというだけで、たとえ多く

が新人であり素人同然だろうとも冒険者達は冒険者として中型相手に剣を握れたのだ。

「はあー……、そんな大変な時期があつたんだな。知らなかったよ、女将さんもそういうのは教えてくれなかったからなあ」

「ほっほっほ、女将に取つては当然の事に過ぎぬのじゃろう。まあ……治療そのものでは、じゃがな。優秀になればなるほど、その傷に何かを見て取れるようになる事もあるじゃろうて」

デイリーはしみじみとそう語る。デイリー自身もまた立場は違えど古参中の古参であり、全てのヒトを守るために剣を取った戦士である。その中で、色々なモノを見てきたのだろう。

女将はそんな中でもラルだけでも、己を惨めと感じようとも守るために道を去る事を選び新たな道を進み、デイリーはそんな中でも冒険者として何かを出来る事を信じて支える道を選び、そして口レンは己の生まれながらの地位を用いて、ラルの英雄同様、何かを為すための足掻く道を選んだのだろう。

今はこの場に居ないルクーツアも、当時は新人であつたのもあるだろうが戦う道を選びヒトのために何かを目指したに違いない。

いや、全ての大人は大小あれども様々な道を選び、今の世の中を作り上げて来たのだろう。

そして、その道を受け継ぎ、更に進める役目を担う事になる者の名。

それを若者と言う。

「そついうもんかねえ。まっ、それは別にいいよ。ああ、でも大型の話はちゃんと聞きたいかもな？ うん、そこは教えてもらいたな」

何度も頷く加藤、一見すると生意気にも分かつた気であるように

も見える。しかしそれでいいのだ、それがいいのだ。少なくともデイリーはそう感じていた、仮にも小僧ではなく名を呼ぶに値する男なのだから。

そして、少なくともソレをこの男は知っていると言っているとデイリーは信じられるのだから。デイリーは目を一瞬閉じてから、その話題を変えるようにある事を切り出した。

ロレンはそれを両手を挙げて歓迎し、アージエへと何事かを伝えるに行く。加藤はそれを微妙な顔で考え込んでいたが、首を縦に振ることで意思を伝えた。

「ほっほ、うむ。それでは、ラル嬢やつ。……うむ、どうじゃもう一晩泊まってはゆかぬか？ ほっほっほ、そうかそうか。うむ、エリアスールに言っておくとするわい」

デイリーはラルを呼び、そう言うとは何かを言われて了承の返事を返す。そう言うと言は喜んでレイラ達の中へと戻っていった。

「なに言ってたんだ？ 俺はラルを送ってからって思ってたんだけど」

「なに、そう大した事ではない。風呂に入りたいと言っていただけじゃよ、皆での？」

ここ、領主の屋敷には浴室、いや浴場があるのだ。とは言え普段は使われていない、あるだけであり湯が張られている事など少ないと言える。しかし、どうやら徐々に本来の役目を果たすこととなるようであった。

そして少女はもう一晩、この屋敷で泊まる事になったようで兄としてはなんとも言えない表情を浮かべざるを得ない。

「少々の？ 先にも言ったが、皆で話をしようかと思つたのよ。小僧も少しはやれるようになった訳じゃし、少し本格的にという奴じやおの」

しかしデイリーの表情は反対に真剣そのものへと変化した。

それを見て取つた加藤は同じく顔色を変える、しかしそれは悩む色であり、それが何を指しているのかがやはり分からないといったものだ。その加藤を見つつ、デイリーは苦笑う。

「あれ？ カトは帰っちゃうんだ？ ……まあ、いつか！ 明日迎えに来てねっ？」

帰宅という訳ではないが、屋敷をデイリー、アージエ、そして口レンと共に外へ出ようと言つた流れを感じ取つたラルは軽く言う。

加藤も笑つて頷き、その他の女性陣にも別れを告げて彼らと連れ立って屋敷を去るのだった。

第3話 『 台頭! 』

「まあ、この面子で話っていうからさ。だろつとは思ってたけど…」

加藤は今、薄暗い明かりが灯った一室にいる。

そして慣れた様子で1つの大きな机へと向かい、座り心地の良い椅子へと腰掛けるのだ。他の面々も同じように腰掛けていく。

「んで？ ロレンもいるって事はそれなりに大事な事なんだろう？
ああ、違つか。アージエがいるからって言った方がいいな」

わざとらしく訂正を加えて加藤がそう言う。それに何か言いたい様子のロレン、いよいよと口を開こうとした時、まだまだ夜は冷えるこの時期、暖房を焚いていた室内へと冷えた空気が一陣舞い込んだ。

「ふう、いやすまん。遅れたようだ……、ああ、カトー。女将には伝えてあるから心配無用だぞ？」

それはルクーツアであった、どうやら扉を開けた時に冷えた空気も一緒に流れて来たのだろう。手にはこの家屋、デイリーの家へと集まる時のお決まりである酒などが入っている大きな袋を下げていた。それを乱暴に机上へと置きながら、ルクーツアもまた椅子へと座り一息を吐く。

「ああ、そつか。女将さんにちゃんとと言わないと帰った時に怒られるからなあ、いや。ありがとう、ルクータ」

加藤の礼を受け取りつつも、ルクーツアはロレン、デイリーへと視線を向ける。その視線を受けた2人は頷いて口を開いた。それは普段この家で行うものとは少しばかり違う声色のものであり、自然と加藤も真剣に耳を傾ける。

「小僧も回復し、そろそろ復帰の目処も立った。ギョッセの奴はまだまだじゃが、あ奴が必要になる時までには十分回復するという事じゃし、問題あるまいよ」

デイリーは机に向う面々を見渡しながら、ゆっくりとそう言った。ロレンは頷きつつ、なにやら大きな用紙を取り出した。その他にも普通の大きさと言える用紙、いや冊子をいくつか取り出す。それを見たアージエも一瞬慌てたように、同じようなくつかの用紙、そしてペンを取り出していた。

その大きな用紙、それには簡易ながら地図と呼べる図解が描かれているのがこの薄暗い部屋でも分かった。

「うん、そろそろ動かないといけないからねえ。ああ、これは新たな街を造る予定の場所周辺の地図だよ？　と言っても以前……、ほんの少し前まではその辺りにも街はあつただけどもね？」

先ほど、領主の屋敷での食事の時に語られた事だ。20年数年前に大型が現れて、多くのヒトを、街を傷つけた。その時に完全に壊され、姿を消した街がその位置にあり、そしてその名残を加藤は知っていた。

「どれどれ……、へえ湖なのか？　なるほど、水源が井戸じゃなくてこれになるわけかあ。冬でも凍らないだろうし……楽になるから悪くないなあ」

「ふっ、加藤。お前はこの場を知っていると思うんだがな？ なにせオレと……、いや」

ルクーツアは加藤の様子を見て笑いながら何かを言おうとするが、途中で止めてしまう。

だが、アージエはそれを気にした風も無く、いや気にしすぎて緊張しているために何の変化も無いと言うべきだろうか。逆にデイリーはそのアージエの様子を見て笑って言うのだ。

「ほっほ、ルクーツアよ。安心するが良い……こやつは頭が良いな」と自分で言うだけはあつたよ？ 先日直接聞いて来たのよ、小僧はもじゃ、とな？」

笑うデイリーとは対照的に、それを告げられたアージエの顔色はもはや死人のそれに近い。

一瞬、眉間にしわを寄せたルクーツアだったが、デイリーがしつこいくらいに笑みを浮かべ、加藤も大して気にしていない。

そして最後の決まり手はロレン、彼がゆっくりと頷くのだ。その意味を正しく汲み取ったルクーツアは小さく息を吐き、苦笑った。

「そうか、つまり知ったんだな？ ひとつ聞いておこう。誰かに言っただか？ それはお前以外も感じている事か？」

「……いえ、僕がそれを疑う、というか気にするようになったのは2人で出掛けた時です。そして今日もそうでしたけど、未だ高度と言える算術を僕以上に理解しているのに、服飾であったり、甘味であったりと身近なものだというのに知識が無かったんですよ。

それで不思議に思っていたんです。どうも僕は疑問に思うと解答を得ないと落ち着かない性質でして、それでデイリー様ならばと……

…」

加藤が2人きりで出掛けた事がある人物はルクーツァ以外では意外な事にアージエと、仕事中であればギヨツセのみである。

いつもはその他にも大勢のヒトと共に歩いている、会話しているのだ。そのためボロが出ていく、出たとしてもカバーできるヒトが傍にいたためにそれが何かに繋がる事は無かった。

ギヨツセの場合、討伐系が主であり武についてであれば、加藤の知識は既にこの世界のものを会得しているため、それが出る事は無い。その上で仮に露見したとしてもギヨツセとは既に命を預け合う仲であり、事実として命を懸けて守られ、守ったという事実がある。ルクーツァを始めとした大人達も、ギヨツセであれば加藤のためにならない事を言い触らす事が無いと信じられるのだ、感情云々ではなく実績を以って。それどころか一緒になって、そうした人物の首を冷酷に切り落とすだろうとまで。

そして、アージエを始めとしたエイラ、ニーナも信用には値するヒトだとは言える。しかし立場が立場なのだ、彼のことを無視する形が無いとは言えない。

だがロレンが頷くのであれば、それも問題ないという事であろう、どのような方法を用いたのかは定かではないが。

「なるほどな、ならば解答はお前の考えている通りと言っておこう。だが、分かっているな？」

「当然です、ヒロ君は僕の大事な友人です。僕には立場があります。が、例えソレがあつたとしても、ソレを無視してでも守るべきものがあると父から教わって来ました。そして、今の仲間がソレに勝るものであると確信しています」

それがアージエに取っては『アーダ』だったのだろう。父より与えられた立場の象徴であり、当時の彼に取っての守るべきもの。

しかし、それでは出来ないものがあつた、それではいけないと痛感したのだ。些細な事だ、周りの友を励ませないというだけ、立場を考えればどうという事はない。

だが、アージエに取ってはソレこそが大事、ソレこそが彼の本当に求めるものだと思ひが付いた、付けたのだ。目に見える範囲で良い、何かをしたい、どうにかしたい、そしてソレを当然のように、考えるまでも無く行つたヒトが目の前にいた。そのヒトは誇れる立場など持つてなどいなくなつた、力など見せていない、知恵など見せていない、むしろ逆だろう。

ただ、その場にいただけだ、そのヒトとして、飾らずにただただ、そのヒトとして。誰にでも出来る、普通すぎるソレ。しかしアージエには眩しかった、羨ましかつた、そして自分がそうなりたいと願ひ、そのヒトのおかげで勇気を抱けた。

そして今、彼は『アージエ』としてこの場にいられるのだ。

「僕は絶対に、何があろうともヒロ君を害する事はしないと云えます。いえ……、ルクーツア様。貴方が万が一にも彼を害しようとする事があれば、僕の持てる全てを用いて排除する事も厭いません」

暴力とも言える武では到底敵わないルクーツアを目の前に、大きくそう言い切る。

その言葉は、ルクーツアに取って実に心地よいものだ。それでこそ、見守り続けている、そしていつかは共に並び立つだろう彼の、真の友人に相応しいと感じられる。

ギョッセと共に、加藤と共に支えあいながら歩いていってくれると信じられるのだ。

「そうか、ならば良いんだ。すまん、緊張させてしまったようだ。

それと、それを知った所で実際の所は意味は無いぞ？ こいつはこいつだ、何ら不可思議な力など一片も持つてはいないからなっ」

異世界のヒト、つまりは英雄。

それらは既に御伽噺の存在であり、この世界での神と言える存在。良く調べてみれば、与えたとされるものは今の世では当然の代物ばかり、なんら特別なものではない。

勿論、英雄と呼ばれるに足るだけの人物であったことは間違い無いだろう、だが話が違っただ。

多くのヒトは、それらを与えた英雄を神聖視し、行った過程もまるで魔法のように、何でも行えると信じている。

ある英雄は、ただただ火を与えただけだ。しかし、英雄譚の1つでは当時では確認されていないはずの大型を一瞬で燃やしつくし、ヒトらを守った等という逸話も信じられていくくらいなのだから。

事実よりも、多くのヒトが認識しているものこそが常識であり、現実。

そしてこの場にいるヒトらはそれらを良く知っている、だからこそ厳しく言っただ。

「ははっ、そうですね。でもソレを共有できる事には優越感を禁じえないですね。だからこそ、何があっても漏らしたりはしませんよ、彼のためでもあり、何よりも僕のためだね？」

少しばかり笑いを混ぜながらそう言うアージェ。

しかし、自身の優越感のため。これは冗談であろうが、それだからこそ信じられるともいえるものだ。

その冗談も加えて、自身もこの場にいる者らと何ら変らない意思があると示した事でこの話は終わりなのだろう。

笑いながら眺めていたロレンが、話を元に戻すように口を開く。

「さて、新たにこの場で酒を飲み交わす友人を得た事だし、話を進めようか。新たな街造りについてだね？ 先にも言ったがこの周辺には以前街があった。なので、その時の事をまずは……」

ロレンが言うのは加藤、アージエに取っては正に金銀財宝に勝る知識であつただろう。どのようにして街が壊されたのか、どのようにして大型を討伐したのか、どのようにしてここまで立て直したのか。それを最前線で戦い、守り抜こうとした猛者達かれらが実体験として語ってくれているのだから。

「まあ、流石に大型に対抗する術は未だ無いんだけどね？ いくつかの街で相手の体力を削り、時間を稼いで。そして国の軍を中核とした『連合軍』でトドメを刺す……犠牲を前提にした戦い方なんだ」

「そうじゃのう、じゃがそれでは当然ながら犠牲が多いのも事実。冒険者の、ではないぞ？ 普通のヒトの犠牲が多すぎるのじゃよ」

加藤はアージエも秘密を共有したという事で、遠慮なく知らない事を聞き始める。『軍』とは何なのか、どうして普通のヒトの犠牲が多いのかといったものだ。

「エイラ嬢が言っていないかったか？ 軍というのは基本的に国専属の冒険者達の事で、質よりも量、技より火力という形だな」

ルクーツアがまず『軍』について説明をしていく。

小型や中型に相対する能力は持っていない、冒険者、武人というよりは技術者の面が強いと言えるだろう。最新の対大型兵器を行使するための人員群、それが軍である。

その軍を中核に、街専属の冒険者達であるデイリーなどの達人を始めとしたモンスター相手に立ち回れる者達が前衛を務める。

盾が冒険者であり、矛が軍が持つ大型兵器という事であるということ。

「へえ、その対大型兵器ってあれか？ ネミラズツタの時に使った奴？」

「いや、あれは今の対大型兵器ではない。かなり昔の兵器だ、とは言えあれで昔は大型に対抗していたのは事実だがな？」

「今はアレではなく、どちらかと言えば巨大な弓という感じかろう？ 大きな大きな矢を撃つのじゃよ」

（バリスタだっけ？ あんな感じなのか？）

加藤とギョッセの窮地を救った兵器。

それは街にとっては大型兵器と呼べるものではあるが、対大型兵器では無い。構造としては投石器のソレに近いものだ。

弾は何重かの特殊な薄い金属で作られた球状の物中に特殊な酒を入れて、熱しに熱したものだ。

それは命中するしないに関わらず発射後に衝撃を受けると砕ける、その時に重なっている金属がぶつかり合って火花を発生させて気化している酒に引火するという仕組みだ。

その兵器、威力は申し分ないのだが、装填に時間が掛かる点、命中精度に難があり、熟練者しか使えないという欠点がある他に、重要な弾の量産が困難であるというものがある兵器であった。

軍について、対大型兵器について荒くではあるが説明し終わると、次はアージエが口を開く。

「何故一般のヒトへの被害が多いのか、それは僕が言うよ。これは別に実体験しなくとも知識があれば分かるものだからね。大型が出

現した場合、それ以外のモンスターも人里へと押し寄せためだよ、特に小型がね？」

加藤がいた世界にはハイエナという動物がいる。別にそればかりという訳ではないが、一般的な認識として『死肉』おこぼれを漁るといふ動物なのだ。

そして、大型が現れ、それが去った場所、そして行く場所にはソレらが多くある、出来るのだ。

小型は安全に得られる食料、『死肉』を求めて大型が現れた場所、或いはその近辺に出没しやすくなる。そして中型はその小型を求めてやはり人里の近くに現れる事となる。

悲しい事に、大型に対抗するために散った冒険者の数よりも、逃げる途中で小型、中型に襲われて命を失うヒトの数の方が多い場合も過去ではあったのだ。

「大型はどうしようも無い存在、時には傷つけあう事もある全てのヒト族が団結しないといけないほどにね？　つまり、大勢の一般のヒトを守るために大型に立ち向かうというのに、それを行うために守るべき冒険者がその周りに居られなくなるんだよ……」

アージエはそう言って言葉を止める。

冒険者ではなく、どちらかと言えば学者気質、冒険者としても軍の方面なアージエ。それが現状取りえる最善だというのは理解しており、それは仕方の無い事だという事も分かっている。

しかし彼は若かった、だからこそ足掻きたいのだ、どうにかしたいのだ。

それこそが、ヒトがヒト足り得る理由であり、ヒトの魅力だ。その証拠に、穏やかな気質のアージエらしからぬ、頭が乱暴に掻き巻くという行為を無意識でしていた。

「……そのために、新たな街を造るのさ。そう、万が一大型が現れたとしても時間を稼ぎに稼げる街をね」

ロレンはアージエの様子を見て、何かを思い出すように喉を鳴らして笑いながら言葉を紡いだ。その言葉は同じく、笑みを浮かべたデイリーが続けた。

「そういう訳じゃの？　そして、その街を造るに当たり重要となるのがお主ら2人。造ったならば……、その頃には回復しておるだろうギョッセも加えての3人じゃ。お主らが街を守れるようにならねばならぬ」

「俺もなの？　いや、正直俺なんか！　とか言うつもりは無いよ？　それなりに強くなっているって、慢心とかじゃなく思えてきてはいるしき。だけど、正直そこまで強くはなっていない、うん」

加藤は慌てて断りを入れる、しかしルクーツアが鼻で笑うように一蹴する。

今すぐにはなく、そうなるように今まで通り努力するのだと言う。今は支えるために自分達がいるのだからと。

「だからお前はカトーだと言うんだ。誰が今すぐ守れなどと言った？　だが安心しろ、お前に任されるのは基本的に戦いでも、考える事でもないからな。それは別の者がやる事になる」

武ではギョッセ、智ではアージエがその任を負う事となる。

そしてその両者に並び立てる者が必要となるのだ、武でも、智でも。

加藤は科学技術が発達した世界の出身である、別に意識して学ばずともある程度の事は頭に叩き込まれている。戦いに措いては、言

うまでも無いだろう、既に中堅以上の力量。いや、中型と渡り合ったという実績を加味するのであれば、既にデイリー達の領域に足を踏み入れているのだから。

武でも智でも、加藤は優れた力を努力によって、必然によって得られていた。

「昔からの慣わしとして、領主とは別にそれに次ぐ権力を有するヒトが必要なのだ、形だけでもね。この街の場合は言うまでも無いかな？ うん、デイリーがそれに当たるわけだ。そして、新しい街ではそれらを分担させる。武はギョッセ君、智ではアージェ君と言った感じで、これが昔ならではの立場をちょっと変えたもの。だけど、それらの上に新たに立つちゃうのが……、君という事さ！」

ロレンはなぜか溜めに溜めてから、最後に加藤を指差して声を上げた。

それに何度も頷きながらも、デイリーが加えて述べる。

「これこそ、新しい街で生まれる新しい役職……、お主が以前にいつておった『最強』のためへの一歩じゃ。その名を『灯楼』ひとうろうと言う……、どんな時であろうとも希望の明かりを与える、何よりも強く高い存在という意味じゃ」

加藤は以前の世界の話をデイリー、ルクーツァ、ロレンの三名には特に多くしていた。別に技術を求めるため、与えるためではない、なんてことは無い雑談であり談笑だ。

その中の一節で、何気なく口に出た1つの話があっただけ。

『何度倒れるような事があるうとも、決して意思を曲げず、決して諦めない、ただただ大切ななにかを守るためならば、何度でも起き上がることの出来る者』

昔から続く、決して廃れないものがあつたという、ただそれだけの話。

子供向けの、チープな物語、しかしその中に籠められている物は何よりも大事な教え。

それを胸に宿し続けた大人がいたからこそ、彼の世界は一時とは言えども真なる平和を手に出れたのだから。

そして、加藤もまた、それに憧れていた頃が確かにあつた青年で、以前の世界でも、この世界でも確かにソレが実在する事を知っている青年だ。

それら架空であるはずの存在に、心を、命を、全てを守って貰つたことのある人間なのだ。

「どうだい？ 私達3人で考えに考えたんだっ！ ははっ、いやあ格好良いとは思わないかい？」

ロレンは自慢気に胸を張りながら笑つて言う。ルクーツアも同じように微笑みながら、しかし真剣な眼差しで加藤へと、たった1つ問う。

「お前は昔のような英雄ではないだろう、だが覚えているか？ お前がオレに言つた言葉を。あの言葉、まさか嘘ではあるまい？」

加藤はその問いを受けて、ゆっくりと眼を閉じる。その閉じられた視界に移るのは、どの背中だろうか。

しかし共通しているのはとても優しく、とても大きく、とても強いものという事だろう。

「……ああ、嘘じゃない。今でも、これからもずっと俺の目標さ。どんな時でも強く在れる存在、大人に俺はなりたいたんだっ！ いい

じゃないかつ、俺がなつてみせる！ ああ、なつてやるともつ！」

加藤は目を開くと、力強く宣言する。

しかし、その宣言を聞いた直後こそ、嬉しいと、歡喜を顔に浮かべていた大人3人。だが、それを申し訳ないような、しかし楽しいな笑みへと変えて続けて加える。

「まあ、大げさに言つてはみたものの名誉職な感じなんだけどね？ カトー君やギョツセ君をこの計画に参画させるにはそれが必要なのさ。ギョツセ君は街が出来てからだからまだいいんだけど、君はそうじゃないからねえ」

街を造るにあたつての責任ある立場、そのための箔をつける意味合いが強かつたようだ。

「まあ、まだそういつた役職を作ると報告、申請した段階に過ぎぬからの。ある程度の権限は得られるように求めてはおるが、はてさてどうなるかは分からぬ。一応、先に言つたような役割を果たして貰う予定ではあるんじゃないかな？」

報告をしたというが、新たな地位というものは簡単では無いからだ。1つの街だけで認められる地位は認められていない、なので最前線の街でのみ、という限定ではあるが固定ではない地位として申請していた。

ようやく前に進み始める第一歩であるヒトらが求めており、そしてこれから段々と前に進む事を考えれば、その条件は国にとつても悪いものではない。

しかし問題はその地位に与えられる、有する権限であった。ロレンを始めとした新たな街造りの責任者達が求めたものは、慣わしである領主に次ぐ者の上に立つ者、というものだ。

しかしここで問題が起こる、領主に次ぐ者の上に立つという事は、すなわち領主と並び立つ権力を持つ事になる。

だが、それが必要だとロレンを始めとした最前線付近の領主たち、そしてソレらと懇意にしている国の重鎮は考えているのだ。

武も智も、モンスターに対抗するためには必須である。今までであれば、領主が武か智を担当し、次点の者がそれを補うというものだ。サツクルの場合であればロレンは智、デイリーは武である。

新たな街、その領主は現状でいけばレイラになる事となるわけだが、それらどちらにも向いていない。どちらかと言えば武ではあるが、領主としての武には到達し得ないだろう。

彼女の長所は物怖じせずモノを言える発言力であり協調性であるために、大人達は外交の面での活躍を期待している。

そのために武、智を次点の者を増やす形で一任するわけだが、これだけではいけない。本来は領主が決断を下すわけだが、レイラにはそれが出来ないのだから、出来る者がいなくてはならないからだ。そのための『灯楼』^{ひょうろう}、現状ではただの名誉職と言っているが恐らくそのために必要な最低限の権限を与えられるのだろう。

「まあ、そういう訳でね？ 今のところは何の権限も無い名誉職つてわけさ。けど少しすればそれなりの権限、地位になるから安心してくれたまえ」

「さて、小僧に贈り物もした事じゃし。そろそろ本題に移るとしようかの？」

ロレンの言葉で一区切りがついたという事だろう。

デイリーは今まで空だったグラスへと酒を次々に注いでいく。

「本題、ああ……、そっぴやそのためにここにいたんだっけか」

そう、ようやくこの場ですべき話が始められる事となるのだ。
それを待ちに待っていたのだろう、加藤以外の者達はようやく言
いたい事を各々言い始めた。

「そのためって何を言っているんだい？ この場での本題は決まっ
ているじゃないか、私の自慢話さっ！」

まだ酒を口にしていないロレン、しかしいつもの如く飲んでいな
くとも酔ったように甲高い声を出し始める。

「そうだ、まず加藤が回復した事だしな？ やはりどのように鍛錬
するかという事をだな……」

対して注がれるたその時に一気飲みをしたルクールア。こうなる
と口から出るのは鍛錬の話がほぼ全てだろう。

「ワシとしてはアージエも加わった事だし、いつものように下らな
い話を肴に酒を楽しみたいんじゃないの？」

酒の滴みを手で遊びながら、舐めるように酒を飲みつつデイリー
は笑う。

「僕は話を聞いた時から楽しみにしていたんですよっ！ あ、でも
領主様のレイラ様自慢は屋敷でも聞いていますから遠慮させて頂き
ます」

誰よりも興奮したように、語り合いを楽しみたいというアージエ。
彼らの言葉を受け取った加藤は呆れたように、やはりいつもの調
子で話し出す。

「待てや、新しい街を造るための云々をするんじゃないのかよ？
今までの流れは一体なんだったんだよ、おいって！」

そうしていつものように、夜は明けていく。

街を造る時だから真面目に、真剣になる事は大切だろう。だが、
だからこそ日常を楽しまねばならない、日常を忘れてはならないの
だ。その下らない中に時折思い出したように出される意見は実に良
い意見ばかりなのだから。

この状態だからこそ、ためになる異世界の意見ではなく、くだらない加藤の意見が出せ
るのだから。

その加藤の意見こそが、これから世界に必要なものなのだと大人達は信じ
ているのだ。

第4話 『苦笑!』

真夜中の酒盛りから数週間が経った夕暮れ時、もう寒さとは決別し、暖かい日差しとの抱擁を楽しむ季節となっていた。

「んー、ボクには良く分からないんだけど……」

「まあ、そういうものかもしれませんわね？　しかし貴女はそれでいいと思いますわ、そういった方が領主様の傍にいるということも重要でしょうからね」

ここは領主の屋敷の広間。主だった人物が勢ぞろいしており、ここで新たな街造りについての会議、もとい話し合いが行われていた。

アージエから簡易に説明を受けていたニーナが、理解できずに困り顔をしているところへエイラが微笑みながら頷いていた。

「まあ、ニーナ嬢がレイラ嬢、つまりは新たな領主の補佐をするというだけだ。補佐と言うが別に仕事を支えるだけではない、そうだろう?」

「その通り、特に我が娘の場合。変に考えすぎるところがあつてね? 私としてもそこが心配なんだが、いやいや。ニーナ君がいてくれるとあれば杞憂になるだろうさっ」

レイラが新たな街の領主というものはやはり決定済みのようであり、レイラ本人も当初から言われていたためにある程度の覚悟はあったようだ。特に何も言わずに、静かにしている。

そして、その領主の側近としてニーナ、当然ながらエイラの2人が着くこととなったという説明の最中である。

「でもさ、ボクが自分で言うのもアレだけど……。なんにも出来ないよ？ 普通のヒトよりは戦えるっただけが自慢だったけど、ここじゃ意味ないし」

「でも、レイラと下らない話が出るだろ？ 真面目な話だって、怖い話だって、楽しい話だって、内緒の話だってな？ それでいいんだよ、それがいいんだと思うけどな」

困ったような顔をしているニーナへと、加藤が笑いながら言う。当初は彼女未満だった、しかし今はその上に行く存在が簡単な事だと言つてのけた。それは彼女に迷いを生じさせるのに足る言葉だったのだろう。ニーナは前向きになりつつあるようだ。

「そ、そうなの？ だって、補佐ってデイリー様みたいじゃないと……」

「だったらそうなれるように頑張ればいいだけだろ？ ニーナはもう王族なんて関係ないんだ、努力をしたって、強くなるうとしたって良いんだぞ？」

「そ、そうなの？ 本当に？ 王様になりたいんだろとか言われない？ いじめられない？ 馬鹿にされない？」

その言葉こそが彼女が断る理由だったのだろう。高い地位に就く事が直接そうなのではない、そうするために必要な事をするからこそが怖かったのだろう。

それを加藤、他の面々も笑って言う。当然だと。

「やっぱりまだそんな事で悩んでたのかよ。まあ、そんな事で言うてくる連中がいたら、俺とルクータがボッコボコにしてやるよ。なあ、ルクータ？」

「ふつ、当然だな。オレの友を侮辱するのであれば、国であろうが何であろうが、叩き潰すだけだ」

加藤とルクーツアは本当にそうする訳ではないかもしれない。ただの軽口なのかもしれない、冗談なのかもしれない。

しかし言い切ったのだ、彼女を傷つける者がいたとするのであれば、自分達が必ず守ってみせると。

「いや、国とかはちょっと……」

「情けない奴だ、その程度で弱気になるとはな？　これは鍛錬をーからやり直さねばなるまい。そうだろう、デイリー殿？」

「まつことその通りじゃ！　情けないっ！　その程度の事、なんとも無いとくらい言ってみせぬかっ、口ですら言えぬならば何も出来ぬぞー！」

「ええ……、俺が怒られるのかよ。国とかがってそんな簡単なもんじやないと思っ……ああ、うん。そうだったらこくおうとかにいつぱつきついのおみまいしなきゃいけないよなー」

実に滑稽なやり取り。実に情けない口だけの言葉だ。しかし、それは全てただ1人のヒトのためのものであり、そのヒトはそれを分かっている。

彼女は以前、彼らのおかげで1つの戒めを解いた。しかしそれは

周りによって緩めてもらつたに過ぎない、痛みを感じなくなつただけで抜け出せてはいないのだ。

もう大丈夫だと感じるだけでは不足、それを証明するために前に進んでこそなのだから。

「……えへへっ、そこまで言つて貰つたら仕方ないなあ。うん、ボクも補佐として頑張るよっ！」

今はまだ、それを胸張つて言えるほどではない。その力、実力は当然ながら有していない、だがそれが当然なのだ。

彼女よりも遥か上にいる加藤、エイラ、そしてアージエとギヨツセをしてもまだまだ未熟。その地位に相応しい実力など欠片も持っていないのだから、要はそこにいくための努力が出来るかどうかだけ。

その種火こそが大人達が待ち望むものであり、今までの彼女には無く、他の若者にはあつたものなのだから。

「ふっ、そうか。ならば領主の方の一応の説明はこれで終わりではないだろう。ギヨツセにも既に伝えてあることだし、カトーの方面も一応はいいな？」

「そうだね、『灯楼』側もさして変化はないよ。まあ、こっちは追々詰めていけばいいさ、なにせまだ一番大切なものが確定していないからね。……それよりも今は必要な事があるだろう？」

そうロレンが言うと、以前にも加藤が見た大きな地図を広間の机に広げる。その地図を広げると、ロレンはデイリーへと視線を向けるのだ。

「まあ、街が出来てもいない内にあれやこれと言つたのは理由があ

る。一応の立場が、責任が必要じゃからじゃ。これは以前、小僧達にも言っておるがな？」

その準備が終わったという事で、ようやく話し合いから、会議と呼べるものへと移るようだ。

ここに居る者は全て、立場ある者となったのだから。

正に子供の遊戯のようなものだろう、本来からしたら実に滑稽、しかしこれがこの世界での大人への始まりの一步でもあるのだ。少なくとも上に立つ者としての。

「まあ、もう何も言わないさ。そうだっ！前に言われていた宿題というか、仕事というか……。まあ、考えてきたぞっ！新しい街のコンセプトッ！」

「ははっ、カトー君は全く面白い言葉を使うね？そろそろ適当に作った言葉じゃなくて、真面目な言葉遣いにしたらどうかなあ。これからは本当に、真面目に、ねえ？」

「あー、そうだったな。真面目にしないと……。まあ、どういった街にしようかって事な？聞いていた情報、資金、その他諸々、なによりも多くのヒト達が求めるもの……」

何よりも求められているものとは、この世界ではたった1つである。それは安全であり、安心だ。

経済云々、住みやすさ云々、娯楽の云々、色々と街に必要なものはある。しかし、必要なものはどんな脅威が来ようとも、崩れる事の無い家なのだ。

「まあ、正直そんなのは今じゃ不可能だ。本当なら絶対にそんなのを作ってみせる！……とか言いたいんだけど、真面目だからな？」

正直に、現実を見据えないと。それでだ……」

そして、加藤はロレンが出した地図よりもかなり小さい、しかし厚い紙束を出す。そこには絵が書かれて、いや。正確には図面だろう。それを大きな机、円卓とも言える用意されていたものに並ぶように向き合っていた面々へとまずは配って行く。

「壊れるのは仕方がない。だけど壊れたら終わりじゃ芸が無いと思うんだ。俺は他の街をこの目で見たのはたったの1つだけ。だけど他の街を皆から色々聞いた結果、こうなった。こんな感じなんだけど……どう思う？」

配り終えた加藤はようやく話しだす。が、そこには何重にも重ねられた円が描かれているだけだ。

他の面々は、それだけではイマイチ把握が出来ないようで、その説明を求めた。

「ああ、そっか。俺が分かっても皆はこれだけじゃ分からないよなあ。えつとな、この丸は防壁だ。これには色々と役割が……」

加藤が語るのは未来、いや異世界の知識が大本で、しかし材料にしているのはこの世界の知識である。大本はドキュメントムービーだったか、それともゲームだったか、映画だったか、趣味の工作だったか。

しかしそれは調べに調べ、学びに学んで得た知識ではなく、何気なく生きている間になんとなく持っていた常識だ。

そして、それをより精錬させたのはこの世界で、自身が調べに調べ、学びに学んだ経験、実績から得た智恵だ。

もし、前の世界の専門家が見たとすれば笑う事だろう。子供が考

えそうな事であると。

そして、彼の親も、友も同じく笑う事だろう。実に加藤らしいと単純で、稚拙、しかし何よりも熱意が籠められているものだ。

「まずはさ、最初の壁なんだけど。これは硬いけど、そんなに高くはない。理由は……」

実に楽しそうに、しかし真剣に語る。

最初の壁は何よりも硬く、何よりも厚い壁。

低い理由は金を掛けに掛けて対大型、並びに通常兵器を並べるため、整備云々のためだと言う。実に子供らしい考えだが、だからこそ基本であり、理解しやすい。

ロレンを始めとして他の者は、時折頷きながらも静かにその説明に耳を傾ける。

「次のはさっ！ そんなに硬くはない、むしろ脆いんだ、前にいった名も無き街……あの壁を参考にしてる。だけど逃げやすいようにつてわけじゃない。大型出現の際の話聞いた限りじゃ、街の壁が破られた時に一番最初に襲い掛かってくるのは小型の群れ、それも尋常じゃない数の……」

加藤に取って、この世界の街で最も重要なのは壁だと感じていたのだらう。

本来であれば以前の大型襲来以降、最初に決めるのは当然医療方面であり、今回もそこに多くの資金を取られるはずだった。当初から大型モンスターを足止めするための街という事で、今までの街とは比較にならない程の医療施設、大病院を計画していたというためだ。

しかし、加藤はそもそも医療が必要最低限で済むような街にすべきだという考えだった。

それらを最初期では縮小する形になっても、防壁の充実に力を入れるべきだと訴える。

「ふむ、その方向性は悪くないね。だが、万が一それで失敗してしまった場合……。多くのヒト達からの非難を受けてしまいかねないよ？ なにせ、今の常識はまず医療施設なんだからね？」

ロレンは、加藤の意見を聞き終えると、静かに反論を出して行く。そして他にも加えて、そのやり方でやったとしても絵にあるような何重もの壁は難しいだろうと。出来ても精々が3つの壁で精一杯であると締めくくる。

「前例が無いって事？ あるじゃないか、俺は知ってるぞ？ ……国だよ」

それぞれの国に必ずある王城、それはそれぞれの種族の国の長のための最後の砦。事実、今よりも昔、その時代では大型は国にまで被害をもたらしていた。そのために国の壁は街の比較にならぬ程に頑丈、そして王城はその周りにも堅固な城壁を持ち、更に城自体も同様に硬い。

そして国には何十、何百という他の街という名の壁があり、その上で自身にもそれがいくつもあるではないか、そう言うのだ。

先ほどは軽い口調で、王族であろうとも言っていたロレン達。

そして加藤の言うその前例のあり方とは、ある意味で王族に喧嘩を売っているに等しい。勿論、国が最後の砦という認識は正しいものであり、街とは前に進むための拠点なのだ。最低限、それを施せば良いという思考は間違ではない。そして何よりも大型相手に耐えうる街とは即ち国と同規模となってしまうかねないのだ。

「それは流石に厳しいよ……、確かにその理屈で行けば何重もの防壁というものに説得力を与える事は出来るかもしれない。だけどね、さっきも言ったけど資金面で厳しい、そしてそれが大丈夫であったとしても……」

この街、サツクルでさえ、国からはかなり離れているのだ。このサツクルから更に離れる場所にそれを作るとなると、金があるうとも材木等を運ぶだけでも厳しいものになる。

そして運ぶ上で最も厳しいとされているのは、やはり防壁のための石だろう。これはそこら辺の大きな石を並べて出来るものではないのだ。いや、それで出来ないということではない。

だが、この世界での防壁というものは国が与えた守りという意味があるのだ。そのために国が壁の費用を出し、当然ながらその石材を運んでくる。これは未だ大陸を見れば狭いとは言え、広がりつつあるヒトの世界において、国というものを成り立たせる上で必要なものであり、そうそう変えられるものではない。

「石ねえ……。別に、作ります！って時から運ばないとダメって事はないんだろう？ 今から運んで貰えばいいさ、石なんだ。このサツクルの近くに積み上げておけばいいさ、モンスターだって石は食べないからな？」

加藤はなんの事は無い、そう言い放つ。

それは領主達に驚きをもたらした。驚くほどに簡単なもの、しかしその考えは無かったのだ。街というものは国が守りを与え、冒険者が危険を排除し、多くのヒトが汗を流して作るもの。一種の祭りとも言えよう、その時期には多くの冒険者が1つの地域に集い、多くの職人が腕を振るいに振るう。

そのために、その始まりと同時に全てが行われていたのだ。だか

からこそ、防壁という守りが無い状態で寝泊りをするために、怪我人が多い。

ゆえの第一の治療施設、今回の場合は大規模なソレであったと言えよう。

「なるほどねえ、確かに。別に食料云々じゃないからね、それは出来るかもしれない。大事なのは国からのという点であって、その時期じゃない。それを使った壁でさえあればいいんだ」

ロレンは嬉しそうに言う。これは別に異世界の知識ではない、加藤の常識であり、ロレンも言われれば納得できるものだったためだ。それを知らないエイラ、ニーナも簡単な事実への小さな驚き、それを言った加藤へ大きな驚きを感じているような声を出していた。

「確かに、どうして今まではそうだったのでしょうか？ やはり多くのヒトが集まってから行うという点を国が重視していたためののかしら？ 安全を考えるのであれば、治療よりも壁というのは確かにそうですわね」

「ふふっ、さすがカトーさんですね？ 面白い、いえ凄い事を言いますね」

エイラは難しい事を考え始め、エリアスールはいつものように優しく笑う。しかし、常のように照れる事はせず、適当に言葉を返しながら加藤はそれからも街についての話を続ける。

やはり重点的に語るのは防壁について、しかし次に重点を置いていたのは1つの問題についてだ。

「最重要なのは街の壁だ。これだけは何があっても譲れない、この計画に参加してるからには絶対に。そして、次に言いたいのは交流

のための文化だ。そのために必要なもの、それを……」

それは差別という問題を濁しているものだ。当然ながら、この場にいるヒトはそれを察している。先ほどと同じように、いやそれ以上に静かに耳を傾ける。

「どうしたって無くなるものじゃない。少なくとも新しい街が出来たら全部消えた、そんなのはあり得ない、絶対にだ。ただ、その糸口を示す事は可能かもしれない、そのために作りたい施設があるんだ。それは、運動場だっ！」

運動場、つまりはグラウンド。簡易なものから高度な運動までを行う事が出来る場である。が、それではなく、そこで行える多くの運動、いや競技であった。

「昔の英雄、その話を聞いた時に思った。これだっ！ってさ？ 皆で行う運動、競技。スポーツ……っていう名前にしようと思うのがそれさ。別にふざけて付けた名前じゃないからな？」

加藤は楽しそうにスポーツについて語る。

以前の世界では自分自身の趣味でもあったソレを、この世界では差別をなくさせるための切欠にしようというものだ。

差別というものは、絶対に無くなりはいしない。これはどうあつてもだ。しかし人種差別であるソレ、これを薄くする事が出来るのは可能であり、人種ではなく個々人の差別へと移す事は可能なのだ。これであっても褒められたものではない、が、それであれば個人で如何様にでも克服できる可能性があるのだ。自分が変わる、ただそれだけで。今のように、どう努力しようとも、生まれという点だけである場所においては変えようの無いモノでは無くなる。それだけでひとまずは十分だと加藤は言う。

更にスポーツについて語る。

これは、概念さえ分かれば何処であろうと出来るものなのだと。最悪グラウンドが無かろうと、少しの道具があれば、例え無くとも出来るのだと。

つまり、新たな街で興ったものであっても、広まればすぐにでも他の街々、果ては国だろろうとも行える。差別を薄くするためのソレが。誰かが言った聞いただけの言葉ではなく、自分達で行うというものが、だ。

「そのスポーツ、これにはルールを付けようと思うんだ。それは単純明快、絶対に全ての種族を入れなくてはならない。これだ、これが重要。そして新しい街にはプロスポーツ選手も作るんだよ、うん。プロの場合は種族毎のお祭り試合も入れてもいいかもしれないな？ ある程度知名度が上がればお気に入りの選手がいる他種族を応援するヒトも出てくるかもしれないし」

それは観光の意味もあつた。しかし場所が場所、非常に遠いのだ。そこをデイリーが指摘するが、加藤はやはり笑って言うのだ、定期便を作ろうと。

「1カ月に1回つてのは無理かもしれないけど、ある程度の期間。冒険者、それも熟練のヒト達が往復するものを作ろうよ。そうだな、確か……」

街と街というものは、国から近ければ近いほどに、その距離間が短いものだ。

理由は多々ある。国から近い街は古い街でもあるのだ、そのため当時の防衛手段の非力さのためとも言える。

そう守れる力を持つ者、つまりは冒険者数が多くなかったために、

国から離れられないので、国の近くに密集したという事だ。

そして、それらが増えると同時に、彼らが持つ武器も、街を守るための兵器も進化を遂げて行く。徐々に、絶対的な数が増え、そしてそれらが少数であっても守れるようになっていくのだ。

そのために、進むにつれて距離が伸びていつている。最前線のこのサツクルから、前の街へはおおよそ1週間程度という距離であった。そしてその街、名も無き街の主要街である街から前なる街へは4日というもの。

それらを療養中に、それ以前にはロレンからの宿題で学んだ加藤は定期便と称した護衛団が必要な無い区域を言っていく。

「ここら辺ならいいんじゃないかと思うんだ。ロレンの日記にも書いてあつたろ？」 『ここでならば、レイラを自由に遊ばせられるだろう』『ってさ？』

ロレンの宿題、それは字を、言葉を学ばせる意味が大きいものだ。しかしそこに書かれているのはロレンの歴史とも言えるものであり、長じてこの世界の歴史、知識の宝庫でもあつたのだ。何処には何があり、何時には何が起こり、何をすればこうなるのか、それらを丁寧に書かれていたのだ。主人公がレイラという点を除けば、実に有益な書物と言えよう。

そして、加藤の言う場所は国からある程度離れているのだが、他の街には無い特徴がある街だった。

それは今と同じように大きな転換期を迎えた時に作られた街だ。

街が壁という話を加藤はしたが、それを完璧に行ったのがこの街である。

簡単に言うのであれば、4つの街が並んでいるのだ、距離などほぼ無いに等しいほどに。そして、その4つの街は4つの種族毎の街

であり、その分差別意識が強いように思われるが、逆なのだ。むしろ、最前線とは言えない街にも関わらず非常にその意識が薄い街。

理由は別の意味での差別化が非常に上手くいつているためだ。

人間の街では戦いのための武器を買って、獣人の街の料理は美味い、竜人の街はその3つの街を守る冒険者が多く在籍している、有翼人の街には建築を始めとした生活のための技術が進んでいる。

竜人は守るために必要な力を人間の街に頼り、人間は更に進んだ技術開発のための道具を有翼人に求め、有翼人は獣人の料理をどの種族よりも好む、獣人は戦えるヒトとそうでないヒトの差が激しいために竜人に助けを依頼する事が多い。

そのために、戦力は充実し、経済も活発で、娯楽も多くあり、なによりも治安が良いために有名な街であった。

多くのヒトが訪れる街ゆえに今回、加藤が言うものに近いのが多いのだ。基本的には商隊と言えるものがソレだ。それは1つではそう多くの護衛を雇ってはいない、だが商隊が多ければ冒険者が多くなるのは必然。そこに一般のヒトも多少の礼金を払って一緒にいくのだ。

「そこまでだと、大体馬で1月ほど掛かるね……。ある程度の誤差を含めれば1月半、徒歩だとしたらその3倍。行えて1年に2回といくくらいだろうねえ」

「別に街が出来たらすぐにやるって訳じゃないさ。大事なのはスポーツを知って貰うという事。なによりも全部の種族を混ぜた方が格好いい、面白いって思わせるためだからさ。そのためにはスポーツっていろいろを知って貰う期間が必要、まあ……」

新しい街というものが出来るのであれば、こちらから呼びに行か

ずとも、勝手に商隊が大挙してくるものだ。

しばらくの間であれば、積極的にそれを行う意味はないだろうと言う。

「って感じ。俺は壁が凄い！ っのと、スポーツがある街にしたいと思うんだよねっ！」

結論からすれば、たった一言と言えるものが加藤の街に対する全てだった。

壁についてはロレンが話を付けてくれるようだ、スポーツについては全員が悪くないという意見を出した。

が、定期便についてだけは現状、加藤以外の者が否定的な意見であった。

加藤の想像する旅行と、この世界での旅行の差異のためだろう。基本的に、この世界では住む街から他の街へ行くという行為は命掛けなのだから、これは当然である。最初期であれば、国の軍がそれを助けてくれるために、大勢の移住者が来るのだ。これはどの街であろうと変わるものではない。

住む場所に余裕が無くなりつつある今、それを求めて移動するためにならば命を賭けても行くこうと思えるだろう。だが、スポーツを求めて来るといふものはそうは無い。商隊は自分達で来てくれる、特に出来たての街であれば尚の事。

そうでなくとも、この世界に措いて、商人というものもまた戦士であるのだ。ヒトの世界を広めるために危険を冒してでもそれを届けるという意思を持つ者が多い。

それらを言われた加藤は、しばらく唸っていたものの、納得したようであった。

「そうか……。スポーツを広めたいってのはあるんだけど、どうするかなあ？」

そう言った加藤に、ニーナがおずおずと小さな声で言った。

「今はあんまり良くスポーツってのが分からないんだけど、簡単に出来るモノなんでしょ？ だったら、時々こっちから行けばいいんじゃないかな？」

「……………その考えは無かった」

加藤の世界の歴史、知識にそれはあった。

しかし、抜け落ちていた、常識という考えるまでもなく出てくる情報にはなりえていなかったのだ。

スポーツを広めるため、そしてより差別意識を薄くするためのプロスポーツという娯楽、これらが自分のホームでのみ行う理由など無いのだ。

そう、ニーナの発言によって加藤の夢がまた一つ出来上がったのだ。色んな街にチームが出来たら面白い。そうしてみたいという願望が。

「うん、それは良い……。良いよっ！ そうしよう、うん！」

加藤は実に嬉しそうに言う。差別を無くすための手段を広める事が出来ると喜びはしゃぐ。

ロレン達もその様子を微笑んで眺めていた。

「まったく、カトウ！ それが嬉しいのは分かりますが、少し静かにしていただけます？ まあ、それであれば悪くないと思いますわ。カトウの言うコンセント？ とやらは良いと思いますわ」

エイラがそう言うと、他の面々も同じような事を口走る。

ようやく、街についての構想が出始めたのだ。最初は加藤の意見であったが、この後にはレイラ、アージエ、エイラ、エリアスール、ニーナもと、次々に思い思いの事柄を提案していった。

大人は時々口を挟む程度だ、そこに大人の意見を捻じ込む事は一切ない。

子供が夢を語るように、理想を語るように、それを現実に少しでも近づけるための小さな助言を挟むだけ。

まだまだ街を造るためには遠い道のりだ、しかし確かに子供が大人になるために街というモノを真剣に考え始めた。

そこには斬新過ぎるものもあれば、今は忘れられた古いものも出てきている。

大人では考えられないものを、街というものに取り入れられるのが子供なのだ、それを行う事で大人になる立場にいるのが彼らであった。

「ほっほっほ、まったく気楽に言ってくれるわい。それらをこなすとしたらどれ程の労力が必要としているか、それがどのような影響を及ぼすかを考えずに。まったく、ほっほ」

「いいではないか。それを叶えてやることこそが、そうして守られて、育てて貰った今のオレ達の使命だろう？ ふっ、まったく腕が鳴るな」

「いやはや、私もこういつた風に父上には見えていたのだろうか？ ははっ、確かに……、これは自分が街を造った時以上に大仕事になりそうだ。実に、ああ実に遣り甲斐があるといえるね」

大人達は、遂には子供のみであれやこれやと言い合いを続けるようになった彼らを眺める。

その様子を見ると、どうにも恥ずかしくなってしまうのだ。これは嘗ての己の姿そのものなのだから。

武の道で、守りたい何かがあるからこそヒトは強くなれると彼らは説いた。

それはヒトが強く、大きくなる事にも繋がるのだ。彼らのための苦勞を笑いながら行おうと決めたこの時、大人は更に大きく、強くなるのだらう。

そうして、子供はその更に遠のいた背中を目指して奮起するのだ。そうして、徐々に、段々とヒトの道というものは広く、大きく、長くなるものなのだから。

第5話 『遺志!』

ようやく新たな街造りについての話合いが始まってから、早いもので既に春も中盤に近づいていた。

この世界にとって、本当の春が訪れる時期と言っていていいだろう。やはり春というものは特別な時期のようで、色々小さいながらも行事が行われていた。

そのためか、他の季節よりも多くの商人が最前線であるサツクルに訪れていた。

「わあ、これなんて美味しそうですよっ！ 師匠に買って行ってあげようかなあ」

「んー。ギョッセって甘いもの大丈夫だっけ？ っていうか、仕事なんでしょ？ ほら、依頼は確か個人依頼なんだよな？」

毎日が軽いお祭りのような賑わいを見せている南通りに、加藤はいた。

その隣には人間の少女である冒険者、マナの姿もあった。加藤とマナの格好は完全武装と呼べるものだ。

そう、討伐系に準ずる仕事をマナが1人で受けたのだ。だが、彼女が依頼を1人で貰えるはずがないのだ、しかし受諾できた。それには1つの理由があった。そしてその理由のために、今朝方に受付のお姉さんが直々に加藤の元を訪ねて『受付のお姉さん』が加藤に依頼を出したのだ。マナにさり気なく同行して貰いたいという。

それを受けようとしたのだが、その場に女将さんがいたので依頼ではなく、お願いに変わりタダ働きとなっではいるものの、そのために加藤もこうして依頼主が待つ南門へと向っている。だが、加藤

自身としてもタダ働き云々には苦を感じていないようで、気にした風もない。

そんな道中でManaが、ギョッセとのやり取りを見たのみでとは言え、真面目だと思っていた彼女が寄り道をするかの如く歩みが遅いために、加藤が1つ問う。

それにManaは焦ったように、しかしゆっくりと言葉を返した。

「あ……、はい。個人からの依頼です、その……。あの時に加藤さん達が来る前にわたし達を助けてくれた冒険者さんの家族さんです」

そう、依頼主はあの時のなにか、手を伸ばしていた冒険者だったヒトの家族である。

本当であれば、あの時守って貰った冒険者全てでというものだった。だがMana以外の冒険者達は既にこの街にいない。別に逃げたわけではない。實力不足を痛感したために、實力に見合った場所で経験を積みに行ったのだ。

「へえ……。そうか、それは緊張しちゃうなあ。命を懸けて守って貰ったんだ、それを見せないとな？」

加藤は当然ながら依頼内容を大まかに受け付けのお姉さんより聞いている。

だが、今の加藤は鍛錬のついでという名目で彼女に着いて行っているのだ、こういった反応をせざるを得ない。

いや、この言葉は演技では無いだろう。結果としてならば、加藤達のおかげで最終的には助かったのだろう。だが、彼らが命を賭してMana達を守ろうとしなければ、加藤とギョッセが間に合う事もなかったのだから。自分とギョッセは小型の群れよりも恐ろしい中型に対峙はしたものの、正直な所、不利とは言え勝算はあったのだ。倒す事が勝利ではないのだから。そしてソレ以外の勝利のための力

量は彼らにはあつた、あると思えていたのだ。

しかし彼らはその力を有してはいなかったし、対峙した時には思う事も出来なかっただろう。なのに立ち向かえたのだ、それもたった2人で、全員で挑んだ方が勝算が上がるというのに。

それを果たして昔の自分では行えたのだろうか、それを考える度に亡くなった冒険者を尊敬せずにはいられない。そのためか言葉には意思が籠められていた。それを彼女も感じられたのだろう、元氣良く返事をした。

「はいっ！ 依頼内容は、えっと、その。……亡くなった場所までの護衛です」

「なるほど、まあ俺も手伝うからさ。変に緊張だけはするなよ？」

軽口のような、しかし大切なやり取りを交えながらも、2人はすぐに南門へと辿りついた。

そこには、既に依頼主であるヒトラが待っていた。

「依頼を受けました、マナです！ えっと、そのっ」

そこにはデイリーもいた。武での長なのだから、斡旋所関係の時は大抵顔を出しているようだ。その隣にはルクーツァ、ロレンと同年代に見える夫婦、それよりも若干年齢が高そうに見える男性とラルよりも幼い少女がいた。

「あら？ 2人、ですか？ 1人だけと今しがた聞いたもので、取り止めようと話をしていたのですが」

若い夫婦の奥さんらしき、有翼人の女性がそう言う。

依頼は亡くなった息子、つまりは手を伸ばしていた彼らが守ったヒトらと共にその場へ赴くというものだ。街道を行くだけ、この時期は冬直前とは違い、そう危険は無いのだ。出たとしても小型程度でそう数も多くは無い。

そして依頼を受け取り、冒険者へと渡す役目を担う受付にはそれを拒否する権限が薄い。ただの1人であろうとも、受ける事の出来るモノが居れば受けなければならないのだ。その上で、受付は例の有翼人の女性だった。本来であれば1人だが良いのかどうかを聞くべきなのだろうが、知人に加藤がいたために可能だと判断したのだろう。

そして、それはデイリーも同じ思いだったようだ。

「なに、ワシの弟子……こやつを同行させるのでな。心配は無用じやよ」

デイリーの弟子、この言葉の意味は重い。サックルだけではなく、最前線付近の街に住むヒトであればデイリーの強さを全員知っていると云っていいだろう。国であってもそれなりに名が通っているくらいなのだから。ラルがそうであったように、この少しばかり年老いた男性は有名であり、ある種の英雄でもあるのだから。その弟子であるならば、と顔色が変わる。

「なんと、デイリー様にお弟子さんがいたとは……。しかし、それですと」

個人に対する依頼というものは、依頼料金が変動するのだ。

基本的に斡旋所では冒険者というものに格付けをするということはない。ある依頼を受けに来た冒険者が熟練だからと報酬が高くな

る事はないのだ。依頼そのもので報酬は決まっているのだから。

だが個人に対してであれば別だ。個人の場合はその冒険者の実績、それらを総合して料金が決まるようになっていく。ラルを始めとして新人冒険者であれば、そうは高くない。むしろ安いと言えるだろう。だがデイリーなどの達人であれば桁が全く異なる事となり、その弟子となれば同じくと考えるもの、だが。

「なに、別途での料金などいらんよつ。こやつはおまけじゃ、おまけ。そもそも冒険者として未熟者なんでな、ついでと思ってくれば良い」

「……あー、うん。そういう事なんで、気にしないで下さい」

未熟者、それは確かにそうであろう。達人の域で考えるのであれば、未だ卵の殻を突き始めたに過ぎないのだから。

そう言われた加藤を見て、マナも同じく料金はいらぬと言いつたが、デイリーがマナは立派な冒険者なのだから受け取るのが礼儀だと諭す。

自分の憧れであり、実力も遥か上にいる加藤が未熟者と笑われているのに、自分は立派だと言われ頭を撫でられる。それがマナには悔しいのだろう。

以前までのマナであれば、その事に優越感を禁じえなかつたはずだ。しかし、今は違うのだ。その違いの意味が分かる。立つ場所が違うのだ。だが、それが分かる今の彼女は、また違う面でも変わっていた。悔しさを感じると同時にどうしようもなく嬉しいのだ、憧れがまた遠くなっていつている事が。

それを追い駆けると決めた自分がすっかりといると感ぜられる事が嬉しくて堪らない。

だからこそ、彼女は笑って頷く。それを見た大人達もまた何かに気がついたように、嬉しくて堪らないという顔をしていた。

「ほほっ、うむうむ。マナ嬢よ……良い顔をするようになったの？」

「そうでしょうか？ わたしはわたしですよ？ へへっ、あっ！
えっと、護衛はわたしが絶対にこなしますから、安心して下さい！」

デイリーに言われた一言。それは今までとは違うもの。新人の中の有望株を褒めるのではなく、マナという少女を褒めるものだった。

流石にそれには照れてしまったのか、若干今までの冒険者の空気を剥がして少女になっていたマナ。そのため彼女は慌てて冒険者として、依頼主にそう言った。

「……ええ。お願いします、貴女なら大丈夫でしょうからね？」

この中で唯一の母親である、有翼人の女性はなんとも言えない笑みを浮かべてそう返す。

デイリーが何事か加藤に耳打ちをした後、彼らは南門から外へ、冒険者らが亡くなった場所へと向い始めた。

「あのね、お兄ちゃんはね、優しくってね、強かったの……」

「うん、わたしも知ってるよ。あの時、わたしに逃げろって言うてくれたもの。怖くて怖くて震えてたわたし達に、同じように震えてたのに、言ってくれたもの」

マナは同行している少女と会話をしている。それは重いもの、辛いものだ。

それを嗜めようとした年齢の高い父親に、若い夫婦の奥さんが首を振って止めていた。

「言わせてあげて下さい。お子さんのためではなく、あの少女のために、言わせてあげて下さい」

「だが、いや……確かに一時は人間の娘を守るためなどと、憤慨してしまった時もあった。しかしあの娘さんは……、あれではそれを責めているようなものではないか」

年齢の高い父親は、竜人だ。話の限りでは冒険者ではなく、意外にも技術者という事であったが、加藤を含めてもこの場で一番冒険者らしい風貌の男性であった。

そして、その男性の言う一言。それは大きな問題である、無意識の嫌悪。それは簡単には無くなる事は無いだろう、人間という異種族自体を嫌ってしまう感情はそう簡単には拭えない。

だが、たった少し会話を持っただけで、1人の人間は人間という異種族ではなく、マナという名の少女になり得るのだ。

それを加藤は、今、目の前で確かに感じられた。それだけでもこの仕事はタダ働きとは言え、普通に働いて得られる報酬よりも過分であろう。その喜びを感じつつも、辺りを注意深く見渡しなが歩き続ける。しばらくすると、ようやく目的の場所へと辿り着くのだ。

「ここが、あの子が戦った場所……」

そこは、加藤とギョッセが荷物を捨てた場所の近く。誰かを助けるために戦った戦士の声にならない懇願を聞き届けた場所である。既に当時の痕跡は目に取って見る事は出来ない。だが、そこには大きな石が2つ並んでいた。それは墓石である。

この世界においても墓地というものは存在するが、冒険者はその限りではない。英霊となり、その場を守り続ける。そういつた迷信いや確信のために戦い抜いた場に埋葬するというものが多いのだ。そのため、大型が現れた際には大規模すぎる集団葬となっており、各地に慰霊碑が設けられている。これは小規模ながらもそれと同じものだ。

「はい、当時は2人1組というものでしたが、わたし達は新人のためにそれを3つ合わせてというもので、中でも2人が一番年長の組でした。一番最初に小型の接近に気が付いて、一番最初に立ち向かっていきました……」

マナは、ゆっくりとその時の事を語っていく。

最初は自分達も数が少ないために調子に乗っていたというもの。その時に激しく怒られたこと。自分達は新人の中では有望株なのだから、この程度どうでも無いと言いつ返したこと。それをまた叱咤されたこと。年長組以外は人間の組だったために、敢えて無視するようにはしていたこと。

それは懺悔にも聞こえる吐露といえよう。あの時、もしも従っていたら、もしも1匹でも多く倒せていたら、と。

「それで、あと少しという時にいきなり10匹以上の群れが来て……。小型が10匹程度って思ってたんです。でも目の前に来て、咆哮を上げられた時……」

そこからだ。亡くなった冒険者は、正しく冒険者であった。

今まで無視され、差別のような扱いを受け続けていたにも関わらず、すぐさま声を発した。

「逃げろって……。この数は無理だからって。今の内に時間を稼ぐから、お前らは逃げろって、まだ小さいんだからって、年上に任せとおけって」

そういった私情を全て捨て去り、1《おのれ》を捨てて9《なかま》を守る。冒険者の心得であるソレを体言してみせたのだ。現状のソレは命を捨てるという意味ではない。だが、本来の意味は正しくそれなのだ。

昔はそうしなければ、時間を稼ぎ、逃がすという手段でしか守れなかったのだから。それを最初に行った者の名を家族と言い、親と呼び、総じて大人と言った。

それらは歴史が進むに連れて冒険者と言われるまでに強くなったのだ。

冒険者とは、最初は何の力も持たないものだった。ただただ無力でありモンスターに軽々と命を奪われる存在。それでも尚、立ち向かえるヒトを冒険者と呼んだのが本当の始まりだ。

現在の冒険者と呼ばれる者の多くには武力はあるだろう、しかしソレを持たない者も多くなってきていた。以前のマナ達がそれである。

しかし、彼らは違ったのだとマナは言う。本当の冒険者であると自分に取ってのもう1つの憧れなのだと言う。

「そうか……。君の憧れか。はっは、息子もどうやらちゃんと冒険者として立っていたんだなあ。最初は反対したんだ、私の後を継いだ方がいいとね。だが、頑固でなあ……」

小さな娘の頭を撫でながら、何も無い、広大な世界を見渡す。

竜人の父親は、目に涙を湛えながらも笑って言う。そして、若い夫婦もまた同様。

簡素な、しかし大切な話をマナから聞き終えた親らは、礼を述べた後、墓石の周りの掃除を始めた。これは世界が変わろうとも変わらないものなのだろう。ゆっくりと丁寧に綺麗にしていき、街からそう距離は無いとは言え貴重な水を惜しげもなく墓石へと与えるのだ。

しかし暫くすると、それを見守っていた加藤だけが少しばかり辺りを見渡していた。

その理由はただ1つだろう。既に時間が夕暮れ時なのである、あつという間に時間は過ぎていくのだ。

「こんなものかしら？　綺麗になったわ、また今度来るからね？」

「ああ、今度はもう少し綺麗にしてやりたいな……。お前が守った女の子は、凄く立派だぞ、良くやったな」

若い夫婦は、時間を忘れて墓石むかひを撫でる。そしてマナを見てから言うのだ。お前の守った子は無事であり、お前は良く頑張ったと、これからもあの子を守ってあげなさい、と。

それを止める事は出来ない、何があるうとも。

「お兄ちゃんの好きだった、パン包み焼き置いておくねっ！　残しちゃダメだよ？」

「ははっ、ここに置いて行くのはダメなんだぞ？　お兄ちゃんにお願いしてからお前が食べなさい」

未だ死というものを分かってはいない娘。しかもう会えないという事だけは分かっている。そんな娘の可愛い言葉に、笑って嗜め

る父親。小さな女の子も若い夫婦と同じような事を言いながらマナを指差していた。父親もそれを肯定して、褒めの言葉を掛けている。お前は立派な冒険者になれてたんだな、と。

それを中断させる事は出来ない、どうしても。

そんな少しばかり様子が可笑しい加藤に、ようやくマナが気が付いた。彼女もまた、親達と同様の気持ちであったのだろう。ある種、我を忘れていたようだった。

「どうしたんです？ …… あっ、もうこんなに日が暮れ始めてる！？」

明るさ自体はそう変わっていない。春なのだから、夕暮れと言ってもそう暗くはならないのだ。陽の位置で見分ける他ないのだ、時計という技術はあるが、腕時計などは存在しないのだから。

「なんと、もうこんな時間か……。時間が経つのは早いものですね。いや、本当に……」

「そうですね、そろそろ帰らないといけませんよね？ ね、マナちゃん？」

彼らとて最前線の街に住む者だ。その程度は冒険者でないとは言え分かってるのだろう。名残惜しげに墓石を見ながらも、そう言った。

「はい、暗くなると小型も街道付近に出やすいらしいんです。早めに帰りましょう」

「えー、もう？ お兄ちゃんにお花をあげてないのにい」

「お花はまた今度にしような？ それに、お花を探ると言っていたが、この辺りにはまだ咲いていないだろう？」

小さな女の子が駄々をこねはじめたが、父親がそれを鎮めた。ようやく街に戻るといふ流れになった時だった。先ほどから辺りを見渡していた加藤が、それを止めたのだ。

そして。

以前と同じような声、いや音が響いたのだ。

「コウアアルア！」

「ゴゴルアアアオ！」

それは2匹のカルガン。加藤であれば取るに足らない相手。しかしマナに取っては強敵だ。

咄嗟にマナは加藤へと視線を投げる。

だが、既に加藤は家族に声を掛けて、それを守るようにマナを置いて距離を取っていた。

マナに取って小型は以前は大した事の無い敵であり、しかし今はようやく恐ろしい敵と認識できる相手。なにしろ、この小型というものは以前までは簡単に、あっけなく倒せる存在であった。しかしこの小型に彼らは殺されたのだ。

どうしても不安は消えない、どうしても震えは消えない、どうしても助けを求めてしまう、あの時のように。

「カ、カトウさん！？ あのっ、どうすれば！？」

「何言ってるんだ？ マナちゃん、いやマナ。君は冒険者だろう、命を賭してでも守って貰った冒険者だろう！ この程度で怯えてど

うする！ 彼らはそんな事を言ったのか！」

加藤はそう言って相手にしない。加藤が相手をすればものの数十秒で片が付く相手だと言うのに。あの時の彼らとは正反対の、いや同じなのだろうか。

加藤は本来であれば何としてもマナを守りたいという1がある、しかし9を取ったのだろう。その9の意味とは。

「っ。うう……、あっ」

そうして少女は怯えながらも、敵を見据える。その時に目に入ったものは敵だけではなかった。

そこには綺麗になったからか、元からか、夕日を反射したからかは分からない。

しかしマナの目には確かに暖かい光が届いていたのだ。夕日の比ではない、暖かい応援が。

「っ！ いきますっ！ ええあいつ！」

それに背を押されたようにマナは真っ直ぐに駆けていく。2匹相手にそれは悪手と言えるだろう。

しかし基本なのだ、新人の冒険者はまずはこれを会得する、しなければならぬ。自分の力を剣に宿し、恐怖を飲み込むために、ただただ真っ直ぐに。彼らもまた、こうして立ち向かったのだ。

「コアアオオウツ！」

当然ながら、それが当たるはずは無い。これは遊びではなく、命を懸けた戦いなのだから。

そこからは泥仕合と言えるものになっていく。仮にも新人では

有望株と言われているマナの地力も中々のもの。

対して2匹と数の上で有利なカルガンも小型独特の連携を用いて対抗し続ける。

お互いに有効な一撃を与えられないまま、時間がゆっくりと過ぎていく。

「おいつ、君も助けにいつてくれっ！ このままじゃあの娘がっ」

「……………」

加藤は何も答えない。ただただじつとマナを見つめるだけだ。

それに尚も詰め寄ろうとするが、それを寸で止める父親。自分はいけないからだ、武器を持ってきていない。竜人とは言え素手ではモンスター相手は厳しいのだ。余計にマナの負担になってしまう事が分かるために、助けに行く事すら出来ない。

「っ、この！ いい加減にい！！」

そんな時、戦いが動いた。マナが大きく攻勢に出たのだ。

大きく剣を振りかぶり、それを真っ直ぐ打ち下ろすという初歩ながら、しかしだからこそ強力な一撃を。

だが、カルガンの方が上手だった。それを軽々と避けて、しかしマナには襲い掛からずに加藤達、いや小さな女の子目掛けて駆けて来たのだ。マナのような、武を持つ相手よりも武を持たない相手を、更に言うのであれば最弱を狙うのは理に適っているだろう。

「なっ、こっちに来るぞ!？」

「大丈夫、大丈夫。マナを信じてあげて下さい」

咄嗟に娘の前に立ちほだかるように移動した竜人の父親が焦ったように叫ぶ。しかし加藤はそう軽く言う。いつもの加藤であれば全力で守ろうとしていただろう。

だが、この場には加藤以外にも強い冒険者がいるのだ、マナと言う名の。それを信じているからこそ、なんの心配も要らないと言う。そして、その強者はその期待を裏切らない。以前は持っていなかった力を発揮したのだ。

「コアオウツ!?!」

一匹が小さな女の子目掛けて走りに走る、しかし加藤は動いていない。そんな時にカルガンは短い悲鳴を上げて、その動きを止めた。それは軽い、しかし速い攻撃を受けたためだ。

「背中を見せるなんて、油断しすぎですっ!」

マナの左手には小さすぎる、しかし鋭い短剣が輝いている。そう、あの時加藤が見せたものを参考にしたものである。与えられる傷は僅かなものだろう、しかし動きを止める事は出来る、注意を逸らす事は出来るのだ。

距離が離れていようと、倒すことは出来ずとも、守るための剣。彼女の小さくも大きな進歩であり、新たな力だ。

「コアアアオオオアオウツ!」

油断していた、そう怒るようにもう1匹のカルガンが再度マナへと飛び掛る。同時にマナも剣で迎え撃つ。交差するようにつつかり

合い、それが離れる。そして声を上げるのだ。

「……………わたしだって、冒険者なんですっ！」

勝敗は明らか、マナは僅かに傷を負ったものの、相手を地に沈めたのだから。

だが、そのために隙が出来ていた。短剣を当てていたために、彼女もまた油断していたのかもしれない。

いや、正確には小さな女の子を守るといふものを重視し過ぎたために、己の安全を軽視していたのかもしれない。

「コオオアアアオウツ！」

「あつ、しまっ!？」

もう1匹がマナへと飛び掛って来たのだ。剣は振り下ろしたままの状態で、しかし切り返す事は出来ない。

マナのような少女に十分な攻撃力を与える代わりに動きの軽さを奪う大剣を使用していたという事もあるだろう。女性用という事もあり、軽い方ではあるがこれに対応できるほどマナはまだ力を有していなかった。

彼女が師匠と呼び慕うギョッセ、彼に何度もお願いをした結果、与えられた大剣を使用していたのだ。それはギョッセが小さな頃に非力な自分でも使えると使用していた大剣であり、彼にとって思い出の、宝とも言える剣の1つだった。

その大剣を有していたために1匹を倒せ、そのために1匹に今まさに倒されようとしているマナ。

だが忘れてはいけない、ギョッセの大剣に憧れ、それを持つという事は。

「……………あれ？」

彼女に襲い掛かるはずの痛みは来ない。感じるのは微かに感じる風のみだ。

数秒だろうか、それ以下かもしれない時間が流れた後、何かが崩れ落ちるような音が響いた。

「うん、頑張ったね。俺の背中を任せなくなる大剣だったよ」

「あ、カトウさん……。わたし、わたしっ」

そこには相棒かとうがいた。目の届く距離とは言えそれなり以上に離れていたというのに、そこにいた。

改めて、自分の憧れである存在達の背中の中の遠さを実感してしまう。だが、その憧れが言うのだ、凄いと。世辞ではなく、心の底から言ってくる。嬉しい、嬉しい、嬉しい、そう言わんばかりの笑顔のような泣き顔のような顔を夕日に照らされながら見せるマナ。

ギョッセから受け取り、力を与えた大剣と、マナに勇気の灯火を与えた墓石もまた、それを認めるかのように淡く光りを反射していた。

「ありがとございしました、今度もまたお願いさせて貰いますね？ その時は凄い冒険者になっているだろうから、依頼料が高そうですけどね？」

有翼人の母親は笑いながらそう礼を言う。

ここは既にサツクルの街、その南門付近である。あの後はモンスタ―に遭遇する事も無く、問題なく街へと帰還していた。

「へへっ、いいえっ！ おばさん達からの依頼だったら格安ですよっ！」

凄く冒険者になるという事は否定せずに、茶目っ気を出して答えるマナ。

それを嬉しそうに見つめるのは有翼人と竜人の大人達だ。

加藤は何も言わずに、ゆっくりと後ろに佇んでいる。その加藤に声を掛ける者がいた。

「ふっ、どうやらマナ嬢は大きくなったようだな？ お前もまた、1つ大きくなったように感じるな」

ルクーツアである。実はルクーツアも加藤と同じく彼らに同行していた。とは言えある程度の距離を保つてであるが。

デイリーより耳打ちされた事は万が一の場合でもマナに出来る限り任せるようにとの事だったのだ。そう言っておかなければあの時マナが言葉を発する前に事は済んでいただろう。それではいけないとデイリーは感じたために、釘を刺しておいたようだ。

「ん？ ああ、マナちゃんは凄いや。俺のとは随分違うけど、短剣だっけか？ あれを投擲する練習を欠かさずやっててさ、凄いやもんだよ、百発百中。その上で基本の大剣の鍛錬も欠かさずだもんなあ」

「そういう事ではないだろう……。まったく、変に話を逸らすのはいつも通りだな？」

「別に、そういう意味じゃないんだけど。いやまあ、うん。俺も頑張らないといけないって強く思ったよ」

その言葉には何が籠められていたのだろうか。それだけでは普通は通じないことだろう。しかしルクーツアは軽く口の形を歪めてから頷いた。

そんな加藤達にマナが声を掛けてくる、同様に親達も視線を向けた。

「あつ、カトウさん！ ほらっ、皆さんに挨拶しないとダメなんですよっ！！」

「ちよっ、引っ張らないでっ！ 分かったからっ、だから引っ張らないでっ！？」

力無いものが勇気を振り絞り、大人にすら出来ない事を成し遂げることは実在する。そして、ただの一時であろうとも大人となった彼らの背中から子供は何かを学ぶのだろう。

そんな子供の背中を通して、親は子の成長を知った。その笑顔は悲しみを消し去るほどではないだろう。

しかし、確かに薄めてくれている。その笑顔を浮かべられる者もまた、大人なのだ。その背中を見た加藤も、それから何かを学んだのだろう。

「次はカトウさんに守られるような事がないくらいに強くなって、わたしが皆を守ってみせますからっ！」

マナは、満面の笑みを浮かべながら、そう力強く宣言した。

笑顔とはいいいものだ。人種など関係なく、それだけで優しい気持ちになれるものがある。

もしも、全てのヒト族が同じことで、同じように笑えるような事があれば素敵だと、マナの笑顔を見た加藤は強く感じられたのだった。そのために、加藤は今まで以上にある事に全力を注ぐ事を決心しなおしたのだった。

全てが動き出す春を迎えて、ヒトもまた大きく前に進む時が近づいてきていた。

そう、街を造るといふものがいよいよ現実味を帯びてくる時期がやってくるのだ。

第6話 『遠望!』

ここは最前線の街、サツクルの南門付近。街の周りに国軍が大きな、大きすぎるモノを運んでいるのだ。

「うわあ、凄いねえ……。防壁のための石材がこれなの？ なんていうか、大きいねえ」

「ええ……。本当に。これを更に切り分けて、積み上げると防壁になるそうですわ」

そんな場所でニーナは目の前にある小山を首を見上げるようにして眺める。エイラが頷きながら説明をしているが、その目は驚きはしゃぐニーナと変わらない。

春を満喫して、少しばかり経った。まだまだ夏とは言えないが、早いものでもう夏を待ちわびる時期となっている。

「いやあ、言ってみるものだね？ こつも早く準備をしてくれるとは……。国も新たな街には熱心という事が分かるねえ」

「と、というか、どういう原理であんなのを運んでるんだ？ 重いだろ、あんなの」

ロレンは嬉しそうに言う。それに対して加藤が疑問をぶつけた。

その加藤はマナと共に赴いた仕事、のようなもの以後にも討伐系を含めて様々な仕事という名の鍛錬を続けていた。そのためにネミラズッタとの戦い以前の能力を、いや、それ以上の能力を取り戻している。

そんな彼にデイリーが笑いながら答えるのだ。ある点を指さしながら。

「見てみるが良い。木の棒があるじゃろう？ あれを敷き詰め転がしておるんじやよ」

「なんとという古典的な……、でもやり易いわな。欠点はやり過ぎると使い物にならなくなるって事か？」

デイリーが指差すところには長い棒は並んでおり、その上に大きな石材を滑らせるといふ輸送手段のようだった。ある程度の距離であれば問題ないだろうが、国からここまでと考えると途方も無い労力を必要とする事が伺える。

「はっはっは、流石に全て丸太こぶを利用しての輸送ではないぞ。大型の船舶を利用する事だつてある。陸路は大抵こついったやり方ではあるがな」

冬という時期であれば、地面を凍らせるといふ手法も取る事があるのだと笑って付け加えるのはルクーツアだ。

この手法の場合は、何本もの棒を必要としないという利点がある。ソリとしての土台に棒を用いるためで、この転がすという手法とはそもそも運用方法が異なるらしい。

「へえ……だつたら冬が良いのか？ ああ、寒いからそう簡単じゃないか……。引つ張るのは馬とかが主力つぽいから、ううむ」

悩み出した加藤、そんな彼にデイリーが同じく悩むような顔をしつつも言葉を掛ける。

冬はモンスターの危険が極端に減るのだ、そのために寒さという

危険とモンスターの危険を天秤に掛けるのだと言う。今回の国が輸送するという事で十分な戦力が護衛として着いてきているために夏が近い春でも問題がないのだと言った。

輸送手段、ある程度であれば問題が無いがこれから更に街を造っていく事を見据えると考えなければならぬ問題と言えよう。しかし、今はそれよりも大事な事があると、悩むような顔から明るい顔に変えたデイリーが強ク言った。

「そうだった、こうして石材も来ている事だし……。これは頑張らないといけないなっ！　なんていうか、本当にやるんだなあって実感しちゃってるよ」

その加藤の言葉に共感できるモノがあったのだろう。周りの女性達とアージエもまた無言で、無意識に頷いていた。

そう、いよいよ夢物語ではなく、自分達が造っていくという責任が押し掛かり始めていたのだ。しかしこれは足枷ではなく、これは背中を押す応援なのだ。若い彼らだからこそ、感じられる差異である。

ここは先ほどの門前近くではなく領主の屋敷、その広間であり、彼らが集まる場所と言っていていいだろう。しかし大人達の姿は取れない。いるのは加藤を始めとした子供と言えるヒトらだけである。

「石材は来たんだよね。うーん、それでどうするの？」

レイラは悩んでみたものの、すぐさまアージエに質問をぶつける。

それに苦い笑みを浮かべつつも彼は素早く答えを返した。

「ええ、石材が来た。これは喜ぶべき事ですね、だけど勘違いしちゃうけません。これが来たから街を造らねばならないわけではないんですよ？」

そう、石材が準備されるという事は、今までであれば一気に街造りを始めるという意味があったのだ。

だが、今回は大きく違う。小山の如く積み上げられている石材も必要とされる量からすれば微々たるものなのだから。

アージエは順々に説明をしていく。最初に街造りについて話し合い、いや会議を行ってからと言うもの街をどのようにしていくべきかという意見はそれなりに出揃っていると。

そのために必要な資金、材料云々はロレンを始めとした大人達がどうにかしてくれる。なんとも人任せではあるが、今の彼らに出来るのはその程度という事だろう。

自分達が行うべき事は、どうするのかを決めて行く事であり、そのために必要な事を考える事なのだと行って口を閉じた。

「必要な事かあ……、やっぱり街を造り始めるってなったらご飯は大事だよねえ。美味しいご飯があった方が早く街も造れそうだしね？ 少なくともボクなら頑張っちゃうよ」

ニーナは目の前にある焼き菓子を頬張りながら、暢気に言う。

それは考えなしに、何でもいいので意見を言おうというものから出た意見だろう。事実、ニーナは別に重要な意見を述べた事で興奮なりをしていない、いつもの彼女であれば、そういった事を言えば褒めて褒めてと言った雰囲気醸し出しているだろうに。

しかし、アージエとエイラ、エリアスールには非常に大きな衝撃を与えていたらしい。

「ええ、ニーナ様の仰る通りですよ。食料、いえ食事は大事なモノとされています。特に未だ安全を確保できていない現場であれば殊の外、いや。常識ではありませんが、念頭に置くべき事ではないと頭から抜け落ちていました……」

アージエは恥じるように言った。この世界でもそういった概念は確かにあったようだ。しかし考え方がそもそも違ったようだ。

重要なのは冒険者であり、医療であり、防壁を作る職人なのだ。アージエはそれらをヒトではなく、数として考えていたようだ。つまり、彼らが食事に困らないようにするためには食料の備蓄が大事であるという意味だ。

ニーナが言ったように、その食事によって作業効率上がる。この考え方は無かったのだ。いや、今まででそう感じた事はあったかもしれない。だがそれを街を造る側としては彼らは考えられていなかった。

「ええ、食事をだた用意するのではなく、その質をも重視する……。これはかなり大事だと思いますわ。さすが、ニーナさんですわね？」

「え？ えへへっ、やめてよお。ボクは別にそんなつもりで言ったわけじゃ」

アージエを始めとしたある種の専門知識を有したヒトらは固くものを考えやすい。なによりもまず先例を頭に浮かべてそれに倣うというものなのだ。

しかしニーナ、そして加藤は違う。自分がその立場で働くのであれば、これが最初に来るのだろう。ゆえに簡単で、しかし大切すぎる意見が出る。

街を造る時、なぜ子供と呼べる未熟な者らに任せるのか。それは

大人には出来ない事をさせるためでもある。もし、大人が造る場合であればこつも綺麗にニーナのような素人の意見は受け入れられないだろう。

しかし、子供であればそれが適うのだ。驚くほど簡単に受け入れられる。アージエのように専門家と自負しているようが、簡単にそれを賞賛する事が出来るのだ。

「うん、ニーナちゃんの意見は採用っ！ ご飯は美味しい方がいいもんね？ ご飯も大事って事で、他になんかあるかな？」

レイラは意見を出すのではなく、纏める側に着くようだ。彼女ほど微妙な位置にいる者はこの場にはいないだろう。

領主の娘であり、ある程度以上の常識を備え、しかし歳若くそれほど知識漬けではないために柔軟性を備えている。武術にしても、算術にしても、世界の常識にしても、彼女は間違っている気がする、正しい気がするという曖昧な考えしか持てない、いや。それを持っているのだ。

これは決して褒められたものではない、全てにおいて中途半端なのだから。しかしこの場であれば何よりも重要と言えよう。誰の意見をも真面目に聞いて、それがどんな下らない事でも真剣に理解しようとするのだから。

「あー、石材関係で思った事なんだけど……、いいかな？」

次に声を上げるのは加藤だ。レイラはそれに頷き、先を促す。

それを受けた加藤は、若干迷いながらも言い始める。石材を街を造る前に準備してもらおう、というものは叶った。

それを少し変化させて、街を造るための諸々の材料も安全なこの街で加工していくのはどうだろう、という意見だ。

「なるほどー！ でもそれだと運ぶ時に壊れちゃったりしないの？ 壁に使う石を細かく切って持っていくのはいいかもだけど、他のものとかは？」

「別に凄く小さなものまで、って事じゃない。例えば材木だけど、丸太のまま運んでるって聞いたんだ。それを板状にしてから持っていったって、纏めればそう問題は無いだろう？」

石材についてと同じく、新たな街を造る時に必要なものは、ほぼ全てその時に運び、その場で作業を開始するというものが従来のものだ。

理由としては職人の絶対数によるもの。その時にならなければ必要な数の職人が集まらないために、そういったものになっているのだ。それに関連して報酬云々でも同じ事が言える。一斉に、同じ場所で、成果を目に見れる方がやりやすいのだろう。

しかし、少しずつでもやっていく方がいいと加藤は言う。それならば少数であろうとも、成果云々を確認する事も可能だろうと。木材であれば国からのという名目は必要ない、この付近で行っても問題は無いはずだと付け足した。

付近の街であれば自分達でその出来を確認できるのだから、報酬面でもという意味だろう。

「うーん、僕はそれは少し反対かな？ それだと、このサツクルの街だけ、でなくとも付近の街の本当に少数の職人にしか報酬がいかなくなってしまう。それは問題だよ、やっぱり広く集わないといけないものだからね、こういったものはさ」

「だったら、この街に呼べばいいんじゃないか？ その期間は大きな仕事があるからって危険なのを分かって来るんだろう？ 安全な場所で少しの間なら別に良い気がするんだけどなあ」

その加藤の反対意見はエイラに簡単に潰された。

その時期であれば、国によって道中を守って貰えるのだと。だからこそ、遠方にまで来てくれるという事を言っていく。

大事なのはそこに行く為の安全であり、その場での事ではないのだと言う。その場に置いて、新たな街のために死ぬのであれば本望と感ぜられる。しかしその道中であればどうだろうと言うのだ。

「んー、そんなもんじゃないと思うんだけど……。ああ、それならさ……」

次に加藤が言うのはやはり今回の石材のものと同様である。それはそれぞれの街にいる職人達に、それぞれの街で加工を頼み、そしてここに集めるというものだ。職人を、ではなくその材木をだ。

新たな街造りというのはヒト族すべてに重大な意味をもたらすのだから、他の街の領主なりに出来を見てもらえば良い、それを任せればと言う。

更に加藤は思い付いたように付け加えていく。こうすれば現場で守るべきヒトの数が減り、万が一の際の犠牲者の数も減らす事が可能になる、と。

前者の意見よりも、後付の意見の威力は大きかったようで、アージエに至っては拍手すらしてその意見を歓迎した。

「素晴らしいねっ！ それは良いよっ、広く仕事を与えられて……その上で現場の負担も減る、うんっ！ それは絶対に必要だっ！」

「わっ、アージエがそんなに言うなら良い事なのかな？ エリ、どう思うっ？」

ここでもまた、狭い範囲とは言えレイラの持ち味が活きる。悩む

事はすぐさま相談できるという美点だ。これは過ぎれば汚点ではあるが、この場合は逆だろう。

エリアスールは微笑みながら、肯定の言葉を返した。これは悪くないという意見を。

それを受けたレイラは前向きに他の面々にも聞いていく。エイラも、ニーナも頷くという返事をした事で決まったようだ。

「それじゃ、これも採用っ！ うんうん、色々集まってきたねえ、えーっとな次はあ」

この後も1つ1つのやり取りは実に稚拙なものだった。実に簡単な意見ばかりが息を継ぐ間も無いほどに出てくるのだ。

そして、それを聞いて喜ぶばかりのアージエ。本来であれば筋道を立てるべきだろうに、思う事をただただ言っただけで欲しいと彼が言ったのが、その切欠である。

それがある程度出尽くした頃、ようやく落ち着いた声をアージエが出した。

「今回は、街造りの際の準備の事を纏められたようです。まず石材を始めとした材料はある程度加工してから輸送します。この加工はそれぞれの街に委託するという形ですね。こちらの方は僕から口元様方に話を通しておきます、色々と修正は必要でしょうが、ここは力を入れておきたいですね」

材料を使用するために加工をする職人と、施工する職人は異なる。先にアージエが喜んだ点はここにあるのだ。守るべきヒトが減る、冒険者の負担が減り余裕をもって街造りのための防衛を行えるのだ。

「次に二ーナ様からの意見。これは僕には良くわかりません。ああ、やり方という意味ですよ？ どのように質の高い食事を提供するのかは幹旋所などに智恵をお借りするのが妥当でしょうか？ ええ、そうですね、それがいい」

なぜ幹旋所なのか。それは種族毎の好みの違いというものも加味されるからだろう。そういったものに細心の注意を払っているのが幹旋所とも言える。

基本的に満遍なくそれらを提供しているのが、幹旋所の料理の特徴と言えるだろう。

「あとはそうですね。その他のものは細かい点でしたので……。ですがエイラ様の軍の意見を聞くというのは面白い、特に街のコンセプトでしたか？ そこで重要な対大型兵器についての意見を求められるというのは大きいですね」

エイラは基本的に冒険者関係、大きく言えば防衛時のことについて細々と意見を出していた。それは冒険者達の配置であったり、集団での戦闘方法であったりであったが、その中でも国軍と協力する姿勢を求めているのだ。

基本的に、国軍と冒険者というものは決定的に違うもので、ヒト族同士の差別とはまた違うが、大きな溝があるのも事実。そこをどうにかしたいのだろう、彼女も元は国軍側なのだから。

「ん、そうだねえ。いきなり冒険者と仲良しこよし！ っていうのは難しいかもしれないけど、まずはそこからだねっ」

レイラはそう、付け加えるように言う。アージェの言い方にエイラが不満気な表情であったためだろう。

アージエとしては主力たる冒険者でも受け入れやすいだろう利点を強調したに過ぎないのだろうが、それはソコしか国軍と歩み寄る価値は無いとも聞こえる。

いや、命を懸けて戦う冒険者としては実にその通りと言えるのかもしれない。対大型の、そうでなくとも緊急時の際には、彼らの命という壁に守られた後方から兵器を撃っているようにしか見えないのだから。基本的に国軍のイメージはそれなのだから。

しかしエイラは知っている。その安全がどれほど精神を苦しめるのかという事を。だからこそ失敗は許されない、そのために道は違えど冒険者と同じく必死の訓練を繰り返していることを。

「エイラ、難しく考えるなよ。別にアージエだってお前が考えてる風なことを言っただつもりはないんだから。それはまた後で聞くからさ、今はまず大筋を話し合おうよ」

尚も不服そうな顔のエイラに加藤はそう言う。加藤が相手であればまた違っのだろうか、エイラは怒った表情を見せる。それは今までと同じ負の感情の表れであろう。しかし色が違っ、違っのだ。

それを見たアージエは何処か安堵した表情で軽く咳払いをすると、話を再開させた。

「んっ、それですね？ それから、本来は街を造るといふ作業は通常2〜3年の年月を必要とします。最低限という意味で。ですが今回は開始から1年で最低限、つまりは防壁を造るといふものが目標です」

続けてアージエは語る。そのために必要なものは下見である、と。そして加藤へと視線を投げ掛けた、それを受けた加藤は頷いて言葉を返す。

「ああ、新しい街を造る予定の場所は俺も偶然なんだけど、まあ知っている。でも詳しくは覚えていないんだ、だからルクーツアと数人の冒険者で行って来ようと思ってる」

「その期間は予定では先程言った通り、1ヶ月から3ヶ月です。基本的には夏の間という感じですかね？ 早く終わるに越した事はありませんが、出来うる限り詳細な情報が欲しいので曖昧な期間となっています」

その間に更に計画を詰めるのが下見に赴く冒険者達以外の仕事であるとして、そのために今度からは間隔を狭めてこういった場を持つべきだと言って口を閉じた。

「ええ、そうですね。先程はつい感情的になってしまっただけです。ありませんでしたわ。ですが、カトウ？ 後できつちりとわたくしが説明して差し上げますわ。なんですか？ さっきの投げやりな言い方は、そもそもですねっ！」

エイラがそう言った時。この会議は終わり、話し合いに落ちたのだろう。いや雑談と言えるものに。しかし、これを繰り返す事で更に彼らは団結できるようになる。それぞれの持てる力を存分に発揮するのだろう。

エイラと加藤のいつも通りの騒がしさを楽しむように、今日という日は暮れて行くのだった。

第7話 『 連帯! 』

「いや、まさかあんなに簡単にロレンが頷くなんてなあ」

加藤はサツクルの街を歩きながら、そう呟いた。それにルクーツアが笑って答える。

「なに、他の街へ委託というものは昔から行われている事だからな？ 街造りの際にといい事はあまり無かったが、あつたものをその時にするだけだ。そう難しいものではないのさ」

今、彼らは下見に赴くための準備をしようとしていた。だが、大きな準備はロレン達が行ってくれる。今回は個人的な、どちらかと言えば小さな準備。つまりは加藤の防具などの新調のために街を歩いていると言っているだろう。

「この短剣でも十分だと思っただけど、ギョツセにも言われてたからなあ。せめて予備の1本、2本は持っておけてさ」

加藤は自身の愛剣である、少しばかり普通とは違う短剣。腰に差してあるソレを優しく撫でて言う。

「確かにな。オレとした事がすっかり忘れていた。普通であれば未だオレの背に隠れていただろうに、予備まで必要になるとはな……」

そう言い言葉を止めると、静かに加藤に視線を向けたルクーツア。しかし加藤は実に嫌そうな目で返した。

「やめるよ、そのお母さんは嬉しいです的な目はさあ。女将さんだけ
で十分なんだって、ルクーツアはそういうのやめるよ」

「まったく、勘違いも甚だしいな？ オレがするのだから、母親で
はなく父親と言つべきだろう？」

そう笑いながら冗談を言ったルクーツアに加藤は文句を言ってい
く。やはりそれに笑みを浮かべながらも、軽く謝るルクーツア。そ
の笑みこそが。

騒ぎながらも街を歩いてきた加藤達は、一軒の店の前で足を止め
た。そこは小さな店。店の前には小さいながらも特徴的な形の看板
が出ている。それは剣の形をしていた。

「すまないっ！ 店主はいるかっ！」

ルクーツアは店に足を入れると、大声を上げる。それに苦笑いを
浮かべながらも加藤も続いて店へと入っていった。

そんな大声に呆れたように出てくるのは人間の男、以前のあの男
だ。ひよろりとした体格で軟派な笑みを浮かべながらも、威風堂々
としているような圧倒される感じを漂わせていた武器屋の店主であ
る。

店主はルクーツアに苦笑いを浮かべながらも、加藤を一目見ると
軽い表情だったものを、硬いものへ、いや真剣なものへと変えてい
った。

「へえ、いつかの御仁かと思えば……。坊主、でっかくなっただじゃ

ねえの」

武器屋の店主は目を細めて、そう言った。受けた加藤は自身の頭に手を置き、思案顔である。

そんな加藤に笑みを浮かべたルクールア。理解できていない加藤の代わりにまだまだ駄目であるといった風の事を、やはり笑みを浮かべて言った。店主も同様に笑みを浮かべているのだろう。差ほど表情に変わりはないが、目尻が若干下がっている。

「えーつと？ ああ、そうだつ。店主さん、あの棒……とつても役に立ちましたよっ！」

加藤は胸元から、素早く棒おももりを出して言う。このおかげで一時は小型相手に立ち向かう事が出来た。このせいで過信したとも言える、いやそのおかげで大きな事に気付けたのだ。

過信したからこそ、矛盾した存在であった己を知れた。そして今の彼があるのだ。おももりとは自身を守るものである。それは一時の安全ではない、長い長い先を見据えて守ってくれるものなのだ。その意味では、実におまもりはおまもりであつただらう。

加藤の出したソレに、そんなモノもあつたかと小声で漏らしつつ、しかし嬉しそうに頷いた店主。

久しぶりの再会の挨拶のようなものは終わったとばかりに、店主は一瞬目を瞑ると、常のやる気の無い表情に戻り一言問うた。

「それで？ わざわざソイツの報告ってわけじゃああるめえ。何の用だい？」

それには加藤では無くルクーツアが答える。新たな街造りというものは石材が街の周りに小山のごとく積み重ねられている現状、隠す意味は無いものではあるが、それとこれとはやはり異なるのだろう。

一応の作法として、内密にという前置きをする。それに悩んだ風もなく軽く頷く店主。

「うむ、それでな。少しすると店主ほどの者ならば、こう言えば分かると思うが、修行の場付近を下見をしに行く事になっているんだ。こいつとオレ、その他数名の冒険者とな？ その際に短剣1本では心許ないのだよ、それなりに長期間滞在する予定なんぞな？ あれほどでは無いにしる2本ほど買いに来た次第だ」

「下見……なるほど。あそこかい？ へえ、あそこかい……、ちいと聞きたいんだが、坊主。おめえさん、ついこの間の事さあ。新人どもを助けたつてえのは本当かい？」

ルクーツアの言った修行の場と言うのは、恐怖を捨てるのと同義である並大抵のことではソレを感じない程に強くなった達人がソレを取り戻すために訪れる場の事だ。

以前ルクーツアが感じた通り、店主もそこを訪れる程の猛者であったようで既知であったようだ。そしてそれに頷くと1つ加藤に尋ねるのだ。

それは事実であるので加藤は軽く首を縦に振ることで肯定を示す。

「そうかい、そうかい……。その数名の冒険者とやらは集まっているのかい？ ……そうかい、そんじゃ。おれが行こう」

再度真面目な顔を作ると、唐突にそう切り出した店主。流石にルクーリアも驚きの表情であったが、すぐに素の表情に戻ると、理由を問う。

それに同じく軽い表情へと戻った店主が笑って答える。以前と同じような理由であると。

「以前と同じ……、カトーに悪い事をしたとでも？ そんな事は無いと思うのだが、いや」

「ふんつ、おれんとこの甥っ子が世話になつたようなんぞ？ なに、坊主の予備を2本買うとか言つていただろ？ その内の1本分くらいの仕事は今のおれにでも出来るさ。それに、いや」

そう言う店主、それを受けたルクーツアは共に笑い出した。1人だけ話に付いていけない加藤は居心地が悪そうに頭を掻いた。

どうやら店主が着いてくるというのは決定したようだ、ルクーツアとしても心強いのだろう。何処と無く安心した風な顔をしている。来ると決まつたからか、雑談のようなものを始める2人。それは理由のあらましである。

あの時、怯えに怯えていたマナ達、新人の冒険者達。その中でも最年少であつた少年。その伯父が店主であつたようで、あの時は助けてくれた冒険者が誰かは分からなかつたが、随分感謝したものだと笑う。

そして痛感した、冒険者を退いてからも体を軽く動かす程度はしてきたが、鍛錬と呼べるモノは行っていなくなつた己の未熟さを。

あの時、マナ達が報せに走つて来た時、街は大きく揺れたのだ。当然、店主の耳にもソレは届いた。だが行けなかつた、既に冒険者では無いし、誰よりも先に駆けて行つた目の前の達人と少しばかり老いた達人など、それらを見てしまったためだ。

昔の自分が通り過ぎていったのだ。それは酷く店主を傷つけた。情けない、悔しい、恥ずかしい。様々な感情が店主に襲い掛かる。

そうして暫くすると、街の民が歓声をもって加藤達を迎えるのだ。無論、その歓声の焦点はデイリーやロレンといった街で知られた英雄へと注がれたものだろう。しかし店主は確かに気付いた、傷つきながらも笑う加藤達を見たのだ。

その時だ。今まで自身の中で渦巻いていた感情が変わる。馬鹿馬

鹿しいものだと言えらるようになったのだ。そう、今からでも取り戻せると。

しかし、それがまた難儀な感情なのだろう。実に心地よく、実に決まりが悪い。そんな感情だ、だからこそ共に行くと言ったのかも。しれない。

「まあ、それでおれも少しばかり鍛えなおしてな？　へっ、昔ほどじゃねえが、それなりに戻したつもりだ。存分に頼ってくれい」

加藤という弱者を見た、店主という強者は奮起したのだ。

加藤のような者を守りたいからこそ、武器屋という道を父から受け継いだ。冒険者として身を立って自身だからこそ分かる武器を正しく与えるために。しかし痛感した、してしまった。自身はそれでは満足できていなかったという事に。

そう、自身も未だ弱者だったという事だろう。どちらも両立させれば良かったのだ。

とは言え、加藤を支える事は出来ても、ルキューツアを支えるのは今の自分では厳しいと言う。その分、苦勞を掛けると店主は頭を下げる。

「よしてくれ、店主ほどの腕の者が。その感情、オレも感じた事のあるものだ。そのために逃げるようにさ迷っていた事もあったが。

……ふっ、言う事もなかるう？　これからは共にいこうではないか」

「……へっ、そうかい。そんなじゃまあ、よろしく頼まあ。……そうさな、坊主があの場合に慣れる頃にはおれも元通り、いやあの時以上になつてみせらあよっ」

大人達は何かを共有したのだろう。同じ笑みを浮かべる、それは普通の笑みのようで何処か違う。諦めたような、しかし抗うような、

なんとも言えない、しかして喜びの笑みだ。
やはりというか、措いてけぼりの加藤がついに声を出して抗議する。

「いやさ、店主さんが来るの来ないのはいいんだけど。俺の予備つてか、新しい武器はどうなったんだ？」

その抗議というよりも疑問の声に、声を上げて笑う大人達。この店で以前見かけたやり取りを店主は始めるのだ。様々な武器を見せて行く、それは槍、斧、弓、大剣、長剣、短剣と多種多様だ。

「盾を持って使える武器がいいんだよなあ。何か良いの無い？」

先ほどまでの空気は、完全に消えていた。あるのは加藤に色々な武器を持たせては唸る親馬鹿の姿だけ。いつもと違うのはソレに近いものが1つ増えたという事だろうか。

加藤はそれらを何も言わずに持ち、確かめていたが、何処か違うのだろう。自身の要望をこの時初めて出した。

「そいつぁいけねえっ！ 盾を持っていたとはなっ、おれとしたことがっ！ 盾と併用か、するってえと……」

そう言うつと店主は店の奥へと消えて行く。いきなりその場から去った店主に首を傾げる加藤であったが、疑問に思う前に店主はすぐに戻って来た。その手には小さなものが握られている。

武器には見えない、しかし店主は自身を持って勧めてくるのだ。

「まずはこいつが無けりゃ話になるめえよ。そう、籠手だっ！」

以前の短剣の時もそうであったが、武器屋の主ゆえかそれらの説

明が好きなのかもしれない。丁寧に、必要と思えない情報まで教えて行く店主。

しかし共通しているのは盾を武器にするための武器だということだった。

「デイリー殿から伝授された盾って事は殺す盾だろう。そのためには盾を武器にするためのモノが必要よ、こいつはそのためのもんだ」

デイリーの盾と、普通の盾は概念が異なるようだ。本来は加藤の思い浮かべる盾同様、身を守るものだけであり、それで敵を倒すという考えはない。

しかしデイリーはいつも盾を前面に構え、ランスという巨大な槍を掲げて全てを1つにした砲弾と化している。そう、全てがあるからこそデイリーの武なのだ。

そしてデイリーもまた籠手、いや彼の場合は全身を鎧で固めている。それと同じだと店主は笑う。

「籠手ねえ、盾があれば別にいいような気もするけども……」

加藤は籠手を手に取ってみるものの、思案顔だ。その顔は不満気とすら言える。やはり剣などが欲しいのかもしれない。

それを叱るように店主は鋭い声で指摘する。そうではないと。勘違いしてはならぬと。

「いいか、この籠手はお前の剣も盾にするためであり、お前の盾を剣にするためのものだ。忘れるんじゃないぞ？ 剣と盾、これは普通は別物だ。だが坊主、お前のは双方共に剣であり盾ってことよお」

籠手とは小さな盾だ、小さな剣だ。それを身に着けた腕に大きな盾と、大きな剣を握れば、それは姿を変えると言う。

その籠手1つで、加藤は2つの武器を得る事になるのだ。本当の意味で加藤の武の基本が出来上がるのだろう。それをルクーツアが言う。

「お前の基本は堅固な守勢だ。しかし最大の武器はその脚力を活かした俊足にある。そのためにお前は静と動を綺麗に分けた動きを繰り返すことが多い、分かるか？ 剣しか使えぬ場面と盾のみ使える場面とが多々出てくるんだ」

加藤の動きは極端だ。盾を使う時は盾のみに意識を集中し、剣の時は剣のみ。それらの師匠が異なるための弊害と言えるかもしれない。

一瞬、切り替えるのに時間を要するのだ。それは本当に刹那と言えるものだろう。だがソレこそが命取りなのだ。事実、その刹那のせいで加藤はネミラズツタの攻撃を受け損ねた。そのせいでギョッセを窮地に追い遣ってしまった。

それは加藤の辛い過去であり、決して忘れてはならない罪だ。それを償う術はただ1つ、強くなる事だけである。そのための武器がそこにある。

ただ身に着けるだけで強くなれる武器などは現実には存在しない。ゲームでは無いのだ、それを持つただけで英雄になれるわけがない。だが、その武器は身に着けるだけで自身の力を、本当の力に変える力があると大人は言う。

店主は武器の相性、その用途という意味で。ルクーツアは今まで見守り続けた加藤の成長を鑑みて。双方ともに力強く言うのだ。

「こいつあ、武器は武器でも、こいつった時は普通の武器とは言わねえんだ」

「カトー、お前の武器だ。分かるか、お前の腕に持つ武器ではない、お前の中に必要な武器なんだ」

以前、加藤は剣を持っただけで強くなった気でいた事がある。盾の時も同様に、持っただけで全てを守れる気でいた事もあった。

それを以前、ルクーツアとデイリーは強く叱った。

だが、それは別段悪い事ではないのだ。本質を掴む前にその力に頼る事が悪手であって、それ自体はむしろ褒められる力と言えよう。それは武器を信頼するという事なのだ。今の加藤はあの時に厳しく言いつけられたためか、武器を信頼していない。

己の力量の下に武器を置いているのだ、それでは武器は武器のまま。ただの鉄塊がどれほど熱を持った剣という力の象徴になろうが、剣という武器の枠を出る事はない。

今こそ、武器を信頼する時なのだ。大人は言外に口にする。

自身の力のみで中型に挑めた加藤だからこそ、その禁断の方法を許された。武器を頼るといふものを。武器を武器では無いものと、頼もしい味方と捉える事を。

「……武器を頼る、か」

加藤は左手で籠手を撫で、右手で腰の剣を撫でる。今は身に着けていない盾も確かに心の中にある。

籠手は剣と盾という武器を、加藤と繋ぐための武器なのだ。剣が加藤と繋がれば、自然と剣と盾とも繋がる事になる。

そう、籠手を身に着けたとき、加藤の両隣には剣、盾という強者が肩を並べて立っているような心地になるだろう。1人ではなく、3人。言葉を変えれば加藤と言ふ武器と剣と盾という3つの武器とも言えよう。

武器は戦友となり、ヒトは武となる、つまりは武人だ。

加藤は武人としての高み、その境地に足を踏み入れるための一歩

を、籠手を手にするという事で踏み出したのかもしれない。

「ふっ、それでいい。店主、これはいくらだ？　いくらであるうと金を出そう」

「へっ、馬鹿言つな。こいつぁ、おれからの贈りモノよっ！　これから命を預けあうつてんだ、せめてこのくらいはなくちゃおれが困る」

「いや、お金を払わせて欲しい。うん、俺が払いたい。いくら？」

ルクーツアが言い、店主が笑って断る。そこに真剣な表情の加藤がそう言い割り込んだ。

どうしても払いたいと何度も言うのだ。変な考えなのかもしれない、金銭を払う事で自分のモノとしたいという、そんな考えだ。そのようなもので籠手が自分のものになるわけではない、これからゆっくりと自身と繋がっていくのだから。だが、それでも言う。自分が買いたい、自分で得たいと。

「そうかい、そんじゃーまあ。……………へっ、金板1……………枚でいいさ。こいつぁ特別製でな、ちいっとばかり貴重な金属で作られてるもんなのよ。このくらいでも安すぎる程だろうなあ、どうだ？　払えるか？」

金板1枚。それは大金だ、とてもでは無いが加藤では一括で払える額ではない。しかし、それは店主も分かっている事だろう、いくら実力があるとは言え未だ駆け出しという矛盾した存在なのは、今日会った時に分かっているのだから。

「まっ、今回は坊主のおかげで色々とおれも助かった。お前でなく

とも良かったのかもしれねえ、だけどお前だった。だから、やるつ
つったんだが、買いたいつて言うんだったら、貸しにしておこう」

「貸し？ いいのか？ いや、ありがとう！ 絶対に払うよっ、新
しい街が出来るまであんまり普通の仕事は出来ないから、結構かか
るだろうけど、絶対にっ！」

新たな街が出来たのであれば、加藤には確固とした地位が出来る。
当然ながら地位には責任が着いてくる。義務も着いてくるだろう。

普通の仕事など出来るはずもない、普通の生活からは遠のく事だ
ろう。未だその事には理解が追いついていない加藤であった。

しかし、そういうモノでは無いだろう。店主としてもソレを強
く求めているわけではないのだから。それでも加藤は払うだろう、
そのために必死に街のために尽くすのだろう。それは街のためにな
る、しかし店主は違う視点で見ているはずだ。そう、それはつまり
加藤のためになると。

「ふっ、まあ籠手の事はいいだろう。まずはこれからよろしく頼む
ぞ、店主」

「ああそんなことよか、あんたとは長い付き合いになりそうだから
よお、おれとしてもそうさせて貰えたらありがてえ」

「えっ、籠手の事はどうでもいいって、あれ？ なんか大事な事っ
てか、熱くなつてたのって俺だけ？ え？」

新たな局面を間近に控えたこの時になって、幸運にも加藤は己だ
けの味方を改めて知れた。それは剣であり、それは盾だ。何よりも
己自身という基本に。

籠手という繋がりを得た加藤には、新たな仲間が出来たのだ。今

までとは違い、今度は手と手を繋ぐことだろう。

剣は加藤のためだけに全てを切り開くだろう。盾は加藤のためだけに全てを押し通すだろう。籠手は加藤のためだけに新たな種火を灯し続けるだろう。

加藤は、自身の守りたいモノのために、自身を守ってくれるモノのために、それら全てのために強くなるだろう。

その隣には武器だけではない、加藤の憧れである大人もまた、その両隣に立つのだろう。いや、そうではない。

きっと、加藤は気付く、本当の意味で気付くのだ。ヒトの周りにはヒトがいるという事を。そのために剣を握るという事を。

そうだ。

加藤はようやく。剣を、手にしたのだ。手にしたのだ、盾を。ようやく加藤は。

第8話 『到着!』

「ふう、ここに……、また来る事になるなんてなあ」

ここは加藤にとって思い出の場所、つまりはあの湖である。

加藤の小さな準備を終えてから1週間ほど経って、いよいよとばかりに出発したのだ。そして到着したこの場所、特に湖にはどうやら正式な名称があつたようで、セノゾク湖という名前。

この付近のとある場所にて加藤はルクーツアと出会い、今日に至るのだ。

数週間掛けて加藤達はここに辿り着いた。以前よりも早く到着できたのだが、その理由。それは1つに加藤の成長、2つに以前は遠回りであつたという事であろう。

そしてその一行、面子は加藤、ルクーツア、店主、加えてエリアスール、エイラ、マナというものである。本来はもう少し大勢の冒険者を雇うはずであつたが、店主という達人級を加えたというのは大きかつた。衰えたとはいえ、その経験はそこらの冒険者の力とは比較できないものがある。

そして加藤だ。籠手という武器を得た彼の動きは変わっており、見ていて何処か安心できるものとなつていた。それを見たロレン、デイリーが変に人数を増やすよりも少数精鋭の方が好ましいという判断を下したのだ。

エリアスールは最初から決まっていた面子であるが、エイラとマナは余計なものといえよう。自分から着いて行くと言って聞かなかつたのだ。

エイラはまだしも、マナは実力も低すぎるため敵しいものであつたが、ギョッセが加藤に一言頼んだために、加藤が折れたというものだ。

「うう、やっぱり怖いです……。でもっ！ 師匠の代わりにわたしは頑張りますっ！」

「はあ……。ギョッセに頼むって頭下げられなかったら許可なんてしなかったのに」

加藤は今でも後悔しているようであった。足手まといが増えていくという事実に対してではない、少女を危険に晒してしまうかもしれないという意味でだ。

そんな加藤に何処かルクーツアと似てきている店主が、しかし真剣な表情で言う。

「ばっか、おめえ。そこは坊主がどうにかするってえもんよ。相棒だったか？ そいつがおめえに頼んだのは坊主、おめえを信頼してっからよ。それを裏切るんじゃないぞ！」

ギョッセはなんだかんだ言いつつもマナの師匠となっている。身体を動かせないので暇つぶし、という軽いものが切欠だったのかも知れない。だが、今では真剣に少女のために考えている。

こういった場での経験はマナの大きな財産となることだろう。

それは加藤にも分かる、なにより自身にとってもそうなるだろうと感じられるのだから。マナにとってはそれ以上というのは考えるまでも無い。

しかし、マナは残念ながら未熟である。

冒険者として、というのは語弊があるだろう。ただただ非力なのだ、万が一の時にはまさしく弱点と言える。危険な場での行動の際には1人の失敗が全体への危険に繋がることなど普通の事で、だからこそ少数精鋭という判断だったのだ。そこに弱点^{マナ}である。

しかし弱点というものは戦いにおいて全てにあると言えるだろう。

冒険者として弱いという事だけではない、そも冒険者とは力無きヒトを守るための職なのだ。

つまりは無力な大勢のヒト、これもまた戦いにおいては弱点と言えるのだ。それは新たな街を造るといっているのであれば避けては通れない、いやこの世界で生きていくのであれば決して逃れる事の出来ないう道だ。

特に加藤は守る側の筆頭として立っていく事になる。マナの1人も守れずしてヒトを守れるわけもない。それを立場からではなく歩んできた長い道のりで店主は分かっているのだろう。だからこそマナについては何も言わず、それについて悩んでいる加藤を叱咤するのだ。

そこまで考えてギョッセが加藤に頼み込んだわけでは無いだろう。ただ、その時であっても同じように言うはずだ、ギョッセは必ず言うだろう。頼りにしている、と。

そのように言われてしまえば、加藤としては相棒の頼みを断る事など出来はしない。結果、マナも同行する流れとなっていた。

「あらあら、カトウはわたくしとマナちゃんの護衛でもあるんですよ？　しっかりと働きなさい」

「エイラ、お前なあ……。ああ、もういいや」

エイラはマナよりも遙かに強いだろう。

しかしルクーツア、店主、そしてエリアスールという武人と比べれば格段に劣る。その中に入れるのはこの場に残る他のヒトでは加藤だけなのだから。そういった意味では彼女もまたマナと同様に足手まといと言わざるを得ないヒトだろう。

だがそれは武力という視点で見れば、である。他の視線で見れば彼女はある意味で今回の目的で一番重要と言える力量を持っているとも言えるだろう。本来であればアージエの予定であったが、彼で

は反対に武力が低すぎる。結果、武と智のバランスが取れている彼女になったのだ。

「それで、ここで何をすればいいんですか。カトーさん、言ってみえますか？」

そう言うのはエリアスール。その表情は悩んでいる色ではなく、楽しんでる色だ。

この下見という目的のために集められた冒険者達、その隊長は名目上ではあるが加藤なのだ。だからであろうか、彼女を含めルキューアにしろ、店主にしろ全て分かっているだろうに、ことある毎に加藤に指示を請う。

この場での行動は加藤にとっても大事なもののだろう。今は知った相手であるあからまだ良い。しかしいずれは多くのヒトにそれを出来なくてはならないような立場になるのだ。この程度、こなせなくてはどうしようもないと言うことだろう。

「うん、もう少し行った所に小屋があるはずなんだ。そこにまずは向おうと思う。うん……、湖の周りを歩けば着くから気楽に行こうか」

加藤は最初こそ、それを拒むような素振りを見せていたもの今では見事にこなしていると言えるだろう。それは簡単な言葉だ、誰もが知っている知識だ。

だが、それを言う。口に出して伝える。それは難しいことだ。戦闘であれば自身のみの重みであるが、これは大勢のヒトの命を背に乗せた重みだ。まさしく桁が違う。

当然の考え、当然の選択、当然の決定。これらを言うだけでも酷く疲れるのだから。その中でも長としての心構えを忘れてはならない。特に今回はマナという少女がいるのだから、その心を無視して

はいけない。なぜなら加藤は隊長だからだ。

「周りですかあ……。へへっ、わたしこんなに大きな河を見た事ありませんよっ！ 見ながら行けるのは嬉しいなあ」

「……そうですわね。ここに街を造れば、何時でも見れるようになるんですもの。この景色を他の皆さんに見せるためにも頑張らないといけませんわね」

エイラ、そしてエリアスールはラルの時もそうであったが世話好きのようである。こうしてマナと常に一緒におり、話し相手となる事で少女を大いに助けていた。それは、少女のためだけでなく、加藤のためにも大きな助けであろう。

「ふむ、小屋へ行くか。あそこを拠点にするというのは悪くないなだが、そう多くは入れないぞ？ 詰め込んで3人ということところだろう」

「基本的にマナちゃんとか、女のヒトって事でいいんじゃないかな？ 俺らは外で寝ればいいよ」

少しばかり先を歩く女性陣の後ろを追うように歩く男性陣。

右手にある湖を眺めながら、彼らは周囲に気を配りながらも同じく雑談を楽しむ。

「ふんっ、それがいいだろうな。なんだかんだ言いつつ、エイラってガキも緊張しっぱなしだった。口ではああ言ってるが、身体の動きで分かる。本質的に無意味とは言えよ、小屋の中では多少の安心もあるだろうさ」

「まあ、野宿みたいなのは以前もしたんだけど。街道とここじゃ、やっぱり違うって事なんだろうなあ」

それは当然であろう。言うなればこの場はモンスターの縄張りであり、街道、つまりは街がある範囲はヒトの縄張りなのだから。

外で寝るといっことは同じ事であるが、その場がどういった場所かでその心持は大きく変わる。

「おめえは……、いやまあ。そういうことだ」

「ふつ、それよりも。万が一の時のことを更に話し合おうではないか。エリ嬢はエイラ嬢、マナ嬢の護衛。オレと店主、そしてカトールで敵に当たるわけだな？」

「うん、基本は俺と店主さんが前衛を務める。ルクーツァは俺らとエリアスールさん達の両方の援護って感じで頼むよ」

既に決めてあった事の確認作業。これらを繰り返している内にいつかの湖畔へと彼らは辿り着いていた。

「ふむ、陽が落ちる前に着けたのは僥倖だな。それで、カトール……、これからどうする？」

「ああ、小屋を見てきたけど、少し壊れてた。まあ当然なんだろうけど、少し直そうと思うんだ。その間、ルクーツァと店主さんは警戒しておいて貰えないかな？」

夕暮れ時になり、この場へと到着した加藤一行。

流石に調査とはいかないようで、今日はそのまま休む流れのようだが小屋の修繕を行いたいと加藤は言う。

隊長かとうの言う事は基本的に決定事項である。ルクーツアも店主もそれに異議を唱えることはあまり無い。言われた通りに彼らは少しばかり小屋から離れて視線を巡らせ始める。

それを確認してから加藤は女性陣に声を掛けるのだ。

「エイラとマナちゃんはここで少し休んでいてくれ。エリアスールさんっ、ちよっとっ！」

加藤はエリアスールを呼ぶと身振り手振りで説明を始める。それに頷きを返すと、加藤と共に森の方へと歩いていった。森の方は夕暮れ時というのもあり、少し入ると薄暗くなっており、すぐに加藤達の姿は見えなくなった。

「なにしに行っただんですかね？ 森の方に行っちゃいましたけど、大丈夫なんでしょうか？」

「ええ、そうですわね？ まあ、あまり認めたくありませんが、今のカトウであれば問題はないでしょう。ですけど、一言何をしにくいかというのを言っていくべきですわっ。これは後で説教ですわねっ！」

エイラが頬を膨らませながら声を上げて、マナはそれを鎮める。そのような他愛も無いやり取りを行って数十分。

ようやく加藤達が森の中から姿を現した。その腕には木材が握られていた。そしてそれを持つ加藤の目は実に楽しそうなもの。加藤に対してなにかを言おうとしていたエイラはその表情を見て口を閉じた、が。

「ん、んんっ！ 一体何をしに行っていたんですの？ 隊長という立場で慢心しているのではないかしら？ どのような事であるうとも報告、連絡、相談をして頂きたいものですわねっ！」

「え？ なんかソレどっかで聞いた事があるような？ いやまあ、それはいいけどさ。言っただけだろ？ 小屋を修復するって、そのための材料を採りに行ってただけだよ」

「ふふっ、カトーさん。エイラ様が言いたいのはそのうちではないですよ？ 小屋を修復する事は言っていましたよ、そのために必要な材料を採りに森に行く事は言っていますよ」

加藤の反論を、エイラではなくエリアスールが訂正させた。そうではないのだと。

物事というものは難しいものだ。それは常に動いているのだから色々考える事は移ろう。直したいという事を伝えた後に、そのために必要なものが無いと気付く、そして行く。

加藤の中ではそれらは一連した物事であり、伝えてある事だったので。しかし他の者にはそれが分からない、いや察せたとしてみ確かめは分からないのだ。

だからこそエイラは言ったのだらう、次からは気を付けて欲しいと。

「ああ……、うん。それは悪かったよ、まあ今度からは気を付けるから、な？」

「なんですの？ その軽い返事は、本当に分かっているのか疑問ですわねっ！」

加藤は尚も言ってくるエイラから逃げるように小屋へと足を向け、それを逃がすまいとエイラも後を追った。

そんな2人を後ろから眺める2人の女性は笑いながらも、やはりそれに続く。

加藤が小屋を修復し終わる頃には辺りが暗くなっており、焚き火の明かりが実に暖かい時間帯となっていた。

「ふむ、店主は料理が上手いのだなっ！ これは良い、実にっ」

「ルクーツアの旦那は良く食うな？ いやまあ、野宿というよか冒険者の楽しみはコレつつつても過言じゃあるめえよ。こんな場所で食う料理は、そりゃ美味くなくっちゃあな」

焚き火を囲うようにして彼らは夕食を摂っている。以前、デイリ―が作ったモノと何処と無く似ている料理であり、パンに野菜などを挟んだモノだ。

ルクーツアはやはりというか食事時は違う意味で真剣そのもの、実に楽しんでいた。そんなルクーツアの様子に驚きながらも店主もまた笑って食事を楽しむ。

「うう、わたしこの野菜は苦手で……。カトウさんっ、これあげますよっ!？」

「マナちゃん……、ちゃんと食べるよ？」

加藤はマナの願いを一蹴した。あまりに素っ気無く言われたためか、それほど嫌いな野菜なためか、少女は涙目である。

しかし加藤の言う事には一理ある。食べられるものは食べる、アレルギーなど食した事で身体に悪影響を起こすというのであれば別であるが、少女の場合はただの好き嫌いである。

「ふふっ、マナさん。これはですね、食べると胸が大きくなるそうですよ?」

何故かエリアスールはそう笑って言う。言われたマナは自然と彼女の胸元に視線を投げる。同じく、エイラも好き嫌いは良くない事だと言葉を重ね、やはりマナは同じ場所に視線を向ける。

そして己を見て、涙が零れた。その涙を拭うかのように、一心不乱に嫌いな野菜が多量に入っているサンドウィッチを胃に収めていくのだった。

「いや、その野菜で胸がどうのこうのっておかしくね?」

加藤は小声でエリアスールに言う。それに彼女は笑って頷く。この野菜にはそのような効用などありはしない、と。しかしこう言えばレイラは何でも食べたのだと自信あり気に言った。

その通りになったのかは分からないが、しかしマナは嫌いなものを何かと戦うかの如く真剣に、必死に食べていた。

「まあ、うん。いろいろ、いろいろあるよね」

どのような場所であろうとも、彼らは彼らであった。それこそが何よりも大きな発見と言えるのかもしれない。

ともかく、こうして加藤達は新たな街のために大きく足を踏み出したのだ。明日からはソレに続く道を更に大きくするために、また一歩踏み出すのだらう。

第9話 『心情!』

「それは以前にも言っていたでしょう。必要です、絶対に、ええ。そうです、絶対に必要なんですよ!」

「むう、でもさっでもさっ! やっぱり最初から運動場を作るよりも病院を作る方が絶対に良いってばっ!」

「ここは領主の屋敷、その広場である。だが何時もよりも声が響くそれは加藤、エイラ、エリアスール、ルクーツアがいないためである。」

「しかし、いなくても。いや、いないからこそこの場にいる彼らが行わなければならない、進めなければならないものというものもあるのだ。」

「今、アージエとレイラが言い争っている論点は防壁という第一目標を建造した後の着工順についてである。」

「ですから、治療所は必要最低限は作る事は以前にも言っていたはずですよ。街として大事なのはそこではなく、スポーツというものがあるという事を大勢のヒトに知って貰う事。ならば国軍が未だ残留している時期にこそ、その存在を見せるべきでしょうっ!？」

「アージエが重視しているのは、国軍である。とはいえ、それとの協力体制云々という事ではない。国軍は当たり前ではあるが一定期間滞在した後、街として一定の体裁が取られたとあれば国へと帰還する。」

「その帰還した後の事が重要である、と彼は声を荒げる。そう、それは土産話とでも、それを聞いた家族なりが知人に対しての雑談と

いう形であつてもいい。とにかく広い範囲で、確かな情報として広まるのである。

それにこそ、加藤が理想としている差別という問題の緩和に繋がる第一歩であると言っているのだ。彼にしてみれば聊か強引な語り方ではあるが、それほど重要な問題なのだ、差別というものは。今までは足掻く事すら難しかったソレに手が届くのだ、どうしても暑くなってしまうのだらう。

「でもっ！ 病院は絶対に必要だよっ、防壁を重視するっていうのはわたしも賛成だよ？ 差別についてだつてそうっ、確かに大切！ でもねっ、それ以上に大事なのはそこに住むヒトを守るって事なの、心の安全よりもまずは命の安全っ！ 考えるまでもなく当然の事でしょう！？」

レイラはアージェの言う事に理解を示しつつも、現実として当然の理論を述べる。

そう、現実としてレイラの意見は正しいと言える。街を造る過程でも病院より防壁を重視するという方向性こそ認められたものの、やはり緻密な医療行為を可能とする治療施設、病院というものは必要なのだ。アージェの言う必要最低限、これではそれらを行えないだらう。

しかし、その施設には多大な資金を必要とする。はっきりと言えばそれを作っていまえば運動場の建設は厳しくなってしまう。いや、出来るには出来るのだが国軍という名の広告塔が消えてしまっている事だらう。

新たな概念と、昔ながらの、しかしだからこそ大事な基本。これらの折り合いを着ける事は今の彼らには難しい事なのかもしれない。そう。彼らにならば、である。

「アージェの言う様に運動場が必要なのはボクも思うなあ。けど

さ、ヒロが言ってたじゃない？ スポーツってのは簡単に出来るんだーってさ。要はスポーツが楽しいってのを知って貰いたいんであって、新しい街にそれが出来る凄い施設があるってのを知って貰いたいわけじゃないんでしよう？」

言い争う2人の間に、焼き菓子を頬張りながら口を挟むのは二人である。いつものように、特に考えずに軽く言い、続けて言うのだ。

「スポーツってさ、なんだか身体を動かすやつらしいじゃない？ 追いかけることも一応スポーツなんだって！ だからレイラの言う通り病院を作ってからなの、なんだっけ？ リハビリ？ とかのでソレをやらせればいいんじゃない？」

彼女は続けてそう言う。そう、最初に着工するのはやはり病院であるべきだ、と。しかし更に言うのだ。

「でさでさっ、ちっちゃくても良いから病院に運動場を作ろうよ。国の大きな病院には大きな庭があったけど、それみたいな感じですよ！ 運動場を作る職人さんにも、こんな感じのをでっかく！ って感じで良い練習にもなると思うしさあ」

その意見は実に纏まっていた。少なくともアージエとレイラ、この2人に取っては。

アージエからしてみれば、それでも運動場という目玉があった方が効果的なのは変わらない。しかし医療の一環としてソレを組み込める、という新たな要素が出てきたのだ。妥協するには申し分ないと言えよう。

同様に、レイラとしても元々スポーツ、そして運動場自体には賛同している立場だ。それ自体を否定などしてはいない、防壁の後の

着工順として病院は第一であるべきだという意見だっただけなのだから。

「やはり、ニーナ様は頼りになりますね。いや、まだまだ未熟なようです。ロレン様にも広い視野を持ってと言われたばかりだということに……」

「そうだねえ、こっちが良い！　っていうだけじゃなくて、相手の意見を聞いて、それを纏めないといけないのに……、わたしもまだまだだなあ」

「ん？　あははっ、何いつてるのさっ。ボクはレイラ達が言った事があつたから言えたんだよ？」

そう、ニーナに専門的な知識は未だ無い。これから得たとしても他の面々を凌駕するモノを得られる事はないかもしれない。

あるのはただ、示された事柄を想像し、それについて自分なりに考えるというだけだ。やるべき事を1から創造し、それを誰かに伝える手法を取る事は行えない。彼らが2つの事柄を怒声混じりとは言え、説明するように、説得するように口に出していたからこそ彼女はそれが出来ただけなのだ。

しかし、これは簡単な事であろうか。いいや違う。これは自分の思想を1から形作るよりも遥かに難度が高い場合が多いのだ。

何故か、それは相手の話を理解できなければ行えるモノではないからだ。異なる理想、つまりソレは異なる知識、経験によって形作られたモノだ。それを理解するにはその両者のソレを有していなければ本来は行えないのだから。

しかし、ニーナにはそれらは無い。では何故ソレを行えたのか。

それは彼女はモノではなくヒトという視点で見ているためだろう。何故それを言うのかという物理的な根拠ではなく、何故このヒトが

そう言いたいのか。それを考えるためだ。

ヒトと接し、それと共に生きていく。これはほぼ全てのヒトが経験し、時に苦悩するほどの問題であり、時に歓喜するほどの幸福だ。彼女はソレらの怖さ、そして優しさを知っている。前者を必要以上に恐れる事の愚かさも、後者を頼りに頼ることの恥もまた知っている。

だからだろうか。彼女は良くヒトを見る。良くヒトの話を書く。それを理解できずとも、ただただ目を向け、耳を傾ける。それだけだ、ただそれだけだ。

それはある種、レイラの長所と似ていると言えるだろう。違う点はその焦点だ。レイラはモノで考え、ニーナはヒトで考える。

当然ながらヒトで考えるだけでは何も進まない、小事であればまだしも大事であれば周囲を納得させる理由が必要なためだ。自分は知っている、だから良い。これでは誰も首を縦に振るまい。振りたくとも振ってはいけないのだから。

ただし、モノとモノがぶつかる時にヒトという視点を挟む事は納得させ得る強き理由となる。

ニーナは良く仲間の名前を口にする。加藤という発案者が口にした切欠、アージエという智者が言うからという信頼、レイラという領主の娘が口にした歴史に基づく根拠。

そう、彼女はヒトを知っているからこそ、理解できずともそれを信じられる。ヒトを知っているからこそ、このような提案を口に出れた。

スポーツというものを広めるために、どのような方法が効果的なのかは彼女には分からない。しかし街を造るという視点であればレイラ、アージエ双方ともに信頼できるのだ。どちらの意見もきつと素晴らしい、誰もが納得できるモノなのだと。だからこそ、どちらも選びたい、選ぶために頭を働かせる。

それらの両方を成り立たせるための根拠、説明を探すのではない。それら別のモノを掲げるヒトとヒトが歩み寄り、仲直りさせるため

の理由を探すのだ。結果的には同じなのかもしれない、だが違う。決定的に違うのだ。

この方法は汎用的ではないのだから、良く知っているヒト相手ではなければ通用しない。またその相手に自分という緩衝材が同様に信頼されていなければ効果を発揮しないモノだ。

誰もを納得させられる知識を、根拠を有するヒトに、貴方ならば信じられる。そう言われなければヒトという根拠は強くなれない、少なくとも大事を運ぶ場合であれば。そして、ニーナという存在はこのような立場となつてなお、ヒトという視点を重視できる人材、いや正確にはそこしか見れないと言つべきだろうか。

ともかく、彼女はロレンが言つていた通り重要な人材となつていた。子供が大人に変わる時期、どうしようもない変化が訪れるものだ。それは切り捨てなければならぬモノもあるだろう。それは見捨てなければならぬヒトもいることだろう。

その時、ただの一言で良い。それをどうしても捨てたくない、どうしても言つてくれるヒトがいれば。きつとソレは試練だろう、きつとソレは苦難だろう。

しかしソレこそが彼女達の。

「えへへー、まあ。褒めてくれるのは嬉しいなっ！ で、えっと？ 壁でしょ？ 病院でしょ？ 小さいけど運動場でしょ？ 順番はいいけど、どういふ風にするんだっけ、壁はヒロが色々言つてたのを領主様がもう準備してるらしいけど」

「病院については、そうとなれば力を入れるべきでしょう。運動場を作る予定地さえ確保できるのであれば、国軍がない時期に力を注ぐべきではありません。そうなりますと、専門家の意見が欲しいところですね？」

「それは後でわたしがお父様とかに掛け合ってみるよ。重視するって事だけど、それってどの程度で……」

レイラが道筋を作り、アージエがそれを組み上げ、ニーナがそれを支える。時にぶつかる意見をニーナが纏め、纏められたソレをアージエが見直し、レイラが更に進める。

智の方面での各々の役割というモノがうまく機能し始めていた。自分出来る事に全力で取り組む、それが形となってきたのだ。

あれこれと、時には先ほどのように口論を行いつつも最初期の事柄について細かな点までも纏まりだした頃。アージエは一息つくように口を開いた。

「そうですね、主要な用件についてはひとまずこの程度でいいでしょう。後々細かい修正は必須ですが、うん。いやあ、資金を調達しなくても良いので楽ですねえ、これが後ではそれらに走り回らなければならぬと考えると頭が痛くなります。領主様方には当分の間、頭上がりそうにありませんよ」

そう、あれをしたい。これをしたい。それは子供であつても言えるモノなのだ。今、彼らが行っているモノはそれをしたい、だからこれをしないといけない。という考え方、同時にそれらを動かす方法、それらがどのように動くのかという事を実験するというモノである。

そもそも大衆を納得させるための理由にしても、最初から難易度が低いと言えよう。先にも挙げた通り、納得させるための理由を、納得させうるヒトが言えばその効果は飛躍的に上がる。

今回、彼らが納得させる相手とは大勢のヒトではない。彼らの親と呼べるヒトが相手であるのだ。それゆえに多少甘い所が無いとは言えない、多少の欠点があっても親がソレを補う事だろう。

子供が言った所で信頼されぬ意見であろうとも、それを聞いた親が、ロレン達のような実力者が言うのであれば、という事である。

街を作り上げ、一定の成果を挙げたのであれば、子供たちにもそれなりの実績が生まれることだろう。それを元手に、今度は本当の意味で1から大勢のヒトを納得させていかなければならないのだ。その時には親の加護に頼る事はそうそう出来なくなるだろう。

その時のために、今から全力でいかなければならない。必要なきに努力を始めるのでは遅いのだ。個人としてならともかく、彼らは大勢を背負わなければならなくなるのだから。

「そういうものなの？ まあ、その辺はアージエとかエイラに任せよう！ ボクは……、なんだろう？ うん、いつでも相談に乗るからね？」

「ははっ、それは心強い。頼りにさせてもらいますよ？ 冗談ではなく、本当にね。それはそうと、今頃は彼らも予定地に到着した頃でしょうかね」

アージエは今までの硬い話の流れを切るように、思い出した風にそう漏らす。それにいち早く反応を見せたのはレイラだった。

いつも傍にいたエリアスールが居ないということもあるのだろう、慌てるように言葉を繋いだ。

「そうっ！ もう着いてるよねっ！？ 大丈夫かなっ、ルクもヒロもいるし、なんか凄いヒトも一緒だから大丈夫だってお父様とデイリーは言ってたけど、2人はともかく、ヒロがいるからって！？ ヒロだよ？ ヒロっ！？」

「お、落ち着いて下さいレイラ様っ！ それにですね、ヒロ君はもう既にかかりの実力者です。貴女も知っているでしょう？ あの時、中型相手にギョッセさんと共に生き残った程の冒険者なんです。エリアスール様とエイラ様もきつと守ってくれると思いますよ？」

アージエは加藤の実力を現す具体的な例として、ソレを挙げた。挙げてしまった。確かに、中型相手にただの2人で対抗し、また生き残る事は普通の冒険者では考えられず、相当の実力を有している事の証左になる。

だが、その時にレイラを始め親しいヒトらは大いに動揺したのだ。そして酷い怪我を負っていたギョッセ、それ程ではないにしろ同様に負傷している加藤を見て更に慌てに慌てた。

そもそもが、レイラが心配している相手とはエリアスールだけに留まらない。マナという少女もそうなのであるが、やはり気になつて仕方が無いのはお目付け役の姉のような女性と、加藤、エイラなのだろう。

その心配するヒト達を守るのが心配しているヒトだというのだ。それも守れたとしてもまた大怪我を負うかもしれないと考えてしまつ、思い出さずにはいられないヒトなのだから、レイラの心配振りにも頷けるものがあるだろう。

それを理解できたのはやはりニーナであつたようで、苦笑いながらも口を挟む。

「あはは……ヒロかぁ。けどさレイラ、ヒロはともかく。ルクーツア様やなんて言つたっけ？ その強いヒトがいるんだし、大丈夫じゃないかな？ 少なくとも、中型の1匹や2匹なら問題ないって思えちゃうなあ」

ルクーツアという名はこの場にいるヒト。特にレイラには大きな

意味を持つ言葉だ。自身が尊敬して止まない父親と祖父のような彼らと同様、いやそれ以上の武を持つ存在のためだ。

「そっそっだよねっ。ルクがいるし、大型が出てても逃げるくらいは出来るよねっ！」

「いや、流石に大型は分からないけど……。でもそうかもねっ！ マナちゃんだっけ？ あの娘が言うにはヒロだって凄いんだって嬉しそうに言ってたし、うん。それにさ？ エリさんもすっごく強いでしょ？ というかエリさんがヒロを守る側じゃない？」

「あははっ！ だよね、そっだよねえ。エリは凄いもんねえ……」

「そう言えば、エリアスール様は武人なんでしょうが。あの武は冒険者として磨いたモノなのですか？ それにしてはレイラ様と旧知の間柄、いえそれ以上のモノに見えますが」

何やら安心したのか、レイラとニーナで先ほどまでの話全てを忘れたかのように雑談を始めようとしていた2人。そこにアージエが軽く疑問を口にする形で間に入る。

それに首を傾げながらレイラも同じく、軽く言い放つ。

「エリは冒険者じゃないよ？ いや、冒険者としてもやってたけど、武はデイリーから教えられたんだよ。わたしと同じでお父様から教わったんだよ？」

「お父様？ というか領主様から？」

「違っつてば、デイリーから。あれ？ エリの父親がデイリーって知らなかったの？」

「知りませんでした。なるほど、道理でデイリー様があの時、エリアスール様の……」

あの時、というのはデイリーの家での酒盛りの事だ。

あそこでの談笑は、酒の力もあってか気兼ねすることなく、思いのままにそれぞれが語り合う。

ロレンはレイラとアイラという家族自慢に終始し、ルクーツアは加藤の武について長々と説教を始め、デイリーは加藤の色恋沙汰で笑いに笑う。

加藤がそれら全てに反論なりをし、その加藤の愚痴をアージエが聞くというのがいつもの流れであり、アージエが加わってからも定期的に行われている彼らの大切な息抜き、いや充電の時と言えるモノだ。

その時、デイリーはなにかにつけてエリアスールの秘密を言っていく事が度々あったのだ。基本的には本人の前で言えば怒るであろう内容を。

ロレンがレイラのそれらを口にするのは理解できるとしても、デイリーが何故エリアスールのそれを、と何処と無く引つ掛かっていたモノが綺麗に理解できたアージエはうんうんと何度も首を振った。

「んー、なーんか気が抜けちゃったなあ。アージエが変なこと聞くからだよね？ っていうか、なんでそんな事を気にしてたのさあ」

「ははっ、それは失礼しました。おっと、もう暗くなっていたんですね、そろそろ夕食時ではありませんか？ エリアスール様やエイラ様がいないと忘れがちになって困りますねえ。ささっ、移動しましょう」

ふと外を見たアージエは時間がかなり経っていた事に気付く。な

なんとなくアノ酒盛りの事は話したくないでも思ったのか、慌てたように、わざとらしくそう言う。

レイラは何処となく不満気であったが、ニーナが声を上げた事で頬を膨らませながらも思考を変えたようだ。

「わあ、ほんとだ。ねえねえレイラ？ 今日は何んだろうねえ。やつぱりお魚かな？ それともパン包み焼きかなあ？」

「うーん、わたしは野菜な気分っ！ サラダがあると嬉しいかもっ」

レイラとニーナはそれぞれ思う事を口にしながら、部屋を移動しはじめる。レイラは心配だと零しながらも夕食が楽しみなのか顔色は明るい。ニーナに至っては夕飯が楽しみでならないのか、とにかく笑みを浮かべている。

そんな彼女達を見ながら、後ろを着いて行くアージエはふと、窓から空を眺める。

「大丈夫でしょうか……。やはり心配ですねえ、何事もなく終わればいいのですが」

そう零すと、少しばかり置いていかれた事に気付いて早足でレイラ達を追った。アージエの眺めていた空、暗くなりはじめ星がちらほらと自己主張し始めたところのソレは、何も言わずにただソコにあるだけだった。

第10話 『 遅々! 』

「ふう、食べた食べたつと。しかし、流石に干し肉とかばっかりなのは飽きてくるなあ」

「ふんつ、仕方がねえだろうが。坊主やお嬢さん方が旨いもん食いたいってごねるもんだからよ？ 本当は最初みたいな料理は間隔を空けてやるもんなんだがね？」

この場を訪れ、既に早いもので1週間が経過していた。着いてからというもの、彼らは辺りを調べに調べた。しかし、分かった事はそう多くはなかった。

大きな湖があり、それを囲うように木々がある。という事だけだ。ひとまずは湖の周りを調べたという形で1週間は過ぎていた。

しかし、警戒を行いつつも大きな湖の周囲を調べるというものは意外と大変なもので、1週間でソレが終わった事は喜ぶべきことだろう。

「うっ、すいません……。美味しかったから」

そんな事を言い合っていた加藤と店主に対して。干し肉を小さく口に含み、口内で柔らかくしながら食べていたマナが少し申し訳なさに言う。

やはりこの環境で一番疲労しているのはマナであり、それを和らげるためか食事を誰よりも楽しみにしていたのだ。そのためにこういった場での豪華な食事、というものを連日続ける事となり、結果として最近では寂しい食事と化していた。

「ふふつ、いえ。私としても流石に緊張してましたから。マナさんには感謝しているんですよ？ 最初にあれだけ日常を感じられる食事を出来たのは、本当に助かりましたから」

日常を感じられるモノ。それがここでは食事だったのだろう、いつもと変わらないような暖かい食事、それは栄養面だけの効果に留まらないという事だろう。精神的に大きな助けとなる、最初期にソレを得られたことである種の自信も得られるかもしれない。そして結果としてソレは成功していた。

「はっはっは、まったくだな。カトー、お前は別としてもエリ嬢、エイラ嬢やマナ嬢にとってはこの場は厳しいんだ。その程度は許してやれ」

「いや、あのさ？ 俺は別にそういった意味で言ったわけじゃっ」
こうした流れは夕食時では最早いつもの事となっていた。加藤を皆で責めるというものだ。全ての失敗と思えるモノ、それを加藤が悪いという流れを無理やりにも作る。

この流れで大きな役割を担っているのは当然であるが、全てを受け止める加藤。そして、それ以上に大きな役目を担うのがエイラである。

食事の例から分かるように、どうしてもマナが失敗を犯す事が多い。それはどうしようも無い失敗ではない、しかし小さなソレが積み重なれば自然と、である。

そんな時に加藤にソレを全て押し付けてマナを守るだけでは、隊としての平穩を維持する事は出来ない。そのためのエイラだ。

「いいえ、カトー？ 貴方はいつもそうですわ、言葉遣いというものを良く考えて使いなさい？ そうっ、あの時もっ！！」

「あの時ってどの時だよっ!？」

加藤に押し付けられる責任、それを周囲にとっては笑いとさせる能力である。そう、すなわち喧嘩である。これは諸刃の刃であるが、行使する両者によつては欠点が消えるものだ。

切欠がなんであれ、喧嘩が始まれば周囲はソレを止めるために動く、切欠を解決させるのではなく、喧嘩を解決させるのだ。汚い言い方をするのであれば曖昧にしまうという事。

このやり取りは甘く見れたものではない。規模が大きくなった時、このやり取りが行える事の重大性は恐ろしいものだ。そう、これもまた豪華な食事と同義なのだ。

彼らはいつもの光景を時に諫め、時に笑いながら夜を越していく。

「っあー。なあエイラ、これって意味あるの？　なんでこう歩き回るだけなんだよ？」

「何を言っていますの？　こうして自ら歩いて辺りを調べる……、これが重要ですよ」

翌日、加藤達は手分けして辺りを以前よりも丁寧に調べるという段階に上げた調査を行っていた。それは以前はただただ歩いて過ぎるだけだった場所で、時々立ち止まり、そして見回すというモノ。

調査というよりは散歩と言ふべきところだろう。事実として加藤はそう感じ、なんのためにココを訪れたのが分からなくなっているようだった。

「そうは言っけどさあ。これって、意味あるの？　なんか、地面を掘って地質がどうたら〜とか、遠くから見て平らかな〜とかさ？」

「なんですの、それは。地質という事でしたら、先程から調べています。それに平らかどうかなんて、見ていれば分かるでしょう？」

加藤の問い、加藤自身としては正しいと思っっている知識をなんとなく口に出したモノ。それにエイラはため息を吐きながらも丁寧に答えた。

まずは足先、それで地面を突き刺すような素振りをしてみせる。ただそれだけだ。次いで辺りを見渡す真似をして、自信気に胸を張る。長期の滞在ゆえなのか、夏本番となりつつあるからなのか、彼女は薄着の上に防具を着用するという格好だった。その行動に顔を赤らめつつも加藤は言った。

「いや、そのな？　んんっ、ここの木が一杯あっちゃ平らかどうかなんて分からないだろ？　それに少し掘った程度で分かるのか？」

「ん？　そうですね、確かに木が邪魔かもしれませんがね。では、カトウ。……切りなさい」

「無茶を言うなっ！　1本、2本ならまだしも、何百本、何千本を切らせるつもりだっ！？」

ついつい大声で言ってしまう加藤。それを聞きつけたのか、手分けをしていた他の面々が近寄って来た。手分けとは言え、声の届く距離を保っていたのだ。

「まったく、いきなり大声など上げてどうした？　何かあったのか？」

最初に姿を現したのはルクーツアだ。やはりというか、加藤がそれなり以上の実力を得ている現在になっても過保護な面は消えていないようだった。その実力者のルクーツアが鼻^{ひいき}肩しているためか、デイリー、店主とした達人級もそれに近い見方である。最も、最近の加藤にはそれをして咎める必要性を感じさせない程の重責を負わせているという面もあるのだろう。

「ああ、いや。なんでもないよ、ちょっとな？」

友人の目の前で親に過剰な心配をされる、という感じの羞恥に近いモノを感じたのだろうか。加藤は微妙に顔を赤らめながら、なんでもないと腕を振りながら繰り返す。

「いえ、カトウがこんなやり方でいいのか？ などと言い出しました。一理あるかと思いましたが……」

エイラが加藤が先ほど言ったような事をつらつらと述べていく。その間にルクーツア以外の面々もこの場に集まってきていた。

「ほー、そういうやり方もありかもなあ。場所が場所ってのも有るかもしれないねえ」

街は基本的に平原と呼べる場に作られてきたモノだ。サツクルを始め、多くのものがそうと言える。

そのため、加藤の疑問がそもそも必要ないものだったのだ。昔から使われて来た方法、それで全て確認できる。そうでなくとも、それを行えば一応の信頼性を多くのヒトが抱くというものだ。

しかし、この場合は木々が所狭しと並んでおり、草原でのソレを行う事は難しい。無論、このように地道に歩き回るだけでも不可能で

はない。やり方さえ確立すれば出来ないものではないだろう。

しかし、そのやり方は見て回るといっものだけだ。測量といっものすら使われていない。

高低差などを測るのは己の感覚のみといっものだ。加藤としてはこの方法に信賴があまり置けないのだろう。事実として、それはこの場にいる個々人によつて差が生まれるものだった。

だが、加藤はこのように技術を必要とする場面において、どうしても以前の世界での価値観、考え方などに捉われてしまふ欠点がある。しかし、ヒトの感覚といっものは決して甘くみれたものではない。

環境によつてヒトは大きく変わる。これは以前の加藤の世界でも立証されていることだろう。双眼鏡といった器具を必要とする程の距離でも、己の眼のみで視認する事の出来る視力を有するヒト。或いは生まれつき眼が見えないために、聴覚が異常に発達しているヒト。ソレは様々だ、しかし持たない何かを補うかのようにヒトはそれを新たに造り、時に普通のソレを遥かに凌駕する。

これもまた同様なかもしれない。そういった技術は無い、しかし街などを造るためにはそういったモノが必要。ならばヒトの感覚でそれを補うといっものだ。

「まあ、カトーの言っ事も分からなくは無い。が、大体分かるだろう？」

ルクーツアの言葉が全てを表しているだろう。それは極めて雑、しかしそれで十二分なのだ。

何故か、それは街といっよりも、何かを作り上げるそのやり方、その流れが異なるためであろう。

以前の世界でのソレは線であるといえよう。全てが繋がっているものだ。ゆえにそれぞれでの正確さが求められる。加藤達が行っているソレでも、サツクルに着々と集められ始めた材料もそうだ。そ

れらが綺麗な線となつてゐるのが以前のソレなのだ。

しかし、この世界は違う。

この世界でのソレらは点なのだ。1つ1つを作つていく。そのため、全体としてどうかという考えは然程重要視されてはいない。今、彼らが立っている場所に建物を作れるのか、立っている場所に防壁は造れるのか。この場でソレが作れるか否か、それが重要なのだ。それらを作つていく、点をいくつも、いくつも作つていく。

勿論、大枠としての計画はある。そのために思い描く線に沿つて点を打つ。そうしていくと、所々歪ながらも最終的には線になるというモノだった。

「んー、うん。いや、ちよつと思つただけなんだよ。気にしないでさつ！　なんか集めちゃつたみたいで悪いな？　お仕事をしましよつかねえつと」

加藤としては街を造るために、こうした方がいいのではないかと。そういう疑問を抱いたに過ぎない。

彼は街どころか、きちんとした建物すら建てた事は無いのだ。なんとなく、そうした方がいいような気がする。こう言えばソレっぽく聞こえるだろう。そういう部分も少なからずあったのかもしれない。少しばかり照れるようにしながら足早に皆の近くから離れていった。

「まったく、なんですの？　こらっ、少しお待ちなさいっ！　わたしを置いていくつもりですのっ！？　今日はわたくしと一緒にという事でしたでしょうっ、こらっ！」

そう、怒声には聞こえない声色で、怒声で言うような文句を口にしたがらエイラは加藤の後姿を追う。

その彼女も木々の中に消えていった時、店主が頭を掻きながら軽

く言った。

「いやはや、なんとも元気なもんだぜ。おれとしちゃ、こういうのは面倒で嫌いなんだがねえ。ったく、ここらは坊主どもが見た事もあるが、大丈夫そうだ。おれらも他のところを見てくるとするかねえ」

「うむ、ここらは大丈夫そうだ。そして……。ふつ、カトーはそういうのが嫌いではないらしいのでな。防壁修復工事を請けた時も、実に嬉々として働いていたものだ。こういう仕事がむしろ好きなのかもしれない？」

「……あつ、凄いですね。カトウさん、職人さんでもあるんですかっ!？」

「いえ、そうではありませんよ？　ただ、そうですね……。なんと言えばいいのか、趣味のようなモノ、とでも言うのでしょうか。上手く言葉に出来ませんね」

マナはこういった仕事に不慣れだ。店主やルクーツアは長年の経験で。エリアスールも生まれながらにしてこういった事に慣れ親しんでいる。どうしても仕事の間は専門的、用語ではなく体感ではあるが、そういった会話のソレばかりなのだ。

彼女では、ソレが何を意味しているのか未だ理解出来ない。マナがこの場で会話を、いる意義を感じられるのは加藤の話題を出して猛者達に笑顔を与えた瞬間だけと言えよう。

武の話題では自分では不十分、智でもそうだ。だが加藤の話題であれば自分だけが知っていることがある。それを話すと実に興味深げに耳を傾けてくれるのだ、特にルクーツアが。

小さな、小さな貢献で猛者達に大きな安らぎを与えながら、マナ

は必死にこの場で生きていた。

「ふう、食べた食べたつと。しっかし、干し肉ばかりつてのもつて……。なんか前も言った気がするな？」

「言った気がするな？ ……ではないでしょうっ！ それ以前に、食事の際にそれに文句を付けること自体が間違いですわっ。いいですか……。こういった生活の場合ですねっ」

「あー、良い。良いよ、ソレは覚えてるからさ、うん」

今日の調査も終わった。そして何時も通りに夕食を摂っている時、加藤が最近での口癖とも思えるソレを口にした事で、やはり何時も通りにエイラと口論を起こす。

加藤がエイラの文句を流すように言ったためのだが、覚えているのに何故言ったのかと、逆に火を点ける事になったため。何時もよりも盛大にそれは繰り広げられていた。

「うわー、エイラ様。なんていうか、元気ですねえ？ 調査が終わった後はわたしと一緒にだってヘトヘトになつてたのに」

「ふふっ、元気だったのではなくて、元気になつたのですよ？ そうですね、マナさん。冒険者として大事な事を教えてあげましょう。先ほどの疲れ果てていたエイラ様、それはモンスターと交戦し、傷ついた状態としましょうか。でも、今はあんなに笑顔です、疲れは取れていないのに……。何故でしょうね？」

エリアスールはそう言うと、手に持つ木製の椀に入ったお茶をゆつくりと飲む。そして視線をマナに向けると少女はうんうんと唸りながらソレを考えていた。

「分かりませんか？ きつと、マナさんも感じた事のあるモノのはずですよ？ 話に聞いた限りでは、ですがね」

そう言うエリアスールは、視線をマナからマナの腰元に丁寧に置かれていた大剣へと移す。つられるようにそれを見ながらも少女は小さく漏らす。

「感じた事のあるもの？ ……、うーん」

大剣を撫でながら、マナは首を傾げてまた悩む。しかしエリアスールはその様子を見てから、笑みを浮かべて口を開いた。

「正解です。それですよ、それが正解なんです。ふふっ、理解できずとも、貴女は知っています。そういうことです」

「えっと、良く分からないんですけど……。教えて下さいよー」

「いいえ、その必要ありません。マナさんも感じているソレ、それに近いものをエイラ様が今感じているという事ですよ」

エリアスールとマナの対面では、加藤がエイラに叱られたからか少しばかりげんなりとした顔で、エイラの言う事に律儀に頷きを返している、させられていた。

それを見ているエリアスール、その顔を見たマナ。少女が不意に見つめていた女性に声を掛けた。

「エリアスール様も、なんだか元気になっていきますね？」

「……そうかもしれませんね？」

ゆっくりと、調査が進んでいった。ゆっくりと、ゆっくりと。しかし確実に。

明確に、詳細に、数字化出来なくとも、分かるものがあるということなのかもしれない。それは今回の下調べというモノだけではなく、他のモノでもそうなのかもしれない。

第11話 『 切上!』

静かだった湖畔に、何かと何かがぶつかるとような甲高い音がしばらくすると、大きすぎる歯軋りのような音が鳴り響いた。最後には一際大きな音が1つ起こり、また静かなものへと戻るとというのが繰り返されていた。

「ほんとに木を切り倒すなんてなあ……。つてか、ルクータ？ なんでわざわざ斧なんかやってるんだ？ 普通にあの剣でズバツつとやらないのか？」

「ふう……。カトー。木を切り倒すなど剣でする事ではないだろう？ そもそも、斧の方が効率的だしな」

ルクーツアは斧を肩に担ぎながら、軽く言う。その隣では同じく斧を持った店主が笑いながら頷いていた。

「でもさあ、木よりも硬い皮膚？ みたいなものがある中型をスパツつて切れるのに、木には斧とか……」

「別に木を剣で切れないわけじゃねえぞ、小僧。だが、スパツつとやらは難しいな？ いや、そういうのも出来るにゃ出来るが、精々が……この木くらいのだろうよ」

店主は未だ笑いながら、斧で切り倒した木々よりも幾分細いものに手を当てて言う。

そして説明をしていく。それは硬い表皮、鱗と呼べるソレを持つ中型と木の違いについてからだった。

「確かに木は中型の表皮よか、やらかいわな？ だがな、中型の場合には鱗の下は木なんかと違ってやらけえ肉なのよ。だが木は中身も木だ……分かるか？」

「なんとなく？ でも、鱗を切れるなら木くらい簡単だと思うだろ？」

1度疑問に思えば、それを納得できるまで聞きたくならないという悪癖、いや良い部分と言うべきソレが出始めた加藤。子供のようになんで、なんでと聞いてくる。

「確かに、中型の鱗を簡単に切れるならその通りだわな？ だけど小僧は勘違いしてるみたいだな？ おれらは鱗を切っていない。そういう事だ」

「それだけでは分かるまい。いいか、カトー。鱗という言葉、なにを想像できる？ ……そうだな、その1つ1つは非常に堅固、しかし隙間がある。それは非常に小さいかもしれない、が。確かにある、そこを狙うのさ」

その後、鱗を切れないわけではないのだが、と良く分からない意地のよなものを示してから言葉を止めるルクーツア。

それは加藤には理解する事が出来る概念だった。それは以前の世界で楽しんでいたゲームにもある定番の考え方。そう、弱点だ。

その事は知っていた、しかし実際の戦闘においては無いものと考えていたのだ。実際、弱点と言ったところで、ゲームのように綺麗に終わるわけではない。だが、それを知っているのと知らないのでは、絶対的な違いが出てくるのも確かだろう。

加藤は今まで、戦いにおいて、いやこの世界で生きる上で最も重

要視してきたのは向き合うという根底のモノだ。モンスターと戦うために必要な勇氣、基礎体力。そしてそのために必要な剣、盾などの振り方がそうだ。

それを何処に当てればいいのか、それをどこで使えばいいのか。それは知らなかった。ただ目の前に敵が現れたのであれば、自然と体に染み付いた動きをし、対象にぶつけていたに過ぎないとも言える。

「ふうん。なるほど、てかさ？ その隙間云々と、木を切り倒す云々ってあまり関係なくない？ 鱗も切れるなら、木だって切れそうかな……」

何故か、最初から話を戻す加藤。その事に眉を寄せる大人達だったが、その加藤の表情を見て、また笑顔へと戻すのだ。

それは上の空と言うような顔。口から出たのはどうでも良い疑問と化しているのだろう。今の加藤はその新たな武器について頭を悩ませているソレだった。

「ふつ、そうだな。お前が納得しやすく言えば、武器でやると武器が傷む。戦闘でならまだしも、木を切り倒すのでそうなるのは御免だという事さ」

「そっか。うん、わかった」

やはり上の空。ヒトの話などほとんど聞いていないような感じである。失礼極まりない態度と言えよう。自身から聞いておきながら、最後にはどうでも良いなどと。

幸いだったのは、その疑問より優先している事柄、そしてソレに對して理解を示し、不快な態度を取っている相手を笑って見守れる大人が話し相手だったという事だろう。

「いやはや、旦那。こいつぁ、色々大変だな？」

「好きな事というか、興味のある事になると何時もこうなのだ。許してやってくれないか？」

そう返したルクーツアに、店主は再度、大変だなと返して木を切り倒すために斧を担いで歩いていく。

その大変が楽しくて堪らない事に心を明るくさせつつも、未だうんうんと悩んでいる加藤を軽く叩はたいてから、加藤と共に彼らも同じく元の仕事に戻るのだった。

「てかさ、なんで木なんて切り倒したんだ？ ……ふう。しっかし、干し肉だけってのも……」

「ですから、それはおよしなさいと……。木を切つて頂いたのは先日言ったような理由からではありませんわよ？ どのような木があるかというための見本のようなものですわね」

既に空は暗くなり始めた頃、加藤達はいつものように夕食を摂っていた。この焚き火を囲んでという形になると、話をする相手というものも何故か固定化しつつあった。エイラは加藤と、エリアスはマナと、ルクーツアは店主と言った具合である。

これは別になんとなく、というモノではない。加藤は一応とは言え隊の長であり、エイラはアージエの代わりという事である程度仕切る立場にあるからだ。エリアスは加藤、エイラの補佐という立ち居地なのだが、マナがいるために少女の傍から離れる事は少な

い。

あとは残り物、という訳ではなく。話そのものよりも、周囲を警戒している達人という具合である。

「見本？ ここには昔だけど街があつたんだろ？ 分かつてるんじゃないのか？」

「20年以上も昔ですわ。もしかしたら変わっているかもしれないでしょう？ というより、しておいて損は無いのですから文句を言わないでくださる？」

エイラはそう言う。しかし言葉が足りない部分があつたようで、エリアスールがそこに混ざり口を開く。

「ふふつ、カトーさん。木の種類と言いますが、厳密に言えば良く分からないのですよ。勿論、特徴のある樹皮であつたり、葉や実で見分けられるモノが大半です。しかし、良く見てみると似たようなモノでも違うモノがあつたりするのです。そこが良く分からない、そのための見本です」

昔はそこまで木々というモノを重要視していなかった。いや、してはいたかもしれない。だからこそある程度の区別は付いていたのだから。しかし、同じような木、でも違う木。そこは重視していなかった、似ているのだから同じで良いという具合だ。

だが、技術にしる、なんにしる、切欠さえあれば一気に進むモノがあるのだ。この木の違いもまた重要な事となりつつあるのだ。

何故か。それは小型モンスターの存在に関係すると言える。以前、大型が襲来した際に、やはり現れた小型モンスターの大量。それは今まで肉食のものと想われて来ていた、しかしヒトが育てた穀物なりをも食すと分かつたのだ。つまりヒトと同じく雑食という事が。

そのため、それ以降では『名も無き街』のような農業都市が生まれる事となるのだ。それもまた1つの壁となると分かったために。そう、モンスターが好む木の実なども、ゆっくりとだが分かりつつあると言える。そのために微妙な違いというモノも重要視されつつあるのだろう。

「そ、そういう事ですわっ！」

エリアスールの説明が一通り終わった辺りで、何故かエイラが胸を張って言う。

加藤は目を細めながら、しかし言った。

「ちゃんと言ってもらいたいもんだね？ あれだよ、自分で分かっててもヒトに言わないと、うん」

「このっ、カトウのくせにっ！ っつ、……しかし？ その通りですわね、わたくしはカトウと違ってきちんと反省できますし？ ええええ、その通りですわね」

エイラは言い返そうとしてから、気が付いたように周りを見渡す。その後、軽く目を瞑り言う。

だが加藤には効果が無かったようだ。反対に、そうしろよと返されてしまい、やはり言い返すという可愛い喧嘩の始まりの火蓋を切った。

「なんていうか、飽きないんですかね？ ここに来てから毎日同じような事ですてません？」

「飽きないものなんですよ、きつと。私もレイラとは砂糖がミルクかで良く喧嘩しています。意外と楽しいんですよ？」

それをやはりというか、見ながら話すのはマナとエリアスールである。エリアスールの言った例えに興味を示したマナに、彼女はミルクの偉大さを語り始めた。

「マナさんもミルク派ですか？ それとも、砂糖派ですか？」

「んー、わたしは……どっちも入れます」

マナの答えに彼女らしくもない愕然とした表情を見せるエリアスール。そんな子供達の語らいを見つめながら、周囲を警戒していた大人も語る。

「さて、そこそこ調べたつて感じかねえ？ ある程度調べた結果、まあちよいと昔には街があったんだから当たり前だが、大丈夫つてえのは分かつたしよ」

「うむ、木の種類の把握も、というより見本もこれだけあれば充分だろうしな。こつ言つのはアレかもしれんが、出来るならばモンスターが出てきて欲しいものだ」

モンスター。調査する上で邪魔になる存在。それどころか最悪の事態を起こしかねないモノだろう。

しかし、それでも出てきて欲しいと願う理由。それもやはり調査だから、これに尽きるだろう。中型はともかく、小型は群れを成し、そして縄張りを有する。

つまり、サツクル周辺ではカルガンが主という具合に、ほぼ1つの小型しか居ないと言えるのだ。この近辺で縄張りを持つ小型が何なのか、それを知りたいという事だ。

「まあ、普通に考えりゃカルガンかね？ 或いはネミラかもしれん。それ以外だと……」

店主はルクーツアの言いたい事をすぐに察し、己の考えを述べる。その返事に相槌を打ちながらルクーツアは口を開く。

「ふむ、しかし痕跡が見当たらないのが不自然だとは思わんか？

真新しい糞ふんなり、木のサンプルでもそうだが、木の実、樹皮を食した形跡も見当たらない。つまり、小型が居ない可能性もある」

「……つまり、中型って事か？ だとしたらロイオンかね？ ネミラズツアがいるのであればネミラが居ても不思議はないし、それなら痕跡はあるはずだしな」

小型が居ない。そうくると思い浮かべるのは中型の存在だ。天敵がいるために逃げる、そういう事である。

しかし、中型は一箇所に留まり続ける習性を持たない。獲物を追うように転々とするのだ。仮に現在は中型が付近に潜んでおり、小型が居ないとしても真新しい痕跡が少なすぎる、それがルクーツア達には不思議で仕方が無いようだった。

大人達の悩み、それが他の面々にも伝わったのか加藤が声を掛けてくる。

「いやなに、小型モンスターの姿が見えないな、という話だ。カトー達は見かけたか？ 痕跡であつても、死骸でも良い。出来れば真新しいのでだな」

どうしたのか、と声を掛けられたルクーツアは隠す事なく伝える。しかし、言い方から期待は見取れない。当然だろう、達人級である彼らでさえ見つけられなかったのだ。搜索した範囲が違うと言っ

てもそう離れてはいなかったのだから、彼らが見つけれなかったものを加藤達が見つけるはずがない。そう考えるのが自然だ。

そして、その予想通りの答えを加藤達は返したのだった。しかし、続けてマナが言う。

「小型のそういうのは見ませんでしたけど……。気になってた事があるんですよね」

そう言うと地面を見つめる。そしてポツポツと零すように、自信無さ気に語り出した。

それは20数年前にあった対大型モンスターで残った爪痕だ。そこが非常に気になる、そうマナは言った。言い終わると、それだけなんですよ。などと照れるように言葉を止めた。

だが、その言葉でエイラが眉を顰めた。何か思い当たる事があったようで、そんな様子の彼女を見たルクーツア、店主も同じような顔をし、そして大きく目を見開いた。

「なるほど、爪痕か。いや、そう言うことかっ！」

ルクーツアと店主のみが何かに気付いたようで、思い当たる事があったても、上手く結び付けられないでいたエイラが少し拗ねたように尋ねるのだった。

「どういう事ですか？ わたくし達にも分かるように言ってくださいっ！」

「ん、すまないな。いや、爪痕という事で思い出したのさ……。そもそもだ、この付近は修行の場として街が消えた後も度々使われていたんだが、今にして思えば不自然なくらい安全だったと言えるだろうっ！」

ルクーツアが語るのは歴史である。そう、20数年前の大型出現の事をだ。

20数年前、この付近の街よりも少しばかり街は前に進んでいた。とは言え、当時はただただ前に進む事のみを重視していたために、現在の街ほど頑強な防壁などは無かった。大型が現れた時、それらは溶けるように潰されていったのだ。

しかし、この付近には大きな湖があり、貴重な場所であるとしてこの街はそれなりの防壁があったのだ。そのため、ここが最も激しい交戦場所となった。

尤も、それでも大型を止めるには至らず最終的には跡形も無くとと言えるほどに潰され、現在のサツクルがある付近でようやく反撃に移れたのだが。

「問題はそこだ。反撃に移り、大型に致命傷を与え、とうとう倒せそうという場面で」

可笑しな話ではあるが、対大型戦でトドメを刺すという事をしたヒトは居ない。少なくとも分かっている歴史の中では。

基本的には、撃退。この表現が最も近いだろう。モンスターは敵わないと見るや大抵逃げ出すのだ、これは大型も例外ではない。

そして、逃げ出したのだから追撃を。などとはいかない、仮にした所で、仮に倒せた所で犠牲が増えるだけなのだ。求められるものは殺す事ではなく、街を、ヒトを守る事という事なのだから。

そして少なくとも現在まで、撃退できた大型はすぐさま戻ってくるという事は無い。撃退できればまた数十年は現れない、そういう存在であった。

「当時、オレも対大型戦には出ていた。あれは覚えている……、巨体を揺らしながら、よろよろと逃げていくヤツを」

ルクーツアは恐らくこの付近で大型が息絶えたのだろうと言う。あれほどの傷、生きているのが不思議な程だったのだから、と。モンスターは同種で無い限り、場合によっては同種であっても、敵同士と言える。それはロイオンとネミラの関係から明らかだろう。つまり、その頂点に立つのは大型なのだ。その亡骸がこの付近にある、それだけで恐ろしいのかもしれない。ゆえにこの付近には小型が通る事はあっても、縄張りを張る事は無いのだろうと締めくくった。

「へえ、それじゃ最高に良い場所って事なのかな？ 運が良いなっ！」

そう加藤は喜色を浮かべて言う。しかし、ルクーツアは苦い顔だ。

「そうでもない。確かに、普段はそう小型、そして中型も現れない地域だろう。だが、ここには湖がある。それもこんなに大きな、モンスターからすれば、いやヒトにとっても。危険を冒しても来る価値のある場と言えるだろう」

それは時期だ。以前、冬を目前に控えた頃には食料を蓄えるために小型などが街付近に大量に現れる事があった。それと同じだと言う。

つまり、繁殖期。そして同じく冬直前。そういつた時期には大挙して小型、それを追って中型が来るだろう、と。

「良く分からないな。ここは大型の亡骸があるから、小型とかは怖くて近寄れないんだろう？ なのに、湖があるから来るのか？」

「そうじゃない。カトー、お前は暗い所があまり好きではないだろ

う？ お化けだったか。それが出そうだとかで、な？ それと似たようなモノだ」

小型、中型モンスターも大型モンスターが怖いのは事実だろう。しかし、モンスターも馬鹿ではない。既に大型は死んでいる事くらいは分かっているだろう。

しかし、嫌なモノは嫌なのだろう。怖いモノは怖いのだろう。モンスターには分かる大型の臭いが残っているのか、それは分からない。ただ、近寄りにくいのだ。

そして、大型が地に伏してから20数年、その臭いすら薄くなっているだろう。

そう、そろそろ大型の亡骸というヒトに取っては都合の良い守り神のようなモノの効力も薄れてくる頃合と言えるのだ。

「モンスターもヒトと似たようなもんだってことだな？ まあ、中型に限らず小型でさえ、獲物相手に遊びを入れるくらいだ。そういう事もあるだろうよ」

「えつと？ つまり？ なんなんだよ、ごちゃごちゃしてきたわ」

そう頭を悩ませる加藤に対して、いち早く理解が出来たエイラが自慢気に言うのだ。

ここは今まで小型、中型モンスターが近寄りにくい場所であったが、近寄ろうと思えば近寄れる場所であり、その近寄りにくい要因であった大型の亡骸の効力も最早意味を成さなくなってきた。

つまり、と。エイラが結論を言おうと大きく息を吸い込んだ所で、加藤も理解したようだった。

「なる程ね、要は今年……繁殖期の夏頃だったのに全然姿が見えない。今が絶好のチャンスってわけか。それ以降はあの冬直前みたい

に押し寄せて来るかもしれないって訳だな？」

「……そうすわね」

「そうだな。とは言え、これはオレと店主の考えだ。そもそも、ここで大型が死んだとも限らんしな？　だが、少なくとも小型などがそう来ない場所というのは確かだろう。今は、な」

つまり、この調査を急がなくてはならないという事だ。

そして、この予想が当たっているにせよ、外れているにせよ、いやどちらにせよ。ある時期においては常以上に大挙してモンスターが押し寄せて来る場なのは確かだろう。これほどの湖があり、その恵みによって森が茂り、小動物の楽園とも言える場所なのだから。

「ま、急がないとって気にはなるね。後は何をすればいいんだっけか？　湖周辺の調査……出来てるのか分からないけども。それと木々のだろ？　一応水もだし……、後は」

「カトーさん、これは下調べです。ある程度で良いんですよ？　本当なら周辺を見に来るだけで充分なんです。今回はカトーさんの訓練のような一面もありましたから、長期になっていきますけどね」

急がなくてはならない、いや下調べを、ではなく街造りを。である。

つまり、お遊びのようなソレをしている余裕が無くなったという事である。加藤の育成はお遊びではない、しかし同じだろう。

直ぐにでも着工に掛からねばならないと言えるのだから。幸い、何よりも優先すべき防壁の材料たる石材はそれなりに準備されつつあるのだ。

彼らが予想していた街造り、それは早急に動き始めなければなら

なくなったのだと彼女は告げる。

「って事はなんだ？ 下調べってのはここに来るだけで良くて……
周辺を調べただけで十二分で、木の見本なんか集めたり、ここで生
活したりなんてのは必要なかったと？」

「正直に言えばその通りだな。言っただろう、下調べだと。こうい
った事は専門家でないと分からない事が多々あるのだ、オレ達では
出来ない事がほとんどだと言って良い」

しかし、専門家を連れてくる訳にもいかない。この世界では専門
家とは貴重なのだ。それらのヒトらは一種の天才なのだ。万が一が
あつてはいけない。

今回の下調べとは、街が建てられそうだと。という意見を述べるた
めだけにヒトが現地に訪れるだけが主目的なのだ。少なくとも、最
前線の場合では。

それを打ち明けられた加藤は肩を落としながら、しかし笑みを浮
かべて言った。

「あつ、そう。それじゃ、帰りますかね？ サツクルにさ」

「そうだな？ 必要な事は既に終わっているし、それ以上の調査も
行えた。大成功と言っていいだろう。だが、帰るのは明日にしよう。
もう暗くなる、お前達は充分に体を休めるが良い」

ルクーツアは小屋を見ながら言った。眠るという意味での言葉だ
つたのだが、女性陣には別の事柄でも受け取られていたようだ。

「ありがたいですね。服を綺麗に洗わせて貰ってもよろしいです
か？ それにこの所、身体を洗うのも濡れ布巾で拭くだけでした

し……、明日の朝にでも湖で水浴びさせて頂きたいですわ」

エイラは服を見ながら、そう言う。最低限の水洗い程度は出来ているものの、調査のおかげで汗をかいている。少しばかり臭うのかもしれない。ちなみに余談ではあるが、男性陣のソレは女性陣のと比較るまでもなく酷いものである。加藤とエイラの喧嘩が日に日に熱を帯びる原因の1つはコレだったのかもしれない。

「わあっ！ 湖の中に入っただけいいんですかっ！？ やった、やったっ！ どうしよう、わたし泳げるかなあ」

マナはそれよりも、湖に入れる事を喜んでいた。特に水泳という遊びに胸を躍らせている。大きな川が付近に無いサツクルでは水泳は行えないが、有る街では行えるために、知識としてはあったように、実に楽しげだ。

「あまり時間は無いでしょうが、私が教えて差し上げますよ？ ふっ、とても気持ちが良いんです、楽しみにして下さいね」

女性陣は楽しげに語り始める。ようやく街に戻れるという安堵もそれを大いに助けているのかもしれない。

ともかく、下調べは終わりを告げ、明日にはサツクルへと戻る流れとなったのだ。

そして、帰るとなった時、加藤に悲劇が訪れる事を、今は誰も知らない。その事を危惧していたのは、遠く離れた地にいるアージエのみであった。

「っ！？ ど、どうしたんですかっ！？ ヒロ君っ、その顔の傷はっ、痣あざはっ！？ まさか、モンスターにやられたんですかっ！？」

加藤達は下調べという名の調査を終え、来た時よりも急ぐように街へと駆けた。街に着いた彼らを迎えたのはデイリー、アージエ、レイラとニーナ。そしてラルであった。

そしてアージエが今、加藤を見て驚きの声を上げているのだ。

「まあ、モンスターと言えばモンスターだった。あの形相は正ましくソレだったよ」

「何を言っているんですの？ 当然の報いですわ」

アージエが言うように、顔に少しばかりの傷。とも言えない小さなモノではあるが、それに加えてやはり痣と言えなくも無いが微妙なソレを受けている加藤がうんざりとしたように肩を落として言った。

その加藤に対して、エイラがきつく睨み付けながらも素早く言い返す。エリアスールは若干頬を染めながらも苦笑いであり、マナに至っては目を泳がせていた。

そんな様子だからだろうか、焦ったように心配していたアージエも急に白けたように、徐々に目を細めていくのだった。

「なに、小僧の事じゃ、なにかしらやらかしたんじやろつて。のう？」

「別にやらかした訳じゃないんだけどなあ……。いやさ、現地を離れる時にさ」

なにやら難しい話が始まりそんな最中、無言で近寄って来たラルの頭を撫でながら加藤は語る、その時の事を。

「それでは、少し時間を頂きますわね？　まあ、無いとは思いますが、万が一の時はよろしくお願いしますわ」

加藤達、男性陣に向けてエイラはそう言い残すと、先に湖へ向けて歩いているエリアスール達に追いつこうと少しばかり駆け足で小屋から離れて行った。

「万が一ってモンスターが出た場合だろ？　そんなん、どうやって分かるのかね？」

「いや、坊主。そこは理解しとこうか？　普通の討伐系では何を使う？　……そう、笛だな？　それと同じさ、音。つまりは声、大声だよ。まあ、声の場合にはいくつか決まりがあつてな？　……おい、聞いているか？　ったく、まあいいか」

そう言いつつも、彼らは彼らで帰り支度を急ぐ。女性陣は各自が独自に持って来たモノは既に準備が完了している。とは言え、隊としての荷物の方が比べ物にならぬくらいに多い。

それらを男性陣のみで行うのだ。加藤は無意識にうらめしい目付きで彼女達が向かった、少しばかり離れた湖畔を見つめた。

「うわあ！ 来た時から思ってたけど、綺麗な湖ですよー」

「そうですね？ 飲み水にも出来るという事ですし、街が出来たらそうそう水浴びをここでするなんて出来ませんわよ？」

「かもしれませんね。ですから、今は思いっきり楽しみましょうか？」

女性陣は、身に着けていた衣服を脱ぎ去り、それを地面に丁寧に畳んでから置くと、水の冷たさを確かめるようにゆっくりと湖の中に入っていく。

そろそろ夏間近とは言え、湖の水は冷たいようだが、しかし徐々に慣れてくると嬉しそうに笑みを浮かべるのだった。

「気持ちいいですー。お風呂とは違う感じですね！ なんか、ふわふわします」

「ふふっ、そうですね。ああ、そうだ。泳ぎを教えてください、少しですがね？」

この湖、セノヅク湖は深い場所は中央部だけのようで、水辺からそれなりに進んでも湖としては浅いと言える水深であった。とはいえ、巨大な湖ゆえ中央部が占める割合の方が大きいと言えるだろう。その浅いといえる場所で、胸元まで水に浸かりながら、エリアスールはマナに泳ぎを教えようとしているらしい。

水に潜ったり出たりを繰り返し、ようやくと言った感じで泳いで

いると呼べるだろう行為を始めた。

「わっ、わぁ！ 凄いですよ、歩かないでスイーって！ これが泳ぎ、水泳ですかっ！」

「ん、はあ。ええ、水泳です。これは基本的に、水の中にいる食料となる魚類などを採るために生み出されたものだそうですよ？ ですが、湖が近くにある街では子供達の遊びでもあるそうです。私も昔、その子達と一緒に遊んだんですよ」

「遊びかあ、確かに気持ちいいし、そんなに泳げたら楽しいですよねえ。んー、なんか泳ごうとしても、沈んでいっちゃって怖いです……」

そんな、彼女達を見ながら、エイラはゆっくりと泳ぐ。彼女も最初は教えようとしたのだが、彼女はなんとなく出来たという形であり、上手く教えられないのだ。

その事に気を落としてつつも、気持ちの良い水浴びを心行くまで楽しもうと体の力を抜いて、水に浮かぼうとした時だった。

「いつ!?!」

突然、彼女らしくもない声を出したかと思えば、エイラの姿が一瞬消える。かと思えば水面を泡立てるかのようになり、手足が見え隠れした。

その事に気がついたエアリアル、マナは思わず大声で叫んでしまふ。いや、叫んで当然の出来事と言えるだろう。

「エイラ様っ!?!」

それは、水音と、周辺の木々を揺らす風音くらいだった湖畔に大きく響いた。

しかし、そんな事には気を回す余裕もなく、エリアスールは急いで水の中で暴れているように見えるエイラの下へと泳いでいく。

幸い、沈むと言っても1mと少し程度、エリアスールが辿り着いた後、すぐさま呼吸器官は水面上への帰還を果たし、嬉しそうに機能を回復させた。

「げほっ、げほっ！ えっえほ、すいません……。足がなんか、痛くなってしまっつて」

「いえ、大事が無くて何よりでした。さあ、ひとまず戻りましょう？ 少し休んだ方が良いと思いますよ」

そう言うと、エリアスールの肩を借りるようにして、彼女達は水中から陸地へと戻る。それに釣られるように、マナも戻ろうとするが、水中での動きには未だ慣れず、同じく泳ぐ事もままならないために、非常にゆっくりとした動きであった。

そんな未だ水中に全身を隠しながら急ぐ少女を後ろに、エリアスールとエイラがようやく水辺まで辿り着き、腰を下そうとした時だった。

「おいつ、大丈夫かっ!？」

「え、え？」

「……あれ？」

「っていう感じで、ボコボコにされましたか？」

加藤は所々省きながらも、簡潔に説明をした。しかし、その拙い説明では周りには良く伝わらなかったようだ。が、要はデイリーが言った事だったと分かったので皆、やはりと言う顔で頷いていた。ラルまでも、である。

「だから言っただろ、坊主。声の場合は決まりがあるって、叫び声だけじゃ不十分なんだよ。三回以上、間を置かず叫びと言える大声の場合が合図なんだってよ？」

「聞いてないってのっ！　ったく、てか！？　そうなら止めてくれてあの時も言っただろ！」

「はっはっは、なに。例え1度だけでも、助けが必要な場面も多々あってな？　これはあくまで基本でな。あの時も1度だけだったが、本当に大丈夫なのかは分からなかった。まあ、お前なら良いだろうと」

ルクーツアがそう言い、加藤がそれに反論を再度行おうとしていた。が、デイリーがいい加減にしろ、と言っただのだ。それを合図としたように、再開の挨拶のようなモノが終わり、ようやくと言った感じで領主の屋敷へとその場に居た皆で足を運ぶこととなった。

しかしラルだけは先に家、『砂漠の水亭』へと途中近寄った時に戻っていき、帰りを待っていると笑って別れたのだった。

領主の屋敷へと到着すると、元々ここに居住していたエイラとエリアスールは自分の部屋へとまずは戻った。同じく、ここには住んでいないものの、女性であるマナも今回の調査を機に急速に仲を縮めたエリアスールの部屋へと行った。

女性には色々あるのだろう、冒険者としてならば体力的には余裕もあるが、それとこれとはまた違うのだ。

「やあやあ、元気そうで何より。あそこはどうだった？ ……ははっ、そうかい。良い経験とその他を出来たようで何よりだ。いや、しかしレイラを行かせなくて良かった」

そんな女性陣がいなくなった広間に、明朗な声を響かせるのは口レン。この街の領主である。

加藤が調査の事を、それに加えてデイリーが小声で何かを言うと口レンはうんうんと頷きながら、そう言った。

「どういう意味だよ」

加藤はアージエに驚かれた時と同じように、しかしそれ以上に肩を落としながら、分かっている答えを聞くためにそう言う。

「そついう意味だよ」

にこにここと満面の笑みを浮かべながら、やはり想像通りの答えを返す口レン。そんな懐かしいやり取りを見ていたルクーツアが、軽く咳払いをした事で、口レンが小さく頷いた。

「さて、冗談はさておき。実際のところはとうだったかな？」

「うむ、昔の頃とそう変化はなかったと言えるだろう。ああ、頼まれていた木々の見本は後で見てくれ。……ただ、ほぼ周辺に変化は無かったが、ひとつ気になる事があってな」

簡単な言葉でそう言い切るルクーツア。しかし少し沈黙した後、真剣味を持たせた声色でゆっくりと語り出す。それは大型の死骸のことである。

以前から、あそこ、セノゾク湖が貴重な水場という事でモンスターが大挙するという事は分かっていた。その事もあつての昔であっても存在した堅固な防壁を持つ街だったのだから。

ただ、この時期。そろそろ繁殖期に入っても何らおかしくは無い時期だというのに、小型でさえそう遭遇する事は無かった。更に湖に到着してからというものはただの1度たりとも。

つまり、と一呼吸置いて、以前湖畔で考えた推測をルクーツアは朗々と語る。それにロレン、デイリーは昔の事を、対大型戦の時を思い起こしながら耳を傾け、レイラ、アージエなどは予想していなかった事態に目を丸くしていた。

「と、いう事を予想している。どう、思う？」

「うん、確かにあの戦。いつ倒れてもおかしくは無いと私も感じていたよ。だが、逃げて行つた。とは言え、やはり死んだのだろう。それがセノゾク湖周辺という考えは、距離的に考えても妥当だと思
う」

「そうじゃの、あやつは運が悪かった。丁度新型の対大型兵器が出来上がった頃じゃったからのう。どれほどの効果があるのか分かんと言つ事で、撃てる限り撃つたからの……。達人級も多かった、兵器が無くとも勝てるのではと思える程の猛者がおつたよ。ロレン

の父君、先代などは筆頭じゃったのう」

懐かしむように、思わず顔が綻ぶ思い出と、苦い思い出とを思い出したのだろう。嬉しそうな、悲しそうな顔が出たり引つ込んだり、それらが混ざり合って普通の顔というなんとも言えない変化をしながら語る大人達。

反面、大型の死骸があるという可能性、いや事実と思える事柄に触れたレイラとアージエ、そして既に知っていた他の面々も複雑な顔であった。

大型という恐怖を未だ知らない故の想像。それだけで自然と体の芯から冷えてくる思いなのだろう。そもそもモンスターというのが恐怖の権化なのであって、その中でもやはり大型は特別なものとされているのがこの世界なのだ。死骸であっても怖いものなのかもしれない、聞いただけでじわじわと恐怖が込み上げてくるのだろう。ただ1人、加藤を除いて。

「まあ、大型の死骸があるってんで時間があるってのが分かったんだ。だからさ、ロレン。急ぐべきだと思う……ってルクータ達が言ってたよ？」

大型を思い浮かべようと、加藤は恐怖する事は無い。別に恐ろしくないと思っている訳では無いだろう。以前、小型相手の恐怖に負けたくらいなのだから。

実際に大型を前にした時には何も出来なくなるほどに恐怖するのかもしれない。しかし今は居ない。ならば関係あるまい、想像に震えるなど無意味なのだから。幽霊は怖い、恐怖の権化の想像は怖くないと、良くも悪くも加藤はこの世界の住民とは異なっており、以前の世界の若者だったのだ。

「君は、なんとこのだろうか。余韻、いや違うか。まあいい、

このような思いを抱いている暇は今は無いというのは確かだからね？ ……うん、私もそう考えるよ、幸いとして石材という輸送で一番の問題はほぼ解決できている」

この世界で街を造るといのは、そもそもが犠牲を織り込んでいくものだった。しかし、少しの期間、その犠牲を最小限に出来るかもしれないというのだ、急ぐべきだろう。

街を造る上で最も重要な材料、それは石材、木材、最後に人材だ。石材はサツクルに既に多くが届けられている、木材は以前に加藤が出した提案通り、石材と同じように最低限、必要な分は加工済みであり、後は運ばれるのを待つのみだ。

この最低限というのは、街を造る職人、それらを守る冒険者のための仮住居のためのものだ。今の時期はまだしも、厳しい冬を耐えられる程度は必要になってくるのだから。加藤の言うような方法は結果的に無理だった、街全てを造るために必要な材料を加工させ、運ばせる。これは余計に金が掛かってしまうという欠点と、時間が掛かるという問題があったためだ。だが、必要最低限という限定であれば可能と判断され、このような流れとなっていた。

ちなみに国軍は独自にそれらを行ってくれる。そのため、国軍が本格的に街造りに協力できるようになるまで少しばかりの時間を有する事となるが、これは今はどうでもいいことだ。

そういった諸々の事を簡単に言った後、ロレンは一呼吸置いておから軽く言った。

「まあ、そういう事だから君達はひとまず休みなさい。ちょっとしたお使い程度のもりだったが、いやはや良い情報を貰えて嬉しい限りだね。さて、アージエ、君は休む必要などないだろう？ 話を詰めようじゃないか」

ロレンは早口にそう言い切ると、アージエ、デイリーを連れて広

間から姿を消して行った。それを見つつ、加藤はため息を吐いた。

「ふう、なんだかね？ 街を造るってのはどうも分からないや。下見にしても、このやり取りにしても、なんだろうなあ」

加藤はこの場にいるのがルクーツアだけというのを良い事に、その本音を漏らす。ルクーツアもまた、部屋の中はもちろん、周辺にもヒトが居ない事を確認してから、苦笑いながら答えるのだった。

「そう言うな。ここではこういうものなんだ。本当なら、国軍、冒険者が大勢で、大軍である湖を占拠し、そして街を徐々に作り上げていくものだった。それが少しでも計画的になったのだから、充分というものだろう？」

「占拠ねえ。いや、俺の考えはそういうのが必要の無いものだからさ。でも昔はそういうものだったのかも、うん。ってか冬もあそこに残るのか？」

加藤はそこを気にしていたようだ。やはり自分で提案したものが関連している事柄だからだろう。

それにルクーツアは少し頭を悩ませるようにしてから、小さく言う。

「いや、オレも詳しい訳ではないんだがな。別に冬の間も街造りをする訳ではない、というより出来ないだろうな。そのため、多くのヒトは近くの街へと移動するんだ、が。現場を管理というか、うむ……そこを見ておくとでも言うのか？ そういった事をする者が必要なんだ」

そのために最低限の家屋は必要なのだ。そう言い切ると少しばかり

り満足気にするルクーツア。加藤はなるほど、と理解しているのかわからないのか分からないような声を出して、うんうんと頷いていた。

「つまり、もうそろそろ街を造れるわけだなっ！」

「そうだと言っていたら……。恐らくは手続きをして、いや。憶測とは言え状況が状況だ、明日にでも諸々の事が動き始めるやもしれんな？」

「そうか、緊張するなあ」

ようやく、ようやくと加藤達がい続け、本当に動き出した。それは本当に急激に、心の準備どころか、そもそもの実力すらままならない状態で、それは動き出すのだ。

しかし、急いで動き出す理由が理由。それは加藤達の経験を積むという時間を奪ったものだが、反面その計画自体の難易度を極端に下げるとも言えるのだ。

最大の問題であったモンスターの襲撃は恐らく少ない、それも想像以上に。本来、職人などと比べて遥かに力仕事に向いている冒険者も作業に加われる可能性すら出て来た。より一層、作業を効率的に、素早く行える事だろう。それはつまり、多少のミスがあろうとも十二分に補えると言う事にも繋がり、心の余裕になるだろう。

物事の全てには裏があり、それは全て悪い事とは限らないと言う事だ。

若者に訪れた試練と、若者のための僥倖、それは1度にやって来た。これから加藤達は苦勞する事となるのだ。冒険者として、ではなく大人として。

大地が大きく揺れる、それは幾度も、幾度も続けて。その騒音の原因、木々が倒れる音、そして衝撃だ。

1つ1つではそう大したモノではない。しかしそれが百、千ともなれば計り知れないモノとなるのだ。

「ふう、なんか木を切り倒すコツつてのが分かってきた、気がする」「というか、坊主はやらなくていいんじゃないか？　こんなお前さんがする仕事じゃねえだろうよ」

加藤と店主は、大勢の冒険者と共に木々を切り倒す作業に従事していた。

そう、加藤はサックルへと帰ったと思えば、すぐさまここ、セノゾク湖へとロレンを筆頭に加藤の見知った友と共に舞い戻って来ていたのだ。そんな事があつたのも1週間ほど前になる。

最初に、専門家に何処に造るのが良いのか。それを調べて貰ったのだが、それは加藤には良く分からないものであつた。占いのような事をしているヒトもいれば、地面に耳を当てるのを繰り返すヒトもいた。

結局、最も近い街、つまりはサックルへと繋がる街道のため、それが造りやすい場所を探したヒトの意見が通ることとなる。奇しくもソレはあの廃屋があつた辺りであつた。

そこに広がる森、これが街を造るとなれば邪魔となるため、また街を造る上で必要な木材調達のためにこのような作業を彼らを始めた冒険者達が行っているのが今であつた。

「いやさ、俺って街が出来てから、街を守るって役職らしいんだよね？ 正直今のところ、なんもする事が無いんだよ」

「あると思うんだがねえ？ まあいい。そう言う事ならせつせと働くとするかい」

作業しつつもそうした短い会話を終えると、加藤と店主は再度、斧を振りかざして木々を切り倒していく。この木を切り倒す作業は意外と難しいものだ、見ただけでは簡単そうには見えても。やみくもに振りかざしただけでは切り倒すどころか、木に斧が傷を付けるのさえ難しいだろう。

どうやって振り下ろすのか、どこに振り下ろすのか、どの程度の力の入れ具合で充分なのか。それを加藤は何度か店主のやり方を見て、それに倣うことで覚えたらしい。素早く木の幹に斧を食い込ませ、しかしすぐに引き抜ける程度、実に見事な技を以って木々を切り倒していく。

店主は、ほうと感嘆の吐息を漏らして、その様子をゆっくりと眺めてから言った。

「なるほど、確かに坊主はこっちの方がいいかもしれねえな？ よし、2本同時にやってみようか、それがいい」

「ふう……、なんだよ？ 俺は真面目に仕事してるつもりなんだけど、ってか2本同時にする意味無くない？ 雑になっちゃうしさあ」

「馬鹿、雑にしちゃ意味がねえだろうが。見たところ、ある程度は出来ていたからな。それを普通以上に出来るようになるにや数をこなす事。それと普通よりも多少の無理をする事が手っ取り早いもんなんだよ」

「なんか良く分からないけど、それって店主さんが楽しただけとかじゃないよな？」

そう愚痴を零しながらも、加藤は言われた通りに木々を切り倒すために動き出す。最初はゆっくりと、斧を振りかざし、担ぎなおしては歩いて移動し、再度振りかざすを繰り返している。それを横目に見つつ暫くすると、店主は笑って言った。

「それもあるかもな？ でもな、お前のためでもあるんだぞ？ あれだ、坊主。うん、お前はここの所、移動以外じゃまともに身体を動かしてないだろう。なんだか大層な身分になるらしいが、どんな事にせよ、身体が丈夫なのは良い事だと、思うぞ？」

「ふう……。いやさ、俺がこうやって効率良くするために努力するのは良いんだけど、木は一杯あるんだ。店主さんもやってくれよ、流石にさあ」

「一応、見ておいてくれって言われてたんでなあ。ああ、そうか。分かった、坊主。おれも一丁頑張らせて貰うとするが、どうせだ。賭けをしようじゃないか、これから1時間ほどでどちらが多くの木を倒せるか、っていうものをよ？」

「はあ？ って、おい！ 勝負をするとも言っていないのにもう始めるのか！？ くそっ、それは数に入れるなよなっ！」

店主の物言いに加藤は軽く汗を拭い、そう言い返した。店主は小さく呟いた後、いきなりそう言う。すると次々と、加藤と同じように2本の木を切っていく。それは加藤と同じようで少し違う動きであった。

木を切り倒す、ではなく、障害となるモノを切り倒すというのが

相応しいだろう。

徐々に開いていく数、いきなりとは言え勝負となれば負けたくは無いらしい加藤。どうしても店主の動きを追ってしまう。それを見ているせいで、余計に差が開いていくとも知らず。

「はあ……、負けた」

「はんつ、おれに勝てるはずが無いだろう。っというのは良いとして、それなりに仕事は出来たようだな」

1時間後、加藤達は肩で息をしながら会話をしていた。

2本づつ切り倒すという荒業、これは非常に危険であり、作業とするならば非常識と言えるだろう。

そのため、加藤達の周りには他の冒険者達の姿は無い。唐突に勢い良く木々を切り倒し始めた加藤達を見た冒険者達は、いそいそとその場を離れていた。彼らの最大の武器は強靱な肉体では無く、危険を察知する能力という事だろう。

何故危険なのか。木を切り倒す。これが全てだ。そう、木を切れれば倒れる。倒れる木、これは非常に恐ろしい脅威だ。当たれば痛いでは済まされないだろう。1本2本ならともかく、次々と倒れるのだ。それはモンスターの猛攻に勝るとも劣らない。

だからだろうか、自然と加藤はやる事が無いので仕方なくといった体で行っていた木を切り倒す作業。これが今では冒険者の顔となっていた。それを見た店主は実に満足気に笑う。

「くそつ、あーもう。んだよ、賭けに勝ったのがそんなに嬉しいのか？ まあ、いいや。店主さんの言うように結構切り倒したし？」

ってどうか、これの根とか取り除くのは考えたくないな」

「坊主、これも仕事だ。というより、切り倒したのは自分で取り除くって言われていただろう？ おら、まだ陽は高い。次はそれで勝負でもするか？」

「やめておく……。ってどうか、陽は高いけど少し休憩しない？ 昼飯だって食べてないって、そういえば」

加藤がそう言えば、店主もそういえばと返す。その後、簡単な昼食を摂り、また作業へと戻る。他の冒険者達と同様に、単純で、地味な、しかし辛い作業へと。

それを幾日か続けると、辺りの景色は一変する事となるのだった。

ここに舞い戻り、早いもので1ヶ月が過ぎようとしていた。

そこには何も無い、いや無くなった大地が広がっている。木々は切り倒され、その名残すらも取り除かれている。それらの作業を行ったせいで、地面は非常に凹凸とした状態であったが、それも大勢のヒトが大地をならした事で、一応の体裁を整えられていた。

それを見つめていたロレンが加藤に軽く言う。

「いやあ、冒険者を工事に動員すると、こつも早いとはねえ。カトー君らが言っていたように、モンスターも現れないようだし。うん、悪くない」

「なんかこつやってみると呆然としちゃうなあ。綺麗な湖畔で、そ

ここには森があつたのに、今はないんだもんな」

加藤にとつて森、つまり緑は貴重なモノであり、守るべきモノと教えられて来た。とはいえ加藤自身、そこまで自然についての持論なりを持つてゐる訳ではない。しかし生まれた環境が環境であり、その世界で求められていたのは緑であつた。それをこうして切り倒し、薙ぎ倒し、何も無くなつてゐる現状。なにかしら考えさせられる事でもあるのかもしれない。

「はははっ、確かに悲しいものだね。だけど、全部を切り倒した訳じゃない。見たまえ、対岸には鬱蒼と茂つてゐるだろう？　何も好き好んで木々を切り倒した訳ではないんだ」

この世界に自然、環境の保護という概念は基本的には無い。しかしそれらを美しいと感じられる心はあるのだ。それを自らの手で汚したという事実は認識できるのだろう。なんとも難しそうな顔をしつつも、そう言つて笑つろレン。

「ああ、別にそういう意味で言つたんじゃないんだ。ただ、なんて言つのかな。何かをするには、こういうのが必要なんだなあって」

「……そうだね。これは全部、生きていくならば全てに言える事だと、私は思つてゐるよ。例えば、私は今カトー君と話してゐる。これは良い事だ、だけどそのせいで可愛い娘との会話の機会を失つてゐる。なんとも罪深いとは思わないかね？」

ロレンは実に真剣な眼差しを向けながら、加藤に同意を求める。が、加藤の顔は先ほどまでと打つて変わり、実に白けたモノへと成り果ててゐた。

暫し無言で表情は違えどお互いを見詰め合つてゐた男2人。そん

な彼らに声を掛ける者が現れる。

「……なにをしているんだ？ まあ、いい。カトー、防壁について職人達との話し合いを行うそうだ。アージエ達がお前を探していたぞ」

それはルクーツアであった。彼はアージエから頼まれていた伝言を伝えると、さっさと来いと言わんばかりに首を振る。

土台は一応の完成を見せた、ならば後は上に造っていくという事なのだろう。

この場に造られる新たな街。これは今までと造る順番、そして重視する点が異なるのだ。そしてそれらの多くの提案者は加藤であった、そのために呼ばれているのだろう。

「え？ もう防壁を造り始めるのか？ なんか色々準備があるとかレイラ達が言ってたけど……」

「その準備にお前が必要なんだ。どうして分からない？ まったく相変わらず、変なところで抜けている奴だ」

「いや、あれー？ 俺の考えは言っているし、紙にも書いてあるのに……。んー？」

そう言いつつも、加藤はルクーツアと共にロレンに声を掛けるとその場を離れ、簡易的に作られている家屋、その中でも大きな建物へと足を運ぶのだった。

その後姿を見ながらロレンはまたゆっくりと何も無くなった大地を見つめる。何かを思い出すかのように、そして。

領主ロレンが見つめる場所、そこは何も無く、何でも造れる場所。

ここまででは順調だ、基本的に昔ながらの手法で行えて来たのだから。しかしここからは少し違う。ほんの少し、だが確実に今までと違う。造って行く順番が異なる。大切なモノの順位が変わるなど。言葉にしてしまえば、たったそれだけ、だがそれが大きい。それが重要であって、それが肝なのだ。それはきつと何かに似ている。

他の街と同様に、街と呼べるモノを造ろうとしているのは決して変わらない事実。その違い、それをどのように造り上げていくのか。それこそが、加藤達にとって一番大切ななにか、きつとそうだろう。ようやく、ほんの少しだけ違うなにか、それを造る段階にまで漕ぎ着けたのだ。ようやく、ほんの少しだけ違うなにか、それが姿を現す事となるのだ。それはつまり様々な意味で加藤の道が、この異世界に存在する大きな道に交わる事を意味しているのかもしれない。

ほんの小さな違い、防壁自体は街というモノが考えられた時期から程度は違えど存在するモノだ。そして年月を経ていくと防壁の重要性もまた広く知られていく事になったため、これを重視するといふ加藤らの意見は職人達にも理解出来ないモノでは無かった。

しかし、加藤とは絶対的に異なる点が存在するのも確かだった。それは防壁というモノ、それがどういった目的で存在しているのかという考えである。基本的に、防壁というのは小型モンスターを筆頭に、野犬であったり比較的小さな脅威を排除するためのものであった。

中型モンスター、ましてや大型モンスターが防壁間近まで迫ったとあれば、ヒトは逃げる準備をする。最前線に近づけば近づくほど、中型程度では住民は動揺しなくなるとは言え、それでも不安は感じる。その程度の信頼性、それが防壁というのがこの世界の常識であったのだ。

だが加藤は防壁を最低でも中型ならば幾ら来ようが恐れるに足らない、そんな安心を与えられる存在にしたいと言い張る。ここで違いが生まれる。

「お前さんはそう言うがな、我らとて今まで何の努力もして来なかつた訳では無いっ！ そんなモノが出来るのであれば、当の昔にそうしていたわっ！」

職人側の代表である、老人が唾を飛ばす勢いでそう言った。この世界の技術力で防壁のような巨大な建築物を造るとなれば石を用いる他無いのだ。どうしても限界があると言つ事だろう。

老人を始め、職人側は理想を語る加藤に夢を見すぎだと厳しい意

見、いや現実を教えようとしていた。

「確かに今はそうかもしれない。だけどやらないままだとずっとこのままですよっ！　どんな方法でも良い、それを試すべきだよっ！」

加藤も負けじと言い返す。しかし、そこに職人達のような歴史、経験からの根柢は一切無い。加藤がこの世界でも出来ると考えた防壁というのは幾重にも張り巡らせた防壁陣だ。それは防壁としては今までのソレと何ら変わらない、ただ増やしたただけだ。

「分からないのか、それでは何の意味も無いだろう！　もっと他に無いのかっ！？」

「そう言われたって、俺にはこれくらいしか浮かばないんですってばっ！？」

「そのために我らがここにいるんだろうがっ！　ほれっ、さっさと何か言ってみい！　なんだって良い、防壁を増やす。そんな簡単な、だが我らは考えていなかった方法を思い付くお前さんだ、何かあるだろう！？」

職人はそう言う。そう、そんな防壁は造りたくない。そう言っている訳では無いのだ。どうせ造るならばもっと良いものを、加藤が考えているモノよりも、もっと、もっと。それを考えるために互いに罵倒するかの如く意見を出し合っていただけである。

このようなやり取りもまた、今までの街造りには無かったものでほんの小さな違いの1つであると言えるだろう。本来、職人に求められるのはその知識や発想では無く、求めたモノを造って行く事だけなのだ。このような機会、彼らにしても初めての経験であろう。どうしたらより良いモノを作れるのかを上層部と言える加藤達と語

り合うなど。

ならば、と語りに語り合っていた。最初には存在していたお互いの立場ゆえの遠慮は既に影も形も無くなってしまっただけに。

「あー、あ？ そうだ、草。草を使おう！」

「草？ なんじゃそれは。そんなもので防壁が強くなるのか？」

「いや、草というか、なんというか。まあ昔……ってほどじゃないんですけどね。小さな建物みたいなのを造った事があったんですよ、それで……」

加藤はテントを作った時を思い出した事で、何かを思い付いたようだった。それは骨組み、そして補強という概念であった。それ自体はこの世界でも在る。普通の家屋などを造る際、大黒柱と呼べるモノは存在するし、それ以外でもあると言えよう。

だが、防壁ほど巨大なモノとなると、普通に石を積み上げていくだけであった。そこにもソレを入れようでは無いか、加藤はそう言うて職人達を見た。

「んむう。悪くは無い、悪くは無いが……石を積み上げていく防壁にそれは難しい。というよりどうすれば良いのかが分からん」

しかし反応は弱かった。そこで加藤は前の世界の知識を元にした、加藤の常識を告げる。

「見てみて思っていた事で、ここで話をしていて分かった事なんだけど。ただ石を積み上げているだけですよね、砂利とかを使っているみたいだったけど」

この世界には当たり前前であるが、建築基準法など存在しない。耐震強度であったり、その他諸々の安全性などは考慮されていないと言えるだろう。正確には、その道のプロである職人が安全であると言える安全という考えであって、全くそれを考えていないという訳では無いのだが。

そういつた極端な言い方をすれば、雑な印象を受ける面が、この世界の建築物には多く見受けられたのだろう。加藤はそう言って、職人の顔色を伺っていた。

「ほつほう、ただ、積み上げている、だけ？ ふむふむ……」

老人は顔を引き攣らせながら、暫し無言になる。その様子を見た老人の弟子らしき若い職人が少しばかり嬉しそうにしながら加藤に食って掛かった。

「はあ、これだから素人さんはいけねえや。いいか、ただ積み上げているだって？ んなわきゃーないだろう、あれはなあ、っ!？」

しかし、ふふんと胸を張りながら講釈を述べようとした若者へと、老人が軽く拳を振り下ろした事で、その口は閉じられた。どうしてそう言いたげな目で若者は老人を見る。老人はその顔色が気に食わない、そう言ってから叱る口調で、しかし感謝の意も籠めて言葉を紡ぐ。

「クソガキが、誰がお前の意見を聞いている？ だが、気持ちは分らないでもない。少し黙ってるい、それで許す！ ……すまん？ だが、もう少し言葉の使い方を学んだ方が良い」

老人は、勘違いするな、と続けて言うとか藤に大人として説教を1つ与え出す。この場合は互いに意見を出し合うというモノで、率直

な意見を述べるのは正しい事。しかし相手を少し考えてから言葉に出すようにしなければ、いづれ痛い目に合う事もあるだろう、そう言つと再び軽い佻びを入れる老人。

「まあ、そんなの今はどうでもよかつたかの？ すまんな、それで……。お前さんは何が言いたい？」

「あ、はい。見た所、あれは石の重さで固定してる感じがしました。なんていうか……、失礼な話ですけど普通の家屋とかに比べて雑な印象を受けたんです」

加藤は少し考えるようにしてから、そう言う。老人はその少しの違いにうんうんと頷くとそれでどうした、と先を促す。

加藤はほうと安堵を吐息を漏らしてから、自分の感想を、淡々と、しかし丁寧に述べていく。

そもそも加藤は元の世界で、日本と呼ばれている国に暮らしていた。そこは地震と呼ばれる現象が多発する地域であった。いや、元の世界では多少なりとも知られている現象と言えるだろう。

しかし、この世界でソレと呼べる揺れを感じたのはある程度の距離で中型が猛威を振るつた時、或いは目の前で小型の攻撃を受けた時以外にはほぼ皆無、その現象を1年以上の期間でただの1度足りとも経験していなかった。それは日本人と呼ばれたヒトである加藤に取つて違和感となつていたのかも知れない。

別に加藤は耐震というモノについて詳しい訳では無い。それに備えるための設備というモノについても同様だ。しかし、こうとなれば別である、考える、何が足りないのかと考えれば自然と沸くものだ。それは簡単な事、崩れないようにすれば良い。たつたそれだけ、後はどうするのか、そこだけだ。そこそが難しいのだが。

そんな事を考えても、今の世界に地震という何かを揺るがし、全てを震わせる脅威、恐怖は存在しない。いや、存在はするのだろうか

が、そうそう発生はしない地域なのだろう。

だが、地震と同じ、いやヒトに取っては意思のようなモノを持っている以上、それを上回る脅威がこの世界には存在するのだ。それはモンスター、ならばその震えに対するなにかを考えるべきで、日本人の加藤にとってソレと似た対策を考えさせるものが地震なのだろう。

この世界でも理解されるよう、加藤は冒険者として感じたその揺れを地震に置き換えて説明をする。それは脅威であり、それは恐怖だったのだと。しかし、その時自分はどれほど震えようと、大地はそこに揺るがずに存在していた。ならば、と。

「って感じなんですよ。どうにか強くできないかなあつと。一応、思い付く範囲では、つなぎ……。粘土とか何かで石同士の隙間を埋める感じとかはどうかなあつて」

「ふむ、なるほど。つまりそうすることで小さな、少なくとも中型どもからすれば小さな石の積み重ねである防壁を、一個の巨大な岩にしようという訳か。うーむ、一考の余地はあるのう」

老人がふむふむと唸るように考え込み出すと、若者を始めとした職人達もそれぞれに考え込み、それぞれの意見を出していく。

費用はどうなるのか、粘土自体は良いとしてそれで強度が増すのかどうか、そうだとして着工までに仕様に耐えるモノを作り上げられるのか。加藤にはすぐさま思い付かない知識、常識を次々と上げてくる。

「ヒロ君、凄いですね。職人さん達が真剣になって聞いてくれますよ。僕だけの時はこうはいきませんでした」

加藤と共にこの場にいるヒトは職人達だけではない。こちら側か

らアージエも出ているのだ。若者として。

責任者としてデイリーも席についてはいるものの、加藤とアージエのみに任せ、自身は沈黙を守っていた。

同じく、加藤と職人達のやり取りを静観していたアージエだったが、職人側で話し合いが生じたため、加藤に話しかけているというものだ。

話しかけられた、いや褒められた加藤は若干照れた風にそんなもんじゃない、そう言っただけ息を吐く。

「そうですか？ 職人さんも真剣に聞いていましたし、今だっとうして」

「俺がしたいのはあそこに混ざる事なんだよなあ。だけど、無理だよなあ俺じゃ。あーしたい、こーしたいって言うのが精一杯なんだよ。こうするにはあーしないと、って会話をしてみたいもんだよ」

加藤はアージエの話を途中で遮るように言う。駄々を捏ねる子供のように、欲しいモノを見つめるように職人達の会話を見つめながら。改めて、自分に足りない部分を見つめなおすように。

「……ははっ、そうかもしれないですね。ヒロ君は発想とかは奇抜で面白いですが、後に続かない。うん、確かに勉強不足かもしれないね。でも、今はそれでいい、それでいいんです」

アージエは加藤が求める事を行える若者だ。レイラ達、加藤を含めた計画組みの若者の中では随一と言ってもいいだろう。

しかし、アージエには加藤のような発想は浮かばない、今まで経験してきた事、学んだ知識の中から最良のモノを選択する事だけしか、今は、出来ない。

アージエの顔も、加藤のソレと似たような色を浮かべていた。き

つと、おそらく、加藤と同じような願望を抱えているのだろう。しかし、アージエは加藤と違い長年ある大人を見続けていたという経験がある。それは責任を背負う大人の背中だ。加藤も同じく大人の背中を見ていたが、その外での姿を見た事は無い。

自分のためだけに見せた親の背中を見た事があっても、知らない誰かのために見せる社会人としての背中は見つかったためだ。今の自分に出来る事を全力で。これは常々、加藤達若者の間で言われている事だ。

冒険者としてはソレを骨身に染みて理解できている加藤であるが、こうなると難しいようで、どうしてもという具合だろう。しかし、加藤はアージエの言う言葉に、そうだよなあと悔しそうに、しかし確りと返事をする。

少しだけ、ほんの少しだけ理解は出来なくても、納得は出来なくても、それを受け入れなければならないという事を知っていく加藤であった。

若者2人の会話が静かになったところで、職人達の会話もまたひと段落したようであった。老人はゆっくりと加藤へと意見を求める。

「ふむ……。お前さんが言っていた手法じゃが、なんとかなりそうだわい。じゃが、それするにはちと余計な作業が必要になりそうなの？ お前さんの言う今まで以上に頑強な防壁、鉄壁とでも言うのかの？ それは出来ても1つじゃ」

老人はそう言う。加藤は驚いて目の前に置かれている机から身を乗り出す勢いでその確認を取る。それは本当なのか、と。

老人は当然だ、と胸を張って言う。しかし加藤には信じられなかったのだろう。こういう感じならという曖昧すぎる意見を、少し会話しただけで実行出来ると断言している事が。

「でもっ、本当ですか！？ だって、俺の意見なんて適当も良い所

でしたしっ」

「ほう、適当か。それは面白い！　しかしな若いの、それでいいんじゃない。適当で結構！　この場でその適当を言う事が大事よ。それでもと言うのであれば、覚えておけ。ワシらは職人だ。いいか、職人だ」

「こうしたいと言われれば、そうするためにどうにかする。それが職人^{プロ}なのだ。老人は、いや職人達はしたり顔で言つてのける。」

「お前さんもそうじゃろう？　のう、冒険者でもある若いの？」

冒険者もまた職人^{プロ}である。この世界においては最も偉大である職人かもしれない。誰かの命を守りたい、そのためにどうにかして守る。なるほど、確かに職人だ、そう感じたかのように加藤はゆっくりと頷いた。

「そういう事よ、そういうモノよ。そして冒険者としてお前さんが感じたモノは、確かに大切な事だったはず。ならば、職人として応えてみせようではないか、のう！」

老人が力強くそう職人達に問えば、同じく力強く返事がある。当然だ、と言わんばかりに。話し合いがもたれた一室は奇妙な興奮に包まれていた。

興奮とは一種の感動だ。感動とは一種の共感だ。共感とは一種の友情だ。友情とは。

ほんの少しだけ、依頼する側とされる側の間に、関係に違いが生まれた。ほんの少しだけ、しかし確実に違う。自分の曖昧な意見を基にして大丈夫なのか、と不安を顔に浮かべていた加藤でさえも、いけると思ってしまうほどの。

ソレは勘違いなのかもしれない、しかしソレはきつと大事なモノだ。何事も出来ると思って臨まなければ成功など有りえないのだから。職人達にしても同様だろう、そうと強く思えるこの場で感じたソレはきつと大事なモノだ。

この話し合いの翌日から、いよいよ街の象徴である安心が、防壁が造り始められる事となるのだった。

いよいよ、街が、どこの街とも同じく街と呼ばれるモノが、しかしほんの少し違う街がその姿を現そうとしていたのだ。

第15話 『 目地! 』

甲高い音が鳴り響いていた、それが止んだと思えば重々しい音、いや振動が空気へと伝わっている。

ある程度それが続くと、次に聞こえてくるのはヒトの叫び声だ。しかし悲鳴ではない、それは怒声である。

「そうではないっ！ もつと均等に塗るんだっ！ ああー、違う違うっ！」

「そうは言われてもなあ、おら達は冒険者ですよ？ 運んだりなんんだり、置いたりするだけなら出来るけどもあ、こういうのはよお」

加藤と職人達、それぞれが智恵を出し合って造られている防壁、又の名を鉄壁。実際は鉄を用いてはいないし、今までのモノに比べ耐久性は上がったとは言え、弱点と呼べるものもあると未だ鉄壁の名に相応しいとは言えないだろう。しかしヒトが鉄の武器を持った時と同じように、この壁に何かを見ているという事。それは小さな違いだ。今までであれば、多少工夫を凝らした防壁であろうとも、職人達が別名で呼ぶなどなかったのだから、そういった面でもそれは見て取れる。

「鉄壁にするためには、おれらみたいな非力なのじゃ駄目なんだ！ あんたら冒険者の力が必要なんだよ！ 精密に置く事を許せる持久力！ 硬い粘土を均等に塗り広げられる腕力！ その他にだって数えればキリがない！ 頼むっ、頑張ってくれ！」

「困ったなあ、おらは冒険者としてここさ来たんだけど。それ

なら良いけども、これは無理だあ」

しかし職人の求めるモノ、それに必要な労力である冒険者達にはなんとも言えない表情を浮かべる者が多かった。

こういった対モンスター戦以外での仕事、それは最初のような単純作業、今までの防壁造りのような輸送を主にする力仕事。これらを予想していた者ばかりなのだ。中には討伐系の仕事よりも修復系などの仕事を好むため積極的に仕事に励む冒険者もいたが、大多数はこういったモノを嫌う類であるため、作業は思うように進んでいなかった。

いや、正確には出来ないのではない。やりたくない、やれないと思っっているために手を動かしているヒトが少ないためだった。

「どうも進んでいないみたいですねえ。これはいけません、いけませんよ。やはり最初に鉄壁ではなく、普通の防壁にするべきでしたか……」

「最初に難しいのをやった方がいいと思うけどねえ、その後が楽に感じるだろうし？ 体力も今なら十分だろうしさ」

それを見ていたアージエ、そして加藤はそれぞれ思い思いに口走る。しかし加藤は実に適当な声色で、ただただ少しばかり姿を現しだした鉄壁を呆然と見つめていた。

「まったく、嬉しいのは分かりますがね？ もう少ししゃんとして貰えますか、ヒロ君？」

「いやあ、なんかさー。本当にやってるんだあって、そういうのが色々、さ」

「やっています、進んでいません。鉄壁が出来上がっていくのが嬉しいのなら、尚の事この現状をどうにかしないと駄目でしょうに……」

アージエはそう言ってため息を吐くと歩き出し、はいはいと大声で注目を集めつつ、注意を与えていく。しかし未だヒトラに知られていないアージエのソレでは力が足りない、むしろ反対の効果を与え出す。

「おめえ、偉そうだなあ。難しいんだぞお、これはよお。出来ない出来ない言っていないでやれえなんて言うがなあ？」

「まったく、いいですか！ あなた達は冒険者で、僕達は雇い主ですっ！ さっさと仕事をして下さい！」

アージエはそう言い切る。まるでそう言うのが正しいのだと言わんばかりに。何故、慎重なはずであるアージエがこうも強気で言うのか。

それはアージエの長所であり、短所のためである。優れたヒトを知り、それに倣うというモノだ。この場合は自身の父親や母親、そして姉であろう。

竜人族とはある意味で綺麗な縦型社会である、武力、知力など力に秀でた者に従うというモノ。そして力に在るヒトが言うソレも同様に力に在るモノなのだ。

だが、それは力が在るヒトが言うだけでは意味を成さないコトをアージエは忘れていた。力が在り、尚且つソレをヒトラに示さねばいけない事を。

アージエは示せない。彼の力は智なのだから。この場で求められる力は有していないのだから。

「だからあ、難しいんだあ。そんなに簡単にやれえって言うくらいだあ、お前えやってみるおよ。出来るんだらうう？ もやしみたいなお前えにでもよお」

「なっ、そ……それは」

しかし、忘れてはならない。彼自身にその力が無いとしても、その力を持つ友はいることを。力とは何も武や智だけでは無いのは誰しも知っている事、その力を彼は1年ほど前から着々と育てて来た。その力は決して裏切らない、決して。

「まったく、いきなり大声出して何かやり始めたと思ったら……。こういうのは職人さん達に任せておけばいいのにさあ」

そう言いながら、加藤はちらりとある方向に目を向ける。その向けられた場所にはヒトがいた。そのヒトはゆっくりとこちらに近づいて来ていた。

「まあ、慣れていない仕事ってのはあるけど、不可能なくらい難しい仕事って訳じゃーないってあのお爺さんも言ってたしなあ。その証に、俺と……この娘でやってやるよ」

「ええっ！？　なんかこつち来いみたいな感じだったから来たんですけど、わたしには厳しいんじゃない？」

加藤の目配せを見て、とことこと歩み寄って来た少女、マナは慌ててそう言う。この仕事を任せられているのは筋骨隆々の大男ばかりで、加藤ですら厳しいそうに思えるのに、少女のマナではどう考えても。

しかしそう言うマナに加藤は問題無いと笑って言う。マナとして

も師匠であるギョッセと同等に信頼を寄せる相手からそう言われてしまえば断りの言葉を紡ぐ事は困難だった。少しばかり後悔したような顔色ながらも、もういいですと言うと顔色をがらりと変えて、やる気を醸し出している。

「ぐあはは！　ちつこいのじゃあ、この石は持てねえぞ？　お前らみたいな子供のする仕事じゃねえんだあ」

「その子供にも出来る事が出来ない大人って、情けないとは思わないのか？」

アージエを馬鹿にされた事で気が立っていたのか、常の彼らしくもない。老人に教えられた事すら忘れたかのように、幾分荒く言い返す加藤。

言われた大男は顔を赤くして怒鳴り返そうとするが、加藤が石を、大きすぎる、重すぎる石を、持った事で、それは止まった。

「うお！？　お、重いつ！　マナ、マナ！　反対側、反対側！！」

「え、え！？　わ、わ、わ！」

騒がしくしながらも、重い石をゆっくりと、足を地面に滑らせるようにしながら運んでいく。

この特別な防壁は今までの防壁と造り方が異なっている。大きめの石を使っているという点もそうだし、それを精確に配置していかなければならないのだ。その鉄壁は少しづつだが高くなっているため、その高さまで運ぶための小山がある。それは土を盛り、木の板を置いただけの簡素な坂道で、非力な者のために坂が緩やかななどという配慮が一切ないもの。

しかし、そこをゆっくりと、先ほどよりもゆっくりと、進んでい

く。しかし、実に危ない拳動、いつ石を落とすか分からない。石を落とせば加藤はまだしも、マナは大怪我を負ってしまつかもしれない。最悪、小山が崩れるやもしれない。そういった不安が大男を始めとした屈強な冒険者達に広がっていく、そんな光景だ。

「ふう、ふう、あと少し！ マナ、支えるだけでいいからな！ 無理だと思えば止めて大丈夫だ。俺、持ち方が分かって来たからさ」

「はあはあ、最後までやらなきゃ意味がない！ 師匠の教えです！ わたしは頑張れますよっ！」

そう互いを励まし合いながら、大男達であれば普通にこなせる作業を行っていく。一步、一步、進んでいくと、遂には置く場所。作業場所まで石材を運ぶ事に成功する。思わず、意識せずにだろ。大男ははあと大きく息を吐いた。

「よおっし！ 次は粘土だなっ！ なんだ、これ？ かったっ！？ 粘土つてぐにやぐにやしてるもんじゃないっけ？」

「カトウさん、職人さん達の話聞いてなかったんですか？ なんでも、多少の雨が作業中に降っても大丈夫なようにとかなんとか？」

石材をゆつくりと安置すると、次の作業に取り掛かろうとする人。加藤はまだしも、マナがそれをする姿はどうみても泥遊びに興じている子供にしか見えなかった。しかし、これは鉄壁を造ろうとする職人の仕事、お遊びでは断じて無い。

「うー、これ……わたしだと厳しいかもれません」

マナは均一に伸ばす作業だと言うのに、あまりの粘土の固さのた

めか、腕力では無理と判断し己の全体重を賭けるようにどしどしと踏みならしていた。だが、それでも大した効果は見取れない。

「まあ、マナは小つちやいなあ……。ま、ここは俺に任せておけつて！ 見とけよつ、俺の防壁工事で培った技をつ！ ……、んんん！ ……つはあ、これは長い戦いになりそうだ」

加藤の様子を見たマナがため息を吐きながらも、再度小さな身体で頑張ろうとしていた時。

そこまで、そこまで見て我慢の限界を迎えたのだろう。大男は、頭を乱暴に掻き回した後、先ほどの粘土を踏みつけていたマナと同じように、しかし遥かに重量感のある音を響かせながら歩いて行く。

「どけ、見てられねえよお。でもお、小さいくせに良くやるもんだあ。これを伸ばすコツはあ、ゆつくりとお力を籠め続ける事だあ。まあ、だから疲れるんだけどなあ」

加藤から伸ばすための道具を奪うようにして取ると、あっさりと一見して簡単にそれをしてみせる大男。思わず、加藤もほうと感嘆の息を漏らしてしまうほどだ。マナに至っては信じられないと愕然としてしまっている。

「ははっ、やれるんじゃないですか！ ったく、疲れたならそう言ってくればアージエだってああは言わなかっただろうに」

「色々お、あるんだあ」

冒険者の恥とは何か。それはマナが叫んだ言葉がその1つであると言えよう。要は、逃げる事である。戦う事が役目である冒険者は、モンスターを前にして逃げる事は恥なのだ。だからこそ、彼らは自

分は冒険者だから、こういった仕事はやりたくない、そう誤魔化していたのだろう。疲れたから止めるなど、彼らのような大男には恥となるのかもしれない。

「いやいや、これは疲れるって！ ぶっちゃけ、これを10回、100回つてやると思ったら、中型を相手にしてる方がよっぽど楽だよ」

「ぐあははっ！ 馬鹿かあ、小さいの！ 中型の方がよっぽど恐ろしいわあ、まあいい。今を見て、他の若くて小さいのがやるうとし始めてるう。お前は大丈夫だったけどあ、他のはきつと無理だあ。こんなので死なれちゃ困るう、おら達がやるさあ」

大男が言うように、加藤が、そして何よりマナという少女がやってのけたのだ。自分も、と言う若者が多く見られるのも確かだった。それは危険だと判断したのだろう。一時、急に慣れない仕事を押し付けられた事について熱くなってしまったとは言え、彼は熟練の冒険者。そういった事を知ったとあれば、じつとしてはいられなかったのだ。

他の大柄な冒険者達も、仕方ないといった風でゆつくりと、しかし確かに動き出す。面白い事に、彼らにしてはゆつくりとしたその歩みであっても、先ほどの加藤とマナの動きと比べれば、在り得ない程に速く、そして安心できる動きであった。

「いやあ、やっぱ俺ももう少し鍛えないと駄目かなあ。流石にあれを軽々とは持てないし」

「はあ、凄いですよねえ……。モンスター相手の強さだったら、カトウさんの方が絶対強いのに、これだと駄目駄目でしたし」

「いや、なにそれ。俺は別に……」

加藤とマナが何かについて、話を始めようとしていた時だった。忘れられていた男が恥ずかしげにしつつも、んんつと咳払いをする。流石に2人も気が付いたようで、おあと手を上げて男を招く。

「いや、助かりましたよ。ヒロ君、流石ですねえ」

アージエもまた、加藤を褒めるようにして感謝の意を述べる。しかし加藤はマナとアージエに対して、そうではないと、造りかけの鉄壁を、そこで再び汗を流し始めた冒険者達を見つめながら、小さく零す。

「違つつて……、言つたら？ 職人さん達に任せておけば良いのにつてさ。最初からあのヒト達だつてやるつもりはあつたと思うんだよ。あのヒト達の動きを見たら分かるだろ、コツつていうかそういうのを掴んでる。やってみて分かつたけど、かなり難しいのにさ」

やる気の無い者がそれを掴めるだろうか。加藤はそう言つて振り向く。

こつは言つてはなんだが、冒険者にしろ、職人にしろ、遣り甲斐というモノは確かに存在する。汚い言葉で言えば、モンスターを倒した瞬間が堪らないというヒトもいるだろう。職人であれば、造つたモノの完成した姿を見た時が堪らないのかもしれない。

そういつた意味で、この鉄壁造りには冒険者達は遣り甲斐を見出せなかつたのだろう。普通の壁作りであれば情性で行えたが、これは違つのだ。そういつたモノが何かしら必要になるのだろう。

そして、その何かしらは自分達にしか行えない。安全には、完璧には。この仕事もまた危険なモノであり、マナのような若く、非力な冒険者には任せられない。

そういった別の方向からの遣り甲斐、それに似た何かを得たという事だろう。だが、これは職人と冒険者の対比で事足りる事でもある。あのままいけば、職人達が自分達でやると言い出していただろう。そして、その様子を見た彼らは。

「なあ？ まあ、職人さん達がやるよか、俺らがやった方が安全だから、結果的には良かったけどさ」

「僕もマナさんも、そういった事で凄いとやっている訳じゃないんですがねえ……。まあ、いいでしょう」

ただ、とアージェは付け足す様にして、最後に軽く、しかして加藤にとつても重過ぎることを口にして笑って歩いて行った。

「それと……。遠慮か、謙虚か知りませんが。さっきみたいなのを繰り返すと嫌味なヒトにしか思えませんよ？」

「ちよっ！ 嫌味って、どこがだよ!？」

離れていくアージェを追いながら、加藤はどうして、どこが、なにがと問い詰める言葉を叫ぶように口にする。

「はあ、なんだか大変です。師匠、わたしは頑張ってますよ？」

憧れの存在の情けない姿を視界に収めながら、疲れた手足をふるふると揺らしながら、マナは空を見つめるのだった。

その空の一部、見上げた視界には、ゆっくりと、ヒトを守る存在が加わるうとしていた。

街造り、加藤達に任せられるという形を取られていたそれは、大型の死骸という存在のために通常では考えられない程に迅速に進んでいた。

冒険者という力有る労働力を得られたという意味でもそうであるが、冒険者がそういった役割に回れるという環境こそが一番の理由だろう。そのために、職人達はいつにも増して己の仕事のみに集中できたからだ。

そして、予想していない点でも作業の効率化が図られていた。それは予定通りに進むという事だ。これは何時までに作り上げるといふ事でもそうだが、それ以上にこういつたモノを造るといふ計画そのものの、これを実現できているためだろう。

今までであれば、モンスターの襲来のために、何処かかしらは歪み、それを修正した事で他の箇所が歪み、と繰り返しの作業に追われる面が多かったのだ。しかし、今回に至ってはそれが無い。

また、冒険者、職人共にモンスターの脅威が無い事で、心の余裕が生まれていたためだろうか。今まで以上に協力し合うという場面が多く見られるようになっていたのだ。

加藤達が遭遇した場面が切欠であったかは分からない。しかし、冒険者は難しい、少なくとも彼らにとつては難しい作業について、積極的に職人を頼る自分を許した。同様に職人もまた、自分達で行いたい重要な作業。それを冒険者達に託すことを許したのだ。

今までであれば、互いに譲れないモノがあった。それは誇りとも言えるし、子供の見栄とも言える微妙なモノ。我侭と言つてもいいだろう。

冒険者達にも最初から理解できていた事。職人達も最初から痛感

していた事だ。自分だけでは行えないという事が。互いにそれぞれの長所は分かっているのだから。自分には分からない手法を彼らは知っている。己では行えない事を彼らは容易にしてみせる。

ただ、なんとなく、意識せずに、嫌なだけであつたのだ。

今までもそういつた場面はあつただろう。しかしわざわざ聞かなくとも、運ばばいいだけ。しかしわざわざ頼まなくとも、自分達で行えない事もなかつただけ。だから、聞けば、頼れば何倍も効率的に行えるものを、非効率的に行つてきていただけなのだ。

しかし鉄壁という難物を加藤達、若者が持ちだして来た。これは適当に運ぶだけでは造れない。これは非力なヒトでは求められる壁を造れない。必然的に、歩み寄らねば不可能なのだ。効率的、非効率的に関係なく。

こうしたモノは、1度経験してしまえば、後は楽なものである。元々、なんとなく、そういった理由とも言えない理由のためであったのだから、当たり前ではあるだろう。

とにかくそのために、効率的に、友好的に、ヒトとヒトとしてだけでなく、冒険者と職人として協力し合う事が出来ているのだ。

「はあー、なんか凄いなあ」

加藤は職人と冒険者が何かを語り合っている作業場の近くでそう呟いた。つい1ヶ月前までは少しばかり積み上げられていた防壁を見上げて。そう、見上げてだ。

「まったくですねえ。なんていうか、ええ凄いです」

たったの1ヶ月。それだけで防壁と、いや鉄壁と呼べるモノが出来る上がった。防壁の現場での監督者足る職人達、そしてのめり

込み始めた作業員足る冒険者達が言うには、まだまだという事だが、この一帯だけで見るならば立派なモノとなっていた。このような状況でなければ、防壁をいち早く築き上げなければ治療施設があるとも多くのヒトに待っているのは死しかないという思いが残っていたのだろう。職人と冒険者、それぞれが協力し合うようになって、どこか必死と言えるものが現場には漂っている。

その消えない思いと、このモンスターが襲ってこないという状況協力し合える環境という今までとは相反するモノとか混ざり合い、恐ろしい速度で防壁が造られて行っているのだ。

今もまた加藤達の横を冒険者達が一所懸命に資材を担ぎながら通り過ぎる。その邪魔にならぬよう道を開けつつアージエもまた、加藤と同じようにその壁を見上げながら言うのだ、同じ事を。

しかし、いつまでも見つめていそうな加藤とは違い、アージエは少しばかり見つめた後にさて、と言葉を零すとくるりと向きを変えて歩き出す。加藤は歩き出したアージエに気付いて、慌ててその後を追っていく。そう、彼らには他の仕事が出てきたのだ。壁はもう職人達に任せておけば問題ない。いや、自分達が入らない方が良いという判断だろう。既に防壁についての諸々は全て伝えてあるし、相手の理解も得ているのだから。

「もー、遅いよ？ ヒロにアージエ、なにしてたのさー」

加藤達は、仮住居と呼べるモノの中でも大きな建物へと足を運んでいた。そこは先日、職人達と話し合いを持った部屋のある所であり、会議などを行うための中心とも言える場所だ。

そこに着いた加藤らに声を掛けたのはレイラ・サックル。この領主となる少女、いや女性である。その傍らにはエリアスール・ラ

インが控えており、両隣には2人の女性が同じような顔色で座っていた。

「いや、鉄壁を見ててさ。凄いもんだよなあ、あつという間にここまで出来ちゃうんだから。毎日見ても飽きないって、あれはさあ」

楽しそうに、言い訳と呼べるだろうモノを口にする加藤。続けて何が凄いのか、と口にしようとした所で、それを遮るようにした言葉を投げ掛けられる。

「カトウは気楽でいいですわね？ 難しい事など考えずに思うままに振舞えるのですから、まったく、本当に！」

ふんふんという鼻息が聞こえてきそうなくらいに、イラついた様子で言うのはエイラ・ファルゲート。いきなり怒声のようなモノを浴びせられた加藤が、ついつい言い返そうとした所で、やはり遮るように他の女性の言葉が飛んで来る。

「ま、まあまあ。エイラも落ち着きなつて……。ごめんね、ヒロ。ここのところ、国軍との打ち合わせとかで色々あつてさあ。ボクもなんだけど、結構疲れちゃってるっていうか……」

頬を掻きながら、苦笑って言うのはニーナ・エメット。彼女はそう言つて、久しぶりなのに、と謝ってくる。

彼女がそういうように加藤とアージエ、ついでにマナはレイラ達とはあまり会わない期間を過ごしていたのだ。それは基本的に、防壁に集中していたためである。そのため、それ以外の方面は全て彼女らに任せて、いや投げていたと言つてもいいだろう。

とは言え、加藤は未だはつきりしない役職、地位であるため、国軍相手の場には出ずらく。アージエは街造りで重要である防壁を

一任されていたのだ。それはこの場の女性達、エイラもニーナも理解している事だ。それでも色々な鬱憤をぶつけてしまっ、ぶつけられるのが彼らであった。

「ああ、はいはい。それで？　なんか急にレイラ様が呼んでいます！　とか言われた理由はなんなんだ？　愚痴を聞かせるためってだけじゃないんだろ？」

加藤はニーナの言葉で現状を理解、というより空気を読んだのか、何時にもましてへらへらと軽く聞いてくる。当然のようにエイラはまったく、と頬を膨らませるようにして説明を始めた。

「当たり前です！　いいですかっ、カトウ！　貴方はわたくし達のっ……。んんっ、一応、こちら側のヒトなのですから、呼んだのです！」

「いや、だからさ？　なんで呼んだのって聞いているんだよ、分かる？」

今度は誰も止めない。そのためエイラはここぞとばかりに大きな声を張り上げて騒ぎ出し、加藤も同様に大声で言い返す。

それはここへと来てからというもの、とんと見なかった日常であった。加藤とエイラが騒ぎ、ニーナが間に入るうとしていつの間にか3人で言い争いを始める。レイラは笑い、アージェは苦笑う。最後にエリアールがはいはいと手を叩いて終わりを迎える、その時には皆、色は違えど確かに笑顔であった。

「まったく、つてかニーナ。なんでお前も俺を馬鹿にするかなあ？　いつもとなんか違うかい？」

「言ったでしょ？ ボクも色々疲れたんだよっ、ほんとにさー」

「はははっ、まあこういつた事が出来るのもここくらいのものでしよう。ですが、そろそろ本題を聞きたいですね？」

アージエがそう言った事で、先ほどまでの空気は急に消える。ことはない。そのままの、穏やかなモノを保ったまま、レイラがうんと頷くと本題を話し始めた。

「一応、絶対にやっておきたい防壁はある程度形が出来てきたでしょ？ だから、そろそろ中身っていつの？ そっちの事とか、それと……。ね？」

「中身つても、家屋とかは後々だし、大通りっていうか通路は職人さんに伝えてあるだろ？ あ、あれか？ もしかして運動場とかっ！？」

「残念ながら違いますね？ 国軍の方です。あちらもある程度の準備が済んだようで、本格的に協力をして頂ける体制になってきたんですよ」

国軍、それは街造りのための石材であったり諸々の物資を運ぶ役目を背負ったり、今の冒険者達のように街を造る労働力となるヒトらである。

しかし、特に国軍に頼っていた輸送する物資。つまり重く、大きな石材であるが既に粗方届いており、今からという意味では必要性は無い。

同様に、モンスターの脅威が少ないために冒険者が街造りの作業の大部分を行っているために、こちらでも頼むモノが少ないという現状であったのだ。

簡単に言えば、彼らがする事が無いというものだ。そのために、どうにも関係が上手く回っていない事で彼女らは苦心しているようであった。

「いや、普通に街造りに協力して貰えばいいじゃないか。確かに冒険者のヒト達が街造り、っていうか大部分は防壁造りに入って貰ってるけどさ、この街の防壁は1つじゃないんだしさ」

だから、他の防壁造りに動いて貰えばいい。そう軽く言う加藤であるが、そうはいかないようであった。

レイラがそう出来ればいいんだけど、と言いながらため息を吐く。

「冒険者と職人のヒト達が今でこそだけど、最初はぎくしゃくしてたのは知ってるでしょ？ 同じ感じで冒険者と軍人って微妙に仲が悪いんだよねえ」

「あー、デイリーがそんなの言ってた気がしなくも？ 国軍ってなると、また面倒って事なのかね？」

これもまた、そういったモノであると言えよう。基本的に冒険者にしろ、軍人にしろ、両者の長所は認め合っているところなのだ。しかし、である。

特に、彼らは互いに武の力を持つ者同士、冒険者と職人、軍人と職人と言った具合には簡単に収まらないなにかがあるのだろう。軍人がどちらかと言えば職人側とは言え、基本は武なのだから。

「そういうことですわ。恥ずかしい話ですが、国軍は冒険者を防壁造りから外し、自分達が行うべきだと言ってきていたのですが。ですが、ねえ？」

そう、今の彼らは正直、国軍が行うよりも迅速で、正確な作業を行えていると思えて仕方が無いのだ。これは、国軍がなまじ技術肌を持ち合わせているせいと言えよう。

現状、職人がこうして欲しいと言い、冒険者はそれに従って作業を行っている。実に綺麗な役割分担、己の長所を活かしたモノだ。

だが、これが軍人となると少し変わる。職人の行動は変わらないだろう、問題は軍人である。こうした方が良い、こうするべきなのでは、そういった事ではしばしば言い合いが起こる事が多々あるのだ。これは悪い面だけでは無い。技術が最も進んでいるだろう国に住んでいる彼らの発想、それは素晴らしいモノも無いわけではないのだから。当然ながら、有益な意見が飛び出す事もあり、一概に悪だとは言えないのは確か。

しかし、既に決められた作業中にそれらが起こるのは悪であると言えるのだ。いちいち、そこかしこでそれらが起こり、職人が答えなどを繰り返しては一向に作業は進まないであろう。

今までであれば、ある程度技術が必要となる作業の場合、そうであつても冒険者よりは効率的に行えていたから良かった。しかし今は、である。

「そういう訳で、国軍の言い分は飲めないんだよねえ。なにか、他にあるかなあ……。まずは防壁を、そしてーって感じでしょ？」

「順序としてはそうですねえ。勿論、それ以外でも並行して作業は進めています、大部分の人員を動員しているのは現状では防壁ですから……」

防壁造り、それを冒険者と国軍で協力して、というのは不可能では無いだろう。しかし作業が大幅に遅れてしまう可能性があると言ふのだ。これには加藤も困ったよう、頭を悩ませるように唸り始める。

「んー、確かになあ。職人と冒険者が打ち解けるのにだって結構時間が掛かったし。最悪、国軍のヒト達を加えたら全部ペアになっちゃうかもしれないって考えると……」

常の加藤であれば、それでもそうした方が良いと言っていたかもしれない。しかしそういった事とは別の問題が彼の頭には浮かび始めていたのだ。

それは時間。正確には季節とでも言うべきだろうか。そろそろ夏が終わり、本格的な秋の季節が近づいて来ているのだ。つまり、冬も。

冬を過ぎれば春がやって来る。それは良いのだが、問題はその時、モンスターがやって来るかもしれないという点だった。

そのため、最低限の防壁は欲しいのだ。現状の作業速度でいけば完成しないしある程度は形になると予想できるもの。それが遅れる可能性はどうしても捨てたいという事だろう。

防壁の作業は現状維持が望ましい、結局はその結論に収まり、本題である国軍の扱いについては一向に良案が出ないままであった。

「……なんか、大事なのをなにも話し合えて無い気がする」

「貴方が防壁だの、モンスターだのと言い出したからでしょう！ほらっ、なにか言いなさいなっ！」

「いやいや、防壁については国軍にだってかなり関係してただろ！？」

加藤とエイラ、そして二ーナも加わりわいわいと騒ぎ始めた横で、レイラというよりはエリアスールとアージェの2人が真剣に話し始める。

「ふむ、国軍への対応ですか……。今更ですが、これまではどのように？」

「それについてですが、基本的には輸送面についてですね。そこをお願いしていました。それと並行して仮設家屋などを作ったりしていたように」

国軍もまた、なんとも困った現状となっていた。レイラ達も困っているが、それ以上に、である。

モンスターが来ないという現状は喜ばしい事のはずだ。しかし、同時に悲しい事とも言えるだろう。仕事が無くなっているのだ、本来ならばモンスターと作業とで分担して丁度良い人数なのだから、片方の大仕事が無いとなれば、である。

なにより軍とはその名の通り、軍である。つまり人数が多いのだ。冒険者より優れた面で言えば統率が取れている点が挙げられるだろう。冒険者はどちらかと言えば個人の武で、軍は集団の陣で戦うと言えるソレに似ているとも言える。

要は、軍の責任者としてはそれを行いやすい防壁造りに協力したということが本音であり、それ以外の細々としたモノを冒険者に任せたいということだ。しかし、それが叶わない事は責任者も理解しているだろう。既に短期間で防壁が出来つつある、それを見れば何かしらの変化を感じずにはいられないはずだ。

「ですので、どうすれば軍の方々が納得して貰えるか。また同様に効果が生まれるのかというのが問題ですね」

「いやあ、なんとも贅沢な悩みだ。本来だったらモンスターの襲来によって必死で、こんな事で頭を悩ましたりもしなかったでしょうに。いやあ、なんともなんとも。ですけど、そうですね」

エリアスールの説明を受けたアージエは少しばかり悩むと、レイラを見つめて口を開いた。それは、今回の計画であれば少しばかり速い、しかし普通であれば遅すぎる事を言うためだ。

「病院を造りましょう。いえ、正確に言えばそのオマケである、庭園、小さな運動場を造って貰いましょう」

「病院かあ、うん。いいかもねっ！ 予想以上にモンスターが来ないってのもあって、先送りにしてたけど……。これも防壁と同じくらい大事なモノだからねえ」

レイラはこの状況、つまり大型の死骸によって起こっている現象を知る前までは、防壁以上に病院の重要性を語っていたのだ。それを反対する理由は無いのだろう。寧ろ喜ぶように賛成の意を伝える。エリアスールとしても、反対する気は無いようでレイラの様子を見て軽く笑みを浮かべるだけであった。

「病院と言えば、レイラ様。確かロレン様にその事で色々お聞ききになると言っていましたか？」

「うん？ ああ、うんっ！ お父様に聞いたというか、その下のヒトって感じだけだね。あー、そうだ。石材を運んで貰わないと駄目だなあ、うん。そこもお願いしようっ」と

病院、治療施設で使われている床材などは特殊な加工を施された石材で造られている。それは非常に高価な代物であり、重要な資材と言えるだろう。

国軍の責任者、この場での上層部はともかく、下のヒトらにどうしようも無く溜まり始めている何かを吹き飛ばすには足りないが、

少しは効果がある代物と言えるだろう。それを任せられるのは貴方達しか居ない、と言えよ。

「ははっ、なんとも。ですけど、冗談なしに国軍くらいにしか頼めない物資ではありません。そもそも石材は重いですし、防壁に使うのと同様に、国から運ばねばなりませんからね。大変な大仕事です」

「とは言え、石材が必要となるのは最後の最後ですし、病院造りをお任せしていいでしょう。あちらは軍付きの職人さんもいらっしやいますし。防壁と同様に、こちらの要望を伝えれば後はお任せ……、なんて駄目でしょうかね？」

エリアスールは、そう笑って言う。彼女としてもどうすれば良いのかが分からないのである。彼女もまた、アージエと同様のタイプであり、こういった状況を苦手としているようなのだから。

「うんうん、それでいいんじゃない？ 病院も最初ほどじゃないけど、大規模なモノだし、国軍さんも納得してくれるよっ！」

「ははっ、流石にそうはならないでしょうね？ 病院はあくまで一戸の建物ですから。僕はそちらは建前で、運動場の方に期待しているんですよ」

「と、言うこと。もしかして、本当のとうと変ですが。本当の運動場もこの時期から造り始めると？」

エリアスールが言うと、アージエはゆっくりと頷く。本来は人手、そして資金不足のために防壁との並行作業は不可能という見解であったが、それを強行すると言う。

人手についてはこの状況もあって、十二分に足りるだろう。しか

し資金、これは難しいように感じたようで、レイラが厳しいと小さく零す。

「ええ、確かに厳しいですね。ですが、モンスターが襲来していない状況、これを忘れてはいけませんよ」

何度も言われている事であるが、この世界において街造り、いや前進するという事は犠牲を前提に行われている。前進ではないが、その最たる例が対大型戦であろう。

本来、この新たな街造りにおいても、犠牲が大きくなるだろうと思われていたのだ。そして、犠牲が出ればその事に対しても対策が必要になるのだ。犠牲が出るのは仕方が無い、問題はその後どうするのかという事だ。

この世界には保険だの、年金だのは存在していない。しかし重要な戦いなどで戦死した冒険者などの遺族に最低限の対応をする制度はあるのだ。それは冒険者の始まりに由来するものであり、昔から続いているモノ。

それは親が他人を守るために死んでくれたようなもので、その他人は残された子供を見捨てるのか、という事だ。見捨てる事は出来まい、それを親の代わりとまでいかずとも守りたいという気持ち、それがこの制度の始まりだ。

そして、こういった街造りの資金繰りの際には、当然ながらそれのための資金も存在する。しかしこの現状、その必要性を感じられない、ならば。

「少しばかり、邪道ですし、悪い事をしている気にはなりません。ですが、より良い街を造るために国軍の方達への対応は必須です。なにより、差別という至上問題に対して、これ以上の策は無いでしょう」

「んんー、そう、だねえ。うん、うーん」

レイラは悩む。アージェの言うように冒険者を始めとした、この場に来ているヒトらの被害、死ぬ可能性は当初に比べ極端に低くなっている。だが、そのための資金を使うのはどうなのだろうか。別段、加藤の前の世界のように違法であるのだ、そういった事ではないし、そもそもそうだったものは存在しない。その時、対応出来るか出来ないか程度でしか善悪は問われないのだから。

だが、ヒトとして悩む部分なのだろう。それは今、必死に働いてくれているヒトらのためであり、この状況とは言え、危険な場を送り出した他の街で待っている家族達のためのもの。そこで悩む、悩む、悩む。

「安心して下さい。と言うのは変な話ですがね、この案は僕が出しました。だから、僕は国元の親に手紙を書くつもりですよ。ある程度以上の資金を用意しておいて欲しい、とね」

この街造り、それは子供が大人になるためのモノ。そのためのお遣いであり、お手伝いであり、代理なのだ。子供がなにかしらの失策をすれば、その責任は未だ親に降りかかる。そして、その責任を負う事を含めた上で親は子供をこの場へと送り出しているのが殆どなのだ。

そのせいで、こういった場で活躍できるのは殆どが上流階級に位置する若者だけという弊害も出てきているものの、反対に通常では必須となる冒険者側での若者はギョッセなど普通の冒険者として抜きん出ている者が選ばれる仕組みとなっていた。その成り上がりの部分も含めて、冒険者は子供の憧れとも言える存在なのだろう。

「それは、よろしいのですか？」

エリアスールはアージエの顔色を伺うようにして尋ねる。アージエは簡単に言ってみせたが、用意して欲しい、ただその一言だけで失敗を告げるのと同義だ。

資金を集め、用意しておくだけでも、存外大変なものだ。例えそれだけの資産を有していようと、集め、留めるとなればまた話は変わるといふ事。その苦勞を頼むのだから、親にしてみれば困った事と言えるだろう。

「構いません、なに。そういった事を頼むのは今後必要になる事でしょうか？ 別に親にという意味ではなく、ですがね？ これほど巨額となれば、出来るか出来ないか以前に、口にするだけでも結構疲れるものだと、今経験できましたしね？」

手紙を送る時はどれほど疲れるのか、楽しみだなどと笑って言うアージエ。これも1つの経験、そう言うのだ。そして、続けて言う。心配はしていない、と。

「防壁は鉄壁だけですが、ある程度形になっています。小型程度なら大丈夫でしょう、問題は中型です。ですけど、既に街の象徴である防壁は出来上がりつつあります。つまり街となりつつあるんです、そうなれば」

ここは最前線の街になる。そう言って3人で騒いでいる彼らに視線を移した。レイラとエリアスールもまた、彼らを見た。そこには2人の女性に良い様に馬鹿にされて落ち込み始めた1人の青年がいた。

「大丈夫ですよ、この状況もそうですし、デイリー様やルクーツアさん、加えて灯楼ひいろうも居るんです。今僕が言ったのはあくまでも形式上、一応という意味ですしね？」

「そうだよねっ！ 少なくとも、今年は大丈夫。うん、まずは関係を大事にするのが大事だよねっ！」

レイラも、国軍相手の微妙なやり取りには疲労していたようで、少しばかり明るくなつて先ほどとは言葉を変えて言う。遺族のための資金を使うのは申し訳なくて嫌、ならば絶対に遺族が出ないようにすれば良い。なんともいえない極論だが、彼らにはそれで丁度良いのだろう。

「……そうですね。既に用途を決めていた資金を動かすのは何処か変な気持ちになります。ええ、そうしましょう」

エリアスールは少しばかり悩む、というより周囲を見渡した後、笑った言った。資金、これはそれぞれの種族の国、そして主要な街、有力なヒトらが出資しているモノだ。防壁を造るために幾ら、病院を造るために、という細かいモノではなく、街を造るために、という大雑把なモノだ。それらを細かくし、用途を決めるのは彼らの仕事。

その意味で、別口から資金を追加というのは間違つたやり方であり、確かに気持ち揺らぐだろう。本来であれば、これだけのお小遣いを与える、その分で街を造れというお遣いなのだから。そこにおねだりを加えるのはいささか、という事だ。

「あれ？ なんか話が纏まつたのか？」

エイラ達と会話を下らない話にまで質を下げていた加藤が、うんと頷き合うレイラ達を見取つて真面目な方の環に帰還を果たす。同様にして、エイラと二ーナも顔に疑問を浮かべながらも、状況を思い出したのか、少しばかり顔を赤らめながら加わってくる。

「ふふつ、ええ。アージエさんが頑張つて下さるそうでした、本当の運動施設の方もこの時期から着手する事になりました。そこを国軍の皆さんにお願いしようといった方向ですね」

「国軍に、スポーツとやらのための施設をですか。ん、どうなるか不安ですが、わたくしとしては良いと思いますわ」

「そうでしょうっ！ やはり国軍にあの施設、というよりもスポーツという存在を知って貰い、国で広めて貰う！ やはりコレが必須なんですよっ！」

エリアスールが簡潔に説明をすると、エイラは一瞬だけ驚いたような顔をしたものの、すぐに同意を示す。と、アージエが嬉しそうに語り出した。

どうにも、彼は加藤以上に運動場、スポーツの力というモノを信じている節があるようで、この話題となると彼らしくもなく熱い男となるのだ。

「運動場もかあ。でも、運動場ってどう造るのかって決まってるなかつたっけ？ 造るのは当然先だからあってさ」

「嫌ですよ、ヒロ君。僕らの仕事だった防壁はひと段落着きました。なら、今度は運動場、加えて国軍と冒険者などのヒトらの間に緩衝材として入るべきです。そしてっ！ そしてですよっ……」

この日、加藤達は夜になり、空が明るむまで語り合った。序盤はアージエの独壇場で、中盤は加藤とエイラが喧嘩を初め、最後には全員が睡魔に敗北を喫した。いや、女性陣、というよりエイラとレイラが最後の力を振り絞り、加藤とアージエだけは部屋から追い出して、だが。

「眠い……。ここから宿舎までどれくらいだっけ？」

「そうですね、徒歩でそれなりだったかと……」

追い出された加藤とアージエは、自分達に割り振られている仮住居を目指してとぼとぼと歩いていた。別段、レイラ達の居る建物でも問題は無いのだが、頭が働いていないのかもしれない。

「そっか……。あー、朝だなあ。あ、なんか急に腹減ったわ」

「確かに、そうかもしれません。ですが、料理人も決まった時間しかいませんからねえ。それを待っていては眠れない、ですがこの腹の音は……」

その日、結局彼らは長く眠る事は出来無かった。そしてまだまだ眠い眼をこすりながら、昼を少し過ぎた辺りで国軍との話し合いが持たれる事となるのだ。

鉄壁を始めとした防壁陣と同じく、この街の、他の街とは異なる、ほんの少しの違い。それがいよいよ2つ揃おうとしていた。

その日の昼、国軍と話し合いを持った会議場で、加藤とアージエは目を血走らせる勢いで自分達の意見を言っていた。その上で時折なにかを振り払うように勢い良く首を振り回し、無駄に腕に籠めて机を叩いたり、なんとも言えない態度であったと言えよう。

しかし、この場に赴いている国軍の上層部が今まで相手としていたレイラ達に比べ、余りに違い過ぎる加藤達、男性を見て、何処か感じるモノがあったようだ。

「へえ、君達は若いんだね。羨ましい限りだよ、私なんて軍人なんてものをやってからというもの、どうしても決められたやり方というのに縛られていてね？」

聞きようによっては、一応は代表者という身分とは言え相手への礼を逸している加藤達を皮肉るようにも取れる事を軽く言ったのは、ルクーツアと同年代だと思える人間の軍人だ。しかし、その顔から悪意の類を見て取る事は出来ない。思ったままの事を漏らした、そういうった感じである。

「言いたい事を言える……。それは素晴らしい事だ、何かをしようとしたら、特にならば、いいですよ、本来であれば従来通りが望ましいし、本国からもそう言われてはいます。が、現場での決定権は私が持っていますのでね」

なんとも気だるそうに加藤達と先日話し合った結果の提案、それで良いと言っている軍人。

加藤とアージエは寝不足ゆえに、熱くなつては抑えられずに言わ

なくても良い事まで口走り、冷静になれば言わなければならない事
だけしか言えず、となんと両極端であった。それが功を奏したと
いうことだろうか。2人も軍人とは少し毛色が違うものの、なんと
も言えない顔である。

「えっと？ 失礼ですが、レイラ様方との話し合いの際の事を聞いて
いるんです。その聞いた限りでの貴方はそういった感じのヒトで
は……」

言い方はともかくとして、話し合いが始まった途端、ほぼ一方的
に言いたい事だけを言っていた加藤とアージエ。しかしようやく会
話らしい会話を持てたかと思えば、それは了承の言葉。流石に眠気
は一時的にだろろうが消え去ったようで、アージエは目を丸くして尋
ねる。

「ああ、彼女達ですか。なにやら勘違いしていたようですが、別段
女性だから云々という訳じゃないんですよ？ こういつては何です
が、私の助手……まあ副官とでも言った方が軍らしいのかな？ ま
あそのヒトも女性ですしね」

レイラ達が言うには、なんともお固いヒトというものだった。そ
れは出来ない、それでは駄目だ、そういった返答のみだったとい
うのに。そして、軍人は続けて言うのだ、そうではないと。

「女性云々ではない、問題は貴方達ですよ。いや、これも言い方が
悪いかな？ 我々、国軍。というよりもここに来ている国軍は一応
貴方達の下なんです。そこで、これでいいですか？ 駄目ですか
？ などと言われても困るんだ」

これをやれ、出来るか、と云え。お願いではなく、命令をしなさ

い。そう軍人は、否、大人は言う。それを言った後にこそ、先の言葉が必要になつてくるのだと。

軍にしる、冒険者にしる、職人にしる、リーダーというモノは存在する。そして、この街造りにおいてのトップ、リーダーはレイラ達だと言うことだろう。その彼らがなんとも弱腰、低姿勢、これではいけないのだ。

この現状だからこそ、許されているような失態であるとも言える。無論、この軍人がこつも簡単に了承したのも、同様に職人と冒険者などを纏められたのも、そうした姿勢があつたからこそとも言えるが、これとそれは違う。本質を見せれば良いというモノではないのだ、リーダーという虚像は。

虚像は強くなければならない、あらゆる意味で。そこを怪我の功名とも言える醜態を晒した事で突破できたのだろう。加藤達の言い方は、まさしく強いものだったのだから。こつするべきだ、こつしないといけない、こつするのが最良。子供の考えだ、穴などいくらでもある、机上の空論だ、理想論だ。でも、しかし、それがいい。

「そうしろ、と言われれば軍人として従いますよ。なにせ、お偉方からそうしろ、と言われていますのでね？」

この言葉は簡単なモノではない。やれと言われれば何でもする、そう捉えても良いし、全く逆の意味と取つても良い。しかし、少なくともこの軍人の今の言葉は、そうした意味だろう。つまり、医療施設である病院、そして運動場なるモノを造る作業に軍が従事する事を認めたという事だ。

「ところで、カト君だったか？ 君は病院よりも運動場について語りそうにしていたね？ その運動場とやらはどういったモノなのか？ 練兵所のような感じと捉えているんだが」

「へ。あ、いや。それは違います。娯楽のための、と言った方が良
いかな？」

娯楽、と呟いて考え込む軍人。急に思案顔になり黙ってしまった
軍人の変化に少しばかり不安気な顔をする加藤。その両者を見て、
何故か焦っているアージェ。

その沈黙を破ったのは軍人であった。真面目な顔をしたまま、疑
問を口にする。

「娯楽と言っけれど、どういった娯楽なんだい？ 運動なんだろう
？ やはり心身を鍛える場としか考えられない。なにせ、街として
これほど大規模なモノなんだからね」

軍人の疑問は加藤にはすんなり納得できるモノでは無かった。し
かし今ならば理解できるモノでもある。それを知れたのはサツクル
から他の街へと移動した時、旅行というアイデアを出した時の周り
の反応などを見た時、様々あるが、要はこの世界に慣れたと自覚で
きた頃である。

この世界は前の世界とは別の意味で厳しい環境にあるのだ。無論、
娯楽という考え自体は当然ながら在る。酒であったり、食事であつ
たり、読書であつたり、時と場所、場合によっては色事であつたり
と多種多様だ。

しかし、娯楽というのはほぼ全て個人でどうにかして見出す類の
モノ。街として提供するモノでは無いのだ。その街がこれほど大規
模なモノを造り、身体を動かせる場所とくれば、鉄壁を始めとした
幾重にもなる防壁陣を有する最前線の街というものと合わせ、娯
楽のためではなく、練兵所という考えに辿り着くのはなんら不思議
ではないだろう。

「……………娯楽ですよ。皆が、みんなが楽しめる場所を造ろうと考

えています。そのための運動場です」

加藤はゆっくりと、そう言った。

軍人は、ほうと相槌を打つように吐息を漏らす。それに含まれていたのは何なのか、それは軍人にしか分からない。だが、少なくともそこに嫌悪は含まれていない事だけは分かった。

「要領を得ない答えだね。けども、存外に悪くない、悪くない。これから、その運動場とやらが出来上がり、いやこの街が街として成り立って少し経てば、分かる事なんだろう。ははっ、いやいや。楽しみで仕方が無いね」

軍人はそう笑う。思いもしない所で、最高の娯楽を見つけた子供のように。笑い、笑う。それはそうだろう、軍人としては運動場とはなんなのか、そこでする娯楽とはなんのかを聞いていたに過ぎない。

加藤がスポーツと言い。そのスポーツはどういった競技なのかを語れば済んだ事。しかし加藤はああ言った。みんなが楽しめるなか、であると。

「うん、これは国軍が総力を挙げて取り掛かるに相応しいと今、再度確信したよ。冒険者よりも、我々こそが取り掛かるべきだ。その礎にね」

「え？ ああ、っと。そうですね、はい！」

急に嬉しそうに言う軍人に、加藤は生返事のように返す。それを受けた軍人は一瞬、苦い笑みを見せたものの、うんうんと同意を示した。

アージエだけは、やはり焦りに焦っていたが、何も言わず、いや

言えずに、いややはり意図して言わないのだろう。ともかく、ただただ事の流れを静観するだけだ。

「ははっ、いや。うん、それではそういう事で。宜しく頼むよ」

「はい、それじゃあ……………」

その後は、眠気を通り過ぎたために目が覚めたのか、はきはきと病院建設、及び運動場についての説明を行い。暫く加藤とアージエ、そして軍人とで話し合った所で国軍付の職人とも話しを持ち合い、ようやく話がひと段落したのは夕暮れ時の事であった。

「なんだか、色々あつという間だったなあ。そう思わない？ って
いうか、最後に軍人さん……………って言うのもアレだな。ジンさんと何か話してたけど、なんだったんだ？」

加藤達と話し合いを持った、この街造りに協力するために赴いている国軍のトップ、その人の名はジンと言うらしかった。最初の方こそ、加藤とアージエ、そして軍人に補佐の4人だけであったが、話が進むにつれ、他の国軍のヒトが来たために、遅すぎる自己紹介をしたためだった。これには軍人、ジンも頬を掻いて恥を露にしていたものだ。

「んー、そうですね。ヒロ君には言っておきましようか。ジンさんが最初の方に言っていましたよね？ もう少し強気で、ってね。その事ですよ、ヒトを率いていくのであれば、傲慢さも必要って事です。他人の事を気にかげず、自分のしたい事をただただ命令する

ような傲慢さが。ですが……」

それは本当のリーダーには必要ない。とジンは言ったのだ。本当のリーダー、つまりこの場ではレイラ達に当たる。彼女達はあのままで良いのだ、と。

何故、あのままで良いと思っているのに、彼女達に対しては頑なに拒否の姿勢を示していたのか。それは加藤達を待っていただけだ。相手は国軍なのだ、当然ながらこの街の首脳陣についてはそれなりに調べられていたのだろう。そして、未だ確立された立場とは言いにくいとは言え、第二のリーダーである加藤が居るのを知っていた。それだけだ。

虚像は加藤がなれば良い。強く、強く、善悪問わず、ただただ強い存在に。レイラがなるべきは偶像なのだから。そう言うのだ。

「良く分からないなあ。なんだ、つまり俺には悪役になれって事？」

加藤は確かに理解できていないのだろう。しかし、傲慢と言うモノのイメージはあまり良く無いものだったらしい。少なからず、不機嫌な色が声に現れていた。

「ははっ、それは僕と、ここにはいませんがギョッセさんの役目です。ヒロ君は大悪党って所ですかね？ そんなもんじゃありませんよ」

「大悪党って……。そういうのに俺はならないといけないのか？」

こつこつというのが大人というモノなのだろうか。そう顔に書いてあるようで、その通りの困惑気味の声色で尋ねる加藤。アージエは笑って首を振る。そうじゃない、そうではない、と。

「そう、思われるようになるって事です。別段、ヒロ君がそれになる必要は無い、いえ。なつてはいけません。そう、多くのヒトに思わせるんです。思われるんですよ」

「同じじゃん……。『灯楼』ってそんなんじゃないと思うんだけどなあ……………」

ヒーロー、つまりは加藤の憧れの大人達。それはそういったモノではない、そう言う。しかし、アージエはやはり首を振る。

「いいえ、それで良いんです。そうする事で、レイラ様が領主になれる。そうする事で多くのヒトが安心できる。多くのヒトはレイラ様という偶像を信じてそうなることでしょう。ですけど、忘れないで下さい。そのレイラ様の偶像は、ヒロ君の虚像があるからこそという事を」

未だ、そうなっている訳では無い。むしろ、この現場においては加藤やアージエ達の動きのおかげで、職人、冒険者、軍人は安心して作業出来ているとすら言えるかもしれない、なくともそうなりつつある。だが、対外的にはどうか。レイラという領主が行った、そう伝わるのだ。

ここへ移住しにくる多くのヒトは新たな街という新天地の意味でもそうだが、レイラという若きカリスマを有した領主がいるから、ここへ移住するのだ。それが理想なのだ。加藤という大悪党、目的のためならばヒトの意など歯牙にもかけない存在、それをすら駒といやそんな加藤ですら慕う領主がいる、そんな街だからこそ。

そのために、加藤はこれから、強気で、傲慢で、横暴で、だけでも優しい『灯楼』になるべきなのだ。

「灯りとは、明るい所ではその温かさに気がつかないもので、それ

が灯楼です。普段はむしろ暑苦しいと嫌われる存在、それがヒロ君なんです」

「なんだかね？ いや、うん。あー、でもさ」

「ははっ、大変ですね。これから街が出来上がったとなれば、ヒトが大勢来るでしょう。そうなったら、僕やギョッセさんにヒロ君は言うんです。雑用をさせておけ、冒険者に面倒な仕事をさせる。自治を乱すようなのがいればボッコボコにしるってね？」

「言わないよ、そう加藤は言うが、アージエは、言いますよと、そうすぐさま言い返した。言わなければならぬのだと。」

レイラは街に住まうヒト達のために、それをより良くするために案を出し、ヒトのために生きていく。そういった姿をヒトらに見せていく事になる。

反対に、加藤も基本は同じだ。ヒト達のために、生きていく。しかし、レイラの言う案を実行するために、嫌な事を、面倒な事を、疲れる事を、時には冒険者達に死ねと命令する立場になるのだ。そういった姿をヒトらに見せていかねばならないのだから。

「でも、大丈夫。灯りは灯りです。それは何一つ変わらない。そう信じていますよ？」

「良く分からないけど、変な期待をされているのだけは分かるよ…」

「はははっ、ええ。変な期待をさせて貰います。レイラ様にも、ヒロ君にもね？ いやでも、そうなるならレイラ様も大変だ」

アージエは愉快と言わんばかりに笑う。加藤は乾いた声で笑う。

ともかくにも、男性陣は笑う。

しかし、ついつい流れで関係の無い事でも話を楽しんでしまったために、レイラ達が待つ家屋へと戻った時には既に暗くなる時間であった。そう、何処であつても家の中では男は女には勝てないのだ。つまり、ボッコボコであつた。特に、レイラとエイラからは一段と。

その日以降、防壁陣と病院と運動場の建設は一層、その速度を上げられる事になる。理由は単純明快、本当のリーダーがいよいよとばかりにそれらの場で腕を振るい出したためである。そう、街の象徴たる人物がその姿を、その力を見せる場が整いだしたのである。

レイラの長所は物怖じしない発言力である。しかし、それは地の部分であり、本来の魅力とも言える。つまりは、意識して行える能力では無いのだ。

それは現実になっている。伝えたい事がある、街造りを成功させなければならぬ、少しでも理想に近づけなければならない。様々な思いがあつただろう、しかし一言で言えば重責である。それによつて彼女の魅力であり、武器は鞘から抜かれる事は無かつたのだから。

「それじゃあ、それで良いよっ！」

「レイラさん、いえレイラ様。ようやく領主らしい自覚が芽生えたかと思えばコレですか？ いえ、こちらの方がわたくしとしても何かと良いのですが」

病院、そして併設される小規模な運動場の国軍による施工が始まつて1週間ほど経っていた。

その頃、レイラは仮の領主の館といえる建物の一室内でエイラの伝えた事案について、あつさりと頷いていた。それは国軍に任せられている病院施設、及び併設される小規模な運動場についての報告であつた。

ここに来てから、つい先日まではこのような事は無かつた。真剣に、執拗にどのような事なのかを尋ね、自身の頭で悩みに悩んだ。良い事だ、悪くは無い、褒めて良い成長であつた。

だが、正しい事が正しくない時もあると言えるのが、難儀な点であろう。自身の長所を潰してまで、それは得るべきモノ足りえな

ったのだ。ただ、その自身の長所とは地であり、意識していたモノでは無かったためにソレをした事で潰れる可能性を理解できなかっただけ。

どうして、現在はソレを捨て去り、自分を取り戻せたのか。これもまた単純であった。

「でしょー？ お父様みたいにビシッとやらないとって思ってたんだけど。駄目だね、わたし。なんかムカムカするっていうか、うん」

「慣れない事は無理にするものではありませんわ。ロレン様だって最初は破天荒だったとデイリー様も仰っていたではありませんか。それで良いと、いえ。それが良いんだと思いますわよ？」

「えへへー、うん。だよなー、こういう方が気楽だし、なんか楽しいんだっ」

「あら、駄目ですわよ。そのまま結構ですが、仕事は仕事。真剣に取り組んで頂かないと」

気分である。これといった論理的な根拠が在る訳では無い。ただ、なんとなく気持ちが優れない。その上で失敗続きだったのだ、当然だろう。

幸運だったのは彼女が自分らしさを取り戻す頃、その時に加藤らが自身が抜けなかった、持てなかった剣と盾になってくれた事で、最低限の問題が解決されていたというモノだろう。彼女がそれを持ち、ようやく立ち上がったときには勝負は決していたも同然だったのだから。ようやく持てた武器、それで快勝とあれば、それを自信とし、鞘から抜く事に躊躇を覚える事が減る。実に運が良い。レイラに取っても、また周りのヒト等に取っても。

「失礼な事言わないでよ、エイラったら。わたしは何時でも真剣だよ？　ただ、今はそれが気楽に感じられるだけ」

「ふふっ、なら良いのですわ。そうそう、国軍のジン殿から明日の昼頃に時間を頂けないかと言うお話が……」

あれから、国軍の現地での代表であるジンを始めとした、職人や冒険者の代表格は加藤やアージエではなく、レイラに話を持っていくようになっていた。

ジンは自発的にそういった流れになったのだが、職人などの場合は加藤やアージエに話をしようとしても、そういう事ならレイラ様などという対応をするようになったためである。最初は領主だからと頼るものではなく、信用している相手が信頼する相手であったためであった。これは加藤らの努力の賜物であると言えるし、加藤達と信頼しあえる関係を創り上げていたレイラの努力のソレであるとも言えた。

ちなみにそうなった経緯であるが、加藤の場合どうすれば良いと言われても返す言葉を容易に紡げないために投げ出した形であったと言っていていいだろう。アージエの場合はこの形に持つていくために意識的に、であったが。

「ふう、でもあれだねえ。なんか最近すっごく忙しいや……。ただお話をするだけでも結構疲れるよねえ」

「愚痴を聞くだけでも疲れますからね。なにせ、聞いた時点で領主としての何かしらに着いてまわりますもの」

「ねっ。でも、職人のお爺さんのヒロのお話とかは面白いかなっ！　なんか色々失敗してるらしいし、あれだよ。領主として今度ガッンと言わないといけないねっ！」

「素晴らしい考えですわっ！ やはりこういつた大事の場合、組織内……という程多くもありませんから仲間内ですか？ とまあ、そこを厳しく律する事は肝要ですし、ええ」

この街の表向き、目に見える範疇での代表格はレイラを筆頭にしてエリアスール、加藤、エイラ、アージェ、ニーナ、そしてギョッセの代理と言えるマナの総勢7名。それ以外では加藤個人付きという形式でルクーツァ、店主という別格が存在するが、モンスターの影が薄い現状では、こちらでも影が薄い存在であった。

ロレン、デイリーは裏の代表格と言えよう。職人、冒険者、国軍などを雇用、要請したのは彼らであるのだから。事実、本当にどうしようも無い事であったり、レイラ達には荷が重いモノであったりした場合、ジンなどは彼らに話を持っていった。ただし、先日までと異なり、レイラに話を通した上で形式は変わっていたが。

その代表格の中で特に目覚ましい功績を上げているのが加藤であった。が、同時に特に失態を犯しているのも加藤であると言えた。彼はこれといった得意分野が無いが、不得意分野もまた無い。無論、本来の役目は冒険者としての武力にあるが、現状ではそれほど必要とされていないのだ。必然的にどれもこれもこなせるが、どれもこれも秀でていないという万能にして器用貧乏と化していた。

街が形となりつつある現状、話の内容はより高度な、はつきり言えば面倒なモノとなっているのだ。加藤は以前の世界で何気なく得ていた知識によって難しい事柄であっても漠然とイメージを掴める長所と、詳細な点はさっぱり分からないという短所があったために、ある程度は物事を進められるが肝心な時で役立たずだったのだ。

それが、実に幸運な結果をもたらしていた。

加藤はある程度までならば難しい事であってもソレを感じ取れ、

ソレを進められる。物事の第一歩スタートを動かせるのだ。しかしレイラはそれが出来ない、どうしても掴めないからだ。理由は必要となる知識、情報などが多すぎるため、それら全てをなんとなくでさえイメージする事が出来ないのだ。

だが、一歩進んでしまえばレイラの領域である。彼女にはエリアスールとエイラという頭脳が傍に控えているのだ。要点さえ絞られていれば、彼女は生来の地によって必要な事を部下足る彼女達にどんどんと言っていく。全てはうまい具合にかみ合っていた。

「ふふー、なんか領主っぽいよね。律するとか、なんか格好良いかもっ」

「いえ、っぽいでは無くレイラ様は領主ですわよ？ それと、格好良い云々は捨てて下さいね、必要ありませんから」

「ええ、でもやっぱり良い事をしたら格好良くない？ そういうのは大事だと思うなっ」

「格好良い事をしたという考えを捨てて下さいと言っているんですわ。それを決めるのはわたくし達ではなく、それを見たヒトなのですから」

「分かるような、分からないような？」

代表格の核はレイラである。しかし肝は加藤であった。何故なら彼は失敗を普通にするからだ。どうみても失敗だと言える失敗をするのだ。実に、素晴らしい役目を果たしていた。

ただの子供の遊びではなく、大人として頑張ろうとしている彼女達に取って失敗を責める流れは必要であった。まあいいよ、と笑う事では済まないのだから。

しかし、彼女達の強みはその信頼関係にある。ゆえに微妙な点を責める事は厳しい、それに輝ひびを入れる事を避けたいというどうしようもない感情がある。

そこで加藤だ。彼のソレは責める必要性のある紛れも無い失態なのだから。だが、同時に彼は目に見える成果も上げている、故にそれと時を同じくして褒める事も出来た。でも、と言えるのだ。こんなにも嬉しい事はレイラには無い。

失態を犯せば責任を取らされる、当然の事だ。しかしソレは子供であった彼女らにはそこまで強いられるモノではなかった、というよりも取れる力を有していなかったというべきか。それが立場を得始めた現状に加え、加藤が凹む事で徐々に浸透し始めていたのだ。

「まあ、それはいいや。えっと、それでジンさんだっけ？ 明日、話があるっていろいろの」

「ええ、そうなりますわ。恐らくですが、病院建設で必要となる石材についてだと思われます。なので、ロレン様にも既に同じような報告を上げていますわ」

「ええっ、わたしよりお父様に先に報告したのっ!？」

「ええ、そうですわ」

責任というモノ、それは代表格がそれぞれ感じ始めているものだとすると面白い事に信頼関係とは別の信用が生まれるのだ。

冒険者関係でいざこざがあれば、レイラでは無くまずは加藤へと加藤でも荷が重いと感じればルクーツァ、店主に相談を持ちかけるという具合に。この場合も同じであろう、レイラよりもエリアスールやアージェへと、そしてロレンに信用が置かれたのは当然と言えば当然だ。

「……そっか、それでお父様はなんて？」

「そうだろうね、と」

「むう……」

幸いにして、未だ信頼関係を上回る信用を預けるに足るヒトは、レイラ達に取っても親しい間柄のヒトばかりである。嫉妬などが芽生える事は無く、ただただ自身の無力を痛感し、同時に奮起する切欠になるのみであった。つまり、現状ではまだまだ良い意味での裏切りであったのだ。

「なんか、こういう報告が回ってくるのって……。わたしが最後？」

「そっかもしれませんわね？」

まだまだ信頼関係抜きでいけば、信用されるに足るヒトにはなれていない、それがレイラであった。とは言え、成長していないわけではない。そも、最初はその最後とは言えども報告すら回ってこなかったのだから。

加藤もアージエも自身の仕事で目一杯だったとは言え、レイラに報告はしていなかった。したところで無意味だと無意識に捉えられていたのだ、レイラという領主は。遊びではなく、仕事と感じていたためだろう、信頼できても信用は出来ないのだ。友情だけでは動かせないモノなのだから。

「やっぱり、もう少し頑張らないと駄目かなあ。というより、領主って難しいね」

「ええ。そうですねえ、ロレン様は本当に凄いですわ」

領主リイダイの責は重い。その責とはそこに住まうヒトらの『命を預かる』と言えるのだから。それを守るために必要なモノは、とてつもなく広く、深い。

とてもではないが、1人でどうこう出来る範疇では無いのだ。出来るとしたら化け物と呼ばれるヒトであろう。この世界でも化け物クラスのヒトは存在する。武力では達人級、知力では国の重鎮、技術などでは専門家。だが、それら全てを兼ね備えている真の化け物は存在しない。

存在したとするならそれは過去の『英雄』達であろう。彼らは戦いを知っており、政治を見ていて、技術も使っていたのだから。しかしそれは、原始的な世界でだからこそ出来た事、時代が進めば簡単ではなく、今の時代であれば『英雄』は『英雄』になれないやもしれぬのだから。

そんな世界での領主は本当に困難だ。本当に。だからこそ、その領主の席にレイラが存在する事が許されているというのも面白い。

誰がやつても困難なのだ、ならば年若く、著しい成長を期待できる若者にその責を与える環境、つまり大きな失敗をも許せる世界が生まれているのだから。その失敗を遥かに上回る成功を期待して。

「ええっと、病院と運動場の事は後でエリと二ーナ、出来ればヒロ達が戻ってからまた話すとして……」

「防壁陣についてですか？ それもカトウが戻ってからのの方が良いかと思います。現場を仕切っている翁ともカトウが一番親しい関係を造っていますからね」

「違うよ、それじゃない。わたしはね、これでも冒険者でもあるん

だよ？　それで、冒険者の仕事の後のお楽しみはお風呂なのっ！」

「はあ、そうですねの？」

「うんっ！　だからさ、お風呂をねっ……」

その後、戻って来た面々と明日にあるジンの話合いにどう臨むかを話し合い、加藤が中心となって防壁についてを見直し、最後に

「風呂場を作りたいんだよねっ！」

と、レイラは自信満々に言い放った。根拠としては環境の向上である。現状、それに類するモノでいけば屋根のある就寝できる場所、そして旨い飯である。

そこに風呂を加えたいというのがレイラの家であった。最初こそ、それは素晴らしいと賛同の声が響いた。が、すぐにでも無理とあっさり覆されてしまう。

「余裕が無い」

なんで、と尋ねるレイラに対する答えは要約するとソレであった。現状、未だ最大の問題であるために最大の人数を動員している防壁陣、その内のひとつですら完成していないのだ。せめて、鉄壁だけでも一応の完成を見せれば多少の余裕も生まれるのだが、とはアージェの談である。アージェだけでなく、エリアスール、エイラ、ニーナも同様の意見であり、レイラはがっくりと肩を落とす。

「風呂は無理だけど、水浴び……場を簡易にでも作るつてので妥協してくれ」

それを慰めるように言ったのは加藤だ。以前、ここを下見に来た時、レイラと同じく女性であるエリアスール、エイラ、マナは水浴びを大変喜んでいて。言葉に出して喜んでいたマナ、喜びを隠せない表情のエイラ、彼女達と同じ感情が声色から伝わってきたエリアスール。加藤はそれを見ていた。

男性としても、身体を清めるのは実に気持ちが良いと思えるし、加藤も風呂は好きだった。だからだろう、妥協案を出して来た。

「とは言え、まだ未完成の防壁からも出ないと水浴びは出来ない。だから最低限の守備は付けさせて貰うぞ」

「いいの？ わたしの思い付きなんだけど？」

「いいさ。ここに来て初めて言っただろ、レイラが自分からなんて」

「むっ、どういう意味？」

「そういう意味だよ」

加藤が出した妥協案。それは湖畔に小さな建物を建てるというもの。あの時の失敗を加藤は忘れていない、水浴びとは裸体にならねばいけないのだ、万が一にも以前の失敗が再発してしまえば、別の意味でこの雰囲気が悪化になりかねない。そこだけは実に慎重を喫していた。失敗を忘れない、なんとも情けない過去の経験からであるが、実に喜ばしい成長である。

「ただし、時間帯を決めさせて貰う。護衛に付けるヒトも現状では限られてくるからな。女性側の護衛はルクータとマナで、男性側は俺と店主さん、これで行く。いいか？」

「マナちゃんが？ いいの？」

「あいつ、今は暇してるんだよ。それにルクータに店主は俺付って感じで捉えられてるし、巡回もこれまでやってきて信用できる冒険者を把握出来てる。ある程度なら任せられるって話だからさ。俺も話を持ち掛けられる事はあっても、自分からってのは減ってるから、問題ないし」

レイラと加藤の決定的な違い。それは知らないか知っているか、である。

ただし、これはレイラと加藤が現状を把握しているか否かという意味では無い。現場のヒトらが彼らを知っているか否かという意味である。

冒険者、職人、軍人はレイラの人となりを噂のような形でしか知らないのだ、反面、加藤の事ならばある程度知っている。信用だけでなく、信頼出来る余地が加藤にはあったのだ。

その加藤が、それを仕切るのであれば、問題は限りなく容易になる。後は信用されるために、レイラの発案であるとすれば良いだけだ。

「なんで、わたしの名前を出すの？ したいて言ったのはわたしだけど、今も纏めたのはヒロでしょ？」

「ちょっと前までなら、俺が勝手にやるってのもアリだったな。でも今は違う。皆、お前の事を知っている、お前を信用して動き出している。今の安全は実際には偶然で、運が良いだけだ。お前が

俺、というよりルクータや店主、ロレンにデイリーに働きかけたおかげだってな？」

勘違いと言えるだろう。だが、そう思われ始めているのだ。偶像とはそういうモノだ。加藤は最近になってようやくであるが、ロレンを筆頭にした大人勢はそうなるように影ながら動いていたのだから。

レイラは街に住むだろうヒト、街を造っているヒトのために動き、加藤は街のために動く。根底は同じだが、捉えられ方が異なるのだ。

「それにしても、レイラがそんな事を言うなんてなあ」

「なにそれ、わたしがまともな事言った！？　みたいな反応はっ！」

後日、本当に簡易ながらも、入浴施設が職人の長である老人主導によって、あつという間に完成した。老人曰く、水中でも耐えうる基礎を試してみたかったので好都合との事。そのためだろうか、あつという間ではあつたが作業は真剣そのもので、出来は素晴らしいと言えた。

「ええ、領主様っ！？　す、すみませんっ、すぐに出っ」

「あーっ、あーっ。いいからっ、いいからあつ！」

この水浴び場は一般のヒト、数は少ないながらも女性の職人、冒険者らが領主レイラの人となり少なからず知れる場として功績を挙げる

場となることになる。

それが徐々に広がり、どうしても薄い存在であったレイラは、領主だからという信用だけでなく、レイラだからという信頼をも勝ち取れる土壌の1つを作る事に意図せず成功する。

領主としての信用に加え、老人や子を持つ大人などからは孫や子供にも近い感情を抱かれ、同年齢と言える主力のヒトらには遠い存在だが、身近に感じられたために親愛以上恋愛未満のソレを抱かれ、女性からも嫉妬ではなく、友情に近いモノを抱いてもらえるようになるのだ。それゆえに信頼を許される領主へと。それは未だ領主として良い事であると断言できる状態ではない、しかしレイラに取って喜ばしい変化であると言えた。それがどのように生まれ変わるのか、それはいづれ分かる事。

とにもかくにも。まさしく、真の意味での偶像アイドルとなりつつあった。しかし、それに彼女自身が気付く事は無い、ずっと、ずっと彼女はレイラのままであった。

「なんだかね、レイラが頑張りだしたから俺の仕事がまた無くなった……。なんだろう、うん」

「良い事ではないか。カトーの仕事はヒトを守る事だ、そうだろう？ その仕事が暇という事は、平和と言う事だ」

加藤は久々にルクーツアとゆつくりとした会話を楽しんでいた。加藤としては愚痴を聞いて貰っているだけであるのだが、しかしこれが何時もの彼らなのだろう。

「そう言うけどさあ、モンスターが少ない。いや居ないとは言え警備とか巡回の仕事はルクータや店主さんがやってるだろ？ そんで今は雇った冒険者からも有力なのを見つけてると来た……。もしそうなくても俺っていらなくね？」

「ふっ、そうかもしれんな？ 今のお前よりか、オレや店主の方が万倍マシだろうからな。今は、見ておけば良い。そら、暇ならば久々に稽古をつけてやる」

あの日、国軍のジンらとの話し合いから1ヶ月、そして簡易的な入浴施設が出来上がってから大よそ3週間が経過していた。

その時にあった、ほんの小さな問題が解決されたとなった途端、ジンら国軍はレイラ達の指示を1つ返事で了承し続け、なんともあっさりとは街造りは進んでいた。

病院は街の中心部に造られる事となり、その大きさはかなりのモノとなっていた。予算を大きく削るが、レイラはそれで良いと強く

言っていた。しかし、それは加藤とアージエが言っていたものよりは控えめな言い方であり、現実的なモノであった。運動場についてもそれは言えるだろう。街に取ってソレが必要だからする、というのではなく、ここに住むだろうヒトらのためにソレは必要。そういった言い方であり、考え方を大きく示し続けている。

流石に防壁陣についてはあれからも加藤らに任せている形ではあるが、それにしても既に加藤達から職人達へ全てを委ねられている段階だ。後は完成を待つのみであり、余程の事態が無い限り、定期的な話し合いを持つ程度であり、加藤が必須という状況では無くなっていた。つまり、公人としては暇であった。

「鍛錬か……。ここに来たばかりの頃は店主さんとかと色々それっぽいのしたけど、本格的にはやってなかったなあ」

「だろう？ 腕が落ちたとは思わんが、それでも錆が出てきているやもしれん。お前の唯一実績がある点は武力だけだ。立場が出来るのもそう遠くない。そのたった1つの武器、鈍らせる道理はあるまい」

「確かに。折角、籠手も手に入れたつてのに本気でつてのが無かったよなあ。精々が軽く馴染ませる程度だったから。うん、やろうか！」

入浴施設の護衛についても、最初こそ加藤らが全て行っていたがこちらも巡回と同様、普通の冒険者の休養を兼ねたモノとして扱われるようになっていたため、加藤らは更に暇になっていた。というのも、そもそもモンスターの影が一向に見えないためだろう。それに、万が一のために加藤、ルクーツァ、店主、デイリーと言う達人級ないし猛者レベルの冒険者が最低1人は入浴出来る時間帯には近くに控えているためにそう問題は無いと言えた。

「しかし、あつついなあ……。もう、色移りがあったのも1週間近く前か……。夏だなあ」

「幸いなのは夏だというのに、モンスターが押し寄せさせる事態にならなかった事か。まだまだ油断は出来んが、な」

ルクーツアが言うように、夏、繁殖期で無くとも潤沢な水源である場を見逃すはずは無い。通常であれば。

「今年中はそう、危険は無いのかもしれない。あの厄介な存在も使いようという事か、なんとも言えんな」

「こういう考え方はなんとなく駄目な気がするけど、これからを考えると必要かもなあ」

加藤はそう前置きをした後で、軽く言った。次に大型が現れたならば、確実に仕留め、前線から主な街に死骸の一部なりを埋めれば、この現象を起こせるのでは無いかと。

「そうだな……。昔、火を与えてくれた英雄も同じような事を言っていたそうだ。獣は火を恐れるのが多い、だから焚いておけとな」

「うん、いやまあ……。そうだとっても、大型なんて現れては欲しくないけどな」

「ふっ、まっただ」

無駄話、ではないかもしれないが、それを終えると歩き出す2人。暫く歩くと、湖畔へと出た。そこは水浴びではあるが入浴場と言える施設のほど近くであった。今は決められた時間帯では無いためにヒトの影は見えない。

「さて、軽く準備運動でもするか」

ルクーツアはそう言うと言と身体をほぐしていく。加藤もそれに倣い、ゆっくりと膝を曲げたり、脚を伸ばしたりしている。どれほどであるうか、存外に長い間それを行うと、ようやくとばかりに剣に手を伸ばした。

「なんか、久々だなあ。一応、毎日剣だけは佩びてたけどもさ」

「やはり剣は握り、振るわなければいかんだろう？」

「どうだろうな？　ただ、俺らしいって感じはするかも……」

「ああ、そうだな。……色々とな？」

加藤はここに来てから、いや『灯楼』という立場を意識し始めてから何処と無く口調が安定していなかった。無意識に、時には意識して話し方を変えていたためだろう。大人っぽいと考える丁寧口調であったり、偉いヒトっぽいと考える硬い口調であったりと様々だが、それが常の加藤らしく無いというのだけは共通していたと言えよう。とは言え、それが今の加藤らしさとも言えた。ゆえにルクーツアは笑みを浮かべるに留める。

「まあ、そんなのはどうだっていいんだよ。……さあ、やるうかつ！」

「……ふっ。久々に揉んでやるとしよう、来い」

世間話もそこそこに、いや途中であつたが準備が整った瞬間、加藤はそう言う。いや、叫ぶとすつと腰を落とす。加藤がその気になるための儀式のようなモノであり、別に武として必要な動作を意識してという事ではない。

反対にルクーツアは剣を片手に軽く握っているだけであり、およそ戦うという体制ではない。別にこれが戦いに最も適した力の抜き方だから、ではない。ただ単に手を抜いているだけである。

「こなくそっ！！」

「何時も言っているだろうっ、直線的すぎるとっ！！」

腰を落とした体勢、それを弓引くようにぐぐつと更に沈ませるとバネよろしく勢い良く飛び出す加藤。普通であればその体制から加速はそうそう付かない、付いたとしてもそこから一步踏み出してからだ。だが、加藤の最大にして達人級にも届くだろう唯一の武器である強靱な下半身はその難題を容易にこなして主に応える。

とは言え、目の前に居るのはその達人級であるルクーツア。加速こそ一級品であるが、そのために必要な動作は丸わかりであり、そもそもその程度の速度では彼に驚きを与えるには足りない。あっさり回避られる。

「よっっ！！」

しかし、加藤はルクーツアとの打ち合い、組み手を幾度も経験し

ている。それゆえに自身では、最大にして最強の武器を用いようともそれ単体では及ばない事を知っていた。それでも届くようにするにはどうすればいいのか、簡単だ。基礎だけで駄目ならば応用、その強力な武器を更に強くするために手を入れれば良いだけだ。普通の剣で斬れぬならば研げば良い、自身の技術で名刀と化させれば良いだけなのだ。

「むっ!?!」

驚くべき初速と、それを活かした驚異的な加速。だが、それだけでは足りない。そこに加えられるのはやはり最大の武器である脚力を活かしたものであった。それは減速、いや停止だ。片足を地面に突き刺すようにし、それを軸にくるりと半回転し、己の武器を振るうのだ。これが加藤の十八番。

「もらったっ!」

会心の一撃であった。当たりさえすれば、ルクーツアと言えど唯では済むまい。それほどの一撃、いや一刀。それは最早止まらない、何をしようと、その軌跡は変わらない。そのままであれば。

「ふんっ!」

「つつべあ!?!」

加藤の腕で振るわれた一刀はそのままの軌跡を描き続けていた。だが、本体である加藤が転んだために、それは斜めにずれ、地面へとその脅威を与えて終わる。

「ふむ、悪くなかった。お前の脚力からの速さは目を見張るモノが

ある。だから、そこに気を取られ、避ければそこで仕舞いという考えが生まれてしまうからな」

意識の隙間を狙った悪くない技だった。そうルクーツアはうんうんと頷いて講釈を垂れる。加藤の最大の武器を囷に使うかのような技であり、加藤唯一と言っていい持ち技だったのだが、あっさりと防がれてしまった。だからだろう、がっくりと手を地面に付けて落ち込んでいた。

「くそっ！ 別に防がれるのは良いんだよっ！？」

「ほう？」

「なんだよっ、あの最後の俺の声はっ！？ くそっ、決め技だぞ！？ その後がアレかよっ、せめて『ぐあっ！？』とかだろうがっ！？」

「……………お前はやはり、何処か駄目な奴だな」

ルクーツアは落ち込む所はそこでは無いだろうと言う。しかし加藤はここであると言って譲らない。技というゲームのようなソレを意識したのは剣を握ってからスグ、では無い。なんと最近の事で『弱点』という考えを得てからであった。とは言え、それを知ってから加藤は存外に忙しく武の鍛錬をする余裕が無かったのだ。故にイメージトレーニングのみだったのだ。そしていざとなった実践ではコレである。その落胆ぶりは未だ手を付いている格好からも察するに余りある。

「ちなみにさ、俺の希望としては『ぐあっ！？』よりも『ちい！？』とかの方がさっ！」

「ふむ、確かにそちらの方が余裕がありそうに思えて次に繋がりそうだな？」

「だろっつ！？ やっぱり、こっ、な？ 格好良くなきゃ駄目なんだよ、技ってえのはさ」

まるで初めてこの世界を知り、この世界で安堵を得た時の彼のよう
に自由気ままに思った事をつらつらと口に出す。そこには遠慮も
思慮もない。

「だが、オレならばまず防がれないようにするがなっ」

「なっ！？ なんてこった……。まさかルクータに一撃必殺を先に
言われるとはな」

「ほう、一撃で必ず殺す……。か。悪くないな、理想の一撃だ」

「でもな、こっという技は大抵命中率が低いんだよ。そこが問題だ。
けど必中技っていうのもあってだな……」

それから、加藤とルクーツアは身体を動かしながらも、必殺技で
あったり、必中技であったりと、下らなくも愛おしい話題で盛り上
がった。存外、ルクーツアもこの手の話題には興が乗ったようで、
アレはどうだ、コレなんて、などと彼自身も大きく楽しんでいた。

「ふう、今日は久々に楽しかったよ。いや、今までのも悪くはない

「んだけどさ？」

「ふっ、オレとしても悪く無かった。加えて、カトーも軽くとは言えオレとやり合える程になっているとはな、いや、嬉しいものだな……それにしても、あれだな？」

「そっか……、んで？ あれって？」

「技名というのは、オレは嫌いでは無いんだが……。カトーとしては駄目なのか？」

「駄目っていうか。そういうのって自分で決めるもんじゃーないんだよ。見た人が魅せられたから、そう呼ぶっていうか？」

「ふむ、そういうモノか……」

技名、ゲームでは当たり前すぎる存在であり、重要な点であろう。だが、加藤はそれはあまり好きでは無いようであった。別に感情云々だけで無く、きちんとした理由もあった。それは。

「それにさ、やっぱり攻撃する時にそんな事言う余裕あるか？ 俺だったら、……そうだな。それするくらいだったら、もう一息吸うか、溜めておくかね」

「余裕が無い訳ではないが、確かにそちらの方が良いな」

きちんとした理由。とは言えそれは加藤にしてみたら、であった。しかしルキューアもそれに頷きを以って同意を示した事で、加藤はより一層強く自論を語っていく。

「後さ、技名を叫ぶって事はだよ？ 相手に今からこういう攻撃をします！ って教えてるようなモンじゃねーか、馬鹿じゃん」

「ふむ、確かにな。だが、相手はモンスターどもだ。あまりソレは問題無い気がするな……」

どうやらルクーツアは技名というモノにそれなり以上に惹かれたようで、珍しく話題を引き摺る。加藤もそれに気が付いたようで、少しばかり笑みを、しかしにやにやとしたモノであったが浮かべた後。ふむとルクータよろしく1つ頷くといきなり笑みを消して真剣味を帯びていくように目を閉じた。

「……おっ、これが良い」

「んーむ、ん？ どうした」

「いやさ、ルクータに技名ってのをあげようと思ってさ？」

「なに？ オレの技名だと？」

「ああ、俺もようやく半人前、いや半々人前って認められたみたいな感じだったし？ 区切りにさっ、その前に約束な？ 俺が半人前になった時に技名を1個、一人前になった時には奥義技名を1個なっ！？」

「奥義、か？ まあ、いいだろう」

「いいか、良く聞いてくれよ？ 1個目はネミラズツタの時に見た技だ。双剣でズバっと切り付けたアレな？」

それはネミラズツタに敗北を喫した加藤とギョッセを助けに駆けつけたルクーツアが放った一撃の事だろう。加藤の印象に残っているのは夜空に輝く月の明かりに重なるように跳躍し、十字に切り付けた一閃である。

「『月浮かぶ十字路口』……やべえ、これはやべえよ!? だっせえ、ださすぎる!？」

「クロ……フロウ、ムン? なんだ? 聞き慣れない言葉だったが、お得意の適当言葉か?」

加藤は何事かを呟く。しかしソレは横文字だったために、ルクーツアには発音こそなんとか聞き取れるものの意味までは理解出来ないものだった。それ幸いにと加藤は手をぶんぶんと振りながら、なんでも無いと苦笑って訴える。

「当て字は止めた、今は忘れてくれ。うん、やっぱりシンプルなのが一番だよな。うん」

「……良く分かんが、それで?」

加藤は今度、ゆっくりと考える。目に浮かぶ光景だけではなく、その時に感じたモノ、そこに至るまでに知れた事、それらを混ぜるように。

「ん、『介錯』。有り得ない程に鋭い一撃だった……、あれならモンスターも苦しまずに逝っただろうからな。達人級にしか出来ない。普通であればそれを思う事すら、失敗成功以前に行う事すら許されない。そんな慈悲の一撃、そっいう意味だよ」

「良く分からないんだが……、それは手加減という意味か？」

「そうとも言えるかもな。苦しませようと思えばいくらでも苦しませられるだろうし？」

介錯とは、非常に難易度の高い技であるとされている。加藤の生きていた時代には既にソレは消えていたために実際に目にする事は無かったし、なにより在ったとしても目にしたい行為では無いだろうから、どちらにせよ加藤は実際に目にした事は無い。ともかく、難しい技であったのだ。

罪人が、そうで無くとも命を絶つとした者のために苦しみを一瞬で終わらせる、せめてもの情け。それが介錯であると加藤は考えていた。

モンスターは真に罪人と言えるのかは知らないが、少なくとも現状ではヒトの敵であり、その意味では罪人であろう。とは言え生きている事には変わりなく、冒険者として戦うに連れて、相手もまた生きるのに必死なのだ。薄っすらと加藤は感じていた。だが、倒すとなればどうしても相手を散々に痛めつけ、その上で、なのだ。

別に、小型相手であれば加藤クラスの冒険者以上ならばやること思えばやれない事は無い。その程度の腕前は有している。

だが、絶対ではない。小型と言えどその一撃は恐ろしい、ゆえに確実に、安全に倒す方法で。だから相手は傷付き、苦しみ、死んでいく。加藤クラスでさえそうなのだ、普通の冒険者では言うに及ばないだろう。

だが、ルクーツアはどうだっただろうか。小型どころか中型相手にあの一撃。それまで加藤達が相手をしていた事、ロレン、デイリ―と同じく達人級の連携の結果とは言え、あれは見事であった。

「まあ、そういう訳で『介錯』な？」

「どうもじっくり来ない技名だな……。だが、お前からの贈り物だ。有り難く受け取るう」

「どうも、んで……。もう1個だけど、一番最初に見た奴だよ」

「一番最初……?」

「この近くでさ、ほら、俺と先輩が危ないって時に……」

加藤が未だこの世界のヒトを知らなかった時、それは現れた。月明かりを反射した銀色の煌き。初めて加藤が目にした武の強さ。この世界で生きていこうと思えた切欠。加藤に取って様々な意味での大事な、大事な思い出だ。

「ああ、あつたな。そういう事も」

「技名は決まってる。『疾』だ」

「……なんだ、それは?」

「ん? いや、ルクータって攻撃する時、いっつも小さくそう言うてないか? だからだよ」

「そうか? 意識した覚えは無いが、というかそれでは全て技になっってしまうでは無いか。さっきの話では技とは特別なものなんだろう?」

「特別さ。だからそれなんだよ。ぶっちゃけ、俺の中で武の最強はルクータなんだ。だから、どんな攻撃も技なんだよ。ぶっちゃけさっきのだってソレで良いかな? って思ってるくらいだしな」

「む、むう。いや、アレはアレで良い。やはり技を1つは持っている、なんとなく、うむ」

加藤が憧れる、目指したい英雄は数多く居る。その中でも特別な存在、それは両親。そしてルクーツアである。こういったモノに順位を設けるのは間違いかもしれないが、その両者が加藤の中で飛び抜けているのは事実なのだ。

だから、そう言った。残念な事に、ルクーツアは余り好みでは無いようだったが、しかし譲れないのだろう。どんな攻撃も、自身が苦勞に苦勞を重ねて編み出した技を上回っている、特別な技にしか付けられない技名を持つ技なのだ。それが出来るのがルクーツアなのだ、加藤に取っての。

「ま、贈り物はこんなもんだな？」

「う、うむ。悪くないモノを貰った、……だが、あれだな。これはやはり、叫ぶべきなのか？」

「知らんがな……」

この日、恐らくはこの世界で始めて、個人の武の技に名が付いた。そのヒトしか持たない特別な名が、技に付いたのだ。

その時と日を同じくして、大きな存在にもまた、名が付けられようとしていたのだがソレを加藤が知るのは翌日の事になる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5147q/>

異なる世界で見つけた ！

2011年8月1日13時39分発行